日本随筆大成 別巻下

日本随筆大成別巻下

収載書目

一話一言 下巻

太田南畝

宮内省御用掛
文學博士　關根正直先生

東京帝國大學史料編纂官
文學博士　和田英松先生

宮内省圖書寮編修官　田邊勝哉先生

監修

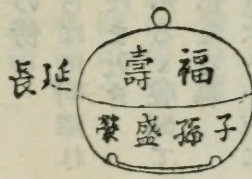
○鐵網珊瑚二條

明都穆が鐵網珊瑚云。日本美人理髮單條。筆法精工。細入毛縷。四明人以贊之家君者。云自海航得之。又云。淳化閣帖。是泉州舊帖。家君令ニ工重背ヲ。拆ニ下背紙ヲ。乃宋初人公移。體式與今絕異。更有陶詩。背亦宋人公移。詩多爲宋人改竄。非此無由見陶本之舊。今業已刻梓行世。與學者共之矣。

重背は再うら打をせし也、背紙はうら打の紙なり。

○金賣橘次鈴

福壽
子孫盛榮
延長

奥州栗原郡
金成村より
掘出す

金賣橘二の屋敷跡なりと云
近藤正齋所藏

○辛未柳營御連歌

文化八年正月十一日柳營之御會

唐何

代々仰く　君が御かげや春の松　昌逸

動かぬ山の長閑なる國　内大臣殿

寄波も霞める島根鶴馴て　共阿

汐くむ袖に浮し朝凪　玄碩
露むすぶ眞砂の道や續くらん　昌惇
月に成ゆく呉竹の陰　昌永
色付てなびく稲葉の村〲に　昌陽
薄霧はるゝ里の傍　通孝
打むかふ山はあらはに明離れ　東雲
早くも越ん關はま近き　信久
涼しくも清水ながるゝ聲聞て　信遵
螢の影はさやかなる暮　昌功
見へじとて人は忍べる小車に　昌成
夜ふかき門を別出けん　昌寅
花柳並ぶ木陰の露散て　昌以
囀る鳥の輕き羽つかひ　省齋
池水の烟て後や温むらん　碩
暮ゆくまゝにもゆる篝火　逸
百敷や外衛あかれの時は來て　永
山のはつかにのぼる月代　阿
秋風の吹拂ふらし空の雲　孝
列をみだして雁わたるなり　惇

二

玉章や走り書なる筆の跡　久
なけの情も中のたはふれ　陽
稚が折かざしつる花散て　寅
草刈笛も春面白し　成
歸るさをいそがぬ野べの霞むるに　功
駒にまかする道の行末　以
いざなはん人をたよりの旅ならで　逸
馴し都の友ぞこひしき　雲
よむ歌に深き心やこめぬらん　阿
春待いろに咲る梅がえ　遵
降雪の夫とも見へず月晴て　惇
翅はいつら鴉なく聲　碩
遠き江の一村くらき夕烟　成
茂りかくしてわかぬ蘆荻　永
小止無難波渡りの五月雨に　以
淡路の島のあはでいつまで　久
替らじの契のみこそ頼みなれ　遵
來ん世を思ふ優婆塞の聲　逸
よそにみて行ふ陰の山櫻　碩

春をふるやの軒の蛛のゐ　功
忘れずも燕は己が巣をとひて　陽
かへす時しる小田の賤の男　孝
さしうつる朝日しづけき川水に　雲
船ゆく方は波の薄ら氷　成
網代木にかゝる色葉色あせて　永
柳の絲の秋をへにけり　惇
例とて星祭るよの月の庭　逸
新に涼し此殿の内　寅
三　彈琴の調や風にたぐふらん　功
そなたにみゆる紫の雲　以
夕日かげ藤さく山に傾て　久
躑躅を跡に歸る岡のへ　逸
柴運ぶ道に降來る春の雨　孝
末は霞にわたす河橋　碩
水白き岸の一方明そめて　寅
立田の月をかへりみる空　遼
驚くや嵐の送る鹿の聲　成
うつゝに夢の名殘身に入　阿

蘭香をなつかしき記念にて　逸
又來てわくる衣笠の山　永
年〳〵の比もかはらぬ神祭　惇
瑞籬ちかくとふ郭公　雲
ォ　若葉せし杜の梢の黄昏に　以
生田の小野を行人もなし　寅
いくたびか時雨の雲のめぐるらん　遼
うき物思ひ重りし袖　逸
小夜衣恨みを告ん傳もがな　碩
詠めん月もうとき伴ひ　陽
秋深き谷の下庵冬めきて　永
哀ましらの聲も冷し　惇
露霜を片敷暮の旅枕　阿
あれし舍りは風もふせがず　成
木のもとを頼ん花の時過て　逸
いづこに蝶の夢結ぶらん　功
くま〳〵は霞む砌の朝ぼらけ　寅
緑をそふる架の村竹　久
名　撫子の色うるはしく雨晴て　陽

重ねのきぬの涙ひにけり　以
たまさかのあふせ嬉しき手枕に　雲
かたるとも猶つきぬ睦言　阿
名所や數白川の奥ならん　成
先宮ばしらめぐりそめまし　逸
櫻花今ぞ榮ん里に來て　惇
あはしろ垣をゆひそふる頃　寅
蛙なく岩間の水やよどむらん　以
またことかたにおろす釣針　孝
露しげき藻屑を月にかき捨て　功
ものさびしきの床をたつ聲　永

夕されば秋風寒き小笹はら　阿
すゝきうち散野べの細道　碩
庵や猶かたふきながら殘るらん　寅
軒端につもる雪の此ころ　以
絕ぬこそほだ燒そふる烟なれ　逸
とはん他目もかれし山陰　惇
夏箕川流や暮を深むらん　久
むすべる水も匂ふ花籠　成
春をまだ殘す山吹紐解て　碩
行幸豊けき袖のうらゝさ　遵

昌逸　十一　通孝　五　昌以　八　内大臣殿一句　東雲　五　省齋　一
其阿　七　信久　六　玄碩　八　信遵　六　昌惇　八　昌功　六
昌永　七　昌成　八　昌陽　五　昌寅　八

右以阪昌成自筆寫畢〔辛未二月十一日〕

○正字通三條

馬鐙　正字通。方書。馬蹬治野田燐火。或火光出沒。用馬鐙相戞作聲即滅。故張華云。金葉一振。遊光斂色。註。金葉。馬鐙也。

鏓硐　馬融長笛賦。鏓硐頽隊程表朱裏。註。鏓硐。謂以刀通竹節爲笛。頽墜。言竹節之屑頽落也。一

說。通節當作硐。或借洞。々。空也。通也。改從石從同無義。硐與峒通。山穴也。〔下略正字通〕
[伐/手]。作殿切。音薦。俗謂屋斜用[伐/手]。以土石遮水亦曰[伐/手]。篇海[伐/手]亦作揞非。〔同上〕日工集に[伐/手]ニ明樓ーとあり。

○峠

峠といふ字、甲陽軍鑑には到下(タウゲ)とかき、臥雲日件錄には江文峠(タウゲ)とあり、中國には峠とかきてタヲといふ、峠(タヲ)市佐野のタヲうけのタヲなどなり。

○水戶義公書翰

水戶義公京極宮へ御返簡之寫

京極宮殿命之趣特拜戴魴魚一桶幷御領山之松蕈一桶誠以難有仕合畏入奉存候雖嚴寒の節益御機嫌好被爲成董喜之至奉存候右件々御序之刻何分茂宜樣御沙汰賴存候光圀恐惶頓首

十一月廿五日　西山隱士

生島玄蕃頭殿

從

宮樣爲　御尋中納言殿へ奉書一通松茸一桶□鰹一桶被遣致披露候所感戴不大形忝仕合に被存則貴殿迄以書札御禮被申上候

一中納言殿山中居住之由被爲　聞召老年寒氣にも中り不申哉との　御意之旨是又致演說候所誠以忝仕合に奉存候中納言殿居住は水戶城五六里程北太田鄉西山と申山中に四隣山溪打圍人家離所に衛門茅屋僅之山莊を相構植花竹愛鶴嘆鹿鳴讀書一種之樂にて被致閑居候世間往來も斷被申稀々之樣に御座候處　宮樣など遠境之處被爲懸

尊慮時々預　御高問候段不虛之大幸被奉存候
右等之趣貴殿と〔迄歟〕拙者共方より令申進候樣にと被申候
一爲
尊慮拙者共儀御垂問之旨誠以冥加至極難有仕合筆頭に難申述奉存候此段何分にも貴樣御取繕御沙汰
奉頼候恐惶謹言

十一月廿九日

栗山源助〔信判〕
中村新八〔啓判〕
安積覺兵衛〔覺判〕

生島玄蕃頭樣

右桂殿家司寫所持のよし竹垣柳塘より借得て寫〔二月廿三日〕

○茅屋改瓦

佩文齋書畫譜宋璟廣州懷惠頌
玄宗時。宋璟爲廣州都督。廣州舊俗。皆以竹茅爲屋。屢有火災。璟敎人燒瓦改造店肆。自是無復延燒之患。人皆懷惠。立頌以紀其政。〔舊唐書本傳〕
江戸の武家町屋共茅屋根を改めて瓦屋に可致旨仰出されしも同日の談なり

○李白碑

同書李白靑山碑
李白至姑孰。悅謝家靑山欲終焉。及卒葬東麓。元和末。宣歙觀察使范傳正祭其冢。禁樵采。訪後裔。

惟二孫女嫁爲民妻。泣曰。先祖志在青山頃。〔覃云頃疑頂〕葬東麓非本意。傳正改葬。立二碑焉。〔唐書本傳〕

太白の二孫女民の妻となるもあはれなるものがたりなり。

○白雪樓

同書孟亭記

咸通四年皮日休撰。江陵寄居李耆壽。嘉定庚午。於郢州白雪樓之倉側。得斷石一塊。上有六十五字。乃唐季吏體。文理斷續。不可讀。其間有孟先生三字。終於波動岳陽城五字。則知其爲孟亭記。今石尙存。〔輿地碑目〕

これによりて見れば郢州白雪樓の名宋の時よりあり明の李于鱗にはじまるにあらず〔二月廿四日春雨中に書〕

○小鍛冶宗近

劍匠の稻荷を奉るは昔三條古鍛冶宗近稻荷山の埴土をもて鍛冶せしよりの事也、又小鍛冶の諺には明神狐と現れ相槌を打玉ふなどいふ、按に宗近は始薩摩の谷山鄕に謫れて正國てふ刀匠の弟子となりて劍を造ることを學びけり、後京に召還されて三條わたりに住けるよし、おのれの家系に記しぬ〔薩摩老侯榮翁君の著せる成形圖說卷一にみゆ二月廿五日新晴〕

○田文

和訓栞曰津國豐島郡南鄕村の社司今西氏の藏に田文あり、くず紙の如く幅一寸あまり、竪に界引て又橫界ありて、山川田畑墓原など一々橫に書てあり、最初に文治五年御撿注加納田畑取帳とあり〔同書卷九に出〕

○伊達家

むかし伊達家の有司領分の富家どもへ用金を課せしを、中將吉村朝臣聞れて、上よりこそ下を惠むべきに、下より上をめぐむといふ事やあるとて、一首の歌をよみて示されける

うけ繼し國の守の甲斐やあらん惠まぬ民に惠まるゝ身は

さすがにめでたき事になん申めり〔同書卷十に出〕

○享保十七飢饉

近く尋るに享保十七壬子の歲、西海道の疫癘と歉饑に、豐前小倉の內男女七萬人の疫饑死あり、肥前佐賀の內男女十二萬餘口の疫饑死あり、又筑前國內凡三十六萬七千八百餘口の中男女疫饑の死人九萬六千七百二十口と記せるとかや、其上にも同十八年癸丑の夏六月頃より秋の半に至り、日本國中一統に疫病流行て大坂三鄕の市中にしてさへ風を煩ふ者凡三十三萬七千四百十五人と點檢せしとかや、其時分の米價一俵百十四匁の騰踊なりしといへり〔同書に出〕

○標榜

佩文齋書畫譜〔卷六十五〕孔子見老子畫像　人物七。車二。馬三。標榜四。惟老子後一榜漫滅云云。〔隸續〕標榜とは名を書付たるなるべし。

○六阿彌陀四番本尊

六阿彌陀四番目同木の本尊は田畑與樂寺にては無之、實は駒込土物店天永寺今本堂の本尊なるよし、むかし寶永の比與樂寺にて天永寺より金子借用の節天永寺へ預け置たりと代々申傳へ申候と、天永寺當住の話也と、龜屋文寶の話也。

○御臺樣濱御殿にての御詠並御詞書

御臺様濱御殿に成らせられし時の御詠とて人のうつし傳へしをみるまゝに寫す

きさらぎ末の七日、濱の殿へまかりけるに、まだ朝ぼらけのふかき霞をわけ行ほどに、いともめづらかなる折しも、雨のふりいづるけしきさへよそにことなりぬるもいとはず、爰かしこさまよひありく、まづ觀音の御堂にまうでぬ、あたりの木立いとものふりとうとくみゆる、少し小だかき所につきがねのみゆ、されども時つく人もあらぬなるべしと人々いふ、なを行／＼て高き山にいたる事雲にもいるかとまで覺ゆ、ひえの山をはたちばかりかさねあげたらんといへるも、つゞくべき山のたかさになん、名をとへば富士山ときこゆ、これより海を眺望すれば誠に三千里の外までながめやらる

うちむかふ浪路の末は霞つゝよるべもわかぬ沖のつり舟

山より山を過つゝ海の面にのぞむ、ひだりの方をみればひかたに游ぶ鳥どもむれゐたり、爰は櫻川といへるよりつゞきてあるよし、在原の中將のいざことゝはんと言しはすみ田川なれど、何となうおもかげうかぶみやこ鳥にはあらぬ千鳥のむれ居つゝあそぶ、いとおもしろし

打よする浪とともにも濱千鳥たち居ひまなく浦づたひして

興ある所／＼あまたあれど、言の葉もおよばず、いつしか暮におよびければ、歸るさにおもむく。なを雨やまず、霞こめたる人々あめはればいかに面白からんなどいふを聞

いとゞしく雨さへはれば歸る浪の名殘はつきじ濱の眞砂地

右壺大樓にかり得て寫す〔閏月廿九日〕

○麹町市人の娘詩歌〔すみだ川の花みし時となん〕

福一丸舟回棹去。飄風嬌態亂紛々。此中好景君知否。幾樹櫻花如白雲。

白雲か雪かとたどる隈田川の霞をつゝむ花の色香に

○匂ひ袋の方

一かすみ　日野大納言殿の方

一丁字　壹兩　一りうのふ　五分　一じやかう　貳兩　一白だん　貳兩

一かんせう　三兩　〆

一はつ夢　仙洞様之法

一丁子　五兩　一りうのふ　壹兩　一じやかう　壹兩五分一かんせう　三兩

一白だん　壹兩　〆

一おち葉　京極殿之法

一丁字　三兩　一かんせう　貳兩　一じやかう　貳兩　一くわつかつ　壹兩

〆

一郭公　吉田殿之法

一丁字　六分　一ぢんかう　五分　一りうのふ　二分　一せんきう　貳分

一もくせいの花三分　〆

一うき船

一丁字　四分　一じやかう　三分　一りうのふ　三分　一白たん　六分

一かんせう　六分　〆

一新まくら　加藤左馬殿之法

一丁字　壹兩五分一かんせう　二兩　一りうのふ　壹分　一じやかう　五分

一ういきやう　二分　一かやの木　壹分　一すきのあかみ壹分　一梅花　五分

一とこなつ 〆
一丁字 八分 一りうのふ 九分 一じやかう 貳朱 一かんせう 貳朱
一白だん 二朱 一れいりうかう九分 一へんのう 五厘 一くんろく 壹分五厘
〆
一寝ざめ 勅方
一きやらの粉 二匁 一てうじ 貳匁四分 一白だん 五分 一じやかう 壹匁
一りうのふ 五分 一はいそう 貳匁 〆
一やうぱいくは 豊後守殿之法
一りうのふ 五分 一かんせう 六匁 一白だん 二匁 一梅花 少入
〆
一小夜衣 紀州様の法
一丁子 六匁 一かんせう 四匁 一白だん 四匁 一じやかう 五分
一りうのふ 五分 〆
一ぬみだれ髪 國母様の法
一丁子 六匁 一白だん 三匁 一ういきやう 二匁 一せうもつかう壹匁
一くんろく 三分 一りやうかう 三分 一あせんやく 三分 一あんそかう 三分
一かんせう 五匁 一へんのふ 五匁 一りうのふ 三分 一じやから 六匁
〆

一又緩亂髪　花町様の法
一丁子　三兩　一白だん　三兩　一かんせう　貳兩　一じやかう　壹分壹厘
一りうのふ　壹分壹厘　一へんのう　貳分　〆
一ねみだれがみ
一きやらのこ　五分　一てうじ　壹兩　一かんせう　壹兩　一れいりうかう八分
一ちんかう　六分　一りうのふ　壹分　一もつかう　五分　一せんきう　五分
一あせんやく　六分　一白だん　八分　一さんない　六分　一梅花　壹兩
一ういきやう　四分〔是はいりて〕　一じやかう　壹兩〔毛をさる〕　〆
一梅花　越前守様之法
一丁子　壹兩　一くんろく　壹兩　一もつかう　壹兩　一うこん　壹兩
一りうのふ　貳分五厘　一かんせう　四分　一白だん　四分　一じやかう　貳分五厘
〆
一なり平　御同人様之法
一丁子　拾匁　一白だん　五匁　一梅花　三匁　一じ　かう　貳分
一りうのふ　三分　一かんせう　五分　一けいしん　七分　〆
一若菜
一かんせう　貳匁　一丁子　壹匁　一白だん　壹匁　一くんろく　壹匁
一もつかう　五分　一くわつかう　五分　一じやかう　三分　一へんのう　三分
〆　酒に水を入てあらひ天日にほすなり

一又梅花
一丁子　壹兩　一白だん　貳分　一ばいさう　五分　一さんまい　貳分
一かんせう　貳分　〆
一ふた葉
一ちんかう　壹匁貳分　一丁子　貳分　一梅花　三朱　一白だん　三朱
一かんせう　三朱　一じやかう　三朱　〆
一花立ばな
一丁子　貳匁五分　一じやかう　壹匁　一かんせう　壹兩　一白だん　壹兩
一きやうにん　貳兩　一りうのふ　八分　〆
一はま千鳥
一かんせう　貳匁　一じやかう　壹匁　一りうのふ　壹匁　一白だん　五分
一丁子　五分　〆
一松風
一じやかう　壹匁　一りうのふ　三分五厘　一かんせう　三分　一白だん　壹匁
一てうじ　八分　一もつかう　壹分　一あんそかう　五匁　一くんろく　七匁
一ぢんかう　壹分　〆
一ちぐん中道の方
一丁子　三兩　一白だん　三兩　一かんせう　貳兩　一くんろく　壹兩
一じやかう　貳朱　一りうのふ　貳朱　〆

一赤方
一丁子　貳匁　一じやかう　壹匁五分　一りうのふ　貳匁　一かんせう　三匁
一白だん　三匁　〆
一片桐石州三色之法
一丁子　壹匁貳分　一かんせう　壹匁二分　一うゐきやう　六分　〆　口傳
一輕き法
一丁子　壹匁　一白だん　七分　一かんせう　八分　〆
一てうじ　三匁　一白だん　二匁　一かんせう　三匁　〆
一丁子　壹匁二分　一白だん　壹匁六分　一かんせう　貳匁　〆
一丁子　壹兩　一かんせう　貳兩　一白だん　三兩　〆
一細川越中守殿之法
一かんせう　六匁　一ちんかう　貳匁　一ちやうじ　三匁　一ばいさう　壹匁六分
一れいりうかう壹匁六分　一大うゐきやう六分　一くんろく　壹匁　一白だん　貳匁四分
一りうのふ　貳匁四分　一じやかう　壹匁八分　一くわつかう　壹匁二分　一せうもつかう壹匁
一なんもつかう壹匁　一へんのふ　六分　〆
一女院様之法
一丁子　三匁　一かんせう　九分　一うゐきやう　六分　一白だん　壹匁
一ちんかう　五分　一じやかう　三匁　一りうのふ　五分　〆
一細川三齋老方

一丁子　壹兩　一じやかう　三兩　一りうのふ　三兩　一白だん　壹兩
〆

一中宮樣之法
一りうのふ　貳朱　一てうじ　貳分　一かんせう　壹分　一白だん　壹匁五分
一ばいそう　壹分　一さいしん　貳分　一さるぼ　五分　一じやかう　八分
〆

一院之御所樣之方
一丁子　壹分五厘　一じやこう　貳分　一かんせう　貳分　一りうのふ　貳分
一白だん　貳分　一きやら　壹分　〆

一又はなたち花
一丁子　壹匁　一じやかう　三分　一りうのふ　三匁　一白だん　壹匁二分
一かんせう　貳匁二分　一うゐきやう　二分　〆

一若くさ
一丁子　壹匁　一かんせう　壹匁　一白だん　五分　一くんろく　五分
一もつかう　五分　一りうのふ　五分五厘　一へんのふ　壹分五厘　一じやかう　壹分五厘
一くわつかう　壹分五厘　〆

一
一丁子　貳匁　一じやかう　壹匁　一りうのふ　壹匁　一白だん　壹匁五分
一かんせう　壹匁　一うゐきやう　壹分　一くんゐかう　少　〆

一
一丁子　壹兩　一かんせう　壹兩　一じやかう　壹兩　一りうのふ　壹兩
一せうのふ　壹分　〆

一
一梅花　壹匁　一びやくだん　壹匁　一かんせう　壹匁　一じやかう　二分五厘
一りうのふ　二分五厘　一ういきやう　貳分　一へんのふ　少　〆

右何れもやげんにてこまかにおろし申候
以上三拾五方〔辛未三月十日於府中春雨寫畢〕

〇元文金銀吹替之時宗對州へ被仰渡候御書付

元文元辰年金銀吹替に付同二巳年宗對馬守願候故從公儀被仰渡候御書付
金銀吹替に付朝鮮人參之代幷交易之儀共差支候哉と被相願候趣彼是御評議も有之候畢竟元祿銀吹替迄之節と此度別て相替儀も無之處元祿銀吹御改候砌は二割七分之增を對馬守より朝鮮國へ相續遣候にて外に何之願も不被申上尤人參代高直にも不相成濟來候然處此度何角御差支可有之哉と被申聞候儀難心得候勿論元祿之頃に格別差替り候儀も無之候然共此度對馬守損失書付被差出候に付ては其通にも難被差置候只今迄之人參直段に五割增是は銀吹改之五割增にて世上一統に存知之事故五割增に可爲賣出候其餘增候ては外之品と違ひ末々難相調におゐては世上可致難儀候依之右增分　公儀之御失墜に可被成候間文字銀にて朝鮮國不請取候はゞ人參賣候代銀を對馬守方より銀座へ差出次第御定銀高千四百貫目之內慶長銀之位に吹出し相渡候樣に銀座へ可申付候直段增之儀人參代計にて其外交易筋は諸物段々高直に相成候條是にて相濟候人參代之外は公儀御世話可被成樣無之候交易代慶長銀

に吹直候儀は文字銀對馬守より差出次第人參代共に御定高千四百貫目餘迄は吹直し相渡候樣銀座へ可申付候　右之通落着之上對馬守手前損失無之候左候得ば此上何之品被相願候共曾て御取上げは有之間敷候尤朝鮮にも只今迄之通相替儀無之候得ば人參可滯樣も無之儀に付〔本ノマヽ〕

一人參之外朝鮮へ交易之品可成程は代物替に被致作略可有之候畢竟異國へ金銀多く不相渡樣可致事

一人參賣出し候斤數幷代金高向後壹ヶ月限に御勘定所へ認め可被差出候

右之趣可被得其意候

巳七月　〔辛未三月十一日寫〕

○萬松院筆貴筆

相國寺萬松院筆貴筆　新古今集奥書

當集上下就懇望丹心染禿毫偏後見嘲哢有耻餘已而

永正九〔壬申〕季春中澣　寂湊人行主〔三十餘三〕

〔極札〕新古今和歌集

全部上下

相國寺萬松院筆貴筆澤無紛者也　金壹枚五兩

元祿六年　南呂中旬　古筆了仲（玄鈔齋）

○橘千蔭和歌

春色浮水

つくばねのこのめも春の影みえてとばのあふみやうちけふるらし

七夕

たが身にもかゝれとぞ思ふ神よゝりあふせかはらぬ天の河浪

後朝戀

とゞめおきし心もおのが心にてなげくや何の心なるらん

〇古錢

三日十九日書肆青山堂古錢數筬を携來皆贋作のもの也、中に眞もまたまじれり

〇正音鄕談雜字抄

新刻增校切用正音鄕談雜字大全の中抄書

鄕　螺仔（コブノウツマキ）　正　筲箕〔悄〕　鄕　㨨（ムシル）　正　挼〔拖〕

通音　卸肩胛（カタヨリヲロス）〔甲〕　過肩（カタヘモノヲアグル）　換肩（カタヲカヘル）　斷奶（チヽアガル）

郷 深臍(トゾフカシ) 正 窩子 郷 捋臍(デベソ) 正 搖脹〔去聲〕

郷 脚淑(アンラアシ) 正 脚汗

鳥郷 出在(スンチ) 正 出窩 郷 鷄旦〔卵也〕生旦〔生卵也〕郷 〔白仁旦白(シロミ) 紅仁旦黄(キミ)〕

狗郷 風(サカル)〔官 走花〕 正 過墻飄花 郷 相帶〔官 相逢〕亂腸煉丹

郷 相帶帆(ツルミハナレメ)〔輦也〕正 輦作一塊

猫正 徒利(ウマレル)〔將也〕正 迴窩〔鏡〕郷 洗面(テウヅノカフ) 正 洗臉〔始臉〕

郷 過家(ヨソヘアリク) 正 脚閑賤〔玄〕 郷 風正 叫春叫窩

郷 相交(ツルム)〔官 厠打〕

正 廢氣走窩 郷 猫厨(ネコノイレモノ)〔官 同〕猫籠(カゴ) 猫房(クッ)

郷 松蕾〔松果〕 正 松毯

郷 東菜(トコロテン) 石花菜 正 澆菜(ユデル)〔嬌〕水茄(ナガナスビ) 白茄

郷 呆花(アタハトサシテツカヌ) 畏挿 正 謝花差挿 郷 打草頭(シホレル) 正 打低草

郷 城垜(ネリヘイ) 垜子〔斗〕郷 敵樓 正 望樓〔旺開聲〕郷 三川隙(セメクチムマダシカ) 正 戰口〔略開正〕

郷 垜空(ヘイノコグチ)〔同〕 正 垜口〔斗〕 郷 甕城(三ノマル) 正 月城

郷 一賛二賛(カベヒトヘ) 正 一堵二堵〔斗口尖正〕

郷 雨傘頭(アマカサ)〔油紙的〕正 傘衣 郷 傘空 正 傘眼

郷 傘榛(カサノロクロ)〔宣〕 正 傘椿 正 張傘(カサハル)〔章〕打傘 郷 合傘(カサスボメル) 正 收傘 郷 佔傘下(ウトノカゲニヤドル)

正 躱在傘陰下[因] 藍傘(アライカサ)

通音　閉船　搭船　連枕　凉枕
鄕　蚊帳　正　帳子（閉齒聲）鄕　帳鉤　正　幔鉤（合口音）
鄕　帳放落　正　帳帷解下　鄕　鉤蘢　正　帳纓　幔子腰　鄕　掛起揭起　正　帳帷褰起（牽）
又掛起　通音　鎖金帳　苧絲帳　神帳　帳　棍（筆〇）也
鄕　斷鑼（沙羅）正　沙砵（又砵）鄕　濶口仔　正　疊子（英）覃云方俗サラサハチト云
通音　桶　擔　桶箍　修補　鄕　灯火㞙　正　灯火灰　鄕　燭淚油　正　燭㞙（矢）
（神器）通音　神龕（刊）神帳（閉侯聲）案桌（香案也）錢爐　明爐　彩帳　圖帳（粲）幔大
柱衣　五事　花瓶（聘）花臺　手爐　軸人
覃按說海所收蓼花洲閒錄云舍之開寶寺福勝閣下爲佛帳（南遊紀舊）
鄕　糀母（糀媒也）正　糀水（合口）（鄕談）酒埒（正音）酒脢（梅）鄕　酒酷　正　酒頭　鄕
酒汁（正音）醪酒　鄕　水湿酒　正　水瀘適
鄕　落帙　正　漏板　鄕　巡落帙　正　急溜䏶過（漏板）鄕　相答讀　正　頂眞（對讀）鄕　幾授
正　幾遍　鄕　書聲　正（吾伊咿唔）鄕　滑　正　聲順流不（粘舌）鄕　澁（官强記）正　難
澁（雪）

右寫本にして糢糊誤寫もあるべし（三月廿三日雨中抄書）

〇泉山景境詩歌集

泉山景境詩歌集二卷（版本）
武藏州崎玉郡忍邑河原鄕泉福山照岩寺
十二境

山堂秋夕　野曲耕夫　岸頭甘菊　隣里曉雞　寒夜叫猿　蘆洲鳴鶴　溪間桃花　龜岡古松
蓮池游魚　柳岸夜泊　虎溪紅葉　龍淵瀑布

八景

日光晴嵐　筑波夕照　利根歸帆　熊谷晩鐘　長井夜雨　泉山秋月　成田落雁　赤城暮雪

祭酒林信充序アリ享保已亥泉福山竺岩周仙自序アリ

詩人

勸修寺中納言高顯卿　唐橋少納言在廉朝臣　勘解由小路前大納言韶光卿　葉室權中納言賴胤卿
高辻中納言總長卿　中御門前宰相宣顯卿　坊城藏人頭左大辨俊將朝臣　八條中將藤原隆英朝臣

歌人

中院前大臣通躬公　冷泉前大納言爲久卿　武者小路前權大納言實陰卿　高野前權中納言藤原保光卿　高松從三位重季卿　武者小路前參議公野卿　日野前權大納言資時卿　西三條前大納言公福卿

詩人

公慶　得生院　惠通　十乘院　獨文　前黃檗山支那　杲道　見黃檗山支那　全岩　前福濟寺支那　大鵬　見福濟寺支那　湘潭　梅本寺　即中
大安　萬葉山　鶴文　萬葉山　恒寂　同上　忘帚　同上　越玄　同上　祖範　光國寺下
禪黎　同上　長胤　伊藤元藏　重經　木村源之進　元貞　山本權內

歌人

行快（祇園寶壽院）　泰和（圓覺院大僧都　下略）

詩人

源宣紀〔細川越中守〕　藤原恭躬〔大澤出雲守〕　藤原信充〔林大學頭〕

藤原信智〔林百助〕　碧於亭〔安積覺兵衛〕

歌人

源義淳〔松平但馬守〕　源頼寛〔松平若狭守〕　貫角〔奥平大膳大夫〕

鑾角〔池田内匠頭〕　露沾〔内藤下野守〕　松月堂〔法眼千翁〕

右之外數人略書

文化六年己巳重陽の日東叡山のふもとなる書肆にして照巖寺といへる謠本を得たり、享保辛亥十六二月觀世大夫左門服部周雪がつくれるもの也〔武江日本橋出雲寺疑らくは服部南郭にや畫名に周雪といひし事あり〕ことし壺天樓〔龜や勘兵衛〕のもとより泉山景境詩歌集をかり得てよむに、はじめて此寺の事なる事をしれり、是も又讀書の一得也〔辛未四月初四〕

〇春日の鹿

溝口豐前守信勝〔八十郎家〕奈良奉行勤役中寛文十一年六月廿八日春日の神祠遷宮の時、祠邊鹿多くして人々のなやみとなりしかば、廣き網を設て數多の鹿を追入、網目より出せる角を悉く切て衆人の患を除く、是より年々の例となる。

〇はまくりはたおりひめ

はまくりはたおりひめ〔上下〕かなものがたり古風なるものなり。

明暦二年三月吉日林長右衛門板。

〇執齋詠草の中

江戸に在ける頃、みづから隠家の何がしと名のると聞わたりける　戸田茂睡　人のいほりとて、前のたなはしに不求橋いふ札を立て、和歌あらば書てよ、千首をえらびてのせんと書てすゞり料紙をものし置けるを見て

もとめざる花なかりせば隠家に
　誰わたれとてかけし橋そも

述懐

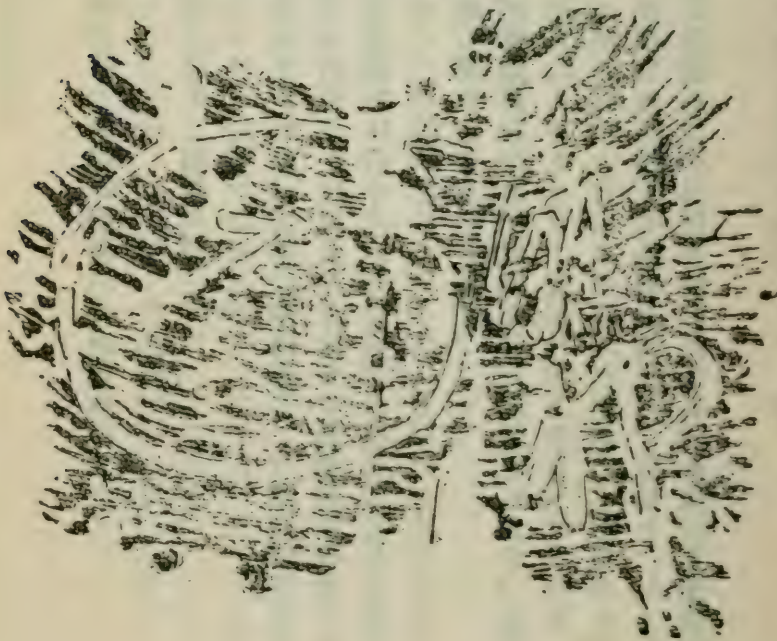
世のちりをあらふまでこそかたからめ
　心の水よにごらずもがな

亨保十年乙五十七歳在江戸
三月廿七日小金に於て御獵まし〱けるを祝し奉りて小宮山謙亭子によみてをくり侍る

かねがさく小金の花がさくといふ
　はるの日ぐらしいさむ御狩場

小金村の内に日ぐらし金が作といへる所小宮山の陣屋ありければかくつらね侍る小宮山は其所あづかり沙汰し給ふ御代官也。

○益軒翁の書

貝原益軒書百忍歌解
先人益軒眞蹟　男損軒好古監定

楷書はなはだ見事にして華人の寫本のごとし〔青山堂所藏也〕

〇荒神の德利

武州あがた野子聖權現の下　龍泉寺燒　是は武州名器一品　荒神の德利〔青山堂所藏〕

〇植成九八郎

植崎彌市郎政信が養子九八郎政由は御勘定成田九十郎正之が二男なり。

〇角倉了以

一慶長十三年京都大佛殿御造營に付大材木牛馬の運送なりがたく、了以光好に命ぜられ、京都加茂川の水を堰分け新川をつけ、右の材木を引上る、よりて十六年より伏見より二條まで高瀬船通行す、十九年また富士川鑿りしにより、悴與一玄之に命ぜられ是をひらく、三月より七月に至りて普請なる、同年七月十二日死す、六十一、法名了以、城州嵯峨の二尊院に葬る、其子與一貞順はしめ玄之のち義庵といふ、大坂御陣のとき上方處々の川をきり落しまたは水をせき入る。

一角倉與七光好は宇多源氏の末流吉田意庵法印宗桂が惣領なれども、水理を好み醫師を好まず、弟に家をゆづりのち了以とあらたむ、年月しれず、東照宮にまみえ奉り、慶長八年上意をうけ安南國へ通船し、同十年また仰をうけ、丹波國柴殿田村より深津嵯峨大井川まで山間三里があいだ川中に大石多ありて往古より通船なりがたきを切ひらき、翌る午年八月より高瀬舟通行す、慶長十二年また命により富士川へ高瀬船を入れ、駿州岩淵甲府まで通船し、十三年また仰により信州諏訪遠州掛塚まで通船なす、よりて書を給ふ

〔權現樣〕自信至遠州懸塚舟路見立候付而船役之儀被仰付候也

慶長十二年六月廿日〔御朱印〕　角倉了意

〔台徳院様〕従信州至遠州懸塚在舟路見立船役如被仰付不可有相違者也

〔御朱印〕慶長十二年七月十一日　　　角倉了意

〇御鍛冶御褒美

享保八年五月廿八日濱御殿地にて仰被付候新身御道具御鍛御冶用掛相勤候者へは御大小被下置旨有馬兵庫頭殿加納遠江守殿於御部屋被仰渡御刀〔石堂〕御脇差〔康継〕拜領仕候。

右御腰物相勤し曾雌平太夫家譜の所見也。

〇御留守居組頭

享保十九年六月朔日御留守居組頭被仰付候旨松平左近將監殿被仰渡候此度御留守居組頭一組二人宛被仰付候間御廣敷番之頭より被仰付一組壹人宛差加相勤候樣に被仰度。

〇德力良顯

德力伊賀守良安が六代十之丞良顯、後號有隣、實は讃岐國郷士佐々木八郎左衛門正種が男也、元祿十六年六月廿五日被召出拾五人扶持同月廿八日常憲院殿に拜謁し、寛永元年十二月十五日百五十俵を賜ひ、御近習番格になり、六年三月二日寄合儒者、正德元年七月朔日御記錄御用與勤、享保三年十二月五日評定所儒者、八年九月廿六日病氣に付御免、正德元年享保四年朝鮮人贈答、元文三年五月十日七十七歲病死、日暮里南泉寺に葬、法名有隣、良顯が子良弼十五郎藤八郎と稱す、評定所儒者をつとめ、奥詰儒者となり、寶暦七年九月台命により政要策及び表を獻ず、廿二年三月四日御書物奉行となり、朝鮮人と贈答す、明和元年閏十二月十六日欽定古今圖書集成吟味御用をつとめ銀五枚を賜ふ。

〇芝金堀杉出候古碑

文化八年辛未三月二日ほり出し候古碑

芝金杉毘沙門横町湯屋
龜屋藤四郎井戸より骨
石塔掘出し申候今年迄
百八十一年に成支干相
當〔金杉二丁目圓珠寺
に立ると云〕

佐々木藤兵衛尉友正
妙法　皈妙蓮芳安霊
寛永八辛未年三月二日

○牛大夫宗長墓

寛政四亥年の暮に上毛野羊大夫の碑の近所宗長寺よりほり出せし古き石に　牛大夫宗長墓　とありし
と云。

○虎の石塔

淺草法福寺に虎が石塔あり　梵字。

○佐渡女子歌　　　　仙田氏龜鶴女

夏月〔十一歳の時のうた〕

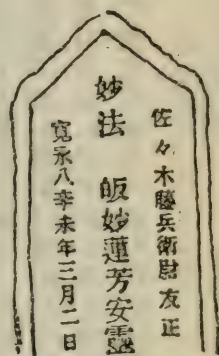
むら雨のすぐる雲まにふけにけりさらでもかげは短夜の月

琴の師の京に歸るを送る〔七歳の時也〕

君に今たちわかれなば花とりの色にもねにも戀しからまし

〔十二歳のときのうた也〕

秋はまだ遠山鳥の尾上よりいづれば明る（ミシカイ）夏の夜の月

江戸の大城にみやづかへせしが十四歳のとき世を早うしけるとなん、享保の頃のもの也。

〇凶句

安永九年の歳旦　葵足

何の式かの式もなし宿の春　　葵足

聞人つまはじきして隱者なりともこの世にあらんものそれ程の式なからずやはやと譏しが、果してその年身まかりぬ。又天明の頃存義が歳旦

信濃なる淺黄布子やとし男

ある人難じて淺黄布子は凶服也とつぶやきしが、この年むなしく成ぬ。又天明五年蓼太が歳暮

われ見ても賣れぬ石あり年のくれ

次のとし身まかけり、門人何がし今年墓碑をたつる前象也しといへり。〔以上馬琴が燕石雜志〕

蜀山云、蓼太病のとき醫師日向東庵の藥を服せしに、東庵いはく蓼太は水氣さりて命ながゝるまじと、その年の名月の句に

名月や四ツ手におもき水ばなれ

といふ句をきゝて東庵嘆息していよ〳〵水氣の去る事をしれり、後の月は見るに及じといひしが、果して九月十二日に身まかりぬ〔天明六年の事也〕

予が廿五歳の時〔安永二年癸巳〕歳旦

春たつや二十五絃の山かつら

初鷄も去年にはあかぬ別かな

二句とも忌はしき句也、そのとし正月五日の曉去年の冬十二月に生れし子うせにき。

〇錦繪

錦繪は明和二年の頃、唐山の彩色摺にならひて、板木師金六といふもの板摺何がしをかたらひ、板木へ見當をつくる事を工夫して、はじめて四五へんの彩色摺を製し出せしと、金六みづからいへり、かの金六文化元年七月身まかりぬ〔燕石雜誌にみゆ〕

此說非なり、見當は延享元年江見屋上村吉右衛門工夫也、故に今に見當のことを上村と云ふ。

○挑灯鏁　鉋　吹革　觀世より

挑灯へ銅の鏁を著ることは正保の年間より起ると武家故事要略にいへり。鉋といふものも寛文年間まではなかりしとぞ。和名かんなとはかきなぐる義なるべし。吹革といふものも元祿年間まではまれ也しにや。元祿三年七月に開板したりし人倫訓蒙圖彙に見えたる鍋の鑄かけは、火吹竹にて火を吹きおこしてをり。觀世紙よりは又三郎はじめたりと、西鶴が男色大鑑にいへり。

○林春齋〔春德〕

一承應三年十二月十日

吳服羽織　林春齋

武仙言書幷詩被仰付候に付　同春德

一寛文三年十二月廿六日

五經講釋不殘事畢之趣達忍岡

家塾可稱弘文院之旨被仰出之　林春齋

○釋寺野

杉浦武兵衛家譜に、正保元年釋寺野に於て鹿狩させ給ふ時、疵負たる猪來りしを、近藤掛右衛門用清山本九兵衛正次杉浦武兵衛政清三人にて突留ると云へり、釋寺野は今の石神野なるべし。

○蟹江七本槍

弘治元年尾張國蟹江合戰のとき七本槍

前譜忠員忠世忠佐同阿部忠政杉浦吉貞　大久保平右衛門忠員〔烈祖成蹟初名甚四郎〕

前譜忠世忠員忠佐忠勝同杉浦吉貞　同七郎右衛門忠世

前譜忠佐忠員忠勝同阿部忠政杉浦吉貞　同治右衛門忠佐

前譜忠勝同阿部忠政杉浦吉貞　同新八郎忠勝〔烈祖初名五郎右衛門〕

前譜忠政同大久保忠勝杉浦吉貞　阿部四郎五郎忠政

前譜吉貞同大久保忠勝　杉浦大八郎五郎吉貞

前譜吉貞同大久保忠勝　同八郎五郎勝□〔吉歟〕

○雀部新六郎御咎の事

享保三年五月廿一日　　御徒頭　雀部新六郎

申渡之覺

其方組內藤源八郎一色諸左衛門先月晦日增上寺へ御成之節天光院寺內固め相勤め候處尾張殿同勢入込有之堺之外より相見候付而右之段僉儀有之候處源八郎諸左衛門相違之儀共申固め之勤方も不念之儀旁以不屆に付而追放申付候其方事右御成之節增上寺固め之場所見分候而可入念旨申付之由に候得共最前御役被仰付候節一通り組之者へ萬端勤方前々之通入念候樣申渡候迄に而其上委細之儀は不申聞候惣而御成先之儀は別而大切成事に候得は兼而度々にも急度申渡之尤其場所の樣子により時に至り致了簡組之者へも相心得させ可申品も可有之處無其儀不調法之至に候依之閉門被仰付者也

右今晩於大久保佐渡守宅新六郎呼寄大久保長門守列座佐渡守申渡

八月廿五日

右は野史にいふ尾張殿（章善公歟）塀の上より御成を見られしゆへ御咎有之御書付なども追々出候よしなり御徒兩人は追放に相成候よし。

○武川衆文書

急度申入候□（仍歟）此已前之御役樣には壹萬石に鑓百本被仰付候へ共向後之義は壹萬石に鑓五拾本相殘五拾本之代に鐵砲貳拾挺可持之旨　上意候右之外は最前被仰遣之通相違無御座候恐々謹言

三月廿三日　　安藤對島守　重信判

酒井備後守　忠利判

酒井雅樂頭　忠□（世歟）判

武川衆中

武川衆御重恩之覺

一百貳拾石　柳澤兵部丞
一八拾石　曲淵庄左衛門
一八十六石　曾雄民部丞
一九拾貳石　折井長次郎
一五拾石　有泉忠藏
一八拾石　青木與兵衛
一百石　馬場右衛門丞
一百拾八石八斗　伊藤三右衛門
一五拾六石四斗貳升　曾根孫作
一六拾石　折井九郎三郎
一百拾石　曾雄新藏
一七拾五石　山高宮內少輔
一貳拾石　同清左衛門
一貳百石　折井市左衛門

合千貳百五拾壹石貳斗貳升

御重恩之地

一仁百俵　馬場勘五郎　一仁百俵　曲淵玄長
一仁百俵　青木尾張　一仁百俵　青木彌三左衛門
一八十俵　馬場小太郎　一八十俵　横田源七郎
一八十俵　米倉左太夫　一八十俵　同彦次郎
一八十俵　同加左衛門　一八十俵　同彦太夫
一八十俵　曲淵庄左衛門　一八十俵　同助之丞
一八十俵　折井九郎次郎　一八十俵　青木彌十郎
一八十俵　伊藤新五郎　一八十俵　青木勘四郎
一八十俵　曾雄民部助　一八十俵　入戸野又兵衛
一六十俵　柳澤兵部少輔　一六十俵　山高將監
一六十俵　米倉六郎右衛門　一六十俵　山寺甚左衛門
一四百俵　折居市左衛門　一四百俵　米倉主計助

合貳千九百六十俵

右之分可有宛行候

寅正月廿七日　成澤吉右衛門
大久保十郎兵衛
日下部兵右衛門

右米倉家貞享書上之寫天正十八年寅としの事跡なるべし。

御朱印

武川次衆事

曾雄藤助　米藏加左衛門尉　入戸野又兵衛　秋山但馬守
秋山內匠助　秋山織部佐　秋山宮內助　功力彌右衛門尉
戸島藤十郎　小澤善太夫　同名甚五兵衛　同名縫右衛門
小尾與左衛門　金丸善右衛門　同　新三　伊藤新五
海瀨覺兵衛　樋口佐太夫　若尾木工左衛門　山本內藏助
石原善九郎　名取刑部右衛門　志村惣兵衛　鹽屋佐右衛門
山主民部丞　青木勘次郎

右各武川衆所定置也仍如件

天正十一年十二月十一日

右米倉家貞享書上

○松浦佐內

寛文十年十月十四日家督之砌

二百俵　松浦左內（五十二）

（但左內儀七十歲より內たりと云共右之手不
相叶武士役不罷成に付被仰付）　養子　十左衛門

右同列は皆七十以上也又上下の同列より考するに共以前に早被召出有之者は隱居被仰付といへども子

ども不被召出ものは自分隠居仕候事は相成らざるがごとし。

○津戸左次兵衛御咎

寛永十五年九月廿七日〔御咎原本に若年寄衆之内見ゆ〕皆川山城守組津戸左次兵衛當年大坂御番に雖相當候相煩當地滯留剩去比於自分屋敷内招他所之者令取相撲之節喧嘩出來而見物之内根岸源五兵衛忽令刀傷畢因玆左次兵衛昨日切腹被仰付畢弟孫右衛門義者落合小平次に御預け也彼者重疊不屆に被思召之旨於殿中物頭之面々へ若年寄衆被申渡云々。

○天明尙齒會

天明六年三月七日浚明院殿五十初度を賀せらるゝ時、若年寄酒井石見守忠休、加納遠江守久堅、御側佐野右兵衛尉茂承、松平因幡守康鄕尙齒會の御宴に列なり、八丈島を賜はり、且紅裏つけたる衣服を着する事をゆるされたり。

○染木甚太郎書上

染木甚太郎書上に

正信八右衛門は文祿年中月日不相知太閤朝鮮征罸之砌先手之面々於朝鮮一城を攻落候節城主の子姉弟兩人乳母抱之逃退候處を片桐市正手にて捕之日本へ相渡太閤より長束大藏大輔へ預られ江州水口にさし置かる其後天樹院樣御幼少の時慶長三年右兄弟の唐子一間臺にのせ御慰に片桐市正獻上仕候其節姉十一歲則御側にて被召仕弟染木八右衛門儀は九歲に罷成直に御廣敷に被差置現米三十五石五人扶持被下同八卯年大坂へ御供仕其後元和元年江戸御下向の時御供姉儀は早尾とめされ慶安元年六十一にて死し八右衛門は天樹院樣御殿相勤寬文九年八月九日八十にて死す駒込の三家町正行寺に石碑あり。

〇穴山梅雪の子

貞享稻葉丹後守書上のうち五條通鎰屋町龜屋善兵衞書上に、善兵衞曾祖父穴山陸奥守梅雪悴勝千世義武田跡目爲相續被召出則權現より御朱印を賜る、しかるに勝千世若年にて死し、跡目これなきよしみへたり、右御朱印貞享の時龜屋善兵衞所持せし趣書出す。

〇打物爲持候諸侯

溜詰打物爲持候分

松平肥後守　松平讃岐守　松平駿河守

大廣敷

松平加賀守　松平薩摩守　松平陸奥守　松平越前守　松平掃部頭
松平彈正大弼　松平左近將監　細川越中守　松平大膳大夫　松平相模守
松平左京大夫　松平攝津守　松平內藏頭　松平大學頭　松平安藝守
上杉彈正大弼　細川中務大輔　松平越後守　松平壹岐守　松平筑前守
松平於義丸　宗猪三郎

世田ヶ谷村豪德寺へ　井伊掃部頭
參詣幷火事之節前々より爲持候由　同　玄蕃頭
出火之砌打物爲持　松平下總守
同斷　松平隱岐守
同斷　立花左近將監

〇正德元年對州へ宿次御奉書

一筆令啓上候其方儀朝鮮之御用依相勤候向後江戸在府之節も長刀御免被遊候旨被仰出候間可被存其旨候恐々謹言

七月十六日

阿部豐後守　正喬判
井上河內守　正岑同
秋元但馬守　喬知同
土屋相模守　政直同

宗對馬守殿

〇半井家

尊卑分脈四（五十八丁ヲ）云和氣淸麿より十七代典藥頭常成が傳に
　家藏方數百卷。遁應安之爭亂。獻納大內之御庫。遭應安年祝融之變爲煨燼。
半井家半醒軒典藥頭和氣明重實は丹波重長が男なるよし、寛永譜にみゆ、しからば明重が時より血筋は丹波氏の胤となれり、明重は明應年中の人也。

〇武器圖說

瀨名源太郎貞如譜中に云、寛政八年正月十六日御小姓組山田肥後守組伊勢萬助貞春家に持傳候古器武器其外圖說類圖は貞春校訂を加相認候樣畫圖は貞如被仰渡候由若年寄堀田攝津守殿貞如父貞雄へ御城詰合之砌被仰渡同十一年十一月三日右全部出來貞春上納仕候。
　但右本文古器武器之類集は
　　劍刀之部　甲冑之部　弓箭之部　鞍鐙之部　旌旗之部　矛鎗之部　武器之部
　　全部冊數拾貳冊　伺之上武器圖說と外題被仰渡候

寛政十一年十二月廿六日圖を認候に付堀田攝津守殿御宅にて御書付を以御褒美白銀二十枚被下。

〇寛文九年或日記

寛文九年八月廿八日

一松前之樣子書付佐藤元知より遣申候。

一松前へ蝦夷新關へ先月廿九日奥夷之人數貳百計船にて押來然處松前之人數より鐵砲打かけ手合有之夷之雜兵百騎餘討殺其内大將分之者壹人殺一人生捕共上舟奪取殘人數山へ迯散候人共山中尋之儀成成難候由松前兵庫より注進一昨廿六日到來。

同年閏十一月十一日

一松前與蝦夷之儀去月廿三日四日に夷共上下五拾人餘搦捕打捕落着仕候由松前八左衛門より津輕越中守方へ申來候越中守より閏十月六日之日付にて注進之由御座候。

一先月廿四日五日に蝦夷御靜謐罷成候由土屋但馬守樣御兩殿樣御聞番衆へ被仰渡候由。

十二月朔日

一於京都公家衆長谷三位殿嫡子盜賊之棟梁にて去廿一日に禁裏へ火を付其躁動之紛に可致盜賊之企其外なはや十右衛門家財をも押取候半企もいたし候處訴人出被捕籠舍被仰付候由同類も數多有之由取沙汰御座候

一酒井修理太夫殿より渾天儀と中世界之圖御上被成候。

十三日

一松平美作守樣京都より生竹の子一本御持參御上ケ被成候長サ七八寸有之根こぎ之由則上覽以後御臺樣へ被懸御目候由

十二月晦日

一御謡初御用大蠟燭三百目掛貳拾挺入五箱外に貳挺臺にすへ御目錄持添持參仕候樣御側衆へ御口上之趣申上申候板倉筑後守殿より御返事例年之通御謡初之蠟燭被差上候後刻可遂披露候委細御老中より可被仰入と存候由。

覃云　一柳氏云只今も同樣被獻上候由。

○北蒂五郎

北蒂五郎保義は伊賀者をつとむ、享保九年十一月十八日保義かつて大島當流の槍術修練せし事を聞召され、植溜にてその業を試みられんが爲、近侍の臣をしてかはる〳〵是に對せしめらるゝの處、凡一千百餘合に及ぶ、のち昇進して田安の用達をつとむ、其二男蒂五郎保武も又槍術をよくす。

○山路才助

山路才助德風寛政二年十二月廿九日著述之書曆書法新書輿端曆書を獻じ白銀三枚を賜ひ、四年十一月廿八日輿端曆書を獻じ白銀七枚を被下。

○酒井忠國

酒井大和守家大和守忠國天和二年八月朝鮮人來聘の時本願守（寺カ）にて洪世泰と筆談し別著とす、忠國時に寺社奉行たり。

○有無の對句

庭前有月松無影欄外無風竹有聲　朝鮮本百聯抄に見ゆ。

○唐念珠

誦本書ニ

唐念珠一連右中山國本部王子渡海去秋野院庭前之賞菊預惠投乘雁翼賦呈一雲上人。

辛未二月良辰　　　　　　　　　　　　雲裳拜

右は薩の僧雲裳より得たりとて護持院寺中大聖院携來て示す、珠數の粒は木にて香あり、親玉は赤玉也。

○燕石雑志抄

一小野お通老て後その女信濃なる松代にありけり、母を養む事をまうして使君いゆるしをかうふり、迎の從者を遣はせし程に、お通はやがて信州へ赴きつ、そのとき迎の從者がいふ、姨捨山へはこゝより遠からず、立より給はずやとまめだちていざなへば、お通これを聞て

おば捨の山には入らじ名を聞て車をかへす人もこそあれ

とよみてたちもよらざりしとなん（曲亭燕石雑志卷一）

一ある書に犬ころしといふ梨子はその大なるもの周一尺四寸北國に多し、奥羽秋田の產他州に倍す、狗樹下にありて梨子落これにあたる時は忽死す、故に名づくといへり（同書）

一近江の源五郎鮒は室町家の時錦織源五郎といふもの湖水の漁獵を司りて、毎朝大なる鮒を京都へ進らせしかばこの名ありと云、佐渡に鯛の壻源八といふ魚あり、しか名付たる故はしらず（同書）

一文德實錄（十卷第九葉）文室朝臣助雄者。中納言從三位直世王之第二子也。字王明。少遊二大學一略渉二經史一云々。同書（第十九葉）山田連春城。字連城。同書（第十八葉）和朝臣。字子。授從五位下。といふことあり、これは宮嬪の名にて字の義にはあらねど因に抄錄す、三代實錄（卷十七第十三葉）春澄宿禰善繩。字名ㇾ達。これらの皆文琳菅三の上なり云云。（同書）

一繪卷物　予が管見をもて十が二三をいはゞ

後三年合戰記　圓光大師行狀記　駿牛繪詞　國牛十圖
三十六番歌合　七十一番歌合　十二類歌合　調度歌合
蟲合　鳥合　福富草紙　雀松原　常盤嫗物語
花鳥風月　太秦草紙　天狗の內裡　北野大茶湯記
文正草紙　鉢かつき　小町草紙　島わたり
七草草紙　若草草紙　猫の草紙　浦島太郎
物草太郎　子敦盛　二人比丘尼　七人比丘尼
四人比丘尼　女郎花
等この餘いくばくもあるべし〔同書〕

○かつらぎの神の歌

佩文齋書畫譜〔卷八十七〕明錢穀鍾馗移家圖云昔謂橋神貌醜畏張平子圖之□□□□□□□□□□之苦矣〔弇州山人藁〕
此方かつらぎの神のうたの事は此事によれるにや

○司馬江漢畫

西洋畫士東都　江漢司馬峻　描寫
昔揭城南愛宕廟　今歸郭北靑山堂　泰西畫法描江島
縮得烟波七里長
寛政丙辰夏六月二十四日　杏花園題
近頃まで愛宕山にかけてありし繪馬をはりかへし時書林靑山堂

相州鎌倉七里濱

これを得て裱褙して携來。

〇高麗日妙

朝鮮の王子加藤清正の手に擒れしが出家して日遙と稱し、肥後熊本の本妙寺に住職す、これを高麗日妙といふ、辛未の春淺草妓樂山妙音寺にて駿州岩本實相寺の開帳ありし時、日遙の書る題目あり、又下谷松長氏の家に藏せる十界勸請の曼荼羅に

授與之荒木善右衛門尉實良

慶長二十乙卯暦五月吉辰

又一心三觀一念三千と二幅に書しもあり〔辛未五月廿六日〕

〇青山堂所見

一醫書二冊　元祿五年壬子三月榎本東順七十一歲書

一伊勢物語

右此伊勢物語一冊染鈍毛畢

寬文十二壬子年　　　　從一位左大臣

林鐘吉日　　　　經孝

一百人一首抄

右百首者東野州于時左近大夫ニ逢奉キ在人文明第三發起之時予も同聽ツカフマツリシヲ其頃古今傳授半ニテ明ナラズ侍ヲ此度北路旅行ニ相共ナヒアラチ山ノ露ヲ掃老ノ坂ノ袖ヲ引志ヲ切メ然モ此和歌ノ心ヲ尋給ヒ侍レ者辭カタキ侍リテホノ〲シルシ侍者也然者外見努〲ユルスベカラズ但野州ニ逢給事侍ラバ潜ニ見セ奉難波ノ浦ノヨシアシヲ極テ伊勢ノ海ノ玉ノ光ヲアラハシ玉フベク南

文明十年四月十八日　宗祇　在判

宗歡禪師

正本三浦可足ヨリ申請之書寫之

天文十年二月日　奉勝　判

右靑山堂所藏也。

○朝鮮諺文附千字文跋

朝鮮州萬曆中教書千文字遠傳而視於日本國對州練若僧問云誰□之筆跡必卓彼先哲晋右將軍王羲之筆跡可見于時元和八歲壬戌之秋七月中元莓奄立意古人立意先生所尊譽之千字於日本武州江城隅□刊如冊

延寶三旃蒙單閼春王三月念三日長野感時東溯

○淺草觀音の鐘

淺草寺觀音大士鐘。至德四年鑄之。至德者。後小松帝之紀年也。四年秋改元嘉慶。乃嘉慶元年也。前此安房守平公雅爲武藏守。修營淺草寺。鑄大鐘一口。其鐘圓融帝永和四年十二月十三日罹回祿而鑠矣。其銘文不傳。尤可惜而已。此鐘或海譽上人所自銘。亦未可知也。書體頗古色鬱蒼。亦可愛焉。按林祭酒羅山先生神社考。永和四年罹災。嘉慶元年二月十八日。定濟上人自爲化緣疏。廣請檀越。應永初年竣其功。堂塔宮觀復舊云。余按海譽乃定濟上人之名也。上人淨家弘道之法師。時住於淺草寺。由此考之。淺草寺中古屬淨土宗也。隸於天台山者。寬永以後之例也。書肆泉亭德二親裝拓本而藏之。請跋於余。余嘗輯江戶府志。攷證及於此。因書此以與之。

文化五年戊辰六月八日北牖消暑之次擧筆識之

平公雅。將門平新王之從弟。平公連之兄也。公雅兄弟不從新王。公連諫死。時公雅爲安房守。新王滅後。公雅爲弟公連修營淺草寺而追福云。

鵬齋龜田興

興再識

〇順德院御陵

佐州に順德院の御陵あり〔五十間四方土を封じ松を植石の玉垣あり〕

一宮　島照姫之宮

二宮　玉島姫　ガクハナシ

三宮　親王大明神

像ハ池ノ藏人作也

院の御製

つかのまも身をはなたじと思ひしに波の底にもさや思ふらん

本間の子孫は奥州銀山に移住す、血脈の子孫は佐渡にあり、今井忠藏と云。

〇蓮空の歌〔幷連理〕

享保年中佐渡に蓮空といふ歌人あり、後山の百姓の隱居也。

九條殿御直し

いくよふる

千歳ふる松の雫のしたゝりてさゞ波よする志賀のから崎

連理〔享保の頃仙田龜鶴〕

こぬ秋の哀もさぞとしられけり鴫たつ澤のさみだれの頃

○大塚護國寺

大塚護國寺

仁王門護國寺の額　高良山僧正筆

本堂神齡山の額　松井拙齋筆

內陣悉地院の額　常憲院殿御筆

本堂の右にある大聖院といふ子院は、古よりの普請のまゝにて古き子院也と云。

○日蓮上人赦免狀二

日蓮法師御勘氣事所免許候者也

文永十一年二月十四日

行兼（在判）
清長（在判）
行平（在判）
光綱（在判）

藤左衛門入道殿

日蓮法師御勘氣事有御免許之由所被仰下也

早可被赦免之由候也仍執達如件

文永十一年二月十六日　兵部丞行兼（奉）

山城兵衛入道殿

文永九年四月蓮師塚原より一谷へ轉遷の時副狀のうつし本紙は一谷妙照寺にあり

此流人非可蔑從鎌倉有副狀堅

番衆可申付者也

四月三日　　　　勝利

近藤伊豫入道之

○詩聖堂詩集序〔寬翁〕

詩聖堂詩刻成。詩聖者何。杜少陵也。少陵何稱詩聖。其網羅古今。集而大成。後世作家無不取法。故謂之詩聖。堂者吾天民所築於玉池之草堂也。天民少小嗜吟咏。厭棄其世業。嶄然既見頭角。時余方開江湖社。聞風來者甚多。天民亦入社。與永日充從無絃輩。論難相切。唱酬往來。遂有所得。以成一家言云。後余笈仕越中。于役無虛歲。諸子散落。詩盟爲寒。天民鬱々不得志。北遊信越。西涉京攝。其間名山諸勝。足跡所到。題詠幾遍。皆搜奇抉怪。造詣至妙。蓋山川靈秀之氣。助成其業者也。其歸而卜居今地也。堂安少陵像。以詩聖爲稱。見所尊尙也。又自號詩佛。蓋取張南湖老杜詩中佛之語也。天民性樂易嗜酒。騷客酒人。從游甚多。又傍善書畫。最長於畫竹。當其頹然醉也。揮筆如風雨。數百十紙立就。就必題詩於其上。求乞者各飫其意而去。天民餘興未盡。所齎絹素紙扇。至盡而始罷。醉亦與之共醒。故一時文雅之家。無不有天民之詩竹。詩佛之名隆々然起。江湖社中樹赤幟於一方。實以天民爲魁首焉。今茲其門人爲梓詩集。天民來乞余序。余檢其詩。淸新和平。出於自然。甚似其爲人。蓋生平盡心於南宋三家。三家之粹。結爲之繡腸。宜哉詩佛之名。以傾動一時。余老廢。及見此盛舉。故不敢辭拙。喜而書簡首。杜少陵詩云。清詩近道要。識子用心苦。此言也取可以贊此集矣。

文化庚午春正月　　寬齋老人河世寧

○寬政十年戊午江戸人別

武藏國

武州
一人數四拾貳萬五千百貳拾四人　　豐島郡之內
　內　貳拾四萬五千七百六拾六人　男　但
　　拾壹萬九千三百五拾八人　女
　　同斷
右同斷
一人數壹萬八千六百七拾九人　　荏原郡之內
　內　壹萬三百三拾四人　男　但當午四月人數改
　　八千三百四拾五人　女　當歲以上
　武藏國
武州江府　御城下町幷寺社門前町屋共
一人數四萬八千六百四拾六人　　葛飾郡之內
　內　貳萬七千六拾三人　男　但當午四月人數改
　　貳萬千五百八拾三人　女　當歲以上
人數合四拾九萬貳千四百四拾九人
　內　貳拾八萬三千百六拾三人　男
　　貳拾萬九千貳百八拾六人　女
右者武州江府御城下豐島郡荏原郡葛飾郡之內拙者共支配町方幷寺社門前町屋男女人數書面之通御座候
以上

寛政十年五月　　　　　　　町奉行
　　　　　　　　　　　　　村上
　　　　　　　　　　　　　小田切
御勘定所

〇八丈島方言

八丈島方言俗通志

テヽ	父の事	ハア	母の事
トヽウ		カヽア	
ヲヽジ	祖父の事	タロヲジ	物領の伯父の事
シウジ	二男の伯父の事	サボウジ	三男伯父の事
シヨウジ	四男伯父の事	ゴロウジ	五男伯父の事
アセイ	兄の事	ゼイ	弟の事
アネイ	姉の事	ヲシウバ	伯父伯母の事
タロウ	惣領の子の事	ジロウ	次男の事
サボウ	三男の事	シヨウ	四男の事
ゴロウ	五男の事	ロクロウ	六男の事
ヒツテウ	七男の事	ハツテウ	八男の事

フト　男女ともに唱る（これは九男十男の外すべてフトと云トヲスは格別愛子に用唱へ候）

ニヨコ　女の惣領の事　　ナカ　二女の事
テコ　三女の事　　クス　四女の事
チイロウ　五女の事　　アツハ　六女の事
クウロウ　七女の事　　メイ○ヨウシ　甥姪の事
トンコ　はかの事　　マゴロク　どぬけた事
マハリヤド　遊びに行先の家をさしていふ　　イタリ　同上〔但樫立村に限りて唱候〕
ヨマ　隙の事　　ヨキリ　炭の火の事
セダ　似せる事　　ワセン　利倍する事
ヒヨウ○ウ　晝めしの事　　テイ○ソサ　一寸とした事
トツギ　相互に力同じき事　　デヤク　嘶する事
シヤア丶ヲガム　ことば多き事　　ヤドル　寢る事
ウガア丶ニ　先をさして云ふ事　　コカウニ　跡をさして云事
モロノツテ　共々にといふ事　　アツカヒ　あぐらかく事
ヒザマツク　居る事　　ソガアンダレ　左樣にと云事
ネツコヒ　ちいさい事　　イデン　とれといふ事
マゴヲニ　誠にと云事　　マアミニ　はやくと云事
マアミニ〳〵　早く〳〵と云事　　ヨツチイ引　添ひ事
ハツテモシヤラス　動かぬ事　　カワンタラ　そうだと云事

シャレ　のけと云事
アキラシキヤア　あいそもないと云事
ヴセ　ござれと云事
ヨワクテ　空腹の事
ノシタ　澤山喰た事
カスルナ　覺て居よと云事
ヘタ　わるい事
ボヲイ　大きな事
コシ　すくなき事
ホヲイ　せい高き事
ミジヤイ　ひくき事
ズイフン　病の重き事
ヨウナシ　いらざる事
ヨロケ　用にたゝぬ事
トウフ　洞澤の事
シク　あるく事
トマス　火を消す事
ヒヨンゲ　つまらぬ事
フツケノヽ　むら雨の事
ザレ　戯れの事

ヒヨンゲニ　何故にと云事
デロ　來れと云事〔覃按じるにデロの下來れの字疑らくは行きやれの誤りならん〕
ダヒジヒ　見事な事
カスル　忘れた事
シヨクナヒ　しらぬ事
モウニ　多き事
シヨウブ　餘計の事
ホウケシユ　重立候者の事
ウルサイ　きたなき事
マルフ　死る事
マグレル　氣絶の事
トンフ　高き所の事
ヲコル　さわぐ事
ハラクロウ　いたづらの事
コンゴニナツテ　腰の曲る事
チヨリ　快晴の事
ヅルンテ　辷る事
イロウ　人にからかふ事

イヅケ○グチスル　つげ口する事
メンサ○ナシ　了簡なしの事
フシヤウ○ナ　きたなゐ事
サガス　尋る事
シヨ〳〵ゲル　乾く事
タモウレ　くれろと云事
イテミヒ　どれみせろと云事
ヨウラ　靜にと云事
キメヒノミヘテ　はらの立事
タヒ　女經水にて他の家へ出る事
ヲツビニタツテ　うつかりと立ている事
ミシヒトヲモフ　みたくでもないと云事
ヘヽラメク　笑ふ事
ヒノヒボ　火炎の事
ナカンデイ　小座敷の事
ウイタカ　來たかと云事
ケドヮス　下水の流をいふ
マシレタ　うしのふ事
ナムテントウ　有かたき事忝なき事

ハラクリ　驚く事
ダドノツ○トツ○テイ　休ろふ事
サンマイ　捨て置と云事
マシレタ　物の見へぬ事
ウスナル　被仰と云事
ケル　くれる事
マハル　みる事
ソカンニ　そんなにと云事
タカタラ　竹にて作る籠の事
ミヨケ　絲籠の事
ツグリニシテ　絲の類を丸めて置し事をたとへていふ
挑灯に鐘　能釣合たる事
シンゲタ　尻の事
デイ　座敷の事
ヲジヤレ　お出と云事
ツヘ　家根の事
ヌスタマ　盜人の事
ヒツウスル　みへをする事
トンツムリ　山の頂の事

コシ　谷々けんそなる所の事
カヲトル　桑をとる事
メナタ　涙の事
マタラ　模様の事
ホロ　ぼろの事
ユマキ　女の二布の事
フングミ　男の下帯の事
テカ　片手小鍬の事
ヤキ　釣竿の事
ケントン　うがひ茶椀の事
カナウト　かなてこの事
ヤアヨウ　夕方の事
マヒル　正九ツ時の事
トウヤク　後刻と云事
コヾヘル　寒き事
コヾヘテ死テ　寒さたへがたき事
ソウメ　雄牛の事
ヲシヨ〇コ　小牛の事
ケネイダ　疲牛の事

ヤワ　洞穴をいふ
カ子イ　桑の花の事
ヘヒラ　衣類の事
ヨヒ　帯の事
トンサ　古き大布子の事
コシマハシ　同上
ヒボン　烟草盆の事
マカマ　鎌の事
シヤウギ　貴人の椀の事
クリ　徳利の事
トンメテ　朝の事
アサヒル　四ツ時比の事
タイサン　八ツ時過の事
ソロ／＼　後程と云事
ホドヲツテ死テ　あつさ堪がたき事
ウレシクテ死テ　甚だ嬉しき事
バメ　雌牛の事
ゾク　老牛の事
カトウ　松魚の事

アブキ　小鮑と唱へ候とこぶしの事　ヨ　魚類惣名
コナ　蠶の事　マエ　蘭の事
ヌセメ　鳶の事　シヤアトメ　鳩の事
コツコメ　腹の赤き鳥の事　チンチカラ　四十雀の事
カブナ　鷗の事　ホヲリツヽメ　畫眉鳥の事
ツヽメ　雀の事　ベヽイメ　蟷螂の事
ヘッ（）ソメ　蜻蛉の事　ナベコシキ　蚰蜒の事
ケイビヤツ　蝘蜓の事　クボナ　蜘の事
ヒイル　蝶の事　クツカワシ　蟬の事
ヅクメ　木兎の事　三ケ三日　上巳の事
五ケ五日　端午の事　七月は他國におなじ
九ケ九日　重陽の事

正月祝ことば

イチニチビ　元日の事　フツカビ　二日の事
ミツカビ　三日の事　コウニチ　九日の事
イネツミ　煩ふ事　カワソクロ　猫の事、常々はネツコメといふ
ヨメゴドノ　鼠の事　マイタマ　芋頭の事
トミサガリ　雨降る事　ヲヽフク　福茶を祝ふ事
クロヲトコ　出家の事（但正月四日前計りいふ）

死去の事　イトヒキ　女經水の事
國ガヘ

()篠本竹堂文

十二月十九日浮舟夜遊記　　篠本廉

遊跡古人者。出於欽慕也。故向之二遊。不惟吾輩。有意於古者。往々而爲之云。及至擬第三遊。則舉世無有。而唯我有焉。故是遊吾輩誇以爲天下之奇也。然當寒威可畏之時。龜手難藥之候。去安宅而纍露。不就火而赴水次。不知我者。謂我何求。其或呼爲癡者亦可。指以爲癖者亦可。爲狂人爲狗子。皆所不辭也。今錄其槩。以告同調者。十二月十九日。余歸自外。奔走終日疲甚。時已暮。忽報一二客在門。輒洗出迎。則南畝與子瓊也。未暇叙寒暄。南畝先發言曰。後赤壁。後之赤壁。乃今其期何如。先是嘗有是約也。柰世故倥傯。期至而忘其爲期。及聞此言也。以實告之。南畝曰。僕亦然。今雖憶之之晚。事尚可及。故相携來邀。余乃抜癢忘疲。欣然應之。猶人德甫二子。亦後先尋至。其當邀者。爲子寅爲士敬。將分往說。德甫曰。子寅壯夫。濟勝自許。其應此檄、必不待三寸。吾請赴之。單騎足。士敬則彊敵。當斯寒夜自非。所謂六國爲一。并力西鄉而攻者。則未易與也。一座閧然。共興向之。何謂盤珠圓活。應響乃動。士敬既退。德甫亦與子寅同來。加凡七人。相視而笑。莫逆於心。主議曰。非舟之則此舉爲無名。乃決策東向。書肆曰樂池堂。々在道左。主人乃南畝門下之出。南畝曰。彼有才幹。且在先遊之列。不可不帶之。叩門入言。々未既。攝衣而出。蓋亦奇人也。既買舟。々人理當掩口罵詈。而貌從容言温存。如知遊人意者。亦奇人也。彼其有道者乎。抑臨皐入夢者。特來佐遊事也。吁此言雖誕。推之於理。亦不可以爲必無也。於是舟中閣爐環坐。交臂接膝。煖被擁背。熱炭在前。詩戰戲謔。杯酒行其間。德市援琴弄曲。手裏舟底。流水相得洋々。嗟夫歲闌嬉游。摘名哲之遺芳。固是韵事。況同人皆錦心繡腸。耳所接皆巵言。目所得皆佳篇。以情好有味之侶。投纖塵無揚之境。窮達得喪。死生禍福。榮辱之機。

冥乎靈臺丹府之中。而一舟之外。不知復有世界也。蓋括天下之極美。并古今之至難。而在扁舟一葉之中。不亦樂乎。其脂膏瀋瀡之具。煎熬燔炙之擾。欒池主人爲之主辦事。無不先意承旨。太史公謂李陵能得人死力。雖古之名將。不能過也。今吾於南畝氏亦云。舟行元以茗溪斷崖壁立處爲限。取便于同棹也。及其在舟。夜寒漸迫。務在遮風。四窓密封。唯相枕藉于中。其閫以外之任。一付之梢公。加之氣投機孔。話頭入港。有力者負之而走。亦曾不知也。遽爾扣之則云。舟方在斜橋下。其過期所已久矣。期所則失矣。然因敗而成功。亦是一奇。更命維東。既而在大川。放乎中流。久之得月出乃還。是遊也。妙不在江山煙波。而在詩酒吟笑。不在準備得完。而在眞率辦事。蓋稱奇者三。事非凡擧。一也。人々出其不意。而無有障碍、二也。以談笑詩酒。代江山諸觀。三也。此其尤大者也。至言其席次之細。興趣之詳。則更僕亦難。前遊二次。吾不讓爲倡首。是遊則南畝實爲之盟主。且其言曰。將作之賦。意者坡老事實必將有具焉。吾則鄙俚瑣瑣。筆其末節者也耳。

右篠本竹堂先生手書三葉　杏花園所藏

此ハ篠本ノ書ニアラズ、山本政五郎ガ書也（白藤云）

○渡邊幸庵聞書の中

武州大塚護國寺の門前に一老人あり、渡邊幸庵と號す、竊に姓氏を尋るに、本國は攝津、生國は駿河、天正十年壬午歳生、寶永六己丑歳百二十八なり〔寶永八年卒此年正德改元〕渡邊攝津守昌が嫡子渡邊久三郎茂後叙爵山城守又下總守と號す、神祖台德公二代に奉仕一萬石を領す、神祖往昔初て大番三組を定らる、久三郎御番頭の一人也、神祖關東御入國後台德公へ被爲附伏見城在番幷大坂兩度御陣の供奉して軍功有之、兩公より賜御感狀、其後駿府御城代定らる時に組子之內三十郎同道す、後年大納言忠長卿へ駿河を被進時、忠長卿へ御附屬〔忠長卿は台德公の御二男童名國丸〕大猷公御時代始忠長卿故

有て御滅亡、此時に御旗本に可被召返旨上意有といへども辭退して牢々、寛永十四年島原一揆御退治之節彼地に赴き細川越中守忠利の先手に加り抜群の働あり、于時御名代松平伊豆守信綱下向聞之て感狀を與ふ、其後便船して渡唐諸州を經て四十二年在唐三十年前歸朝都鄙に徘徊、十ケ年以來武江大塚に閑居すと云、加陽の歩士杉本三丞義隣寶永之頃綱紀公に從て東武にあり、護國寺の邊に在よし、君の聽に達し義隣を遣て古事を問しむ、時々訪らひて物語を記し一卷をなして君に捧くと云。

一寶永六年丑二月十二日彼庵に音信て對面、顏容貌七旬計耳目齒とも壯年に不異、行步は不自由也と宣り、同月廿六日音信て少時對話。

一駿州淺間本尊は摩利支天也、地主は那古屋大明神也云云。

一駿河大納言樣御身代果御家來之分可被召返之旨家光公上意有之と云とも歷々は一人も立歸不申、輕き身上之者四十人被召返也、大納言樣御謀叛之有無は不知、御幼少より天下を可被讓と秀忠公御內證にて御約束有之由、然は御謀叛有間敷とも不被申也。

一幸庵老妻名は尙、戶田采女殿五代先戶田左門一西之女、左門氏鐵之姉也、父は左門に懸合たる身代也、予は惣領なれ共其時代は家督全く被仰付も不被仰付も有、予も部屋住之知行之傳にて夫より後御加增にて一萬石になる也、然共於大坂眞田平六首を捕申候、其働に合候得は御取立を不足に存居る也、予は若時餘程の强力なりし其時代の事傳へ申衆中御旗本にも多く可有之候あらつほう者にて候、具足櫃は網代組よし、大坂初の御陣に常の具足櫃多く有しが後は皆打くだき薪にせし也、槍などども枝槍の外は薪につかへて打碎て燒ける。

一駿河大納言樣御滅亡の後京都に引込、愛宕などを遊び所として切々登山いたし候、然るに島原の一揆發り西國の諸大名寄之旨承久敷陣事を不見故に慰に行申候、彼地にては細川越中守忠利殿の陣所

に居申候、是は父三齋老は台徳院様御茶湯の御師匠にて其御使は手前一人にて勤申候、手前も茶道好にて弟子に成殊之外目被懸候故かの陣に居申候、右之節越中守殿煩にて子息肥後守殿問被申候、夫を三齋心元ながり思ひて陣所へ来りて居被申候故馳走に逢心易き候数日の事に候へば何の高名も致申さず候、但し正月二日敗惣責の時城より石火矢を放し是にて各敗軍いたし其内板倉内膳正殿自餘無構城へ付被申候所大きなる石三ころび参、是に内膳殿行懸り被申何の造作もなくちぬ（じ歟）くしをつぶし申様にたをれ被申候、拙者も推續き参候へども石にも當り不申大将の事敵に首を被取てはと存指物迄落し申さず死骸を肩に懸て退申候〔此末下卷は抄出于卷四十二卷可併見〕

○古今武士鑑

古今武士鑑　京御幸町二條上ル丁　淺野久兵衛
元祿九丙子年
三月吉日　大坂高麗橋壹丁目　同　彌兵衛

○増訂采攬異言

訂正増譯　采覽異言〔夢遊秘書第一種トアリ〕
磐水大槻先生閲　江都山昌永子明増譯〔土浦侯臣山村才助〕

○岡本氏書

加茂之社務岡本治太輔紫宸殿承明門之額筆者也
九
花

書博士　〔保季之印〕

○仁齋手書落欵

論堯舜既沒邪說暴行又作　戊辰仲秋十五日伊藤維楨謹識。

伊藤仁齊手書稿本。

己巳閏正月鶩蟄前一日

○寒東院著述

寛文三癸卯年九月十三日於京都淨土宗福禪寺の住持にて七日法談する事あり、然るは此法談に日、東叡山寒東院〔天台宗也〕が作りし日蓮禁斷集也、日蓮上人一宗建立の爲に他宗を悉く誹謗し念佛無間の業禪天魔の行業眞言亡國律國賊と悪口して吐るを、寒東院悪て日蓮諸經僻見の證文共を出して破邪顯正記と云書を開板す、日蓮宗是を口惜事に思ひ諫迷論と云書を作り返答す、寒東院再ひ日蓮禁斷集を著す。

○天正水帳

天正十九年〔辛卯〕八月廿六日　〔持主川德路、、〕

武州立花郡稻毛庄　〔駒林之郷〕

〔御繩打〕　水帳

右府中宿名主次郎左衛門所持之水帳也。

○オヽウセ

オヽウセ　といふ海獸の角なり。
蝦夷語に｜チカ｜イタシバと
いふ　　｜東　｜あじかト云フ
アミシイツカより千三百里ほど東北の海にあり
エトロフ島にて此角を得しと云。

○應齋咄

應齋咄　八丈島へゆきし日記也。

○感應寺毘沙門緣起

乍恐以書付奉申上候

一森縫殿助先祖織部義安神田にて地面拜領仕光照山感應寺
致建立其後谷中へ御引替被　仰付右感應寺は縫殿助家開基之菩提所ニ候哉之事御尋ニ御座候則相調
申候處慶長元年丙申從
東照宮樣當寺開基日感神田にて地面拜領寺建立仕候夫より明曆三年丁酉類燒仕谷中へ替地被下置其
後天和三年癸亥正月寶永二年乙酉九月明和九年壬辰二月寬政十二年庚申正月類燒仕日記書物等無御
座候依之縫殿助家開基相方御座候哉聢と相知不申候右神田にて地面拜領仕候趣は正德三年癸巳日完

代之過去帳に相記有之候此段御尋に付奉申上候以上

文化六年己巳十二月　　谷中神田　感　應　寺印

寺社

御奉行所

谷中感應寺

有驗三號毘沙門天王緣起

抑此尊像者。人王五十代　桓武天王延暦年中東夷征伐御祈願之時。勅傳教大師。自刻彫焉。果靈驗速令喜叡慮。所以奉號征夷毘沙門。至　平城嵯峨淳和仁明文德清和陽成光孝宇多帝。十代天子。篤信禮尊矣。然清和帝第六皇子貞純親王。專事此尊天。祈誓爲天下安全。令我家永有將軍之德。深志之所感。不日有靈應。而汝一子授六星與四鉞兩紋。六星者法天六曜。四鉞者象所持鉾云云。其一子者。六孫王經基也。此等靈驗祈願之忠節。感達叡聞。御感之餘。以尊像賜貞純親王。仰崇彌深。自奉祈稱將軍毘沙門天王。而後傳經基。經基傳滿仲。滿仲於攝州多田莊。建立毘沙門堂。於茲貴賤男女所願。無一不滿足。參詣不分日夜成群。終舉世奉名多田毘沙門。爾來源家相傳。若赴戰場。則或裹荷母衣。或藏甲冑櫃。各臨時得軍功。不違枚舉。次第傳々奉安置。余茅屋先夜見不思議靈夢。尊天告曰。吾像納神田感應寺。應備法味云云。覺疾起。盥漱合掌平伏。謂曰先祖相傳。天下無雙之靈像。奉出於吾家。惜哉猶豫經三日。復告曰。何遲滯乎。疾可奉納云云。於茲身心驚動。而百拜懺悔。而奉賜（獻）感應寺矣。於子孫欲令無異。惜染麁毫而已。

元和九年癸亥十一月吉日　　森織部　源　義　安　書判

○私領薯蕷

延享二丑年

正月七日

一私領より薯蕷相納候村御傳馬宿差免し候而も諸入用掛り難儀之旨申候付上ケ知に致し代知可渡旨御頭衆より繪圖來る

同十日

一當月七日御頭衆より繪圖被遣候武藏國足立郡御書院番松平日向守青木市郎兵衛知行中川村中野村小菅請長谷川久三郎支配春日左門知行同國同郡中丸村薯蕷相納候に付御料に御引替被下候樣相願候に付書上之下書平四郎殿御渡被成候

同十六日

一薯蕷願伊豫守殿へ平四郎殿御上ケ被成候

會計府中ノ舊記ニ見ユ

〇李子八右衛門

根岸肥前守樣御番所へ被召出左之通

牧野備前守樣御差圖

小石川傳通院前六尺町

家主　八右衛門

一

此者義當子七拾六歲に相成候母壽高へ平日孝心を盡し尤以前は身上向も相應に暮罷在候處近頃は不如意に相成候得共母へは何事に不寄不自由無之樣手當致遣し候所壽高義去亥八月中より老病にて身骨痛打臥罷在此者晝夜付添介抱いたし何事も母之意に隨ひ給物等も好候品を自身致給させ并兩便等

之世話迄も行屆夜分は雜談噺し抔午致なでさすり爲臥此者も側にふせり介抱致し且又妻きち母にて當子五十歳に相成みつをも引取置是又實母同様に萬端差支等無之様に心付遣候孝心致候段輕き者には奇特成義に付御褒美として白銀三枚被下候間難有頂戴可致

右八右衛門母壽高煩ニ付代

清　三　郎

右同斷

一　此者養倅八右衛門孝心によつて老養扶持として一日に米五合つゝ此者生涯之内被下候間有難可奉存

右之通被仰渡難有頂戴仕候

八　右　衛　門

文化元甲子五月六日

八右衛門母壽高煩ニ付代

清　三　郎

右代八六尺町池田屋清三郎山々春風

西川　清左衛門

右呈

先生之文庫

〇元祿年中犬の御觸

元祿十五午年

覺

町方致養育置候犬前々書出候外飼犬無之候哉若書出候外有之當六月頃より紛失いたし候儀は無之候

哉町々名主共遂吟味町年寄方へ書付差出可申候以上

午八月廿一日

右御觸之趣慥に承屆申候に付町中家持は不及申借屋店がり等迄爲申聞吟味仕候處前方書上申候外に私共町方に養育仕置候犬壹疋も無御座候若隱置脇より相知申候はゝ何樣之曲事にも可被仰付候爲後日連判手形差上申候仍如件

元祿十五年午八月廿一日

御奉行所

○伊丹古錢

文化八年閏二月十八日攝州伊丹酒造古野源兵衛より差越候由新川酒問屋より伊丹七之助へ到來之書

未得尊意候得共一筆啓上仕候益御勇健に可被遊御座珍重奉存候然者先達當鄉田中より古錢五百廿貳貫文餘堀出候一件別紙に認上候通伊丹氏御軍財と申義候に付御由緣之御方も御座候はゝ御沙汰申上度奉存罷在候處御尊名承傳候間不忍止奉申上候尤段々御改も相濟此度右古錢手筋を以乍聊拜受仕候に付甚無數に候得共十五泉取添獻上仕候宜敷御披露奉希候殊に御家號御慕敷奉存候儘捧愚書爲差義も無御座候義奉恐入候恐惶謹言

伊丹南町

古野源兵衛判

閏二月三日

伊丹樣

御家老中樣〔參人々御中〕

古錢之略記

一文化元年甲子四月十七日
近衛殿御家領攝州河邊郡御園庄有岡鄉伊丹外崎村百姓五郎兵衛所持之古城と申田中より家普請之
土堀取申六尺計下より古錢出數貳萬八千五百疋餘堀出板厚一寸程之杉桶に入在之
一同二年乙丑三月廿四日同所より再度古錢貳萬三千七百五十疋餘堀出此度は南蠻燒之大壺に入有之
右□（々歟）石灰を以相納候と相見へ錢面白く毛頭腐損之錢無之尤兩度共書付類一切不相見候に付段々相
考候處右兩年共供。武永錢樂一錢も無之仍而其以前に所貯にて土中に有所四百五十年より五百年に
も可相及申候哉古錢は不殘近衛殿御寶庫へ相納り地主堀人へは當錢を以員數高に割賦被下置候右
古錢於御殿追々御改御座候所左之通
一文化元年之內より建炎元寶一錢半兩貳錢大泉五十一錢五銖三十五錢神功開寶三錢和銅貳錢其外及
九拾七八品
一文化二年之內より大曆元寶一錢半兩九錢五銖三十八錢和錢にて和銅萬壽神功隆平四品其外及都合
百品程
右兩年都合五百貳拾貳貫文餘に相成文化元年より四百四五十年之昔には定て廣大之財に可相當倩思
は文化元年より三百四十年計以前東山義政公御代寛正文明之頃我國之財用乏數を以度々大明天子へ
可渡賜旨歎望給由夫より又百年以前に當れば尙更貴事にて加程之財を貯置事平民之所爲に不可有之
深考見れは當伊丹之鄉は治承之比より天正之比迄凡四百年之間伊丹公累代居城也□姓加藤氏と稱就
中右四百四五十年之昔は康安貞治年曆にて則伊丹大和守在城に相當と云然者昔年伊丹家之軍用に相
違無之者と云云
文化辛未閏二月　攝北　古野將盈誌

伊丹君

尊前

右差越候古錢十五泉

政和通寶　聖宋元寶　明方元寶　元符背寶　皇宋通寶　政和通寶　元豊通寶　明元通寶

至元通寶　開元通寶　大觀通寶　至元通寶　嘉元通寶　嘉祐通寶　淳化通寶

〇梁田才右衛門蛻巖翁書翰寫

德島荒川先生へ答らるゝ書之内

一其元書齋の號を付て記文を作り可進旨爲仰聞其元十七歳より家業御勤被成北山壽安氏の醫術を主とし屢治驗有て自然と家産繁榮被成九間口之家御調於德島も當時流行醫三人の列に被爲入門下も四十人程有之且亦兼て經書並詩文を御好神道職原方も御學び其餘力は茶香御嗜之由委細致承知候愚意を以察し候は我等書齋の號を付並記文を作り爲仰聞候趣御書面之趣も其中に加へ其元之學術人才を稱美仕進候樣に思召と存候左樣之文を作り候は其人と數年來交り深くよく其學術人才の程も存知たる相手に仕候品に御座候我等近邦に居候へども御姓名を承候も今度始て承得御意候も僅に半日の談論にて候故此義は何とも難致候間御斷入候

一名聞を求は學者の病也と申候へ共士農工商惣て其職其藝を以名譽を望事少も不苦候其元書齋の號並記文を求らるゝも名聞心より起候へ共夫を惡敷と申にては無之候然共小成に安んじて尻を居るは大丈夫の志に非ず就夫一ツの物語を申入候豊大閤匹夫より起り日本を掌に握り朝鮮を踏壞し大明迄驚し大功業を立てさせられて後畫工に命じて尊像を寫させ其上に御詠歌の自賛あり

世の中にちと我等に似た人もがな　いきて甲斐なきことを語らん

右之掛軸伏見墨染寺に藏て有之由此御詠歌を見候に漢高祖元世祖も不及程の度量古今無雙之大英雄也我等が如き窮措大蟲蟻同然の身にても乍恐不堪感嘆奉存候其元の御書面を見申候處於德島三大醫の列に入九間口の家を持四十人の門弟を教へ餘力に茶湯香會の風流を爲御立候事揚々自得之體に相聞へ申候世俗小兒輩より申候時は成程御手柄哉と稱美可仕候大丈夫之志より觀申時は乍慮外井蛙の小兒にて御座候豊太閤之御詠歌を二三遍も吟味可被成候已と慙汗可及三斗候以上

○本町紅谷志津摩家菓子譜

蒸菓子類

品名	數	代
一琥珀餅 紅白	十ニ付	代七匁五分
一千歳飴	同	代五匁
一紅伊勢櫻	同	代五匁
一水鳥玉餅		代弐匁五分
一朝日餅		代
、養生餅	壹斤	代七匁
一輕羹	壹箱	代六匁
一外□	同	代五匁
一室の梅	十	代壹匁五分
一紅梅餅	壹本ニ付	代三匁五分
一源氏卷	同	代三匁五分
一愛敬卷	同	代三匁五分
一求肥饅頭	同	代三匁
一宇治の里	同	代三匁五分
一南京櫻 紅白ニテ		代五匁
一白鳥玉餅		代弐匁
一朝路餅	壹斤	代七匁
一雪餅	壹箱	代六匁
一山椒餅		代五匁
一白紙餅	同	代五匁
一求肥飴	壹斤	代五匁
一割水梅	同	代三匁五分
一木賊餅	同	代三匁
一若菜卷	同	代三匁

一吉野巻　同　代四匁
一黄白浮麩　十　代貳匁
一花橘　同　代三匁五分
一伊賀餅　同　代壹匁
一喜瀬綿　同　代三匁五分
一猩々餅　同　代五匁
一老松　同　代五匁
一紅巾頭　同　代六匁
一水鹿子　同　代六匁
一朝日餅　同　代六匁
一曾□餅　同　代三匁五分
一葛餅　同　代貳匁
一美貝香　十　代六匁
一椿餅　同　代貳匁五分
一時雨餅　同　代五匁
一薩摩牡丹　同　代三匁五分
一九重巾頭　同　代壹匁
一腹太餅　同　代五匁
一松の雪　同　代七匁

一水浮麩　十　代貳匁五分
一秋の山　十　代三匁五分
黄白一玉子もち　同　代貳匁
一茶山花　同　代三匁五分
一薯蕷饅頭　同　代紅六匁、白五匁
一谷つゝ路　同　代五匁
一友白髪　同　代五匁
一京鹿子　同　代五匁
一朝日饅頭　同　代五匁
一山吹饅頭　同　代三匁五分
一鼈甲餅　同　代貳匁
一水仙巻　壹本ニ付　代貳匁五分
一茶巾餅　同　代五匁
一寒椿　同　代四匁
一水山吹　同　代三匁五分
一大德寺巾頭　同　代五匁
一達摩餅　同　代五匁
一梅の雪　同　代壹匁
一黄見°友　同　代七匁

一餡ころ　同　代壹匁
一草饅頭　同　代貳匁
一大通焼　同　代貳匁五分
一小倉野　同　代五匁
一常盤木　同　代三匁
一求肥牡丹　同　代五匁
一桔梗餅　同　代五匁
一櫻羊羹　同　代壹匁
一西王翁　同　代拾匁
一西瓜香　同　代拾匁
一朝鮮飴　同　代拾匁
一水羊羹　壹箱ニ付　代拾貳匁
一金玉糖　壹斤ニ付　代拾匁
一栗羹　同　代八匁
一晒科羹　同　代六匁
一二月羹　同　代七匁
一煉羊羹　同　代六匁
道妙寺
一白きぬ田巻　十　代五分
一牡丹餅　十　代五匁

一佐賀饅頭　同　代貳匁
一見飛焼　同　代二匁
一舟焼　同　代壹匁
一駿河の里　同　代三匁五分
一高尾餅　同　代四匁
一三世の里　同　代貳匁五分
一市後餅　同　代壹匁五分
一柚餅　壹斤ニ付　代拾匁
一加勢板　同　代拾匁
一琥珀糖　同　代拾匁
一養命糖　同　代七匁
一二色羹　同　代拾匁
一瀧田羹　壹箱ニ付　代拾匁
一命長羹　同　代八匁
一鳴戸羹　同　代八匁
一薯芋羹　代七匁
一紅きぬ田巻　十　代壹匁
一鶏卵饅頭　十　代五匁
一羊羹　壹箱　代五匁

干菓子類

一輕命羅 壹斤ニ付 代拾四匁
一清海糖 同 代拾貳匁
一灌田糖 同 代拾貳匁
一錦糖 同 代拾貳匁
一九重糖 同 代拾貳匁
一東雲糖 同 代拾貳匁
一小櫻糖 同 代拾貳匁
一水葉糖 同 代拾貳匁
一龍眼糖 同 代拾貳匁
一世り水 同 代拾貳匁
一源氏糖 同 代拾貳匁
一千代結 同 代拾貳匁
一白庭砂香 同 代八匁
一寒水梅 同 代拾貳匁
一岩石 同 代拾匁
一濱千鳥 同 代六匁
一稻露 同 代八匁
一鶉卯 代八匁

一紅梅糖 同 代拾貳匁
一青柳糖 同 代拾貳匁
一金絲糖 同 代拾貳匁
一翁糖 同 代拾貳匁
一紫雲糖 同 代拾貳匁
一小原木糖 同 代拾貳匁
一築羽根 同 代拾貳匁
一茶巾糖 同 代拾貳匁
一常陸帶 同 代拾貳匁
一萬代結 同 代拾貳匁
一早蕨 同 代拾貳匁
一水庭砂香 同 代拾貳匁
一雲米香 同 代拾匁
一雪こかし 同 代拾匁
一初岩 同 代八匁
一松葉 同 代六匁
一初昔 同 代八匁
一達摩隱 同 代八匁

一東錦　同　代拾匁
一京鹿子　同　代拾貳匁
一鹽釜香　同　代五匁
一大米糖　同　代拾四匁
一生姜糖　同　代拾貳匁
一築羽根　同　代拾貳匁
一小櫻糖　同　代拾貳匁
一桂梅　同　代拾匁
一源氏松　同　代拾匁
一牡丹香　同　代貳拾匁
一源氏くるみ　同　代拾匁
一古生糖　同　代拾貳匁
一紅吹よせ　同　代拾匁
一初櫻　同　代拾匁
一澤の月（大中）　同　代六匁
一雪綠　同　代八匁
一浪の花　壹枚ニ付　代五厘ツヽ
一南京おこし　壹斤　代五匁

一東鹿子　同　代拾匁
一宇治橋　同　代拾匁
一佐野の雪　同　代六匁
一金米糖　同　代拾貳匁
一柚花香　同　代拾八匁
一水菓糖　同　代拾貳匁
一八重氷　同　代拾六匁
一宮城野　同　代拾六匁
一朝日香　同　代貳拾匁
一小原木糖　同　代拾貳匁
一古生林　同　代拾六匁
一こぼれ梅　同　代拾匁
一廿日の月（大中小）　同　代拾匁
一みどり　同　代八匁
一養老糖　同　代六匁
一若竹　同　代八匁
一最中の月　代紅貳分五リ白貳分

羊羹類增書

一菊水羹 壹箱ニ付 代拾匁　一日の出羹 同 代拾匁
一琉球羹 同 代六匁　一あられ羹 同 代七匁
一琥珀かん 同 代六匁　一鼈甲羹 同 代七匁
一三豆羹 同 代六匁　一吹寄羹 同 代拾匁
一吉野羹 代拾匁　一蕨羹 代八匁
一梅がへ羹 代八匁　一松がへ羹 代八匁
一水羊羹 代六匁　一大坂羹 代六匁
一枸杞羹 代七匁　一百合羹 代七匁
〆　本町
庚午四月十五日　紅谷志津摩
右之通に御座候得共御蒸菓子之儀は多は出來合は無御座候并御干菓子之儀はあら／＼出來合御座候尤前日に被仰付候はゞ出來仕候以上

○南市令簿書

南御所捕者帳之内書拔
南御役所石谷右近將監勤役中中御役所神尾備前守勤役中
慶安四年卯七月廿四日
一丸橋忠彌 〔御褒美 銀八枚ト刀〕 此方同心 一 疋地六左衛門
〔銀六枚ト脇差〕 同 二 堀江喜左衛門
右者御茶水之上御中間町に罷在候牢人徒黨一卷之者弓打藤四郎案內にて兩方より同心二十四人前後二

に分け参手先にて召捕申候則此方於御番所御兩所御寄合其上久世大和守殿牧野佐渡守殿御出座にて一
二之者被召出御褒美銀被下其上將監殿より一ノ手へ時服二ツ二之手へ同壹被下候

同夜

一河原十郎兵衛　〔御褒美銀八枚〕　〔此方同心〕　一　吉野六太夫
　　　　　　　　〔同六枚〕　〔備前守殿同心〕　二　高田安太夫

同夜

十郎兵衛親
一同苗勘右衛門　〔同　同斷〕　〔同心〕　一　成瀬彌五左衛門
　　　　　　　　〔　　同斷〕　〔備前殿同心〕　二　矢野彌次兵衛

右者候丸橋忠彌徒黨一卷之者忠彌被召捕候同夜御鹽硝藏にて召捕申候に付御褒美銀被下此方同心へ將
監殿より時服被下候

慶安四年卯九月十三日夜

一三宅平六　〔此方同心〕　一　成瀬彌五左衛門
　　　　　　〔同〕　二　笹岡源右衛門

一同人小者小兵衛　〔此方〕　一　菊地源左衛門
　　　　　　　　　〔備前殿〕　二　染矢市郎兵衛

一土岐與左衛門小者權之助　〔此方〕　一　稻河新右衛門
　　　　　　　　　　　　　〔同〕　二　中田平右衛門

一志江又十郎　〔此方〕　一　中嶋七郎右衛門
　　　　　　　〔備前殿〕　二　渡邊六郎左衛門

一戸次庄右衛門

一林戸右衛門

〔備前殿〕 一 神谷四郎右衛門

〔此方〕 二 松本五左衛門

〔此方〕 一 堀江喜左衛門

〔備前殿〕 二 湯淺市郎左衛門

〔手負 此方〕 山村與左衛門

吉野六太夫

田中安左衛門

〔深手 同〕 井出市右衛門

〔備前殿〕 橋本喜兵衛

間米彌右衛門

右者忠彌徒黨一巻之者三宅平六儀は土岐與左衛門相宿にて芝久右衛門町貳丁目に住居藤江又十郎戸次庄右衛門林戸右衛門此三人者芝札之辻三丁目に罷在候由訴人有之前手二手に分け雙方より同心二十四人召捕に參初手に平六を捕申候與左衛門は欠落いたし候間平六與左衛門兩人之者を目明しにいたし三人之者之所へ捕に參候處芝札之辻にて三人之者に行逢又十郎庄右衛門兩人召捕候處林戸右衛門刀をぬき後詰之中へ切込大勢に手を負せ申候を召捕申候御褒美銀百枚出申候を五十枚つゝ兩方へ分け一二丼手負之者に御褒美之高下在之割被下候撿使は與力差添罷越候

御用覺帳之内書抜〔此帳面ハ與力當番所之内〕

町奉行 〔南〕 嶋田出雲守

〔中〕 松平與右衛門

〔北奉行所ハ無之元祿十一年より〕

延寶八年申四月十日

嚴有院樣御代

一今日於二丸酒井雅樂頭殿御茶被獻堺町土佐淨瑠璃次郎三郎操有之就　上覽右爲役人與力頭方より拾人熨斗目袷上下着同心二十人上下着右與力同心共中番役にて出る與力は草履取壹人挾箱持壹人明ケ七時分番所へ出夫より月番出雲守殿へ參上仕候得は與力頭方より貳人雅樂頭殿へ致伺公關友之助呼出し座之者共　御城へ入候刻限之儀可承合旨御差圖有之ゆへ友之助に右之趣申談町年寄藤左衛門彥右衛門儀座之者共引連雅樂頭殿中之口に相詰罷在候に付刻限之御差圖承右兩人に座之者共爲繰出與力同心共に二ツに分ケ役者共之前後に立二丸へ參上御門入抔は兩御頭之判形之札を銘々持參土佐次郎三郎并貳人之手下者共次に長持等持之人足迄右同樣門札にて通る人足は歸し晝時分より大手下馬腰懸迄爲詰置夫より樂屋より左右有之二丸內へ參町年寄手代引連罷出萬事差引樂屋は與力同心相勤御徒目付相加り萬端不作法無之樣申付畢而罷歸候節之儀も朝罷出候節之通

延寶八年申四月十八日

同斷

一今日於二丸稻葉美濃守殿御茶被獻御能有之其上堺町放下師右近就　上覽爲役人頭方より與力二人出雲守殿方よりも同斷熨斗目袷上下着同心六人上下着明六半時頃御番所へ出御門札六枚受取夫より西丸下馬へ罷越美濃守殿屋敷へ同心貳人遣し町年寄奈良屋市右衛門へ懸合四時美濃守殿御家來和田角兵衛　御城へ入候案內之由にて座之者拾七人長持五ツ人足二十人に爲持市右衛門差添下馬まで來候に付與力同心彼者共召連二丸へ參上樂屋隣小屋に罷在御能八半時過る頃引續放下師出し候樣與右衛門

殿出雲守殿御差圖有之與力并町年寄市右衛門座之者共召連御舞臺之内樂屋迄罷出放下師御前へ罷出放下九番有之相濟七半時頃座之者共召連歸る

延寶八申八月廿五日

同斷

一新藤勾當被爲　召候旨土井能登守殿出雲守殿へ被仰渡勾當を與力同心染袷麻上下着召連　御城中之口迄引連與力は御廊下へ上り坊主衆を以内藤若狹守殿并御目付衆へ申込勾當は御殿へ上り平家二句語之由夜四半時退出

延寶八申年四月廿七日

嚴有院樣御代

一二丸へ　渡御大久保加賀守殿御茶被獻爲御慰堺町永閑淨瑠璃次郎三郎操就　上覽有之取計方四月十八日放下師　上覽之節之通

一延寶九酉二月十七日於評定所松平越後守殿家來小栗美作岡島壹岐本多七左衛門加賀爪甲斐守家來南條三左衛門伊奈左門手代共御穿鑿有之ニ付中番吉田十郎兵衛三井作太夫大中番青木清兵衛小原六左衛門野尻太郎兵衛宵番遠山甚五右衛門同心拾人ツヽ出ル同月廿二日於評定所式日御寄合総テ越後殿家來狹田主馬渡邊九十郎御穿鑿有之其後も度々御寄合有之

一延寶九酉六月廿二日評定所俄寄合有之松平越後守殿家賴永見大藏狹田主馬は八丈島岡島壹岐本多七左衛門は三宅島小栗兵庫同十藏安藤治左衛門は大島外に出家一音も大島へ流罪戸川主水を南部遠江守へ御預被仰付候大御目付内藤新五郎殿被仰渡御老中は御出座無之外之役人衆如例列座御船大將向井將監小笠原彥太夫小島助左衛門被罷出候に付越後守殿家來には與力同心付出家一音には同心貳人

相添小笠原彥太夫殿方まで指遣之候

一延寶九酉六月廿三日於評定所松平越後守殿家賴片山外記を稻葉右京殿へ中根長左衞門を水谷左京殿へ渡邊九十郎を伊東出雲守殿へ御預け野本右近林內藏之助澁美久兵衞小栗右衞門安藤平六御追放被仰付候

一同日松平越後守殿家來本多七左衞門悴八太夫同小膳八太夫は淺野式部少輔小膳は九鬼和泉守殿へ御預に成

一貞享四年卯六月廿六日秋田淡路守家來只越甚太夫同悴竹之丞五箇井山本兵助被召呼甚太夫儀生類憐之儀度々被仰出も有之處吹矢にて燕を吹候に付於淺草父子共死罪兵助は燕を吹候節差加り不屆に付八丈島へ流罪被仰付候北條安房守甲斐庄飛彈守町奉行之節

延寶七未十一月三日斷

一平井權八（年不知）此者武州於大宮原小刀賣を切殺し金銀取候者於品川磔

札　文　言

此者追はぎの本人其上宿次之證文たばかり取剩手鎖をはづし欠落仕に付て如此行ふもの也

十一月

一元祿十六年未正月廿四日之夜上富坂町同日切支丹屋敷近所に投火いたし候御詮議に付同二月十二日囑託懸り候覺

一大判二十枚是は日本橋通一丁目西角市郞右衞門同所東角作右衞門室町一丁目東角七兵衞西角新右衞門右四人之屋敷ひさし屋根之上に日數五日懸る此所前々より囑託懸り候也

一大判二十枚是は小石川傳通院門前西角吉兵衞同所東角次郞右衞門右兩人ひさし屋根之上へ懸る此所

は此度始て懸る也

一町年寄樽屋藤左衛門方へ出役之同心罷越大判五枚并四通り板に付請取之町年寄壹人宛召連場所へ懸け候但高札御文書言寫

一當正月廿四日之晝上富坂町同日晩切支丹屋敷近所に古綿又は木綿切れに火を包風烈き時分場所を考投置

右投火いたし候もの存候はゝ可申出火之元之儀入念候やうに度々相觸候處不屆之至候縱同類たりといふとも其科をゆるし御褒美として此金子被下之其上以來あたをなさゝるやうに急度可及沙汰者也　未二月

但囑託懸り候下に高札立候

一囑託懸り候所之町人共へ御金預ケ候手形之寫

差上申手形之事

大判二十枚

右者今度囑託金御懸け被成候に付落着仕候迄私共御預り置申所實正也爲後日連判手形如件

元祿十六年未十二月十二日

通壹丁目西角

市郎右衛門印

外　五人

一元祿十六年未十一月廿九日之夜牢屋類燒仕候右之節囚人共六年以前寅年牢屋類燒之例を以本所回向院へ退け申候處回向院へ火懸り申候に付本所法恩寺へ退け申候處場所不自由に付深川三十三間堂へ囚人被遣候同十二月五日御月番保田越前守殿中番所林土佐守殿被仰付三十三間堂も潮殊之外上り惣

搆も聢と無之間永々難差置寺方も似合不申其上寺も金子等被下候故御物入懸り尤町方より食たき出しも困窮にて急に御普請も出來申間敷候間小日向切支丹やしきを假牢に可相成旨罷越見分可仕旨被仰渡切支丹御奉行小幡上總助殿松前伊豆守殿へ被仰合候て罷越見分仕牢屋に可相成旨申上前方切支丹屋舖に有之候牢長屋を用其外假牢一つ拵穿鑿場賄所所々に小屋出來候御入用右子屋伊右衛門定直段積を以代三百十三兩壹分拾貳匁八分に御請負申上與力長岡金右衛門滿田市左衛門奉行にて同月廿一日出來石出帶刀へ引渡同廿三日囚人引移

一元祿十六未年十月廿三日松前伊豆守殿懸深川猿江捨子犬井埋御僉議有之其外死犬迷ひ犬等之儀に付度々御僉議有之候

虛無僧掟書之事

御入國之砌被仰渡候御掟書扣

一虛無僧之儀は勇士浪人一時之爲隱家不入守護之宗門依て天下之家臣諸士之席可定之條可得其意事

一虛無僧取立之儀諸士之外一向坊主百姓町人下賤之もの不可取立事

一虛無僧諸國行脚之節疑敷者見掛候時は早速召捕其所へ留置國領は其役人へ相渡地領代官所は其村役人へ相渡可申事

一虛無僧之儀は勇士爲兼帶自然敵杯相尋候旅行依て諸國之もの對虛無僧麁相慮外之品又は托鉢に障り六ケ敷儀出來候節は其子細相改本寺迄可申達於本寺不濟儀者早速江戸奉行所迄可告來事

一虛無僧止宿は諸寺院或驛宿村々役所に旅宿可致事

一虛無僧法閑猥に不可取者萬端可心得事

一尋者申付候節宗門諸派可抽丹誠事

一虛無僧敵討申渡もの於有之は遂吟味兼て斷本寺本寺より可訴出事
一諸士提血刀寺內へ駈込依願は其問起本可抱置若以辨舌申掠者於有之は早速可訴出事
一虛無僧常に木太刀懷劍等心掛所持可致事
一本寺宗法出置其段無油斷爲相守宗法相背もの於有之は急度宗法可行事
右之條々堅相守武門之正道不失武者修行之宗門可心得もの也爲其日本國中往來自由差免置所決定如件
慶長十九甲寅年正月
本多上野印
板倉伊賀印
本多佐渡印
虛無僧諸派

元祿十五年午十二月十六日
一麴町四丁目五郎兵衛申上候私店浪人山彥嘉兵衛と申歲五十計に相見候者身上之儀に付奧州白川へ罷越候由を申當月十四日店を立申候爲後日申上之由右之五郎兵衛五人組又右衛門同意申來候
同月同日
一同町七郎右衛門申上候私店浪人原三助と申歲五十五六に罷成候者田舍へ罷越候由當月十四日私店を立申候爲後日申上之由右之七郎右衛門五人組作右衛門同意申來候
午十二月十七日
一深川黑江町之內芥船改屋敷平兵衛申上候私店浪人西村淸右衛門と申歲五十四五同人悴同苗友右衛門と申歲二十二三罷成候者妻幷娘一人殘置去る十四日父子共致欠落候右淸右衛門儀は淺野內匠頭殿家來與田孫太夫と申友右衛門儀は同苗定右衛門と申候由承候爲後日申上候由右之平兵衛五人組與市同

意申來候
右之者諸道具改置候樣伊豆守方にて申付候
　右之妻子は親類秋元但馬守殿內寺田九兵衛請取申度旨被申候に付今朝伊豆守殿へ申上候へば相渡
　候樣仰付候由右之者共同月廿二日申來る
午十二月十七日
一本所入江町五兵衛申上候私店六左衛門と申歲五十餘に相成候もの當月十五日欠落いたし候爲後日申
　上候由右之五兵衛五人組權兵衛同意申來候
右之者諸道具改置候樣伊豆守方にて申付候
元祿十六未年四月廿七日
一淺野內匠家來
　　村松喜兵衛次男　村松政右衛門　二十三歲
　　間瀨久太夫次男　間瀨定八　二十歲
　　吉田忠左衛門次男　吉田傳內　二十五歲
　　中村勘助倅　中村忠三郎　十五歲
右四人大島へ
小笠原彥太夫殿へ御口上
浪人四人書付之通差越申候御請取可被成由並手鎖二つ進候由取次渡邊政右衛門早速彥太夫殿へ申達
御返答浪人四人被遣則請取申候手鎖二つ御貸忝存候由
是は御咄に仕候へば被仰聞候船も大き成船に仕六疊敷程に御座候四人にて緩々可仕と存候由右流人
玄關へ御呼上念比に被仰聞候
　　　　　　　　　　　　　　　　　　出役中番

植竹傳太夫
三好久兵衛
同心四人

相州鎌倉東慶寺由來並不法之夫緣切起立之事

一鎌倉東慶寺開山覺山志道和尙は北條平時宗室秋田城介義景息女にて御座候平貞時へ覺山和尙願候は乍出家之息女子之事に候は利益之種も無御座候就夫女と申候は不法之夫にも身を任せ候事も尋常に候得共女之狹き心にては風と邪之思立にて自殺抔いたし候もの有之事に候間三ケ年之間當寺に相抱何卒緣切候て身輕に成候寺法相願候由依之貞時被經　天聽に其意に任せられ候其後第五世用堂和尙は後醍醐帝之姬宮にて此節候願被成緣切女三ケ年辛勞成勤不便之儀に思召二十四ケ月を限に被成候得ば出入三年に有之候故月數御改被成候由其後第二十世天秀泰和尙は正二位右大臣豐臣秀賴公之姬君にて御座候從
權現樣依　上意御州之節十九世瓊山和尙御附弟に被成候瓊山は喜連川右兵衛督賴純息女にて御座候此節從
權現樣文を以被　仰進候は何ぞ御願之筋御座候はゞ無御心置可被仰上由被　仰進候其節御挨拶被成候は尼之義に御座候得ば別て御望も無御座候開山より之寺法無斷絶永く相立候得ば不過之儀に思召候由被仰上候得ば御望に任せ被成候由其上只今之客殿佛殿方丈門等は駿河大納言樣之御殿御引取被進候て于今有之候

一東慶寺寺法之儀元祖覺山和尙より四百四十有餘年以來只今迄に相立來り候然共猥に相抱申候儀は無御座候其譯得と遂吟味何卒如元熟緣仕候樣にと欠入女子之方へも兎や角敎化いたし候得共不致承引

覺悟極候體之女を無是非相抱其上親夫方へ其譯申遣し存寄も候はゞ其所之名主組之もの召連罷越可申候譯によりて彌相違無之候得ば緣切證文爲差出候寺法に有之候年去外に申達義有之候ものは寺へ召呼存寄再應承り其理相立候得ば自今夫婦睦敷相暮候樣に申含雙方之名主組親類共迄和談之上無別心と證文差出させ女相渡差歸申候左樣無之候得ば夫方より永く身を構はれ候て一命をも捨候樣成る者を慈悲之ため寺法を以て緣爲切申候右申上候通り非道に爲及離緣候儀には無御座候末々不熟緣と存候間永く苦み候義不便に存候間寸志之情を以寺法相勤申候

一欠入女之儀其以前は夫方より證文も不爲差出當山へ入り寺法相勤候得ば緣は切れ來候處に廿四ヶ月過候て下山仕候女へ元之夫難澁申掛及出入に候に付先年寺社御奉行永井伊賀守樣へ罷出候處に被仰付候は東慶寺々法を不存元之夫差障候義此先も不案內之ものは可有之儀に思召候に付向後親夫方へ東慶寺役者より屆いたし急度緣切狀爲差出候樣に可致段被仰付候間其以來は緣切證文取置申候

右之通東慶寺代々之留書に御座候此度指出候樣に被仰渡候付拔書仕差上申候以上

東慶寺役人
村上嘉太夫

十月

右は延享二年丑十月東慶寺役人差出候書付

松岡山東慶寺歷代記

開山覺山志道大和尙

北條平時宗室秋田城介義景息女弘安七年甲申時宗三十四歲逝去明年乙酉落飾創當山成開山祖嫌夫女入當山則斷其緣事從此時始也入寺之女三年ヲ限ル

第二世　龍海雲和尙　第三世　清澤和尙　第四世　果菴了道和尙

第五世　川堂和尙

後醍醐天皇姫宮入當山薙染受具應永三年丙子八月刻巳入寂從此時入寺之女二十四ケ月成

第六世　順宗和尚　第七世　仁芳義和尚　第八世　簡崇擇和尚

第九世　松圭杉和尚　第十世　應碙化和尚　第十一世　柑聰棠和尚

第十二世　栢室樹和尚　第十三世　靈菴○鷲和尚　第十四世　聞璋見和尚

第十五世　明玄遠和尚　第十六世　渭繼瀇和尚　第十七世　旭山暘和尚

生實御所八正院源義明息女弘治三丁巳年七月十日示寂

第十八世　瑞山祥和尚　左馬頭高基息女關東八代古河

第十九世　瓊山清和尚　右兵衛督頼純息女　喜連川

第二十世　天秀泰和尚

正二位右大臣豊臣秀頼公姫君元和元年乙卯依于東照大神君命入當山薙染正保二乙酉年二月七日示寂

第二十一世　永山榮和尚　喜連川右兵衛督尊信息女

第二十二世　玉淵盤和尚　高辻前中納言息女喜連川左兵衛督茂氏成養女入當山

右は東慶寺より指出し候書付寫

彈左衛門由緒之事〔一話一言三八卷、全、補遺並半日閑話參照〕

一私先祖攝津國池田より相州鎌倉へ罷下相勤候處長吏以下之者依爲强勢私先祖に支配被　仰付候賴朝公御證文は鎌倉若宮八幡宮へ奉納候右御書物之儀に付則別當之御書付等も御座候依之任先例於于今鎌倉八幡宮御祭禮御神輿先立之供奉長吏共烏帽子素袍或は麻上下着し相勤申候

一寅　御入國之御時私共先祖武藏府中迄罷出鎌倉より段々相勤候由緒申上候得ば御役等長吏以下支配被爲　仰付候其節小田原長吏太郎左衛門小田原氏直公之御證文を以長吏以下支配之儀奉願候得共無

御取上其御證文被　召上私先祖へ被下候其後元祿五申年下仁田村馬左衛門長吏之論に付甲州信玄公
御證文を以論仕候處其御證文御評定にて被召上私へ被下置候

一御入國之御時御馬足痛躊躇皮被　仰付御馬爲御祈禱猿引御尋之上私先祖支配之猿引召連罷出候得ば
病馬快氣仕候に依て爲御褒美鳥目頂戴仕其爲御引例毎年正月十一日
御城樣御臺所にて頂戴仕候中古より西之御丸下に從御厩御判頂戴仕御納戸方より鳥目頂戴仕候

一御入國の御時格式にて只今に至迄年始之御禮元日御老中樣へ罷上夫より段々御役所樣へ相勤申候

一從先前手下之女御關所通候節は私一判にて御留守居樣へ申上御判頂戴仕通申候

一私所持仕候印判は濃州青野原御合戰之時私先祖へ首　御預け之節集房と申文字之印判爲割符被下候
此印判于今用申候

一九十年程以前灯心挽候者
御城樣へ上燈心細工仕御扶持頂戴仕候

一燈心商之儀御仕置もの御役仕候由緒にて瀨戸物町小田原町兩辻に於て役之者六拾五人之内毎日罷出
無地代商仕來候淺草觀音市場何方に罷在商仕候共是も無地代毎年十二月市場商仕來候都て燈心細工
並商之儀從古來私一名之家業に御座候

一御役目相勤候義者御厩へ御用次第御絆綱差上申候並武藏府中御厩下總小金村御厩へ御絆綱差上申候
其外御陣太鼓時之御太鼓並御陣用之皮類御用次第差上申候

一御仕置もの御役は晒もの磔火罪獄門鋸挽文字彫耳鼻創切支丹釣し問等に御座候六十四五年以前石谷
將監樣神尾備前守樣御勤役之節武州鴻巣村にて磔三人被遣候に付御評定所にて被爲　仰付御奉書被
下撿使共私先祖へ被爲　仰付候間御傳馬申請長道具爲持相勤申候此外在々支配之內へ代々壹度宛相

廻り改候節も長道具爲持申候
一堀式部少輔樣町御奉行之節私先祖へ內記と申名被下于今內證名に用申候
一午未飢饉之時岩附町之御欠所雜物被下候大火之節御金御米頂戴仕候丸橋忠彌品川にて磔に被行候場所にて石谷將監樣より金子頂戴仕候甲斐庄飛驒守樣より似顔禮雜物頂戴仕盜賊御改方赤井五郎作樣より銀子頂戴丹羽遠江守樣より御尋もの被爲仰付召捕差上候得ば金子五兩被下候
一當五月中
大納言樣御任官爲御祝儀御米五百俵淺草御藏にて被下置則手下共へ割渡配分仕候
一御入國之御時鶴田義祐之鑓壹本御預ケ致遊壹本にては手支候間神尾若狭守樣御奉行之節御願申上候得ば兩御番所樣朱鑓之內下坂壹本宛被下候
一私支配在々長吏は無年貢之田地或は屋敷計無年貢にて田地は御年貢差上候もの數多御座候御水帳直に頂戴仕其の一村之長吏御年貢取納仕候もの御座候
一賴朝公より私先祖へ被下置候御書付之寫左之通〔本書半切ニ張付有之〕
一長吏　座頭　舞々　猿樂　陰陽師　壁塗　土鍋　鑄物師
辻目暗　非人　猿引　鉢扣　弦指　石切　土器師　放下
笠縫　渡守　山守　靑屋坪立　筆結　墨師　關守　鐘打
獅子舞　みの作　傀儡師　傾城や
右之外道之物數多附有之候是皆長吏者其上たるべし
此內盜賊之輩は長吏として可行是從
賴朝〔此所文字四五字消候て難相知候〕風呂屋湯屋は傾城之下たるべし人形舞は皆々貳十八番之下

たるべし

頼朝御判

治承四年九月日

系圖
鎌倉住人藤原頼兼弾左衛門
〔但頼兼より下は略に相見申候〕

一當時私仝支配仕候もの左之通に御座候

一長吏

一非人

一乞胸°

一猿飼

但是は御當地は私園内地面を仕切別段に住居仕頭役之もの兩人有之西　御丸下御廐へ罷出御馬御祈念仕其外諸　御屋敷樣方へ同樣罷出相勤夫々被下もの頂戴仕其外手下猿飼共は町々猿引渡世いたし步行候且又素人より猿飼仲間へ弟子入仕候儀は右頭共より私方へ申出候上差圖請身元より無構之書付取弟子に抱申候右之者素人に相成候砌は是又前書之手續にて身元より證文取素人に引渡申候其外猿飼素性之者は素人に相成候義は決て不相成掟御座候

一さゝ

一茶せん

右は關八州村々に有之候得共當時は無之

右之趣此度御尋に付奉書上候前度寫奉差上候古證文毛頭相違無御座候以上

享保十年巳九月　浅草
弾　左　衛　門

一北條時頼公之御時由井濱におゐて日蓮聖人御刑罰之節私召連罷出候役之者之内日蓮聖人を勞り候得

ば眞言之法華經五之卷一卷被致附屬于今私所持仕候此儀に付緣起等も御座候

一御上洛之節は攝津國河邊郡池田領火打村長吏八左衞門太兵衞に申付御絆綱諸事皮類御用相勤申候古來之御書付御厩御別當西之御丸下諏訪部惣左衞門樣御請取所持仕候依之御代替之節は罷下り御絆綱差上御厩へ御目見に召連罷上申候幷御上洛之御道筋におゐて皮類被爲仰付候節支配之外迄も其邊之長吏共へ私下知仕相勤申候

一先年　日光御社參之御時猴引被爲　召出御泊之　御殿にて　御上覽被爲　遊候刻私手下之猴引十貳人召連相勤申候此節は御扶持頂戴仕候伊奈半左衞門樣より奉請取候御上覽之上御持扇子頂戴仕于今所持仕候

右奉書上候通由緒書御帳面に御書加奉願上候以上

享保十年巳九月日

淺草　彈左衞門
長吏職事
法名　利阿
兩代官　四郎兵衞
同　太郎兵衞
山内　五郎兵衞

右任右大將家御判旨相模國鎌倉由井長吏賴久今利阿東八ヶ國長吏可進退もの也然而彼御文書雖奉鶴ヶ岡御寶殿籠利阿深歎仰上直召下畢依爲此同類山内彦左衞門賴助藤澤之七郎左衞門賴通何も八幡宮掃除以下役無懈怠可相勤狀如件

大永三年〔癸未〕三月廿三日　鶴岡少別當法眼良能

頼朝御判於鶴岡申請時官途也

下山内

長吏五郎左衛門

以上件々見南市令府古簿書中（辛未暮春初八於府中餘暇寫之　杏園主人）

増訂 一話一言 卷二十七

〇杉本仲温温疫論按注序

余嘗謂傷寒者外邪總名。而疫者病狀也。冬時嚴寒中而卽病者。謂之傷寒。發於春時溫暖者。謂之溫病。發於夏時暑熱者。謂之熱病。不拘春夏秋冬。長幼之病。多相類似。甚則病氣穢氣薰蒸以傳染。至乃沿門閭境萬人一齊莫不病者。謂之疫。々者猶徭役不能免也。而皆以傷寒爲稱。難經有五傷寒之目。而張長沙傷寒論所以總括外邪者。蓋有覩于斯矣。余於吳有可溫疫論。有蓄疑焉。吳氏云。溫疫者。非風非寒。非暑非濕。乃天地間別一種異氣所感。夫陰陽相盪。四時推遷。除却風寒暑濕。則無所謂氣者。但其風寒亢甚。或冬有非節之暖。夏有不時之寒。則戕賊人身。不得謂之異氣。可疑一也。又云。傷寒從皮毛入。溫疫自口鼻入。而著膜原。疫邪流行。嗅穢氣者卽病。邪自口鼻入。或有之。其著膜原與否者。鑿空臆度而已。況傷寒何以不能自口鼻入。溫疫何以不能從皮毛襲邪。吳氏又何以知其所以然邪。可疑二也。又云。臨証悉見。溫疫傷寒。百無一二。張長沙餘二百宗族。不出十年。死亡者三之二。而傷寒十居其七。何其言之氷炭相反邪。噫長沙之說果是。則吳氏之論非。可疑三也。蓋吳有可矯明季醫家溫補之弊。主張寒涼攻下。別爲一家言。是以其論過激。不覺陷於偏見耳。或曰。如子所言。溫疫論無一可取乎。曰否。吳氏用承氣湯。緩急有節。圓轉如意。可謂長沙已後一人矣。善讀善熟。以運之於理療。則可以羽翼陽明編矣。世有一等醫人。不問寒熱與虛寔。見些少腹滿。則放膽與承氣。承氣不足。繼之以紫圓。人死則曰毒已盡矣。死生吾所不知也。視之吳氏用承氣。其巧拙之異。不啻霄壤也。平安㝡里

公濟著温疫論攷注。乞叙於江都醫官粗識文字者。大田南畝介新樂閑叟。求余一言。以題卷端。取而閲之。考證詳密。鑿々可據。余也資性愚直。不能枉所見而媚人。亦不能拒其請也。乃擧平日所疑於吳氏。以爲之叙。公濟深信吳氏者。目余爲外道。罵爲野狐。以是叙畀丙火耶。將以爲佗山之石可以攻玉。刊而行于世歟。未可知也。夫長其所長。而短其所短。不因名高而眩惑。不以雷同而掩揣。則千載之下。求忠臣于吳氏之門。爲余屈一指。亦未可知也。

文化八年歲在辛未夏六月

江都侍醫法眼兼督醫學事杉本良仲温

○定林寺

除地
御書出寫　　定林寺

寺領之事

玄蕃高三石六斗六升貳合

今高合八石六升　以上

右者如田中代被下候間可有

御所務所如件

元和七辛酉二月廿六日　　松倉豊後

三池郡　定林寺

玄蕃高三石六升貳合

今高合八石六升

玄蕃高今高之譯相知不申候全八石六升にて寺務致來候當時之除地高に御座候

右之通相違無御座候以上

筑後國三池郡今山村

文化四年卯三月　　定林寺印

○天明七年番頭心得違一件

一天明七未年正月十五日水上美濃守月並出仕之節部屋にて小堀河內守申候者明後十七日大久保下やしきにて藝者寄合いたし候間美濃守亭主いたし候樣申候度々の事故不得止承知之旨致挨拶退出有之其夜水上方へ神田佐柄木町桃川山藤と申仕出し料理いたし候者小堀より差圖之由にて獻立書持參いたし候間納戸役之者へ逢申度旨申込候故納戸役之者逢候處最早深夜に付明朝參候樣申候て獻立書者留置候

一翌十六日朝五時頃水上方へ桃川手代參候處彌明十七日出會有之候間獻立之通申付候入念候之樣可致旨尤大久保下やしきにおゐて寄合之積ゆへ屋敷所附知れ次第可申遣段申聞手附金願候間則金貳兩右手代へ相渡申候扨大久保かたへ明十七日御下屋敷借用いたし度旨尤此段先達て小堀方より委細申達置事と存候段納戸役之ものより大久保納戸役之者方へ申遣候處返事に申來候は下やしき之事明十七日故障之儀有之候間御斷申候由依之小堀方へ明日藝者寄合之亭主手前にて可致哉諸事不案內に候故內々問合候之旨小堀納戸役之ものへ申遣候處大久保下やしき手狹に付斷之由何れにも下やしき體之所にて寄合致し度段尤向方より可被申越旨挨拶有之候其日水上登城能勢も登城內藤は助詰番にて登城能勢は度々催之亭主被致候故諸事相賴可成候はゞ先此度は延引致度と相賴候處小堀より能勢方へ直手紙にて藝者寄合之儀大久保下屋敷斷候故先明日は延引可致哉水上も罷出候て彼と相談致候樣にとの趣手紙參候由能勢申聞候間此節甚不手都合之時分一向に金子も出來兼候間先致延引二月末頃相

催度段吳々賴候へ共能勢內藤達て明日宅にて催し候樣申に付候はゞ明日宅にて寄合可申旨挨拶いたし內藤は退出より小堀方へ參談候由右兩人と逐相談退出有之

一同日夕方小堀より納戶役之ものを以水上へ彌明日七時より參り可申旨申來候間彌明日御出候樣挨拶申遣同日小堀水上も泊り御番にて有之御座敷內にて小堀申候は明日は忝存候彌參上可致候併何も御馳走は御無用之由申候

一正月十七日佐柄木町桃川山藤へ彌今日寄合有之候尤やしきへ七時頃何れも參候間共心得にて參り候樣申遣八時前に山藤仕出し之品持參料理人勝手働之者七八人召連參候間臺所を明渡し遣候處八時過青山邊出火有之三番町へも風筋不宜候に付道具片付土藏仕廻家內之もの立退候支度之手當山藤も可歸哉と申候然る處少々風鎭り候之故先見合候內七時頃藝者五人宰領乘物四人駕籠にて都合拾九人罷越裏門より中之口へ乘込能勢家來差圖にて參り候由申之今晚駕籠之者下宿申付給物支度も申付駕籠代壹挺に付七百文宛請取度旨申之且藝者之儀も四ツ過候はゝ一人に付座敷料壹分貳朱つゝ申請度段宰領之者申聞納戶役之もの立合何れも御客御慰に被召呼候之故入用には不拘候間何分大切に相勤可申旨申付小座敷へ通し置候

出席之分

小堀　大久保　酒井　能勢　三枝　小笠原　內藤　亭主水上

右之面々參會有之

一七時頃三枝は羽織袴にて忍ひ供にて來る間もなく內藤同樣之趣にて參り直に居間へ通し置亭主水上繼上下にて出挨拶有之兩人被申候は只今之內一獻給度よし申候故口取一つにて酒を出し藝者五人も先刻より參り候之由申候ば是へ呼候へとの事にて座敷へ出す少し間有て小笠原能勢繼上下にて參り

候則右之席へ通す

一小堀方之納戸役之もの參り水上納戸役之ものへ逢今日は出火にて此邊風筋も不宜候間御延引も可被成哉何れも樣にも未御出不被成候哉と聞合候樣小堀申付之由申候に先刻より皆樣御出被成候何卒早々御出被成候樣に及挨拶候左候はゞ早速參り候樣取計可申旨にて罷歸り候然處六半時頃迄小堀不參候間追々迎出し候樣三枝初みな〳〵度々被申候間無是非納戸役之者迎に遣候無程小堀火事羽織着之忍び供にて參り候酒井大久保追々同刻頃參り候三人共奥へ通し候客揃候間亭主上下を取候樣申に付則上下を取然處大久保之用人參り主人へ逢度由申候に付大久保家來へ逢候て大久保は早めに歸り候由に付用人を留置候て小座敷へ通し吸物酒口取等出之

一大久保は餅ぐわし小重に入持參有之尤右菓子を三枝亭主へ挾み被出候處水上酒給候中故後程給べ可申と脇に置候處大久保申候は粟まんぢうは持參不致候酒之中にても是非被給候樣申〔私云此頃粟饅頭の毒にあたりたる沙汰專らありし時也〕亭主給候跡は無禮につかみ出し藝者抔へ投付け大久保はとかく佞奸なる儀共を申懸け能勢も三枝も色々惡口雜言小堀内藤種々之雜言被申候大久保能勢三枝内藤膳部家具之類追々に打こわし爲馳走繪師壹人呼寄置候間拜領之繪具皿かざり置候處取出し四五枚打こわし水鉢猪口之類雪隱へ入被申候今日青山邊出火風筋不宜候間具足箱床脇へ出し置候處大久保能勢三枝三人にて取出し可申樣子に付御朱印等入置候段申聞候處御朱印抔は不用之ものと内藤被申候て具足は取出し不申候夫より床に有之小鳥を庭へ逃し庭に有之水仙抔を植置候鉢打こわし石臺など投出し手水鉢手拭之類迄こと〳〵く庭へ投出し椀皿猪口盃臺數々之品投出し打こわし先代拜領之手あぶり火之儘庭へ投出し飛石にてこと〳〵く打こわし此節内藤痳入居申候大久保は此酒には醬油入候哉是迄には給べ不申候由小堀は此酒は新酒くさく候と申候て給べ不申自分之宅へ酒を取に可

遣と申納戸役之もの早々取寄候て差出候都て膳部は山藤持參之道具損候品數々有之其上硝子のこつぷ一つ紛失申候度々明りをけし申候て紛失之品不相知候大久保は飯椀へ大便三枝は茶椀へ小便いたし候右飯椀之大便三枝と小笠原と兩人箸にてはさみ所々へ投出し申候大久保は亭主の脇差之柄へ吸物之味噌汁をかけ申候右之席々の障子を大久保能勢三枝內藤一所にやぶり其外器物を數々打こわし飯汁酒何に依らず蒔ちらし火鉢之火取出し疊を所々こがし申候能勢三枝膳椀の上を不構横竪へふみちらし三枝は茶座敷へ參りにじり上りより庭たゝき土へ小便をいたし手水鉢之邊へも小便たれちらし懸物をはづしもみちらし置候

一大久保は九半時頃歸り被申候內玄關より裏門歸り被申候尤暇乞之挨拶も無之川人共へ宜と計也詰居候用人を供に連歸り申候小堀能勢三枝申候は是より吉原へ參り候とて勝手用人を呼出し駕籠七挺申付候得共六挺申付呼寄せ置候亭主にも參り候樣申候處明日は對客に罷出候由申候得ば能勢三枝夫より彼是惡口雜言申候夫故吉原へ參候事は沙汰なしに相成候殘り六人之客人供之者內玄關へ相廻候處三枝申候者裏門は葬禮か持除之者より外は出入無之もの故此方は表門より歸り可申と申表門通り供を廻し玄關より歸り申候也右客人被歸候跡にて居間緣頰之邊には足袋下帶等落有之候右之通言語同斷法外之酒宴に見え申候前々より此寄合之席は右之通に候哉と山藤手代并藝者之宰領へも有樣見せ候處山藤などは此くらい之事と不存面々奉恐入候と肝をけし右之者共明七時過引取候

三千石　飯田町　小堀河內守　　六千石　山王永田町　大久保大和守
七千石　飯田町下　酒井紀伊守　　四千八石　濱町　能勢筑前守
七千五百石　小石川御門內　三枝土佐守　　四千五百石　濱町　小笠原播磨守

七千七百石　西之久保　內藤安藝守　三千石　三番町　水上美濃守

未二月廿四日　御書院番頭　小堀河内守　名代小笠原上總介

大久保大和守

御役柄不相應心得違之儀有之趣相聞古くも相勤候得ば別て可心附處無其儀不束成事に候依之御役御免差控被　仰付

御書院番頭　酒井紀伊守

西丸御書院番頭　水上美濃守

名代御徒頭　筒井內藏

御小姓組番頭　內藤安藝守

能勢筑前守

三枝土佐守

小笠原播磨守

御役柄不相應に心得違之儀有之趣相聞不束成事に候依之差控被　仰付之

右松平玄蕃頭殿御宅にて御同人被仰渡

一同四月廿九日右之面々差控　御免之旨酒井飛彈守殿御宅において被仰渡之

能勢筑前守計罷出其外名代御先手罷出候由

六歌仙

座敷へは無用の札も間にあはず小ほり／＼と鉢へ小便　河内

水上てたれちらしたる永田ばゝうき名流れてしりがくるとは　大和

三味線に能勢てけちらしふみくだき筑前わんも皿もさはちも　筑前
小笠原流かしらねどおどり子の面(ツラ)をはりまのよいお客ぶり　播磨
ぬたあへの馬鹿のぬき身を提(ヒッサ)げて障子ふすまもぶつ切た土佐　土佐
是はまあさりとはむごひ同役やわが美濃うへになりて水上　美濃

〇天明七未年米相場〔米價高直一件〕

一天明七年丁未六月廿七日米相場書上け

淺草御藏相場

一午美濃米　但〔四斗七合入　百五十六兩三分がへ〕
一同豊前米　同〔五斗壹升六合入　百五十五兩がへ〕
一同播州姫路米　同〔四斗七合入　百七十壹兩がへ〕
一加賀米　同〔四斗四合入　百五十七兩壹分がへ〕
一同丹波米　同〔四斗八升壹合入　百五十七兩壹分がへ〕
一同三州米　同〔四斗貳合入　百六十貳兩がへ〕
一同和州米　同〔三斗九升八合入　百六十五兩がへ〕
一同播州米　同〔四斗壹升入　百六十五兩がへ〕
一同美濃米　同〔四斗九升壹合入　百六十五兩がへ〕

右之通御座候以上　齋藤三右衛門印
未六月廿七日　吉田數右衛門印

一天明七丁未年五月御張紙百俵に付五拾貳兩御藏米相場百拾七兩位より百八九十兩位迄日々に上る小賣百文に三合或は貳合五勺ぐらい米商休候ものも有之依て江戸町々米屋并酒屋餅屋之類迄米所持いたし候もの共之分何ものとも不知大勢集り同月廿日夜より左之通打潰家財商物等不殘打破往來一面に引ちらし有之廿一日より小賣百文に五合外に大豆貳合づゝ添て賣候由〔十七日十八日百八十兩十九日夕二百十八兩廿日百九十五兩廿一日百八十兩百三十三兩〕

十九日晝

一大門通米屋へ大工壹人三百文持參いたし米調度旨申候處賣候米無之旨段々申募右之買手を見世之者打擲いたし候に付右買手五十人程申合同日夕方右米やへ參又々三百文米可調旨申候處最前之通申聞又候打擲いたし候體に付大勢踏込米屋之亭主引出し打殺所々へ迯去候由

一永代橋米屋も打潰し候由

廿日之夜五時頃

〔赤坂火消やしき前〕いせ屋茂兵衛　〔表傳馬町〕家數不知　〔赤坂一ツ木〕いせや甚兵衛　松屋　丸屋　餅や　和泉や　酒屋　田町三丁目貳軒　四丁目三軒　五丁目壹軒　新町新店貳軒　鈴ふりいなり前壹軒

一右之節所々火消やしきにて出火と心得出る

廿二日之夜五時過より夜明へかけ

麴町はやふさ町　加納や傳六　　四丁目裏通り　山田や金藏
五丁目　井げたや文藏　　六丁目　同　源藏
七丁目　いせや仁兵衛　　八丁目　同　吉右衛門

同　丹波や平兵衛　同　酒井や覺右衛門
同　加納屋次郎兵衛　貳丁目　松屋長兵衛
同　いせや次郎兵衛　同　遠州や仁兵衛
九丁目　近江や次助　十一丁目　松屋清兵衛
十二丁目　いせや吉兵衛　十三丁目　尾張屋甚兵衛
同　山田屋又兵衛　かうし町三丁目　和泉屋又兵衛
〔此内屋根の上へ大なるへつゝいあげ有之候を渡邊伊兵衛見候由〕
夫より淀橋水車之所迄四谷通り米屋共不殘
一市谷田町より火之番町牛込揚場通り築土傳通院前豊島や茂兵衛御用挑灯建候居見世先にて大勢手を打一向手出し不致通り候由水道町御たんす町邊米屋打潰
一市谷火之番町うなき坂下米屋土藏土戸其外隣之店戸迄打こわし有之
一同所田町通り出候所之みそ屋にて米舂候所桶共山のごとくこはし味噌大豆米等夥敷有之廿二日之朝通がけ見申候
〇蠣殼町銀座
享和元酉年七月廿日記
一銀座當是共先達て地所引替に相成候蠣殼町座方普請出來明廿一日迄座人共爲引移廿二日より右場所におゐて上納貳朱判幷通用銀改包爲致候旨銀座掛り御勘定組頭田口五郎左衛門より達來る
〇小瀬復庵書〔外國へ金銀出候事〕
一外國へ金銀出申候儀長崎一口迄のやうに皆存候へども朝鮮琉球へ毎年　公義を歴出申事有之候銀每

歳二千貫目宛朝鮮へ渡申候琉球へは八百貫目宛渡申候十ケ年に正銀貳萬八千貫目外國之貨に成申候
先年御吟味之事にて能承候に慶長以來外國へ露顯之上にて相渡候吹出銀十分之内七八分も相渡申候
金子は夫に合せ候得ば相渡候所すくなく御座候由被申候以上
十一月朔日　小瀬復庵
右名山藏書簡の中にあり〔加賀所藏白石と贈答せし小瀬氏なり〕
〇大般若經
大般若波羅密多經卷第四百一十八
應永卅四年九月廿日於武州多西郡由井鄉大幡寶生寺書畢　金剛佛子明鏝
右間宮氏所藏
〇女化原由來の荒増
水戸海道若芝宿の東大なる原ありて號て女化原と云、其廣大なる事際も見へ侍らず、其原中に僅の松山あり、大木繁りたる中に少さき稻荷の社あり、其側に女化稻荷の碑あり、往昔筑波郡栗山村大德覺右衛門といへる者、此原を通りしに、うるはしき女たゞ獨來れるに風と行逢其樣いぶかしけれど言葉がらやさしければ、我家へ連歸り妻となし家業もよのつねならずかせぎし故、夫婦中むつまじく暮しぬる中に子をまうけ、其子十二三歲の時母の姿風と狐の形に見へければ、驚き父の覺右衛門へ告しらせ候に付、母は正體目顯はされ恥ケ敷とて此原に歸り行衞しれず成候由、夫故に後年碑を建けると云施主利左衛門利の字迄は能分り候得共、跡は難讀利左衛門にて候哉、又覺右衛門の名乘に候哉、利左衛門に候はゞ覺右衛門子にて有べし分がたし右覺右衛門は今に代々覺右衛門とて顏永にて口とがりたり、狐の子孫故にや侍ると村夫の物語いぶかしけれど、其邊の者共數人の申口同じければ正說ならん

か、殊更右之碑もあり、原名も女化と云、狐の子孫もあれば慥なるべし。
右は闕宿滸中共より差越由池田正樹より借得て寫之〔庚午六月七日〕
〔寛文八年日記寫
一寛文八年申二月朔日ノ出火ノ火本ハ酒井修理大夫忠直家來阿部傳大夫ト云者也
但牛込ノ下屋敷ニ住ス
一同月四日辰ノ刻ノ出火ノ火本ハ四谷伊賀町ノ久保五郎兵衞也
一同日未ノ后刻ノ火本ハ下谷車坂修禪院也
一同日酉ノ下刻ノ火本ハ麻布山內右近大夫豊還家吉瀧兵右衞門ト云モノ也
一同月六日ノ□下刻ノ火本ハ小日向新築地小十人奥澤兵左衞門組ノ與頭青木市左衞門也
寛文八申ノ年二月朔日ノ類火ニ逢テノ狂歌
こゝかしこ尻やけさるの歳なれば居處もなく逃まはる哉
春の火の燒跡みれば犬の顏を赤めてどこへにげさるの歳
お仕置のにごれる御代の例にはながれの末に多き泥坊
あほう風土屋板倉やまとぶきうたてやみのは火事のたき付
風吹ば起つ轉びつ火の廻り夜半にや人の火事といふらん
よき土藏さすがにかけて賴むには燒るもつらし燒跡もうし
一同八年四月廿二日
於評定所式日之寄合の時
伊勢　內宮　外宮　御師　公事の捌相濟

覺

伊勢外宮師職久保倉右近と內宮師職佐八掃部就檀那論兩宮之年寄共召寄之遂穿鑿之處に外宮年寄共申は古來相傳之檀那以才覺不可奪取之旨　御朱印之御文言は兩宮通用之事候故前々奉行人以其趣裁許在之證文數通出之候內宮年寄共申候は內宮外宮御神體各々に付て右御朱印之御文言內宮は內宮仲間外宮は外宮仲間にて不可奪取との御事に候其子細は兩師職の檀那も數多在之候是を以各々之證據之由申之兩師職之儀外宮へ相尋候之處檀那信仰之上は不及是非共通にて指置候之段師職方以才覺不奪取之儀法式之由申候雙方之心得雖爲各別共以非不謂儀兩宮神慮は不可有隔候間不及異論自今以後通用各々之儀は任願主之信心或一人師職或可爲兩師但兩宮之內離古來相傳之師職新規に屬一方檀方雖在之從師職申斷之檀那に不可仕之若此趣於違背は可爲曲事右近儀宇都宮領古來相傳之檀那之由雖申之右近證文は天文十年也掃部證文は永正十一年也然ば掃部證文は三十一年以前其上兩師職之儀は爲檀那心次第之條不及異論尤可爲兩師職者守此旨至末代迄不可致違犯仍爲後證如此雙方へ成下知もの也

寬文八戊申四月廿二日

丹後（桑山）
甲斐（加賀爪）
山城（小笠原）
內膳（板倉）
但馬（土屋）
大和（久世）
美濃（稻葉）

內宮年寄

右同文書ニテ外宮年寄共へも一通渡之桑山丹後守は伊勢山田奉行加賀爪小笠原は寺社奉行跡四人は御老中也。

○藤枝外記一件

一高四千石　寄合　藤枝外記　二十八歳

京町二丁目　大菱屋　久右衛門抱遊女　綾絹　十九歳

去八月十三日豐島郡千束村百姓平右衛門宅にて相對死

外記妻　みつ　十九歳

其方儀外記遊女綾絹相對死致候段家來共申聞外記に候旨申立候ては家に障り候間家來辻團右衛門之由撿使へ可申立段用人尾崎郡兵衛申之相違申立候ては如何に可有之旨申聞候所有體申立候ては家に障り候義歷然候段申聞候共有體爲取計親類えも申聞早速可申立處無其義家斷絕致候義數數家來共申旨に任せ外記死骸を團右衛門に候由相違爲申立候段對公儀不束の儀に付依之親類共へ相渡押込申付

同人母　本光院　四十九歳

右同斷申渡

外記用人　尾崎郡右衛門
渡邊縫右衛門

右親類へ相渡押込申付者也

中小性　三　人

無構　江戸新吉原　京町二丁目　大菱屋　久右衛門
同人召仕　庄助

過料三貫文ツヽ　江戸町二丁目　清兵衛店　茶屋　彌兵衛
同人召仕　庄兵衛

無構　千東村百姓　平右衛門
家内不残

右於評定所久松筑前守曲淵甲斐守伊藤伊豫守立會筑前守申渡之。

〇法勝寺古瓦

法勝寺古瓦之記

古昔平安城之東郊白川之邊。有六勝寺。所謂法勝尊勝最勝圓勝成勝延勝是也。就中特以法勝爲第一也。其地則忠仁公良房之邸也。故號公爲白川大臣也。承暦皇帝亦居于斯。因以稱白川法皇也。後遂爲佛寺。而未詳其開基爲孰者焉。寺始名大毘盧舍那寺。僧都濟覺更名爲法勝寺。拾芥抄云。承暦元年十二月十八日供養。皇帝行幸焉。又榮花談有寺中建堂之事。則其舊者可知也。又考扶桑略記及吉記中右永昌百練等諸抄記。則寺有金堂講堂法華曼陀五大八角常行彌陀藥師不動之諸堂焉。八角九重之大浮圖。則安金色八尺五智如來。其壯觀當時大名于都下焉。其它樓觀門廡。輪々然煥々然者可想也。惜哉中葉

兵燹連年。悉皆爲烏有。而其陳迹亦漸盡矣。嗟乎陵谷之變。桑海之感、未如之何而已矣。今也岡崎邑荊棘之中。寸有諸堂之名。九重塔趾。則在于邑南之凸處。土人號塔壇也。五大堂跡。亦在其北矣。有人于斯乎。傚北村長忠。自耕于隴畝。以樂業。悠々然活計矣。固一良農也。頃者掘夫塔壇之地。而上棟一瓦。其精巧古色。實千載之物。爲法勝之瓦者。嚴乎不可疑焉。於是乎摩礲以自珍焉。人亦奇焉。其事傳播乎四方。遂王門相家以降。至好事之士。觀之以愛翫者。不翅拱璧也。長忠使觀者詩之歌之。或請書記圖畫以徵焉。積而纍々乎。於是裝飾而爲卷。經匱而藏諸。以傳于後世子孫云。

皇和天明五年乙巳春花朝江東彥根前文學伏水龍公美撰

難波正三位前大納言藤原宗城卿

法勝寺前權大納言爲家

君が代に法のすぐるゝしるしかな光さしそふ西の月かけ

中院大納言通古卿

久かたの空にも雲の殘りなくおさまれる世のみゆる月かげ

法勝寺の古瓦を月影と名づけたるを見て　　書博士保考

古にあふぎし西の月かげや今もかはらのなにのこるらん

富小路三位殿

久墜田間遺舊時。即今鋤得入新詩。化城棟宇幾爲大。片瓦不恰堪捧持。

聞說保元兵燹辰。雲樓飛閣委灰塵。尙餘片玉當時瓦。鋤得田間千古新。

右題法勝寺古瓦二絕　　白鷺堂主人書

町尻三位殿

東郡昔聞古梵宮。玉甃道譽颯林風。猶餘陶瓦西山月。斜影入歌一片工。

右題法勝寺古瓦　藤葉原草

廣橋大納言伊光卿

或人藏法勝寺古瓦一枚。遍請諸家之鑑賞。來又求予。嗚呼此瓦也埋沒于曠野之中。幾歷星霜。不欠不壞。完好以見于今。固可珍也。繇此觀之。昔時堂宇門廊之巨麗。亦可以想也。然瓦礫豈可以鄙乎。

題法勝寺古瓦　大僧正良胤

香臺古迹鴨水邊。物換星移歷幾年。拾取草間當日瓦。可憐一片至今全。

庭田中納言重嗣卿

月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人の心にそすむ

月影と名をおほせし法勝寺の古瓦を見て　甲斐權守加茂季鷹

古にかはらぬ月の影を見てかつこひかつはあほがざらめや

題廢法勝寺瓦　法東適〔妙心寺東適和尙〕

法勝何年廢。空留一片甍。蘊藏非待價。好古古人情。

遺物千秋今此傳。遙經猛火仰風烟。本云瓦礫雖無賞。亦是建安過漢年。題法勝寺古瓦隆建印

右鷲尾大納言隆建卿

觀法勝寺古瓦　觀齋

蕪寺已荒廢。古墟見狐燐。空留一片瓦。猶問昔時春。

古瓦〔長サ一尺二寸三分　幅一尺二分　厚サ前二寸五分　後八分　重サ貳貫百目〕

洛東岡崎村

一條殿御家領の地堂筋といふ處はむかし法勝寺の舊跡にて祖父以來農業を勤む、一とせ天明三癸卯年二月はからずも此古瓦を掘出す、尋常のものにしもあらねば、好事の人々にも一見におよびしかば、法勝寺の古瓦ならむとて高貴の御方々の尊覽に入奉り給りしに、めづらしとの御感を蒙、御試或御添文などし下し給、まことに身にあまり有がた恭くさを聊記し侍ぬ

天明四甲辰年　北村長忠

九條殿

法性寺古瓦

攝政殿入御覽候處珍敷品不淺御滿足之事に候仍之追而御銘可被下御沙汰に候條先方へ此旨相傳可被置もの也

鹽小路內藏權頭

天明三卯年九月　光貫書判

秦治郎太殿

有栖川樣

法勝寺の古瓦幷に記事添歌かず／＼御覽入られ珍敷物したしく御なぐさみになりまゐらせ宮樣へも御覽に入まゐらせま事に賤の男のしわざいとやさしく爲家卿の古歌も今更しのばしく跡を月影と名づけ候はゞおもしろく候半んかしかし持主の心にまかせ候へかしとぞんじまゐらせかしく

松浪

西むら

意庵さま　人々

〇佚存叢書

佚存叢書丑三番船へ買請被仰付度願眞物和解

高橋作兵衛
福田十郎右衛門

佚存叢書新照左開之數給付進館是感

計開

一前中後佚存叢書　二部　計六套

以上該銀在本船四分銀內扣算

丑三月　丑三番船具□

佚存叢書左之通爲御買館內へ御渡被下度奉願候

覺

一前中後　二部　但六套

右代銀本船四歩銀より御引取被下候

丑三月　丑三番船

附札

書面佚存叢書六部丑三番船四歩銀を以御買せ被仰付度願之趣相調候處右者是迄之直段を以追々買請被仰付候儀に付此節之儀も本船四歩銀を以一二三篇にて都合六部買請候儀願之通可被爲成御免哉に奉存候則代銀積り左之通御座候

丑三番四歩銀を以相拂候分

一佚存叢書一の篇より三の篇迄　六部
　此代銀諸雜費共貳百拾六匁八分
　　一ノ篇貳部　但壹部に付三拾三匁七分
内譯二ノ篇貳部　但同斷　三拾七匁五分
　　三ノ篇貳部　但同斷　三拾七匁貳分

野口長右衛門

丑三月廿六日　河野甚一郎

○オランウヽタン

今茲壬子秋和蘭舶上獼猴ノ族ニテ全ク人ニ似タルモノヲ齎ス、呼デ「オランウヽタン」ト云フ、余ニ其說ヲ傳フルモノ二三人アリ、而モ尚ホ未ダ聞見セザル所考索ニ由ナシ、李東璧猴族ヲ集錄セルモノ多シトイヘドモ此物ノ形狀アルモノヲ載セズ、浪華ノ蒹葭堂主人亦長崎ノ信ヲ得テ此物ノ舶來ヲキヽ、近ロ余ニ書ヲ致シテ其說ヲ問フ、余因テ和蘭諸書ヲ搜索シ偶々「ボイス」「ヨンストンス」二士ノ書中ニ於テ其圖說ヲ得讀テコレヲ詳ニスルニ、亞弗利加洲中及印度諸國ニ產ス、其地方人形ヲ爲ス猴族三種ヲ出ス、其一ヲ「オランウヽタング」、一ヲ「サーテル」、一ヲ「バヒアヽン」トイフ、「ボイス」ノ書中其圖說ヲ載ス、頃池永兎州長崎ヨリ歸リ、彼地ニテ其物ヲ目擊シタリトキヽ、タレバ往テ其親シク見ル所ヲ問フニ、和蘭書中說ク所トハ頗異ナリ、其說ニ曰ク、七月廿三日譯司中山氏ニ從テ出島舘中新加比丹某ナル者ヲ訪ヒ請テ其物ヲ見ル、着岸以來病メルコトアリトテ樊籠中ニ被覆シテ臥シ居タリ、病苦呻吟ノ聲齊シク是猴ナリ、全身毛至テ薄クコゲチヤトモ云ベキ色ナリ、長キ毛ノ間々ヨリ皮ハ灰色ニ見ユ面體稍人ニ似タレトモ目ハ上ニツキ、鼻ハ扁平ニシテ口ヘ被リ、頷

八人ノ如ク尖ラズ、手足常ノ猴ニ比スレバ稍長シテ人ニ近シ、病中ユヘ親シク見ルコトヲ得ズ、加比丹藥ヲ與ヘタレドモ得飲マザリキ、無事ノ時ハ馴擾シテ　ク人意ヲ解シ、酌ヲ取リ茶ヲ運ブ等ノ用ヲ辨ズト云フ、全體情態甚ダ猴ニ似テ人ニ遠シトナリ、此物印度地方熱國ノ產ナレバ此方ノ涼氣ニ堪ズト見ヘ病日ニ篤シテ終ニ斃ルト云フ、崎人コノモノヲ呼テ山童トイ、タルヨシ、來春進獻ノツモリニテ持渡リシヨシナリシガ遺憾ナルコトナリ、余今蘭書中所載ノ說ヲ讀ムニ精審ヲ盡サズ、且今茲船來ノモノトハ稍異ナリトイヘトモ、姑ク「ヨンストンス」ノ集說ヲ譯シ「ボイス」ニ出セル圖ヲ摸寫シ、好事家ノ問ニ答ヘ、和漢無キ所ノモノナレバ兼テ博物ノ一ニ充ツト云爾。

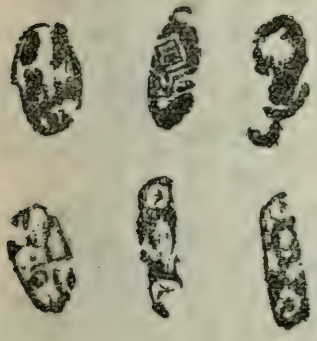
寛政壬子季冬　　晼港　磐水子述

容斯東（ヨンストンス）私獸譜第一百十五葉猴族圖說ノ條ニ麻兒計爾（マルケル）不鹿斯（ボイス）（人名）曰、猴ノ異種ニ全ク人ニ似テ行步スルモノアリ、東方諸國ニ產ス、呼テ「オラングオウタン」ト名ク、向キニ「フレデリキヘンリキ」トイヘ

三圖共出于勃伊斯韻譜

ルプンリスハン「オランギイ」〔和蘭國王ノ稱ナリ〕ニ獻ゼシコトアリ、コレ安臥刺ノ地ニ出セルモノナリ、丟里必烏斯〔人名〕ノ所謂「ホモセインヘストリユス」トイフハ此物ナリ、即「ボスメンセン」〔此翻女人〕トイフノ義ナリ、蓋一種ノ獸類ニシテ其長ケ三歳バカリノ小兒ノ如シ、體ノ太サハ其六分ノ一アリ、痩ジニテ肥厚ノモノニアラズ、就テ此物ヲ審ニスルニ其性强勇ニシテ輕捷ナリ且筋骨關節强緊ニシテ能ク負任ニ耐フ、全身スベテ滑澤アリ、其中後身ハ粗ニシテ黑毛ヲ生ズ、面貌全如人但鼻扁平ニシテ鉤曲スルノミ、且皺紋多クシテ能ク老婆ノ面色ニ似タリ、耳ハ其形甚人ニ異ナリ、牡ハ乳ナシトイフ、今所見ハ牝ナリ、胸ノ兩傍ニ乳房ヲ具ス、臍アリ、但平陷ナルノミ、手足關節屈伸ヲ爲スコト一ニ人ノ如シ、然レトモ臂ヲ膊ヘツケ指頭ヲ腕ニヨセルコトハ人ノ如ク自在ニナラヌト見ユ、指ハ拇指トモニ皆人ノ如クナレトモ甚細小ナリ、足又人ニ似テ腓腸及跟踵ナシ、然レトモ時々能ク竪行ス、唯負レ荷テ道ヲ行クトキハ跟ノナキユヘ甚進ミガタキ體ナリトイヘリ、其子ヲ生ズル常ニ一子ナリ、毎産必ズ然リトイフ、彼レ渴シテ水ヲ飲ントスルトキハ、一方ノ手ニテ耳下ヲ保持シ、一手ニテハ棒ヲツキ、腰ヲ屈メテ呑飲ス、又唇ノマハリニ粘物ツキテヌレタルトキモ右ノ如クシテ手ヲ以テ洗取ルナリ、寢ルトキハ頭ニ枕ヲ爲シ、全身ニハ物ヲ被覆スルコト亦人ノ如シ、サムバク〔地名〕王ノ說ニ、此物性勇壯戰陣ノ兵士ニ從テ能ク行走ストイフ。

又一說ニ曰、此物動モスレバ婦人ニ淫ス、故ニ誤テ婦女子ヲ盜ミ取ラル、コトアリベ。「テツリキヱス」ノ書ニ曰、此物「グイネア」ノ地ニテハ僕從ノ如クニ使フト云、或ハ臼ツカセ或ハ川ヨリ水ヲ汲セ取ルノ用ヲナストナリ、其水ヲ壺ニ汲ミイレ頭上ニ載テ速ニ家屋ノ戶前マデ持來ル、時ニヨリ其壺ヲ誤リ墮シテ打破スルコトアリ、土人呼テ「バアリス」ト云フ、多肉肥大ニシテ甚强壯ナリトナリ。

○古金畧摺

○太郎稲荷

一享和三亥年夏のはじめより、淺草中たんぼ立花左近將監殿下やしき内に太郎稲荷とて靈驗利生あらたなりとてはやりはじめ、同年冬の頃盛んに參詣群集、翌子年にいたるまでおとろふる事なし、あまり參詣多き故、後には一月に三日午の日計參詣をゆるし、他日は一向參詣禁ぜらる、されど右屋舗より切手を受たるものはいつにても參詣自由なれは手をもとめて此切手を受くるもの多し。

○叶福助

一同亥年冬より叶福助の人形流行。

○市川團十郎

古役者評判記に

市川團十郎

△此人登られたるを書事いかゞなれ共、げいよりはすぐれて名の高き事ふしぎに妙をゑたる人なれば、世上のことばにのつとつてのみ書か、諸げいあつぱれ世かい一つにあつかたまりてせむるとも此公平のうでに力はおぼゆると、うんとふんだるちから足にはけんろう地神も店がゑし、あつとこたゑし大おんはしゆみの四州もゆるぎわたりてこきびよく、むかしの坂田はおとにのみ是當代世の中の人をおびやすあら人神、天にも地にも我ひとりとその名はあなた雲の上迄かくれ御ざらぬと、つね〳〵立役のずい市河と付しもほんにくからず、石打わらんべひや水うりも談しやくのそこに付るや三升紋所是市川のもんなりとしらぬ人こそつて一人もなしと去人の云り、いか先評に書りしことくらんもゆゑば云るゝものなり、去ながらいかづちのおちゝりたるやうなあらきひやうしことにはいかなるものも

ひやうしすぐれし人とほむれ共、さしてひやうしすぐれずまにあはさるゝ故是上手なり、ぬれ事よからず、武道じつ事の愁たんにはいかなるやつこもなみだ、しかし此人のくせがつかぢるべいこづくべいといわるゝ事大にげびたり、さすが三國市川と名のる人にはさりとはにあわず、しかしたれも此人程まねたまへかし公平時宗はんくわいなどのあらき事面體に思ひ入よくつかはるゝその品妙なり、いかさま此人は佛神をいのり給ふか四座にあまたの名人有中に此人計すぐれて當ふうの人のきにかなひ給ふは扨々仕合なる人かな、他國はしらず江戸にておし（此間闕）

ずいぶんかたし、一座のうるほひしうたん名人あい役の子供立役共に袖をしぼらるゝ事多し、太刀打不得てしかし物のかしらと生れては自しん手はおろさぬものと思召にかあふかたのあく人おばにらみころし給ふとの取さた、いかさまわたなべかげきよ今川などのぐんき第一の侍となり給ひ、すり立のもみひげの様さもありつべしていに見ゆるひやうしなし、有人申けるは此人のせりふあまりゆう〳〵として毎〳〵はやきかたきに打むかい給ひておのれすいさんなるやつめが有ものかなまつたくきよしよはさらせじとかたなのつかに手をかけ給ふ間には五六町もにげのびん事心やすかるべしと云り、いやはやにくいやつめがあるものかな。

以上

此次ニ京大坂江戸來ル顏見ヨリ出ル新役者分追付出ス爲板行ノニ名計書出ス者也。

右役者付銘書之上ニ丸有之ハ無レ詳ト可レ知。

上文闕

御宇に弘法大師はじめて少人の召仕給ふと云り、中頃永祿年中になごや三左衛門と云もの、おくにと云白びやうしに密通して歌をうたはせ舞をまはせしが、佐渡島與惣次と云もの是を見ならひ初て京北

野にてふたいをかまへ、まひをまふ、是かぶきのはじまりなり、なごやが召仕に蜘六とてかろ口有、是をさるばかと云けるが、さる若と名付て今のさる若かん三郎が祖祖父是江戸かぶきの根元、是より作り狂言を仕出し、女方若衆方立役かたき役くわしや〳〵つめどうけとそれ〳〵に仕くみ諸人の心をなぐさむると云々。

作者

さかい町横通り　土佐屋與兵衛
板木屋庄右衛門開板

私云　易云天〔カミキラル〕

○あまつそら

くすしのとむらひ　かたらふを聞けば、此ごろ東のたいにもののけの侍りてをうなの髪きられたり、からやうのこと世にもおこなはれ侍るといふを、さることはをこのもの〻いひの〻しるわざにて、まことにはあらじと聞すぐし侍りし、その夜又人のとむらひて大みきくみながしけるに、いぬきがおらぬこそあやしけれと聞へければ、よべよりつぼねにありと聞ゆ、まらうどのまうで来ふにか〻るわたくしのいとなみこそうらしんめだけれと刀自がいましめをもえきかでさて有けり、よふけて刀自がつぼねへきたり人〳〵はやふしたまひぬおこともふしねといふに、おどろきていぬきもかはやへ行ければ刀自はおのがふしどにいりにけり、やゝありていぬきが聲してあはやとさけべども例の爺丸がものむさぼりに来るなめれとおどろかで、刀自はからうよりに火ともしつかしこへ行て犬きがかたへいりたる、かたへに、黒かみのおちゐたるさまを見て、すはもの〻けこそあなれとよばひけるに、おどろかれてとみにはしりつどひて引たてだれど、犬きはつや〳〵ものもえいはず、いざり出てよゝとなく、ことのやうをとひ侍れば、たゞもの〻ありてかたのあたりへさはりけるやうに覺へしほどに、身にしみておそろしと覺へけるに、はや髪はきられたりければ絶いりつとわなゝく〳〵語りける、か〻る事は野ぎ

つねなどのわざにて侍るよし、人の申ければ
　ま　きにもきつにはめけりうは玉の夜もふけぬまにおつる黒髪
右切支丹坂下七軒屋敷間宮士信所述。
　○浪花田宮氏書狀〔米市ノ一有之〕
九月六日來〔享和二年壬戌九月八日返書封〕
中元佳節之貴墨八月十七日相達忝奉拜見候先以御安泰奉恐賀候猶馬琴子出坂ニ付御樣體奉承知細書辱安堵大慶仕候日次晴雨世上風說等六月下旬無坊便七月十一日若田公御使ニ奉申上候分定て當年柄乍延着相屆可申奉察候
一如貴命畿內伊勢近江之洪水十一日便に小冊呈し申候通に御座候委者若田公御噺も可有御座其餘者省略仕候
一御番所附御圖師上梓之水難之圖漸九日夕方出來手に入申候早々可差上認申候處幸便無之今日に至申候是も昨今は書肆と論談に及申候
一世間狙之事世上に存知候古老甚稀に成相分不申候故興齋に承懸候處甚怒り剰絕交に及申候上いろいろと非を莊り候過當之儀を申候故實は先日竹田機關之口上に及申候夫を蔭より聞候て若山より古渡の鹽辛とも云可書を寄せ申候て返答に及不申よしに候故チョンガレにて返答致可申などゝ大笑ひ居申候右之次第故世間狙其まゝ奉差上候柳里恭御事抔は全松慶尼處女の時分京侍之男妾といたし天王寺村に養ひ置申候事を里恭柳氏に託し書申候よし惣て甚敷人の德を損し候書形にて野子が不好筆鋒にて御座候と乍憚御憐察可被下候
一米價別紙堂島問丸之書附入御覽候

一神事之義先書申上候ねり物番付は泉屋新兵衛より差上可申申居候故其節不獻候元飯田町の屋臺恐歎仕候

一諸事馬琴子へ傳言演舌可仕御斷被遊可被下候馬師稀之出阪にて候處滯留短く殊に知己も無御座候故諸事不行屆殺風景之事共に御座候御添書之旨にも差ひ赤面仕候漸壹兩種作文吹擧仕候誠に一奇客千載之奇偶と大悦いたし申候馬師伺公之砌可然被仰上可被下候此節馬琴子滯留中御覽之如く野子方にも儒者夫婦居候有之則十日吉日に付新宅を借家移り致申候上書林上田卯兵衛と申者へ媒仕十日の夜婚儀爲致申候て殊外大繁多に御座候處漸片時閑隙を得申候

一中秋無月漸十六日亥の下刻より快晴月光を拜し十七日又候雨にて御座候

一今曉いたち堀（立賣堀）阿波橋南詰の一軒出火仕候

一河州御普請場之堤又候切申候て瀰湖水と成申候全體之美地に愈景を增中々西湖も物かわと奉存候

一都府樓の瓦兩種馬琴子へ傳付仕候

一浪花藏屋舖へ凡八月上旬より年々豐凶を考へ御收納を計り爲登惣高を申參り候たとへば戌の秋十萬俵と申參り候へば早八月中旬より米は未着不致候へども看札御掛被成御賣出被成候　代銀之內〔敷銀貳匁八二日目代銀は十日目ニ納〕

○　○

入札
一筑紫米　三千俵
右代銀敷銀如例
月日　鴻池掛

如斯札御門に
懸り申候
大體未の下刻
札拔き也

右之通被仰出候へば千三百軒の問屋ども入札をいたし申候落札之差別

借二日目に敷銀懸可申節米下直に成候へば小望性成買は敷銀懸不申返約に及申候者有之時御門に[無敷銀米人米屋安兵衛]如斯札を張被申候共者重而入札相成不申候此者を村言にて泥龜株（スッポンカブ）と申候

借二日目に敷銀を掛十日目に代銀皆納いたし候へば別紙差上候古切手之如きもの銀と引替にいたし翌年新穀到着迄米は屋敷に御預り被成商人共勝手に出しに參り申候尤も出來米日は相場立候日也相場休日は出米も休み也

一右日限にも出しに參り不申候へば追出しと申候て日延の日限有之其日限切候へば米を藏の外へ御出しの體に成候て其藏仲仕共番をいたし申候故番賃懸り申候故に無是非出し申候樣にいたし候由

一藏に有之候節蟲附[毛入米と申候ハヤト米とも]米出來候へば御屋敷御損と成新米新登にて相渡被申

蟲入米は臨時に別入札有之御拂ひ被成商人どもへは精米にて御渡被遊候無左候ては明年御拂入札御直段に拘り候故如此御座候

一澤手米〔船にて汐懸り候米の名目なり〕一中入米（ナカイレマイ）〔北國米に有之候事なり〕俵の中にて天目の太とさに通り米に黒み出損じ申候米なり皆本國十萬俵之外に別に御拂被成跡積精米にて御渡被成候

一初の十萬俵御賣拂被成代銀御收納米切手御渡之後存の外御國元より五萬俵登り殘は不登之時は御賣出しの米切手商人共より御買戻し有之候此時御買戻し殊外高直に成申候但し御買戻し藏米計也元來空米過賣之事故白過分の直出申候此時彼高下傳申候帳合米つなぎ賣入用に御座候勿論最初より空米過賣之御積りの御方も有御座事に候

一西鶴の墓銘者馬琴子より可奉差上候

一十五省名勝志〔貳百餘卷〕有秋田屋買出し申候故御伺ひ可申候處例の大坂商人氣手代共直に市へ出し可申申候故先を承置可申殊外之美本にて御座候十六省通志と有之候帙に入有之候へども通志とは四百卷も少く御座候代金七兩位と申候御答　第吟味可仕候昨今は秋田屋之手に有之候へどもいづれ市に出し可申と申候猶追々可申上候へども今便先筆を止申候恐惶謹言

八月十八日　田宮由藏◯

尊大人

尙御用之義不相變被爲仰可被下候隨分脚まめに奔走いたし書認可申候御氣に入不申候はゞ幾度も相認可奉申上候

一墓景集何卒御拜借奉希候

一御書捨ども何卒拜領被仰付被下度候

〇享和二年童角力上覽

享和二年九月十八日

龍王　十四歲　呉羽鳥　十二歲　福鼠　十歲
亂獅子　十四歲　玉の井　十歲　〇玉芙蓉　十二歲
汐衣　十三歲　待乳山　十三歲　舞扇　十二歲
初瀨山　九歲　神樂岡　八歲　白瀧　十歲
〇川千鳥　八歲　出世奴　十歲

〔淺草ニテ〕上覽角力〔行司〕芝村源之助　拾三歲〔呼出し〕追儺金太郎　九歲

朝日山　十歲　山彥　十歲
虎王　十四歲　花の傘　十歲　〇稻妻　十二歲
赤兎馬　十四歲　初舞臺　十歲　水車　十三歲
友鶴　十二歲　角田川　八歲　大酒盛　十一歲
高見城　十歲　〇金簾　八歲　酒中花　十一歲

〇町方葬送

一町方葬送之儀に付候ては先年より度々御觸も有之候處近年心得違掛け無垢小袖數多棺へ掛け目立候類も有之哉に相聞不埒之至に候此上右體心得違之者と有之候はゞ急度被及御沙汰候事

七月

右之通奈良屋市右衛門殿被申渡候

右は當四月中坂本町宇兵衛店四郎兵衛悴三九郎妻てい葬送之節てい親元富澤町家持長右衛門と存寄申張掛無垢小袖七つ棺へ掛け葬送致候趣風聞迄に付御沙汰には不被及候得共此上右體之義有之候はゞ御咎めをも可被仰付候に付當人共へ急度可申聞段是又御同所にて被申渡候間向後右様之義有之候ては不相濟事に候間前書被仰渡候趣早々家主より店々之者共へ不洩様急度可申聞置候以上

亥八月五日　　　　　　　　名　主

享和三年癸亥なるべし富澤町家持長右衛門と有之は御屋長右衛門といふものにて今年〔文政二年己卯〕二月十九日其子鯉市郎といふもの隅田川にて盃流しをせんとて女藝者數十人にて萬歳と云屋形船にやね舟三十餘艘にて出候て向島迄參候處八丁堀官吏より親長右衛門早々向島へ參り連歸りて押込候よし一體は吉原へ參り候積のよし向島限にて濟候間雜費金三百兩程かゝり候よし

文政二年四月三日雨中書

掛無垢御觸書もはや御覽被遊候哉乍序差上申候是は坂本町小西と申酒家の嫁むすこは上京するのよし承候小袖は〔白むく二ツ緋がの子一紫かの子一緋の椒しめ一緋ぢりめんむく一茶色の中模様一〕これをかけ〔むらさき一たまご一ひぢりめん一〕のしごきにて眞中をむすび申候よし其節見候人のはなしに御座候世の中にはさまぐ\なる人も御ざ候ものに候

　　　　　　　　　　　　　　龜　屋　文　寶

〇赤松牧太

麻布芋洗板

淺野壹岐守同心友部政太郎地面

水野日向守家來松井木俣名前にて借請借宅候

浪人　赤松牧太　未九十二歳

右之者俗人之身分にて致加持異流之施餓鬼弘メ家に持傳候神佛之木像を見分いたし夫々品を附宮寺へ爲納大黑の像を爲致彫刻七福天と號諸人へ附與いたし殊に太郞七より被賴出入利運に相成候樣加持いたし候得共印無之迚取扱訴訟方伊兵衛より掛り留役へ賄賂差出候趣其外不輕事共文面に顯
公儀役人へ對し重く申掛候段及露顯致欠落右謀書女筆體に此もの認候故申譯無之致自害候旨僞之書置懷中いたし其上奉行所之吟味手違に候抔相違之儀品々箱訴可致と取計
右捨文之儀は不輕
御本丸大奥より之謀書にて
公儀を不恐致方不屆至極候伺之上安藤對馬殿御差圖にて引廻之上於品川獄門に申付るもの也

十月六日

○千家滿鰭彥

遠島　　神職　千(セン)家(ケ)滿(ミツ)鰭(ハタ)彥(ヒコ)

其方儀神道盛に被行候樣致度候得共神職共學問未熟に候間諸國巡行いたし諸人へ神道之次第說聞せ其上江戶表へ罷出神道學校取建可申旨志し雲州大社神職を隱居之上諸國徧歷いたし神道之講釋いたし信仰之者共へは本義神拜式又は神代卷等誓詞爲致候上口傳いたし誓詞宛所は儒學にて申唱候禾穗之號へ大輔之下司を書かさせ其外護符之上包へは從四位下又は神事執行之節從四位下出雲朝臣抔と相認候段不屆之儀殊に行衛不相知神職佐藤河內より認吳候迚諸人之尊信を可受と僞之綸旨所持いたし罷在其外宅內に都て恐をも不顧義等相認張置或は雲州にては致し馴候趣を以鐵漿紅粉等を相用ひ髮をも異僞に

いたし差貫を着し又は神服と唱候狩衣に紛敷品を着し烏帽子をかむり他行等致し候故諸人を迷し候致し方共上雑談に候共容易に申出間敷義共を講釋之席にて申聞せ候段不届之至に付遠島被仰付もの也

九月十八日落着

右は小田切土佐守申渡す。

○高田領淺川百姓騷動

高田御領淺川御陣屋付八萬石之百姓共大店屋并駒付役之ものへ取計ひ方にも申分有之候由にて凡八千人餘程集り右役々之もの共之家々打潰し御屆出申候五十九軒其外少しこはし候家數餘程有之趣に御座候淺川陣屋へ棚倉より三番手迄罷出白川よりも壹番貳番手迄罷越三番手は領分境迄相詰申候白川壹番手人數左之通

壹番手

物頭壹人並先手組召連　　横目壹人　　醫師壹人

此外數拾人　　〆百餘人

貳番手

郷代組足輕並同心　　代官並郷方役之もの　　醫師貳人

此外　　〆百八九拾人

三番手

番頭兩人供士付　　物頭兩人組足輕付　　長柄奉行兩人

横目　　醫師壹人　　馬廻り三拾五人

鐵砲之者四拾人　　長柄之者拾五人　　〆三百人餘

總人數〆六百人餘

右之通罷出候處百姓も鎭り引取申候滕六事三番手三拾五人之內へ被申付罷出候へ共無滯富二月七日歸足大悅仕候御安慮可被下候扨御陣屋へ百姓共罷越惡者とも貳拾三人榊原勢にて切捨に相成候其外手負人數しらず是は內々にて引取家々へ隱し置死候ものも有之哉に御座候白川勢之所へは百姓共罷出不申幷往來飛脚之者にても白川看板着用之者へは片寄り通し申候故無難にて歸鄕いたし候此節は百姓共も落付候て作に取掛り候由に御座候淺川陣屋繪圖郡平と申者寫取候儘掛御目候米味噌醬油衣類金銀之類損毛□計御座候哉見聞及候よりは大造之事にて前代未聞之大變八萬石御領分下にてたゞ壹人金山村鄕士傳左衞門と申もの計は殘され候由共上今度首尾もよき趣に相聞申候追々淺川御家中も被參候趣に取沙汰御座候何事も歸鄕間もなく無事にて歸候義爲御知申度のみ如此御座候尙跡より可申上候

二月十四日　滕六

右之通白川之家臣何之滕六と申仁より中川某と申者方へ申來候正說之寫外に麁繪圖壹枚共。

〇信州淺間山上州吾妻山一件

一大目付久松筑前守知行所より屆

乍恐以書付奉願上候

一私共村々之儀信州上州堺淺間山へ十三里之道法御座候處當春中より度々燒出し灰砂是迄降候處差て差支も無御座候然所當七月五日夜より燒甚夥敷風雨は一向無御座候得共初夥敷大山も崩る程之響虛空に鳴渡り八日夜明時に相成候得共晝夜之無差別八日朝迄灰砂降候所四時頃にも可有之や燒石如雨降來り震動相止不申八時過に至泥雨に相成共匂ひ殊の外惡敷食事も仕兼候程之義にて御座候泥砂利凡壹尺餘降積り八日夕方に至漸雷鳴相止申候中里村之義は同斷內三里程山遠く御座候に付降積候所五六寸程に御座候右之通百年餘も箇樣之大變無御座候田畑共無差別退轉同然之趣十方に暮罷在候立木竹藪は不及申野山青き物一向無御座當時馬飼料に差支甚以難澁至極之體に罷在候共上田畑灰砂利等片付候ても今年之間に合候趣には不奉存候甚歎敷奉存候八日晝迄には家出仕候義も難相成御願申上候義も難仕無是非面々家之內に寄合經文を讀み觀念仕罷在候仕合に御座候何分にも早々御見分被成下露命取續き惣百姓一同農業渡世相成候樣幾重にも奉願上候以上

天明三卯年七月九日

御知行所　上野國碓氷郡下磯部村

名主　甚　三　郎

組頭　助右衛門
百姓代　又兵衛
同國同郡上磯部村
名主　市右衛門
百姓代　佐市
同國郡馬郡中里村
名主　小左衛門
組頭　常右衛門
百姓代　源六

下磯部村　須藤傳右衛門様
田村卯右衛門様

磯部村名主甚三郎口上にて申上候覺

一江戸表へ罷出候程旅中段々泥砂薄く相見へ申候得共利根川にて承候得ば夥敷流死人之者川上より流來大木又は建家之儘川中を流れ申候私立寄見候得ば鯉鮒泥に醉所之者手取に仕候義見屆人馬夥敷相果候由及承候段申聞候

一高合千六百四十石餘

原田清右衛門御代官所

上州郡馬郡
南牧村
北牧村

川島村

合　男二千百七十人　女千二百十人
　牛馬百七十疋　家數三百六十軒

右村々近所上州吾妻山と申山有之去月中旬より淺間山燒砂降候處當八日右吾妻山抜出夥敷一度に大石砂押出右三ヶ村民家悉く打潰人馬共に利根川へ押流翌九日利根川權現堂一川江戸川へ流出候樣子大き成立木根付候儘並家居道具悉くこま〲に碎け溺死人馬共流候事前代未聞之由右川通りより注進有之候

一此間打續日照にて有之候所俄に八日泥水三四尺相增し右之通利根川流失有之候故鰍鯉どしよう鱣の類浮上り河岸へ寄千斗り手取に相成候由

一上州利根川邊所により石砂大木も押埋め歩行渡りに相成り申候

一杢之橋御關所流失の由

七月

一　　跡部大膳知行所
　上州那波郡　三ヶ村
　同邑樂郡　一ヶ村
　下野簗田郡　三ヶ村

當四月八日頃より淺間山燒出候處七月七日夕方より八月九日燒砂利灰砂等降積凡一坪に一石餘有之候青葉等一向不相見候當月二日雨少々降候儘にて其後露も置き不申候利根川水除に罷出候人數八十人程押流其內三人は木に登り助申候

一女壹人子をさゝげ流來り候に引上げ助け遣し候所二人共助命に候得共女は手足一向不相叶那波郡にて當時養ひ置申候

一外に怪我人潰家等は無之候得共作は一向當年皆無之由に御座候

一卯七月廿九日　穢多　彈左衛門

右之者申上候當四月八日より信州淺間山燒出無止事當月八日晝時頃右山燒崩れ泥水湧出燒岩流利根川押開水幅八百間程に相見泥水深さ貳拾丈程も有之上州吾妻郡原町に罷在候私手下長吏小頭八右衛門組下同郡長野原村に罷在候長吏六十壹人之內男女合四十人泥水に埋死何方へ流迯出并同郡立石村に罷在候長吏喜兵衛久作と申者居宅も押流家內十二人是又漸迯去地方役人より御代官原田淸右衛門樣へ訴上候所御見分御役人方被成御越右十二人之內男壹人に付御米貳合女壹人に付壹合つゝ日數十日露命繫候樣被仰渡被下置候由にて居村にて名主より相渡申候此外同郡神原村に罷在候私手下長吏小頭久右衛門組下四十一人之內七人迯去餘は死失仕候得共右八右衛門方より神原村へ之道筋も泥湧出通路相成不申矢文を以申越候由八右衛門私方へ訴出申候依之私方よりも御代官原田淸右衛門樣へ右御米被下置候御禮可申上と奉存候此外上州武州之內夥敷砂降或は出水にて田畑流候段所々より手下之者共訴出候得共數多之儀故難申上前書三ケ村は至て大變にて訴右之通御米被下置候義故乍恐□御訴申上候由別紙を以右之彈左衛門申來候由被仰聞候

一先達て御屆申上候信州淺間山燒候て私在所高島へ燒石砂降り共後泥水降り田畑悉く埋痛候趣左之通に御座候

高五萬六千七百二十五石五斗八升三合　群馬郡碓氷郡那波郡片岡郡綠埜郡

右之場所燒石砂六七寸一尺餘迄降り積申候

右壹萬五百五十餘石
群馬郡之內　十八ヶ村　同斷　五ヶ村
二千三百九十石餘
右之場所石砂降り積候上利根川俄に出水泥水大石等押入申候
八千百六十石餘　十三ヶ村
右之場所惣體石砂薄く御座候に付作毛可生立哉之用水堰通悉く泥押入水引無之行々川立候樣可相成樣子無御座候
一城下張番所　一ヶ所　一內潰土藏　一ヶ所
一土砂押入ル家　五十八ヶ軒　一同斷寺　貳ヶ所
右之通御座候領分不殘皆無之趣に御座候旨在所家來共申越候に付此段御屆申上候以上
七月廿三日　松平右京亮
一信州淺間山先月下旬より燒出候樣にて當月朔日別て燒强伊勢守在所上州安中へ折々燒砂降り候所同五日夕方より甚鳴響强燒砂燒岩交り雨降田畑悉く埋り皆無之趣に御座候碓氷郡群馬郡之內村々並中仙道往還之內坂本宿迄所々より燒砂岩四五尺程積り百姓家大概家根打拔き潰家等も有之候御關所並城內高札場所等は別條無御座候碓氷峠之通路無御座候未相分申候將又下總國通治郡香取郡海上郡之內去月十四日夜中より同十八日夜迄大風雨にて耕地壹丈餘之洪水にて稻草腐畑方は立枯に相成候其上當月六日より同七日夕迄折々細成る燒砂降候所同八日夜中より別て强同九日に至り依所に凡三四寸位積候て立直し可申候稻草も又々甚痛候樣子に御座候尤損毛高之儀は追て可申上候
七月　板倉伊勢守

一領分信州佐久郡淺間山當五月廿六日より燒初其後度々燒出去る六日未の刻より別て大燒麓へは大石等落震動甚敷近邊之村々住居難相成多分迯去申候尤城内別條無御座損毛等之義當秋收納之上可申上候也
　七月　　　　　　　　　　　　　　　牧野遠江守

一加州表前月中旬より折々致震動當月六日七日別て甚敷同十日朝より十一日朝迄大雨都て十四日迄降續川々悉く致出水城下侍屋敷□□町家並橋共外在家流失或は水付田畑之方へも押流人馬怪我等も有之體に御座候
一越中國も右同樣之趣にて十日より十四日迄大雨所々滿水人家橋々も致流失田畑も押流人馬怪我等も有之體に御座候得共委細之儀は未相知不申候間近々申越次第御屆可仕候先右之趣申達置候以上
　七月廿二日　　　　　　　　　　　　松平加賀守

覺
一七拾ヶ所　　郡之内橋流失　　一四十三ヶ所　所々山崩
一九ヶ所　　　同川崩　　　　　一七ヶ所　　　堺堤切
一拾四ヶ所　　土居崩　　　　　一百四十軒　　郡之内道損
一八缺　　　　町家潰家　　　　一十五軒　　　潰土藏
一八ヶ所　　　木戸流失

一居所水多押入破損有之園之塀過半地境共崩れ並侍屋敷町家不殘水多押入破損所數ヶ所御座候右私在所加州大聖寺去月廿九日より去八日迄震動甚敷同十日より十一日迄大雨暫時も相止不申一圓滿水にて破損所有增如此御座候人馬怪我等無御座候田畑損亡高之儀未相知不申候委細追て可申上候先右

之段御屆申上候以上

七月廿五日　　　　　　松平美濃守

○寛政八辰年勢州津百姓騒動

寛政八辰年十二月勢州津堀川町福田氏手紙寫

此度之義頗はに書記候事憚候故昔咄しの樣になぞらへ實事を記申候御推察御一覽尚又行燈火にて例之亂筆に認申候故思ひ出るまゝ書のべ候故相わかりがたく奉存候御はんじ御覽可被成候落字拔筆抔可有之奉存候

爰に二三ケ國を領し給ふ御大家の領主あり近年御領下困窮に付支配の役人中樣々工夫を廻らし御領下陰伐とて田畑へ障り成候樹木神社地抔構ひなく田畑陰に成候樹不殘伐捨古昔より不伐樹木抔不構伐捨候故田方は宜敷相成候地面も出來候也鄉中借付金三步利に被仰出中分以上は迷惑いたし候へども輕き者悅候故是等にては宜納罷在候然處又々工夫をいたし十八萬之內にて別て困窮之在所三拾貳ケ村へ地平均申付候まゝ是は其村之惣高を御上へ不殘召上られ百姓貧福を不分甲乙なしに平し田畑割合に作らせらるゝ趣被仰出候處甚以百姓方上下とも歸伏不仕依之大庄やを以て願出といへども御聞濟なく日を送り候處頃は極月廿六日夜南之方七八里山中より出たりと見へて百姓數多簑笠にて竹鑓やうの物を持御城下近き南之山にてかゞり火を燒近鄉之村々同心し出よ〳〵と呼はり廻り若出ずんば村端より火を付燒拂はんとのゝしり步く故無是非簑笠着し一統に出來りしかば人數は時之間雲霞の如く集り來り翌廿七日未明より時の聲を揚相圖の貝を吹しかば西の方高山（長谷川山也）にて受貝を吹かゞり火を揚北在も同じ相圖をし山の手在々より殘所なく平一面に押來南之方は辰の刻の頃城下へ入來り橋南詰迄懸ケ來る裏町邊にて鄉中懸り役人居宅相壞家財諸道具細刻微じんに打破り目も當られざる有樣也依之諸方より追々注

進擶齒を引如く御城內御用意有て御奉行所橋南へ早馬にて出られ追々御下知有之といへども大勢故早速には靜らず町家へ入來食事好し故酒食出し支度致させ家々にておそれ其上代物取候抔不怪事共也然にる今日も夕方に成しかば一先山長谷へ引退し也共夜に成しかば西南北の山々は勿論城下間近く寄來り八方のすゝき藁へ火を付しかば一面にもえ上り雲霞の大勢時の聲を揚し有樣不怪事也北は土橋之許より川原を上へ一面に火を付たる白晝に異ならず御家中には追々防ぎ役人門々堅め嚴重に備られ大手御門も閉て物頭衆御堅め有し也同日北の入口大庄や〔伊藤與左衛門〕赤塚合羽や平六藏方役人也此三人打壞し家財雜具藏々迄一ヶ所も不殘打破り衣類抔寸々に切さき斧まさかりにて柱を打たをし目も當られぬ有樣也夜に入數萬の大勢潮のわく如く寄來りしかば兩奉行所馳向はれ制し給ふといへども中々聞不入皆々瓦石つぶてを打付し故引退るゝ依之城代名代として御內の家老騎馬にて馳向へどもこは城代なるぞ方便にのるなとのゝしり是にも貪着を致さず瓦石打かけ高張挑灯先挾箱たゝきたをしうばひ取し氣色中々寄付れずされ共御上より御慈悲を以て厚く百姓御いたわりにて少しもいためられずゆへ勝にのり傍若無人の振舞語言に絕し事共也城代も恐れざる故御名代もじり〳〵橋內へ引退かれしかば彌百姓勝にのり橋を打越押寄る有樣也然處萬町口堅め西川善左衛門殿手勢にて挑灯消しくら闇に致し橋の三合目へ進兩側へ侍若黨二三拾人待請させ自身歩立にて眞先に進み勝に乘て寄來る大勢百姓ばら橫足をなぐり立〳〵高聲に呼はり此處を西川善左衛門堅め被仰付たり壹人にても押來る者あらば目に者見せんと大音にて言れしかば此勢ひに恐れ前へは行れず後は數千人大勢押來り百姓共度を失ひ彌がうへに成引退し故橋より落し者兩三人怪我人出來せり猶更此方より嚴敷備へ玉なしの大筒打しかば此音に仰天し壹人も不殘山之庵。迄引退く西川働天晴と評判いたし廿八日には彌騷動いたし町內へは入申間敷存居候奉行之下知を不用南方より亂入致し岩田橋打越極樂町にて鄉懸り役人二軒打壞し夫より山之そ

と米市場を打壊し是は〔□□彦左衛門此度郷懸り役人に加りし故也〕本通りへ出で富家へ入〔田端や也〕支度致し通り筋商家へ亂入いたし足袋手拭其外諸代物押取に致不怪らうぜき言語に絶し候其外町年寄目付庄や町會所抔打壊し候抔風分に付何れも諸道具片付老人子共抔他家へ預ケ或は寺院抔へ預け置今や／＼と待居たりされ共右三軒の外は別條なく夕方迄に又々橋外へ引退し也町家の損亡廣大成事共也偖又八丁口は右等に十倍之騷動寄手皆々强敵にて堅め之衆も大身之歷々にて備へられしといへども百姓御いたわり故十分あばれ八丁商家は勿論醫者抔迄も衣服を貪り取らうぜき甚し郡奉行騎馬にて松原に向はれしかば目さす處之敵なるぞ打取とて大勢取卷しかば是非なく門内へ引退門を閉しに大勢押來り打破らん勢ひ也依て木戶の外へ鑓抜身出し數十本にて防し故步手少し疵を蒙る者もあり此處之騷動中々言語に絶し筆紙に盡しがたき趣也依之廿八日夜御觸出し有之百姓等御いたわり之處餘り法外成致方二日は御用捨有之候共最早此上は見のがしならず町方へ亂入いたし候はゞ手ごめにいたし若手に餘り候はゞ早速役所へ訴出べしとの御觸故町中にも力を得安喜致し候依之門々出口々々のかため番頭衆歷々何れも着ごみ陣裝束くさりかたびら抜身の鑓弓鐵砲石火矢にて嚴重に備へられ再び寄來り候はゞ打取らんとの御企故此有樣聞傳へ百姓方城下は追々引退夫より郷中役人地平しとかりし者西在中にて十六七家打壊し廿九日には追々注進有之し也御郡内之騷動不怪事共にて人足町家へ被仰付濟よりも百五十人參り其外町々より晝夜役がゝり申候され共當家は御存知之通り諸役御免故一向役に出不申嗰のみ承居申候隱居へは役かゝり手前方男出し候處一日は兵糧運び一日は鑓持出候事珍事成事に御座候大晦日には大方相靜り候趣に相聞申候得共御堅めは引ケ不申追々御家中入替り／＼御務有之候也元日二日追々靜りし故諸役所も引ケ申候扨々前代未聞不怪事共にて廿七八兩日は町方の人々膽をつぶしいかゞ成事やと案じ居申候され共早速こと納り安堵仕候右有增承り合候趣書記申候委しき事は書紙に不盡

此外様々の事共有之此度一件は噂よりは實事大騒に御座候
堅め衆御名前付見申候へ共隠居に有之候故今晩間に合不申是又後便に懸御目可申候

落首　百姓は水ものまれぬ辰の幕氷奉行の張りのつよさよ
　八丁口雑生門にもさも似たりそりや茨木じや早く手を切れ
　それみたか餘りけんやく茄子ゆへにおもひも寄らぬふじの物いり
　身の上としらで寄くる簔かぶりみのきてかへれじやくは西なり

右之外色々出候得共得覺不申候おとし噺抔も追々出申候此節人寄合と右之噂のみに日を立申事に御座候他所よりは追々見舞受書翰又は人抔參り候事に御座候當八日松坂より御出被下御噺申上候事

一此度人數凡六萬位
　わら計も西郷中にて二千餘計の物燒捨候よし

○天明七未年御儉約御觸

天明七未年八月松平越中守殿御渡被成候御書付寫左之通
近年打續凶作に候處去午年關東出水にて御收納過半相減候上御救御普請并町在御救御手當も不少其外御吉凶に付て之御物入夥敷儀に付御勝手向も御差支に相成候依之去る卯年被仰出候御儉約之年限りに不拘當未年より來る酉年迄三ケ年之間御儉約之儀嚴敷被仰出候唯今迄諸向油斷は無之儀に候得共役所に出精打はまり候て御入用減方之勘辨いたし一年之御定高申上候樣可被致候唯今迄御定高は有之候ても臨時之御入用相増候儀も有之候尤年々御入用向に随ひ増減は可有之候得共只今迄之御定高に不拘何れも銘々役所限り之出精を以御定高成丈相減候様いたし置たとひ御入用筋被仰渡候ても差延可然分又は差略いたし宜筋等は聊無遠慮役所限り之存寄評議之趣申上候様可被致候役所之御入用減方勘辨之趣

早速可被申聞候右之通一役所限り之出精拗辨を以御入用減候得ば其者之勤功も別て顯れ候儀に候間厚く心懸出精可被致候惣て御手當御仕置筋等御差支無之爲めに御儉約にて候下々之困窮に相及び候は御趣意に相背申候儀に候唯々人々節儉之儀相用ひ賄賂之筋一己之私打捨て潔白之道相みがき御不益之御費無之様器董一盃に存込相勤候事御儉約之專要にて候

未八日

〇寛政元酉年再觸

去寛政元酉年九月十五日松平越中守殿京極備前守殿御渡被成候御儉約御書付寫左之通

去未年より當酉年迄三ヶ年之間御儉約被仰出候間面々幷下々迄之着服等之儀且又諸道具も見分に無構有合を用ひ可申との趣或は家督嫁娶之贈答其外振舞等之品迄三ヶ年急度可相守旨相達置候處右御儉約御年限にも相成候得共元より連年御入用相嵩候上之儀御取箇も以前よりは減少之事に取得ば急速に御勝手向御充實の儀も無之候處一統之御手當御救筋御備之儀者莫大之事付猶又來戌年より來る寅年迄五ヶ年間之間御儉約之儀被仰出候に付都て先達て相達候通相心得右年限彌無油斷節儉之儀相用可被致候

酉九月

右之通萬石以下之面々へ可被相觸候

〇同六寅年再々御觸

去寛政六寅年十月松平伊豆守殿被成御渡候御書付大目付桑原伊豫守被相達候寫

今度御儉約之儀被仰出候右に付ては御役人共猶更厚く心を用ひ惣て御入用之內不表立儀又は御慰筋は何分にも事を省或は申上候て一向に相止候様にも可仕事候勿論下之痛候儀幷御鄙吝に響候事等無之様精々心付可申儀專要に候箇様之義心得違無之様猶亦改て可申聞置旨御沙汰に候條彌思召に不違様無油

斷可被心得候

十月

去る酉年御儉約之儀被仰出當寅年御年限に候處思召之外未御勝手御繰合も不被行屆候に付猶此上來る子年迄拾ヶ年之間是迄之通御儉約被仰付候旨御沙汰に候依之面々自分勝手向之義も酉年被仰出候通彌無油斷節儉相用候樣可被致候

右之通可被相觸候

十月

○佐州地震一件

當表之儀十一月十五日至て快晴にて物靜成日に御座候處朝四つ時餘程之地震仕候得共是迄不覺強事之趣申合居候處晝八つ時頃震返し有之此節は凡建家壹尺餘も左右へ震り候樣子にて家之内には居候事相成兼家内一同庭へ出終日罷在候襖戸障子建付置候分自然と五六寸明棚は落手水鉢はゆりこぼれ鴨居貳三寸拔出し床か下束等は震倒石垣は震り崩し池水之水岡へゆり上候程にて御座候得共手前御役宅は崖近所に無之候故地面之割れ等無御座候處御役所向并同役助七郎御役宅等は崖之上故高石垣多分震崩地面ひゞ割建家片タ向候所有之同日より引續晝夜五六度程宛震候故大難儀仕候尤追々間遠に相成候得ば當月六日迄晝夜少々震氣御座候相川表之儀は右之趣に御座候處在方別て強十里越後之方小木湊迄場所佐州之船附に御座候右場所十五日兩度之地震にて家居四百五十軒程之處不殘潰候上貳百貳三拾軒程燒失いたし地面も變地いたし船掛り有之候間之内六七拾間潮干潟相成一向差汐無之變死人等も有之其外村々八九拾ヶ村之内潰家六百七八拾軒大破之家千四百軒餘有之田畑欠崩道橋損所多地面割候て土砂水押出候所是又多分有之誠に前代未聞之變事に御座候

右佐渡組頭阿久澤氏文通之由〔年號可追記〕

佐州之儀先達て一通御届申上候通當十一月十五日兩度の地震にて相川始銀山內所々破損其外在々燒失家潰家破損家燒死人横死人等有之亦は田畑用水路道橋等所々損所出來仕候に付早速支配之者差出見分爲仕取調處左之通に御座候

相川之分

一山之神教壽院拜禮所御圍ヒ板塀損シ幷石垣所々欠崩

一陣屋御役所向屋根內通其外惣圍ヒ土塀板塀損シ石垣欠崩拾。留。山損御武具藏地方役所附土藏陣屋附土藏損シ稻荷社石垣損シ作事方細工場石垣損シ地面引込

一組頭北役宅屋根幷內通り所々損圍土塀板塀損石垣欠崩地面引込土橋損シ門幷土藏大破

一南役宅屋根幷內通所々損シ石垣欠崩土藏破損

一江戸より被遣候廣間役兩人住居御役宅長屋屋根幷內通所々其外土藏破損

一奇。勝。場惣圍ヒ板塀幷長崎塀損石垣所々破損欠崩地面引込

一辰巳口番所金銀改出張役所々床屋小判所定問吹所窘鑒鏈粉成所金銀吹分所鏈置場鏈粉成所屋根幷內通所々損其外石垣所々欠崩川水路破損

一金御藏三棟所々壁ひゞ入同所御役所向屋根內通所々破損

一須灰谷山之神下戶。御米藏御雜藏幷同所御役所向屋根內通所々破損

一銅床屋屋根幷內通所々破損

一小早御船道具置場屋根破損

一牢屋惣圍柵板塀損石垣所々欠崩

一山之神大山祇社屋根破損
一地役人拜領屋敷幷町家住所々破損石垣欠崩
一町々通筋所々地面ひゞ割幷引込川通石垣所々欠崩
一寺四拾二ケ寺境內石垣幷墓所欠崩內七ケ寺建坪共所々破損
一宮一ケ所境內山崩貳社石垣欠崩

銀山內分

一川通板枠貳ケ所延長百八間餘破損　一同西枠三ケ所延長六拾五間餘破損
一同片枠三ケ所にて延長五拾貳間餘破損　一同□ヒ石垣六ケ所延長拾九間餘欠崩
一往還筋之內字甲坂落石場所一ケ所　此間數東西拾九間餘南北五間餘
落重高貳丈餘
此場所之後銀山往還筋に有之候共上板枠場所へ大石落込水堰に相成川水諸間歩水道筋へ落込差障に
相成候に付早速掛り追々一圓割取候積り
一同字宗太夫落石場所一ケ所　此間數東西七間餘南北四尺餘高五尺餘
一同字落石場所一ケ所土橋三ケ所破損　一諸間歩水道筋之內留棚拾一ケ所延長九拾四間餘
一同斷之內留棚拾七ケ所延長三百八拾二間餘

西三川金山之分

一砂金山稼所二ケ山崩　一溜井三ケ所破損
一江道筋所々欠崩並切拔候江道二ケ所潰込
在之分

一燒失家三百二拾八軒　潰家七百三拾二軒　破損家千四百二拾三軒　燒失土藏二拾三棟　潰土藏一棟破損土藏三拾七棟　潰鄕藏三棟　破損納屋二軒　田畑損地二百五ヶ所　往還道山崩川欠百十ヶ所、用水路損地百廿一ヶ所　橋二拾二ヶ所破損　田地畔欠四ヶ所　溜井破損四ヶ所　作場道石垣用水吠尻共損所六拾二ヶ所　御林地面欠崩七ヶ所　百姓持林欠崩三ヶ所　用水堰地割三ヶ所　獵船七艘破損　燒死人拾四人　横死人五人　怪我人　二人　〆

一潰家五軒　破損家二拾軒　田地損地七ヶ所　往還道崩川欠九ヶ所　用水路損所拾六ヶ所　橋五ヶ所作場道欠崩八ヶ所　御林地面欠崩一所　怪我人無御座候

加茂郡百ヶ村之內拾一ヶ村

一潰家二百八軒　破損家四百五拾七軒　破損土藏八軒　潰鄕藏二軒　田畑損地百三拾ヶ所　往還道山崩三拾八所　用水路損所三拾三ヶ所　橋二ヶ所破損　作場道損所四拾六ヶ所　御林地面欠崩六ヶ所百姓持林欠崩三ヶ所　獵船七艘破損　横死人一人　怪我人二人

是は支配之者差遣見分吟味爲致候處横死人之儀は地震にて家居震潰候節屋根下に相成卽死仕候怪我人之儀も右同樣にて怪我仕何れも外に怪我人も無御座候旨申聞候

一潰家四百五拾四軒　破損家九百拾二軒　潰土藏壹棟　破損土藏貳拾九棟　潰納屋二軒　田畑損地六拾六ヶ所　往還道山崩川欠五拾七ヶ所　橋拾四ヶ所破損　田地畔欠四ヶ所　溜井破損一ヶ所　作場道井石垣用水吠尻欠崩七ヶ所　怪我人無御座候

雜太郡百一ヶ村之內三拾六ヶ村

一惣家數四百五拾三軒之內　燒失家三百二拾八軒　潰家六拾五軒　破損家三拾四軒　燒失土藏二拾三棟　畑二ヶ所欠崩　橋一ヶ所　燒死人拾四人　横死人四人

羽茂郡小木町村

一溜井三ケ所破損　用水路損所拾七ケ所　山崩五ケ所　石垣一ケ所欠崩　用水堰地割三ケ所
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　雑太郡七ケ村
一用水路二拾九ケ所共外所々欠崩　山崩一ケ所　川欠所々　〔羽茂雑太〕兩郡之內二拾ケ村
　此譯　順德院陵一ケ所　雜太郡眞野村　社四社破損　寺二拾六ケ寺破損并境內門堂石垣等所々破損
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　同郡拾八ケ村
　寺二ケ寺破損並境內諸堂破損　羽茂郡二ケ村　寺二ケ寺燒失　同郡小木村
　寺四ケ寺燒失　寺四ケ寺破損並境內所々破損　社一社堂一宇破損　同郡

右者先達一通御屆申上候通當十一月十五日兩度之地震にて相川並銀山內其外在々損所出來仕候間早速支配之者出役申付夫々見分爲仕候處燒失家潰家破損家燒死人横死人怪我人田畑溜井用水路往還道橋山崩等仕候分書面之通御座候

　右佐州醫者叔平より借寫。

　○酒造高十分一役米御取上之義に付諸家より伺書

上杉家より酒造高十分一役米御取上被仰出候に付御伺書寫

諸民御手當の爲酒造株式之者共より酒造米之內十分一役米爲差出候樣舊臘被仰出候趣彈正大弼難有奉承知則御　書之趣國元へ申遣候得共早速酒造人共へ申付御案文通之覺書を以御屆可申上候處不案內右御達書之內分兼候所も有之且兼て御聞置を奉願度箇條も有之處麁忽に相施若も御趣意を誤候に至候ては甚以恐入候事に候猶奉伺申遣候樣在所重役共より申遣候に付條々左に御屆申上候

一今度被仰出候十分一役米之儀年限之御達無御座候一過と年々の處分兼候樣拜見仕候去戌年一過御取立之儀に御座候哉年々被召上候儀御座哉

一十分一割に內外有之候處御達御文談に元來酒之儀は酒造高少にても敢て差支無之事に候處命に拘り候米穀を潰候段畢竟は無益之儀に付酒造高之內十分一役米可差出と御座候此御文談を奉味候得ば人命に拘り候米穀無益に費し候儀を被爲厭候難有御趣意に御座候得ば譬一人十石造之者其內九石を致酒造殘一石を被召上候義と奉拜見候彌共通に御座候時は彈正大弼領分酒造人天明八年幷去々年も御屆申上置候通九十四軒此株高五千百四拾七石壹斗酒造米高壹萬七千七百五拾七石四斗九升五合此米高之十分一千七百七拾五石七斗四升九合五夕を被召上儀候と奉承知候

但去戌年分役米之儀は御免奉願候共譯は被仰出候舊臘之內早速酒造人共へ申付候時は尤以無異義事に御座候處委細は前文申上候通御達書之內分兼候處有之又は此節御聞置を奉願候も有之內麁忽早々可申渡樣無之今既に條々奉伺候體相後罷在候仕合に御座候此上假令御下知は速に下り候共酒造人共へ申渡候は夏之半にも相至り可申歟新酒夏酒既に造人過半賣拂候跡へ後れて今更去年分被召上趣申付時は覺悟之外に相成相泥可申共泥を爲唱候事に至候ては彈正大弼甚以恐入申儀殊に全造入候上に被召上候得ばおのづから外割迄に相成難有御趣意にも相叶申間敷旁去年分之儀は御免も奉願度存候併天下一統之被仰出候儀彈正大弼領分而已難被成御儀にも御座候はば無是非儀御座候間去年十分一役米之儀は酒造人共へ不申付取上置候役銀を以相納候樣にも仕度存候

一今度被召上候役米之儀は難有御備之事に御座候得ば米納に限て可申付本意に御座候處彈正大弼領分之義は數重之山にて相圍み他邦へ之運送至て不便利之地に御座候間酒造人共人馬之費用に相泥み申候仍無本意事に御座候得共多くは御但書に奉應金納之方爲致度存候且又石代納之儀は領主へ納候小物成石代同樣之直段にて取立候樣御付紙相見候處當領內には小物成石代無御座候尤物成之內古來半石半永之取立に御座候間半永之直段は則石代に御座候得共往古之定にて甚下直只今難取用御座候に

付役米代之儀は當領市中相場上米平均直段を以爲相納度存候其時々御勘定所へ可奉伺之處左候ては上納時節等の後れに相成事抔いかゞ敷存候に付豫御下知を奉得置伺度候

一天明八年中酒造米御屆高之三分一造被仰出其後寛政七年中諸國酒造之儀天明六年以前通造來候石高を以勝手次第酒造可致旨被仰出候得共其砌領內追年米直段貴領民相泥讀候付則三分一を連綿して爲造來候事に御座候處年により夏酒新酒之間酒絕候事有之候故去年中半石造申渡候事に御座候然處近年酒造人多くは相衰候付縱令米下直之年柄に御座候迚も御屆高迄には酒造仕兼半石造にて酒造人共手一杯に相見申候依之其身共身上引直候迄は先暫半石を造高に仕差置申度存候

一御料私領之內是迄酒造役冥加等　公儀へ相納候分は一同免除被仰付候旨其段可申渡旨奉承知候彈正大弼領內には酒造役冥加等　公儀へ被召上候儀無御座候

一是迄領主地頭へ酒造役冥加等取立候向も有之候はゞ右元立米銀永高酒造人軒別に書分御屆可仕旨奉承知候當領內之儀古來酒造役銀取立來申條酒造役金にして千百九兩三步餘取立申候且又酒造人向寄を以五人七人貳拾有餘人組合相定其一組之酒造米何程と相定差置候內身帶相衰造高減候者有之候ても其減候丈の造石を殘人數にて引請致酒造役銀も殘人數にて引受相納候事故酒造高軒別に書上け候ては書上之內實と相違仕候に付右組合切りに相分幾組合此石高何程右役銀何程と御屆申上候樣仕度存候

一當領內酒造進退之儀凶荒之年次に當て酒造悉皆相直禁候儀は無申迄惡作と唱米穀高直にて國民泥渋節は酒造高を爲致減少隨て隣近國之惡作にさへ酒造高爲致減少來申候依之前文申上候通酒造高增減申付候年次も可有之其節其年の造高御屆可申上候に付其造高に相當り十分一被召上被下度奉存候此旨は兼て御聞置被下度奉存候

一今度被仰出候御囲米之儀は其向寄にて積置諸民御手當に可被當行旨の御達に御座候得ば當領分後年若旱澇或凶荒にて國民之危急に及候日の御賑救も則此內に相籠候儀と難有奉承知候尤斯て災相至り候共領分限り何とか其手當の行屆程に御座候時は尤以可奉願義にも無御座候得共若々其災稍重大にて彈正大弼手切に難行屆日に至り候ては奉願にても可有之歟其節は當領より相納候石高を相考其內程と歟又は其災至大に至り候ては納高の其都合御咎を奉願ものにも可有御座候哉此等の儀は臨其時奉伺御下知次第之儀には御座候得共急に臨て彼是之御伺に事の後れに至候ては難有御惠に對奉り無勿體且飢民世話の後れを恐候儀故豫其大旨計をも心得罷在申度奉伺候

一初ヶ條奉伺候通十分一役米被召上候儀去る戌年一過之義に御座候哉年々被召上候哉然時は前文に申上候通役銀取立來候上に候得ば二重の役に相成酒造人共相泥可申若又酒價を相增候はゞ酒造人共之泥は相解可申歟左にて領民の煩に可相成然らばおのづから取立來候役銀免除可仕本意に御座候處少分之儀には御座候得共領民世話之一助にも成來候役銀を若闕候ては彈正大弼世話之一助をも相欠候にも相准申候尤一兩三年之儀に御無候はゞ何共御願がましき儀可申上儀には無御座候得若々永被召候義に御座候時は無勿體奉恐入義に御座候得共無是非奉願筋も可有御座歟乍去難有御趣意に奉對差上付て奉願候儀儀恐多奉存候に付此旨を奉伺候

右者煩敷數ヶ條奉伺候儀誠に以恐入奉存候義に御座候得共初條奉申上候通事に不案內麁忽之施若も御趣意を誤候時は又以可恐入之至に御座候間大旨之御下知をも奉請度由申遣候に付御伺申上候以上

亥三月

上杉彈正大弼內
高橋平左衛門

一亥六月廿六日柳生主膳正樣へ被差出候

豊後守領內酒造人共冥加之儀酒造石高之不寄多少一軒より一ヶ年に銀壹枚ヅヽ差出申候尤軒數之儀

は天明八申年申上候通御座候此段申上候已上

六月廿六日　　松平豐後守内　某

別紙にて

今度諸國酒造米高之内拾分一役米差出候樣被仰渡右役米酒造人手元へ囲置追て御囲所へ御差出御座候節其場所へ運送可申付旨猶又御達承知仕候間則國元へ申遣取計向之儀吟味仕候處此方領内酒造人共元來手薄之者にて漸國用相辨候而已之酒造高故他國賣出候程之餘勢も無之誠は手薄株に御座候間拾分一之高除候ては得益は勿論差當り渡世難取續及難儀候仕合御座候得共所詮囲方之儀申渡候ても相調候義無御座候尤其加銀爲差出候得共右之通株に御座候故誠に輕取計酒造高米多少不依酒屋壹軒より壹ヶ年に銀壹枚宛差出來候に付たとへ右差免候て囲米餘勢に相成候程之儀にも無之將又酒代相增候吟味も仕候得共此儀は國中一統之迷惑に相成候事故猶又其通にも難申付役米囲せ候儀相調兼難澁之至に御座候依之恐多奉存候得共可相成事に御座候はゝ右役米御用捨被成下候樣仕度奉願候此段申上候樣豐後守申付候以上

六月廿六日　　松平豐後守内　某

一亥六月松平政千代樣より御勘定奉行衆へ被差出候書面

去る戌冬酒造人共より酒造石高拾分一米被召上御囲に相成追年諸民御手當筋に相成候段去冬御觸書御座候間政千代領内酒造人共よりも右役米可相納義に御座候處右領分奥州江州常州總州にも往古より他領廻し酒造は相禁置領内用丈之酒造計相免置候處領内入用迚も多分之石高爲相制爲防之酒造米拾石に付永六百六拾七文宛古來より役錢召上置右役錢者領内小兒養育料又は窮民手當に打向置年々

右を以手當をも仕來候儀に御座候處天明三卯凶作以來領內圍米不足仕追年に至り酒造役錢を以年々買米仕爲圍置右古米を以小兒養育米幷貧民手當に爲仕候事にては去冬御觸出も同前譯にて圍米も爲仕置候事にも御座候間右領內之義は格別之御仁惠を以右役米不被　召上是迄之通被成被下度奉願候且田村右京太夫領分迚も右同樣之譯にて圍米仕置右を以窮民手當も仕置候儀御座間右京太夫領分迚も政千代領分同樣是迄之通に被成下度此段奉願候旨役人共申聞候此段申上候以上

六月　　　　松平政千代內　某

右三家伺書得吉見氏藏本寫畢　　　　癸亥臘月十七日

伏見に侍りし呉竹一生の境界

〇呉竹かな文

呉竹の伏見の里に世話人のありしが、哀我身ほど隙なゝ者はあらじ、惠心の無量佛一體是あながちに念佛の爲にもあらず、持つたへし道具なれば御宿申迄也（と歟）、上品蓮臺に生じて樂みたいと思ふ欲がなければ地獄に落るくるしみもなし、死迄は生るであらう思へば春秋の暮るゝ日をも一錢とも思はず、寢る爲の日なれば晝は枕し、ありく爲の足なれば、夜ひとへたゝきあるけども盜ぬから人に咎められず、まがきの朝顔がゆがまうとすじこふと勝手次第也、あんな物と思へば朝日にしぼめるも驚かず、薄のひらしやらするも共通にて、小夜時雨降うとふゝまいとわれひとりのくるしみにもならず、雜煮喰ぬ者に聞かせまいと鶯啼次第也、錢もたず人に交らぬ故ゑこひいきなし、差入る月に膝を入る二疊鋪に住んで食櫃もたず、萬を土釜一つにて埒明け、覺た事なければ忘れた事もなし、年もかぞへざればば四十やら五十やら

老が身も定めて人のうみつらん父母計り見へたあめつち

覃云、世に所傳深草元政壁書といふもの此文をあやまり傳へたる歟。

○京大坂江戸の名物を讀侍る狂歌

京　水　水菜　女　染物　みすや針　御寺　豆腐に　饅鱧（ウトギ）　松茸
大坂　舟と橋　御城　草履に　酒　蕪菜　問屋　揚屋に　石や　植木屋
江戸　鮭　鰹　大名屋鋪　鰯（ナマイハシ）　比丘尼　紫　冬葱（ネブリ）　大根

○千田庄兵衛

深川八幡より東之方拾萬坪に千太庄兵衛と申百姓有之候錢座を致候者之由今年八拾有餘に相成候て田地百石餘所持仕居候屋敷も凡三千坪程之所有之右屋敷のかたはらに三百坪ほど庵地と申所を願置候此所へ先祖其外早世之子供之廟所の心にて庵を立置良巖と申道心坊主を居申候此所へ庄兵衛が妾などの像を石にてきざませ髪を結くしかうがいをさゝせ其外子供の忌日には魚類を備へ申候有付置候娘の夢に水神の顯れ咎め是ある夢を度々見申候此除をある出家に相頼候處右石像の類を地藏か抔に刻み直し魚類など手向る事を相止候はゞ除をいたし可遣左もなくては右體の事は彌増長可致と申聞せ候得共不心得之由者右石像へ生るものゝ如くにいたし申候と也菩提所は本所石原石雲寺と申禪寺旦家也赤銅の錢ふき殘り三億持居候分限者故種々の事を致し候庄兵衛老耄いたしたると近在の百姓共申觸候と言り

○牛門四友集序　　龍門劉維翰文翼

吾結詩社。時時與諸少年論詩。而閲其所賦。槩不厭人意。所賭孰不絢爛乎睇眩。精彩相授而取賞者。白視若綮綮被服明光錦矣。然亦亡柰觀者惡其著而欲尙絅也。即欲得同好之士從事於斯。而猶未能。獨牛門岡公脩。其詩致足樂也。乃聞有同志友。田子耜平若叔者相愛。三子從游吾社。俊傑少年也。又聞有關有成者與其盟。吾雖未識有成。三子所友。其人則可知。吾受其四友集者卒業。公脩嬌嬌自意。能

鈞嘉隆諸子而挺埴。其逸氣脫世。奔流一瀉。有快人意之態也。有成如少年就老樂工而學。清濁輕重緊疏之節。時時不免誤者。又如紈袴子弟。學揖讓進退之節。俯仰可觀。嘉賓面前。頗露出羞怍之態也。子韶才極俊雅。字簡句練。發辭婉然。譬如靚粧姫嬪。粹剪綵花。學巧笑黠語。色授。魂褫。少傷軟弱也。君叙如初春黃鸝轉深樹間。韻未流暢。聽者悅耳也。又如奔騠之駒初就調。康衢中猶時有銜橛之虞也。夫荊山之璞。三入玉工之手不見知。照夜之珍。魏田父睨擲諸廡下。苟不遇其人。碔砆奚殊。詩云。他山之石。可以攻玉。四子弱冠。韜彩牛門。竢世之知者。其悲何深也。假之年月。以觀其成。連城之價。豈其徒哉。而後卞和氏之事。吾所不敢辭也。

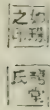
是序不合岡公脩意而乞改作。先生再作序以贈之。今四友集所載序是也。是序就先生手書本而寫之。今而思之。幾五十年矣。

文政二年己卯孟夏　七十一翁

○禪語

師湫倒嶽處攫霧拏雲時　雨露灑莊刹法雷動八維
枯林長秀性海湧珠奇　萬古禪波起宗風布浚涯

辛巳中秋吉旦

臨濟正傳第三十五世孫　石鼓開山珠老僧自題

○貞和古文書

紀伊國亡徒退治事就　院宣所差遣左兵衛佐也　早可發向之狀如件

貞和四年七月八日

本間山城六郎殿

○論語要文〔友部翁門人筆錄〕

本文

○子在二川上一曰逝者如レ斯夫〔是字意味深シ〕不レ舍二晝夜一

此章大節ナリ。天地ノ道體ナリ。天道人道一體ナリ。依テ如二天道一。今日人道ノ學問可レ致事ヲ。知ラセ給フナリ。漸ク程子ノ始擴メ說給フ。孟子モ合點ナレトモ。水哉々々ハ別段ナリ。此段ハ道體ヲ揭出ス。子在二川上一曰ノ五字。別ノ工夫ナシ。然ドモ門人隨一ノ筆記ト見ヘタリ。在ト云ハ。孔子ノ御容貌ヲ自得セシ人ナリ。川流レ上ハ側ナリ。在トハ。御寬座不動ニシテ御詠アル。此在ノ中ニ御考深キ意味コモレリ。良アリテ後。曰クト仰出サレソロ。孔子ノ御心川ノ流ト一體ナル所亦。○周子窻前草不レ除去一ト。ノベ給フ同意ナリ。逝者トハ。造化ノ事ナリ。盡スモノ。暫モトヾマラヌモノゾ。寒往ケバ暑來ル。日影ニ針シテ。刻限ノ指止ナラズ。移リ〳〵流行シテ過。凡人ノ目ニ物皆動ク。其動ク働モノコソ。生々ノ德ナリ。其生々ニ依テ。天地ノ廣大モ立ツコト如レ此ハ。スグレテ健ナ事ナリ。故乾ノ卦ヲ天ノ體ト云。實ナリ。生々ノ盛ナル事タグヒナシ。此逝ト云モノニ。毫厘モ間斷ナシ。少モ止ルキミ有バ。生々止ナリ。逝者ハ造化ノ事ナリ。物消エ枯ルト云モ。造化直ニ餘ニツヨク先立行。ユヘニ跡ハカレル。消枯ハ萬物トモニ同ジ。人身ニテハ。呼吸ニテ。生々ノヤウス見ユ。萬物ノ中ニテ。流行ノ見易ハ。川ノ流レナリ。川ノ流ニ似タト。タトヘテ云ハ惡シ。直ニ川ノ流ノ通トハ云ハ。天地萬物ノ流行ハ如レ此トナリ。夫ト云テ。川上ノ歎ト云。サテモ〳〵モ此通不二晝夜舍一ト。實ナリ。朱子始ニ。ヤマヌト讀給フ。後ニ不レ舍ヨミカヘ玉フ。不レ舍ナレバ。萬物ツトメテステズ。勵アルヲ云。生々ハ。ステヲカズノ意ナリ。造化ヲ觀タ時。止ルコトモアルベキ

ニ。開闢ヨリ今日マデ。吾ガデニ。一晝夜モステヌナリ。是ヲ學ブモノヽ體ニシテ。仰ラレタリ。サテ人ハ。天ヨリ性善生下シ。親ヲミレバ孝。君ヲミレバ忠ト云心固ヨリアリ。ソコヲ稟グハ。氣質人欲ナリ。日用ノ間。好惡加減按排スレバ。生々ノ氣ヲトヾム。依テ惡ニナガル。日用ノ事。氣質ニツカヘルト。ギシトコル。流行生々ノ止ルイハレ也。譬死期ニ遺言ハ。是切ト如レ止。斯止ル事ハナキ理ナリ。最是切トアラバ。生々ノ氣ヲ不レ知。明日近モ。物ヲステヲカズ。天地アラン際ハ。生長收藏。ソツトモ間斷ナシ。氣ヲ云ヘバ。生氣。マタ死氣。形ハアリテモ。物ノ一半ナルハ。死氣ナリ。ドコモ通徹シテ。ヤマヌコソ。ソコヲ誠ト云。天地一體ノ德。誠ニ至ラヌハ。按排利害。安慮ノイワレナリ。誠ト言ニナレバ。天道一體ノ場ニ至ルホドニ。不レ舍ニ晝夜ニナリ。ヤマヌト云ト。彼ガデニヤマズ。ステヌト云ト。爰ガ活物ニナル。道體ハ。如レ斯合點スル事ナリ。人ハ誠ノ心アラザレバ。作略ノ心ヲコル。逝者如レ斯ト云事ヨリ。執行スレバ。學問ノ手ガヽリト成。ステズト云テ。水ガイキ物ニ成テ。勵ニナル。爰ゾ道體ノ勵ナリ。如レ斯程子朱子ノ議論シテ。明備ニ具ル事ナリ。沅湘日夜東流去。不爲愁人住少時。如レ斯スヂメト思フト。甚誤レリ。道體スマヌ事ナリ。

註

○天地之化。一字ニテ造ヲ兼ヌルナリ。往者過來者續。無ニ一息之停ニ此停。ツク息引ク息。暫モトヾマリヤム事ナキ如シ。則是ガ道體ノ本然ナリ。本然トハ。道體ハ如レ斯トナリ。然トモ。可ニ指而易レ見モノハ。莫レ如ニ川流ニ。故ニ於レ此發シテ。示ニ人道ト云姿ハナシ。是ガ則姿ナリ。兎角ノ事ハナシ。何ヲ見テモ。本然ガアリ。凡人ハ不ニ分明ニ。勝テ川ノ流ガ見易シ。依諸人ニ知ラセ給フ。

註

○欲ニ學者時々省察而無ニ毫髮間斷ニ也　精密ナル工夫ノ章ナリ。流行間斷セマジキ事ナリ。自然ノ理

ヲ苦ニ思フテ。ムヅカシキハ流行止ルナリ。〇前章冉求。力不レ足ト云ヘリ。夫子曰今汝畫レリ。此方カラカギリヲ出ス、誡ト云ニハ際限ナシ。死ニ倒レタ場ニモ。誡ニカギリナシ。時々刻々一息間斷ナシ。

註

〇程子曰。此道之體也。天運不レ已。日往ケバ則月來リ。寒往則暑來。水流而不レ息。物生而不レ窮。是道體ト云事ハ。程子ヨリ出ヅ。學者依レ之知ルナリ。無極而大極ナレバ。體ハツケガタシ。無極大極御自得ノイハレナリ。皆與レ道爲レ體ト。此語ハ他儒ノ所レ不レ及ト。朱子稱美シ給フナリ。日月往來水流物生ルヲ。直ニ道ト云ハ。晝夜ノワカラザル事アリ。道ト言テ。道トツレ立爲レ體。日月寒暑水流。コレ彼トツレ立。一ニナリ居ルヲ。則與レ道爲レ體ト云ナリ。造化ノ分ハ。不レ殘天ト同ジ。無極而大極ト云。形ヲサグラバ。直ニ其物ヲ生ズル。水ノ流ニアリ。斯テ。形ヨリ上ヲ道ト云。形ヨリ下ヲ器ト言。器ヲハナレテ。外道ナシ。道ヲハナレテ。外ニ器ハナミ。如レ斯一ツニ乘テヲレバ。道ト云ヒ。水ノ流レト分ケガタシ。譬バ。筆ヲハナレテ物カカレズ。又書ヲハナレテ。筆バカリニテモ。書トイハレズ。

註

〇運ニ乎晝夜ニ未ニ嘗已ニ也。是以君子法レ之。天地ヲ直ニ手本ニシ。自彊テ。フミコンデツトメ。不レ息ナリ。爰ヲ朱子感興ノ詩ニ。仰觀ニ玄渾施ニ。一息走ニ萬里ニ。トアリ。天地乾坤バカリデ。學問モスムナリ。是ヲ以。及ニ其至ニ也。純亦不レ已焉。〔字解ナリ〕純トハ。文王ノ德。不レ已ハ。天ノ德ナリ。聖人ノ心ノ純モ。天ノ心ト同シ道ナリ。文王ハ毫厘モ不レ已ノ御德ナリ。コレ亦。天德ノ不レ已ト同ジ。古來忠孝秀ヅルモノハ。不レ已ト言筋見ユルナリ。難義苦勞ヲ經テモ。シヤウモツレナク。眞實出

ヅルハ不レ已ナリ。是則誠ノ場ナリ。又イハク。

註

○自レ漢以來。儒者皆不レ識ニ此義一。是聖人ノ心。純而亦不レ已也。純ニシテ不レ已ハ。乃天德ナリ。儒者トサスハ。異端ニ對セリ。心ノ不レ已ノ體ヲ。自得ノモノナシ。心ノ不レ已ト言フモノヲ。トリ立行イハレナリ。然ルニ。沅湘日夜ノ氣味ト思ヘリ。純ハ誠ノ別名。不レ已ト云フモ誠ナリ。ドチラカラデモ云。凡人ハ心ニ畫アリ。人ノ子トナリ。養親ヱノ孝ハ義ナリ。實親ニクラブレバ。ヘダテアリ。純マタ不レ已ト云ニタガヘリ。ソレギリノヘダテ有。一倍々々ニ。ナリテ出ヅルヲ。不レ止ト云ナリ。橫渠先生。己救レ之耳ト。ノ給ヒシモ。他人ニカマハズ。己ハ如レ斯スル義ト。自己ニカヽリテユクナリ。是則間斷ナシ。純ハ。不レ已ノ力アリ。少シ神斬リシテ。感應ナケレバ退屈出テ信力已ム。是ハコレ。自己信力ノ。流行ノ已ダ所ナリ。誠ノ心ノ體テ。事物ヲ以テ合點スベキ事ナリ。譬ヘバ庭ノ面ヲ觀ジ。景色自已心ニ移ル。純ニシテ不レ已ト云モノナリ。コレ則天德ト同一體ナリ。在ニ天德一便可レ語ニ王道一。珍語ナリ。天德ニサヘナレバ。王道カタラルヽトナリ。霸道ハ。得手勝手ノ利害ナリ。言上ノ加減按排。皆ヤム心ヨリ出ルナリ。自己ノ願足リ。用ナキ時。破殺シテ仕廻フ。如レ斯ヲ誠ト云。王道ハ是ニ異ナリ。鰥寡孤獨ヲメグム。則橫渠ノ救ニ己之一耳デ出ル所ナリ。親ヲモ。ダマス氣味デ事ルハ。孝ニ似タ霸道ナリ。王霸ハ。政ニノミ不レ限。擴レバ日用ノ交接ニアリ。凡人ハ善事ヲシテモ。霸道ト變ズ。其要。ウツリ所メヅラキナリ。王道ノハナシ。耳ヘ入モノハ。其人ニ誠アリ。可レ語ニ王道一ト言フ。人ニ成タル所ナリ。〔注ニアリ〕其要ハ。只在レ謹レ獨。一念發スル頭下。斯ヅノ々心ノ付處。權謀カ眞實カ。如與一念浮ブ幾ニ。心ヲ付ルナリ。如レ斯ニスレバ流行ノ止ルト。不レ止ヲ知ル。在ノ字ハ。大學ノ八目綱領ノ在ト同ジ。道ノスヂ目ハ。是ヨリ可ニ踏出一トノ字意ナリ。念頭ノ所ヘ。手

ガカリ有ト。執行上達スル事也。〔愚按〕朱子ノ推考モ。是ヨリ至ニ終篇ニマデ。皆勉レ人進レ學不レ已ノ辭ナリ。後學ノタメニ。ハゲマシ仰ラル丶ナリ。秀一ハ。川上ノ歎。甚深重ナリ。イハレハ。物ノ成就スル處ノ分チナリ。

○子在ニ川上一曰逝者如レ斯夫不レ舍ニ晝夜一

○欲下學者時々省察而無中毫髮間斷上也

○程子曰此道之體也天運不レ已日往則月來寒往則暑來水流而不レ已物生而不レ窮

○運ニ乎晝夜一未ニ嘗已一也是以君子法レ之

○自レ漢以來儒者皆不レ識ニ此義一此聖人之心純而亦不レ已也

○在ニ天德一便可レ語ニ王道一

右者山崎垂加翁之門弟友部氏重垣翁ナリ友部之門人聽ニ講談一直書取寫ナリ論語一部之內天理合一之意味多自見任者私意交順ニ先學ニ可レ學者也。

○子絕レ四毋レ意毋レ必毋レ固毋レ我〔此ノ講談意味甚ダ深シ徹上徹下也〕此ノ語ノ筆記ハ。顏淵閔子ナルベシ。子在ニ川上ニ曰トナリ。如レ斯御心不斷流行ノアリサマヲ。ヨク知ラレタリ。其流行ノヨリドコロハ。意必固我毫厘モナキナリ。私ノ四ツノ異名ナリ。意トハ何ゾ。邪ノ思出頭ヲ云。是ガダン〳〵增長シテ。已ガマヽニ果ント思。是必ニナリタリ。又外ヘアラハレズニ。內心ニ催シタ處ヲ。固ト云ナリ。固ハ。コビ付テ根ガヌケガタシ。其上ハ又外ヘアラハレ。自他ノ差別ナク。誰モ不レ知ニ成。畢竟ハ。意ナキガ專ズル處ナリ。意ヲ絕トバカリ云テハ。紛テ不ニ分明一。必固我モ。書入ラレタリ。意モナキナレバ。必固我可ニ推知。絕ハ無ナリ。無ヨリツヨシ。毋ノ字サヘトヨム氣味。無ト同キナリ。我ハ

私已トハ。私ニナリトゲ。處ヲ四ノ物。相ニ爲終始一。起ニ於意一。逐ニ於必一。留ニ於固一。而成ニ於我一也。意ガ起テ。我マデニナルヲ。ニ終始一ト云。固ハトヾマリタリ。期必ハ。カクゴ兼テヨリナリ。我ハ。我ヨリ出ル。生レ意則物欲牽引。循環不レ窮矣。意ガ出レバ。萬欲蜂起ス。程子曰。毋之字。非ニ禁止之辭一トハ。外ヨリ禁ニテナシ。自然ト。我ト我デニ。毫厘モナク。ハラヒ切トナリ。張子曰。天地ノ流行ニ可レ對ハ。孔子ノ御心ナリ。此ノ義ヲ擧ルニハ。勝テ張子ノ説ナリ。楊氏曰非レ知足ニ以知ニ聖人一詳視而默識レ之不レ足ニ以記一コレ聖人ヲ知見スルニハ。知慧ニマスコトナシ。智眼開シ人ハ。見ルト其マヽ。自得スルナリ。是ヲ默識ト云。默識ノ非レ人バ。聖人ヲ知ル事ナラザルナリ。

〇三老手簡〔空々　竹堂　杏園　享和二年壬戌〕

與篠本廉子溫　　大田覃

前月既望之遊。南棹北棹。以不得方舟爲憾。明夜幾望。草堂小集。欲邀足下及空々主人。月下藉荒庭草。以償前月之憾。薄酒枯魚。固屬眞率。二君携手惠然肯來。則妙。薄暮爲期。八月十三日。覃拜。

復大田覃子耜　　篠本廉

既望之遊。南北背馳。遺恨有不可言者。忽蒙寵招。云欲以償前欠。以明日薄暮爲期。敢不拜趨謝淳意。廉拜。復南畝詞伯几下。

承轉致尊意空々主人。敬領。

與大田子耜　　篠本廉

足下所命。悉以傳空々。空々亦感盛意深。乃因僕謝允。但有病餘髮長失儀之一嫌。亦使僕爲言。竊謂足下風把騷懷。蕭散洒落。豈介然于斯哉。然不敢阻格。直此以聞。爲之伏乞寬恕。前報倉卒。不及得

空々消息而叙之。今故云。並以其牘奉呈。廉拜南畝伯几下。

復篠本子溫　　兒玉愼

見示南畝君之書。捧讀。以前月江東之遊南北相左。不同晤舟中爲憾。是以中秋前夕。邀君對酌。以展其懷。並及僕。惠顧之甚。不知所謝。僕倚謝病在家。雖然前月之遊亦竊倍立。其不以髮長失儀罪之。則陪下風以謝厚惠。君幸爲僕致意幸甚。兒玉愼拜竹堂先生足下。

復篠本子溫　　大田覃

錦字並空々子牘見示。就審空々子病餘髮長。嫌於失儀。乃使足下爲言。禮意綦篤。一何至此。我輩身在於樊之中。心遊於方之外。是足下所知也。禮豈爲我輩設哉。抽簪散髮。固所欽慕。故明宵所期者。僅二三社友耳。請以是爲解。則幸甚。覃拜復竹堂詞伯几下。

與兒玉愼　　大田覃

昨託竹堂延招老先生。老先生不拒。且謝竹堂以病餘不剃頂。禮答之極。何以堪之。明月幾望。陰晴未定。伏乞力疾枉企玉趾。一宵清話。何必問月之有無乎。嘗役浪華。利獲書畫。亦是風流罪過一贓物耳。公然示之同志。不自覆藏。佛家布薩之法。希比懺悔。秉燭之下。恐勞繙閱。昨期以昏。將以候月。々之不必。何必昏暮。不俟休沐終日在舍。想竹堂退府。合在未申之交。則促期申牌。謹此瀆告。併以鳴謝。覃拜呈空空老先生几右。

復大田子耜　　兒玉愼

昨託竹堂辱蒙寵招。加有不罪容貌失儀之命。欲晩窃拜趨以謝厚意。不意復賜玉章。命意懇々。謹此拜覗。因審雖名賞月之會。其實不必問陰晴。唯欲高談。且欲示所得浪華書畫數幅。增覺高興。衰老如僕。亦獲列其班。所謂今夕何夕也。又承昨有薄暮爲期之命。然爲今日幸告休。候竹堂退公之時。促之同登

高堂。敬領。萬謝面晤。不一。兒玉愼拜南畝先生足下。
簡鈴木〔恭〕士敬井上〔玖〕子瓊鈴木〔文〕猗人中村〔亮〕文智山本〔隣〕德甫

篠　本　廉

今夕宿期。當辱來駕。會南畝氏設筵以講。其言曰。以前月既望之遊。紬龍背行。南北異處爲憾。乃月下對酌。以償前失。意氣懃懃懇懇。不可以事辭。既已應諾。趨新捐舊。於諸君爲負。不敢隱匿。以情報道。附之風流罪科。勿爲過幸甚。抑以事勢推之。意者諸君亦在招中。若果然乃是均醒於西家。同醉於東家也。更妙。八月十四日。廉拜。

三老手簡。山本氏所輯。二老既逝矣。我獨存焉。如何々々。文化丁丑夏五十日。梅雨中書。六十九翁覃

○八丈島教諭

凡人と生れて我身より大切なるものはなし、わが身を養はんがためにつねの住所をもとめ、夏冬の著物をもとめ、朝夕の食をもとむるも、みな我身を大切に思ふが故なり、しかるにそのわが身のもとは親よりうけ得たるわが身なり、わが身を大切に思はゞうみつけし親ほど大切なるものはなしと思ふべし人人生れおちてよりいとけきなきうちは、親の手をはなるゝ事なく、親ほど大切なるものはなしと思へど、やうやく年をとりをのれが手足の自由にはたらくにしたがひて、親をそまつにし親のいふ事をきかず親の心にそむくもの多し、をのれが親をそまつにするならはしにては、わが身も次第に年よりゆけば、又わが子にそまつにさるゝものなり、さればわが老人を大切にする心もちにて、人の老人をもうやまひ、わがいとけなきものをそだてあぐる心もちにて人のいとけなきものをあはれむべし、老人の中にて耳目もうとく、手足もかなはざるものは、ことさらに大切にいたはりてかいはうすべし、これみな人のためにする事と思ふべからず、めん／＼年よりて後思ひあたる事あるべき也。

中川飛驒守奥書

右之通おしゆる上は殊さらにあつく存じ父母老人を大切にすべし、若此後かく別の孝行のきこへあらば御ほうびも被下、品によりては父母へも御手あて被下べし、若又かくのごとくおしへ置といへどもなを父母をそりやくに致すもの相聞ゆるに於ては、きつと御咎にも仰付けらるべき間、よく〳〵こゝろへちがひ無之様相守べし。

右御勘定奉行の命によりて予が草する所なり、八丈島の高札に書有之、此文を文化元年長崎にゆきし時紅毛通詞〔志筑忠次郎〕に見せしかば、轉じて加比丹へンデレキドウフに見せしに、加比丹よき教諭なりとて、蘭語になして予に贈りしを家に藏す。

○玄旨法印の文

慶長のはじめのとし仲の冬大坂の亭におはしましゝ比奇瑞の靈夢を感

　世をしれとひきぞあはする初春の松の緑もすみよしの神

凡靈夢あり善夢あり、むかし黃帝夢に華胥氏の國にあそぶ、さめて後天下大に治れる事、彼境のごとし、又殷高宗の良佐を得て國家盛なりしなり、中につきて松は十八公の名あり、これ又丁固が夢に感ぜしかひあらずや、住よしの御神は西の海のとをき鹽路よりあらはれ出て、近き境にあとをたれたまへり、たゞ此我朝を鎭護し給ふのみにあらず、はるかに異國征伐の御ちかひ專なるがゆえに、神功皇后の三韓を平らげ給ひし時も御神ことに威猛を施し給へりとぞ、さればこのあきつすに四の海波の聲せずしてこまもろこしもなびきしたがひ奉る事たゞ此時にあり、その久しき行先を思ふに住吉の松に小松のかげをならべつゝ、一木〳〵にちよをかぞへても勁節枝さかへ、貞姿みさほにして猶限なき齡なるべし、今此ことを聞に愚かなる心にもよろこびにたえず、いさゝか筆をそめて祝詞をたてまつるといふ

ことゝかなり。

住吉の神の恵もあらはれて君が八千代をまつのことの葉

○元政法師の文

きさらきのころありまのゆにくだりける、日比雪ふり風あれしに道のほどいとうらゝかにて、二日ばかりにつきぬ、はやくやどりける家の、谷川したにながれ、前に山よこをれ　、いとおもしろきにやどりぬ、あくるあした人をかへしたる午の時ばかりより、雨ふり風はげしく家をもふきあぐるやうにて、わびしきに道ゆく人を思ひてよめる

ありま山やま風あらくふる雨にまして宿なきいなのさゝ原

○古今餘材抄序　契沖法師

これをしも餘材抄と名づくることは、さき　故ありて思ひがけず萬葉集の代匠記つくれることあり、それつくるとて文の苑に入筆の林をわけて山といへど白雲のかゝらぬ山なく、杣といへばまさきのつなはへぬ杣なくして引きたれる木は高砂の松まきもくの檜原泊瀬の川へのふたもとの杉しのだの杜のちゝの楠、をよびなき月のかつら星の林にいたるまで心をすみなはにかけはいを斧にめぐらさずといふ事なくして、ちひきの石かたきしるしをまき柱ふとしきことはりをたてゝ事すでになりにしかば、しらつちをけづるたくみにあらずして鼻をそこなはず、石をあてとせしひた人にあらずして斧をかゝざる事を思ふに、心ひとつによろこほひてすくふつばめの飛たちぬべくあさる雀のをどりぬべし、家をつくるにはかならずあまりの木あり、かしこをあかくしてここに山をなしかしこをかふろにしてこゝに林をなす、故にしかるにあればたゞにやはくたすべきとてさらにみつはよつ葉なるものつくることあるになずらへて名づけたるなり、又いはく友とせしもとの下河邊のなにがし萓家萬葉集紀氏六

帖これらにある此集の歌のたがへるをかたはらに書つけおけるをすてじと思ふより事はおこりて、玉だすきこなたかなたをかけたればそのあまりの木いつとなくかの歌の源よりながれて此のことばの海にいづるなめり。

○伊藤東涯の開口の文

享保十八年正月廿五日

東宮〔御諱昭仁〕御元服猿樂開口　　伊藤長胤

それあめつちのことふきもともに久しき御位うごかぬ星のかげたかく重る光あらはれて青き天が下にすむたかきいやしき人々のいはふ心もつきせじなめでたかりける時とかや。

○天正年中聚樂京童の小歌

まうそ〳〵赤事まうそ、むらさき野のきもんかくに妙覺寺の二王門、百萬遍の御影堂天滿のかねのを赤づらの明王、天火いなづま朱すりぼう、いなり殿の狐火祇園殿の犬の子、山王の鳥居猿がしりは眞赤な早川主馬のふんどし、すわうか紅梅かひざやひじゆすひぢりめんにひどんす、肥後殿のひつしき渡邊殿のきんちやく、彈正殿のもちやり小野木殿のかわらばな安い殿の御門、ゆふけいのこしざし朱ざや朱ぐそく、からのかしら猩々皮、高雄のもみぢにだんの山の岩つゝじ、けしの花にけいとうげ、御所柿にざくろのみはりの木のきりかぶ、鹽引のきり口鱠のさしみ、いりゑび赤がひ赤がに赤にしにがざみのあしをかうにもり佛じやぼうの口びるお宗永のほうさき、朱屋のかゝの口べに、茶屋のかゝのまへだれよしやすのづきんとうきのまくらべにざら、朱わん朱おしきちやつかづすか朱つぼ朱がらかさ、王のはなかしゆぜんじ、扨はそのまんなかゑいやまん中。

右寛永甲戌板の尤草紙に見へたり

○慶長十八年の諺〔門や木戸や矢倉や〕

慶長十八年の比より京童の門や木戸や矢倉やと云はやりければ、十九年の暮に秀頼公むほんくわだて俄に門木戸矢ぐらを作りける、是も後に思ひあはせけるよし。

右寛永二十年板鼠物語に見へたり

○烏丸大納言光廣目ざまし草の内に〔寛永二年〕

此比のうき世わたりの若法師受戒のさたはさもあらで、うら紫の小袖きてこづまうしろへ引まはし、浅文金砂の平帯して、きぬもし衣身にまとひ、染わけたびに紫緒、紅うらの丸頭巾黄纐纈のきんちやくに、蒔繪梨地の印籠さげ、からのやまとの緒どめして、身なり足ふみふりかゝり、人にかはれるおかしけれ、是はさもなし行跡のたうとき譽ありけるも、いかなる寺の貫首にもあをがれんとのはかり事とぞきこゆれば、佛日のひかりいたづらに名利の雲の立おほひて、法の師とたのむべくもなし、もとより父母の命にて、心ならず出家したる輩は、何の道心おこるべき、たゞ世に多きものとては名利度世の悪知識因果撥無の悪法し、こと更在家のなま禪法、小知は菩提の妨にて、不得心なるを宗として道にたがひ法にそむけり、たゞ世にはやる物とては愛宕山そらせいもん、緩怠名聞すきたばこ雜説しらく聞取學文、邪正もしらぬすみ衣、とにもかくにも德つかんとぞいのりける。

道心はもとよりもなしそら數珠數のつるにと浮世祈れり

○寛永年中肥前瘡

寛永年中に人の身に瘡のいでき其名をたれいふともなくひぜん瘡といふ、見る人聞人ひぜんおこりたるといはぬ者なし、同じく寛永十四年に西國肥前に吉利支丹といふ邪法の一揆おこり、武士のうけたまはりて害之、これも後に思ひあはせける〔鼠物語〕

○同諺〔何を仰出さるゝかを仰つけらるゝ〕

寛永十八年の比御法度に何を仰出さるゝかを仰つけらるゝと、おぢをそれて世をせばく色々のまどしき事をいひければ、其ごとくをのづから八木かたく飢饉の世となる、この比はまたよござりましやうなふといふ事はやりければ、やがて目出度よき事のあるべし。

○明暦年中米つき歌柴垣

いつの比にやありけん、さゞれ石の岩ほとなりて二葉の松の生そひて、などゝいへる小歌のはやりてうたひけるおりに、かは上下もめでたくおもしろかりけるものを何ものゝつたへてはじめたりけん、此比北國の下部の米つき歌とかや、柴垣といふ事世にはやりて、歴々の會合酒宴の坐にても第一の見ものとなり、いやしげにむくつきあら男のまかり出、くろくきたなきはだをぬぎえもいはぬつらつきして目を見出し、口をゆがめ肩をうち、胸をたゝきひたすら身をもむ事狂人のごとし、右にひだりにねぢかへり、あふのきうつぶきあがきけるを、座中聲をたすけ手をうちて、もろともに興ぜられしをみる人さへうとましく片腹いたかりしが、はたして諸家ともにみな柴垣となり、大かたはもはや此町にはすまれ申さぬもあり、火にやかれてのがるゝかたなく、柴垣うち／＼果けるにぞ、謳歌の事も思ひあはせらるゝとまゆをひそめ、はなばしらをしゞめてつぶやく人も有けり。

右萬治四年板のむさし鐙に見えたり。

○寶文年中江戸武家名盡時の逸物

つれ〴〵成まゝに、日暮硯にむかひ、うきよにはやりゆくよしなし事を、そこはかとなく書付れば、あやしうこそ物をかしけれ、江戸やつこの様に生ては、にぎわしかるべき事こそおゝかんべいなれ、公方の御位はしかも賢し、松の園生の末葉まで、人の他に思はんにこそやんごとなき、一の人の有様は雅樂也、上の御子を孫にて酒井榮る繁昌の本、何の御時ぞや、元和年中龍虎互に位をあらそひ、羽柴しばたゝかふといへども、かうりやうの首忽立所をさらず、折しも寅の御年より卯辰巳代とさかふれば、今武野の野狐は穴賢しと罷出て寅のいを借徘徊す、しかなる故此方武勇彌さかんにしてはなつ矢島の外までもたてをつく者なかりけり、猶いやましに續る代の雲井につゞく富士よりも、續は長き人の命をたばかわの水も藥と水土の旗本衆に、大火事は下のをごりや十分の代は垣住居させんとの司天は相火在家は木生火にて火を生ず、然に依て筋雲を火吹竹とは立見たり、それにくつせずはた本は形も火事のやけになり、はやらかしぬるはやり物、先大身も小身も分に過たる御もつたい、是ぞ當世のはやり物

先年頃の　かた〴〵は　立身せんと　朝公儀　三河言葉を　にせ廻り　立いんぎんの　きつとばるやゝ共すれば　先祖ざた　其次〴〵の　わかばへは　寄をふたびは　馬喘し　御番喘しに　三谷ざた野郎の批判　男だて　生醉しての　死氣だと　ひくの山のと　かゝかあい　しやくりをくれて　死氣

だと　言口下に　中なをり　としてかくして　ねだりくい　物なれふりの　ていたらく　はゆるをそしと　さかやきを　後上りに　こびたいを　ちつくと入て　かんぬかせ　中もとゆいに　ちくと巻きやらの油を　かつ付て　さやちりめんの　黒小袖　ちつさきぬいの　をりもんに　白むくなれば半ゑりは　きん半をりや　とうぞめや　茶色の羽折　さいわい小紋　たきをい中に　四角ぞめ　袖口中に　中ぐゝり　江戸むらさきの　大ひぼを　しつかとしめて　むな高で　帯はとびざや　りうもんや　羽がたへそりし　大小に　能相ざめと　きくとぢに　柄は十王　てつがしら　宗傳がらちや　しけうちや　焼き付目貫　すかしつば　なゝこやつこに　すじめへて　金と銀との　をきもんに　野ざらし　扨は鬼のつら　袴はこもん　長〻みじか　合引低く　襠高く　袴の腰を　あつくして　馬乗形は　きの字也　肩衣しやんと　ゑりほそく　こん玉虫の　うらに付　ひだは七つに　折目高　くゝり頭巾も　へりほそく　とちめんたびを　するがひも　空も晴なる　所へは　熊がへ笠に　つゝみへは　こも脩笠を　かつかぶり　身のほうけ成　あだ戀を　するが次郎に　ことならん　じみなる殿は　闘なれて　居合を知るも　しらざるも　大小みじか　そりをかけ　つかをこながく　りうご成り　無地の鐵つば　あらくして　黒ぬりざやを　うけざしに　伯耆流にや　ことならん　扨又馬上乘なりは　八條流に　大坪や　あらき新當　直心流　何も流儀　あらそひて　とゝ前にしの　頭高馬　尾ぶりは見事　振物に　紫手綱　をしかけや　猩々皮にて　尾ばさみし　海無ぐらの　金もんや　ねも妙ちんに　轡聲　馬上の形　色々や　寄合衆と小性組　兩口とらせ　いたりぶり　御書院組は　功者ぶり　御歩行頭と　御先手と　御番衆は　りきみのり　扨持鑓の　はやり物　鎗を御前てしたやなる　無邊かみや　紀州より　江戸こんきぬ笠　水たまや　かし原流に　雲平流　關口流も紀州なり　扨又本間　法藏流　まなべ神道　五の坪流　さぶりに　又は竹内　何もす鑓　十文字　く

だにかぎ鐺　大身鐺　穴澤流や　長刀は　殿の供べに　流の紋　さやは色〱　物ずきに　せんだん巻や　さびいろや　しろかね金具　かぶら巻　供一ぺんの　作りひげ　紺のどてらに　どてら帯　何も供は　同じ事　扨又公儀　ぎらひにて　ひいの弱かる　殿達は　けんぬん咄し　食つかへ　せんきけん引　氣色沙汰　江戸に名高き　醫者咄し　先以て醫者といへば　りやうじ吉田の　意安にや　判のすわつた　果法いしや　仁宗説と　世間沙汰　醫の上ざたは　功者にて　玄つぺありと　聞えたり　御目見醫者の　名高きは　死病も醫鬮　玄悦や　よの手にあます　難病を　よく島村と　名を得しは　ずい一庵と　世間ざた　日出淺尾　長澤や　渡邊間鍋　藥なべ　玄古も有と　聞へたり・又學ずきの　殿達は　出入かどは　どれ〱ぞ　水戸の御屋敷　保科殿　内膳殿に　大和殿　井上河内備の新太　此方〱へ　参ては　氣に入だての　禮智信（闕文）　世上の批判　神學や　治る御代に　好文院　しんしゆんも又　はく學と　菊地とぶんに　ゝゝゝ　道上に入　安齋や　ゝゝゝゝ　ゝゝは又　武道たしなむ　殿達は　ゝゝゝゝ　ゝゝんと　掛廻りぬる　ゝゝゝゝ　ゝゝゝ敷　豊後殿　ゝゝゝゝ　ゝゝゝゝ　水野監物　ゝゝゝゝ　ゝゝゝ學　越前家　ゝゝゝゝ　ゝゝゝみ　此方へ　見廻〱　ゝゝゝゝ　道具ざた　先軍法に　ゝゝゝゝ　甲州流を　専と　城取を能く　工夫して　専一それを　傳じゆ也　扨其外は　をゝち流　義經流に　公方流　けんしん流に　山本流　楠流に　小笠原流　何も流儀　あらそいて　扨兵法に　名高きは　不申とても　柳生殿　一刀流の　小野殿と　此兩人は　かくれなし　柳生の家の　極しんの　神妙劔と　小野殿の　五天も晴るゝ　星矢當（保捨刀）　文五郎流に　鞍馬流　東軍流に　しけん流　天流念流　願流や　吉岡武藏　おくま流　扨此比は　旗本衆の若黨共の　めり出る　ならひくさせし　病法を　我がしり顔に　口上手　名の有衆をも　いゝかすめきかぬおのこも　あて合せ　もとねにも　ならでは　おさだを　ふるう　ものおかし　扨又居合　名

高きは　田宮の　家の名けんは　おほき敵をも　四方切　片山に秘す　名劍は　水玉や　すいと劍兵法の　しあいにて　何れも太刀に　奇妙あり　居合の德は　扨いかん　先大將は　常〳〵に　手をくだかるゝ　物なれば　亂軍に　又やじんば　將と將との　出合なり　しのびの敵に　ねやの內登城の時と　遊山場　振舞の座に　手打の時　舟や乘物　本意成なんを　のがるべし　扨其外の　居合には　一傳流に　一の宮　關口流に　しかん流　吉留流に　土屋流　扨其外は　數しらず　扨又弓に　名高は　せつかの家に　印齋は　吉田竹林　大藏流　むりも吉田の　久米の家　今の天下の　矢數者は　紀伊のかせ者　その右衞門　年は十八　弓勢は　矢をためともに　こへつべし　又其跡を星野とや　扨又やさし　柳瀨氏　年は八歲　矢は六千　通り矢數は　何程ぞ　三千餘には　かくれなし　やわらに名よ　息笛は　かくれなし　ひしぎにせんと　おつちめる　しばしはのども　關口屋ひつひといゑる　下よりも　やわら〳〵と　ひつぱづす　けても痛まぬ　まりの身や　せいこう流は　かぢわらよ　扨鐵砲に　名高は　井上田付　いなとめて　筒の咄し　とんとやむ　今旗本にしなんする　軍者の執行　誰〳〵ぞ　北條殿の　弟子として　はやらかすは　世に傳兵衞　山が甚五は　名にしおふ　山がへこそは　入りにけり　布施の源六　遠藤や　伊兵に高田　平內よ　扨其外は　數しらず　劍術の師は　誰〳〵ぞ　柳生流にぞ　助進齋　又市之進　小野流に　溝口梶井　新右衞門　齋藤孫四　伊藤氏　平石いり身の　其時は　ころりと　ねごろ　八九郎　井藤安言　當世や東軍流に　川崎よ　其打太刀を　庄太夫　入の眼を　くらま流　わら品のよき　表裏　しぶくしぶや　長兵衞　いぢ知伊介と　同じ者　戸田の意春も　そとはやる　いぢ知學知と　傳心は　生兵法の　大疵か　忽ほろび　うせにけけり　居合に田宮　流儀迚　長き刀の　すくはげに　入の眼を　ぬきわざや　筒井金太　一の宮　さぞ大太刀　いか程ぞ　三尺八寸　候べし　いか物作り　ぬく手に

はたこの出來るも　道理なり　關口流に　廣瀬氏　權太服部　彌五兵衛に　片山流の　ながれと
て中川はやき　彌兵衛や　敵打太刀の　我が身へは　ちとも近藤　新五左と　菊地與十も　同じ
事　大學流は　意春也　法藏流の　鑓として　道河邊　彌右衛門よ　誰にましほの　彦兵衛　かじ原
流に　梅田杢　雲平流に　傳右衛門　くだに松本　權太とよ　柳生の鑓は　出淵や　扨其外は　數し
らず　馬上の功者　稻垣や　淸右に松田　傳兵衛　飯村氏　逸見氏　彦左小林　權太夫　宮野主税
に森くらや　長崎氏に　山田氏　庄兵衛　四郎兵衛　與五兵衛　弓功者は　間宮氏　次郎兵衛共
外　數しらず　關口流の　やわらには　廣瀬權太に　彌五兵衛　梶原流に　隨賀とや　隨諸扨は　神
明の　修理も　やわらを　鳥居也　捕手を　須頭　武久齋　此執行者の　のたまはく　法は釋迦　武
勇武藝　僅なる　天上天下　ゆいか毒尊と　申されき　付ておきだまは　不審紙　大略はやる　溝川
長意　人見とや　平賀玄順　あら井氏　了庵吉田　策庵や　人參卜壽　外科には　桂南養庵　忠ゑ。と
や　久甫に　扨又針は　玉川や　宗川　定齒道庵　本加德せん　きるに書札は　曾我の家　久保の吉
右や　數寄者　舟越片桐兩人　元道具目利に　小見氏　はやる古筆の　目利には　了佐平庵　勘兵
衛　旗本には　山中氏　手跡は時に　大橋也　このゑ流には　押田氏　定家流には　備の新太　次大
名の取持で　はやらかすは　そも誰ぞ　土入宗閑　神尾しい。。牧野吉法　朝比奈よ　久意に　猶も物
頭　諸役人衆に　其外は　御坊主や　上野坊　野間三竹　本あ彌や　狩野法印　本因坊三和に　終碁
持なるは　宗慶よ　心入角やと　ほめん人もなし　又其次は　たれ〴〵そ　樋垣そ庵　と申ける　治
る御代の　ためしとて　民のかまどの　誹諧は　そこはかとなく　はやり出　げにや　あづまの　は
てしまで　なまり言葉の　住田川　歌に心は　都鳥　其名に逢よ　人〳〵の　東西廣く　聞へにし
なんト養と　世間ざた　世のほまれかや　機玄札　花も未德も　有とかや　正恒ならぬ　立しだや

歌の傳授や　了鑵豐　付句紅甫は　一雲をよく　帶刀と申　山川ふかき　水の面に　宮鍋程な　月影見ては　調蝶子　花に泉や　未琢とや　共いきたれも　祐正と　ひたとすゝめを　加友　扨又　誰が子式部か　九つなる　おさあいの　誹諧をよく　批判するは　紅甫の子ざかしき　いづれをとらず名を江戸の　歌の大名小名も　まだ黄いな口の　はた本衆も　四の五のと六　七八九だを卷　一世ならざる　二世やつこ　そと學文を　利才の有るが　是やこの　ふうしの文に　いりんなん　世にゑきの有　清水の　しぎやうは　智惠も　とうをつ也　又其つぎは　玄ていや　ゆふてき醫學　名高かきは　きはくにちらと　あいかはや　醫術を人の　とういんに　ふるなのべんも　かくやらん　醫者は都に　一之進　詩の名人は　石川や　せみの小川に　住なれし　四明山ての　一閑じん　猶しも江戸に　はやる坊　むなんせきらん　いんげんは　二王執行の　しやうさんは　又此比の　すたり物　先一番に　諸浪人　小太刀に二とう　やわら取　長刀さがみ　やつこのざ　みやうぎ〳〵の　代參り法花ふぢふせ　式部流立文　あんだ　小尻當　連歌の會　諸振舞　柄のみしかき　長刀　むそりざめ　はや馬のふん腰　ざれ歌かく計

つれ〳〵の廊才なしぞとおひしゆるし給へや捨ておく

寛文十一年辛亥十月吉日

〇天明三卯年江戸牛込行元寺敵討

下總相馬郡早尾村百姓富吉敵討之節懷中書付三通寫（天明三年癸卯十月江戸牛込行元寺中にて敵討留申候）

乍恐以書付申上候口上之覺

松平一學知行所下總國相馬郡早尾村百姓富吉心願之意趣左に申上候名主八右衛門組下

一私村方氏神文間大明神祭禮として毎年九月十五日神事御座候時分者村方百姓共一統手酒少々宛造祭禮仕候拾七ヶ年以前明和四亥年九月十五日則祭禮之内親庄藏日頃入魂致候同村組頭甚內と申者と同道にて川村へ罷出歸宅之節夜四ツ時頃甚內一同私方へ立寄手酒給候上何歟口論仕候得共從年心易挨拶合共座之者何之事なく相濟申候扨甚內歸宅之節庄藏方へ申候は咄度事有之候間後刻一寸參り候樣に申罷歸り候依之亡父義無何心甚內方へ罷越候處又々先達而之意趣申募り候哉高聲に罷成候由近所之者聞付ヶ缺付見候處はや父儀深手負申候右に付村役人中へ立會之上私母親類共一同　御公邊へ御願可申上奉存候所同村寺院布川村寺院方爲取扱被相掛候共節私義漸々拾二歲に罷成候依之母親共色々利解被申聞候に此上　御公邊へ相願候內に庄藏相果候はゞ甚內解死人に取候迚可致蘇生事にも無之候間右手疵にて相果候はゞ甚內に出家爲致永く庄藏菩提爲相吊可申候旨夫にて思ひ明らめ內濟仕候樣に達て取扱被申候得共存命之程も不相知手疵故是非御願申上度奉存候得共女之儀ゆへ恐入母親類共一同無據取扱之衆へ挨拶仕候處無間も父儀相果候に付甚內儀布川村來見寺爲致出家及內濟候然るに漸々四五ヶ月計寺に罷在早々出奔行衞不相知罷在候處私義幼年に及承罷在候然る上者右內濟契約之通致出家罷在候得者毛頭申分無御座候得共出奔還俗仕其後致帶刀國元へ罷越隣村にて私共甚無甲斐者之者樣に種々雜言廣言申候由後日に承候間致出家亡父之無跡相吊候と申僞一件相濟契約を變じ候儀私共見侮候仕方父者欺し打同前之儀に重々口惜奉存何卒尋逢日比之欝憤晴し度所々相尋候然る上は何國何方にても甚內に出會次第亡父敵討致度心願に御座候得共
御上樣へ對恐入候儀に奉存候間甚內見掛り候はゞ住居見屆早速御注進可申上心底に者御座候得共理不盡成者故其砌に至り如何相成可申哉難計若又及刄傷にも候事御座候て首尾能相打留め候はゞ口上を以趣意可申上候得共萬一返討に相成候歟又者相死仕候はゞ如何之始末候哉難相分儀も可有御座奉

存候に付乍恐書付懐中仕罷在候何分にも御慈悲御憐愍奉願上候以上

寶永二巳年

御代官所

御役人中様

寺社御領所

御役人中様

御私領所

御役人中様

松平内匠知行所下總國相馬早尾村百姓富吉奉申上候私親庄藏儀拾七年以前明和四亥年九月中同村組頭甚内と申者聊口論之上親庄藏儀手疵負相果申候右一件取扱之儀御座候間相手甚内義出家仕亡父菩提可相吊契約にて事內濟仕候尤其節甚内儀出家仕候得共間もなく契約相變早々寺出奔仕還俗存命仕罷在候由風說及承候に付口惜奉存候國元所々相尋候得共行衛不相知候處　御府內徘徊致候由及承候に付四ケ年以前御當地知緣求一夜二夜宛休泊仕所々相尋候所此程敵甚内見出し候に付出會次第亡父之敵討仕度所存に奉存候得共　御上へ對し奉恐入候儀故見掛り候はゞ住居相糺早速御訴可奉申上候得共右躰之者故刄傷にも可及儀可有御座哉難計萬一返討にも相成候歟又者同死仕候ても存念難相分儀と奉存如此相認め懐中仕候以上

天明三卯年十月

下總國相馬郡早尾村

百姓　富　吉

御役人中樣

一御知行所下總國相馬郡早尾村名主喜助組下百姓富吉奉申上候私親庄藏儀拾七ケ年以前明和四亥年九月十五日夜氏神文間大明神祭禮之日同村組頭甚內と口論之上甚內儀父庄藏儀に爲負手疵申候に付村役人中立會之上母親々類共御屋敷樣へ御訴申上候に付早速爲御撿使御役人樣御越被遊御見屆之上御歸府被成候然る所其節同村西光寺幷傳右衞門布川村來見寺爲取扱被掛候其節私義漸々十二歳に罷成弟平吉義は四歳に罷成候故祖父仁左衞門幷母幷親類共方へ色々利を解被申聞候へば此度の儀御公邊及沙汰候內庄藏相果相手甚內致解死人取候迚庄藏蘇生可致事にも無之間甚內儀も出家爲致菩提爲相弔申候間夫にて相あきらめ內濟致候樣にと被取扱候に付無是非一條にも存祖父母親類共一同承知得心仕候段及挨拶候に付取扱人親類共御屋鋪樣へ罷出其節御役人河田段右衞門殿渡邊平內殿より御願申上候處意味御聞屆之上御願御下ケ被成下亡父死骸引取甚內儀は於來見寺出家いたし一件內濟仕候然る所漸々四五ケ月計寺に罷在契約を變じ致出奔行衞相知不申罷成其後還俗仕帶刀致國元へ罷越隣村抔にて私共甚甲斐なき者と雜言廣言樣々申候由後日に承候て殘念至極奉存候亡父義はだまし打同前之仕方且又出家も致菩提相弔候と母私幷親類大勢に申僞事爲相濟早々出奔還俗仕候段私見侮候致方重々口惜奉存候拾ケ年以前所々相尋候得共不相知處　御府內を徘徊仕候由及承候に付表二番丁戶ケ崎熊太郎と申仁知緣を求四年以來彼仁世話罷成所々相尋候所漸々於御當地年來之敵甚內住居見屆申候に付然上者定て　御上より　御屋敷へ段々意趣御糺可有御座儀と乍恐奉存候年來相立候儀今度御糺明之節當御役人樣御心得にも可相成儀可有之哉乍恐心附右之始末以書付內々奉申上候將亦別紙之通書付二通相認め懷中仕其砌御撿使之御役人樣方へ差上候所存に御座候且又御心得にも可罷成哉と乍恐奉入御覽何分にも御慈悲御取計奉願上候以上

天明三卯年十月　下總國相馬郡早尾村

百姓　富　吉

御地頭様

御役人中様

○吉田追風相撲免許の寫〔細川越中守殿家中吉田善左衛門也〕

相撲濫觴并許狀之寫

相撲之起者

天照太神之御時より始る　朝廷にては

日本記人王十一代　當麻蹶速出雲國猛士野見宿禰爭力

垂仁天皇之御宇相撲の節會行れ候得共其作法不正爭に而已に相成勝負之裁も難分

人王四十五代

聖武天皇御宇神龜三年奈良之都におゐて近江國志賀清林と申者を召御行司に被定しより相撲式委細に相備子孫相續仕候處多年之兵亂にて相撲之節會行れ不申候志賀家も自然と斷絶仕候

八十二代

後鳥羽文治年中再び相撲之節會可被行之處志賀之家之故實傳來仕候旨達叡聞被叙五位追風と名を賜り　朝廷御相撲之行司に可被定置旨蒙　勅命候時立合に用候木劔師〔獅歟〕子之甲之御團扇を賜り代々相撲之節會之式相勤候處

八十四代

順德院之御宇又々承久之兵亂に逢候て節會中絕仕候
百七代
正親町院永祿年中相撲の節會被行候節者十三代目追風罷出候如舊例相勤申候
同御宇將軍足利義昭之時元龜年中二條關白淸長公より日本相撲之作法二流無之との言上にて一味淸
風と申御團扇幷烏帽子狩衣袴被下置其後信長公秀吉公
權現樣御代にも度々御相撲之式相勤之申候十四代目追風　朝廷御相撲之式相勤之元和五四月十七日
於紀州和歌山
東照宮　御祭禮御相撲之式依御賴御祭禮奉行朝夷惣左衞門殿と諸事申談相勤候依之御刀一腰拜領仕
候十五代目追風に至　朝廷に相撲之節會も自然と中絕に成行申候二條樣御家相撲に付御懇之筋目御
座候間他へ出申度段奉願候處奉願候之通相叶候に付萬治年中當家へ罷出申候元祿年中
常憲院樣牧野備後守殿へ被爲　成相撲　上覽之節彼方樣御家來鈴木梶右衞門と申仁入門之御願有之
將軍家上覽之式之儀一通致相傳品々拜領物仕候先祖より拙者迄都合十九代前文之通
禁裏其外之御方樣より追々相撲故實傳授仕來當時諸國之行司幷力士とも免許拙者家より代々差出申
候事
酉十一月　　　　　　　　　　　肥後家中　吉田善左衞門
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　追風
一横綱之事
免許

右者谷風梶之助依相撲之位授與畢以來方屋入之節迄相用可申仍如件

寛政元己酉十一月廿九日

本朝相撲之司　御行司十九代　吉田追風判

證條

一當久留米御家來

攝州大阪住人　小野川　喜三郎

右者此度相撲力士故實門弟に召加依之證條仍如件

寛政元己酉年十一月廿九日

本朝相撲之司　御行司十九代　吉田追風判

○伊東秋颿詩文

不佞盛夏以來。遊相甲之際。遂出于駿中。留于城下數月。不料迎呷軋轎輿。孑孑干旄。從崎陽歸東都。不相見殆一年矣。幸今見平安之容止於阿水。喜以走迎。將飮客舍。然急景如梭。日旣過午。以由井之遠。不下轎。霎時就轎簾下相話。從者不顧之。轎已發。徒勞瞻望耳。翌日從由井遣郵傳一書。敬披之則蕪曲之次韻。及薩埵眺望之佳什。賜與寓目。客舍三復。恍如蹈其地。觀其光景。則淸意可掬。謹藏之櫃中。永珍焉。伏念當。先生歸舘之後。從游之賀日滿門。且官事不遑啓處。曩所願思慕編序。委曲告崎陽嚴原之官舍。島瑞庵致書。以屢責不佞。彼固不知先生官事無暇。却以不佞之懶惰爲未成矣。伏願他日敘次一二言。以賜瑞庵。於不佞亦多幸。阿水竹枝六章。蕪辭鄙俗。以備一噱。後請投之淺草鄉返魂紙家幸甚。時嚴寒層氷維勝他歲。千萬自重

南畝田先生梧下　東秋颿稽首拜

阿水竹枝

奔流衝石動倭濱。毬驛駿城此別區。慣水土民能出沒。一身何借千金瓠。
櫻樹山邊花綴雪。船丘祠上碧如紗。天工何戲生奇石。有客褰裳撈淺沙。
輕操華柞發歌聲。氷質粽和黃雪清。行客醫飢入佳境。何人喚做稱川名。
傍水山村滿圃茶。抱籃婦女摘芳芽。幾番揀得相擔去。一曲勞歌入晩霞。
彌勒街邊二女菴。爲之陳跡立幽龕。當年奇事存人口。唯見架頭佛十三。
白道南通菴作了。翠樓紅閣競驕奢。銀燈齊點鉤簾處。蕙怨蘭思相盪摩。

○江戸風俗の事

服飾之部

諸役人〔万石以上以下小身之旗本〕

安永天明の初のころは、島琥珀のうら附上下、夏は仙臺ひら安中ひらこはくひらなど、その價至て貴きものを袴とし、小身迄なべて著せし也、麻上下も麻にてはせず、龍門琥珀麻太麻など繭をもて織れるものにて製す、小袖は黒羽二重に限り諸大夫は常に白無垢を二ツ三ツ重ねて著たり、夏はすきやちゞみなどいふ絹ちゞみの上品なるを著す、白紐のすげ笠、黒き琥珀にて作れる合羽など皆人著せしなり、大小は細躬にして多く赤銅鍔を用ひ、拵は家彫または金むくの彫あるものを用、印籠は菊壽形とて細長き五重の高蒔繪あるを提、あたひの貴きをもて人にほこり、扇は半びらきの形チやさしきものを持たり、紅毛より齎來る香箱時計をみな懐にせり、夏冬白き足袋を用ゆ、誠や太平武を不用の風俗とやいはん。

天明の末節倹の令・たび出て、忽服飾を變じ、小倉木綿京さんとめわけんたんなどをもて袴に製し、

津もじに裏つけて肩衣とせり、或は葛布に小もんがた打て袴となせるもあり、または肩衣は麻上下の上を著るもあり、提ものは無地黒の印籠或はなめし革姫路かわの大胴亂をいかにも見ぐるしきを是として提たり、網代の笠をかぶり、合羽はさいみ木綿などにて造り著るものり、一きわ當世めきたるは蓑を著て御城內を行かふさまいといかめしく見ゆ、足袋は花色薄柹など用ひ、または生木綿にて製るも有、多くは冬もすあしにせり、大小はいかにもふと身を好み惣躰あかゞねにて作り、又は無地の鐵をもて拵とするもあり、鍔は多く鐵の角鍔のあつきを打たり、鞘も一かたならぬ塗にして鐺りを鐵にて卷ぬ、小袖はきぬ紬の紋付または細島なども著せしなり、白無垢一ツに定り麻上下のときにのみ著す、麻上下はなべてみな諸麻のやれたるを著す、ゆきたけもみじかく著なし、藁のぞうりをはけり、夏はさゐみに紋かき又はあらき布を柏木にて染などして著せり。

寬政の末に至りては漸また服飾の制も美しく見へて、多くはつねに羽二重の黑く染たるに紋付て下にも白むくかさね著たるも有り、又八丈じま丹後じまなど小袖として著すもあり、肩衣は絽にうら付、はかまは唐さんとめたんごじま茶字じまなど思ひ〳〵に著せり、夏も絽もじなどの肩衣に精好じま絽よこ麻の島など袴とせり、かたびらはさらしちゞみ島ちゞみなどまじへ著す、提ものも異國の革など用ゆるもあり、又は蒔繪の印籠などさげるも有、香箱時計もすこしよき役人はみな懷にして出るなり、大小は鐵のこしらへに金を紋などおき、または象眼にもし小柄のみ家彫を用ひ、或はあかゞねのこしらへに目貫ばかり家ぼりを用るもあり、足袋も夏冬しろきをはく事にはなりぬ、殊に一般なるは老若を不問、みな常に杖をふくろにして持することとなり、しらずいかなる武用有りてか、槍とひとしく身をはなたざる事にやといとといぶかし。

藝文之部

繪双紙

三十年以前までも繪艸紙おふくは古への武者功名の次第、又はいづれの軍いづれの敵打などいへるものを繪につゞり、詞を書くわへ童蒙の見るべきものにありける、安永のころ高慢齋行脚日記といへる戯作出て、放蕩無頼の世に處する趣を書あつめ淫奔の媒となす、此編大に世に行れ、幼稚のたのしみとならず、只大人の觀となり人氣をとらかす、是より年々月々淫蕩無頼の趣を綴りて繪双紙とせり、搢紳士大夫の間此双紙の巧拙を論じ消日の談となすに至る、於此つひに勇剛孝義の著述すたれ童蒙の玩を奪ひぬ、其後寛政のはじめにおよびて作者を呵嘖せらるゝ事あり、是より又一變して心學のおもむきをとり、事は當時の洒落に渡り教訓を表として、陰に無頼者の意を迎ふ、此編數百部日をあらそふて出るに及て、さきの淫蕩の編すたる、しかれどもつひに古へに復する事あたはず、幼稚の玩好によしなし、大人もまた是を捨る事なし、幼稚の導をあやまる事すくなからじ。

器財之部

行平鍋

近きころまでは羹をとゝのゆるには、かならず土にて鍋の形せる小き器を用ひ、一人〳〵に供するに便りとす、其後安永のころよりは銚をもつていとあさくちゐさき鍋を造り出しけるより、いつとなく土鍋のまゝ供する事すたれぬ、其後天明の末より又土にも平椀の形チしたるものに汁うつすべき口をつけ、又とり手をつけて持に便ある器を製し行平鍋と稱す、此うつは一度出て一人〳〵の配供に甚便りあるをもて鑄鍋漸衰へたり、貴人の器にあらずといへども冬日不可闕の器とはなれり、そも行平の名何によりて名付けるやいとといぶかし、もし平椀の用にして暖食せる緣によりて湯氣平にいへる心にや、又は中納言の卿須磨のさすらへのわびしさにかゝる器をもて味ひをとゝのへ長き日を消し給つる

にやとおぼつかなし。

右中川飛州手書なり

○甲斐二十二將傳

著述甲斐二十二將傳之說

世有甲斐二十四將圖者。不知何人作。而傳以珍藏焉。予按諸舊記。無所據由也。昔者室町氏失其柄。諸侯力爭。兼弱呑小遂爲戰國。乃集類樹黨。以相誇張。於是家々有三老四天七槍之稱。吾玄公朝亦有號稱二十二將。咸能感會風雲。奮其智勇。深圖遠算。後世所法。各志操之士也。玄公用此輩。同計議。明鑑不差。無一不死事者。雖往古烈士。何以加哉。所謂二十二將者。

武騎將八人

板垣駿河守信形〔三郎兼信之後裔〕

甘梨備前守信益〔一條次郎忠賴支流〕

兩角豐後守昌清〔法名智賢義勇居士〕

飯富兵部少輔虎昌〔鎌倉時源太宗長者之後胤〕

原加賀守昌俊〔法名蓮朝男隼人佐昌勝法名朝原共顯名于當世〕

小山田備中守昌辰〔男昌行又稱備中守聲與父齊〕

日向大和守昌時〔法名宗英〕

小宮山丹後守昌友〔男内膳正有名于世法名賢室院忠叟道節居士次子亦七郎昌親〕

輕騎將七人

原美濃守虎胤〔法名淸岸父曰能登守友胤男曰甚四郎昌胤乃千葉之庶流〕

尾畑山城守虎盛〔法名日意父曰日淨日意弟彌三左衛門其弟彌左衛門光盛後爲山城守法名日善日意男
又兵衛昌盛稱豐後守乃小幡景憲父〕
横田備中守高松〔男十郎兵衛綱松又稱備中守實原虎胤男乃甚右衛門尹松之父也〕
多田淡路守〔始名三八男又稱三八次子久藏共死事〕
山本勘介晴幸〔法名神山道鬼居士〕
米倉丹後守重繼〔男彥次郎種繼〕
三枝右衛門尉虎吉〔謂之三枝衛府法名三星院寶山玄玖庵主男勘解由左衛門守友其子土佐守昌吉共有
聲〕

亦有

香坂彈正忠昌信〔法名憲德院玄庵道忠居士〕
內藤修理亮昌豐〔實工藤下總守虎豐次子始稱源左衛門鎌倉時庄司景光者之後也爲內藤相摸守虎資之
嗣後更名昌秀法名善龍院泰山常安居士〕
馬場美濃守信武〔始曰教來石民部爲馬場伊豆守虎貞嗣名或作信房〕
山縣三郎兵衛尉昌景〔始曰飯富源四郎乃虎昌之弟出繼山縣河內守虎淸之祀〕
甘梨左衛門尉晴吉〔備前守之男也〕
秋山伯耆守晴親〔飛驒守光朝之裔〕
土屋右衛門尉昌次〔實金丸筑前守虎義次子曰平八郎續土屋氏法名昌次院忠屋智眞居士以其弟惣藏昌
忠爲嗣法名昌忠院忠庵存孝居士〕

是稱外七人。合二十二人。若有父子兄弟同時齊名者。載其一不載其二。前後時異者。乃具載焉。至若

加藤駿河守昌頼（鎌倉廷尉滕次景廉之後男丹後守信厚又有聲）

古典厩信繁（玄公弟乃左馬頭信豐之父法名松操院鶴山巣月大居士）

逍遥軒信綱（玄公弟法名逍遥院海天綱公庵主）

仁科五郎盛信（玄公五男稱薩摩守）

小笠原源與齋。亦皆有聲於當世。而無載者。或幄中謀臣。而非將帥之數。或以貴族避之也。其餘歸降之臣。信人。

眞田彈正忠幸隆（號一德齋男源太左衛門信綱兵部丞昌輝安房守昌幸共爲世所稱）

蘆田下野守幸成

室賀兵部太輔經秀

浦野宗波

丸子良存

依田右衛門佐信蕃（依田豐平之後）

保科彈正忠正俊（越前守正直之父也）

毛人　小幡上總介信定（父曰尾張守重定號直龍齋）

安中左近大夫景繁

武人　倉賀野淡路守秀景（始云六郎）

越人　城意庵（織部正景茂又稱和泉守弟曰玉虫對馬守定茂男曰城和泉守昌茂共被知于世乃城小太郎資盛後）

大熊備前守長秀（父曰備前守朝秀）

駿人　岡部次郎右衛門尉昌綱〔內膳正長盛父〕

遠人　小笠原與八郞長忠之屬。又無載焉。

郡內小山田信有〔有一作茂曰兵衛尉又出羽守鎌倉之時別當有重者後胤〕世及之臣也。

下山之穴山信君〔玄蕃允號梅雪法名靈泉寺古道集公居士〕厚祿之人也。及

今福淨閑〔男市左衛門尉昌私新右衛門尉昌常〕

荻原豐前守昌明〔始彌右衛門法名融松院利峰道顯居士父常陸介昌勝號天眞院功岩元忠居士〕

淺利右馬助信種〔伊豫守虎在之男〕

駒井右京進昌直

溫井常陸介〔法名常叟道溫居士〕

安部加賀守〔法名慶室道賀居士〕

曾根下野守昌世〔始內匠介〕

初鹿野傳右衛門昌次〔實加藤駿河守之男彌五郞忠次之嗣〕

小山田八左衛門

秋山紀伊守〔法名秋峰道紀居士〕

小原丹後守〔法名鐵岩惠船居士弟下總守共有名法名茶岩東海居士〕

廣瀨鄉左衛門景房〔後稱美濃守男曰左馬助〕

三科傳右衛門〔後稱肥前守法名形幸〕

孕石主水〔男曰豐前守〕

小菅五郞兵衛〔男曰又八郞信有〕

早川彌三左衛門幸豐〔父曰肥後守〕
川手主稅
穗坂常陸〔男金右衛門〕
蘆澤賴母信之〔伊賀守元辰之男〕
之輩。尙不乏其人。然時不相逮。或以功名求榮于他邦。苟不令其終者。咸不載也。予欲著二十二將傳。而捜其家譜。未能全得。竊從長老好故事者。編列其事。姑錄之姓名。以俟同好人爾。

享和二戌之暮春　　甲斐　花溪　內藤禹昌

○文化元年北齋畫大達磨紀事

文化甲子三月。護國寺觀音大士。啓龕縱人瞻拜。士女雲集。率無虛日。四月十三日。畫人北齋。就其堂側之地。畫半身達摩。接紙爲巨幅。下鋪烏麥稭。以襯紙底。紙大百二十筵。畫者攘臂褰裳。縱橫斡旋。意之所向。筆亦隨之。蓋胸中已有成局。不待擬議而爲也。畫成。觀者環立。嘖々賞歎。然唯見一斑。未能盡其情狀。登堂俯瞰。所見始全。口大如弓。眼中可坐一人。其所用。四斗酒榼一。銅盆二。皆以貯墨。水桶一。以貯水。爲筆者凡六。而藁帚居三。大者如罍。小者如瓶。棕帚二。地膚帚一。皆以代筆。

右中村文藏所記

○生花祕傳圖式跋

一勺香泉。一枝幽花。蓄之膽瓶。挿之湘筒。可以供淸賞矣。可以避世氛矣。而其爲趣也。揀俏枝去凡卉。高低疎密。整々斜々。正在於有意無意之間耳。風鑑齋夢寐此趣漸入佳境。著爲一書。名曰祕傳圖式。圖以明之。式以記之。蓋傳花神之祕與。抑代化工之妙與。南畝子題於杏花園中。

○筥根山大釜

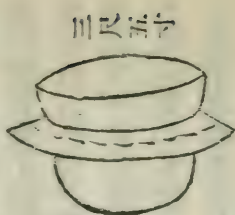
三尺五寸

大筥根山東福寺湯釜一口滿山大衆別當法橋上人位隆實
五百二十七年
文永五年戊辰十一月十二日

大筥根山大釜

三尺五寸

奉鑄冶大筥根山東福寺浴堂釜一口奉爲天長也地久御頭圓滿□□東靜謐武家安穩
別當□□眼和尚位隆實幷滿山大衆奉□□之狀如件
元年ヨリ五百十七年
弘安□□□□五月一日　　大工　豆州　磯　部　康　慶

○尾張二老傳

尾張有二老焉。皆博聞强記。滑稽不窮。覃閲不識也有翁。而愛其戲文。體中不佳時。讀之以當枚發陳檄。嘗欲刻其所著鶉衣者于東都。而未得善本也。得六林翁本。而上木行世。因識六林翁。千里面目。恍如一堂。噫也有旣爲無何有之人。六林之木亦拱矣。偶閲篋中。得二老手書。合而裝之。附小傳于後。寬政四年壬子孟夏。南畝大田覃題于杏花園。

也有翁傳

横井時般。一名並明。又名順寧。字伯懷。號也有。又號暮水。稱孫右衛門。其居曰蘿隱。曰遯窩。曰知雨亭。曰半掃菴。而其爲也有最著。其先伊豆北條氏。尾張敬公始封。委質爲臣。時般仕至參政。食祿二千石。少壯留意武事。無伎不通。受學倜齋小出氏。亡論經史集。野乘稗史。涉獵殆遍。賦詩屬

文。又詠和歌。篤好誹諧連歌。最善戲文。偶爾所筆。傳稱善謔。亦寓微意云爾。中歲勇退致仕。卜居于城南前津。蕭然如一野翁。天下好誹諧連歌者。無不知尾張有也有翁。所著有蘿葉蟻封二集及鶉衣。以天明三年癸卯六月既望終。歲八十二。葬藤瀨西音寺。

六林翁傳

堀田方舊。字維新。號恒山。又號六林。稱紀六。其先出自紀氏。世事尾藩。爲直使者。病免。起爲先鋒隊長。遷少府。出爲岐阜宰。再入爲少府。復爲先鋒隊長。老病爲奉朝請。遂致仕養志。學於松平君山。博覽無不該通。最好誹諧連歌。又好戲文。殆伯仲於也有翁。而質實有餘。雋永不足。寬政三年辛亥七月二十日。病終于家。歲八十二。葬于名古屋城南總見寺。所著有護花園錄稿。及隨筆若干卷。其他戲文不遑枚擧云。

右也有翁の手書のうちに

昨日者珍敷人にいざなはれ七寺之藤見に參申候

牛馬問に、阿波手の森反魂香の森といふ所有、彼地に遊行し稻園山長福教寺に宿す、世に七ツ寺と稱す、阿波手の森反魂香のもり此寺に有、此長福寺昔は同國中島郡下津の南阿波手浦西萱津原の裏にて、聖武帝天平三年行基の開基なり、光仁帝寶龜十一年奧州伊治大領呰麿（アサマロ）反く平治すといへども殘黨なをしづかならず、故に河內權守紀是廣勅を奉じて奧に赴く、天應元年の秋なり、此紀是廣といふは河州譽田の人、世々河內平岡に居、役に臨て其妻に謂て曰、我いまだ子なし、今汝娠り我七年の役滿は歸見るべし、又此藥師如來の尊容は我多年信じ申是をいのりて男子を產育すべしとて、妻にあたへて是廣は奧に下り、別れて男子を產り、母は身まかりぬ、此子七歲の年乳母に問ふ、人皆父母有我父母は何國に有哉、乳母淚共にしかじかの事を語る、此兒奧に下りて父に逢はん事を思ひ、河內を忍び出て

尾州に至る、時に寒風烈しく雪ふりまさりて終に下津里の邊にして身まかりぬ、又紀是廣に既に七年の役みちて古郷に歸る、今日此所に宿す、亭の長を呼て何ぞ世にかはりたる物語もなきやと問ふに、亭主曰、されば今日六七歳ばかりなる男子雪にこゞへて道路に死せり、是廣聞給ひ懷中にしるしとなるべきものもなきや、亭主曰、守り袋に藥師佛の有と申、是廣その死骸を見んとて彼所に至れども胎内に別れし子なれば、其面はしらねども妻にあたへて別し藥師佛を持ければ、我子なる事を知て悲歎慟哭して、ともに死のおもひ有、さてなきがらを長福寺へ葬んとて、彼寺に至り智光上人に事の仔細を申、親子始て對面如此今生たゞ一度言葉かはさせ給へとて上人にいたくなげき給ひければ、上人もことはりなりとて、彼死骸を壇上に臥しめ、醫王密法を修せられけるに、死躰自暖氣わたり、忽蘇生して言語をもて親子の名乘を終り、又もとの死躰となんぬ、其地を今につたへて反魂香の森といひ、浦を名づけて逢はでの浦といへり、其後人皇五十八代光孝帝仁和三年七月大震の時、海變じて陸となりし浦のたへ今は阿は手の森といふ、是廣河州へ歸り、寺院堂塔こと〳〵く造營有しより、土俗七載寺といふ、其のちは七ツでらといふ、月往年去二條帝の比には同國清洲に寺を移せり、時に大中臣朝臣安長勅を奉じて尾張權守に任ず、海部郡勝幡城に居す、安長に一女有、仁安二年五月廿八日七歳にして死す、安長も又むかし紀是廣の跡を追ふて、一切經を書寫し、此七ツ寺へ納、近國の能書を集て是を寫しむ、高倉院安元々年に始り治承二年に終る、其時の經今に存す、云々。

〇寛文元年日記

寛文元年四月朔日

隱元禪師事今度於山城國大和田村寺院拜領に付て爲御禮使僧獨智差上之允明筆之一卷獻之於柳間伊豆守謁右使僧井上河内守列座

六月六日
只今迄有來深川口人改之御番所今度本所新堀出來に付中川口へ御番所引移り候間於彼所如最前御番可相勤之旨先番之面々水野圖書高木甚左衞門山口勘兵衞へ被相傳之

○鳥銃

舜水文集（明朱）答小宅生順書云。鳥銃大明頗有絕高手。銃砲亦甚多。

全浙兵制（明侯繼高）本區（杭嘉湖）倭亂記云。嘉靖三十五年八月。總督胡侍郎宗憲搗沈家庄賊巢平之。徐海就戮。提督阮都御史鶚勦徐海餘黨悉平之。土官汪相向鑾死之。總兵盧鏜擒賊酋辛五郎。（五郎善造鳥銃今之鳥銃自伊傳始）

○日光山燈籠銘并序

曩藏獲聞
日光山中爲
東照大權現廣設道場既
已鑄送法
鐘以彰
誠孝今又聞
大猷院殿眞宇並建遂冶
成燈籠轉
達靈山用助崇奉之具
仍讃

永慕之意而爲之銘
誕樹功德並參諸天道場
旣闢慧燈方懸範鋼作籠
俾護神光爰賓法筵吐談
熒煌孝思無方冥福是薦
寶坊長明金輪永轉
乙未年正月　日
朝鮮國司憲蔡裕俊撰
知中樞府事英竣書

○誹諧

隋書曰。侯白。字君素。好學有捷才。爲儒林郎。通侻不持威儀。好爲誹諧雜說。楊素甚狎之。素與牛弘退朝。白謂素曰。日之夕矣。大笑曰。以我爲牛羊下來耶。高祖每將擢之。輒曰。侯白不勝官而止。〔蒙求續貂〕

○哈臺大鼾

許侍中璪。顧司空和。俱爲丞相從事。當夜至丞相府宴。二人歡接。丞相便命入己帳眠。顧至曉回轉。不得快熟。許上床便哈臺大鼾。丞相顧謂客曰。此中亦難得眠處。〔世說　事文類聚後集〕

按哈臺寢語。見世說考。

○王勃詩

觀佛跡寺

蓮座神容儼。松崖聖跡餘。年長金跡淺。地久石文疎。頽華臨曲磴。傾影赴前除。共嗟陵谷遠。俄視化城虚。〔王勃詩集〕

○神輿押御徒頭

京極備前守殿御目付森山源五郎殿を以御渡被成候御書付

山王祭禮之節神輿押御徒頭并組供連之書面及評義候處神威被敬候而警固被　仰付不輕事に候間深く考候はゞ仕來定之外に餘之人數心掛も有之度程之事歟にも被存候共上分限に越候從者召供し候者規模成御役當に候尤當時諸向共無益之雑費（覃云奇説）相止遠國御用相勤候面々旅行之人數等も減候得共夫とは意味も違候事故省略者無之方可然候組御徒も餝爲持候など於武門他見可羨一ツにも候間旁頭組共途中之行列は唯今迄之通にて宜存候下宿向取計等之義者私事に付程能省略可有之者勝手次第之事に存候

子六月

山王祭禮神輿押　　御徒頭　深尾八太夫
代り　長谷川半四郎

○衛生遊稿

客路

曳棃黄稻夕。極目白雲秋。遺却是非境。詩腸回筆頭。

度鞘川

舟行三十里。晩色總羈愁。雲洩半輪質。水光不耐秋。

津島の祇園社にて

露ふかき宮居や御田の朝ぼらけ

士朗を訪ひて〔俗稱井上專庵〕

玉ちらす軒よほどよき雨の秋

秋日草堂小集岡子回示西村生途中之作漫用其韻却寄懷　石川定香

當日新川宅。相逢已幾秋。遂無書札至。空眺海門秋。
此地逢佳節。如何動客愁。莫將菊花色。不及故園秋。

謝石川君馨寄懷兼留別

彩毫深識故人情。舒卷幾回秋夜淸。昔日歡因多病濶。通宵夢感合離成。
詞源共索朝陽館。筆陣高張金尾城。過雨賴含留滯意。曉雞難奈報新晴。

和西村生留別作兼送別　石川定香

滿天爽氣得幽情。況是重陽節物淸。忽有故人尋我至。豈無新賦與君成。
布帆直去蓬萊島。鞍馬難留姑射城。明日歸鄕洋海市。菊花開處萬峯晴。

用原韻再謝石川生

憐君爲慰遠遊情。留別淡交秋水淸。雲裡雁鴻鳴不止。甕中賦筆老無成。
沈痾徒臥三重郡。事業誰如姑射城。明日盃尊多少興。登高何處弄新晴。

矢はぎの橋のほとりより名勝を探りて岡崎の驛にやどらんとて
行李をしる人の方へはこばす時に內を携へければ

即興

東行にふし見がてらの夫婦づれ法師ならねばやどなをしみそ

九日登瀧山　神祖廟

瀑泉山畔歩重陽。秋水如藍菊自黄。不是尋常登高地。匹夫還拜世時康。

十日吉田城過田子直

籬菊既開松樹深。先生宿醉膝中琴。擬同處士佳辰興。征軒載酒此追尋。

西村節甫携內見過有詩卒次韻爲謝　　植田義方

暫時談話故情深。幾處提携瑟與琴。節後登高弄詞筆。龍山餘興好相尋。

登大岩大悲閣

岩頭安置木仙身。信處夢中救度人。救度不知玄妙理。躋攀好爲絶風塵。

宿吉田城（此行趣在望嶽結及）

解裝豐水曲。（豐水者吉田川也）暮磬入鄉愁。鴉噪城門月。船迴沙岸秋。
新詩慙勝景。舊話數曾遊。懇望峯巓雪。興情甘子猷。

雨中過岡崎

楚臺秋夜夢。醉後近如何。老去久無賦。不堪雲雨多。

途中

下駄傘に御油赤坂や雨の旅

客路雨

雨中孤劍涉參州。一舍一亭移客愁。啄粒雞當簷滴歩。卸鞍馬濺印泥休。
雲低驛樹松林外。波轟河梁水石頭。遠近山川難可辨。黄昏無處不悲秋。

同鄉のよしみをたづねてやどる

秋ひと夜池鯉鮒を餘所のはなしかな

病を起て初て多度の宮居に詣る

足びきのやまひのみかは起ふしに久しくいのる宮どころ哉

丙辰九月　馬曹　西村　貞（勢州四日市驛長西村庄右衞門）

○甲水源委序

甲水源委序

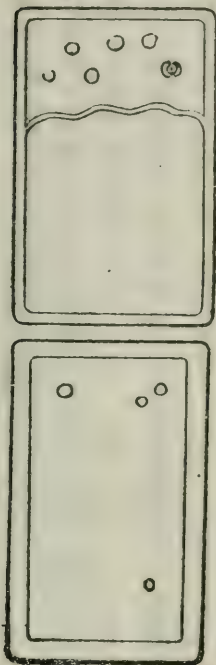
甲之爲州。環城皆山也。而南傑峙諸山之上者爲富嶽。西則七面楢田白嶺鳳皇農牛地藏駒岳。北則八嶽茅岳金峯。東則天目篠籠諸峯。比肩接踵。若夫前山之爲兒爲孫。而蹲踞於諸嶽之腰者。不可枚擧。是以其谿谷之所吐出。懸河涓泉亦許多矣。而獨其流之巨者。爲釜無笛吹又次之者爲荒河。其它百川盡爲此三河所呑。而又并呑其三河。傍引東西河内之險流早河常盤河等諸水。而走南海者。富士河也。蓋水之爲用。與火相伍。不可一日無。而其害於物也。亦不爲鮮。然有害斯有利。利固生於害。要在導之得其道而已。今茲乙丑。余命爲河隄使。行甲一再。山僻水嵩。不以險絶爲嫌。猶恐奉職不及。是以略獲窺甲水之所以害且利。所謂害者。其河身與州（甲州國郡少平衍地）款側。是故暴雨一降。則客水驟轃。一瞬之間。漂迸沙石。敗壞田廬。其慘實不可言也。然而其漲暴者。其落亦速。猶且填淤加肥。今年既荒之田。次年復爲播種之畝。非若他州一歷衝決之境永遠爲魚鰕之區也。不啻是。其阡陌之便於蓄洩。冬則洩而爲麥隴。夏則蓄而爲禾疇。一歳兩熟。如是者櫱田不下三之一。是則所以甲水之利於物獨爲優於他州也。當今所憾者。治河一塗。追世冗侈。其糜費亦不貲。此昭代之所不可不以急議。雖然河之險夷變遷亦以方與世而異。不詳其所以異。而汎乎議之。亦或不能免笑百歩之議。度支館原有河乘。而其所載冗而不精。是此行所以有甲水窺源究委之擧也。若夫治河議。則余別有論。今不復贅焉。

文化乙丑夏四月　岸　絅（字汝裕）

○花月社々（文化九年壬申八月十三日節錄）

御書物奉行（元與力支配勘定小普請方）近藤重藏（名守重字重藏號正齋）宅にて年々に古器物展翫の會あり、花月社と名づくるは二月八日にあればなり

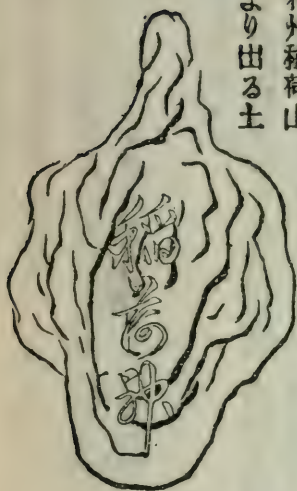
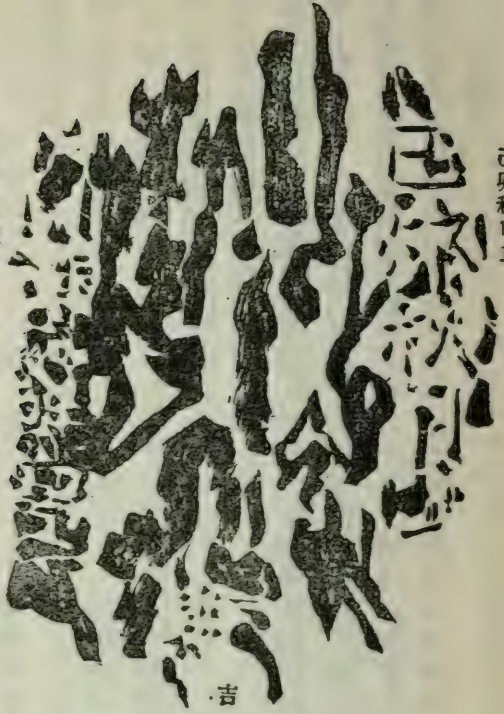
忍池藏
端溪研

黒　眼
黄
茶褐色
檀紙色

和州稲荷山より出る土

獅子風爐底

己卯秋日立

南園陳旋置

吉

胡簶福島正則舊物

藏袋福島正則舊物
太閤ヨリ賜フ所ト云
五九ノ桐　菊ノ紋金

玉盃
虎耳尋　地淺黄小柳

硯箱

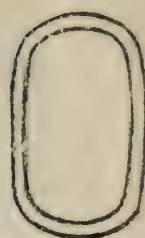
紐紫

舊物

金入

此中ニスベリベコ

奥州塩浦掘得
古土釜
市川氏藏

上毛群馬郡保渡村掘得
古土鉢
同前

大草氏藏
共面一揆發之由御書中之通承屆候いかにも丈夫に被討果可然候其方之人數にて難成候はゞ無御隔心可被仰越候左樣之事遲く候はゞ唐人めうち甲を見候ては隣鄕へもうつり可申候間可有心得候最前紙面にも如令申唐人との武篇にためらい候ては流矢の一つも被射當候ては惡候萬人之中へ只一騎乘込候へば中々手にたまる事にて無之候其段下々へも可被仰付候貴所御かせぎ御尤候恐々謹言
十一月十七日　加藤清正花押
結城大炊介殿

背に
宇多天皇
寛平三年
二月亥日
ト彫テアリ

澄泥

擅春齋藏　市橋近江守殿也

建長康元間刊鐫
兒像〔即稱狛犬〕　一雙
アウン古木像

○渡邊幸庵對話抄
同年二月五日に見廻て對面
一多舌魚の香爐を見せ被申候是は天竺にて求持參申候金は紫銅金にてかねを七色合たる物に候摩羯魚の圖も有之候へども是は大きにて重く不能持參故不求此マカツ魚の圖は假令は鯨魚の恰好にて頭に冠を戴有之候其冠は鎌倉海老の頭のごとく成ものを頭に戴有之候
一布袋の香爐を見せ被申候交趾ものにて天龍時代の出燒物にて候然ば四百年餘に成申候由
同十六日對話

一細川三斎は中古の茶湯者也、茶菓子に能登の刺鯖の頭を切て折敷に椎の葉を敷て夫にのせ箸を添て被出けり、鯖の頭の鹽出し切様に口傳あり。

一椎の葉二ツ計に切て夫を添て面々に被出ける、其葉にてすくひ喰ふ無類の茶菓子也、亦以前は香物鉢に入る事なし、三斎の時代より香の物鉢は出來ける也、兵部太輔藤孝は丹波知行の時漸三百石計の由、將軍義昭公に勤仕の時今の千石計の身上と云へり。

一天正十八年小田原へ秀吉公御出陣の時、駿州宇津山にて御馬の呑きれ申を見て、道の側の土民石垣忠左衞門と云者呑を持出御馬に打申候へば、秀吉公御覽有之、御馬より御下り結の結様惡敷とて御自分御直し被成、忠左衞門には御召の紙子の羽織を被下候、御歸陣の御時御立寄水を上り候、歸陣には水を呑申事故實有といへり、茶碗はしとろ燒なり、後世尾張紀伊の御兩殿御立寄かの紙子御覽亭主に白銀五枚被下之、是流例と成て見物の諸大名衆歴々は必五枚三枚被下候、二條大坂在番の大番頭は銀、組頭は三百疋、組子は百疋宛とらせ申候、初て通る面々必見物候て白銀鳥目を遣し申故忠左衞門至子孫於今有德也、彼茶碗は破れて今は無し。

一軍陣にて働中には素肌能し、昔の書物には其法を書申候、大方は僞り有也、其内籠の謠に甲も落されて大童の姿と成てと謠ふ、是計は實なるべし、籠手臑當抔して中々働惡くし、切られぬやうに用心するほど切られ安し、然共大法有て心儘に素肌にもならずこまりたる事なり、素肌とよろひたる者とは出會候ては、鎧たる者は大形負くべし、心持口傳あり。

一古の軍記等は虚説多しと云へり、さも有べし、信長記太閤記抔を見るに虚説多し、近き難波戰記島原記等は親く予見及たる事共也、書そふなる事を書洩し、そでも無き事を工面らしく書たる也、是に古をも被察なり。

一大坂にて井伊掃部頭殿松平隱岐守殿抔すはだにて有けるを予見たり。

寶永七寅三月廿四日對話

一加藤肥後守清正側へ忍參、組付九尺計抛ける、清正あをのけに倒て我等内甲を見て久三郎あほうすると笑ひ被申候、中々健なる武士にて力量も有ける、予若き時は碁盤の上へ鐵砲二十挺上げ心安く持上げけり。

一予が祖父は遠州於味方原討死す、久助と云、渡邊の惣領筋は八幡の土民に成て居る、昔より百石領知す、此領知之儀至御當家御吟味有之候處、何れの代より賜たる共代々の讓狀もなし、但代々源頼光自筆の物あり、依之古筆見等に被爲見候處に頼光の手跡不見知、紙は其時代の紙と云けれども、百石の知行の事はなし、又小鍛冶宗近作の四尺餘の太刀有氷の如くと云、代々所持す、箇樣の物も公儀へ上り候處、御吟味の上にて土民へ被返下百石も先規の通領知す。

一松平隱岐守殿弟に松平織部と申神君の小將也、大坂にて働有依之二千石被下、隱岐守殿より爲合力三千石代々遣被申、都合五千石也、其子は主馬亦其子も今の主馬也。

一戸田左門氏鐵弟戸田帶刀本多佐渡守と申合て、眞田伊豆守信幸子息志摩助を遺恨ありければ討て立退き、上總國中を鉢をひらき居けり、後傳通院住持職其以後增上寺に居り智哲と號、于時戸田帶刀がなれの果と名乘被申由博學也、又志摩之助は眞田家の稚名也。

一人八十八齡にして米の字を俗家に書事誤也、堂上方には八十歲にて書也、八十人と書八十人（米）。

一佛道に可性行想と云事有、可性はよし行想はあしゝとて、人の信心にも此差別有、法花宗檀方の體をみるに悉く行想なり。

寶永七寅年四月廿五日對話

一腸の出たるに、黒猫の頭に有之脳を黒焼にして、腸の出申たる程の背中に粘におし交て張置候へば腸忽に引込也、眞の黒猫至て稀成物也。

一京都の人江戸へ流浪、神明町經師屋吉左衞門介抱にて醫師と成、御茶水新屋の亭主の喘息を黒猫の黒焼にて直し名醫の名を得る、又本多内記正勝の家人子細有て自身刀を腹に突立るを側より奪取、然共腸出て内へ不納、于時右記す黒焼を背中に張候へば腸引入けり、内記殿喜悅有て可召抱旨御申ければ、醫師少々存念有て固辭す、爲合力一生五十人扶持與之と云々。

一岩蓮花本名戒禁火鎭火草棟板屋に植置ば火を防と云々。

一加賀屋敷に菊地治部左衞門と云浪人居住常行力を本として信心也、富士白山立山大峯湯殿山等の尊き山〱を不殘上る處、或時諏訪に通例の俗人上りがたき山有、治部左衞門是をも不恐上る處に異人出迎て三間計下へ蹴落す、然ども治部左衞門不驚起上り又山に登る此度は變る事なし、則山を巡見して其夜は山に臥翌日麓に歸らんとするに、彼異人亦出て此度は五間計下へ蹴落す、去共早速起返り行處彼異人聲を懸て呼て柄のなき鎌を與ふ、則治部左衞門が頬に當るを取て歸る、是より心に不叶事なしと語る、常に精進第一火を忌て他所にて食だにせず、人には客の乞物を即座に求て喰しむ、其外怪しき事共數多有、殊に劍術に妙を得る、予も行て對面しけり、此方へも一度入來す、去々年も逢しなり、いまだ存命か不知、天狗など云者の附けるか、色々奇特成事有し也。

一家康公常に御馬廻に附添申候者は菊間伊兵衞大竹勘助小泉三太夫山田四郎右衞門也、各長命にて家光公御代までも存命の者も有けり、四人中能於權田原野屋敷を被下ける時、四人並て拜領仕度旨申上面々三十五間に裏へ四百三十間宛被下けり。

一生脳は楠の脂也、夫を焼たる物也、龍脳は生脳を七度焼にしたるを片脳と云、是龍脳也、焼様天目

を蓄にして燒、其湯氣上の天目に付たる片腦也。

一竹村武藏子は與右衛門と云ひけり、父に不劣劍術の名人、手裏劍の上手なり、川に桃をうけて壹尺三寸の劍にて打に桃の核を貫たり。

一竹村武藏上泉伊勢中村與右衛門此三人同代劍術の名人也、與右衛門は武藏が弟子也、武者修行す、伊勢は泉州堺の住人也、武者修行の時於信州卒（諏訪歟）武藏は細川三齋に客人分にて居る、小坪と云所に三齋遊山所有是に茶屋有、夫に武藏居住也、歌學も有連歌も功者也、與右衛門は中村三郎右衛門子なり父三郎右衛門は能上手也。

同六月廿九日對話

一宗長の年忌に「ふる跡の名はしられけり春の草　玄仍」又宗長の句に「梅が香も岩木に同じむかしかな」我は玄仍の弟子なり、名乘は昌玄と云へり、亦頃日讀けるがよしあしもしらず迚「心よりしづかならずは靜なるかくれ家とてもちりの世の中」「あはれたれとふ人もなしさしこめて世をすきたてる門の明暮」待戀の題にて「宵の間はたれも人めを忍べども更るつらさをわすれてぞまつ」是古歌にもあり。

同八月五日對話

一女の陰門へ蛇の入たる予一代に三度見たり、一人は片羽道味療治す、先は手洗に水溜蛙を放置候處に蛇頭を出す時に足の末を蛇の際へ寄る處に可喰と致し申を引取二三度も左樣に致して後蛇に喰せ申候、亦蛙内ふとき所を出し右之通可喰と頭を出し申を二三度も引取外に蛙の中へ山椒を二粒三粒入包之外へ不知樣に認て蛇飛つき申刻最初に蛙と取替山椒入たる蛙をくはせ候へば四半時の內に蛇外へ出申候、內にては腸を卷居申との了簡にて蛙を以て指引致申內蛇も其所へ心を移し內卷ほぐれ

申考にて指引を致し申候、左もなく理不盡に出し候へば腹痛候半と有之道味考致療治候。

一石龜の小便、耳のきこへ不申に入候へば能候、此龜は龜甲有之にて候、此小便を取申には龜の口へ山椒を一二入候へば其儘小便をいたし候。

一幸蒼詠歌

おしめおしむ身さへ骨さへ皆くちて殘るは後の名のみならずや

此歌を酒井勘解由殿近衛太閤基熙公へ被入御覽候處に甚御褒美有けると被申也。

同年閏八月四日對話

一旗の立樣うるこ形に立るがよし數多見ゆる也鳩行に立るは多くても人數かさに見へざる也。

同月廿六日對話

一小西攝津守行長關ヶ原前任吉屋と云銀座に好み有て長子を養子に遣す、我が形見に殘置と云、名を小西宇右衛門と云、則銀座の家督に成ての後は江戸へ下り銀座頭を勤、公儀より五十人扶持被下けり、宇右衛門子は御醫師小川宗春方へ養子のち宗春と云、無學にて家業疎也、外戚腹に男子一人、是は京の難波屋養子となる、是も放埒に金銀を遣ひ失ひ身體を果しけり、父宇右衛門はさすが行長が子にて一器量有、當に芝大佛に茶屋一軒かり置近所火事の節は家財諸道具に構なく彼茶屋へ一家引連立退く、人笑らへば財寶は求安し命は求がたし、天下を望むも命有てこそと云。

一將軍家光公出頭の女中有り、細工上手にて公の御形を透〳〵に木像に奉刻、或時風と部屋へ被爲入急成に依てかくし申間もなく、箱に入側に置候處に、將軍家其箱を御取候て御覽何にゝ候哉と御尋候處に女中御請なく赤面す、于時彼像をつく〳〵と御覽候て是は我像に似たりと、鏡を御乞合候て正敷我が像也と上意の時、御請被申上候は日頃御厚恩難有まゝに順次を申さば、先君は私より先へ

被成御座箇也、左候はゞ宮仕の心得にて朝暮可拜ために奉刻と、心底をありの儘に申上る處に御機嫌にて、とてもの事に我が髮爪をも可遣と夫をうへ可申旨上意にて被下也、扨木像出來部屋に安置する處に重て上意に神君之御繪像を被成爲御見御木像に可刻旨被仰出出來御殿に御安置也、御二代共家綱公御代まで御城に御安置也、然に綱吉公御代に成御殿の內に被差置を憚思召て內々麴町の天神の郭內へ可被移と御僉議有之候へども、郭內せばき故大塚の御藥園を引ならし、其跡に何となく表向は觀音堂を御建立桂昌院樣家光公より御拜授の唐佛の觀音を御安置、其郭內に堂を建られ右御木像二體を被移、二重厨子に被仰付堅く鎖し花立釣燈籠各金にて造立、神君の御前には金の御幣二本被建之寺號を護國寺といへるも故有歟、寺領千貳百石也。

一太閤秀吉公御一生御手をも負せ不給不思議の御運命と云者有是僻事也、箇樣の大將は自身手を下すものに非ず、弓鐵砲の先にも不居、故に御手も負不給也、命を輕んずる匹夫の事也、一手の侍大將は縄下に成ても何卒命を遁るゝ覺悟也、去に依てあやうき所に進むは褒ぬ事也。

一予も此度の頃は心氣へり〳〵ての上なれば本復かたし、昨夕もあまり朦〳〵たる故そこら歩行して護國寺の門前より富士を見て

直上山何碧落間。千秋積雪擁東關。月明夜若星無影。富士峯前不見山。

ふじといへば時しきもゝのを三冬さへ珍しからぬ雪もめづらし

又賀の歌

人もさぞ龜のうへなる山にをふ松は老せぬ色とこそみれ

寶永七寅九月二日病氣見廻に行對話

一箱根寺は根本寺と云、往昔曾我時致が住ける寺は福壽院と云、寛永三丙寅年將軍秀忠公共に御上洛

之刻峠に御旅館此時箱根寺御巡見之處大破たり、寺領を御尋候處に古來より七百石と申上る、御歸館ありて亦御庭より風と出御八重山を御巡見候處に寺有、何寺と御尋候へば淨土宗三島の誓願寺の隱居の庵にて候本源寺と申由申上る、庭に菊を多く植て茅にて蓋をして有花を御尋候處に、山中寒氣強く常に霧深く候故日當りの方漸々三ノ一程咲申候と申上る、御歸館以後根本寺の寺領七百石之內二百石を寺領に被爲附四百石は御代官附に被仰付、寺破損修理料に被定、殘る百石は八重山の本源寺へ御寄附也。

一八重山は山の形屛風を八折立たる如く成故に此名有、萬治年中に隱元禪師開基にて此所に五間四面の白木作りの觀音堂を造立、此材木は湖水に沈み有之木を引揚げ用木とす、何も杉なり、柱板共に色々の花の形の理自然に有、右の用木の餘りにて白木の歌書箱を禪師被申付、後水尾院殿へ献上候處甚御褒美重てかの杉材にて見臺を可被仰付旨勅定有之湖水をさがし候へども自餘の木は有之杉は最早無之と云、湖水の淵は藥研の如く也中は不知、見へ渡りたる淵の土は白き也、夫へ杖を突込少暫、時有之ぬくに會て不拔、或人試に鎗を突込暫時有之拔候處に不拔なり、物にすひ付土と見へたり。

一祭禮は六月十四日也、供物は强飯二器に盛り（各五升計）御酒并肴色々是を舟に飾り神主二人乘候て湖の半にて供物を湖水に入神主は歸る所につぶ／＼と沈む時は御納受有りと皆人悅ぶ、又供物會て水に不沈神主の歸る舟の跡に付て岸へ寄る事有、此時は御納受なきとき神主も氏子も不快、峠の宿り今の海道は新道也、昔は箱根寺の本海道也、然るに寺の麓の宿の者共箱根の神事を勉め申上に馬借に勤がたき旨申立三島小田原と公事に相成箱根の者利運になる、依之三島小田原より峠に道を開き兩宿より半分づゝ建て馬借を勤箱根の本海道を塞ぎて人を不通、本海道の時は彼民家七百軒計

有しなり。

一箱根の奥水懸りなき土地へ田を作る御供領にて三百石の所也、米の味よろしからず。

一駿河に長徳寺と云一向宗寺に住持有、七十二歳にて三十年以前に卒す、無隱物覺にて駿府在番の勤樣加番の作法等前々の事を一事も無相違覺居る故に在番衆の祕藏にて何事によらず前々の事は長德寺に尋て事を辨被申候故、常に御城に呼て馳走有之、其上長德寺料理上手連歌茶湯も功者故に在番衆を毎々饗應、其度々に家具皿等を改かの前方遣申家具は旅店の亭主毎へ年々あたへ申由、料理の間の棚迄客毎に物數寄を仕替申也、日比有德にして無欲也、卒する時寢具并銀子わづか有弔料も不足也、在番衆より各金銀を贈られ、其上諸方より香奠集りて數日結構成法事あり。

一鍋松樣御誕生之時御座之力綱を懸け御腰をいだき申役人を御廣式廻り之役人之內にて御吟味之處、子を産の儘にて育立申者は添番之內加藤淸太夫一人也、歲七十餘男子五人無事末子は廿二歲也、子共を御留守居久貝因幡守殿へ被呼寄御見分候處何も器量よし健成生れ付なり、依之かの役人を淸太夫に被仰付御産後三人扶持に廿俵被下都合五人扶持に五十俵に成、悴共は皆々追て可被召出候間外に居申共私宅へ引取養育いたし可申候、其內何も二人扶持に御仕着せを被下其上赤木明神の前にて表口三十間有之町屋敷を被下〔地代一ヶ月ニ壹兩上ル〕淸太夫其前去者の方へ行所に亭主渡邊幸庵と近付故に八丁堀の石屋某の絹地に三社の託宣を賴候て、則亭主茂太夫幸庵へ申入に數出來るを何れ宜有之と各見分大文字に被調候方宜候半と一枚石屋へ遣し先一枚は餘り有之候を、淸太夫茂太夫に申けるは、幸庵とは一兩度出合表近付に候へども老人に筆を願候義も遠慮にてひかへ有之候、幸予伊勢信仰に候間申請度と懇望して貰ひ結構に表具し翌月十五日日待に懸置拜禮す、及深更淸太夫不覺して居眠る內に公方樣へ御日見へ被仰付候間上り候樣に御留守居衆より申來る、則登城菊之

間に伺公平伏すると見て夢覚たり、其儘垢離を取託宣を拜してそこに居る內又眠けり、夢中に何方ともなく淸太夫おがふだか能おがめと聲有り、あたりをみれば人もなしそこにて夢覺たり、其翌日十六日松平主計頭殿久貝因幡守殿より呼に來り右之役儀被仰付、其刻因幡守殿御申は何ぞあやしき事は無之哉と被相尋候處、右有增申上る處、扨々希代の事也、主計拙者兩人共に昨夜夢中に誰ともなく淸太夫は有難きもの也と御申聞、右之懸物御取寄候處御老中土屋相模守殿大久保加賀守殿若年寄久世山城守殿も御拜禮有けり。

同九月十一日對話

一重陽之發句をいたしたるかと被尋候故不仕と申候へば、病家のなぐさみにいたしたるとて書て見せ被申候

園菊見　見る儘に心のやどやそのゝ菊〔柴屋舊鄉花本昌玄〕

此序に被咄けるは、柴屋は宗長の舊跡を昌琢を持し也、昌琢卒去の後我等が玄陳歟と御僉議の上予に極り申候、玄陳の日比の願ひに一日にても舊跡を持度と被申候故予七年持候て玄陳に讓る、玄陳跡はそうてき其次昌程歟、はや此時は委敷僉議は無之由なり。

一予病氣不宜次第に氣力衰候へば此度は果可申と思ふ也、死後に人の若尋る時箇樣に書置たると云べし迚あたへ被申候

右者野叟獨歌舞於石上而誦之曰三樂人生難遇太平世吾有今不見兵革此一樂也人生難得支體完備不吾身殘疾此二樂也人生難得壽吾今百二十九矣此三樂也

寶永七庚寅年初秋日　　　　渡邊幸菴〔朱印〕

日次前後

同月六日見廻對話

一大阪御陣に予が討取首之內にて眞田平六第一也、予感狀は一生に十八通此內遠州見附にて拔群の働有於大阪拙者取候首は横田甚右衛門別に記之入御覽。

一予が父は渡邊久助と云荏原の城責に討死す、一家は皆御譜代也、父は渡り奉公して何方にても三千石取し也、予は天正廿年に家康公へ被召出關ケ原御陣の刻は御留守を勤し也、予が稚名久三郎後號下總守。

○上野凌雲院勸請圓稻荷之事

一享保十三年戊申二月廿日東叡山凌雲院前大僧正實觀より弟子慈雲院空潭をもつて被申聞候は小傳馬町三丁目津村三郎兵衞と申者の妻〔名おゑんといふ〕當年廿六歲に罷成候去年霜月中頃物怪有之大僧正へ賴來り祈禱などいたし遣し快氣の樣に御座候所猶又正月十八日より致再發今月に至り一昨十八日より以の外あら立物の怪のわざと見へおゑんに自滅などすゝめ候者有之由依之三郎兵衞家内の者共驚きまた〳〵大僧正へ賴來候如何いたし可然候半哉了簡も有之候はゞ被承度由被申聞猶又慈雲院委細病人の樣子被物語候上則御符守常之通相認慈雲院へ相渡候也一御符三包壹包に七粒宛入内壹包は病家へ參着次第一度に七粒頂戴いたさせ殘り二包は七日に致頂戴候樣に幷居所の四方へ張候守も遣候也

一翌廿一日使僧を以て昨日御符遣候以後義尋遣し候所にいまだ何の沙汰も無之由申來候也

一同廿二日慈雲院より申來候は一昨日の御符□先方へ遣し則一昨夜は御符七粒頂戴爲致候所腹内より喉をしめ殊の外苦しめ殊の昨朝一粒頂戴いたさせ候節も其通りに御座候由昨日三郎兵衞參り申候勿論咽をしめ申候事は十九日より始りたる事にて一昨日御符爲戴候節も兩度共に頻りに腹内よりしめ苦み强くしばらく絕入氣付抔用ひ本性に成候由御符戴候ても口走り候事も無之一昨日昨日共に先靜に成候由御座候猶一兩日の內相替候義申來候はゞ可申入由告來り候

右の通に申來候に付咽をしめ候とても御符は相やめ不申候樣にと及返答候
一同廿四日使僧を以慈雲院迄手紙添樣體相尋候所返答に被申越候は先日の病人の義昨日三郎兵衛參り最早善心に立歸候間おゑんに付大僧正へ參り委細直談仕度由申越候に付搆ひ候ては可惡と存善心に成候はゞ狐形にて直に參候樣にと申遣候處昨夜また三郎兵衛を以て立除候て右の手水鉢の邊へ狐形現じ可申候乍去とかく狐形にては咄抔仕候事難成候間今日參度候由申越候得ば狐形見候にも不及おゑんに付參候事も無用に候申度事候はゞ以書付申越候樣にと申遣候いまだ其返答無之候一昨日より御符頂戴爲仕候ても咽をもしめ不申猶又社を此方へ引取くれ候樣にと申越候故今晩にても天氣次第指越候樣に申遣候段々しづまり候體忝存候由被申越候也猶又申遣候は段々鎭り候體重疊の義に御座候得共御油斷被成間敷其上社御引取被成候事必々御無用可被成旨申遣候也
一同廿五日慈雲院御入來去る廿一日以來の義咄有之扨昨日御返答に宮引取候事申進候は間違にて御座候被仰聞候通成程引取申覺悟にては無之候早速傳馬町へも右之段申遣候病人事彌靜に罷成御かげにて忝候との御事故昨日も申進候如く物怪除候とは不被存候廿一日より七日程之日積りにて祈禱をも始め修行いたし見可申候はゞ相濟申間敷候不斗拙僧罷越加持をもいたし候はゞ樣子相知れ可申候乍去三郎兵衛方へ拙僧參候儀被御遣間敷候狐付等耳驚き仕候ものに可參候義承候はゞ逃失候事數多有之候間不意に押掛可參候左樣に御心得可被成候とかく廿七日比よりそろ〳〵彼者にさはり見可申旨相達し慈雲院被歸候
一同廿六日慈雲院より手紙來る昨日參候て承候御挨拶の趣大僧正へ申聞せ候然而昨晩方別紙之通申越候に付左程の神に候所不借法力候ては立除候義難叶候はゞ其通にて不離罷有候樣に申遣候此根井新兵衛と申者は去年中よりの近付にて不斗見舞に參候由此者に爲落候心にては無御座候申越候尤昨日

の樣子も中／＼新兵衞落候事罷成間敷體に相聞候由此方へ參候手代喘申候右可申述と如斯候則彼方よりの手紙狐口上書掛御目候大僧正も宜申進候樣と被申付由申來候故委細致承知候旨致返答三郎兵衞方よりの手紙并狐口上書も返却候故留ては無之候得共狐の申分は上野の法力にて相離候に付中々碁目にて離れ申者では無之段申越候

一同廿七日今日迄に御符遣候てより一七日も過候間致祈禱遣候半と酉刻過より行法に取かゝり候也

一同廿八日廿九日時取如前日每夜三月朔日まで修行候所何の驗も不申來候也

一三月朔日慈雲院迄手紙にて申遣候は此間は御左右も不承候夜前などは殊外行法も致相應候如何夜前抔の樣子承知仕度旨申進候に付則彼院より傳馬町へ被相尋返事をも被爲見加程に靜に成候ては却てむづかしき方にては無御座候哉若迯去候樣の義にても可有御座哉と被申越候故猶又申遣候は被仰聞候通中々大概のものと不相見候間明二日四ツ前比より黑衣着用仕忍候て推かけ參加持いたし樣子見候半と存候左樣御心得可被成候尤加持を寄に仕候歟また直加持にいたし候半哉其義は彼者方の樣子次第に可仕候先はよせ候覺悟にて出家も兩人召つれ申候間手間取候ともよせ候樣に可致と存候旨申遣候也

一同二日四ツ時出家兩人召連小傳馬町三郎兵衞方へ參着此家に東叡山凌雲院へ相賴候病人有之由に付彼院より拙僧被相賴參りたりと申候所三郎兵衞は他出の由丹波や五郎兵衞と申親分の者出迎大僧正樣へ御苦勞奉掛候病人此家主三郎兵衞妻にて御座候とて病人の母五郎兵衞と兩人にて召連座敷へ罷出病人の樣子去年以來の事共有增申述此程は善心に罷成候樣子に御座候乍去如何程の義にて御座候半も難計奉存候共上此間は餘り外之義は不申われを　宮樣の前へつれゆけつれ行さへすれば何事も相濟候と計ひたと申候勿論病人申候は能御出被成候など申候得共正氣の程一向難計候に付取合不申

兩人の者に致挨拶去年以來の事承候也

一病人幷五郎兵衛も申候は根井新兵衛と申仁去年初發の時分より此元へ被參此間も不斗御出に付墓日候義御賴申候兼ては先月廿八日より始候筈御座候所ちと指合候義有之昨日より始り來る七日に相濟候筈に御座候と申に付拙僧申候は兼て凌雲院より承候は此義に付此義は相止候筈の由にて候如何いたし及其義候哉と相尋候得ば病人申候は三郎兵衛物入も御座候得共不相整候ては親類共の內合點不仕者も有之態と稻荷より直に御賴の事に候よし申候故拙僧存候は前後の事樣子も急にはしれ難く候半と直に假宮の前へ向病人は後ろに指置神拜等相濟加持に取かゝり一座修行畢て伴僧助候て有之普門品心經等法施畢り直に病人に指向ひ加持三座引纖修行〔神物加持を都合四座也〕畢て休息候處蕎麥切申付候由病人拄配膳病人も罷出平生の如く時宜など申述候なかばに五郎兵衛に申候はあなたひ〔へ歟〕おくはんたいにて不被申上私罷申出上度候事も御ざ候へ共野狐と被仰候て名も違て候故御めにも不被掛候と申に付五郎兵衛申候は申上候事も有之候はゞ直に被申上候へ不苦と申候也左樣に御座候はゞ彌御加持被成可被下候と申に付加持之事相心得候蕎麥過候はゞ追付猶又加持可遣旨申〔此節最前の加持に野狐をよせ候事彼者存候は重て神明を勸請申加持いたし候は如何可有之哉と食事之內に存付後の加持に神祇を勸請する事此とき致決定たる也〕扨蕎麥切も過休息之內病人機嫌克正氣も不違體にて彼此致世話罷有候也頓て加持に取かゝり候半と存候節病人申候は上野より御出被成候御出家樣之事なればよき折節にも御ざ候御出被成御目にかゝられ候はゞあなたにも大僧正樣へ御みやげにも能御ざ候半に今日は如何いたし候て御出不被成と申候間拙僧申候は被出候にも及び申まじおゑんをば今日此方へ請取出入之有之者は何方へ成共勝手次第に參候樣に祈りよけ候覺悟にて參りたり用事も有之候はゞ出らるべし左もなく候はゞ勝手次第にいたさるべし加持は押付相始候と申〔其時に召

連候兩人之出家に申候は今晩夜に入候事も難計又明朝迄手間取候半も心元なし自庵に急務之いたしかけ候事面々一分之事に付候ても內外之所用等無之候哉と相尋候へば指當り急務無之旨申に付加持を初候也」病人に指向候へば五郎兵衛樣〳〵とひたと呼候に付脇に居候者押つけ五郎兵衛參候由申候ても「此時五郎兵衛自用有之呼に來り歸たるうち也」また五郎兵衛樣〳〵とよび候事一二三度也「加持の前方便に取掛候節五郎兵衛も參り申候は御加持之內病人狂ひ候事などは無之ものに御座候やと相尋候間其程難計候へども口〳〵に人をばつけおき可然候萬一はしり出候へば力強く足早きものに候間其用心しかるべしと申す」それより病人申候は御咄被成御逢被成候はゞ御出の御出家樣之御みやげにも可罷成候に如何いたし今日は御出不被成候哉とひとりつぶやきまたは五郎兵衛に向ひ咄し抔いたし罷在候拙僧は不相構以前存付候ごとく至心に神明を勸請し加持を初め一座畢と二座めに取懸り致加持候內病人の行儀崩れ身をまげ手をあげ頭をかき或は片手つき候にも左右をあちこちといたしもだへ口には御出被成可然と申事をくり返し〳〵申候其節加持之內五郎兵衛申儀相聞へ候はいつも御出被成候に手間もとれ不申候此間上野へ御出被成候節も早速御出被成候今日は御加持の御法力に恐れさせられ候歟中〳〵あの御樣子にては御出被成候事はならせられ間鋪相見へ候と申せば病人申候は加持あれば必ず出るはづの事也玉藻の前は加持なかばより出たる也と申す然るに今日は何として御出不被成候哉と病人ひとりして應對のことばやむことなく次第に聲だかに口上もしきりにはゝ言になり五郎兵衛と應對いたし又は一人にての應對相聞へ加持も病人の聲につれ三座めの加持はや念誦すみ候時數珠の緒きれ候を投すてゝかゑの念誦取出し候節同時に病人申候は出ていはふと申候言は耳にいり候とひとしく拙僧左之脇へ飛來候其氣色言葉に述がたし天井より物の落つるが如くにて其足音少も聞へず居よりすり付拙僧膝の上を扣き能きゝやれ其方上野より參られ候へばおれ

を宮様の前へつれ行べし御前へさへ出候へば何もかもすむ事也と二三くりかへし申に付拙僧申候は其方望の如く成まじき事にてもなし去ながら能合點もいたし見らるべしおゑんを宮様に御存可被成哉又口にて申事にて相濟候譯に候はゞ拙僧聞屆候て申上候事是は成まじき事にても無之其方願之筋相立候譯に候はゞ幾重にも大僧正へ申拙僧もとも〳〵可申上と申候へば病人しからば其方必ず宮様へ申上られ候半哉と申に付筋有る事にて下の事を上へ申上候事當の事に候へば其方願にても筋之立候事に候はゞ何がさて言葉を請候にも及ばぬ事慥に可申上候と申候へば猶又拙僧膝の上を二ツ三ツたゝき能きゝやれ願ひといふはまづ宮地がほしひじやて先達て白銀町といひたるにより五郎兵衞三郎兵衞など相働きしろかね町土手の内に宮を立て外へ見へぬやうにいたし置くれ候半と申候間夫にては本望に無之故相止候此上宮様より公方様へ仰せ立られ宮様の御貰分に成とも被成白銀町廣小路の内にて多分によらず地を被下宮を立候様に願ひ候也地の願さへ濟候へば社立候事抔は佐竹屋敷にも手傳くれ候者も有之猶また佐竹よりも我等方へ申遣候事も有之に付先日書狀を認め遣候此以後上野へ客分に移り候はゞ其跡にて開き見候様に申遣置候間宮建候節も皆々打より致世話くれ候はゞ出來可申候地の事も相濟宮も立候はゞ位階の事は三郎兵衞物入等世話いたしくれ候筈の事に候間是も相濟可申候此等の趣とくと能々宮様へ申上是非〳〵宮地の事御貰被成被下候様に大僧正へも申おゐしも能取持申べしと申すに付相心得候旨申候へば長聲して聲をあげあゝと申故何事をかと存候へば貌をふり大僧正（コノ邊スベテ本ノマヽ）は德が高ひ申〳〵いはれる事でなし先日上野へ参候節も大僧正を惡口して罵のゝしり候へ共少もよからぬやうにいひなし凌雲院を出て其歸りがけに中堂大師其外諸堂不殘致參詣歸りしおれが眞實に上野の事大僧正の事大切にも不思は道筋にて高聲し駕の内よりわめきゝくも體多はおゑんなればいたし方も有之間敷處無其儀神妙に歸候事是上野の事大僧正の事大切に思ふ故也

此方へ歸り大僧正德のあつき事を皆〳〵に申きけ候へ共あれらが申計にて人の合點せぬ事也大僧正も自分に自分の事は申されぬ事也それはおぬしなどゝても自分がよき事はよしとは申されまじき事其方など合點の事也其譯とくと申べしと申候節拙僧尋候はその方は何れより參候哉と相尋候へば病人分別貌にて先江戶さと一聲申す歲はいくつに成候哉と尋候へば其事も申されぬ也乍去先日上野へ申遣候間大僧正へきゝやれと申す扨名は何と申すと問ひ候へば何といふことや有べき其方のしるごとく也といふ拙僧申候はしるごとくと云はいぶかしく名を申候へといへば愚癡なる坊主かな〳〵と二三度くり返し罵り候（此時拙僧恐入候事心腑にてつし候加持の前方便に神氏を勸請申て加持を始候事を名は其方が存しるごとくと申候一念の間を加樣に申候事善惡苦樂の事に付存合難有覺へ候也然共白狐とても狐なれば左樣の形あるべきを存より名を尋候故にや甚だしかられ候）拙僧申候は成程さきに勸請申候て合點いたしたる旨申候へば病人申候は大僧正おぬしなどは合點の事に候へ共新兵衞などは其合點無之候故墓目をも賴ませ候也其儀は新兵衞計にてもなし町內の者も半分程は三郞兵衞所のおゑんには狐が付たりといひ半分程は神にても是あらんと申者もあり親類の內は勿論其通り佐竹屋敷にも右之通り半分〳〵に思ひより居候間ひきめを射させ王子の稻荷へも面談せねば第一此家のおゑんがすたる也おゑんがすたれば大僧正もすたる也大僧正が捨れば上野も捨る也上野が捨れば宮樣も捨る也宮樣が捨れば公儀もすたりおぬしなどもすたる也夫ゆへに此譯を立候にはひきめもありてよし王子のいなりへ面談候へば猶能候故此間も王子へ人遣候處逢ともなかりやる譯か今に返事無之と申に付拙僧申候は成程神明にて可有之候乍去神明のわざとして不利益成事は有之候哉と尋候へば病人申候は一つとして不利益成事なしと申す拙僧申候はなしといふべからず病人また何をおれが不利益成事いたしたるやと申に付拙僧答候は神明と申譯に候はゞ大慈大悲を基ひに

被致蜉蝣蚊ひとつも殺す事なく露計の事も人の爲にとこそおもはるべきに去年以來この家のおゑんを苦め被申候家内親族の者ども足を空にし或は醫療祈禱の物入不少此等の事利益と申べくや其上天照太神八幡宮にても御座あれおゑんをはしごにいたし候事此執をくだくべき祈りなければ不叶況や其餘の邪氣に於ておや拙僧今日此元へ參り候事もこの爲に來りたり早くあられ候へと申候へば病人申候は成程おぬしの被申候如く先日上野へ參候節大僧正も左樣に被申候乍去それには多きに譯のある事也世に志し勝れたる人また世間にまれ成人もあればこそ加樣の不思議をも顯す事也能々きゝやれと叉膝の上をたゝきいたけ高になり當時公方樣の御政道宜く候故之事と思ゑし其譯云に及ばず事によりて御しわき事あり去ながらこゝはよしと人さし指にて自分がむねをさし示す事三度也唯々神佛の事有かなしのやうに下へ移り候事是ひとつの我思ふ所也代々の將軍にも無之公方樣也是により白銀町の宮地など被下候はゞ神の事をも御捨なき譯を下への利益と思ふ故此家のおゑんに因緣有により託し願ふ也扨宮地被下候はゞ宮を建候事はみな〳〵世話を賴置也社頭も出來候はゞ大僧正へ遷宮の節被參候樣にと先達て申遣候へ共猶更おぬし能賴む也宮移りもすみ其後神位も相濟候はゞ彌人の願をも叶へ候半と思ひてしばらくおゑんに託したるは此事有に依て也不利益と思ふべからずと其時拙僧申候は下への移りと申は國家の事を思召ての事に候哉と申候へば病人申候は成程〳〵其合點能候と申に付段々御願之趣承屆候乍去社地社頭の御願の事は上野へ申立候ても是は分絕候事と存候へ共先御申候通相達候半と答へ候へば病人申候は宮樣公方樣御合點に候へば出來申候宮樣から是非〳〵と御願被成御貰分に成共被成候樣に能々賴む也萬一夫ともならぬ譯に候はゞ上野か天神の臺に大社に建度候小宮は乍もなし地を被下候はゞ夫は成次等の事に候乍去とかく地被下候樣に申べしおぬしも此上隨分と世話を賴む也此旨能々宮樣へ申上くれよ〳〵とくり返し〳〵申候に付拙

僧申候は是まで委細に承候大社の御願ひも御尤に候人々の願申上候も大ひに志候を以て佛の心にもまた道を學び候ものも本意にて有べき事也然ば天下國家の守護の事ゝ相聞へ候生有ものはあぶ蚊といへども殺す心なく其上大僧正を後ろだてにいたし被申候上は三寶の尊敬もおのづから相聞へ候天下國家の守護を被致候事を承候へば近々日光へ御社參の御沙汰も有之候定て御油斷は有間敷候と申候へば病人成程〳〵と殊外悅ばしく打うなづき申に付則五郎兵衛並病人母三郎兵衛初め家內の者共等に打向ひ申聞候は先刻より靈の物語其方なども承候通少も神靈に曲り候處不相聞候拙僧共頭をまろめ候とても利益邊の事修行と申も此外は有間敷と思ひ候曲りたるにこそ蟇目も加持も□候處有之候半に少も曲りたる事見へ候はねば此上は唯々神威增益して神の願ひの成就と申は則人民の願ひの成就に候旨申聞候へば五郎兵衛を初め何も難有奉存候と申す拙僧猶又病人に申候は願の筋も承候間罷歸大僧正へ申宮樣へも申上候事は早速可相濟事也然る上は先達て上野大僧正迄客分に御越候半との由承之幸今日御同道可申候拙僧駕にめされ御こし可有之候也先日委元假宮之事先達て三郎兵衛より大僧正迄移し可申とやらん承越候拙僧方より押へ遣候今日幸に可致同道と申候へば病人申候はそれは今少またねばならぬ譯有之て被參間敷と申に付何として被參間敷やと尋候へば今日すぐに上野へ參候ては今迄致逗留候おゐんもすたり候也前に云如く公儀迄もすたる樣に成り候由申候故夫は何として左樣にすたる譯有之候哉と尋候へば最前も申候通に町內之者並に親類とも佐竹屋敷神と云者半分狐付と云者半分にてひきめもすみ王(子歟)寺の稻荷へも逢候はゞ世間の狐付抔の類遣と候譯も相しれ彼者共も信を與すべし其後上野へ客分に參るべし夫迄は此元におらねば公儀もすたるといふは此譯也と申すに付何とも此儀致領掌がたく候へ共今五三日おゐんをかし置候へば末に長き大利益の御心掛有之儀其上公儀迄捨ると御申候を承候ては何れの道罷成間敷とも難申候然る上は右御申候御

用相濟候迄はおゑんをかし置申候おゑんが一身は今迄其許住居の家の事に候へば立除候節は隨分不損様に修復をも被致上野まで當分客分に御越あるべく候乍去我々凡夫の上の事此元へ參りたる故に段々其元用事相濟日限迄も相極候同前之事に候然る上は大僧正迄一通可被指越候夫を以大僧正へも中宮様へも可申上と申候へば成程書てやるべしといふ時五郎兵衞病人の前へ硯箱指出す則相認候其文に

新兵衞ひきめもすみ候はゞ王子（子微）のいなりに逢候て後其元へ參申べく候當分客分になされ下さるべく候其元へ引越申さぬさきに其元へ逢申物語致度候宮うつりまでの事たのみ申たく候

大　僧　正　　稻　荷

右書面之相認候内五郎兵衞に向ひ申候は親類中半分〳〵と申事ひたと病人の口上に相聞へ候此家の親類中の事に候哉と申候へば五郎兵衞成程仰之通りに御ざ候と申を病人書面半分も出來候と相見へ候節夫はおれが云てきかせう〳〵と申手に筆を持口にてものをいひ候事書面無覺束様に存じ先とくと被相認跡にて緩々と可承と申せば病人あゝ聞し今いふてきかせう〳〵と申うち書面も出來候を請取則五郎兵衞にも見せ候上懷中いたし候節病人申候は先此家の親類何某と申候者遠國商致し他國に子代并に妾をも指置致往來候有之妾致懷體（胎微）候内用事に付江戸へ參候跡にて娘壹人致出生候處間もなく相果候を何某が方へは隱置船頭の子を入子して成人いたさせ候得共是を入子とは不知故に右の妾に娘も有事なれば母子共に江戸へ引取候故本妻は心うく明暮なきしみつきて相果今に迷ひ居候彼の夫の何某も相果候に付他國より參候妾も尼になり入子の娘にむこをとり御袋様と仰られ居候是に依ておれが去年以來爰元へ參りてよりその尼にも申候は其方の事は不存寄果報なる人なり然るに何某夫婦は苦患にしづみ候に其方の事寺參り彼此ともに人見せよき後生被願候得共夫にて中々彼の某

がうかぶ事にてなし共方家の爲に成難く身の上も危き事也一捻の香をもるとも誠の心を以てもるべし誠なくしては僞にもなるべからずあやふき事也と毎度いへば共者氣にあはぬやら此家の娘に狐が付たり氣が違つたりといゝちらけさま〳〵に申候へ共おれが娶へ來ぬ先またはおれが歸りての後にても此家の娘の事は人々にも聞てやれ女なれども正直にして慈悲あり篤實成事いはれる事でなしと申節此家の娘とはおゑんことにて候哉と尋ね候得ばおぬしは能知りたりそのおゑんことなり誠有りといふに付ておぬしに云ふていらぬ事なれ共誠なる心の噺は宮樣へも申上くれよ白銀町土手に柴田玄意といふ小兒醫師あり去年おゑん弟の孫三郎春秋兩度大病相煩ひ就中秋の病氣の時百死を遁れ難くたれながらへんといふもの一人もなし然るに玄意致療治遣し候に付無程致本復候依之おゑんも常に心に存候は子共醫師にて候得共何角兎惑の療治の譯扨大病の致本復候上は大人小兒のさのみ替有間敷ければ自分に何を煩ひ候共この玄意の藥申請候半と心に思ひ居候節去年霜月の病氣以の外に候故家内の者は彼是と申候へ共おゑん是非〳〵玄意の藥をと相願ひ玄意へ

已下不寫候內本書返し申候、右之外欠たるところ追可補之

○後櫻町院御引導

窮陰已盡一陽前
看過四時代謝遷
覺果自新成熟早
　恭惟　新發駕
後櫻町院尊儀
　宿因深厚

除却障礙
得寶位於日域
不建皇極六十六州
撫民庶於春園
長在仙宮四旬餘年
王道蕩々
無黨無偏
愛世尊之遺囑
領至教極理之眞詮
誦金口之具文
信轉女成佛之忽然
即往無垢界
孰分彼此淨穢
直指成佛道
豈涉遲速漸圓
達忘則眞元非他物
如幻則離不假方便
會斯理則
生死則涅槃

凡情佛性則無隔
煩惱即菩提
　流水流氷同一川
心外無法　活路通玄
雖然末後更呈金言
一句以謹奉示授
擧鑊子鑿空云
　諸法寂滅相
　不可以言宣
　　以上
文化十酉年十二月十六日酉上刻
　右御導師泉湧寺中新善光寺讃海長老
　○鈴木白藤紀時事詩〔文化十一年甲戌〕
門松疑是近新正。〔首夏都下市門皆建松竹。一望宛如初春云是禳疫。〕淸泉湯沸自然鐺。〔金龍寺看物場有自然鐺。不薪自沸。〕長竿釣得黃金佛。〔一士人品川海釣得黃金佛長一寸八分。〕豐稔方呈白雪祥。〔中冬六日七日十二日十五日雪。皆盈尺。〕德本上人重出定。〔僧德本出山。住傳通院。不火食。唯稱佛名而已。詣者如雲。飄然歸山。人皆仰其高行。旬日而又至。價大減。〕中村芝翫再登場。〔戲子中村芝翫。名優也。去年癸酉歸大坂。今茲七月又來。演戾駕籠。銀杏園大振。〕頻傳淺草謎坊主。〔一僧來淺草。能解廋辭。隨問而答。如響。所問皆妄意鑿空。解皆有條理。意想所不及。眞奇才也。〕新下市村三五

郎。〔橘園叢書。迎嵐三五郎至。始得開場。〕

鐺。都昌切。音當。銀鐺。長鎖也。漢書。作琅當。又庚。韻。音撐。釜屬。有耳足。宋太祖紀。雷德驤判大理寺。言趙普强市人第宅。上怒。叱曰。鼎鐺猶有耳。汝不聞普吾社稷臣乎。引柱斧擊之。〔下略〕此借隣韻〔正字通〕

○釜

八年吳明國〔洞冥記有吳明之璣〕貢常燃鼎。量容三斗。光潔類玉。其色純紫。每修飲饌。不熾火而俄頃自熟。香潔異於常等。久食之。令人反老爲少。百疾不生。〔杜陽雜編〕

麻城毛柱史鳳詔爲余言。近日平岩縣耕民得一釜。以凉水沃之。忽自沸。以之炊飯即熟。釜下有諸葛行窩字。鄉民以爲中有寶物。乃碎之。其釜複層。中有水火二字。亦異哉。

右精里ヨリ抄シ來ル云其書ヲ忘ルト後圖書集成釜部ヲ閲スルニ云

獅山掌錄。平谷耕民得一釜。水沃沸。炊則熟。下有諸葛行窩字。碎之複層。中有水火二字。

集成前ノ書ヲ節略セシ者ナラン

○攝州有馬湯山町古文書

攝津國有馬郡湯山町の戶長池坊左橘右衛門先祖より傳來の品々寫

爲見廻帷子二到來
誠以遠路之心入被
悅思食候仍高麗之事
彌別儀無之候大明國も
不可有程候也

六月廿八日判

湯山

池坊

蜜甘一折送被懸

御意候寔實翫不斜候

かた／＼以面可申

述候恐々　謹言

二月三日　秀吉判

筑前守

左吉殿　秀吉

御宿所

書

昨夕こゝ元へ参らせ候にたつね

候へは御そくさいと申目出度存候

御隙に御出まち申候ひさしく

不参候間可得貴意候此淺黄

しき人くれ申まゝ一端おくり

申候おかしく候也

十九日　判

池□□様　宗和

攝州有馬湯山御藏米御算用狀

一六拾壹石九斗三升　文祿四年拂殘

一百五拾石　慶長元年納物成

一百五拾石　同貳年納物成

合三百六拾壹石九斗三升

右之はらひ

一拾石　大藏卿局御湯治の間のまかないに被下大藏卿局さし紙在之

一貳百拾四石貳斗六升　湯の山御うへ御殿大ぢしんにそこね申候をつくろい申候入用

一三拾七石貳斗六升　同所御けしやうの間つくろいの入用

一拾九石貳斗三升　同所御湯殿のつくろい入用

一拾九石壹斗　同所御せつちんつくろいの入用

一拾八石七升　同所御ゆやのつくろい入用

一拾四石壹斗六升　同所御すきやのつくろい入用

一六石三升　上樣御湯治被成候に付かりの御殿立申候入用

一八石三升　古材木入置申候小屋之入用

一拾石七升　御くみ湯の樽の入用並人足飯米小日記に在之

一拾八石貳斗壹升　薪湯かりのゆや同ゆのわき候水船之入用

一貳拾五石六斗三升　同所御馬や貳間半に五間半之入用
はらひ
合四百石五升
過上三拾八石壹斗貳升
右之外
一銀子貳拾四枚　御朱印　慶長三年分
一銀子貳拾四枚　只今迄　同貳年分
右皆濟也
右拂　御朱印並小帳請取申候此日付以前之拂
御朱印小帳等雖在之重而御算用に相立間敷候也
慶長三
十二月廿九日
長束大藏太輔判
石田治部少輔判
增田右衛門尉判
淺野彈正少弼判
德善院判
善福寺
池之坊
掃部

禁制　　攝州湯山

一軍勢甲乙人等亂妨狼籍事
一新儀課役事
一理不盡入鑓責使事
右如先規令停止訖若於違犯之輩者速可被處嚴科者也仍下知如件
天正八年三月　　同判

太閤樣御湯治之時當所地下人酒さかな以下なにてもかい候て進上申候事かたく御停止なされ候其外之物も無用被思食候へともけに上度候はゝな大こんこはう又もちなとのやうなる手つくりのたくひはぬし次第に可進上之由被仰出候也
文祿三年十二月八日　　木下大膳太夫判
有馬惣中

禁制　　湯山中

一亂妨狼籍之事
一放火之事
右條々相そむくともからにおゐてはくせ事たるへく也

九月廿日　　　　　　　　　　　　　羽柴左衛門太夫判

　　　　　　　　　　　　　　　　羽柴三左衛門判

應安のはじめ關東關西の官軍一時に蜂起により京都警衛のため白旗を打立ける其比上總介病ありて有馬の出湯にありしをも同道せむと立よりそれよりつゝみのたきにおもむき妾にたはふれ居けゐ處に彥部秀光將軍よりの御內書持參しけり則これを頂戴し某もはや勤履候べし御請のしるしには天下全く打しづめ千代までめでたき狂歌一首奉れとて

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　則　祐

音にきくつゝみの瀧を來て見れば上にはちゝとたむほゝの花

天正十八年十月四日於有馬御茶湯會席の事阿彌陀堂にて御茶湯座敷

二疊敷

一御床きだうのぼくせきかけて

一長そろり　くたにいとを通し床の柱にかけさせられ花入菊の花一ツ入

一御かまうてかま　五德すへ

一志きかたつき　御てう水の間にたなに茶わんかたつきおきあわせられ候なり

一いどちやわん　おりため

一茶しやくあぶら竹　利休作

一水指ひぜん物　水こぼし竹の面通ふたきさいなしくひ

一志賀の御壺を　かつてのうちに金びやうぶをひかせられおきあわせられ候

一御かけゑかんさん十德

以上
客來
一番利休小早川有馬法印
二番善福寺阿彌陀坊池坊
三番志摩守こふゝかもん

判

於郡中諸役所馬貳疋不可有其煩候爲扶持如此候狀如件
永祿四年
六月廿八日　　倉田孫右衞門尉

一年貢米銀年內に皆納いたし御褒書粘入裏白にて五奉行より池坊左吉殿と有之書狀數通有之寫略之
外に
太閤より被下候品々一見之分有增左にしるし候
一八幡太郎義家公之鎧の袖切
一太閤朝鮮征伐の時被爲持候旅櫛箱一ツ小道具有之鏡二面但袋〔表蜀江錦裏ヒゴンキ〕
一杖黑塗に桐の金紋ちらし長五尺計
一茶の湯の道具一式　名器有之
右之外にも色々有之候へども早卒の一見にて氣臆無之
一前章左吉と有之は池坊左橘右衞門之祖先にて、當時は苗字にては無之家の名になり池坊といふ、尤支配之役所にも諸御用向にも池坊誰と認候、外に壹人中坊左近右衞門と申もの有之、池坊と凡同樣

の事

外にいろ〱のもの多し

○謎

謎卽古人之隱語。左傳申叔展所云。山鞠窮。河魚腹疾。公孫有山之呼庚癸。其濫觴也。亦曰庾詞。國語。秦客爲瘦詩。范文子能對其三。楚莊齊威。俱好隱語。漢東方朔射覆。龍無角蛇無足。生肉爲膾。乾魚爲脯之類。尤爲擅長。劉歆七略。有隱書十八篇。則並有輯爲書者。然皆不傳。惟卯金刀千里草之類。出於風謠者。略存一二。至東漢末。乃盛行。謂之離合體。加蔡中郎書曹娥碑陰。黃絹幼婦。外孫虀臼。楊脩解之。謂妙絕好辭四字也。又孔北海有四言一篇。漁父屈節。水潛匿方。與時進止。出寺弛張。呂公饑釣。闔口渭旁。九域有聖。無土不方。好是正直。女囘予臧。海外有截。隼逝鷹揚。六翮不奮。羽儀未彰。龍蛇之蟄。比他可安。玟璇隱耀。美玉韜光。無名無譽。放言深藏。按轡安行。誰謂路長。共二十四句。每四句離合一字。乃魯國孔融文擧也。如首四句。漁字去水爲魚字。時字去寺爲日字。合之則魯字也。下皆倣此。詩載石林詩話。又越絕書。不知何人所撰。楊周修據其書後序云。以去爲姓。得衣乃成。厥名有米。覆之以庚。謂漢人袁康所作。又越絕篇外傳云。文字屬定。自于邦賢。以口爲姓。承之以天。楚相屈原與之同名。乃吳平也。黃佐曰。吳平因袁康所錄成書。又三國志註。曹操初作相國府門。自往觀之。題一活字。人皆不曉。楊脩曰。門中活乃闊字也。相國嫌太大耳。據此可見東漢末之好爲隱語也。然猶未謂之謎。其名曰謎。則自曹魏始。文心雕龍云。魏代以來。君子嘲隱。化爲謎語。謎者廻互其詞。使昏迷也。魏文陳思約而密之。高貴鄉公又博擧品物。然則高貴鄉公時。又嘗輯之成編矣。南史孫廣爲吳興守。有高爽者。嘗有求不遂。乃有屐謎以譏之。曰刺鼻不知嚏。蹋而不知嗔。嚙齒作步數。持此得勝人。北史斛律光傳。褚士達夢人授以詩。曰九升八合粟。角斗定非眞。堰却

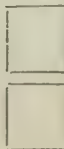
津中亦。將留何處人。祖埏解之曰。角斗斛字。津却水何留人。合成律字。謂斛律也。又魏孝文帝云。三山横。兩人從岐女。白日行靑空。屠兒斫肉與秤同。有人辨得賞金鐘。彭城王勰曰。乃一習字也。又咸陽王禧敗逃。謂防閤尹龍武。試作一謎以解憂。龍武曰。眠則同眠。起則俱起。貪如豺狼。贓不入己。謂箸也。則謎之爲技。六朝更盛行。唐蘇頲嘲尹姓者。云丑雖有足。甲不全身。見君無口。知伊少人。宋陶穀使於南唐。書十二字於驛舍曰。西川狗。百姓眼。馬包兒。御廚飯。宋齊邱曰。乃獨眠孤館也。錢氏私誌載字謎云。目字加二點。不得作貝字。貝字欠兩點。不得作目字。猜乃賀資二字也。四箇口盡皆方。加十字在中央。乃圖字也。洪巽陽谷漫錄載儉字謎云。一人立三人座。兩人小兩人大。其中更有一二口。教我如何過。莊綽雞篇肋又云。兄弟四人。兩人大。一人立。二人座。家中更有一門口。便是凶年也。好過婦字謎云。左七右七。横山倒出。王介甫柄國時。有人題相國寺壁曰。經歲荒蕪湖浦焦。貧女載笠落柘條。阿儂去家京洛遙。驚心寇盜來攻剽。東坡解之曰。終歲十二月也。十二月爲青字。荒蕪田有草也。草田爲苗字。湖浦焦水去也。水去爲法字。女戴笠爲安字。柘落木剩石字。阿儂是吳言。吳言爲誤字。去家京洛爲國。寇盜爲賊民。蓋言靑苗法安石誤國賊民也。西溪叢語有一鏡慧字。云一生有十口。前牛無角。蓋甲午也。此皆謎之見於書傳者。前明并有刻爲成書。曰謎社便覽。又賀從善編一書。曰千文虎。其序有云。宋延祐間。東坡山谷少游介甫。以隱字相倡和者甚多。刊集四冊。曰文戲金章宗好謎。選蜀人楊圖祥爲首。編曰百斛珠。刊行。元至正間。省掾朱士凱編者。曰揆叙萬類。又四明張小山。太原喬吉。古瀰鍾繼先。錢塘王日華徐景祥編者。曰包羅天地。然則此狡獪小技。編集成書者。且不一而足矣。〔趙翼陔餘叢考〕

〇海岳相豆紀行雜詠序

乙丑之冬。僕旅寓崎山。得　南畝先生出示友人之集。曰海岳雜咏。並相豆紀行。屬僕序之。僕以詩紀

之工。覽者宜自得之。不待僕之贅述也。若其遊歷之意。則請推焉。竊謂天於詭奇之地不多設。人於遊覽之樂不常遇。有其地而非其人。有其人而非其地。有其地與人。而不寄之詩文。皆不足以盡夫遊觀之樂也。今相豆溫泉爲名山水。而遊覽諸子爲能文士。蓋必相須而適相值。夫豈偶然哉。宜其目領而心解。景會而理得也。且夫人之渡汪洋。緣危崖。攀叢莽。歷奇險。非爲名役。即以利驅。不爾不往也。然遊覽諸子。治裝裹糧不憚遠邁。非有二者之徇也。特以相豆溫泉山水之勝。戴笠著屐。緣崖溯澗。蒐覽詭奇 盪摩懷素 宣乎此山之佳者。悠然離叢薄。而爲之聳峙。石之奇者。突然出氛嵐。而爲之偃蹇。松檜爲之拂舞。溪流爲之清韵。幽顯巨細。爭献厥狀。披豁呈露。無所隱遁。夫山之異於人者。尙能待人而自見。而况人之異於衆者哉。且聞。菊池君者平日所著甚富。此特其遊歷所咏。觀者如嘗指於鼎。一臠可知也。若僕之浪跡天涯。才思荒落。屬爲之序。則僕豈敢然。勉誌人地遇合之奇。僕亦不得而辭焉言。

秋琴張敬修題

吳趨潘用祉書

○大橋近江死去之節書付

一大橋近江何年以前何月御預被成候哉誰殿被仰渡候哉　寳暦八戊寅十月廿九日御預被成候於評定所神尾備前守様被仰渡候

一評定所列座　神尾備前守様依田和泉守様菅沼下野守様牧野織部様にて御座候

一近江何歳にて候哉　當午年五十七歳之由常々申候

一江戸出立何時分　五年以前寅十一月十五日丑之刻江戸致出立同廿三日中村へ致着候

一道中如何致召連下候哉　物頭貳人中目付壹人給人拾人醫師貳人徒目付貳人徒拾人足輕三拾人乘物せん〆に仕候

一評定所にて被仰渡候趣如何及承候哉　承知不仕候

一近江居間へ入候節如何　居間近所迄駕籠を入役人共番人共無刀にて入申候

一常々附居者候共罷出候樣申候哉　閑座敷入口に中目付壹人侍五人宛相詰罷有候に付呼出申事無御座候

一近江居候場所夜中も見廻し候哉　番士貳人宛不寢番仕中目付時々見廻し申候

一平生身持如何　行儀正敷御座候

一平脈如何　實成脉に御座候

一常々丸散用候儀兩樣之藥用候哉　丸散折々用申候

一平心に候哉　何之相替儀無御座候

一常々何ぞ書物等見申度旨申候儀無之候哉　好不申候

一麪類爲給候哉　好候得ば爲給申候

一食事者好候て出候哉但し毒味致候哉　好候節出申候毒味中目付致候

一楊枝遣候儀如何　爲遣不申候

一菜數何程にても好物有之候哉　一汁三菜分て好物と申品も無御座候五節句は二汁五菜

一菓子等好無之候哉　折々好候節出申候

一精進日如何　四日八日九日十日十二日十四日十七日十八日廿日廿四日晦日〔但小ノ月ハ廿九日〕右何も前夜より當日夜迄

一精進日は近江申聞候哉　前條之通近江申聞候
一常々椀膳如何用候哉　常々椀膳用申候
一箸何寸候哉　四寸二分に仕候
一魚類給候節皿用候哉　木皿用申候
一上戸か下戸か　下戸之由申候酒は爲不給申候
一湯抔好候節如何　木椀にて爲給申候
一多葉粉如何　爲給不申候
一常々苦に致候體抔相見候哉　相見不申候
一常々何を致居候哉　何之仕業も無御座候
一常々咄何を致候哉　時節之物語致罷有候
一常々煩數候哉　稀々積痛有之候迄にて煩敷儀無御座候
一常々介抱如何　隨分心に隨ひ介抱仕候
一髮月代之事如何　髮者爲結申候月代には爲致不申候
一朝夕手水之事　日々爲遣申候
一湯行水之事　如何好候得ば爲致申候
一鋏類遣候哉　爲遣不申候
一爪之事如何　爪爲取不申木賊にて摺申候
一不斷衣服之事　絹用申候
一蚊帳たれ候哉團扇之類遣候哉　蚊帳たれ申候團扇爲遣不申候

一帯之事　眞なし用申候
一燈如何　有明差出申候
一寒暑之事如何　寒暑難義之由申候
一常々夜分何時寢候哉但夜分能寢候哉　夜四時前後寢申候致快寢候
一常々朝何時目覺候哉　朝五時前後目覺申候
一最初着致候衣類は如何　仕舞置候右衣服之事今度奉伺候處近江親類共へ遣し可申旨松平右近將監樣
被仰出候
一せい恰合は如何　せい高く中肉にて御座候
一常々兩親妻候之事咄候哉　咄不申候
一死後之儀何共不申候哉　何共不申候
一鹽にて詰候月日刻限　去七月廿一日夕七時
一死骸入候箱大サ　長六尺八寸五分横貳尺八寸六分高サ壹尺九寸四分
一手跡は如何學文有無之事　手跡學文相知不申候
一足袋はかせ候哉　はかせ申候
一下帶之事　越中下帶用申候
一頭巾之事　かぶり不申候
一宗旨何にて候哉取置候寺は　曹洞宗之由常々申候城下東泉院と申寺へ土葬に取置候積に御座候
一冬は火を置候哉　火鉢差出申候火箸は出不申候
一兩便場所如何　圍之内にしつらい申候

一不斷爲着候夜具之事　絹紬布用申候
一今度死去に付煩付候事如何　當八月九日より浮腫御座候
一病氣重候は何時分に候哉　當八月廿八日より差重候
一病氣重死去之刻限何時有之哉　去月廿一日丑之上刻死去仕候
一物頭宿番有之哉　物頭は宿番不仕候附置候中目付添役之內壹人宛宿番仕候
一用人如何　一ヶ月五六度宛見廻し申候
一定番人何人相勤候哉但不寢番有之哉　侍二十人附置五人宛勤番仕候尤貳人宛不寢番仕候
一附置候物頭目付役勤方如何候哉　物頭定掛無御座候中目付貳人添役貳人常掛申付壹人宛勤番仕候
一表門足輕番人何人哉候但し不寢番有之哉　表門番足輕貳人宛臺所番足輕貳人宛不寢番足輕貳人宛差置申候
一醫師は不斷附居候哉　兩人定掛申付置不絕見廻し申候
一病氣之節他醫師之藥用候哉　用不申候
一醫師勤方儀之如何　附置候醫師兩人にて日々罷出候病氣付候より晝夜附居申候
一鍼灸致候哉　不致候
一御預以後火事無之候哉　無御座候
一火事有之近江退候儀如何心得候哉　駕に乘せん〆に仕中目付侍共其外足輕以下手當仕置候
一大小評定所にて札有之候哉　大橋近江守と紙札有之候
一刀備前長船實光　長サ壹尺八寸八分五厘
一鮫白　一目貫菊折枝金　一緣頭磨赤銅

一柄糸にこん　一切羽金きせ　一鎺一枚金きせ
一鍔鐵丸二ツ篠輪兩ひつ赤銅埋メ　一鵐目金二枚座　一下緒茶駿河打
一脇指廣光　長サ壹尺四寸八分
一鮫白　一目貫人形金　一緣頭磨赤銅
一柄糸にこん　一切羽金きせ　一鎺金きせ
一鵐目金二枚座　一鍔鐵丸すかし有　一下緒茶駿河打
右御尋被成候箇條一々御答書仕候通御座候以上
午十月十一日

定番士　半野八十衛門
大非山六右衛門
池田御牡
大槻十間
金澤三太夫
西内善司
齋藤與五右衛門
佐藤宇兵衛
富田庄太夫
紺野五百五
遠藤靜家
手戸善之丞

般若孫右衛門
田村喜七
渡邊十郎右衛門
末永新八
佐藤武右衛門
羽根田十太夫
西政機
氏家屯

添役　島田兵左衛門
　　　猪狩勘右衛門

中目付　草野甚五兵衛
　　　　中野宇右衛門

用人　服部伴左衛門
　　　岡部五郎左衛門

家老　勝本喜兵衛
　　　門馬嘉右衛門

兒島平右衛門殿
杉山藤藏殿
御徒目付組頭也

此古文書杉山氏家ニ有之朔野村梅翁持參候ヲ寫サセ置也

○長崎聞書抄

阿蘭陀人へ申渡御書付二通寫

覺〔是は例年歸帆之砌前年より在留之かぴたん方へ申渡〕

阿蘭陀人往來之國之內南蠻人と出合候國も可在之間彌南蠻人と通用仕間鋪候若出合候國於有之者其國共所之名具書付毎年着岸之かぴたん長崎奉行人へ可差上之者也

寬文十戌九月十九日

覺

一阿蘭陀事は　御代々日本商賣仕候樣にと被　仰付毎歲長崎へ着船仕候段此以前如被　仰遣候切支丹宗門と通用仕間鋪候若致入魂候由何れの國より申上候共日本渡海可被成　御停止候勿論彼宗門之族船に乘せ來申間鋪事

一不相替日本爲商賣渡海仕度奉存上候切支丹宗門之儀付而被聞召可然儀於在之者毎年阿蘭陀渡海仕事に候間可申上候新く南蠻人手に入切支丹宗門に成候國も在之候哉渡海道筋之儀者可承候聞見及聞及候はゞ長崎奉行人迄可申上候事

一日本渡海之唐船ばはん仕間敷事

以上

年號月日

覃按古板節用集云番船（バハン）然ラバ賣買スルコトヲバハント云シトミヘタリ八幡ト書テバハントヨムトイフ說モアリ

切支丹宗門御制法之札之寫

奉

上令旨。爲禁革進南蠻廟之事即天主教。切見南蠻人。立心不軌。流毒四方。專行僞教。煽惑良民。深爲可恨。罪不容誅也。今見唐船往來本國貿易。各宜恪遵。御法度。毋得違禁。今將禁欵。例開于後。

一係來進南蠻廟之人本國。原有舊禁。近今更加森稍嚴。有隨足。斬艾殲遺。

一不許裝載南蠻和尙並進南蠻廟之人即天主教。或中有夾帶南蠻貨物違禁等件者。通船人貨。俱名勦滅。決不輕恕。但在唐山。雖同謀到日本。即來出首者。更加重賞。亦免其罪。

一寄通日本進南蠻廟之或書信貨物或進廟家伙等作。通船人私寄詑而來之事。或船主客水梢知情者。速々出首。

王上重賞。雖本身或同作。出首者亦免其罪。諒其情實之。

一南蠻人即天主教。或學唐人言語。衣唐人衣服。混入唐人中。附船渡海而來。大明閒駕不及撿點。裝載而來。或于洋中覺察。或抵長岐知情。速々投首。如此者。通船免罪。更加重賞。倘他人先出首者。通船盡行勦滅。

一南蠻人即天主教。在唐山。謀合唐人私財物。裝載南蠻惡黨而來。速々出首。如此者。即免其罪。更加倍賞。倘隱匿來。首。他人出首者。通船同罪。惡黨一體施行。

以上律條。至重至大。如有違犯。盡行勦滅。此係日本法度。嚴如軍令。毫無漏網。不比唐山官府倘可曲情報貨狗私解脫。爾等唐人愼勿犯之。各宜謹守持爾。

右諭知悉

右は唐船荷役之節通事共方より持乗り書役之唐人によみ聞せ候て船中之者に共に傳之

右御制法之札之趣唐通事共和解

一奉承　上意切支丹宗旨之事を禁止す則天主教之事也惣て見るに南蠻人心だてすなをならず害を四方に流し專僞教を行ひ人民を令惑候事ふかく可惡之上科誅するに不足者なりと見るに（今撤）唐船本國に往來致商賣候間面々よろしく御法度に隨ひ禁止之旨に不可違犯今禁止箇條を以此跡に記候

一由來切支丹宗旨之族本國に元より御禁制雖有之候近比は彌稠敷被　仰付之候間少も於其有志は不遁斬科に可行

一南蠻伴天連並切支丹宗旨之輩を乘せ渡間敷候則天主教之事也或船中に南蠻人之荷物共外　御法度等之物を拾乘渡者一船之人荷物共に皆々可爲滅收定輕くゆるかせたるまじく候但大明にて謀惡之同類たるといふとも日本に至て即時於申出者重く御褒美を被下又其科を可有御赦免

一日本切支丹宗旨之輩に密通致或書簡荷物或切支丹宗旨之道具等を船中之者共ひそかに被頼持渡事可在之或は船頭客或は水主にても其由を存候者はすみやかに申出べし從　公儀重御褒美を可被下其本人に不限縱同類たりといふとも於申出者其科を御赦免之上其品に依て御褒美可被下

一南蠻人は則天主教也或は唐人之言葉を學び唐人の衣類を着し唐人之中に入交船に乘渡海し來るに大明にて出船之節不及吟味して乘せ來る事可在之或は洋沖にをひてあらはれ或は長崎に至て知事在之候はゞ速に可申出如此ならば一船之科を御赦免之上彌重く御褒美可被下候若脇より於申出は一船悉く滅却に可行

一南蠻人は則天主教也大明にをひて唐人に内談いたしひそかに賄を受南候之惡黨を乘せ來る事在之候はゞ則速に可申出如此ならば其科を御赦免之上御褒美を可被増下若隱し不申出脇より於申出は一船

之者惡黨と同罪たるによつて一槩に可行
右之禁條重大之至候若違犯之族有之者悉滅亡可行是日本之法度にして稠敷事軍法のごとし毛頭漏す事有間敷候大明官家のごとく賄を以事をまげ私に隨ひ可遁にあらず候汝唐人等謹で違犯無之面々よろしく守べし爲其置之

右得て知者也

歸唐之節船頭役者等より差出候手形

一御法度之呂宋へ參申間鋪候其外何れ之國にても切支丹居申國へ參申間敷候事

一當津出船仕候てより何れの浦へも舟着申間敷事

但日本へ渡海仕候共長崎之外何れの湊へも舟寄申間敷事

一重て日本へ渡海仕候共伴天連入滿同宿之儀は不及申上切支丹宗門之者壹人も乘せ渡申間鋪事

一日本人壹人も乘せ渡不申候事

一日本之武道具は不及申上武者繪之類に至迄持渡不申候事

一丁銀幷灰吹銀少も持渡不申候事

一於海上ばはん仕間敷候事

右之條々相背申間敷候若於相背申者重て此船入津之刻我等共を何樣にも曲事に可被　仰付候少も違背申上間敷候爲後日請狀如件

寛文十年亥二月廿二日

肥前國長崎

禁制

一伴天連乘渡日本事

一日本之武具持渡異國事
一日本人令渡海異國事
右之條々於有違犯之族者速可被處嚴科之旨　依仰下知如件
寛文十年七月十一日　　奉　行
櫻町立之
一耶蘇邪徒〔蠻俗曰天主教〕以罪惡深重故。其駕舶所來者。先年悉皆斬戮。且其徒自阿媽港發船渡海之事。既停止之。自今以後。唐船若有載彼徒來。則速斬其身。而同船者亦當伏誅。但縱雖同船者。告而不匿。則赦之可褒賞事。
一耶蘇邪徒之書札。並附寄之物。潛載齎來於日本。則必須誅之。若有違犯而來者。速可告訴焉。猶有匿而不言者。其罪同前條事。
一以重賄密載耶蘇之邪徒于船底而來。即可早告之。然則宥其咎。且其賞賜可倍於彼重賄事。
右所定三章如此。唐船諸商客。皆宜承知。必勿違矣。
寛文六年十一月
定
耶蘇宗門文事累年御制禁たりといへども今以無斷絶急度可相改之自然不審成者有之ば申出べし
一伴天連之訴人　白銀三百枚
一入滿之訴人　白銀貳百枚
一同宿並宗門之訴人　白銀五拾枚
又は三拾枚品によるべし

右之通褒美として可被下之若かくし置他所よりあらはるゝにをゐては其五人組迄御穿鑿之上可令行罪科之旨所被　仰出也仍下知如件

寛文十一年七月十一日　　　奉　行

定

一伴天連入滿惣て切支丹宗門者不可隱置事
一異國住宅之日本人若於歸朝者不可隱置事
一人賣買停止たり但年季之者は可限十ケ年事
一請人無之者に家を賣並宿をかすべからざる事
　附主人之前背來者不可抱置事
一武士之面々異國人之前より直に買物停止事
一異國人之物を買取銀に遲々致べからざる事
一ふり賣に來る物兩隣へ不見して不可買事
一にせ銀吹出まじき事
一分銅並秤之類後藤寫之外取遣すべからざる事
一喧嘩口論停止事
一博奕一切停止事
右之條々違犯之輩於在之者可被成嚴科者也

條々

一ばてれん並切支丹宗門族異國より日本渡海之沙汰近年無之間自然相忍密々差渡儀可有之事

一先年異國へ被遣之南蠻人之子共伴天連に可仕立企在之由此以前渡海之伴天連共申候條今程南伴天連可成候間日本船を作り日本之姿を學び日本之言葉をつかひ相渡儀可在之事
一異國船近年四季ともに渡海自由たるの間浦々之儀者不及申在々所々に至迄常々無油斷心を付見出し申出べし縦彼宗門たりといふとも申出にをひては其咎をゆるし御褒美之上乘渡船荷物ともに可被下之萬一かくし置後日にばんれん又は同船之輩等捕之拷問之上は其かくれ有べからざるのあいだ不申出相かくすの輩之儀は不及申其一類又は其品により一在所之者迄急度曲事にをこなはるべき事
右條々海上見渡所々番之者は勿論獵船之輩其外浦々之者に至迄念を入見出聞出奉行所迄可申出之者也て敷
仍下知如件
亥九月日　　忠左衞門　權右衞門
一公義之船は不及申諸廻船共に遭難風時者助船を出し船不破損樣成程可入情事
一荷破損之時其所近き浦之者入情荷物舟共等取揚べし其場所之荷物之內浮荷物は廿分一沈荷物は十分一川船は荷浮物は三十分一沈荷物は廿分一取揚候者に可遣之事
一沖にて荷物はぬる時は着船之湊にをゐて其所々代官下代庄屋出合遂穿鑿船に相殘荷物船具等之可出證文事
附船頭浦之者と申合荷物盜取之はねたる由僞申にをゐては後日に聞といふとも船頭は勿論申合輩悉可被行死罪事
一湊に永々船をかけ置輩あらば其子細を所之者相尋日和次第出船を致さすべし其上にも令難澁は何方之船に承届之其浦之地頭代官へ急度可申達事
一御城米廻之刻船具水主不足之惡船に不可積之并日和能節於令船破損は船主沖之船頭可然曲事惣て理

不盡之儀申懸之又は私曲於在之者可申出之假雖同類其科をゆるし御褒美可被下之且又あたを不成樣可被仰付事

一自然寄船并荷物流來にをゐては可揚置半年過迄落主於無之者揚置候輩可取之若右之日數過落主出來たりといふとも不可取之雖然其所之地頭代官指圖を受べき事

一博奕惣て賭之諸勝負彌堅可爲停止事

右條々可相守此旨若惡事於仕者申出べし急度御褒美可被下之科人者罪之輕重に隨ひ可爲御沙汰者也

寛文十一年九月日　　奉　　　行

櫻町立之

此邊へちりあくたすつるにをゐては曲事たるべき者也

午八月日

同斷

湊ぎは斷なくしてつき出べからず次かゝるもの並ちりあくた一切捨間敷候若猥の輩於有之は可爲曲事者也

午八月日

小川町に立る

此川筋へちりあくたすつるにをゐては可曲事者也

午八月

禁制　　　　出島町

一傾城之外女人事

一高野聖之外出家山伏入事
一諸勸進之者並乞食入事
一出島廻ほうしより內船乘廻事
　附橋之下船乘廻事
一斷なくして阿蘭陀人出島より外へ出事
右條々堅可相守者也
　　午八月日

出島　定

日本人異國人御法度背き不依何事惡事をたくみ禮物を出し頼者有之は急度申出べしたとへ同類たりといふとも咎をゆるし其禮物一倍御ほうび被下べし若隱置訴人於有之者可處罪科者也
　　午八月日

出島　覺

一阿蘭陀人無差圖出島の外へ出間敷事
一商賣不始以前定之外之者出島へ入間敷事
一諸商賣不始以前荷物出島之外へ出間敷事
　附ちんたぶだう酒無差圖而出間敷事
一日本之武道具并武者繪出島へ不可入事
一奉行人之外刀指輩出島へ不可入事
右之旨堅可相守者也

月日

出島　覺

一出島鑑板出候日門番にて壹人充相改出入可爲仕事
一番所にて不知見者つれ有之ば不可入不審成者候はゞ留置穿鑿可仕事
一かんはん出候次之座鋪町使其外家持驗通事驗相添罷在不審成者之可相改事
一かんはん出候日いまり物賣せ申間敷候小屋番二人充差置人多置間敷事
一かんはん出候日入札に加り不申候者一切出島へ参間敷候若通事家持へ用所有之候はゞ使越候節門番に斷出入可仕事
一入札に加り申候者にても中ケ間五三人充申分八ッ前可参候八ッ過候はゞ出島へ参り間敷事
一かんはんに参候者賣物見申候て直可罷歸候出島見物仕間敷事以上

月日

一出島坪數三千八百拾五坪六分四毛
此地主廿五人組阿蘭陀人居住に付阿蘭陀人より爲地代每年銀子五拾五貫目充出之此銀共三人にて配分す右之者共入津より出船まで出島之自身番相勤之荷役荷積之節は四番にして罷出候其外門開き候ては毎日罷出候

御停止物覺

一異國へ武道具武者繪之類其外鉛灰吹銀跡々より不被遣候
一跡々は異國へ丁銀持渡候處寛文八申年度より銀子御停止にて金子持渡候事
但銀道具にて持渡候分は遣之勿論金道具も遣候事

同年被仰出候御停止物

一生類　　　　　　　　一藥種に不成植物之類
一藥種不成唐木　　　　一珊瑚珠
一伽羅皮　　　　　　　一ひよんかつ
一たんがら　　　　　　一丹土
一器物惣而翫物之類　　一小間物道具色々
一金糸（但目鏡并目鏡に成候びいどろ此分御赦免有之外唐蜀重寶に成物之分は小間物之内除之）
一衣類不成結構成織物

毛織之覺

一羅紗　　　　　　　　一羅背板
一猩々皮　　　　　　　一毛氈
此分は可持渡旨此外之毛織は御停止

寛文八申歳御停止にて日本より不持渡覺

一絹紬綿　　　　　　　一織木綿（并くりわた）
一布類　　　　　　　　一銅（是は其以後御赦免にて以來迄賣渡筈）
一麻　　　　　　　　　一漆
一油・酒・此二色は船中用之分は不苦

唐船に持渡候諸色より出る口錢覺

糸類之口錢

一糸百斤に付　銀五拾目充

唐物道具類之口錢

一賣高壹貫目に付　銀五拾目充

卷物端物毛織等之口錢

一壹卷に付　銀五分充

藥種鹿革荒物口錢（但鮫伽羅なども荒物之內に入）

一賣高壹貫目に付　銀五拾目充

明暦三酉年大村より出候切支丹翌戌年刑罪之覺

一男女都合六百三人

內

四百九人　死罪

百拾九人　於長崎死罪

百三十一人　於大村死罪

五十六人　島原預り置斬罪之

三十七人　佐賀預り置斬罪

六十六人　平戶預り置斬罪

六十九人　籠死

百人　御助

十五人　大村籠內在之

五人　長崎籠内殘置之
五人　大村預置之
朝鮮國へ武具差渡候者共御成敗之覺
一合九十人
内
五人　磔
十四人　獄門
十八人　斬罪
五十一人　追放
貳人　赦免
右者寛文七未の春令露顯同年右之通相行之
未六月與力並荷役撿使之面々被仰渡覺
一荷役之刻早々人足之數宿町乙名へ尋之可相極事
附兼々定置之通唐人隱荷物有之候はゞ過料爲出候段船頭へ可申聞事
一唐人衣類之内新敷物之分不殘可取上之候其外身にまとひ穢候物之分は貴人之衣類にも可罷成候間一端之内二ツ三ツに切候て持主に爲取之可申事
附細か成切帶にも不成物は新敷候共船中にて可爲取之候雖然金入其外卷物之類は少々切たりといふとも可取上之事
一唐人衣類之外致持用之物之內取上候分銘々唐人之名書付御停止物吟味之刻通事共致持參差出候樣可

申渡事

一砂糖唐人給料に少充所持之分四五斤程之位に候は則船にて可取之候四五斤より多分は其宿町へ相渡音物願之刻右之砂糖之內を以可被下之候其外何にても給料或は藥物之分商賣仕候程之物に無之候はゞ是又船にて可爲取之事

一如何樣之用事有之といふとも其船荷改役人之外一切船へ不可爲乘事

以上

六月日

一九月七日諏訪大明神波戶場御旅所へ出輿太田太左衞門幷同心手前足輕町吏等召列警固

一同日諏訪へ御名代山田十郎兵衞藤井彌次右衞門兩人之若黨上下にて召列

一御棧敷兩ヶ輪與力四人充警固幷御棧敷下之方同心町吏堅之

一同心組頭上下其外小屋頭等上下御紋之羽織此外船番町吏以下不殘上下

七日先手〔丸山町寄合町〕

子どもおどり　浦五島町　子どもおどり　引地町
唐子踊　堀町　子ども薩ま踊　新町
太神樂のまね　本石炭町　子どもおどり　桶屋町〔御中入〕
さつまおどり　大井手町　山伏の出立　舟大工町
子どもおどり　袋町　子どもおどり　酒屋町
やつこおどり　出來大工町

一御棧敷より折節譽之幼少之世悴を御棧敷之下へ召寄御菓子など被下之

一御棧敷高木作右衛門長尾安右衛門池部迪庵佐伯道順同友之丞吉田自休曾根川撿校小林謙貞

九月九日　諏訪祭禮

一御先番用人壹人給人與力藤井彌次右衛門同心召列罷越

一六ツ半時分諏訪へ御出被遊候

一諏訪へ御持參之目錄節用文言集に記之

一波戸場御名代岡田次郎右衛門太田半左衛門同心并町吏召列之

一踊之樣子町之可知前後但裝束仕組等替之

大明國并外國西洋ヨリ日本へ海路附リ所々土產

一北京　唯今王城ニテ御座候從韃靼置王

順天府　土產　畫眉石　銀魚　綿羊　藥種　小間物　○保定府　土產　蟾蜍（但蛙ノ油ノ事）○河間府　土產　蔓荊子　○眞定府　○順德府　土產　瓷器（但土ノ燒物ノ類）　玄精石　○廣平府（大名府　土產　紫草　紫斑石　○水平府　土產　丹錫　紙　人參　○延慶州（州ハ府ヨリ小ナリ）　土產　蒲萄　榛實　○保安州　土產　牡丹　○萬全都指揮使司　土產　水晶　碼瑙　黃鼠

此國々ヨリ商人來

日本ヨリ三百四十里

一南京　古ノ王城ニテ候今ハ王ナシ文官武官有共ニダツタンヨリ置也

應天府　土產　小間物道具　黃鼠　書籍　○鳳陽府　土產　鶴　○蘇州府　土產　小間物道具　花紬　綾機　木綿　錦　閃段　織物ノ類　藥種　櫛　扇子　針　此所ヨリ舟來　○松江府　土

産　綾　木綿　紫花布　此所ヨリ船來　○常州府　土産　茶　茶出シ　此所ヨリ船來　○鎭江府　此所ヨリ船來　○楊州府　土産　藥種　鶴　芍藥　此所ヨリ船來　○淮安府　土産　海螵蛸　此所ヨリ船來　○廬州府　土産　茶　紙　○崇明縣　日本ヨリ二百五十里　但離島ニテ候此所ヨリ船參候　○安慶府　○太平府　○寧國府　土産　烏骨鷄　紙　○池州府　土産　茶　紙　○徽州府　土産　墨　硯　筆　○廣德州　土産　茶　白糸　○和州　土産　天鵝〔白テウノコト〕

○滁州　土産　黃精　○徐州　土産　花石　何首烏

此國々ヨリ商人來

一山西省

太原府　土産　瓷物　人參　天花　毛氈　羊　○平陽府　土産　葡萄　龍骨　藥種　○大同府土産　石綠　黃鼠　瑪瑙　花斑石　○潞安府　土産　人參　○汾州府　○遼州　土産　人參　麝香無名異　茅香　○沁州　土産　黃芪　石菖蒲　○澤州　土産　人參　茅香　此外藥種色々在之

一山東省

濟南府　土産　金杏　○兗州府　土産　阿膠　蒙頂茶　○東昌府　土産　枸杞　棗　黃綠　○青州府　土産　硯石　牛黃　膃肭臍　○萊州府　土産　五色石　藥種　文蛤　○登州府　土産　牛黃　河鮫　○承州府　土産　五色石　藥種　文蛤　○遼東都指揮使司　土産　貂鼠　黃鼠　青鼠皮　松子

此國々ヨリ商人ハ稀ニ參候得共船ハ不參候

一河南省

開封府　土産　瓷器　弓　○歸德府　○彰德府　土産　牛黃　磁石　艾　○衛輝府　○懷慶府

土產　藥種　地黃　熊膽　劉奇奴　○河南府　土產　藥種　鹿茸　臘梅　牡丹　羊棗　○南陽府　土產　白花蛇　石青　香橙　綠毛龜　○汝寧府　土產　藥種　茶　蓍草　棊子石　○汝州

此國々ヨリ商人ハ來船ハ不參

一陝西省

西安府　土產　羣（出家ノホッスニス尾長シ、）羚羊角　飛鼠　旱獺　○鳳翔府　土產　藥種　鸚鵡　烏蛇　○漢中府　土產　鹿茸　紫河車　麝香　藥種　羚羊角　熊膽　硃砂　蜜　○平涼府　土產　瓷器　○鞏昌府　土產　藥種　麝香　石膽　羚羊角　雄黃　○臨洮府　土產　毛氈　藥種　犛牛（土豹皮　此尾ハクマコクマニナリ申候）○慶陽府　土產　藥種　蠟酥　金絲草　○延安府　土產　瑪瑙　藥種　牡丹　石油　黃鼠　○寧夏衞（衞ハ府州ヨリ小也）土產　枸杞　青木香　○寧夏中衞　土產　羊　野馬　○洮州衞　土產　豹　馬鷄　洮石硯　○岷州衞　土產　錦鷄　馬鷄　豹　○河州衞　○靖虜衞　○榆林衞　○陝西行都司　土產　石油　馬鷄　野馬　天鷄　牛　羊　枸杞

此國々ヨリ商人ハ參候ヘ共船ハ不參候

日本ヨリ三百五十里程

一浙江省

杭州府　土產　冬筍　毛氈　小間物道具　藥種　黃精　芡實　此所ヨリ船參候　○嘉興府　土產　裏絹　錦　雲絹　○湖州府　土產　綾　白糸　縐紗　綿　羅　筆　茶　○嚴州府　土產　漆　紙　茶　○金華府　土產　竹鷄（日本ニテシギニ似タル鳥）紙　南棗（但赤ナツメ）○衢州府　土產　茶　硯　紙　○處州府　土產　青瓷器（此所ヨリ出ル燒物日本ニテ高直）○紹興府　土

產　碗藥（チャワングスリ）紬　茶　銀魚　○寧波府　日本ヨリ三百二十里程　土產　葛布　紅木　犀　此國々ヨリ船來　○台州府　日本ヨリ三百二十里程　土產　茶　方竹〔四角竹ノ事〕○溫州府　日本ヨリ三百三十里程　此所ヨリ船來　○舟山　日本ヨリ三百三十里程　此所ヨリ船來　○普陀山　日本ヨリ二百五十里程　但離島ニテ御座候此所は南京浙江兩國ニ屬ス此所ヨリ船來

一江西省

南昌府　土產　茶　○饒州府　土產　染付茶碗之類　茶　○廣信府　土產　紙　瓷器　○南康府　土產　葛布　茶　○九江府　土產　茶　石耳　○建昌府　土產　金糸布　○撫州府　土產　矢竹　○臨江府　土產　紵布（ヌノ）　○吉安府　土產　水晶　龍須草　○瑞州府　土產　石靑　石綠　○袁州府　土產　黃精　地黃　○贛州府　土產　斑竹　○南安府　土產　矢竹　茶磨

右之國ヨリ藥物少々在之商人は參候へ共船は不參候

一湖廣省

武昌府　土產　茶　紙　水晶　○漢陽府　土產　天鵝　橙　橘（ミカン）　○襄陽府　土產　石靑　石綠　黃精　○德安府　土產　白蠟　葛布　○黃州府　土產　白花蛇　綠毛龜　白芝　○荊州府　土產　硯石　千歲藟草　○岳州府　土產　石靑　石綠　方竹　○長沙府　土產　硃砂　斑竹　○寶慶府　土產　丹砂（シンシヤ）　黑鷳　鷓鴣　○衞州府　土產　鷓鴣　地楡　紙　○常德府　土產　石綠　佛頭柑　○辰州府　土產　水銀　丹砂　石靑　石綠　○永州府　土產　異蛇　○承天府　土產　花猫　卑瓣　○員陽府　土產　錦鷄　○靖州　○郴州　○施州衞軍民指揮使司　土產　金星草　石合草　龍牙草　金稜藤　○永順軍民宣慰使司　土產　丹砂　野馬　錦鷄　○保靖軍民宣慰使司　土產　丹砂　水銀　白鷳　豹

此國々ヨリ商人來ル舟ハ不參右之外藥種色々

一四川省

成都府　土産　牡丹　藥種　薛濤牋（書簡紙幷色紙ノコト）○保寧府　土産　麝香　羚羊角　黄糸　○順慶府　土産　黄糸　天門冬　○叙州府　土産　五佳皮　茘枝（但リチイコト）○重慶府　土産　牡丹　苦藥子　丹砂　茘枝　扇子（○夔州府　土産　麝香　山鶏　○龍安府　土産　錦鶏　羚羊角　蠎酥　○馬湖府　○潼川州　土産　蓯蓉棗（但ナツメ）○眉州　土産　斑竹

○尾州古田文治事

古田文治尾州岩が瀬村の生れ也、午年二月市谷屋敷坂野氏に仕ふ、去冬比より新宿松のやへ行しに、なじみの女郎さわり有て名代に出し染次といへる新造になじみ、未二月十七日二階をとめられ、三月十三日夜八時旅人となり新宿へ茶やをつれ行、跡よりつれ参候よしにて染次をあげ置、合方に酒をのませへやへ入て心中いたし死す、兩人とも髪をすき返し白ざらしにて鉢巻いたし白むくを二ツづゝ着し、大なる珠數をかけ枕もとに金をおきて死す、金につまらぬといふ事か、書置もありたしかなる事也。

三月十四日と有

即　到　信　士　　二十歳

智　到　信　安　　十八歳

十三日一日奉公を引候計にて身の廻りをこしらへしに傍輩一人もしるものなし。

○町方舊離之事ニ付御觸

一町方にて久離願差出候者共數多に候親子兄弟之教等等閑にて多くは幼少之時より我儘に育終には親兄弟之手にも餘りあふれ者に成其時に至り久離帳外に成候得共多くは眼前に無宿に成飢渴にも及或は悪事をいたし重刑に行はれ又は乞食非人と成一族も耻辱を請候事に候久離帳外之事人倫におゐて

不案事に候條一族は勿論所役人等も精々心付候はゞ子弟共外身代不持者共邪路に不入様に教育を盡し可申其上にも不得止事不久離して難成は一族幷所役人迄相揃訴出可待差圖候筋に寄り不得止事は尤聞屆可遣候

一是迄家出又は欠落者出先にて如何様之惡事可致哉難計由にて久離帳外願候得共此儀者猶更不容易候兼て之儀は等閑に致し置右之節に至り後難を存久離候類者不埒に候條是又吟味之上聞屆可遣候

一父母幷一類共久離可致心底には無之處所役人共後難を量一族へ申勸め久離願はせ不承知に候はゞ家明可願旨申談候類は所役人共心得違成筋に候一族銘々は勿論所役人等も一同共旨存猥には久離之儀不申出情々心を盡し可申教候實に不得止事分計可訴出左候はゞ猶利害之申聞方も可有之候尤糺之上品に寄り久離も聞屆遣可有之事

辰七月

右被仰渡之趣町中名主支配限り家持借屋店借り迄不洩様入念申聞一統行屆候段一紙限御屆書來十四日當役所へ可差出候旨被仰渡畏候以上

寛政八辰年七月十一日

右之趣町中一軒毎に不洩様得と爲承不洩行屆候はゞ其旨御屆申上候様可爲仕旨能登守様御差圖を以樽與左衛門殿被仰渡候間一紙限名主へ早々相達し支配町々右之通篤と爲承候上名主銘々御屆書一紙限肝煎へ取集メ來ル十四日差上可申旨申入候

辰七月十一日

○文化三年丙寅御臺様御歌

文化三寅年九月俊明院様二十一回御忌之節御臺様御歌　御手向御たんさく

寄露懐舊

ふることはいく年秋をかさねてもぬれにし袖の露ぞひがたき

御和文うすやう紙

渺茫としてすべて夢に似たるいにしへを言つゞくるははかなきわざなれど古君のおとゞ世をしり玉ふよりめぐみはつくば山の陰よりしげく仁は秋津洲の外にながろ草木もなびくやごとなき御代の榮をふりすてたまへるかへす〳〵いとうき御事になんかくて今年廿年あまりひとゝせにみつる御跡を忍びあづさ弓のいるが如くなる年月をかこつもいとはかなし

月にあふぎ露にそぼちて歎こしむかしおほゆる秋のゆふ暮

すべて嬉しきもうきにもおはしまさばとわするゝ世なくこひ侍るをまいて折からさへ哀れなる鴈の聲虫の音につけても我身ひとつのとちにかなしまる

きり〴〵すなれもしらじなふりし世の秋をこひつゝ音のみなくとは

あるとある人此法の會にまうで侍る事のいとうら山しく過にし寛政十とせ五月の頃東の比叡にまうでたるを思ひ出るに實九品上品の淨土もかくあるべきにこそと世に濁る心のちりも淸らにてかゝる所につねにあらばやと限りなく心もすみて尊かりし分てこの御爲供養のほどいか計にか思ひやらる

濁りなき蓮のうてなの花の上に浮世をちりと君やみるらん

かずならぬ身もめぐみの露淺からずかくてありけるも此御あはれみかゝらざらましかはいかでさは御爲何ごとをしてかむくひ侍らんとおもへどいふかひなしたゞ情うちにうごきて言外にあらはるゝ心々のわざと歌をあつめかつはつたなき筆におもふことをつゞりて侍るとて

君がためひくすゞのをのくりかへしたのむ佛の御號はかしこき

○安德天皇

承久三年七月日遷御鳥羽院

建久七年十一月云々九年月日改關白爲攝政土御門院寛喜三年月日落飾御法印皇統略國良然

基道

熱田大神宮司範古文書

平直方

最勝王商口斷命流身前伊豆守正五位下源朝臣

被談仰作龍象而云

○有德太君

有章院太君。正德壬辰冬十月甲子。（十四日）受父綱豐元后之禪。而立即位。丙申夏四月癸未（晦日）薨。即日。紀中納言吉宗。嗣舊基。立即位。而爲本邦之太君。同族左京大夫某。以先公文昭院元后之遺命。封之紀伊國。使弟某（万吉）收於左京之舊邑豫州三萬緡地。喪服已畢。而秋七月朔。改元爲享保。（本朝聞園集享維大民保有萬國云々）使諸侯及百官爲新君禮。復使左京某任中將。畀諱宗一字。號紀州宗直。其他近侍士。各命官職。秋八月辛卯。（四日）世子長福幼君。入於城中第二殿爲儲貳。以書院番小姓組二隊附之。同庚子（八月十三日）天子詔公卿德大寺右大將某。庭田前大納言某。二條內大臣某。一條大納言某輩。使宣下征夷大將軍之命。任公位。（任正二位內大臣）同壬寅（十五日）饗公卿等。設田樂。使內外諸侯及百執事賜之盛饌候殿上。同乙巳（十八日）因公卿等。奉答於嚴詔。同癸丑（廿六日）同甲寅。（廿七日）同乙卯。（廿八日）使內外諸侯及百職如正端之儀正衣冠賀公位之命。同丙辰（廿九日）使先公之諸姬嫁水戶某加賀某等者。及閨中之公女覲見於殿上。各賜之纁帛。同

九月丁巳。〔朔〕使東都之神社佛閣之巫祝衣衲等歷見於殿上。同己未。〔三日〕同庚申。〔四日〕格寛永寺增上寺之有廟告祭終。同辛酉。〔五日〕使讃州刺史某往洛拜賜除命。同丁卯。〔十一日〕同辛未。〔十五日〕同壬午。〔廿六日〕表祝宣下之命。使內外諸侯百執事兩寺之僧侶及至於平時許朝見之僧輩下士設田樂各賜盛饌。同冬十月甲子。〔十八日〕貴公子小次郎入之於城中第一殿矣。以其幼弱未能離婦人之手也。同乙辰。〔廿九日〕使雲州大守某往洛奉賀天子納后妃。

（湯原氏日記抄

湯原氏日記〔御徒目付湯原源兵衛源正房記〕

元祿元辰年〔十月六日改元〕

八月十一日

御歩行組　林藤五郎組　小普請元西丸小十人組
　冨岡八左衛門跡　近藤又右衛門

同　松平左門組　小普請元鳥見ヨリ
　眞崎彥左衛門跡　中村六左衛門

同　神尾飛驒守組　小普請元西丸小十人
　可兒彌三右衛門跡　松村長左衛門

同十四日

一二丸張番被仰付之
　御歩行神尾飛驒守組　山本市太夫
　土屋主稅組　淺野茂左衛門

松平左門組　椅崎三郎左衛門
同人組　小池七左衛門
永見權七郎組　三橋藤兵衛
是皆神田御殿御鷹匠也御歩行へ入人ニ成ル

十月廿五日於燒火之間
御歩行組頭　大久保市郎右衛門組ヨリ　源兵衛子　秋間新右衛門
右御徒目付被仰付之
御歩行組跡目　野崎平八郎
右表火番被仰付之

同二年巳
正月十八日於御前御役替
御歩行頭　御小姓組戸田長門守組　前田孫八郎
永見權七郎跡御組ハ西丸ニナル
同斷　阿部越中守組　仁木甚五兵衛
松平左門跡

六月九日於御前御役替
御歩行頭　阿部志摩守組ヨリ　小笠原十右衛門
中山平右衛門跡
同斷　瀧川長門守組ヨリ　石卷七郎左衛門

小栗十兵衛跡

同斷　　阿部越中守組ヨリ　堀田善右衛門

松平五郎右衛門跡

八月廿九日御歩行松浦市左衛門組野村喜右衛門御詮議有之ニ付頭市左衛門へ御預ケ御科ハ博奕之由

〔九月十四日佐渡へ流罪〕

九月廿三日御徒頭仁木甚五兵衛召之老母河内只今迄取來候御切米千俵地方千石被成甚五兵衛へ被下置

甚五兵取來三百俵老母河内ニ被下之段老中列座相模守被申傳之河内事ハ乳人之由甚五兵衛父ハ三枝

善右衛門也

十二月十九月

跡目百五十俵　　御歩行組頭傳兵衛養子　磯田傳八郎

同　　同斷新兵衛子　小野寺左兵衛

彥太夫子　石渡次郎太夫

勘平養子　中神甚介

。七十俵五人ふち　　取次間五郎右衛門子　三宅權七郎 。章云可疑

十二月廿五日

御役料三百俵被下之　　御歩行頭　林藤五郎

同三年年午

二月十五日

於躑躅之間若年寄中列座松平安房守被仰渡之

佐野内藏助組　火番組頭市郎右衞門子

御歩行組頭　磯田傳兵衞跡　黒部所左衞門

石卷七郎左衞門組　火番組頭跡目

同斷　小野寺伊兵衞跡　鈴木太兵衞

同廿六日

一去る十五日　桂昌院樣知足院へ被爲入候節御歩行頭堀田善右衞門組中召連御先へ罷越知足院へ被爲入候由御城へ注進可申上筈之處遲く罷成右之注進遲く申に付不調法に被思召候　桂昌院樣初て被爲入たる義に有之故此度は其迄被遊候重ては急度可被仰付旨老若中列座安房傳達之右之節御注進之御歩行兩人逼塞善右衞門義御目見扣可申由

八月廿七日於御前御役替

御歩行頭　桐之間ヨリ　吉田小右衞門

同四年未

二月七日

一聖堂遷座今朝卯刻大久保加賀守秋元但馬守右爲御迎參上

遷座行列

御目附　御徒頭　吉田小右衞門組共

御先拂　徳永十左衞門　供奉　小十人　蜂屋傳左衞門組共

御目付　　　　　　　　　　　　　　　　御歩行

惣　押　牧野半三郎　　　　仁木甚五兵衛組共

御歩行　　　　　　介西田孫四郎

辻　固　佐野内藏丞組共　　小笠原十右衛門組

介松浦市左衛門　　介堀田善右衛門

栢植五太夫組　　土屋主税組

聖堂廻御番　石野八兵衛組共　　仰高門　御先手一組　　同所裏門　御先手

同三月廿二日辰の下刻柳澤出羽守亭へ始て被爲　成

御留守（松平美濃守瀧川越前守御留守衆）御供　内藤丹波守　加藤佐渡守　松平隼人正　酒井甲斐守　御目付松前八兵衛　御書院番　高力伊勢守組共　御小性組　村越伊豫守組共　小十人　向坂清三郎組共　御歩行（御先仁木甚五兵衛組共御先土屋主税組共）御道番御歩行　根來十郎右衛門組共

中川勘三郎組共

十一月十日

大久保加賀守　　阿部豊後守　　土屋相模守

名付奉書出る大關大助酒井勝之助へ御歩行稲生七郎右衛門組兩人宛にて持参す

同五年申

十一月朔日表火之番組頭（植木奉行ヨリ）山菅甚右衛門〔加藤〕（御歩行組頭ヨリ）中村六左衛門兩人被仰付之

三人に成向後壹人宛泊番可仕之旨於燒火之間若年寄衆中列座佐渡守被仰渡之

同十八日松平賴母組御徒組頭中村六左衛門（小普請）佐野源内

同六年酉
三月廿七日御歩行頭土屋主税願之通御役御免
四月朔日於御前御役替
　御歩行頭　御小姓組太田隱岐守組　奥津兵左衛門
　　土屋主税跡
五月四日於御前
　大石伊勢守組御廊下番頭　御歩行頭　石卷七郎左衛門
六月十五日御役替
　御歩行頭　二丸御留守居　齋藤治右衛門
　　神尾飛驒守跡
　同斷　寄合　高木惣十郎
　　石卷七郎左衛門跡
　御書院大久保淡路守組　折井市左衛門
　　堀田彦右衛門跡
八月廿五日
　御歩行松平又右衛門組速水太左衛門跡へ
　　鹽見與力杉原四郎左衛門組ヨリ　富岡兵助
同七年戌
三月十八日

御廊下番へ　　御歩行根來半右衞門組　三宅新八郎

改佐左衞門

私云同十四日公家御馳走御能御前還に罷出候者之由組中にて申傳候

四月廿五日　　御歩行奥津兵左衞門組　川村五郎左衞門

林藤五郎組　藤澤九太夫

翌八年亥十二月布衣ニナル御小納戸

柘植五太夫組　能勢新右衞門

小笠原十右衞門組　清水友右衞門

四人御廊下番被仰付之百五拾俵宛被下之

七月七日御歩行頭松平又右衞門死去

同廿一日御歩行高木總十郎組頭鈴木太兵衞跡〔小普請組より〕大井庄兵衞〔此父八郎右衞門も組頭相勤る〕

同廿九日の記に御歩行頭佐野內藏丞事不屆之儀有之御役被召放閉門被仰付之日限不知

八月十二日於御前御役替

御歩行頭松平又右衞門跡　太田隱岐守組ヨリ　布施孫兵衞

同斷佐野內藏丞跡　小出和泉守組　柘植平右衞門

十二月廿三日　　御歩行頭　水野權十郎

同八年亥
正月廿九日
貳百俵宛御増加　同　金田新太郎
山口勘兵衛組　堀田河内守組ヨリ
御歩行組頭　津田小七郎跡　香取作右衛門
奥津兵左衛門組ヨリ直ニ
同　河村與五兵衛跡（本ノマヽ）　横田與四右衛門

河村與五兵衛事九郎左衛門御近所相勤に付依願去る隠居に被仰付之（初メニ九郎左衛門トアリ名改歟）

七月五日
一御歩行八人致一列御訴訟之儀頭へは不申彼是取繕申に付不届午思召今晩中能勢出雲守方差遣之旨御歩行頭へ（秋元）但馬守被仰渡之依之御歩行頭中同役柘植平右衛門宅に寄合八人之御歩行衆召寄今晩出雲守方へ差遣之並成人之悴共も同事に出雲守方へ可差遣之旨にて銘々より直出雲方罷越候幼少之分は先組中に預り可之候旨右八人揚り屋へ入候

林藤五郎組　大澤市兵衛　金田新太郎組　瀬戸八郎左衛門
小泉兵庫組　佐々木次郎太夫　稲生七郎右衛門組　山中伊太夫
前田孫八郎組　長坂新兵衛　高木惣十郎組　井上太郎左衛門
小笠原平右衛門組　平間定右衛門　折井市左衛門組　田中彌三右衛門

悴共三人揚り座敷へ入
八郎左衛門子　瀬戸傳左衛門　新兵衛子　長坂淺右衛門

太郎左衛門子　井上清藏

同九年子

正月廿五日護持院へ被爲　成午后刻日本橋近所さや町より出火有之大火に成に付自護持院御前増火消松平大和守本多能登守へ奉書出寺内番御歩行齋藤次左衛門組柘植平右衛門組より持参す從御本丸[戸田]山城守相模守名付にて増火消へ奉書出る有馬左衛門佐板倉甲斐守申中刻鎭り還御也

二月廿八日於御前御役替

御目付　　　　　　　　御歩行頭ヨリ　水野權十郎

四月二日御歩行頭水野多宮儀小左衛門ト改

同廿一日於御前御役替

御目付へ　　　　　　　御歩行頭　林藤五郎

同　　　　　　　　　　同　　　改三郎右衛門

　　　　　　　　　　　　　　　柘植平右衛門

八月十三日御歩行折井市左衛門組與頭鈴木甚右衛門御役御免川越へ罷越可在之旨被仰渡候由是は大澤九太夫舅故歟

九月廿七日御歩行折井市左衛門組與頭鈴木甚右衛門跡則御足高被下之　　廣戸次郎右衛門

十二月十一日

稻生七郎左衛門組　　　　古橋九左衛門御免跡

御歩行組頭　　　　　　　可兒藤右衛門

　　　　　　　　　　　　小普請ヨリ

○諸家深祕錄抄

水野和泉守忠重横死之事

一慶長五年庚子七月廿四日三州刈屋城より野州小山ノ御陣ニ飛脚到來ス其故ハ去ル十九日水野和泉守忠重三州池鯉鮒ノ宿ニ於テ不慮ニ變有テ害セラル子細ハ堀尾帶刀吉晴野心アリ忠重及ビ加々野井彌八郎秀望ヲ殺スト云々加賀野井ハ秀頼卿ヨリ會津發向之事ヲ賀シ玉フノ使者也但大谷刑部少輔吉繼石田治部少輔三成指圖ニテ權現樣對面アラバ是ヲ刺殺シ可申ノ旨相議シテ下リケレドモ御對面ナキニ依テ空ク歸路ニ及ビ水野ヲ殺スト云リ故ニ堀尾吉晴ガ嫡子信濃守忠氏ヲ小山ノ御陣ニ召テ既ニ忠氏ヲ擒セント欲ス台德院樣彼ガ少年ヨリ仁義ヲ亂サヾルヲ知玉ヒテタトヒ父叛逆有ト云ドモ其子是ニ與セズンバ爭カ同罪トセンヤ暫ク其罪ヲ宥置カルヽノ所ニ忠重ガ家臣等重テ委細ヲ注進シテ日堀尾帶刀吉晴遠州濱松ヨリ越前ノ府ニ赴トテ三州ヲ通リケル時ニ水野和泉守ト堀尾ト厚志ノ朋友タルニ依テ居城刈屋ヨリ池鯉鮒ノ驛ニ出テ忠重吉晴ヲ享ス然所ニ美濃國ノ住人大剛一ノ早雄（ハヤワザ）加賀野井彌八郎秀望ト云者來テ會合ス漸ク刻ニ及テ堀尾沈醉睡眠スル其隙ニ彌八郎水野ヲ切殺ス今年忠重六十歲也堀尾是ニヲドロキ目覺テ脇差ヲ以彌八郎ヲ刺殺ス水野ガ家人等大ニ騷ギ主ノ敵ハ帶刀成ゾト思ヒテ其席ニ亂入テ吉晴ヲ數ケ所手ヲ負セケル堀尾脇差ヲ以秀望ヲ下手ニ押付胴腹ヲ刺通スヲ見テ水野ヲモ堀尾ガ所爲ナリト思ヒ後ヨリ切タルナリ然レドモ水野ガ小姓鈴木與八郎ト申者此儀ヲ前後能見分シ故ニ帶刀ノ所行ニ非ズト知ル堀尾燈ハ暗シテ聲ヲ放テ斷ルノ間水野ガ家人與八郎是ヲ制シ止ム其間ニ堀尾ガ從者室内ニ駈入リ吉晴ヲ抱キ取テ肩輿ニ乘セ池鯉鮒ノ宿ヲ去ルサテ加賀野井ガ所行其意趣ヲ不存ノ由注進ス此事全ク帶刀ノ不義ニ非ズ堀尾勇ヲ震ヒ水野ガ敵彌八郎ヲ討ノ間翌朝權現樣ヨリ其子堀尾信濃守忠氏ヲ召テ吉晴ガ武勇ヲ褒美セラル水野□□子水野六左衞門勝成ハ小

山ニ有リ權現樣勝成ヲ召テ父忠重ガ遺跡三州苅屋ノ城ヲ賜リケル則命ニ依テ小山ヲ發シテ苅屋ニ趣ク時ニ權現樣ヨリ忠重ガ三臣ニ御書ヲ賜ル其文ニ曰

和泉守殿不慮之仕合ニテ被相果不及是非候然レバ六左衛門差越候間和泉守殿ニ不相替馳走肝要ニ候謹言

七月廿五日　家康

土田清兵衛
鈴木次郎兵衛
同　久兵衛

齋藤山城守出生爲國主事附土岐賴藝被奪領國流浪之事

一傳聞ク土岐美濃守源賴藝ハ北美濃ヲ領セラレ大桑ト云所ニ在城アリ然ルヲ美濃ノ屋形ト云也爰ニ賴藝之家臣ニ西村所左衛門ト云者アリ渠ガ出生ヲ尋ルニ其先山城國西ノ岡ノ松波トテ貧賤ノ者ニテ油ヲ賣テ渡世ヲ營ミケルニ時々美濃國ニ通ヒテ商ヒケルガ土岐ノ家中ノ人々ニ馴睦ク交リテ親ミケル此油賣元來京生立ナレバ物毎自然ト風流ニ生ツキ歌道ニ携リ謡ヲ諷ヒ心立最有晴ナリシ依テ諸侍トノツキ合尋常ノ人ガラトハ違ヒケリ其下心ハ其身ニ過タル望ノ有故ニ先長井藤左衛門ガ家老ノ西村所左衛門ニ能々コビ諂ヒ彼ノ者ノ名字ヲ貰ヒ西村新助ト號シテ段々徘徊シケリ其後藤左衛門ヲ賴ミ主君トス然ル間勤候無類盡スノ所ニ望ノ通リ程ナク主ノ長井ヲ計テトカクトイタシ長井ガ知行ヲ押領シアゲクノ果ニハ土岐殿ノ直參ト罷成長井新九郎ト改メ上見ヌ鷲ノ振舞シケレバ彼ノ長井ガ一族親類ドモイキドヲリヲ含テ既ニ合戰ニ及ビケル所ニ土岐殿ヘ潜ニ賴ミ奉リ別條ナク其難ヲ遁ルヽト也斯テ後々歷上リケル程ニ齋藤山城守政利ト稱シケリ然ルニ政利忽チ土岐殿ノ厚恩ヲ忘レ美濃

ノ國屋形ヲモ目ノ下ニ見ル風情ナリ依之賴藝ヲモ尾州ヘ追出シケレバ土岐殿是非ナク尾州ヱ落行織田備後守信秀ヲ賴ミケレバ信秀賴母敷被賴玉ヒテ熱田ノ社院ヲ開ケ是ニ入置キ馳走有リサテ政利時得顔ニ誇リケルノ間土岐殿ヨリ濃州西方ノ侍氏家常陸介入道ト全ヲ初メ安藤稻葉不破ガ許ヱ使者ヲ遣ハサル時ニ信秀ヨリモ使者四人差添ラルヽ皆ハ今度賴藝ヲ見次レ可然ノ由各其理ニ服シ同心有リケル依之濃州多藝口ヨリ押寄大ニ武威ヲ振テ國中悉ク燒拂攻寄既ニ戰ニ及ビケレバ齋藤不叶シテ互ニ扱ヒヲ入レ和談セント山城守ガ娘以テ備後守ノ子息上總助信長ヲ聟ニ取リ美濃尾張ハ不及申近國トモニ悉ク靜謐ニ屬シケルト云云是天文ノ比トカヤ

齋藤山城守國政不義之事

一右山城守ハ思フ儘ニ土岐殿ヲ追出シ其領國ヲ押領シ剩ヘ平信長ヲ聟トナシ入道シテ道三ト號ス斯テ國政ノ事ヲ執行ハレケルニ不義不行跡ヲ顧◦シテ先其身ノ奢侈甚ク過分ニシテ少罪ノ族タリト雖モ或ハ牛裂ニシ或ハ釜煎ニシ其釜ノ火ヲバ罪人ノ妻子兄弟ニ燒セ又ハ柱ヲ科人ニ懷セ焙リ殺トシ誠ニ目モ當ラレヌ次第也己ガ一身ノ榮耀ニ目ヲクラマセ民百姓等ヲ貪リ万民苦ム事上下トモニ如此ノ政道ハ前代未聞ナル大無道ノ惡人カナト見ル者聞者ニクマヌ者ナカリケリ去レバ齋藤（本ノマヽ）右兵衛龍興ト號シ道三嫡子義龍ヲ黜シテ兩弟ヲ愛ス依テ義龍コレヲ憤リ兩弟ヲ害シ道三ヲ攻メ殺シ終ニ國ヲ押領セリ龍興ハ義龍ガ子ナリ其後信長公ヘ同國ノ士氏家常陸介稻葉伊豫守伊賀伊賀守等密ニ是ヲ注進ス信長大キニ驚キ俄ニ當國ヱ立越玉ヒ瑞龍寺ノ城ヲ襲ヘ是ヲ燒拂ヒ此時右伊賀氏家稻葉之三輩來謁シテ則諸將ヲ分チ稻葉ノ城ヲカコム時ニ龍興降ヲ乞テ城ヲ開ント欲ス信長公許之玉フ龍興城ヲ避テ後越前國司朝倉左衛門督義景ト鬪死ス云々

寺澤越中守廣正被抱名譽浪人兩輩事

一山本源右衛門小野木三右衛門トテ中興名譽ノ浪人アリ山本ハ其先丹波國龜山城主明智日向守源光秀ノ家來ニテ後一万石ヲ領シケル光秀沒後流浪也又小野木ハ信長公ヱ仕奉リシガ信長公沒後漂泊ス後現米三千石ヲ領シテケリ此兩輩ニ付テ物語有之去レバ源右衛門事ハ内々肥前ノ鍋島信濃守勝茂聞及ビ玉ヒテ知行貳万石ヲ以御呼候得共承引不仕候テ大坂ニ浪人ニテ罷有ヲ寺澤越中守紀廣正是ヲ御聞傳ヱ候テ御直ニ源右衛門ガ旅宿ヱ御出候テ對談ノ上仰セラルヽハ最前鍋島殿ヨリ貳万石ニテ呼申サレ候得共出申サレズ候段委ク承リ及候然レ氏我等ハ小身ニ候ノ間咄ノ相手ニ仕リ度存候間壹万石進ジ申度候間同心ニ於テハ本望タルベシト被仰候得バ仰ラルヽノ條承リ分左樣候ハヾ參上可仕ト御請申セバ過分ノヨシ一禮ヲ述ケルノ時越中守被申ハ然バ同道可致ノ旨被仰ケレバ其段ハ御免可被下候内々有馬ヱ湯治ノ志御座候ノ間湯治ヲ仕廻候テ御跡ヨリ參上可仕ノ由申セバ左候ハヾ其方勝手次第ニ相待トテ堅ク談ゼラレ九州ヘ下着被成ケリ斯テ源右衛門ガ居宅ヲ寺澤殿自身奉行シテ作事等ヲ被申付候サテ源右衛門ハ有馬ヘ相越テ數日湯治ノ中ニ咄相手ヲ誰ガナト亭主ヘ尋候得バ亭主申候ハ爰許ニ酒袋ト申テ道心者ノ御座候是ヲ御伽ニ呼寄可申哉ト窺ケレバ山本悅其レコソト被申ニ付即彼ノ酒袋ヲ呼寄ケレバ源右衛門亭主打寄咄シケル程ニ後ニハ酒袋心安クナリ源右衛門ト互ニ打トケ晝夜語リ睦ク成シカバ此度名殘ニ九州ヘ同道申度由源右衛門被申レバ酒袋申ハ拙者儀ハ此有馬ヲ罷出間敷ト兼テヨリ存候ノ間他國ヘハ御免被下候樣故。源右衛門又被申ハ何時成トモ御心次第ニ歸シ可申候間今度ハ船中計リ成トモ物語リ申度由被申候得バ是非ナク酒袋同道シケリ扨源右衛門事寺澤殿城下ヘ下着仕リ其日寺澤殿ヘ到着仕候由案内申上候得バ定テ未ダ草臥可被申間緩々ト休息被致登城可有候吾等明日鷹野ニ出候間其次デニ其宅ヱ立寄見參可申由被申使ヲ返サレ候テ翌朝早々寺澤殿源右衛門宅ヱ御越有テ早速見參祝着ノ由被仰サテマタ普請等其方ノ氣ニ入申間敷候其段ハ我等ノ奉行不

足故ト堪忍可被申乍去與向其外所々ヲ見ズ候間序ニ一見セント御申候ヲ源右衞門頻リニ辭退申セドモ是非ト被仰ニ付テ下々共散々ニ逃隱レ候得ドモ彼酒袋計リ大ヒザ組ニテ酒ノカンヲ仕罷有候ヲ寺澤殿御覽被成アレハ誰ト御尋有ケルトキ源右衞門御請ニ申サレ候ハ是ハ有馬山ニ居リ申候道心者ニテ御座候ヲ拙者船中ノ間ヲ同道仕リ候ト申上ラレケレバ寺澤殿御申候ハソナタハ小野木三右衞門ニテ可有ト御申候得バイヤ左樣ノ者ニテハ御座ナク候由ヲ申上ケレバ又御申候ハ右ノ目尻ノ上ノ疵ハ紛綸無之候左候ハヾ右ノ股ノ疵ハ如何ニト御尋被成候得バ其疵紛無之ニ付酒袋爭事不成シテ閉口ス其時越中守殿御申候ハ尤不足ニハ可被存候得共コヽモト迄下着ト云我等モ小身ト云ヒ旁以堪忍有テ現米三千石ニテ我等ガ所ニ居止リ給ヘカシト佗被成候得バ酒袋モ是非ナク御請申上ル然ル上ハ源右衞門トモ彌別而挨拶ノ間ト成シガイカナル不足ノ有テカ兩人ノ中不和ニ成年月ヲ歴ル内ニ鍋島信濃守家中ヨリ走込ミ有テ小寺兵十郎ト申者ノ所ヘ駈込申候故附入リニ仕リ御出シ候得ト斷リヲ申セドモ此兵十郎進退ニ替テモ出シ不申候處ニ又山本源右衞門小野木三右衞門入道酒袋ト挨拶不和ニ付テ源右衞門小寺ガ荷擔ヲ致シ後詰仕リ候故鍋島殿ヨリノ寄手モ暫ク蹌踉（タメライ）罷有候内ニ濃州關ケ原ノ陣關東方利運成ト承リ鍋島勢早々引取リ申候ニ付源右衞門ガ手柄ノ程申モ愚カ也右ノ源右衞門ガ譽レハ織田信長公ヱ鐙ヲ付サセ被下候ヘ左ナクバ男ノ不立樣ニ八幡ヱ立願仕リ本能寺ヘ參リ候折節能シテ信長公濡縁ニ御座被成候所ヱ參リ掛リ鐙ヲ付ント仕リ候時セガレ目ガト信長公ニ白眼レヒルミ申候ヲ上覽有テ障子ヲ礑ト御立被成候時正躰ヲ取直シ日比八幡ヘキセイ申ハ此時ト心得テ障子越ニ信長公ノ御左ノ、ホウサキヱ鐙ヲ付申時森蘭丸御側ニ在合源右衞門ガヒザヲ突候得バ倒レシト也其隙ニ信長公奥ヱ御入被成ト又々源右衞門ガ信長公ヱ鐙ヲ付申手柄是也扨小野木三右衞門ガ目尻ト股ノ疵ハ先年信長公ニ仕ヘ奉リシ時江州姉川合戰ノ時高名ノ疵ナリト云々

最上義光自身被討取夜盗事

一永祿四年ノ比トカヤ羽州ノ太守最上義守及嫡子出羽守義光御同道ニテ高湯ト云所ヘ湯治ナサレ數日御逗留ノ內鹿狩鷹野等ノ遊山ナド有シ所ニ或夜其ヘンノ盜人共數十人御旅宿ヘ夜討ニ入リケル所ニ近習ノ侍共外ノ者共出合追拂ケリ時ニ義光今年十六歲眞先ニ駈出玉ヒ盜人二人ニ手疵ヲ負セ又一人ト引組差殺シ玉フ也其働ヲ父義守眼前ニ御覽有テ不斜思ヒ給ヒテ翌日代々家傳ノ笹刀ト申テ貞宗ノ御太刀ヲ義光ヘ讓御リ被［］［］（成テ激）曰卿此太刀ハ某シ十六歲ノ時奈羅毛口ニ於テ譽レヲトリシカバ父義定ヨリ讓リヲ受シ太刀ナリ其吉例ニ任セ今度又其方ヘ讓リ候也ト御手自渡シ玉ヒケレバ吉光謹テ頂戴アリカクテ御父子トモニ山形ヘ御歸城ト云々

堀尾帶刀吉晴一代場數之事

一堀尾帶刀吉晴トテ江州横山城ノ時鑓下ノ高名事所謂横山ヨリ淺井備前守長政出張ノ由木下藤吉郎ヨリ濃州岐阜ノ織田信長公ヘ注進トシテ吉晴未ダ小太郎ト申セシ時被遣候ノ所ニ不歸直々横山ニ於テ敵ト渡リ合一番首捕リ申ヲ藤吉郎殿小太郎ヲ召連ラレ候テ一番ノ御披露被成候得バ信長公御意ニハ自今以後小太郎ハ我ガ者ゾト被仰殊ノ外御感ノ所ニ又同國虎御前山ニテ比類ナキ高名共也小谷城ニハ淺井備前守籠城也

一天正三年夏合戰ノ時スハダ者ノ首ヲ取候テ家來西島小左衛門ト申者ニ其首ヲ持セ猶又敵陣ヘ駈入リ二度目ニ掛ケラレ候得バ即信長公ヘ御披露被成候得バ堀尾ハ毎度之事ト御意ナサレ御直ニ御菓子ヲ下サレ候也

一攝州阿泉寺ニテ鑓下之高名有之事

一但馬國尾白山ニテ太刀打ノ高名ノ事葛塚ノ下ニテ切合双方トモニ手負被居候ノ所ヘ津田小八郎ト

申者寄合スケ被申候其時十三ケ所ノ手疵也膝ノロモ此時ノ疵也其比ハ吉晴ヲ茂助トテ母衣ノ役ナリ

一播州三木ノ付城霧ケ峯ニテ鑓下ノ高名有之候事
一同カウツキノ城ヲ後巻ノ時敵打テ出ヌルヲ茂助ト宮田喜八郎ハ駈出シ被申所ニ喜八郎ハ討死ス茂助ハ手負候テ高名ノ事同三木ノ城ニテ谷大膳衛好討死ノ時ヤノヲ川向ヘ駈付鑓下ノ事
一備中國ヌクモ山城攻ノ時夜掛ノ高名有之事
一同國高松城水攻ノ前責合ノ時高名ノ事
一攝州山崎ニ於テ明智光秀合戰ノ時其身ハ十文字互ニ馬上ノ時敵三人突落シ家來堀五郎兵衛林權八郎松田又市郎ニ首ヲ取セ被申事
一江州志津嶽合戰ノ時互ニ馬上ニテ敵ヲ突落シ高名ノ事
一尾州長久手合戰ノ時龍泉寺表ヱ御引取ノ時殿ヒ被仕手柄ノ事
一同國竹鼻城水攻ノ時前廉南ノ砦ヲ切取ラレ家中ノ首帳進上アリ此時上樣ヨリ御褒美被下候事
一同國蟹江城ニテ家中ノ生捕并首帳ヲ差添進上之事
一同國赤貝城ニテ家中ヱ首數討取リ候上樣ヨリ其身ヘ御褒美并下々ヘ金銭銀錢等ヲ被下候
一相州小田原陣ノ時山中本丸御責取ノ時首數討取申候上樣ヨリ唐織御胴服ヲ被下候下々ヱハ金錢四人上田權左衛門河野傳左衛門則武三太夫林權八郎等銀錢以上十三人
一奥州九戸城本丸マデ攻寄竹束ヲ被付候得バ城中ヨリ降參致シ候ニ付城主九戸修理亮ヲ召捕上樣ヱ差上ゲ候得バ御感狀ヲ被下候事
一伏見ノ向島ニ權現樣御座被成候時石田治部少輔三成謀叛ヲ企テ權現樣ヲ討奉ルベキノ事支度也其ト

キ帯刀一人ノ才覺ヲ以伏見ノ御本丸ヱ堅固ニ移シ奉リ候此御感成御誓詞被遊被下候事

一三州池鯉鮒ニテ水野和泉守忠重ヲ加賀野井彌八郎秀望討之被申時列座ニテ又彌八郎ヲ帯刀討留數ケ所手負被申手柄之事

一越前敦賀城攻之時ノ事

一大坂籠島ノ次貝柄塚ノ前ニテ大坂ヨリ人數ヲ繰出シ候時寄手敗軍ノ刻鑓ヲ合高名此時蜂須賀阿波守至鎮ノ家來中村次郎左衛門ト申者返シ合鑓ヲ合高名ノコト右堀尾帯刀吉晴ハ尾州上郡供御所ノ人也是中務少輔吉久ノ嫡男ニテ童名仁王丸ト號後小太郎ニ改メ太閤秀吉公未ダ出世御草創ノ時ヨリ仕ヱ奉リ其後茂助ニ改ムル也去レバ吉久ハ尾州ニ居シテ四郡ノ沙汰ヲ聞レタリシト云々斯テ吉晴ハ天正十一年若州高濱城ヲ賜リ其後帯刀ト稱シ諸大夫ニ任ゼラレ段々御高恩ヲ請越前國府城遠江國ノ內共ニ都合拾七万石ヲ拜領アリ然ル所ニ慶長三年太閤秀吉公薨御シタマフ依之權現樣エ附屬シ奉リ同五年庚子九月石田三成謀叛ヲ企テ濃州關ケ原ニテ合戰有之ノ時吉晴忠義父子軍功ヲ勵シ忠義ヲ盡スノ故ニ今度ノ恩賞トシテ越前遠江兩國ニ有之知行ヲ轉ジ出雲隱岐兩國ヲ賜リ高廿三万五千石ヲ領シ彌勤候ヲ抽スト雖モ去ル關ケ原陣ノ砌リ吉晴三州池鯉鮒ニ於テ三成徒黨加賀野井彌八郎ガ爲ニ不慮ノ疵ヲ蒙リシヨリ以來歩行少々不叶其上老衰ニ及ブノ間家督ヲ嫡子信濃守忠氏ニ讓リ隱居セシム依テ忠氏相續シテ出雲守ニ改メ勤候不怠ノ所ニ同九年甲辰八月四日父吉晴ニ先達テ卒去其子忠晴ト號シ有之ト雖モ漸ク今年六歳ニ及ブ故ニ兩國讓リ置事公儀ヱ對シ不忠ト云又國家ノ政濟覺束ナク思ハレ忠晴成長ノ間是非ニ不及忠氏遺領相續アリ然ル所ニ忠晴同十六年辛亥三月官位昇進シテ從四位下ニ叙シ山城守ニ任ズ時ニ將軍家ヨリ忠ノ御一字ヲ被下則忠晴ト稱ス同十七年六月十七日吉晴六十九歳ニテ卒去依テ忠晴父遺領相違ナク兩國ヲ拜領シタリ最モ忠義ヲ重ンジ勤功懈怠有ラズ寛永三

年丙寅八月將軍家御上洛ニ付テ供奉シ奉リ同十九日侍從ニ任ゼラレ同十年癸酉九月廿日忠晴卒去ス時ニ三十五歳也是嗣子ナキ故ニ出雲隱岐兩國ヲ召上ラレ終ニ斷絶其後堀尾ノ舊臣矢野和泉ト云者罷出デ將軍家ヱ折々嘆テ堀尾家ノ相續ノ事ヲ願ウト雖モ不叶ト云々

眞田伊豆守信之家來兒玉三助事

一眞田伊豆守信之常々紙子ヲフミ給ヒテ着用被成タルト也如何思ワレケン或時家中ノ士卒共ニ向後紙子着用仕ルマジキ旨堅ク制セラレケル然ルニ兒玉三助ト申セシ輕キ侍有シガ此者紙子ヲ手細工ニ仕立テ正月元日ニ着シ登城シ各列座シ並居ケル也三助分限ノ侍ニハ通リガケノ目見ヱ大勢ノ内ニ罷有候ニ豆州見付ラレ法度ニ申付ル紙子ヲバ三助何トテ着シ申ヤト怒リ立留リ給ヒテアラヽカニ御咎シバラク有テ汝ハ常ニカルロ者ト聞及べリ早々何ニテモ申べシト有之時三助□□□

古ノヨロイニ勝ル紙子カナ風ノ弓矢ハ通ラザリケリ

御詞ノ下ヨリ申ケレバ伊豆守殿モ興ジ笑ヒ給ヒシトナリ

青山伯耆守忠俊御勘氣事附嫡子因幡守本領安堵之事

一委ニ三州ノ住人青山喜太夫忠門ノ男伯耆守忠俊トテ御當家譜代ニテ五万石ヲ領シ勤仕ノ處ニ寛永二年如何シテ將軍家ノ命ニ背キ御氣色チガイ所領沒收セラレケル然リト雖モ其子因幡守宗俊ニ三千石ヲ被下大御番頭ヲ仰付ラレ其後慶安元年信州小室城主ニ被成三万石ノ御加恩有リ其後攝州大阪御城代被仰付五万石領ス大猷院殿嚴有院兩御代ニ仕ヱ奉リ大阪數年ノ勤仕ニ依テ延寶六年午六月御役御免ノ願ヒヲ達スルニ依テ其意ニ任セラレ此大阪ヨリ本高五万石ヲ以テ遠州濱松ヱ移リ翌年卒去其子和泉守忠親家督ヲ繼テ暫テ勤仕有後年病死ス嗣子ナキニ依テ舍弟喜太夫忠重其遺跡ヲ相續シ下野守ニ任ゼラルヽト也

青山和泉守忠親兄弟母儀之事

一遠州濱松城主靑山因幡守宗俊トテ忠義ノ將アリ嫡子和泉守忠親幼名伊勢千代丸次男喜太夫後下野守忠重三男左衞門後筑後守忠義又女子ヲ於春ト云フ後永井右近太夫尙正ノ次男信濃守尙長ノ室ト成然ル所ニ尙長先年嚴有院樣御法事ノ時三緣山增上寺ニ於テ志州鳥羽城主內藤和泉守忠勝ト遺恨ニ及ビ終ニ泉州ニ討レ給ヒヌ跡式斷絕故ニ於春殿モ舍兄下野守殿ノ所ニ歸リ御座スト也去レバ和泉守忠親筑後兄弟ノ母儀ハ松光院ト號シテ石橋傳右衞門某ノ女也但シ石橋ハ其先將軍家ノ御步行ニテ七十俵ニ三人扶持タリ後女院御所ヱ附サセラレ貳百石ヲ被下京都ニアリケルガ女院御所寶算七十二歲ニテ崩御也故ニ傳右衞門モ浪人セラルト雖モ泉州祖父ナルユヘ是ヲ呼出サレ合力トシテ知行千石ヲ賜リヌ今其子石橋三太左衞門トテ執權職ニ補セラレケル也又下野守忠重ノ母儀ハ下野氏某姪也常堅院ト號ス繼母ハ內記信政ノ女也然レバ下野守ノ兄和泉守ノ室ト見エタリ〔以上深祕錄卷十一〕

永井右近太夫直勝出世大盛之事

一爰ニ永井家ノ出ル所ヲ尋ルニ天正ノ比ニヤ權現樣御嫡男岡崎三郎殿トテ有之シガイツゾノ程カ踊リヲ好ミ玉ヒシニヨリ岡崎隣鄕ノ百姓共美ヲ盡シテ踊リヲ掛タリ其比三州大濱ノ鄕民等三郎殿ヘ踊リヲ掛來ルソノ踊子ノ中ニ十四五歲ノ童子長田傳八郎ト云者共姿勝レテ美麗成リケルが太鼓ヲ打タリ其拍子ノ利タルコト諸人ニ越タリ踊リ終テ後件ノ傳八郎ヲ召被出汝何者ノ子ナルヤト御尋アリケル所ニ彼傳八郎答ヘ申ケルハ某父ハ大濱ノ庄官長田平右衞門大江重元ト申者也ト申上ル其口上當ヲ見テ三郎仰ケルハ汝ヲ召仕ベシ奉公スベキヤ否傳八郎畏テソレガシ親モ生得ノ百姓ニモ候ハズ世ニ零落テ鄕民ト罷成リタル由承リ候只今召出サレ勇士ノ數ニ入候ハンコト今生ノ本望身ニ於テ面目ニテ候ハント申テ退タリ時踊子ニ隨ヒ來ル百姓共ノ中ニ庄官平右衞門ガ由緖ヲ存タル者アルヤト直々

御尋ナサルヽ所ニ郷民ノ中ヨリ耳順(ミヽシタガフ)計(バカリ)ノ老人罷出語テ申ケルハ長田平右衛門ト申ス庄官ハ其姓賤カラズ平城天皇ヨリ十一代正二位權中納言大江匡房十六代ノ末葉ト承リヌ其身郷民ニ成下テ身不肖トハ申セドモ弓矢打物取テ何レノ勇士ニモ不可劣既ニ先年尾州織田殿ヨリ大濱ヲ討取ントテ蜂屋兵庫頭福富平左衛門ト云人ニ五百餘人ヲ差添押寄ラレシ時此長田郷民三百四十四人ヲ驅催シ大濱ニテ戰ヒ終ニ尾州勢ヲ追拂ヒ敵ノ首十一級討取タリ其内首三級長田是ヲ討捕リ武勇ヲ振ヒシ剛ノ者ニテ候ガ當春病死仕リ只今悴傳八郎家督仕リ候得ドモ其身未ダ若年ニ候故伯父平三郎ト申者後見仕庄官相勤メ候ト申スニ依テ三郎殿御小性ニ召仕ハレテ出頭シケルガ三郎殿御生害ノ後權現樣ノ御近習トナリ長田ハ主ニ敵セシ者ノ名字ナレバ改ムベキノヨシ仰ニヨリ母方ノ名字ヲ取リ永井傳八郎直勝トゾ申サル其後所々ノ合戰ニ働キ粉骨ヲ盡シ勇名アリ就中天正十二年ノ比羽柴秀吉公ト權現樣御合戰尾州長久手ニ於テ池田三左衛門輝政ノ父庄三郎信輝入道勝入ヲ討取其名天下ニ得タリ故ニ段々御取立有リ文祿三年午ノ四月從五位下ニ叙シ右近大夫ニ任ゼラル大名ノ列ニ坐シ後天下ノ執權ニ補セラレケリ誠子孫繁榮ノ事是武門冥理末世ノ孝道不過之ト云々

朝鮮與日本和睦附朝鮮人始テ來朝拜禮之事

一先年太閤秀吉公文祿ノ初ヨリ大明韃靼朝鮮ヲ攻メシムノ所ニ秀吉公薨去其以後權現樣ヨリ朝鮮ニ番手ヲ置セラルヽ故ニ明朝屈シテ和談ノ事ヲ備スニ依テ慶長十一年丙午十一月四日權現樣駿府ヨリ江戸ニ來リ玉ヒ高麗日本ト入魂アラバ明朝ノ番手引取ベキノ由ニ付テ高麗ヨリ使者渡海可有由對馬守ヨリ使者ヲ以テ江戸ヘ言上ス此使者ニ權現樣ヨリ御刀銀子其上九州ニテ米千石ヲ下サルヽ時秀忠公ヨリモ同御刀銀子ヲ下サレ彼ノ使者歸國セシム翌年丁未二月高麗ヨリ無事扱ヒノ使者來ル是隨分ノ人ノ由對馬ヨリ其告有ル間路次中宿々屋形作リ馳走可有也餘寒深ク海上荒ルヽ歟今ニ渡海ナシト

ナリ四月廿一日高麗人京着セシメ爰ニ逗留スルコト數日ナリ閏四月六日出京シテ關東ニ下ル廿六日江戸ニ下着シ五月六日江戸ニ於テ高麗人信使召祐吉副使慶暹從事官丁好寬等出仕ス

獻上物

一人參　貳百斤　　一虎皮　五十枚　　一毛氈　貳十枚

一唐莚　五十枚　　一ムリヤウ百卷　　一大鷹　五十連

一青皮　二十枚

宗對馬守義智ヨリ捧ゲ物

一段子　五十卷　　一油布　五十端

同十四日高麗人江戸發足ニ付テ三使ヘ將軍家ヨリ引出物ヲ下サル銀子三百枚宛上ノ。。。シヤ官二百枚宛兩人總人廿六人中官共下八十四人合五百枚下サル、也同廿日高麗人駿州府中ニ至リ權現樣ヘ出仕ス獻上物不知城中屋作未ダ出來セザルノ間座中久シカラズ則退出シテ本多上野介正純宅ニ於テ振舞アリ即日藤枝マデ相通ル此時先年秀吉公彼國ヘ人數ヲ遣ハサレシ時分取來ル男女ヲ此度召連歸ル彼者共歸唐ヲ喜ブ事限リナシト云々是ヨリシテ朝鮮人日本ヘ來伏スト也

松平武藏守同左衛門督兄弟因繼母ノ毒飼卒去事

一松平武藏守利隆同左衛門督忠繼兄弟不慮ニ繼母ノ毒飼ニテ卒去也其濫觴ヲ尋ルニ利隆ノ父ハ池田三左衛門尉輝政ト申ケリ母儀ハ中川瀨兵衛尉淸秀ノ女也然ルニ利隆ノ母儀ハ卒去也其後權現樣御娘督姬ト號スコレハ先年北條左京大夫氏直ノ內室タリシガ氏直沒落以後再ビ輝政ヘ嫁シ玉ヒケル是ニテ五男二女ヲ產玉フ嫡男左衛門督忠繼次男宮內太輔忠雄三男石見守輝澄四男右京大夫政綱五男右近大夫輝興女子ハ松平陸奧守忠宗京極丹後守高政ノ內室トス彼督姬君ハ輝政沒後飾ヲ落シテ良照院ト

號セラル是武藏守ノ爲ニハ御繼母也去レバ毒飼ノ事後々聞バ御繼母ノ所爲也武藏守ハ繼子ナレドモ總領トナル故ニ五十二万石餘（但舍弟松平石見守同右京大夫同右近大夫知行トモニ）ヲ領セラル此知行ヲ實子左衞門督ニ繼シメン事ヲ常々欲セラレ利隆ヲ毒飼セント企ラル忠繼母ノ志ヲ察シテ折々餘所ナガラ諫テ曰凡ソ女人惡事ヲ思ヒ企ツ時ハ其孫悉ク滅亡シテ其跡必ズ斷絶ス諸事御愼可然ト再三是ヲ申ス尤トウケラレナガラサラニ其念不斷忠繼悲之或時忠繼利隆ニ向ヒ申シテ曰モシ母儀ノ方エ御出候ハン時ハ必ズ忠繼ヲ召連ラルベシ自今以後獨リ御越アラバ七生マデ恨ミ可奉ト申サルレバ利隆其心ザシヲ察シ尤ト諾ス依テイツモ忠繼ヲ同道セシメ食物ヲ出ス時ハ忠繼先試後利隆ニ食セシム其故ニ毒飼スル事不能利隆其志ノ誠ナルヲ感ジ常ニ睦キ事親子ノ如シ或時又利隆忠繼同道シテ母ノ儀方エ行レケルニ饅頭ヲ重箱ニ入利隆忠繼兩人ノ前ニ置キ母儀食セラルベキノ旨會釋アル利隆畏リ候トテ己ニ取テ是ヲ食シ玉ハントスル時ニ忠繼是ヲ押留メ試ント欲シ則食ス母儀並ニ配膳ノ女房色ヲ變ジテ草葉ノ如シ忠繼ガ曰風味大ニ惡シ不可食ト制ス利隆毒ノ入タル事ヲ察シ曰何ゾ御邊ノ食スル物ヲ爭テカ食セズト云事不可有ヤト則取テ食セラル其後兄弟家ニ歸リ兩人共ニ大ニ血ヲ吐ケルガ種々藥ヲ用ト雖モ不叶同日ニ兄弟トモニ卒ス時ニ利隆子松平新太郎光政ハ因幡伯耆兩國高三十二万石ヲ相續アリヌ母儀ハ大須賀出羽守康高之娘ナリサテ光政ハ後寛永三年左近衞權少將ニ任ジ同九年七月十六日因幡伯耆兩國ヲ轉ジ備前國一圓及備中備後ノ内トモニ高三十一万五千石ヲ領セラル是備前ノ少將トゾ申ケル

田村右京大夫宗永母儀附田村氏出世之事

一田村右京大夫坂上宗永ノ母儀ハ松平陸奧守殿ノ家中山口内記重如ト云シ者ノ娘ニテ於系ト號ス是山口權八郎トテ五十貫文ヲ領シ今奧州殿ノ近習ヲ勤ム其姉也去レバ於系事ハ先年政宗ノ息女於西舘殿

ニ仕ヱケリ此於西舘殿ハ松平上總介忠輝卿ノ後室也後天麟院殿ト申ケル其比宗永ノ父田村隠岐守宗良ハ仙臺家中鈴木修理ト云者ノ家督ヲ繼デ一万石ヲ領セラル時ニ彼ノ於系ヲ天麟院殿ヨリ養子分ニ成サレ宗良ヱ遣ハサレシトナリ是類ナキ美女ノ由後年一腹ニシテ男女十二人ヲ産タリ宗良沒後餝ヲ落シテ貞岩院ト號ス也斯テ宗良ハ奥州栗原郡岩ケ崎ノ居住タリ然ルニ宗良ノ父松平陸奥守忠宗ノ母儀ハ田村麿ヨリ三十代田村大膳大夫清顯ノ女ニテ陽德院ト號ス是永ク田村ノ家ノ血脈絶ン事ヲ悲ミ頻リニ忠宗ニ告テ終ニ忠宗ノ三男ナリシ宗良ヲ以テ田村ノ家ヲ相續セラル故ニ左巴ト車ノ前花ヲ以テ田村ノ家ノ紋トス此ニ於テ當陸奥守綱村未ダ幼少ニテ家督タルノ間其後見トシテ万治三年庚子六月將軍家ヨリ召サルヽニ付テ同九月武州ニ來リ同十二月廿五日初テ嚴有院樣ヘ御目見ス此時仙臺領ノ内三万石名取郡岩沼ニ於テ配分是ヲ仰付ラレ同廿八日從五位下ニ叙シ右京亮ニ任ズ其後又隠岐守ニ改メ勤仕ノ後病死ス今右京大夫相續也陽德院殿ハ先祖田村麿ノ苗裔トシテ田村大膳大夫義顯ト號ス其子安藝守隆顯トテ伊達政宗祖父左京大夫晴宗ノ妹聟ナリ其嫡子四品大膳大夫淸顯トテ奥州三春ノ城主タリ嗣子ナク終ニ病死ス其弟田村善九郎氏顯軍中ノ節戰死ス淸顯娘一人有リ是ヲ伊達政宗ノ簾中トシ田村御前ト云シハ是ナリ政宗逝去ノ後餝ヲ落シテ陽德院ト號ス奥州松島ノ側ニ菩提所ヲ建立有テ陽德寺ト號ス即雲悟和尚ノ供養タリ扨又善九郎氏顯ノ長子田村孫七郎宗顯ヲ以テ淸顯ノ家督トス然ル所ニ相州小田原陣ノ伊達政宗遲參ニ依テ太閤秀吉公大ニ怒リ玉ヒ政宗領知悉ク沒收セラレ米澤信夫伊達三郡ヲ賜ル此ニ於テ宗顯日比政宗ノ撫育ニ預リ附屬セシムルノ所ニ今度田村累世ノ舊領ニ離レ政宗ノ幕下ニシテ嗣子ナク終ニ病死ス此故ニ田村家斷絶ス然レドモ右ノ如ク忠宗ノ命ニ依テ宗良事孫七郎宗顯ノ家督相續ト云々依御當家ニ田村氏ノ諸大夫是ナリ

松平周防守出世之事

一松平周防守源康長先祖ノ中興忠次ノ事ヲ考ルニ忠次ハ初松井左近トテ松平甚太郎家忠ノ家臣タリ軍功有ルニ依テ權現樣ヱ召出サレタリ去レハ先年遠州諏訪ノ原城御攻取ナサレシカバ左近忠次ヲ以テ籠置レタリ斯ル所ニ今度權現樣ト武田四郎勝賴ト御戰有テ又諏訪ノ原城ニ入給フノ時忠次軍兵ヲ卒シ御迎ニ出テ權現樣ヲ入レ奉リケリ此時忠次ヲ御前ヱ召出サレナンヂ久シク此城ヲ守リ武田勢ト數度合戰スルト雖モ每度利ヲ得テ一度モ不覺ヲ取ラズ尤武者所トモ云ツベシ昔周武王ハ牧野ニ戰テ大ニ軍功アリ今ノ松井忠次ハ諏訪原ニ戰テ忠節アリ周ノ武王ト忠次ト其武功相似タリ然ラバ諏訪原ヲ改テ牧野原ト稱シ且左近ヲ改メ從五位下ニ叙シ周防守ニ任ゼラル是周ノ字ヲ取故ナリトテ則松平ノ姓ヲ被下御名乘ノ一字ヲ拜領シテ松平周防守康親トゾ申ケル故ニ康親ヨリ代々子孫ニ至リ周防守ニ任ズ最モ康ノ字ヲ以家ノ通リ字トナス誠ニ此周防守ハ規模ノ名ナリトテ聞人見ル人羨ミケリ

桑山氏先祖法印母儀懷胎之事

一桑山法印ノ母儀懷胎ノ時二六時中ニ佛神ヲ祈リ申サレケル樣ハ只今吾胎內ニヤドル所ノ子若シ女子ニテ候ハヾ男子ニ變生ノ御方便ヲ願ヒ奉ルノ由不怠祈ラレケレバ或夜ノ夢ニ其身ガ胎內ノ子產レテ有ハ左ノ足ノ裏ニ晴明ガ判ノ有ベキナリト計リ告給ヒテ夢覺タリサレドモ强ニ吉夢トモ思ハデ打過玉ヒシガ程ナク產月モ來リケレバ平產有ケリサテ赤子ノ足ノ裏ヲ見玉ヘバ御告ニ聊モチガハズシテ有リ〳〵ト晴明ガ判ノ有リケリ尤モ其子モ男子ナリケレバ此時ニ至テサテハサイゼンニ見シ夢ハ佛神ノ御告ナサレシ所ノ瑞夢也ト思召テ益信心有テ彼ノ男子ヲ養育ノ所ニ成長ノ後太閤秀吉公ニ仕ヱ給ヒシガ僅ノ進退ヨリソロ〳〵刻ミ上給ヒテ後ニハ五万石迄ニ取上ゲアマツサヘ法躰シ玉ヒテ後ハ法印マデニ歷昇リテ桑山ノ元祖ト成ラレケリ當代ニ至ルマデ其末葉繁榮ニ御座候事誠ニ難有夢ノ御告トハ知レケリ

池田備後守恒元蒙御勘氣御免之事

一爰ニ池田輝政ノ孫池田備後守恒元トテ播州宍粟領主ニテ三万石ヲ拜領也是松平武藏守利隆ノ次男タリ新太郎光政ノ舍弟也サレバ恒元慶長九年甲寅四月廿二日目安ヲ捧テ曰神子ト號シテ女盜人有テ諸ノ女中ヲ迷シ多クノ金銀ヲ取申ス由言上ス依彼神子ノ女ヲ召寄テ拷問ノ所ニ左宣フ備後守房內ノ所爲ノ由ヲ白狀ス其故ニソノ金銀ヲバ殘ラズ彼內室ヱ渡スト云々此儀イカニモ正シキ證據有之ニ依テ備後守御勘氣ヲ蒙ルト云々右此事畢テ三好因幡守同丹後守堀田若狹守重氏野尻伊豫守保田甚兵衞奥田三郎右衞門ヲ御前ヱ召出サレ今度備後守ガ儀ヲ上意ト云々同五月廿一日恒元ノ所領ヲ可爲沒收旨仰出サルヽト也然處ニ同年十月攝州大坂籠城ニ依テ權現樣御父子御出馬タリ同廿七日豆州三島ヱ着御此時池田備後守言上シテ曰去ル夏御勘氣ヲ蒙ト雖モ今度御出陣ヲ慕ヒ奉リ是迄參上仕候哀レ其科ヲ宥サレ御先手ノ埋草ニモ罷成度ノ旨板倉伊賀守勝重ヲ以言上ニ及ノ處ニ御氣色ニ叶ヒタルニ付テ然ラバ有馬玄蕃頭豐氏ガ先手ニ參ル可ノ由仰出サルヽト也其子池田豐前守政周事備後守ノ家督ヲ繼テ勤仕スルノ所ニ延寶ノ頃嗣子ナク死去依之松平伊豫守綱政ノ次男數馬ト號シタルヲ以テ家督タリ

山岡備前入道俗生附道阿彌御忠節之事

一山岡道阿彌事ハ始メ三井寺ノ光淨院ノ住持也其始メ暹慶トゾ申ケル後諸大夫ニ成リ備前守ニ任ズ其先羽柴秀吉公ニ仕ヘシガ秀吉公沒後權現樣ヱ仕ヘ慶長四年伏見ノ向島ニ御座ナサレ候時大阪五奉行權現樣ヱ別心有之節右道阿彌事御味方ナレバ才覺ヲ以上方ノ大小名過半御味方ニ致シ候也同五年奥州上杉景勝逆心ニ依テカレヲ御退治トシテ東ヱ御下向ノ時道阿彌モ野州小山迄供奉仕リ候ノ處ニ上方ニ於テ石川治部少輔三成諸大名ヲ進メテ謀叛ヲ企ルノ注進有之ニ付テ權現樣小山ヨリ江戶ヘ御歸城有リ關東方ノ大名ヘ治部少輔御追討ノ儀則道阿彌御使ナリサレバ道阿彌儀ハ上方筋ノ案內者タ

ルニ依テ御先ヱ罷上ルベキノ旨也サテ又道阿彌ハ關東ヱ御供仕ルノ時弟ノ甫庵ニ申置樣ハ上方ニ若野心ノ者有ルニ於テハ妻子家人其外道阿彌ニ兼々志有地下侍等ヲ引連テ伏見ヱ相越籠城致シ權現樣ヱ御味方仕リ忠節ヲ可勵ノ旨申含メ故今度則其旨ニ任セ甫庵事妻子家人其外地下侍拾騎足輕百人召連伏見城ニ閉籠リ候同八月朔日三成ト一味ノ大名伏見城ヲ攻落シ候時甫庵手ノ者馬上四騎ト足輕七十三人討死仕リ候右ノ拾騎百人ノ足輕ノ子孫ドモヲ被召出與力十騎同心百人都合道阿彌ニ御預ケ被成候今ノ甲賀百人ハ是也道阿彌事御意ニ依テ御先ヱ罷上リ福島掃部助正賴ガ籠リケル勢州長島城加勢トシテ彼城ヲ警護シ罷有リ候處ニ濃州關ケ原ノ御合戰有之ト聞テ長島ノ城ニハ少々番兵ヲ殘シ置道阿彌ハ關ケ原ヱ向ヒ候ノ所ニ彼表ノ御合戰關東ノ御勝利ニ付テ大鳥居ノ前ニ陣ヲ固メ罷有リ候處ヲ長束大藏少輔正家關ケ原ノ戰場ヲ遁レ落行ヲ見テ道阿彌遁サジト打向テ渠ト戰ヒ大ニ打勝首百餘討取テ權現樣ノ御本陣ヱ獻ジケレバ御感不斜難有御意ナリシト也氏家內膳正行廣同志摩守寺西備中守等勢州桑名ニ楯籠ルニ付テ道阿彌馳向テ是ヲカコミイキヲモツカセズ急ニ攻ケル程ニ城中ヨリ和睦ヲ乞ニ依テ免之速ニ城ヲ請取リ番兵ヲ入置申候由羽柴下野守雄雅トテ勢州神戸城ニ閉籠リ罷有リ候ヲ道阿彌馳向ヒ責ケレバ雄雅モ能ク防ギ守レドモ不叶シテ降參ス則城ヲ受取リ是又番兵ヲ入置キ其勢ニテ同國龜山城主岡本下野守ガ籠リタル處ヱ道阿彌又々押寄圍攻ケル程ニ下野守モアグミテ終ニ降テ乞テ去ル此城ニモ番兵ヲ入置テ後御本陣ヱ參リ右ノ次第ヲ一々言上ニ及ビケレバ誠ニ今度數城ヲ攻落ス事道阿彌ガ軍忠不可勝計トノ仰也道阿彌御請ニ曰全ク私ノ軍功ニ非ズ偏ニ君ノ御威光ナリト申ケレバ彌御機嫌ニテ御歸陣ノ後江州ノ地ニテ九千石ヲ被下與力拾騎同心百人御預也右九千石ノ內四千石ハ與力同心ノ給分也關ケ原御陣前ニ筑前中納言秀秋ノ家老平岡石見守定當ヲ道阿彌招キ寄テ秀秋御味方ニ引込申ノ由權現樣ヘ言上依之關ケ原御利運ハ偏ニ石見守御忠節也ト道阿彌申上

ルニ付石見守儀御直参ニ被召出ケルト也此儀モ道阿彌取次ト云々最前關ケ原御陣ノ前丹後國田邊城主細川越中守忠興事其身ハ御陣立ノ御供也又丹波ノ福知山ノ城主小野木縫殿介重勝事ハ石田三成ト與シケル故ニ忠興ノ留守ヲ窺ヒ田邊ノ城ヲ攻落シタルニ付關ケ原落去後越中守ヨリ小野木ヲ所望ノ由願ヲ申上ラレケレバ上意ニテ道阿彌ヲ福知山ヱ被遣小野木ヲ誅罰可致ノ旨被仰付則彼地ヱ馳向ヒ小野木ガ家人等數輩討亡シ縫殿介ヲバ生捕テ龜山ノ淨土寺ニシテ斬罪セシメ其上御意ノ趣ドモヲ申聞セ國中ノ騷動ヲ鎭メ申候故御褒美トシテ肩衝御茶入並新宮ノ御門又伏見ノ家屋敷ヲ拜領仕リ候也新宮ノ御門ヲバ知恩院ヱ道阿彌寄進仕リ今ニ黑門ト申被寺ニ有之也御茶入ノ事道阿彌肩衝トテ世ニ其隱レ無之候其以後慶長八年權現樣道阿彌ガ宅ヱ被爲成候時武田重代ノ吉光御脇指ヲ拜領仕リ今ニ遲舜所持仕候權現樣每度道阿彌所ヱ渡御アリ御茶ヲ召上ラルヽト也伏見御城山寺ノ二王並二王門共ニ且亦三重ノ塔多寶堂此通リ權現樣ヨリ道阿彌ニ被下候故ニ三井寺ヘ寄進仕リ候二王並其門三重ノ塔共ニ今ニ彼寺ニ有之候但多寶堂ハ先年燒失仕候右道阿彌事光淨院ノ住持職ノ節ハ遲慶法印ト申也還俗仰付ラルヽ以後其身ノ弟ヲ後住ニ仕リ候其名ヲ一窓ト申候後年又山岡修理ガ世悴ヲ其後住ニ居申候其名遲賀法印ト申候也其又後住ニ山岡主計頭景以ガ末男ヲ居申候其名遲舜ト申候也此光淨院ノ住持職ハ遲慶法印以後代々山岡氏ヨリ相續カト見ヱタル也彼遲舜事光淨院ヘ入院ノ節山岡主計頭景以ハ先年江州水口城在番相勤メ申候處ニ三井寺ノ光淨院事ハ代々山岡ノ家ヨリ續ギ來ル其次第ハ御老中並御近習之御方尤寺社奉行衆御存知ノ前ニ候由ヲ申上候得バ其儀委細ニ聞召屆ラレ候ノ間山岡ノ家ヨリ相續可仕ノ旨被仰出候御書付今ニ遲舜所持仕リ罷有リ候事遲賀住職ノ時彼等破損ニ及ビ候ニ付道阿彌權現樣ヱ申上候諸大名衆ヨリ御合力ヲ申テ修復仕リ候只今ノ寺ハ其時ニ道阿彌ノ建立ノ儘ニテ御座候事

暹舜儀武州三峯ノ別當職ニ被仰付候ニ依テ三峯ニハ留主居ヲ差置其身ハ在江戸ニ住ル處ニ社領ノ百姓ト留主居ノ者ト出入ノ儀ニ付テ暹舜ガ申付樣不調法ニ極リ候ノ故寛文十一年辛亥九月十八日暹舜事江戸御追放被仰付依テ三井寺ノ光淨院ヲバ住持ノ儀モ召放サレケリ

御當家御代々諸事始之事

一寺社奉行事始ハ金池院バカリニテ取扱ヒ玉ヒシカドモ段々御當家御繁榮ニ隨ヒ次第々々ニ事廣ク成後々ハ武家或ハ百姓町人或ハ禰宜山伏ナド相交リ申ニ付十宗八宗計リニテモ無之故寺社奉行事金池院ヨリ其事出雲守勝隆ト兩人ヲ以テ寛永ノ比ヨリ初テ寺社奉行職ヲ被仰付ケル也

一江戸ヨリ西ニ當テ玉川ト云大河ノ淸泉アリ是武藏名所也此流水江戸府へ引テ万民ノ渇ヲ助ケサセ玉ハン爲ニ鈞命新ニ降テ山ヲ崩シ岩ヲ穿チ若干ノ田畑ヲ費ヤシ年月ヲ經テ功ヲナシケルニ承應年中ニ至テ成就シ長流御城下ニ來ル依テ屯民恣ニ此水ヲ結ンデ快樂ノ思ヒヲナシ事ヲ滿足セリ但シ玉川ヲ俗ニ誤テタハ川ト云也

一承應年中ニ到リ芝ノ牛町ヨリ品川マデ浦傳ヒノ岸ヲ石垣ニ被仰付ル此時久世大和守廣之奉行職ヲ蒙リ鈴ノ森邊迄築立シトナリ

一武藏國ト下總國トノ境ノ川有リ淺草川ノ流也其川ノ末無緣寺ノ前ニ新規ニ長橋ヲ掛ラレタリ其橋ノ長サ九十六間アリ此橋ヲ兩國橋ト名付ケ是年序ヲ經テ万治三年ニ成就シタリ以來上總下總常陸等ノ國ヱ通路宜クナル況ヤ近年大諸名諸旗本並工商共ニ彼國ノ本所へ移リ居宅ヲ定ム故ニ今専ラ繁昌ノ地ト云々然レトモ此本所ト云所ハ平々タル芝野田地ナリケルガ近キ比ハ將軍家ノ御心ニ少々背ケル人ハ大小ニ不限江戸ノ屋鋪ヲ召上ラレ本所ノ空地ヱ遣ハサレテ是ニ移ス是ヲ唱ヱテ新島ト云何レ難儀ノ人多カリケルトナリ

一寛永九年ヨリ奥州仙臺ノ米穀始テ江戸ヘ廻ル故ニ今江戸三分ノ二ハ奥州米ノ由其比仙臺ニテハ米ノ直段金壹兩ニ七石四斗程仕リシト也但今程ハ金壹兩ニ貳石四斗程ノ由也

一寛永三年ニ二條ノ御城ヱ行幸此時伊達政宗ノ家來共皆々ビヽシキ衣類ヲ着シケレバ諸國ノ人々ニ替リシ故ニ共時ノ人々アレハ伊達者ト云ヒ始メシヨリ以來今ニ至テ風流ノ人ヲバ伊達者ト云ヒ習ハシケルトナリ〔以上深秘錄卷十二〕

○伏見城之事

伏見城ノ義相糺候書付

伏見城

武德大成記云文祿三年甲午春正月朔日

神君江戸ニ　御座シテ群臣賀儀例ノゴトシ此比秀吉天下ヲ秀賴ニ讓ラント思ハレケルニ關白秀次謙讓ノ心ナカリケレバ先大阪ノ城ヲ秀賴ニ與ントテ伏見ノ城ヲ築シム諸國ノ大名ニ命ジ人夫ヲ出サシム

小札朱書　文祿三年二月

神君關東ノ諸士ニ命ゼラレ伏見ノ役夫ヲ出サシム諸士ヲ榊原式部大輔康政ガ家ニ會セシメ役錢ヲ貸サシム一萬貫ニ三百人ヲ役シテ各人夫ヲ發ス〔中略〕文祿三年三月七日伏見ノ城普請初ル諸國ノ人夫總テ二十五萬餘人ナリ

神君伏見ニ至リ玉フ秀吉城地巡見アリ〔中略〕文祿三年六月秀吉伏見城普請巡見アリ

神君茶ノ會ヲ催シ伏見ノ邸ニテ秀吉ヲ饗シ玉フ此秋伏見城成ル秀吉遷居玉フ

雍州府志云文祿甲午三年豐臣秀吉公山崎天王山城以ニ封疆狹小而水利不レ便使ニ築カ城ヲ於伏見山上ニ于レ時命ニテ佐久間河内守瀧川豐前守佐藤駿河守水野龜介石尾貞右衛門ニ為ニ監吏ト慶長庚子五年墮ニ其城ヲ別

置ニ館舍ヲ使ニ麾下人守ラ之

玉露叢云

一向島ノ普請出來候ニ付テ去月十九日ニ御移ナサレ向島ト下ノ御屋敷ト兩方ニ御坐ナサレ候事（慶長四年三月）

一伏見ノ城明置テハ無用心ニ候事

內府樣御移リナサレ可然由生駒雅樂頭中村式部少輔堀尾帶刀等參ラレ奉行衆中ノ由就中上閏三月三（慶長四年）日ニ御移リナサレ候ナリ右ニ如申候帶刀御內證申上ラレ德善院當番時御移ナサレテヨリ德善院モ總奉行衆トノ參會最早無御座候事

一伏見ノ御城ニハ秀康公ヲ爲御留主居差置レ

秀忠公ハ早々大阪ニ可有御參由以伊奈圖書被仰遣サレ候ヘバ一騎ガケテ十日ノ未明ニ大阪ヘ御參候（慶長四年）トナリ九月十一日ニ治部少輔屋敷ヨリ木工頭屋敷ヘカケテ御移ナサレ候トナリ

一增田右衞門尉長束大藏少輔ナド取持テ

內府樣ニハ大阪西丸ニ御移徙ナサレ候ヘトテ則西丸ニ大廣間天守ヲ建テ進上有シナリ左候テ明春年（慶長五年）始ノ御禮ノ儀ハ秀賴公ヘノ通元日ヨリ五日マデ諸大名衆其外ノ面々西丸大廣間ニテ御祝可被申上事

向島

武德大成記云慶長四年己亥正月

神君伏見ノ御館ニアリ（中略）加藤淸正細川忠興ト手ヲ携テ御館ニ趣キ

神君ニ告テ御座ヲ向島ニ移サン事ヲ懇ニ勸ム（慶長四年）

神君其志ヲ感ジ許容シ玉ヒ御館ヲ向島ニ築ク三月十九日吉日タルニ依テ假ニ御館ニ移リ玉フ其後忠興

ニ語テ曰爰ニ居住シテヨリ以來我心安堵ス從士モ各悦ブ汝ガ志丁寧ナリ忘ルベカラズト忠興恐伏ス
〔下略〕
伏見鑑云
向島城　四ツ谷村にあり秀吉公の築玉ふ所にして伏見の城とゝもに廢れたり
都名所圖會云
向島　豐後橋の南爪(ツメ)の民家の地をいふ右は巨椋(コクラ)堤にかゝりて大和街道なり左は槇堤にして宇治に至る
　双方の堤秀吉公の御時設る所也
中書島〔豐後橋の西にあり〕文祿年中向島に壘を築くといふは此中書島の地なり慶長のはじめ伏見城
　とゝもに滅亡せり
　伏見城番　伏見城代　伏見三年番
武德大成記云慶長六年辛丑十月
神君伏見ヲ發シテ
　米津清右衛門　稻垣平右衛門　岡田竹右衛門
ヲ伏見ノ城番トシテ十一月五日江戸ニ歸リ玉フ同十年乙巳正月
神君江戸ヲ發シ二月十九日伏見ニ入玉フ〔中略〕七月
神君列侯ニ命ジテ伏見ノ本城ヲ修理セシム同十二年丁未閏四月廿九日松平隱岐守定勝〔神君ノ異父
弟〕ニ命ゼラレ伏見ノ城代タラシム西丸ニ居ラシメ玉フ嫡子河内守定行〔後ニ隱岐守ト云〕父ノ封ヲ
嗣ギ遠州掛川ノ城ヲ領ス大番頭渡邊山城守水野市正命ヲ承リ各一組ノ番士ヲ率ヒ伏見城ヲ警衛ス伏見
ノ三年番ト云是ナリ大番頭替々是ヲ勤ム

同十六年辛亥阿部備中守正次大番頭トナリ伏見ノ城番ヲ勤ム

伏見奉行

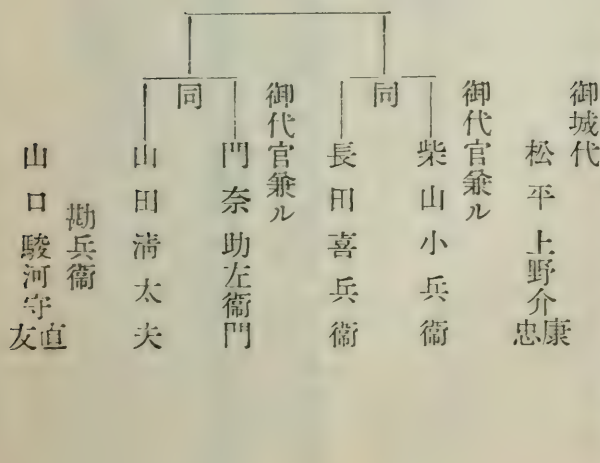
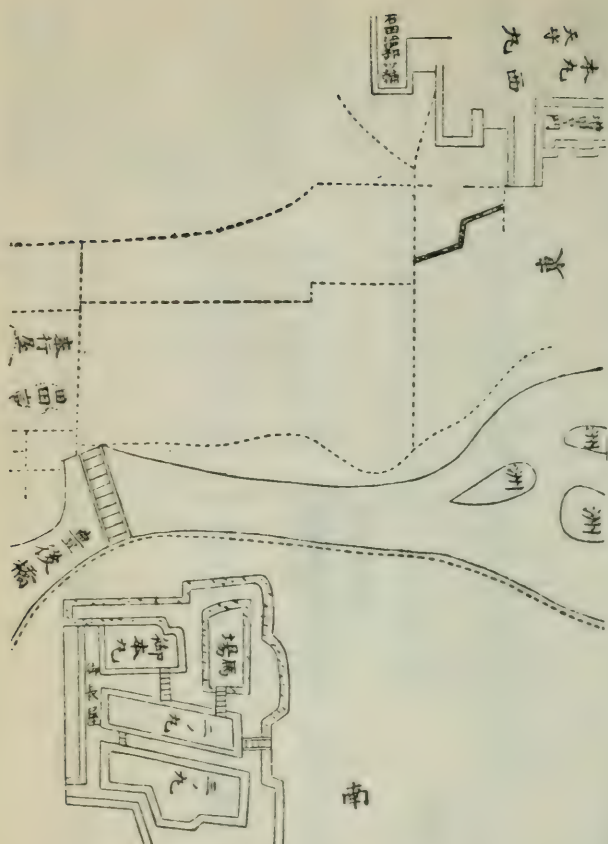
累代記云松平上野介康忠松平隠岐守定勝松平下總守宗明此三人伏見御城代也但上野介バカリ記スハ伏見奉行ト名目有之故也其後御城二條江引ケ御城代三代ニテ止ム歟其後奉行バカリニナル

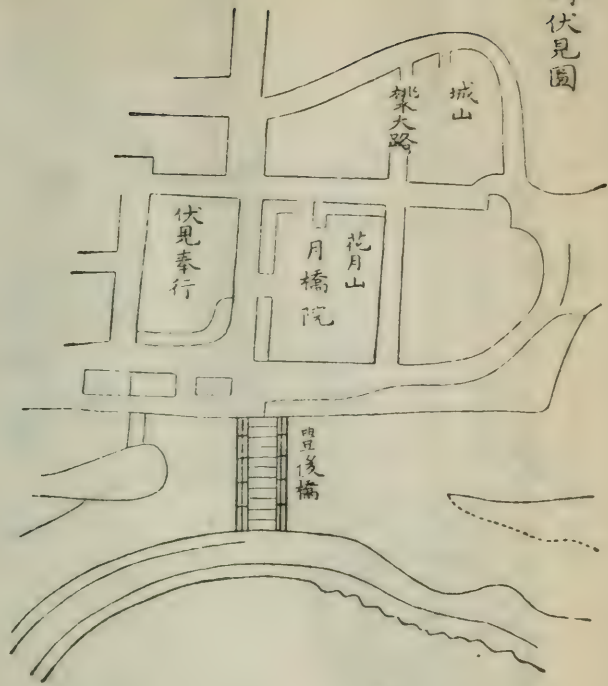
元祿九子二月朔日京町奉行ノ支配ニナリ此御役止其後同十一寅十一月十五日又建部内匠頭政宇被仰付

御城代　松平上野介康忠
慶長五子年但關ケ原陣已後也町奉行兼役

御城代の支配

- 御代官兼ル　柴山小兵衛
  慶長七寅年ヨリ任　同十九寅年堺奉行ニナル
- 同　長田喜兵衛
  慶長七寅年任
- 御代官兼ル　門奈助左衛門
  元和二辰年御簞笥奉行ヨリ任
- 同　山田清太夫
  同五未年駿府町奉行ニナル
- 山口駿河守直友（勘兵衛）
  元和五未年任

以下略

又伏見鑑　伏見奉行之代々載て云

松平下野守內
舍人源太左衛門
慶長五庚子年ヨリ同七壬寅年迄
柴田小兵衛
同七寅年ヨリ
長田喜兵衛
元和元卯年迄
以上累代記之通略之
右伏見城之儀ニ付諸書相糺候處諸書
ニ相見候趣ニテハ
伏見古城跡ハ當時城山ト唱候地
向島古城跡ハ當時豐後橋南詰ノ方
伏見奉行御役宅ノ地ハ往古富田信
濃守屋敷跡ニテ雍州府志ニ有之
候別置ニ舘舍ト申候所ト相見申
候
右之外委敷儀書記シ候者相見不申候
亥八月

當時伏見圖

享和三亥年八月十八日伊豆守殿へ秋山松之丞ヲ以柳生主膳正殿御上被成候處年號無之分年號書入可差出旨同十九日御下ゲ有之小札朱書ニテ年號書入御同人へ同人ヲ以御上ケ被成候山大田作兵衛申聞ル

大田直次郎

○南條山人手書詩稿

三葢山

悲風搖落舊都秋。永夜凄々獨倚樓。三葢山邊千古月。獨餘海外使臣愁。

春日遊友人宅。聞某公子新婚之狀。醉後戲作歌。寄公子及令媛。

東都城外百萬家。王孫公子競繁華。風流如君人所羨。儀容閑麗粲如霞。況復文藻原不群。未得良媒空朝曛。東家有女顏如玉。粧就綠鬟駐楚雲。琴心漫學臨卭客。客心繚繞歲月隔。願作輕雨吹羅袖。願作落花媚綺席。花飛風散空悠々。相思西東自倚樓。朝々雲風陽臺恨。夜々風濤河漢愁。兩情鬱々爲誰語。彼是消息寄無路。生憎池上雙鴛鴦。雙去雙來空回顧。可憐獨夜情。漫々夢魂驚。宛轉腸欲斷。終宵徒吞聲。吞聲斷腸無人知。秋風慘澹月明時。起臨池上向雙鯉。錦字細寫相思悲。雙鯉有情含素書。流得遙傳佳人廬。凋花從是生顏色。春風

一夕吹幽居。連理枝頭並蒂新。相携日々弄芳辰。翡翠樓中夢不斷。鳳皇臺上別有春。古來窈窕空反側。如君伉儷誰又倫。狂生對酒歌此曲。爲寄千秋偕老人。

雲原望千丈嶽

躍馬登雲原。遙望千丈嶽。嶽峻攀無路。側身仰大息。巖雲抱奇石。崖樹森如束。憶昔殊類賊。竊嶮寇邑屋。將軍時奉詔。一朝盡誅戮。爾來千餘載。民庶安耕織。行見山村裡。社酒相娛樂。當知王化隆、膏澤普窮谷。

八島舟中

壽永蒙塵屋島頭。鑾轡不返水煙愁。欲求遺跡知何處。海氣茫々片月流。

由良浦晚眺

憶昔良家子。流離泣海沂。于今秋浦上。更見背令飛。

天龍灘舟中

天龍灘上下天龍。龍去雲閑不見蹤。波際只餘勁風颯。回頭已失萬重峯。

甲陽道中

會提鐵騎倚崤關。叱咤軍前力拔山。安識千秋曠原暮。哀歌唯有牧童還。

○歳暮作　　大田　覃

歳暮書懷

歳暮窮陰取次催。回頭往事思悠哉。從他短髮爲霜盡。無復長風送雪來。身在宦途期汗漫。業隨年少試徘徊。杏園縱有明春宴。櫟社應同昨日材。

別歳飲甘露門

歲闌杯酒興無窮。世故相忘半醉中。兒輩不知欣樂趣。一生心事在絲桐。

同前

美酒唯當醉。離情不可忘。今宵聞一曲。斷盡九回腸。

○辛酉革命事

勘申辛酉年被行例事

醍醐

延喜元年例　考證禹錫玄珪文云延喜

昌泰三年〔前年〕十月下旬乙亥文章博士三善朝臣清行奏議云明年當辛酉革命期君臣尅賊之運云云同四年〔當年〕七月十五日甲子有改元事〔改昌泰爲延喜〕詔文云去歳之秋老人乘壽星之耀今年之暦辛酉呈革命之符云云

八月廿九日戊申被發遣諸社奉幣使〔伊勢石清水松尾平野春日大原町住吉〕被申依辛酉革命老人星事改元之由他事又被載　宣命辭別云云

村上

應和元年例　此時及椒房回錄

天德四年〔前年〕十二月十七日壬午被行臨時仁王會咒願文被載辛酉之事云云

同五年〔當年〕二月十六日庚辰左大臣以下參着右仗座有改元事〔改天德爲應和〕詔文云參居握符之名未知馭俗之道去秋皇后居孽火之妖忽起此歳辛酉革命之符既呈云々

廿六日庚寅被行臨時仁王會咒願文云革命相當壽星忽見云々閏三月七日庚午大納言高明卿參入被發遣

宇佐使　宣命云去年九月中仁物怪頻爾古登有仁依旦又今年當年革命之年登陰陽道勘申勢利云々

後一條

治安元年例

寬仁四年〔前年〕十月十三日庚寅令大法師仁統勘申明年辛酉革命當否

十一月十一日戊午被立宇佐使〔恒例使也〕

宣命辭別云

今明年波公家重久可愼給支內仁世謬仁庚申辛酉乃年波天下不靜須止從古傳來禮利云々

同五年〔當年〕正月仰紀傳明經陰陽曆道等令勘申今年辛酉革命當否之由

二月二日丁未左大臣以下諸卿參着仗座被定申諸道勘申今年辛酉當革命否事

又被定改元年〔改寬仁爲治安〕詔文被載辛酉之事云々赦令賑給同應和例

廿五日庚午依臨時御祈被發遣廿一社奉幣使今年相當辛酉種々咎徵相發之由被載　宣命辭別云々

白河

永保元年例　考證尙書云欽崇天道永保天命又曰王子子孫孫保民文章博士行家考之

承曆四年〔前年〕十二月右大臣仰外記云明年辛酉當革命否宜仰紀傳明經算陰陽曆道等博士權左中辨大江匡房朝臣令勘申者又大外記淸原定俊辛酉年被行例事等兼令申之廿四日壬午有赦令事　詔文云明年之曆當辛酉之支干一人可愼四海多危常赦所不免者皆悉赦除云々

同五年〔當年〕二月一日戊午　天皇行幸八省院被發遣伊勢公卿勅使〔權中納言師忠卿〕宣命云今年聖體可愼給加上仁辛酉爾毛相當禮利道々能所奏其恐旁分多利云々十日丁卯內大臣以下諸卿參着仗座被定申諸道勘申今年辛酉當革命否並有改元事〔改承曆爲永保〕詔文云被載辛酉事云々是日天下諸神

可奉增一階之由被下　宣旨三月三日庚寅從今日七ヶ日入道師明親王於禁中被修孔雀經法依有御愼也
廿四日辛亥被行春季仁王會兒願文被載辛酉事
六月十二日丁卯被發遣二十一社奉幣使被申辛酉並世間不靜天台園城寺鬪諍事也
十八日癸酉於南殿被行臨時仁王會依辛酉御祈也
七月二日丁亥相撲之節可停止之由被宣下是依辛酉並園城寺火事也
廿一日丙午　天皇行幸八省院被奉遣　勅使於伊勢太神宮（參議源保明卿爲使）宣命云世毛及澆漓年毛當辛酉禮利災害荐見依都鄙無閑云々
八月十二日丙寅於大極殿被行千僧御讀經（仁王會）今年相當辛酉之上又可有御愼仍所被行也
十一月三日乙酉被發遣宇佐使（越後守高階爲章）宣命辭別云年當辛酉止兢懼尤支上御聖體毛理運止之止愼給倍幾年仁相當禮利止聞食須云々

崇德

永治元年例　考證魏文典論云□□興於上頌聲作於下永治長德興年豐也權中納言藤原實光考之
保延六年（前年）三月五日庚辰被發遣宇佐使（武藏守藤原信輔）被申八幡宮火事並明年辛酉御愼事
十二月廿九日己亥左大臣以權右中辨藤原朝臣資信傳宣左大史小槻政重云明年辛酉當革命否仰明經算曆道博士令勘申者
同七年（當年）二月七日丙子左大臣同仰云今年辛酉當革命否宣令權中納言藤原實光卿式部大輔藤原敦光朝臣並紀傳陰陽道等博士勘申
三月八日丁未被發遣伊勢公卿　勅使（參議右大辨藤原公能朝臣）宣命云年當辛酉利時呈恠異世利云々又有宸筆　宣命云々

廿五日甲子權中納言藤原伊通卿參着八省院被奉遣祈年穀奉幣使　宣命辭別被載今年辛酉厄運不輕之由云々

五月十四日辛亥被行春季仁王會今年辛酉御愼事被載呪願文

六月十五壬午權中納言藤原公教卿參着八省院被發遣諸社奉幣使　宣命辭別被載今年辛酉厄運不輕之由云々

五月十四日辛亥被行春季仁王會今年辛酉御愼事被載呪願文六月十五日壬午權中納言藤原公教卿參着八省院被發遣諸社奉幣使（伊勢賀茂平野日吉梅宮平野祇園）各被申辛酉並本社恠異事

七月十日丙午左大臣以下諸卿參着仗座被定申權中納言藤原實光卿並諸道勘申今年辛酉當革命否事又有改元事（改保延爲永治）詔文云俗及澆漓告辛酉云々

是日左大臣宣下云應早奉增一階且注進本位管內諸國大小神事云々

土御門

建仁元年例　考證文選曰竭智附賢君必建仁策註云爲人君當竭盡智力託附賢臣必立仁惠之策賢臣歸之文章博士宗業考之

正治　（此下不寫而止）

〇御徒方萬年記抄書（御徒組頭小普請鈴木新右衞門著慶安四辛卯年ヨリ寛文八戊申年迄拾八年）

正慶承明日記

一慶安四年辛卯五月廿六日大猷院殿御棺從東叡山奉送日光御供衆には御徒頭小出越中守同大草主膳正（組共）板倉市正（組共）戸田五郎右衞門

正慶承明日記慶安四年辛卯ノ下ニ

一油井正雪ガ事ノ時
丸橋忠彌ガ兄御歩行宮城三左衛門組に罷有加藤市郎右衛門と云老母も市郎右衛門方に抱置市郎右衛門世倅二人以上四人早速三左衛門へ御預以後牢舎後に御成敗獄門に成市郎右衛門娘同妻は御免

御日記寫

一萬治元年

二月廿六日(晴)安部四郎五郎近藤勘右衛門兼松又四郎右三人今迄山里御番所相勤候處向後於山里御番被仰付候山里御番所御歩行一組可相勤旨被仰付之

同五日酒井兵部事病氣ニ付而御徒頭御役御赦免之旨又紀伊守へ被仰渡之

五月三日辰刻爲御鷹野角田川筋出御御物數

梅首鷄　三十五　川鳥青鷺　四　鷺

雅樂頭御先也御供伊豆守御留守豊後守申刻還御

同四日所々へ御鷹之鶴被遣之(略)袷三羽織伊奈半左衛門銀十枚木母寺御船手御袷二羽織被下榊原大膳太田十左衛門組御徒衆御袷一宛被下但與頭は二宛被下

九月十五日崇源院殿就三十三回忌爲御追善去十日より於増上寺萬部御法事御執行今日結願依之御佛殿御參詣(略)御道筋警固神尾內膳能勢市十郎兩組之歩行者並他組合六組御佛殿御廟所本堂方丈御裝束所寺中所々勤番有之

二年

七月廿五日御役替御徒頭加々爪宇右衛門跡牧野傳藏

明暦火事後也

九月三日今日より御本丸御書院御小性組御番新御番小十人組御徒何も所々御番所勤仕之

同五日御本丸へ御移徙
十二月四日來年日光御社參之時可致供奉候御歩行頭能勢市十郎神尾內膳榊原大膳本多平右衛門石谷五右衛門市橋傳左衛門朝倉仁左衛門黑田源右衛門岡部小右衛門坪內又左衛門太田十左衛門星野長十郎

三年

三月十一日御書院番戶田備後守組都筑彌兵衛事御歩行頭坪內又左衛門跡役被仰付
十二月廿六日三百俵御加增御徒頭大久保彥兵衛牧野傳藏組御徒與頭久下作太夫石谷五右衛門組御徒與頭眞島眞崎彥左衛門イ彥太夫榊原大膳組御徒與頭小野イ小野寺二郎兵衛彌一郎中西圖書組御徒與頭熊谷與五右衛門八十俵宛御加增都合百五十俵に成
以上萬治年中の御日記に出

御日記

一萬治三年
十二月十八日御徒衆貳拾組へ如例三年に一度ツヽ御羽織一ツ被下之旨岡野長十郎能勢市十郎兩人へ被仰渡〔但御徒六百人也〕
按岡野長十郎組筋は壹番組能勢市十郎組筋は四番組也
此能勢市十郎組初五番組之處正保年中割組に成市十郎は組替新組の頭に被　仰付右組は天明寛政時代拾壹番の組也五番組四番と繰上り候は慶安四年也
但正保二乙酉歟同三丙戌歟兩樣に記有之
決定之處城彥右衛門追考致へし

御日記
一寛文元年
廿五日改元万治
四月廿日早旦霧辰后刻細雨即刻止陰○東叡山大猷院様御堂爲御參詣辰后刻出御〔御半袴〕御刀松平紀伊守從御車寄御乘輿但稻葉美濃守內藤出雲守其外御側衆御小納戶衆並中奥衆大目付衆御書院番一組御小姓組番一組小十人組二組御步行二組供奉也御道筋大手御門より神田橋筋違橋通り也〔中略〕今日御參詣之間從大手東叡山迄道番御步行七組勤仕
五月十七日曇辰后刻紅葉山御宮御參詣〔御長袴〕御使番並新番頭〔組共〕勤番如例式御弓御鐵砲頭與力同心御步行頭〔組共〕御宮廻り所々勤番如例式
同廿四日昨夜雨今日快霽辰剋台德院樣御堂へ御參詣〔御長袴〕御佛殿廻り御步行頭〔組共〕勤番
十一月廿八日甲辰晴風烈地震申下刻牛込三枚平右衛門組淺羽與右衛門宅より出火組町十四軒酒井空印やしき坪內半三郎組やしき三軒町屋並大信寺御たんす町御步行町酒井雅樂頭忠淸やしき長屋四十軒程燒失
十二月十四日己未雨御步行中山勘ケ由組朝倉八右衛門小十人組に被仰付之禁中方朝倉越前守子たるについてなり
同二年
六月三日落合源右衛門組御徒組頭千草八右衛門諏訪善右衛門改易被仰付候に付山口七右衛門養善右衛門親類故追放被仰付
六月十日今日安宅へ御成に付先雅樂頭美濃守土屋但馬守御詰衆御近習之面々被罷越巳刻出御御供

久世大和守板倉筑後守松平民部少輔辰之口より安宅丸之前迄御船被爲召即安宅へ被爲移高覽此時向井兵部御のし献之暫時在而御船に被爲召天地丸に被召替行列に而川口迄被爲成佃島前に御船留り於此所天地丸に而御膳被召上即兵部御樽肴並蓬萊進上之過而川御座船被召替未刻還御

御船行列

土屋忠兵衛御船　伴作兵衛御船　小笠原安藝

南御歩行衆——小從人組——龍王丸——中奥衆
非番御徒頭
非番小從人頭——

五十挺立　御目付

八挺立　御目付間宮造酒之丞御船　五十挺立　小鳥船

天地丸——小鳥丸傳馬船——大河御座傳——同船——

向井兵部御船　向井兵部御船　小鳥船

常之御召船

六十一挺立

大龍丸傳馬船
小鳥船——高家衆
御詰衆
大目付
町奉行
御勘定頭
御作事奉行
島田久太郎
中坊美作
御書院番頭一人
御小性組番頭一人
御目付
非番進物番拾人——大平船——酒井八郎兵衛船
御小性組
御書院番
小濱左衛門船

六月十八日御徒頭落合源右衛門組與頭黑柳武左衛門熊谷武兵衛被仰付之

十月十五日御徒頭へ　能勢市十郎跡　大岡五郎右衛門　岡部小右衛門跡　高田庄右衛門　右之通被仰付

十一月朔日來年日光御供被仰付之御徒頭本多平右衛門大岡五郎左衛門石谷五右衛門神尾內記市橋傳左衛門岡野七十郎朝倉仁左衛門天野佐左衛門落合源右衛門高田庄右衛門榊原大膳大森半七郎

寛文三年

正月廿六日巳上刻御黑書院出御來ル四月日光へ御供之面々路銀被下之旨被仰出之白銀百五十枚ツヽ御徒頭十四人金十兩ツヽ御徒之組頭廿八人

九月三日御歩行頭中山勘解由跡へ川口源右衛門

一四年記事無之

一寛文五年

三月廿六日明廿七日公家衆御馳走御能〔中略〕

今朝增上寺御佛殿へ公家衆參詣に付爲案內高家詰衆御目付御徒頭等被遣之

十二月十八日辰下刻隅田川筋爲御鷹狩出御〔御供土井能登守、、、、、、、〕今日御供之面々雨天故濡申候に付時服可被下旨被仰出明日登城可致由其頭々へ能登守被傳之

十九日昨日被仰出候通今日時ふく被下之御納戶前圍爐裏間にて上意之趣土井能登守傳達之小袖二ツヽ御徒頭榊原大膳神尾內膳朝倉仁左衛門富永孫左衛門岡野長十郎安藤傳右衛門牧野傳藏高田庄右衛門北條新藏大岡五郎右衛門小袖壹ツヽ御徒與頭四人銀二枚ツヽ御徒牧野傳藏神尾內膳組五十六人

一寛文六年
正月十五日御徒頭大森半七郎原田利齋野村久淸當年宇治御茶爲御用可被差遣之旨被仰付之
十一月廿七日安藤傳右衞門組御徒之者志賀與右衞門飯田七右衞門御制禁之博奕を好候付追放被仰付

一同七年
正月廿日晴東叡山爲御參詣巳上刻大廊下通御のしめ御半袴大廣間車寄より御乘輿今日御成還御御道筋大手神田橋筋違橋下谷廣小路辻々御徒八組警固之
二月十四日曇御步行頭岡野長十郞組大岡彌右衞門是は武田越前守組より出る

一寛文八年
二月十一日
御步行之面々（川口源右衞門組）東惣右衞門（同上）西野又左衞門（大森半七郞組）小野淸左衞門（同）片見兵右衞門（同）若林角左衞門（富永孫右衞門組）朝倉源五左衞門（同）鈴木三郞右衞門（同）岡本新五左衞門（同）大野介右衞門（中西圖書組）谷田部鄕右衞門右十人銀十枚ツツ被下金三枚木原內匠鈴木修理銀十枚（御披官大工）吉本加右衞門（同御ソウシノ頭）豐田半兵衞銀五枚（御細工與頭）內山淸左衞門金三枚ツツ小細工大工貳人銀三枚ツツ小細工大工八人右者去六日火事之節御本丸北之方にて入精中に付爲御褒美被下之旨土井能登守被傳之
一今度江戶中類火に逢申候者共家一軒に付米三俵ツツ一石壹兩之直段御拂可被成候旨被仰出之由也
三月

覺

一御徒衆儉約可相守之番頭中へ若年寄衆より口上にて被仰渡事

一御番之節絹紬之小袖木綿袴に而相勤可申候但持來候者は當分綾紗縮綸子に而も可着自今以後絹紬之外拵申義無用に可仕候羽二重は不苦候附り紋を定付候不入事

一召仕小者貳人下女壹人此外可爲無用事

一振舞仕間敷傍輩共參候節茶之外一切出申間敷候但嫁娶之節又は無據儀に付振舞出申においては組頭迄可相斷候一汁二菜酒三色肴一種之外可爲無用事

一熨斗目小袖持合候はゞ正月計致着不苦候御能御宮御佛殿御供等之節は熨斗目無用候尤向後拵候義可爲無用事

一御禮日裏付上下に而も不苦候但御能日五節句公家衆御對顏之節は麻上下にても可相勤事

以上　三月日

右は御歩行頭衆へ被仰渡由也

〇豆州村々様子大概書

豆州加茂郡川奈村〔此村より八幡野へ三里〕

一此村方は南西に山を請け東北に海を請くるなり魚獵專ﾚ之耕作いさゝか當村高百拾八石四斗九升皆畑なり家數百九拾軒程有り

一漁業は春冬むつ赤魚夏秋鰹貝類なり

一明火堂とて川奈崎に有り九尺四方其内にあんどう三尺餘にして四方布にて張り其内へ紙張りいたし其内にて燈し廻船の當とす油は一夜三合つつ之積りにして代金は紙代燈しん布代共に壹ヶ年八兩ほ

どのよし支配の代官より渡すとなむとぼし人足は村役にて一夜兩三人つつ出し雨風之夜は五六人も
參り番いたし候由
一此村方之枝鄕にて二丁程脇に小浦といふ村方有り是も業方同樣なり
一村內に五ケ寺有り禪宗四ケ寺日蓮宗壹ケ寺なり
一濱運上貳兩三分ほど
　但壹ケ年也
一諸魚十分一壹ケ年凡六兩ほど上納
一廻船壹艘貳百石餘積獵船三拾艘ほど有り
一獵船壹艘に付船役永九拾文ヅツ上納〔但船ノ中梁一守ニ付永三拾文ヅツ上納也〕
一山手役米七斗貳升八合
一寬政十一未年の改此村方人別男女合八百五拾人餘之由
　但壹ケ年
　同州同郡八幡野村〔此村より赤澤へ壹里〕
一此村方魚獵專にして尤透之節は薪伐出し江戶表へ積送り渡世とし村高八拾三石七斗貳升貳合皆畑也
壹反之御年貢上貳斗壹升中壹斗八升下壹斗家數百四軒之由人別男女共五百人程
一農業は牛を遣ひ候事
一獵船之內上へ書き上ケ之船三艘附船小ませ船と唱ふ三艘有り
一江戶廻船蚫船五艘江戶廻船は五大力蚫船至て小船なり
一諸色十分一永五貫文餘也

一蚫運上永壹貫五百文
一楊梅木是はしぶき皮と云て染草之由此實椎實より大く至極之風味也以前は公儀へも献上に相成候由
此運上凡永壹貫文程上納
一此濱東南請之地にして暖地也向へ大島利島新島三宅島神津島見ゆるうろ山也
一馬艸場は天城山より續至て大く候得共上納無之事
一寺二ケ寺有之宗門は六ケ寺へ入會也當村之內に他村に寺有之者多し
一丸木船役永貳百五拾文是は古來より船無之丸木を堀候て乘り候節之引附にて今に出す
一定免之由鹽竈役永七百五拾文宛是は鹽燒不申候得共古來より引附候由以前は燒候由當時燒不申候
一山手役永貳百五拾文是は以前鹽竈有之候節右薪取候よしにて出候由當時は燒不申候得共馬艸永出し
不申其うへ江戶廻し薪等伐出し候間其代りと村方は見込居候よし
一此村方より赤澤へ之往來に川津三郎の墓有り右に赤澤山□抔も有る
同州同郡赤澤村〔此村方より大川へ三里是は五拾八丁之由土地のもの申聞る〕
一此村方は魚獵專とす耕作は聊にて村高貳拾三石七斗六升家數拾八軒人別八拾人程皆畑也
一船貳艘計
一江戶廻し薪是又專之業とす
一寺壹ケ寺禪宗也
一薪運上小物也少々之由役人共得と不辨獵師にて一向之人物也
一此村方後は赤澤山にて南請之村方也
一此村より大川へ參る往來に江戶御城出來之節伐出し候石之由長二間巾四尺餘厚五尺位之石有之脇に

丸ノ内二ツ鴈の紋掘附有り

同州同郡大川村（此村より奈良本へ壹里餘）

一此村方山海之業也家數四拾八軒人別男女三百八人禪宗寺壹ケ所

一獵船四艘

一薪之義も透間之節伐出す江戸へ廻し候節は旅船也是は稲取川東邊之船也

一田六町餘畑五町餘村高は百拾五石九斗壹升新田共

一濱運上は十分一壹ケ年永六貫百文餘外に天草運上壹ケ年増減有之候得共請負人有之八兩位も上納いたし候由

一此村方後赤澤山續にて前東南の間を請る暖地なり

一獵事は冬いかさんま抔にて外に業無之荒濱也

一山役永壹ケ年五百文餘

同州同郡奈良本村（此村より片瀬村へ壹里餘）

一耕作專にして透間之節江戸薪伐出し渡世とす家數九拾軒程人別男女五百人餘但人別は枝郷北川と云有り是もこめてなり北川は家數貳拾九軒程魚獵計りなり

一押送り三艘獵船貳艘外鰹網船壹艘天滿船五艘有り

一田畑合村高貳百四拾四石九斗貳升五合

一禪宗二軒有之

一山手役永壹貫文程

一蚫壹兩貳分一□十分一五貫七百文餘

一鹿皮役永貳百五拾文程是は先年より出し來る
一本村山方枝鄕は濱也
一鹽竈運上永七百五十文是は先年より出し來る
一鰹網運上永貳百七十五文出る
一此村方は南請後は山也
　同州同郡片瀨村〔此村より稻取へ壹里半〕
一此村方耕作專にして薪炭透間之業とす獵方無之家數六拾軒人別男女貳百八拾人程村高百九拾五石七斗五升三合
一田凡百五拾石程畑三拾石程牛馬遣ふ三拾疋餘
一もかり船四艘此船にて冬いか釣り出るよし
一薪其外山方出物十分一壹ヶ年永三貫文程
一山手役永三百文程
一濱運上無之
一禪宗壹ヶ寺
一地摺役米納にて壹ヶ年米四斗四升出る
　是は役之事に候哉難相分古來より出し來り候由申聞候
一此村方南東を請後西北山にて暖地なり
一上田は四斗位畑の上は貳斗五六升也
一丸石をば江戶へ遣し候由是は近邊之廻船にて遣し候由一日之日雇を取候得ば石代無之遣し候由

一薪は稲取見高川東邊より船を調候て江戸へ遣し候由

同州同郡稲取村〔此村より見高へ壹里半〕

一魚猟專とす透間に耕作す家數三百五拾軒程人別男女貳千人餘鯇するめさんままぐろなり折々薪抔を伐出す

一村高貳百七拾石田無數畑多し

一天艸運上壹ケ年百兩之由

一江戸廻船三艘猟船拾五艘

一諸十分一永五百文程

一禪四ケ寺淨土日蓮淨土新宗壹ケ寺ツヽ

一此村方北向にて少しの船掛場有之餘程之湊に候得共北向故風有之節は海上荒く掛り船無之由凡五拾艘位は可被掛樣子也

同州同郡見高村〔川津拾七ケ村之内此村より濱村迄半道〕

一此村方は猟作五分々々の渡世に有之薪抔も伐出江戸表抔へも送り候事家數百九拾軒餘人別男女九百人程村高三百六拾七石八斗壹升壹合田貳百石餘畑九拾石程

一魚猟は鰑冬夏之稼とす鯛はた抔釣り候由海老網なり

一廻船壹艘もなし猟船二艘其外に貳拾艘餘是は百姓持にても取り八丈其外類（流歟）人引船にいたさせ候由御永納候は二艘計り

一鮑海老さゞゐ運上壹ケ年三兩貳分程上納

一天草運上五兩程上納

一炭薪等は年季を限り引請いたし壹ヶ年運上四兩貳分位は上納のよし
一山手役永百四拾文程馬艸は百文程上納
一後山南請濱也
同州同郡濱村〔同斷此村より谷津迄七八丁〕
一此村高貳百三石七斗四升七合田百五六拾石程其餘畑也耕作專獵事はいか少々取候計り至て荒濱也家數六拾軒餘人別男女三百五拾人程
一禪壹ヶ寺淨土壹ヶ寺
一此村より奥に澤田村と云有り是より青石出る由
一此村は谷合也南請之濱手也
同州同郡谷津村〔太田備中守殿領分河津拾七ヶ村之內此村より繩地迄十六里半〕
一此村方は濱村之續にて大川にて上は梨本より出し候川之由是を越計り境也家數八拾軒程村高百五六拾石之由後はをいれい山と云山有り東北請也業に炭薪之梨本邊より出し候を取つぎ家抔いたし候由獵も少々はいだし候由
同州同郡繩地村〔同斷此村より白濱迄壹里〕
一此村方は作計り家數六拾軒程人別男女貳百五拾人程村高百三拾石餘此村へ谷津村より越候山はをいれい山を越此谷合に大概餘程見ゆる是は自分遣ひの油にいたし候由此村方谷合也
一炭は百姓持林より伐出し薪少々は江戸へも廻し候由
一壹軒平均牛壹疋位は有る子出來候と他村へうり候由大概貳分位之由三年に壹疋位ツヽ産るゝ由
一山畑なし

同州同郡白濱村〔江川此村より柿崎迄壹里餘〕

一此村方は作獵兩樣之稼也薪も少々ツヽ江戸表へ遣し候由家數貳百六拾軒餘人別男女千三百人餘村高五百六拾五石壹斗壹升四合

一獵さんま鰯杯也

一船六艘外に肥船拾艘程

一田四拾町外畑拾八町歩餘上田定免六斗五升上畑貳斗四升牛多し馬少し

一天草運上年季限り村方請負之由六兩ツヽ上納

一蚫此濱にて取り候得共江戸四ヶ市町鹽や金兵衛請負居候由上納迄は村方にて不辨

一山役永三百五拾文程

一此村方は南東請後は山也暖地地性もよし

一猪鹿多し

同州同郡柿崎村〔此村より下田へ拾八丁〕

一此村方作獵半々之稼也村高四拾四石七斗八升家作百五十軒餘人別男女六百人程此村方山手也

一獵船八艘

一地引運上永五貫百文蚫運上永壹貫八百文天草運上永八百文

一田多し畑少し居村之内山も有之濱も有之當村湊へも諸廻船入津いたし候

一此村々に外浦と云有り五拾軒程貳百人程此所に三人乘五大力貳艘有之

一船運上は三人乘にて壹艘に付永三百文つゝ出す

一當村之内船番いたし候家貳拾貳軒有之

老年の泪は故人の文をうるほすとは香山が生すぎたる歎にしてみな椅のむかしをしのぶなど人煙のとまるをいひそめけるぞかし反古ざらへもこのこゝろじやと申され候

○反古さらへ〔雨晃編〕

俳諧の前句附もこと

ふるきたはむれぞかし　　梨　節

めぐりあひても甲斐なかりけり

はつせ川くめどたまらぬ水車　　後嵯峨院

あしもてかへる難波津の浪

なにとてか蓼湯の辛なかるらん　　源頼義朝臣

みだれ藻はすまひ草にぞ似たりける

むめ水とても酸もあらばや　　従二位家隆

ちからがはをものぼる鯉かな

馬の背にいかなる淵のあるやらん　　前大納言爲家

ひろき空にもすはる星かな

ふかき海にかゞまる海老のあるからに　　西行法師

手にとるばかり手こしをぞ見る

峯たかきあしがら越る足もとに　　頓阿法師

ともし火はたきものにこそ似たりけれ

丁子かしらの香やにほふらん　待賢門院　堀川

右大將賴朝公上洛の時もり山をすぎたまふにいちごのさかりなるを見て

連歌をよめとのたまひければ

もり山のいち子さかしく成にけり　平　時政

むばらがいかにうれしかるらん　賴　朝

鞠子河ければぞ波はあがりける　梶原景時

かゝりあしくも人やみるらん　賴　朝

妹が子ははふほどにこそ成にける　平忠盛

たゞもり立てやしなひにせば　白河院御製

發句にも

散花を追かけてゆく嵐かな　黄門定家

いと櫻花の縫よりほころびぬ　前大納言爲世

此反古一枚なり

われ落に貴妃とぞまよふ女郎花　澤菴和尙

草よ木よ汝にしめすけさの露　槃珪和尙

おどり歌の拍子も都曇灯籠哉　林大學道春

詩の韻のへうそくしめせ秋の月　石川丈山

水なきに舟をやる風の一葉かな　宇都宮由的

秀吉公入唐の時

からたちの共みはやがてきこく哉　　細川玄旨

宗祇法しの連歌の席にて

御座敷をみればいづれも神無月　　守武朝臣

ひとりしぐれのふる烏帽子着て　　宗祇

五月雨にようこそきたれみのゝ者

此句は近衞信尋公へ御禮を申上けるに美濃國のなにがしなりければかくもあそばしけるとなん

水をむすべば月も手にやどり花をおれば香はころもにうつり候ものを袖をひくにひかれぬはあらにくやとうたふをきゝて　　立圃

月かげを汲こぼしけり手水鉢

筒に姫ゆりをいれて此はなの名は人めきていろもをかしげ也よく見よといへり昔竹取の翁がもとめ出たりける竹のなかにこそ世に珍らしき姫はあるなれ露は玉の枝ならぬかとたはむれて　　立圃

竹のなかにこめたる百合やかくや姫

この反古一枚立圃眞跡にてあり松翁といふ印の文字見へたり

守武朝臣

宗鑑

八千代
闇の月

長頭丸
月や

勾當望一

梅翁

左一　基佐入道永仙

まづ散や
風の
なかなる
虫喰葉

左二　尤昌坊空存

能因や
かねに
花ちる
證據人

左三　未得

葵にや
ところあら
そふ
車百合

左四　光貞妻

天の戸の
すかしもの
かよ
三日
の月

左五　釋日能

ちる花に
さし
足びきの
山路かな

左六　令徳

馬合羽
雪うちはらふ
袖もなし

左七　重頼入道維舟

心つれて
そり橋
おるゝ
あられ哉

左八　貞室

これは〳〵
とばかり
花の
よしの山

左九　正武

はらわたも
たつぞや
花の
衣がへ

左十 うかれ女 好女
爪はつれ花奢にそだつや若楓

左十一 休甫
あたゝむる夜は徳利のなさけかな

左十二 常矩
親の杖よはりしはてや棚麻木

左十三 梅盛
うら枯のおもてふせぎや草の菴

左十四 原木
花すゝきいつくれはてゝ炭俵

左十五 自悦
べう〱と臀をならぶる田うへかな

左十六 季吟
下種ちかうとべや雲井のほとゝぎす

左十七 由平
夏野狩もし此草や女郎花

左十八 幽山
鼠ども宿はととはゞ煤拂

右一　法橋玄禮
香のあらば
雪　水くさ
の
花　からん

右二　弘　永
はるたつと
いふ
忠峰の
かすみ哉

右三　徳　元
桐の葉も
井
戸　汲わけ
の水　がたし

右四　貝原すて
いざつまん
若菜もらすな
籠のうち

右五　西岸寺任口
兒櫻
落ても
水の
あはゝ
かな

右六　西　武
水鳥か
それ
かも
あらぬ
鷺かな

右七　立　圃
名月に
目の欲
ふかし
水の月

右八　幸　和
露の玉
手に〱
蕨
かな　にぎる

右九　玖　也
よの中は
何か常世が
雪の松

右十　行方妻
おく露は
玉の
やうなる
小萩かな

右十一　慶友
月の輪ぞ
桶　うちに
の
水　入けり

右十二　元順
吹出（フキダス）や野分
の朝また
おかし

右十三　和及
ぐど〳〵と
二日に
更衣
なりぬ

右十四　重徳
奥あらん
杓あたらしき
岩清水

右十五　惟中
後家に
見せん
立かと
おもふ女郎花

右十六　調和
十夜すぎて
林に眠る
からすかな

右十七　西鶴
毛が三すし
たらひで
それが呼子鳥

右十八　似船
からかさは
すぼめる花
の雪もなし

此六俳仙ならびに俳仙は撰ぶ人もさだかならずたがもとにてうつしけん更におぼへだになししかれどもよく考たるのめでたければ序ておかしくおもひ櫻にいのちながくすむかし歌仙三十六人とさだめられしことは大納言公任卿の作として神代のとき女神の御歌にあなうれしにへやむましおとこにあひぬとのたまひ又男神の御歌にあなうれしにへやむましをとめにあひぬと此ことの葉の文字のかず十八字づゝありければ左十八右十八にわかちてその人をゑらび和歌の道の師となさしめしよりことおこれりとかやこの古風の俳仙を拾得しよりいま又愚意にかなふものをとりあつめ新俳仙とし侍りぬ

左一　芭蕉菴桃青 はつ秋や たゝみ ながら の 蚊屋の夜著	左二　才麿 秋の暮 おとこは なかぬ ものなれば	左三　如泉 梅が香や 夜船の 水の いく所
左四　常牧 いつわれて 秋を たすくる 三井の鐘	左五　信徳 あけくれて 大根むまし 神無月	左六　其角 わが子なら 供には つれじ 夜の雪

左七　鬼貫
しろく候
紅葉の
奈良　ほかは
の町

左八　伊勢女その
はつれ〱
栗にも
似ざる
すゝきかな

左九　山夕
行水に
口すゝぎ
白
椿　けり

左十　來山
花咲て
死とも
ないか
病かな

左十一　萬海
はつ秋やはや
骨にしむ
水のいろ

左十二　園水
ぼた〱と
椿のおつる
朧月

左十三　文十
ちからなや
雌はのひて
居る雛合

左十四　尙白
ほとゝぎす
けふに
かぎりて
誰もなし

左十五　好春
秋の夜や
下土器の
あぶらさす

左十六　撿挍立吟
のがれても世にかしましき紙子哉

左十七　一禮
おもへ只蚊遣の灰（サウ）の朝朗

左十八　松濤
門すゞみよくぞ男に生れけり

右一　湖春
人われをかはゆしと見ん雪の笠

右二　一晶
白妙やうごけば見ゆる雪の人

右三　立志
矢の下に母の乳を呑鹿の子哉

右四　言水
見に來る人かしましや須磨の秋

右五　我黒
その癖（クセ）に雨さへふりぬほとゝぎす

右六　嵐雪
秋かぜのこゝろうごきぬ縄簾

右七　秋風
櫻ぬれて
うろ〳〵と
なるひとり
かな

右八　膳所尼智月
麥藁の
家し゜
やらん雨蛙

右九　一鐵
すまあかし
師走の果に
ながめゆく

右十　子英
あらし木がらし
よく堂守の
寐ることよ

右十一　沾德
青麥の奥ぞ
晝なる
雞の聲

右十二　瓠界
木曾人の
落葉
冬
籠　くさゝよ

右十三　只丸
むつましや
柳が門の
繩すだれ

右十四　荷兮
鶯や竹の
枯葉を
ふみおとし

右十五　鞭石
蚊屋つるか
ともし火
ふけて
釘の音

右十六　心桂
夏ばらへ
人肥たがり
瘦たがり

右十七　林鴻
する〳〵と
花の花
かき
つばた
蓙

右十八　舉白
白露のおかでは
おかぬ
千種かな

よし野小紫が姿を晝にかける
ふところに貌半分の霜夜哉　立吟
おなじ火を切籠に見るは哀也　木因
たゝかれて蚊を吐晝の木魚哉　東柳
八橋のなかばや寺の芋畠　羊素
うきあがる蜑に息なし五月雨　爲文
秋の暮あくびうつしに行にけり　天弓
中の〳〵案山子はひくし稲のはな
撰者雨鬼堂　梨節
鎌倉にて天文の博士なりける人の妻を朝日のあざりときこへし法師のぬすみ侍しを
あるじ成けるはかせ見つけて侍りしかば西の口よりにげ侍りしをあるじ
あやしくも西より出る朝日かな
といゝかけ侍りしかば阿闍梨にげさまにとりあへず

天文のはかせいかゞ見るらん

といゝ捨てにげ侍りしをはかせ情有るものにて呼戻しゆるして夜一夜酒のみ連歌し侍りき

有下巻闕

○天寛叢書目錄〔享和四年甲子〕

一水谷幡龍記一巻　一坪弓老談記二巻　一小田天庵記一巻　一佐野宗綱記一巻　一舘林城覺書一巻
一小弓の御所様御討死軍物語一巻　一安房里見家記一巻　一立斎舊聞記二巻　一享祿以來年代記一巻
一自天正至元文大事記一巻　一上杉景勝家法一巻　一朝倉敏景條々一巻　一毛利家記二巻　一毛利元就記一巻　一薩摩兵亂記一巻　一太閤秀吉出生記一巻　一柴田退治一巻　一薩摩兵亂記一巻　一東奥軍記一巻　一永祿以來由來初一巻　一德川記一巻　一大久保家記一巻　一武家執事之事一巻　一法條之事一巻　一新帝踐祚事一巻　一年紀考一巻　一朝鮮軍記一巻　一朝鮮征伐覺書一巻　一聞見集抄一巻　一蝦夷紀事一巻　一兌長老勸進帳一巻　一異本慶長日記一巻　一慶長小說二巻　一慶長記一巻
一伊東法師記〔一名三州物語〕一巻　一佐用軍記〔此書ハ天正五年豐臣太閤播磨國佐用上月等ノ城ヲ攻ラレシ事記セリ〕四巻　一阿部定次記一巻　一古文書〔朝鮮征伐ノ時ノ文書也〕一巻　一武邊咄抄一巻　一有馬記〔此書ハ有馬家ノ事ヲ記ス殊ニ修理大夫晴信ノ事ヲイヘリ慶長ノ比ナリ〕一巻　一清水長左衛門尉平宗治由來一巻　一近藤登助貞用家譜一巻　一老士物語〔此書黑田如水同長政ノ事ヲ記セリ〕一巻　一藤堂和泉守記一巻　一卜齋覺書〔一名慶長日記此書ハ文祿慶長ノ間ノ事ヲ記セリ〕一巻　一石川覺書〔一名見聞集〕二巻　一慶元記二巻　一濃州關原軍記一巻　一泉州樫井表合戰一巻
一除邑錄一巻　一古老夜話〔關原合戰ノ事實ヲ記セリ〕一巻　一備前老人物語一巻　一太閤送葬之記一巻　一御家號家々之事一巻　一福富覺書一巻　一智嚢談話二巻　一古諺記一巻　一嘉祥之事一巻　一

談海抄一卷　一北川覺書一卷　一渡邊勘兵衛軍物語一卷　一大阪陣覺書〔山口久庵咄〕一卷　一青野合戰一卷　一幸島若狹大阪物語一卷　一於安舞物語一卷　一福島正則遠流記一卷　一福島沒落之記一卷　一大阪夏御陣圖一布　一口宣案一卷　一鳴海家譜一卷　一治要七條〔本佐錄同物異名〕一卷　一從元和十年至寬永四年記一卷　一御遺訓〔幷附錄〕二卷　一日光山某院藏書一卷　一御上洛記一卷　一寬永行幸記二卷　一寬永小說二卷　一大猷院殿治世略記一卷　一吉備烈公遺事一卷　一正慶承明記抄一卷　一略御系圖一卷　一岩淵夜話別集一卷　一當家御先祖數代子一卷　一黑田如水記子一卷　一多賀谷修理太夫領地子一卷　一越前中納言御代給帳子一卷　一前田創業記子五卷　一秀吉公敎訓書一卷　一最上記一卷　一結城源秀康卿行狀記一卷　一景憲記一卷　一大阪冬夏御陣繪圖幷御城圖三枚　一反町大膳訴狀一卷　一藩史別錄一卷　一吉野甚五左衛門聞書一卷　一越後國內輪弓箭聞書一卷　一茗話一卷　一莊內物語一卷　一立入左京亮宗繼入道隆佐記一卷　一松平十郎左衛門記一卷　一正田隼人書上寫一卷　一水野左近一代武功覺書一卷　一有吉家代々覺書一卷　一遠藤家記一卷　一島原記一卷　一天草島原兩日記一卷　一松平甚三郎覺書一卷　一九州注文書付一卷　一幷河一類武功之次第聞書一卷　一尼草陣繪圖一鋪　一熊谷家感狀一卷　一別當杢左衛門覺書〔一名島原一揆物語〕一卷　一尼草有馬原覺書一卷　一山田右衛門佐申口一卷　一北有馬村農夫覺書〔肥前國有馬古老物語トイヘル同書也〕一卷

〔〕補陀落山碑陰

重建沙門勝道上補陀洛山碑記

人藉靈境以進道。境因勝人而彰名。如補陀洛山。亦其徵哉。勝道上人創窮其頂。精練功成。弘法大師揮天縱才。文之詳矣。於是世人昭昭知其爲名山也。其文則載性靈集。傳到于今。而其碑則歷年遼邈。

掃地不存。嗚呼廢而不興。非人情也。近者余鼎樹貞珉刻其文焉。庶乎使登臨者讀雄文以審靈境。知靈境誠爲進道之緣矣。然則此擧豈曰無所係乎世。有高淡淨心蔑視山水者。不亦謬哉。因題碑陰。聊紀歲月云。

時

寶永二年歲次乙酉春三月前天台座主一品公辨親王識

右之脇ニ監事薗田備前守從五位下藤原秀英

○杏花園六帙賀筵雜費

杏花園六帙於遷喬樓〔小石川金剛寺坂〕戊辰三月三日賀會客入用

汁　つみ入　やき豆腐　青み

平　柚　半ぺん　椎茸　三ツ葉

香物　澤庵漬

はり〳〵漬　干大根

猪口　うど　よめな

小豆飯

中皿　平め切身　煮附

三拾五人前

すまし　しら魚
吸物　たんざくうと
　　　なまのり
鉢　しんせうが
　　すばしり
　　煮附

硯蓋　伊勢海老　くわゐ
　　　かまぼこ　鹽煮百合
　　　鮒すゞめ燒　れんこん
　　　糸蒟蒻　新せうが
　　　きやら富貴

酒六升程到來物

一金壹分トぜに　大平め壹枚半つみ入五合
一四百八拾文　半ぺん二十
一百三拾貳文　すばしり貳ツ
一四拾文　干大根一ト掛
一貳百四拾四文　中椎茸壹升小椎茸五合
一百文　鰹節
一拾貳文　酢壹合
一五百六拾九文　小買物色々
一百文　三つ葉
一三拾貳文　半紙貳帖（まんぢう包紙用）
一百六拾四文　上田紙貳束（三味線引子供兩人へ遣す）
〆金壹分ト錢壹貫八百八拾五文
外に四百文程

一硯蓋到來物
有物
鹽味噌薪燈油貳拾目掛蠟燭拾壹丁小蠟燭四丁
炭半俵餘〔此日方三貫貳百目程〕　此代壹匁六分七厘五毛

○朝鮮信使列名
正使通政大夫吏曹參議知製敎金履喬字公世號竹里甲申生四十八歲居京城○副使通訓大夫弘文館典翰知製敎兼經筵侍讀官春秋館編脩官李勉求字子餘號南霞丁丑生五十五歲居京城○上々官知中樞府事玄義洵字敬夫號坦々軒乙酉生歲四十七○大護軍玄䲻字陽元號一遲壬午生五十歲○同知中樞府事崔昔字明遠號菊齋戊子生四十四歲○上判事前判官卞文奎字玉汝號梅軒乙酉生四十七歲○前主簿崔仁民字章叔號碧堂己丑生四十三歲○漢學上判事前正李儀龍字雲卿號蒼海丁卯生六十五歲○押物判事副司猛趙行倫字明五號逸庵乙未生三十歲○次上判事前主簿金祖慶字子祐號靑蓮壬寅生三十歲○前判官洪得俊字仲偉號徑園乙未生三十七歲○製述官奉常寺僉正李顯相字相之號大華戊子生四十四歲○正使書記幼學金善臣字士緯號淸山癸未生四十九歲○副使書記通德郎李明五字季良號泊翁壬午生五十歲○醫員生徒金鎭周字汝安號活元齋丁亥生四十五歲○副司勇朴景都字聖拜號從五所戊子生四十四歲○寫字官護軍皮宗鼎字士重號東崗癸未四十九歲○畫員副司果李義菴字爾信號信園戊子生四十四歲　右文化年韓使來聘對馬時一行姓名也

○深川四軒寺町鯉屋所藏書畫
深川四軒寺町に鯉屋といふ煙草屋あり杉風の子孫也芭蕉翁其外俳諧師の書畫等夥しく所持也
立軸〔絹地〕

葛の葉のおもてみせけり　懸崖　　はせを

けさのしも　篠葛　朱字［鳳尾］白字［風羅］

横幅（紙地）

［青］朱字

毘沙門堂の花盛四王天の草花も是にはいかでまさるべきうへなる黒谷下河原むかし遍昭僧正のうき世いとひし花頂山鷲の深山の花の色枯にしつるの林まで思ひしられて哀なり

観音のいらかみやりつ花の雲

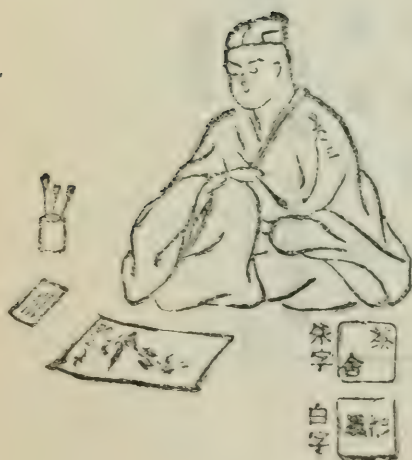
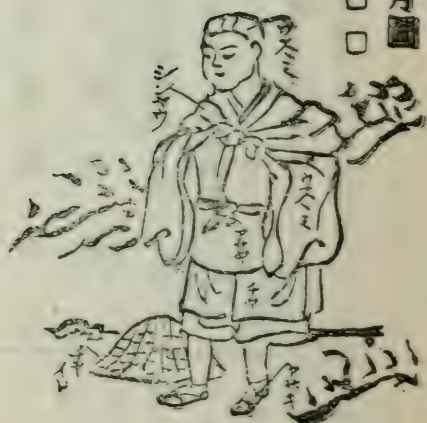
はせを（桃）白字

立軸小　紙地

長嘯の
はかも
めぐるか
鉢たゝき

立軸地紙　畫ハ杉風なり

月雪とのさばりけらし
としのくれ　　ゑせを

芭蕉

横幅〔紙地〕

コレハ杉風ニ時候ノ服ヲ贈レル時ノ書簡ナリ

> 時雨此比致候
> 初時雨猿も小蓑を
> 　　ほしげなり
> 猶期後刻候以上
> 十月十日
> 　　はせを
> 杉風様

狩野梅春筆　〔梅春〕

立軸〔紙地〕　臺表具

> 〔白字不詳〕瓢銘　芭蕉庵家藏
>
> 一瓢重泰山
> 自笑稱箕山
> 勿慣首陽山
> 這中飯顆山
>
> 貞享三仲秋後一日
> 　　素堂山子書〔我思古人〕白字

立軸小〔紙地〕

押紙

ほる畑やなづな摘ゆくおとこども
菜畑に花見がほなるすゝめかな
花にあそぶあふなくらひそ友すゝめ
古池やかはづ飛こむ水のおと
ながき日も囀りたらぬひばりかな
花さきて七日つるみにふもとかな
はせを

立軸〔短冊五枚ハリマゼ〕

歳旦　白

元日やおもへばさびし・秋の暮　桃青

白

元朝幾°眉°
餅を夢に折結齒朶の草枕　華桃青

ギエモ

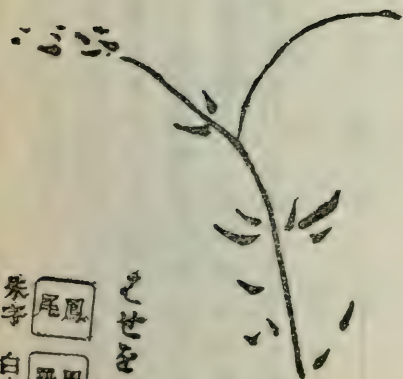
誰やらがかたちに似たり
けさの春

茶

たるむころしたに
はせを
もちおふうしの
・とし

同

ほうらいにきかはやいせの初便
はせを

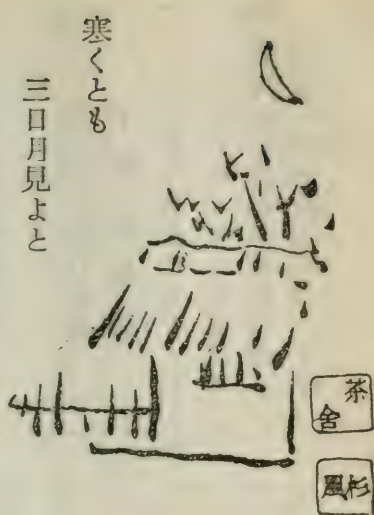
立軸〔紙軸〕
あかくと日は
つれなくも秋の
風

横幅

杉風様　　其角
祝　商山
はま弓や當時
　紅裏四天王　其角
かううら御免
　大くぼもくのかみ
　牧野備後のかみ
御としおとこ
　井戸つしまのかみ
　下條長兵衞
かたきり石州のちやくし
三代四代につかへたまふ人
當時四人の高老を祝申候是
は私へ御恩被下候方へきげ
んとり也

横軸　許六書畫　紙地　秋草

元祿六文月七日夜風雲天に
滿白浪銀河の岸をひたして
烏鵲も橋杭を流し一葉梶を
吹折けしき二星も屋形をう
しなふべしこよひ猶たゞに
過さむも殘多しと一燈かゝ
げそふる折節遍昭小町か歌
を吟ずる人有これによつて
此二首を探て雨星の心をな
ぐさめんとす
　小まちがうた　芭蕉
高水に星も旅寢や岩の上
　遍昭うた　杉風
七夕にかさねはうとしきぬ
合羽
解
花

立軸　紙地　杉風畫素堂賛

蓑杖畫

寒くとも
三日月見よと
落葉かな　素堂

横幅

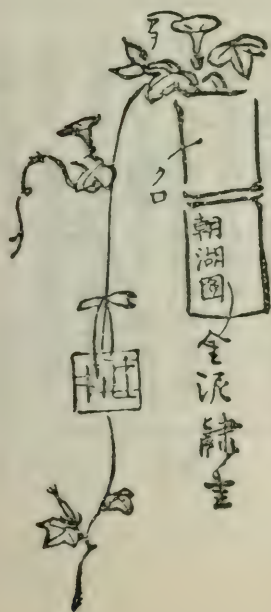
別紙に申達候共以後堅固之番所に承及候江戸表變地先々驚候御事共に御座候此度萬句廻状所々へ出申候所別而貴翁御事御取持奉頼候此筋丈艸出來浪地上□在打つゞき御果候而今は殊更心細き折節何事も先輩失候てちからなき心地仕候此度萬句巻頭に深川御連衆にて出し申度願望に御

座候尤先師舊住之地と申貴翁先達之よしみ旁々難默止奉頼度存候此旨猗萬千公へもなげき遣候此序の事は此方に御入候間素堂へ頼候へば書て可給候旨に御座候返々萬部ひとつ御發句にて頼上候以上

三月十八日　支考

杉風様

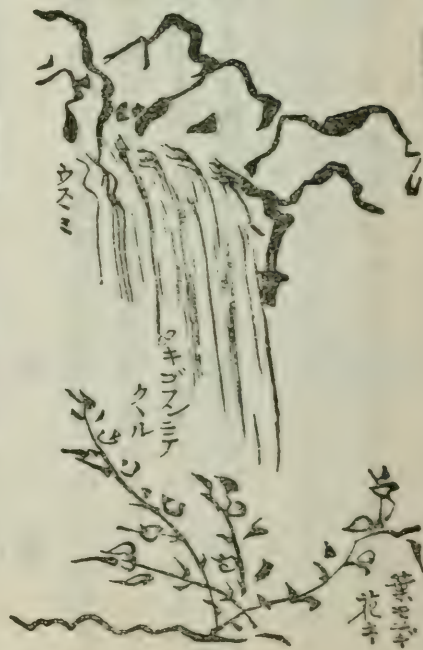
立軸　牡丹彩畫　唐畫

立軸　紙地　一蝶畫翁賛

朝顔に
われは食くふ
おとこ哉　はせを

横軸 紙地 許六畫 翁賛

ほろ〳〵と
山吹ちるか
たきのおと

芭蕉桃青

一巻

深川のほとりなる予茶菴のあたりちかき隱士うちより秋野のながめせむと催しいづくへか立出むといひける予思ふ所あり一とせ聖護院の宮御下向の時角田川の御詠に

東路のせきやの里に宿もがなすみだがはらのあかぬ詠めを

と遊ばしければ此里をたづねがてらすみだ川あたりの野を分むとちひさき舟に竿さゝせあさ草川にの

ぼしけるに岸ちかく舟とめて色黑き男腰たけ川に入うつふけになりて水底の土を抱あげ舟に積世のわざといひながら秋の風身にしむ比水にひたりくるしとあはれなりければ

土とりよなにほど冷る秋の水　杉風

川づらに舟かけならべ釣たるゝ人限りしられず岸にも立ならびて多し此興にさかづきをとりて

我酒のさかなにこはむ釣のはぜ　友五

川岸を見れば山里の炭竈のごとくなるをつくりて瓦をこめて焼その煙たちのぼりそらにくもりければ

瓦焼けふりは霧にまじるかな　蒼波

同じのき端につゞきて土をこね瓦つくりならべて干ければ

焼ぬまは露やいとはむした瓦　杉風

舟さしのぼす程淺草より牛島へ行こふわたし舟あり牛島の方より西瓜冬瓜秋茄子色々のつくり物を賤荷ひてわたしをこゆる淺草よりはさま〳〵の商人荷を持てこゆる其外男女出舟に乘おくれじといそぎ走てうちける又歴々と見へて人あまた召つれたる武士來り馬よりおりて舟一艘に上下のりて馬も外の舟にのせむとするにあらけなくはねてのらず人大勢よりて漸引のせ漕出しけるに川半にてもくるひてあやうく見へければ

吹よどめ馬のる舟に秋の風　同

漸里はなれなる岸に舟さしよせてあがり野を分るにちくさの花おのが色々咲て見ぬ草の數多かりき

名はしらず草毎に花あはれなり　同

といひて立やすらひけるあたりにをみなへしの花もかれたるありける比しもさかりなるべきを世にこゝろなきものゝありけると打うらみて

菫の色花のかたみやをみなへし　同

なを分行ば野中に塚ほどの木槿一かぶ花ざかりにてありけるいづれの里に主やあるいやあるまじきとおの〱うたがひければ

手をかけておらでしさりし花木槿　同

滄波師のいひけるはあれに田を刈賤のあまた見へたりいざ行て見むとて畴づたひにはるか行て見るに刈草臥たる男と見へて笠著ながらうつふけに寝たるおかしさに

鎌捨てかり干稲をしきね哉　滄波

刈田に行こふからすを見て

嘴ぶとの薄穂をひろふ田面かな　友五

稲かりながら我田人の田のよしあしをかたりければ

刈ながらはなしは稲の實入かな　杉風

暫やすらひて歸るさに牛頭山にまいり佛前に拜して齋堂にまいりければ机の瓶にあさがほをいけて眼前の哀に

齋堂にあさがほいけてあはれかな　同

はや夕日漸くかたふけば舟に乘てさしくだしけるに兩國橋のあたり屋形船所せきてわめく聲夥しとし明月にはかゝる事もありけるがいまだ三ケのゆふべなりけるにとおもひて

待かねて三ケ月見るか屋かた舟　同

何かと口ずさみ過る程舟岸に著ければ乘出す時關屋の里を尋むといひけるをおもひ出手を打てわすれまじき所を道すがらの興に乘じて見のこし侍るとおの〱あきれけり思へば彼淸女がほとゝぎすの歌

よみに出むなしく歸りけるそれは車これは舟なりと打わらひて草の戸に歸りて
　野の露によごれし足を洗けり　　同
　元祿二仲秋初三
　短冊のたちくず
長八寸五分

はら中やものにもつかすならひとり　はせを

長一尺六寸

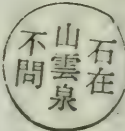
いかめしきおとや霰のひの木かさ　はせを

卷物
　鹿島記行
　　よき荷擔の人ならんかし　　和尙
おり〳〵にかはらぬ空の月かけも
ちゝのなかめはくものまに〳〵　　桃靑
月はやし――――　　同
てるにねてまこと顏なる月見哉
あめにねて――――　　ソラ
つきさびし堂の軒端の雨雫　　宗波

此後發句多し略之
貞享丁卯仲秋
みのむし　一卷

はせを　桃　畫は枯木

みのむしの
ねをきゝに
こよ
草の庵
みのむし

翠蓑翁書　石在山雲泉不問

貞享南至日誌
丁亥郎蚊足書□□
末に芭蕉菴桃青の跋有之略

眼前
みちのべのむくげは馬にくはれけり

此家に葛籠三つばかりに納め置たるを冬の日のみじかきに見のこしぬ

○飛頭獠

飛頭獠頭將飛。先一日。頸有痕而如紅縷。（一本作綫）及夜狀如病。頭忽飛去。須臾飛還。其腹自實。其覺如夢。雖獠不知也。予嘗入石抱山。澗中偶（一本無偶字）見二頭。一食蟹。一食蚓。見人驚起。食蚓者倘銜蚓而飛。蚓長尺許。雙耳習々。如飛鳥之使翼也。獠俗賤之。不與婚娶。（一本作嫁）欲絕其類。予按占城有尸頭蠻。本婦人目無瞳子。飛頭食童子糞。糞盡童子輙死。婦目益明。堪與此獠爲婚。

一笑。〔知不足齋叢書　赤雅〕

南方有落頭民。其頭能飛。以耳爲翼。將曉還復著體。吳時往往得此人也。〔博物志　太平廣記四百八十二〕

○仙臺萩演義零本

只聽得簌々地響處。跳出一隻如豕大一般黃鼠。口銜一個幀子。托地待要望外面跳將去。只見階下現出一個年少好漢。怎生打扮但見。

着一領羆熊工繡上下。穿一幅棋局爲紋衣裳。身長力壯。膽大心麤。手裡提將晃々黑漆鐵骨扇一枝。腰間跨着燦々春氷雁領刀三口。鐵骨扇要打幾許多腦袋。雁領刀可斬數十個頭顱。名聞室町男之助。聲振江都團十郎。

那年少好漢。生得環眼大耳。腰濶十圍。威風凛々。相貌堂々。八尺長短身材。二十四五年紀。他是源賴兼公部下心腹的健士。一身好武藝。有萬夫不當之勇。江湖上都喚他叫做荒獅子。姓男。雙名之助。大喝一聲道。俺竭來緣爲讒人阮陷。退去在家。頃聞府中歹人縱橫。鶴公主身上少伏侍的人。俺懷着鬼胎。放心不下。憂得苦了。夜間暗々地來階前保護。端的大驚小恠。那蓄生在這里探頭探腦。況口中銜得一幀。必有緣故。吃俺祖傳七代鐵扇罷。就勢劈將來。那大鼠亦不尋常。右躲左閃。男之助肚裡尋思道。果然是恠物。非同小可。抖擻精神。盡平生氣力。只一扇。從半空中劈將下來。向大鼠額上一下。那大鼠被男之助一扇。立地倒翻了。忽見一道濃烟滾將起來。黑暗々罩了庭上。濃烟散處。現出一個大漢。雙手揑訣。口中念念有詞。男之助吃了一驚。定睛打一看時。那大漢怎生摸樣。但見。

隆準深目。長面口方。額上陰々露出瘢痕。口中念念誦來咒語。滿腹藏機。陷阮幾個正士端人。中心暗算。結火許多刁徒姦黨。名馳八百行衢街。氣掩五十座州郡。奸雄家老稱彈正。絕伎俳優仰錦升。

那大漢銜這一幀在口。向外面走去了。男之助慌忙叫道。兀那撮鳥休走。向前待要揪捉。那大漢右手起處。呵呀一聲。一口銑劍飛將男之助面門來。說時遲。那時快。却好男之助手段高强。眼明手快。霍地一閃。把銑劍只一綽。綽在手裡。看一看時。那漢呵々大笑。拽開脚步。大踏步向那里走了。不知去向。有分教。訟堂上蹀血。忠良奸邪判然。公案前呈書。巫蠱計策露了。方是從來姦計施何益。終使忠賢到底榮。畢竟男之助見了的是甚人。且聽下回分解。

白藤庵主戲撰

僊臺萩演義第□回終

○林祭酒述齋詩四首

每値暇餘來駐車。一園秋色望中賖。西風已落淮南葉。細雨纔開彭澤花。爲奉寵恩趨殿閣。難拋簪紱臥煙霞。世間多少男兒業。要及鬢邊猶未華。

風笠烟蓑彼一時。何圖中道受塵羈。年光鼎々芙蓉老。霜信年々鴻雁馳。撫柳乃思宜武數。感秋偶誦退之詩。此身定被沙鷗笑。倘署前呵到水湄。

秋暮遊相忘園攄懐　蕉軒 [林公鑑] [天瀑山人]

壬戌孟冬廿有四日　棕堂書 [阿印正精] [子純氏]

褰盡帳帷鉤盡簾。夏堂虛豁納林嵐。臥看一鳥梢蜂去。入自南窓出北簷。
半窓梧葉影交加。蝴蝶夢醒西日斜。睡起渾身無氣力。呼童目指漑盆花。

夏日縱筆二首　述齋

〇白藤鈴木氏詩三首

杏園集已夜迎聲妓阿勝勝有盛名噪于一時家住駿河街

金樽會客駿河臺。有妓駿河街上來。品海鮮鱗抽錦縷。墨田新釀入瓊杯。知迎粉黛人皆醉。方是釵叢獨占魁。若使娉婷論價賣。名珠十斛棄如灰。

鈴木恭

元日早朝二首

數枝桃李狄門陰。陪宴且欣恩澤深。巍闕千尋聳籠雪。親軍八萬簇如林。氏知青葉凌霜色。〔國氏松平〕章表紅葩向日心。〔章服葵〕謭劣從班同獻壽。耻無一語比南金。

城頭初日報春溫。近午衙伺車馬喧。白雪呈祥新霽色。蒼松偃盖老蟠根。半生素職耻羊質。一服青袍是主恩。堪笑隱淪難免俗。退朝同拜五侯門。

鈴木恭

屋代弘賢

○童子產子

童子の子をうむ事

皇朝にては七八歳の女子の子をうめる事あり七歳のものは永祿年中のことなり〔筒井記〕八歳のものは今茲文化九年のことなり〔御代官注進書〕西土には十歳にて娠する事有〔南史〕といへる文見えしのみにて七八歳の例はいまだあらず

筒井記云、永祿七年三月於丹波國七歳ノ小女產レ子此レ擧レ世天下ノ恠異ナリト云順慶モ密ニ一士ヲ遣リテ其實ヲ見セシム、翌年果シテ三好ガ弑害アリ。

下總國相馬郡藤代宿忠藏といふものあり、もとは常陸國筑波郡城中村忠兵衛といふものゝ次男にて、先年當所百姓三吉といふものに養はれ、三吉從弟女よのといふものをめあはせたり、忠藏もとより女子あり、名をとやといふ、とや四歳の年より月事をみる、父母疾なるべしとて醫療をくはふれどもしるしなくことし文化九年正月より月事やみ三四月の頃より、姙娠のていなり、童女の有べき事ならねば、或は醫師の診察をうけ、或は陰陽者の占卜にとひけるに、とかく懷姙にきはまり、ことに男子とうらなひしもあり、月重なるに隨ひ胎動など有て、九月二日夜中より腹痛し甚苦痛ありて、三日曉男子をうめり、即時に乳汁出て養育すといへり〔土浦侯代官注進書〕これをまのあたりみしものゝ、とやは拾歳ばかりの姿にみえ、髮は罌粟にて行狀小女にたがふことなし、乳房は大人のごとし、小兒は健にみえて生育すべき容體なりといへり、父は何ものなりといふ事詳ならず、あやしき事なり。

南史云。張麗華初事龔貴嬪。方十歳。後主見而悅之。因得幸。遂有娠。

十二歳にして子ある事

十二にて産せしことは類聚名物考に見えたり、曰僕が舊友の女子十二にして男子を産り、今その子現に近隣に在、尫弱ならずしかも健なる男兒なり、西土にも例あり、輟耕錄卷廿四云。至元丁丑。民間謠言。拘刷童男女。以故婚嫁不問長幼、而亂倫者多。平江蘇遠卿時爲上海使。有女年十二。贅里人浦仲明之子爲婿。明年生一子。〔弘賢曰十二歳にて嫁して明年子を生といふ時は十三歳にして産せしなり〕

十三歳にして子ある事

男子十三歳にして子ある事龜山院十三歳の御時皇子降誕あり、中御門院十三歳の御時皇子懷姙翌年降誕あり、西土にも例あり、陔餘叢考卷四十四、晉明帝崩時。年僅二十七。其子成帝享國七年。年二十二。則明帝生成帝時。年僅十三耳。北魏獻文帝亦十三歳生孝文帝。とみえたり、又曰。北齊瑯琊王儼被害。時年十四。已有四男。と、これはそのはじめてむまれし子幾歳の時といふ事詳ならず。

日本史。龜山帝后妃傳云。帝早好內。十三始生子。

鳩巢小說云、　日頃皇子御誕生ニ候主上今年御十四歳にて宮女十七歳ト申候是又異事に候十三ニテノ御子ト申モノハ〔此處尙有闕文正德四年三月九日稻若水來書〇弘賢曰主上ハ中御門院ナリ此皇子ハイカガナサセ玉ヒシヤ續紹運錄ニ所見ナシ〕

榮花物語　本のしづく　　云かんのとのは御年十五ばかりにおはします春宮は十三にぞおはしますにいみじうめやすきほどの御なからひにおはします〔弘賢曰春宮は後朱雀院なりかんのとのは御堂關白の女嬉子なり治安元年二月中旬のことなりこれ又いと早き御婚儀なり〕

壬申霜月初四於府中寫了

〇古文書

巳十一月二日願之通相濟

養子願　吉良上野介

上杉彈正大弼二男於在所出生
上杉春千代
己巳四歲

私儀當巳四拾九歲相成候男子無御座候付右春千代養子仕度奉存候可相成儀御座候者被　仰付被下候樣奉願候以上

元祿貳己巳年八月廿九日　吉良上野介

大久保加賀守殿
阿部豐後守殿
戶田山城守殿
土屋相模守殿

大加賀守樣
阿豐後守樣
戶山城守樣
土相模守樣
淺野內匠頭

弟
淺野大學
辰十九歳

大學儀五年以前子之年　御目見之儀奉願候私領内祖父内匠頭代より新田五千石餘御座候右之内三千石弟大學拜領被　仰付被召出被下候者難有可奉存候右之趣奉願候以上

淺野内匠頭
長矩

辰七月廿九日
大加賀守様
阿豐後守様
戸山城守様
土相模守様

○朝鮮陣以後日本通用始之事

私祖父義智朝鮮在陣七年之間に士卒悉損じ國民及困賈候に付慶長六辛丑年初て罷登於伏見　權現樣へ御目見申上候節被仰付候は朝鮮は隣國にて古來より通交仕來候處不慮之亂にて通用相絶候事不宜被思召上候其方才覺を以和交之儀可相調候彼國可致同心樣子に候はゞ從　公儀之御差圖にて可申達候若敵對之仕形有之候はゞ其儘には難被指置候御馬を可被差向候間其旨相心得候樣□被　仰付義智對□被下候て以後も以御書彌無事之儀相調候樣可入精旨被　仰付候依之則使者差渡候へ共一向承引不仕候子細は對馬之義は古來より約條之船を渡し商買之道を通じ年久敷通用仕來候處秀吉公無故兵を起し無罪人

民を數多殺し剰陣中對馬守先手仕王都を破國王之丘墓を堀崩し朝鮮及亡國候遺恨難忘其上萬事大明之受指圖候へ共私に通交難成由申切候て　御代替り候を會て實ミ不存差渡候使者両度迄殺之承引不仕旨伺　上意一亂之時分諸國へ捕參候朝鮮人數百人數度に送返し殊に薩摩に被捕居候朝鮮國王之一族金光ミ申人返渡候節於對州筆談を以兩國通交之儀委細申含使者相添爲致歸國候金光於彼國　權現樣御代に成日本御靜謐之趣御仕置等之儀具に申傳候に付漸書翰請取通交之道少々相調候乍然此上にも彌日本之樣子爲可承屆慶長九年甲辰之秋彼地より松雲大師並孫文彧ミ申者差渡之翌年乙巳之春義智同道仕罷登候處於伏見御城　御目見被仰付本多佐渡守兌長老を以和交之事具に被仰付候則兩使致歸國右之段申達同十二丁未年三使呂祐吉慶暹丁好寛渡海依御差圖先江戸へ罷越　台德院樣へ御禮申上歸國之時於駿府權現樣へ御禮申上候此時より無事之儀相調至于今不相替通用仕來候

右之通兩國和交相調如古來通用仕來候此時より彌商賣交易之儀契約仕彼國に望候物を遣し此方に無之物を取可申旨堅申定至于今其通御座候以上

七月廿八日　宗對馬守

○筑前宗像阿彌陀經碑墨本跋〔古賀精里〕

西人記。我舶載萬安橋碑去。今莫知所在。獨有筑前宗像彌陀經碑僅存。未審來由。或傳彼寄平內府者。其爲宋人書則無疑。已煙沒海鹵之久。墨泐漫漶。殊爲可恨。既有脩建者。搨本亦稍々出。其初藩不甚靳重。逮於近歲。禁護頗嚴。非有司監視。則不許打搨。是以遽爲難得之寶矣。余向在佐嘉。地與筑鄰。一日半行。可達宗像。而搨本竟不可得。三年前。筑侯延余談經。因乞得之。椿亭祇役對島。經由筑封。囑有司亦得之。使余題言。余與椿亭始不相謀。各自祈懇。而其得之則在同時。乃書其所以得初易而後難。以詔覽者。并使來裔保愛。

文化甲戌榴月精里撰

〇萬安橋碑

泉州萬安橋。俗名维陽。在廻恩門東二十里。長江限之。橋踰數千尺。宋蔡忠惠公所造泉郡橋之鉅。與萬安埒。與亞之者。可三四數。而四方之人與泉人。獨好言萬安。其言往々多。愚以謂撰時擇日。畫基所向。鑁址所立。皆預檄江水之神而得吉。如世俗所傳醋字者。至于鑿石伐木。激浪以漲舟。懸機以□縋。每有危險。神則來相址石所累蠣輙封之。而公自爲記。及舊泉誌中。皆無是也。公所記。寥々百十言。但記時日與所費工費耳。亦無折鋪張。四百餘年來。後人尙復侈大其事。托于神而美之。當時固視之。漠然與尋常與梁等。古人信不可及哉。橋盡爲公祠。予甲午過其地。拜公祠下。見公所書二碑。無額無攔。製殊古樸。立公像左右。相傳倭變時。倭舟載其右一碑去。後人補之。今官此地者。預使人搨碑。郡人憚遠途。又索者多。乃別爲木本以應。泉州僞搨。不止銀錠淳化也。

右周櫟園撰閩小記

〇放下着傳來略記

抑放下着者筑後國柳川江月院前住善洞院なり、同國鶴田長泉寺の庭前に自然に竹二本生じて九年を經たり、或日善洞長泉寺に訪尋して庭前の二竹を閲見し褒賞して云、此竹爲尺八者甚奇笛ならんといふ、即時に住僧笛管と爲事を請ふ、善洞不辭、而大小二管に作る、小一管は江月院に留、大一管は長泉寺に授與す、然るに善洞此一管を吹練するに音聲更に不出、依て常に稽古の笛管となす、然而經年自然に妙音を發す無比類管と成れり、依て魂望の人雖多曾て授與する事なし、爰に閔江といへる虛無僧誣て雖レ請ニ授與一善洞無二放與一閔江魂望のあまり袋を脫て終に盜取て奔走す、洛陽に至て亦明闇寺門人となり、攝州浪華に住す、善洞深く此竹を惜て遠近を尋求む、閔江此消息を聞てたちまち勢州白子普濟寺より迯て

下る、閔江法を背の條明暗寺より演說す、普濟寺蒼惶して閔江盜笛の罪を責め、法に行ひ法具を脫し取て放レ此、依て筑の江月院より閔江所持の管筑後州へ可還送旨雖ニ切也、普濟寺も此竹の妙音を感じて法破を以て脫たる法具なれば普濟寺に留め置べき旨を斷り、終に不返、於此代々普濟寺の寶器となる、こゝに同國白子の住醫師井上玄仲といふものあり、多年好竹異他此管の妙音を感じて乞ふ事頻りなれども嘗て不許、不得止而暫恩借せん事を求む、普濟寺も又玄仲老の熱心の深きを感じこれをゆるすに、纔に五日を約とすといへども屢約して三年を經たり、仍て普濟寺より責促頻なれば玄仲老深患て以自筆放下着と管端に銘を書付け則普濟寺に戾す、其後普濟寺守へ訟事在て東都に下着す、其砌予聊の愚意加ふる事ありき、其恩を謝てこの一管を讓遣す、予此竹を得て吹弄するに殊に古今の妙管たり、其音妙にして神に通ず、仍て鈴法寺爲寶器と永く尺八本手の法燈を挑くべき者也

廓嶺山鈴法寺現住嘯山

于時享保十四己酉歲三月廿一日　　　　勇　虎

放下着授與之事

放下著者予多年爰之出時者懷之臥時者爲枕之然予及衰老而吹笛業不任心仍之門人欲爲授與因我宗吹笛手練之輩雖多其業能者正稀爰白獅子笛管明弄久殊能古風傳仍而此一管授與尺八手之法雨乞普事者也

廓嶺山鈴法守現住嘯山

于時寶曆十三癸未歲十一月　日　　勇　虎

白　獅　子　　□　□

右放下着の尺八は市谷袋寺町覺雲山淨榮寺什物也

○蝦夷人唄（ユウカラ）

兄。妹。一所ニ。山ノ。上ニ。住ム。兄。飲。水。別ニ。有。我。飲。水モ。
ユピトレシ トラノ ヌフリ カシケ子 チカイ ユヒイク ワッカ シンナイアン テウカイ イク ワッカ
別ニ。有。銀。水。金。水。一日。我。呑。水。無。セン—カタナシ。
シンナイアン シロカ子 ワッカ コンカ子 ワッカ シ子ト テウカイ イク ワッカ イシヤマ ヤイラメコモ
ナイト思ヒシニ。多ク。涌。飲ケレバ。胎。子。生。兄。腹立。我ヲ。縄ニ。テ縛リ。
エクシユコンナ ポロンノアン イクハ ホニコロ ホンジヨ ヘトク ユピ キンクカラ テウカイ トシ チマレ
山ノ。上。ヨリ。轉シ落ス。泣。ナガ。ラ山。山ノ下ニ居ル。獸多來リ。化物。
ヌプリキタイキ チロワノ カラカリセ チシカ子 ヌフリ チヨロポキ子 チカイアル シヤチン カイマシ
多。來リ。我。契リ。モウケタル。子。ナリ。我。妻。ナリト云。縄ヲ。見テ。
ホロンノアルキ テウカイ カル チマンデ ポンシヨ タバンナ テウカイ マチ タバンナ トシ ヌカリ
センカタナク。逃ル。義經。來リ。我。契リ。モウケタル。子。ナリ。我。
ヤイラメコモ キラ シヤマイクル アルキ テウカイ カル ワ チマンデ ポンシヨ タバンナ テウガイ
一所ニ。來レト。家へ。トモナウ。腹ヲ立。寢テ居。義經。ナンノ譯ニテ
トラノ チマン ナセタ チマン ヤイシヤンヘコイキクシユ ホツケハアン シヤマイクル イルシカイ
寢テ居ルゾヤ。子。トモニ。ソノ譯ヲ聞ク。外へ。行トテ。海ノ。上へ。行キ。大。
ケシユイ ホンシヨ トチノ イケシユイ シヨイタ チマン アトイ カシキ子 チマン チン子
岩。小。岩ノ。海。中ニ。住。居ヲ。見テ。腹ヲ立。家へ。行キ。
ワタラ ポン ワタラ アトイ ノシケタ ロシキハ チカイ ヌカリ ヤイシヤンベコイキ チセタ アルキ
腹立寢テ。居ル。今。三年兄。來リ。云。我。三年。詫言。只今。
ホツケハバテキ チカイ タ子レバ ユピ アルキ イタク子ハ テウカイ レバ ウナシケ アイ子タ子
濟タリ。義經。來ル。來タナラ必ズ。ワロク。スルナ。今。腹立ナヲ
ピリカ シヤマイクル アルキ チキイテツケ ウエン パロシヤンゲ タ子 ラムライ

リシト云。ソレカラ。兄。歸ル。秋。比ヨリ。義　經。トモニ。睦敷。子。四人。
ケクシルチロワノユヒチシビマタチロワノシャマイクルトラノウルメクルポチイネン
生。今。年　寄。義　經。子。二人。トモニ。古鄕へ。ユキ。我。今。年
ヘトクタネヘカエクシユシャマイクルホチトニトラノコタンタチマンテウウイクネヘカ
寄。子。二人。トモニ。古鄕へ。行。年寄センカタガナイ。子。屬脊。此處去リ
エクシユホチトニトラノコタンタチマンヘカエヤイラメコモポンシヨウタレ。チカケタ
ワキへ。スムゾ。
コタンシツカマ

コウカラこいへるは夷人の唄なりこれを唄ふに仰(アフ)ざまに寐て腹打たゝきその音聲咽より發して山伏の祭文にひとし傍に眉をひそめて聞されたる風情も見ゆある日雨のつれ〴〵に心を留て聞再問探るに共始終たしかならさるは夷唄なれば也かゝる浪の果にも男女の道のわりなきさまをきけば妻乞ふ鹿の露の暮尾花が末の夜の鶴もその思ふ所よそならずさすがにものゝ哀の捨難(ステガタ)くて方言をわかち記すこと左の如し

〇當御代譜

公方様　安永二巳年十月五日御誕生天明七未年四月十五日内大臣文化十三子年右大臣

御臺様　同年六月十八日御誕生近衛内大臣殿御息女實御父松平薩摩守重豪

大納言様　寛政五丑年五月十四日御誕生其後十五日之旨被仰出敏次郎様同九年巳三月朔日御元服大納言様こ奉稱同四月廿一日西丸へ御移徙文化十三年子右大將様

御簾中様　同八辰年六月十四日御誕生樂宮御方有栖川殿御息女

おらく御方　死〇西丸御小性押田丹後守妹寛政八辰年九月十八日老女之上こ被仰付おらくの方こ唱奉る

淑姫君様 寛政元酉年三月廿五日御誕生徳川愷千代殿御簾中同十一年御入輿

峯姫君様 同十二申年閏四月四日御誕生享和三亥年六月水戸鶴千代殿へ御縁組被仰出文化御入輿

菊千代殿 享和元酉年九月九日御誕生清水紀州

淺姫君様 同三亥年十二月十日御誕生文化四年六月十一日仙臺政千代御縁組

元姫君様 同五辰年七月二日御誕生

友松殿 同六巳年二月廿一日御誕生

文姫君様 同年七月十日御誕生

保之丞殿 文化六巳年十二月四日御誕生

要之丞殿 文化七午年六月十三日御誕生

盛姫君様 文化八未年三月十二日御誕生

乙五郎様 文化九申年四月四日御誕生

和姫君様 文化十酉年正月十四日御誕生

溶姫君様 文化十酉年三月廿七日御誕生

銀之助様 文化十一戌年七月廿九日御誕生

御内證御方

おこせ殿 元御先手平塚伊賀守娘 小十人井戸新十郎組梶久三郎姉

同人

おみを様 とせイ 小普請渡邊半十郎支配木村七右衛門娘

おやち殿 小普請石川右近將監支配諸星百助妹

おてう殿 小普請松平孫太夫支配曾根熊吉姉 濱田銕太郎娘イ

おそで殿 前同斷

おやえ殿 小普請石川右近將監支配土屋傳助娘

おてう殿 曾根熊吉姉

おやえ殿

おやえ殿 土屋傳助娘 太田三右衛門娘イ

おてう殿

おみよ殿 中野播磨守娘

おやゑ殿 太田三右衛門娘

琴姫君様　文化十二亥年六月廿六日御誕生

久五郎様　文化十二亥年八月十五日御誕生

仲姫君様　文化十二亥年十月十六日御誕生

信之進様　文化十四丑年正月廿一日御誕生

瓊岸院様　姫君様寛政二戌年十月朔日御誕生翌二日御逝去淩雲院

孝順院様　竹千代様同四子年七月十三日御誕生同五丑年六月廿四日御逝去増上寺眞淨院

端正院様　同六寅年五月九日御誕生翌十日御逝去淩雲院

瑞巖院様　敬之助様同七卯十二月十日御誕生同八辰年三月廿三日尾州へ御養子被仰出同九巳年三月十二日御逝去傳通院

體門院様　御臺様御實子敬之助様同八辰年三月十九日御誕生同十一未年五月六日御逝去淩雲院

棲眞院様　總姫君様同八辰年十月十五日(イ十六日)御誕生同九巳年四月廿四日御逝去淩雲院

麗玉院様　綾姫君様同八辰年七月十一日(イ十二日)御誕生同九巳年閏七月松平政千代へ縁組同十午年三月廿八日(イ十八日)御逝去増上寺岳連社

良元院様　豊三郎様同十午年二月晦日御誕生同年七月廿四日御逝去淩雲院

冲縁院様　格姫君様同十午年八月五日御誕生同十一未年六月廿四日御逝去淩雲院

おいと殿　水道橋内高木新三郎娘

おてう殿　牛込清田鎮太郎娘

おみよ殿　中野播磨守娘

おやゑ殿　太田三右衛門娘

御内證御方

御同人

お梅殿　御小納戸水野虎之助妹同年六月二日死去法名眞性院小石川傳通院

おうた殿（たかイ）　小普請組戸田中務支配水野内藏(イ左門)娘

おしか殿　改長岡小普請組大久保豊前守組能勢市兵衛姉御客應答ニ成

御内證御方　御方之御方

おうた殿　おたか殿事

お利尾殿　死○御書院番朝比奈舍人(イ藤内)娘

瑩光院様　五百姫君様同十一未年十二月十六日御誕生
同十二申年閏四月三日逝去凌雲院　おうた殿

唯乘院様　亨姫君様亨和元酉年五月廿二日御
誕生同年六月五日御逝去凌雲院　おてふ殿　西丸

法如院様　同二戌年七月五日
御流産上野凌雲院　おみを殿

感光院様　舒姫君様同二戌年五月七日御誕
生同三亥年三月四日逝去傳通院　おうた殿

蓉香院様　壽姫君様同三亥年十月十五日(イ八月朔日)
御誕生文化元子年六月十四日(イ十五日)御
逝去傳通院　おこせ殿

天淵院様　時之助様同年八月朔日(イ十月十五日)御
誕生文化二丑年九月十四日御逝去凌雲院　おてふ殿

俊岳院様　虎千代様文化三寅年二月十一日御誕
生同七午年十月二日御逝去増上寺　おてふ殿

圓琮院様　高姫君様同年三月朔日御誕生
同年七月廿三日御逝去凌雲院　おやち殿　死

晃耀院殿　晴姫君様文化二丑年十二月四日御誕
生同四卯年五月十二日御逝去凌雲院　おこせ殿

法量院様　艶姫君様文化八未年正月廿二日御
誕生同年六月晦日御逝去凌雲院　おそで殿　御小納戸吉江左衛門娘

精純院様　岸姫君様初安姫君様文化四卯年十一月
十四日(イ十五日)御誕生同八未年七月
廿八日(イ廿七日)御逝去凌雲院　御同人

淳脫院様　孝姫君様文化十酉年正月廿二日御誕
生同十一戌年七月廿四日逝去凌雲院　おすて殿

常境院様　興五郎様文化十酉年十月二日御誕生
同十一戌年四月七日御逝去凌雲院　おやを殿　阿部勘左衛門娘

御内證御方　御四人　おらく御方　御壹人　お梅殿　御壹人
お歌殿　御四人　おしか殿　御壹人　お利尾殿　御壹人
おこせ殿　御五人　おてふ殿　御三人　おみを殿　御貳人
おやち殿　御貳人　おそて殿　御三人　おやえ殿　御五人
おいさ殿　御壹人　おみよ殿　御貳人

西丸

竹千代君　文化十酉年十月晦日生同十一戌年八月廿六日逝
玉樹院殿英山知月大童子　増上寺　御簾中様

達姫様　文化十一戌年九月廿四日生
押田丹波守娘おひさ殿

僖姫様　文化十二乙亥年二月十七日生
晦日逝　瑞芳院殿　御簾中様

○文化年賀大孫詩　諸學士

忝値篤生
大孫之鴻禧
徵合酉年
典籍中觀　臣樸　不勝欣躍之至
謹奉俚言一章上
千秋萬歲之壽
臣　古賀樸　頓首再拜

維熊應兆有

文孫宇內同仰天眖繁

保業無疆迎祉福

貽謀不拔固基根祥成卣畜

胞胎異美似環瑜

儀表尊爭賀景雲彌數里公

侯玉帛擁

城門

恭遇篤生

大孫

少微耀倍

幼海潤加臣利用無任抃躍之至

謹奉鄙章一篇上

千秋萬歲之壽

臣依田利用頓首再拜

甲觀祥開喜氣俱熊羆入夢

協靈圖

昌期寧假高禖請

良月還同聚井符

色變長瀾河薦瑞
文流列宿電纏樞
遙知昊脊休徵萃
萬壽歡聲塞九衢
恭見
大孫如達之洪禧
麟鳳成祥
熊羆報喜臣固不勝欣抃之至
謹裁蕪言八句上
千秋萬歲之壽
臣增島固頓首再拜
離明廣運瑞休彰繞渚流虹協夢祥
銀榜晨瞻佳氣鬱
銅扉暮望彩雲翔
華封何假三多祝
箕範預知五福昌
守㘭千年基本固寰區舞躍喜無彊

恭值
大孫降誕
明兩增輝
河淸應運臣煜不勝歡抃之至
謹奉鄙詩一章上
千秋萬歲之壽　臣古賀煜頓首再拜

堯母門前玄鳥翔香孩營
裏亦龍驤
青雲成蓋抵蘭殿
紫氣滿庭明畫堂
不羨周南麟趾瑞
休論江左鳳毛祥繩繩
孫子承不構料識卜年天共長

伏覩
文孫如達之景福
流星呈瑞
彌月協良臣溫不勝欣躍謹奉
巴里一篇上

千秋萬歳之壽　　臣野村温頓首再拝

恭逢

大樹毓孫枝肯構長承

萬世基兆想熊羆符

昨夢祥傳龍風禀

英姿

守祧端是添蒼竹

享國何唯應紫芝欲傚堯封

三祝意敢陳周雅九如詞

○有栖川親王賀茂季鷹贈答狂文

有栖川御宮より季鷹にきせる筒にそへて賜りける御たはふれのふみ

書と歌とにこゝろあつて常に筆筒をさげ今亦此きせるの筒もさげなばまへなるつゝもをへぬべしこれを思ふに筆は口をもつけて毛を和らげきせるは口にくわへて味をたしみ一物は下のくちとも名づけたる處にてうるほひぬることむべなりたゞ三つの筒を思ひ合せて

筒みつゝみつゝにかけしまらがたけのびにけらしないもしらぬまに

しかるべく引直し一覧あつて返しを待のみ　　季鷹

御かへし　　季鷹事

加茂山本甲斐權守

かしこみ〳〵て申す賜はれる筒は長門と見ゆ長門はむかしは穴戸となん申き穴をたふとみ侍ることは神代より初りし事なればあなたふといふ意にて名付たるべしきせるは末の世に出き侍るものながらせゝるきせる語のひゞきかよへば彼穴をせゝるより名付しにや今の世の色好の家にはせゝりと名付てかぶとりんのたまなどにならべて用ひ侍れば也すい口はとりもあへず口をすふ事雁首はかりくびといふべきを音讀によみあやまりしなるべしたばこはたはれごとをたはことゝもいへば男女のたはれごとする事を畧して侍りしなるべし是かれをおもひ合て侍るにかけまくもかしこき神代にはなりあまれる所との給ひし筒に筆づゝをそへて提侍るに今亦賜はりし此筒をもならべふらつかせ侍りなば誠にのたまはするごとくに侍るべしされば

　くらべこし振まらのたけも堅過ぬおへにけらしな妹となるまに

かくこゝろよき物をしもやる〳〵と給はする君は千歳萬代もしやつきりとふとくたくましくさねかづらの長くさかへおはしまさん事をねぎつゝ思ひつゞけ侍るうた

　それいくよあらまたいく世氣味がよやよい君が代は幾世幾とせ

　いそぢにあまる紀の若人かしこみて答へまつる

　文化五とせといふ年の五月雨ふるころ加茂縣主よりおこせしをうつし置つ

美作の國人林のよし□

樂宮の御方様この長門筒の細へしろかねの御きせるを入られ大江戸よりあげさせられつるを其儘季鷹へ下されしとなんうけ給る

○河内古市玉碗記

舊市高屋丘陵はかけまくもかしこくも勾大兄廣國押武金日天皇の御陵なり御陵は河内國古市郡高屋丘陵村にあり〔日本紀延喜式並同〕扶桑略記に陵の高さ三丈方二町といへり日本紀に皇后山田皇女及天皇妹　神前皇女と合葬せらるゝよし載られたる或書に天皇の御陵皇后の御墓と隣る其處を今八幡山といふよし見ゆ、勾といふは大和國高市郡曲川村の地にして其世の都の名なり、古事記に勾之金箸宮といふ是なり、舊事記日本記に金橋に作るこれに同じ、大兄は長子を云ふ天皇は男大迹天皇〔繼體〕の長子にてましませば、かくはまうすなり、廣國より下津かたはみな賛美の辭なり、我國のいにしへ上下なべてかうやうの美號なりしを、後の世に異域にならひて謚たいまつり、安閑天皇とぞまうすめる、ある人のいはく、金峯山權現は天皇の御靈を祭れるとぞ、おもふにいにしへより時に泰否あり、世に治亂あり、泰否は天の消息治亂は人の臧否なり、されば國家の興亡、人世の汚隆、時をまぬかれずといへども、禍福は必ず人のまねく所にして、賢不肖、善不善に由れるのみ、我國中葉皇綱紐解しより、海内穩ならざること數百年、明德の役に將軍足利氏の陪臣畠山某河内國を取ける時、此地に城を築く、高屋城といふこれなり、其後天正の始、將軍義昭平信長と挑戰し、義昭の軍破れて城終に亡ぶ、兵革の後里の民此御陵をあばきしにや、此の里の長神谷といふ者の奴僕、土中より玉盌一を獲たり、其家に納ると百餘年にして、終に西琳寺に寄附す、實にあさましなどいはんもおろかならずや、西琳寺はもと向原寺といふ、欽明天皇の御とき蘇我稻目おのが宅を捨て寺をつくり、百濟よりわたせし釋迦像を置し所なり、上宮太子の天王寺を創建ありしに先たてること三十年、其寺既に廢ること久しといへども、官符をはじめそこばくの文書猶存せり、寺の來由沿革は別に緣起文ありて詳なればくだくだしく更にいはず、こたび平安の茶博士養壽院のぬし宗達てふ人を介として西琳寺住持僧慧雲上人此殿にまうのぼりて、我三山檢校三井長吏聖護院二品賜牛車盈仁親王に謁しまいらせ、携來し玉盌及び文書あまたみせたてまつ

りき、やがて其筥のうへに金泥をもて御鉢の二字を題せられてかへし賜りぬ、かくやごとなきことゞもの後の世に傳はらざらんことをおそれて、予がしたしく見聞につけて其事を謹てかいつくことしかり

時寛政八年歲次丙辰夏四月

開國光導天磐排命神孫勢州堤矢花寺城主帶刀先生高邦十二世聖護王府書室世古帶刀國柄景雷謹撰且誌

昔日我師友の高橋若狹守宗直朝臣、嘗て茶のちなみごとにいふ、延喜のみかどの御茶あされしは應量器と云ものゝよしなれど、其名ありて其すがたを知らずときこへしによて、先の年其說につゐて予あらたに陶工をし其器を造らしめておくりし、老師いと珍とし擧賞しぬ、しかりし此頃河內國古市寺に遊ぶ日、此寺に傳へし安閑天皇の服御の玉盌を拜し、更に思ふ、紫式部が物語に、所謂せんかうのかけはんに「せんかうとは淺香ならしさあらばかろき香ある材にて造れるかけはんならましかは白檀等にいふのたぐひにやしらじ」必のるべき玉盌なりけり、いつら御鉢とのみへられしも宜さることにや侍るらんと、いとかんじあへり、予が造らせし其趣は若くはかなふべからんもたがふ意あるは托子にのすべき器となせしが故に、其せんかうのかけはんにのするの意には違ふぞかし、老師のいまさばさせる趣もあるべきにと、おしくおもふもかひなし、さてしも都にかへりて、聖護法王に啓し奉りしに、其玉盌を見まほしきよしの御氣色によて西琳寺上人ふるきふみあまたとゝもにもたらせもふのぼり、やがて尊前に奉りしに、いとめで給ひて國栖景雷がふみのごとく題命せられてかへし賜りぬ、是によてある人のいふ、岷江入楚にいへる御法禮の後なることよりて之を用ゐらるゝといふにすがりて、今此玉盌を應量器なめりといふといと不審すくなからし、安閑のみかどの御時、未佛法の天朝にうつらざるにとゝがめなすも宜さる事なるべし、さは其頃にして何とかいへらん、唯玉盌とかとなへたらしかいざしらざれど、か

の若菜のさまの詮者の頃にして、器の儀いまだひらけざるにてや斯はのぼへたらし、今應量器と名付いふのならひはいと多かるべし、近くは井戸伯菴印度〔黄瀬戸いづれもふるけるものにして天正の頃井戸左馬介曾谷の伯菴なんどが擧賞しぬるにて斯は人よそふとはなれり〕のたぐひにして、かゝるきはゝしゐてとがむるによしなかるべしとなんおぼゆ、また此頃聖の宮の御茶のちなみに先にいふおなじふみにもあらそなる寛平法皇の御茶の服御のおりのかけはんになぞらへて、掛臺といふものをつとめて造らせ奉りしによて、小掛臺と名のられしを、今幸にそへてまいらすことしかり

平安　養壽院宗逹識

○信太社祭神記並泉州五社次第

上當社祭神記並泉州五社之次第書

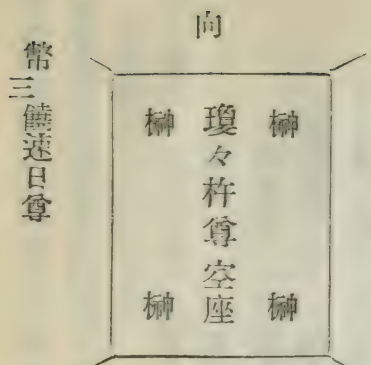
泉州五社第三信太聖神祭神記

幣二 天照大日孁貴　　幣四 木花開耶姫

向

榊　瓊々杵尊　空座　榊

榊　　　　　　　　　榊

幣三 饒速日尊　　幣五 盤長姫

每月神供日　朔日十五日廿八日廿四日氏子祈禱日

祭禮

二月十日御弓午ノ日

但生かわヲ張ル

七月廿八日神前ニ而

三四里打寄角力アリ

八月十五日大祭

神輿渡行アリ

十一月火たき午ノ日

五節句以上七十五度

當社神子片山源太夫

神事之節舞ヲ舞役舞村住　庄太夫

出勤右四度計

右祭神殿内有神秘神主一案之秘也

泉州五社大明神次第書

大鳥郡

第一大鳥社本社　地神第一

大鳥社　　　　禰波火社天照太神

中津尾社　　　日本武尊景行天皇御子

鍬鞍社　　　　兩道入姫皇女日本武尊ノ妃也

井瀬ノ社　　　穴戸武媛同尊の母也

　　　　　　　弟橘姫同尊ノ妃也

泉郡

第二穴師社本社二座　正哉吾勝速日天忍穗耳尊

　　　　　　　地神第一

　　　　　　　栲幡千々千々媛金右神の妃也

此社ノ神宮寺者泉州一國之惣錄所新田義貞公の御時

同郡

　　　　　　　地神第三

第三信太社本社五座　瓊々杵尊

　　　　　　　天照太神

　　　　　　　饒速日尊瓊々杵尊ノ兄弟也

　　　　　　　木花開耶姫右神妃也

　　　　　　　盤長姫右神妃ノ姉也

南郡　　地神第四

第四積川社本社五座　彦火々出見尊

天照太神

豐玉媛火々出見ノ姫也

酢芹尊右神ノ兄弟也

火明神右ノ兄弟也

火酢芹の弟

日根郡　　地神第五

第五日根社本社二座　鸕鷀草葺不合尊

玉依姫右神ノ妃也海神ノ妃也

人皇ノ始神武天皇御母也

右五社ノ祭神如斯

巳六月十八日出

泉州信太明神社家

田邊掃部

同長者　中村式部

下社家　平田金太夫

乍恐以書付奉願上候

和泉國泉郡信太聖大明神者人皇四十四代元正天皇依勅願靈龜年中信太首に勅命在し御鎭座之御社延喜式内泉州五社第三の社昔者神領も若干御座候而神官社家も數十人有之四時之祭禮に者官幣使を爲立給

ふ則御祭神者天津彦火瓊々杵尊四神五座之太神を奉祭神位正しき國內之大社也信長之御時神領も有之候得共大阪御陣之節神領沒收當時無之社地境內而已に而其頃相勤居候多數之社人も所々引退累代之古記等をも散亂仕引殘私共計わづか神畑四反歩程之德用を以子孫連綿仕年來歎ケ敷儀ニ奉存罷在候其後先規之時代より段々衰微仕候に付神主社家を蔑に仕既去四十二年以前寶暦九卯年氏子鄉中七ケ村社僧萬松院ニ一同仕明神境內幷正外遷宮之儀に付私親共相手取及出入江戸寺社御奉行阿部伊豫守樣へ相願雙方御召出にて段々御吟味御座候上被仰渡候者雙方彼是相爭候得共證據無之儀者御取用難被成旨被仰渡自今神體之儀者祭禮之節神輿へ相移候旨申上候幣帛を以神體に相定遷宮之儀中興之萬松院數百年來一人にて相勤來候段難相立壹岐治部儀萬松院開基以來社家計にて相勤來候段是又難相立候間以來社頭葺替等之節は正外遷宮祭禮之節神輿へ還座之義其外社頭一切之神事社家社僧申合無異論相勤之氏子七ケ村より除地境內山林差配仕候儀年來之事に候得者往古之社家一統之支配ニ申儀今更難相立氏子共より社家社僧へ不爲申聞取計候儀も其謂無之に付向後は氏子鄉中七ケ村申合社家社僧へ相談之上諸事取計年々勘定帳面を仕立七ケ村庄屋連印仕社家社僧奧印爲仕差置永々社中和融可仕旨被仰渡一同承知之連印一札伊豫守樣へ差上相濟候御儀に御座候其後又候鄉中七ケ村庄屋幷萬松院御裁許不相守山林境內之儀鄉中我儘取計萬松院は遷宮相勤可申抔ニ申立候に付寶暦十二午年又候及出入江戸表寺社御奉行毛利讃岐守樣御懸りにて段々御吟味之上於御評定所御裁許被仰渡候者雙方否可申上筋無御座今般之出入者神體之幣帛をいづれより調可申哉之段及爭論候上は右幣由緒古き方より捧可納儀にて社人は古來之由緒有之弘安之書付にて社家共先祖之名前書記社僧は延寶以來相續無紛候得共其以前之由緒不相知伊豫守樣御裁許證文々段にも社僧者中興ニ記有之然る上者社僧無之以前も神體無御座候而者難叶候依之被仰渡候者以來神體之幣帛神主調之正外遷宮每年神事之節神輿へ還候儀者社家社僧立會取計其外之儀

は伊豫守樣御裁許之通可相守且先御裁許にて事濟候儀を品々相爭候段不埒に付壹岐治部幷白明共押込被仰付候庄屋儀は社用に不拘品を勘定帳へ書載其上供米納之節請取書之儀申爭ひ今以不相納段不屆之至に付一同急度御叱被置供米貳石五斗品々相納以來納之度々受取書取遣可仕旨被仰付一同承知之連判一札御評定所へ差上相濟候御義に御座候處其後又候鄕中七ヶ村幷萬松院こ境內幷正外遷宮之儀に付及出入江戶寺社御奉行松平伊賀守樣御尋にて段々御吟味御糺被成下於御評定所明和七寅四月御裁許被仰渡候者先御裁許之通神體之幣帛神主調之正外遷宮每年神事之節神輿へ神主右幣帛遷候節萬松院も罷出遷座之勤式社家社僧立會可取計旨被仰渡則明和七寅四月十一日御評定所へ御請證文差上相濟候御儀御座候尤其比は明神境內谷峯共松古木數萬本御座候處其後社頭修復等氏子困窮難義を申立無據社木を賣拂右代銀を以諸繕等致來候儀に御座候最早當時者古木も無之殊御本社裏かわ抔も及大破數度庄屋年寄へ相談いたし候得共取〆り相談も相極り不申旣六年以前子年御宮修復之手當村々請山之外山年貢定之氏子家別に割宛十一月宮勘定之節取集め可申筈三方相談之上連印一札相認め銘々印形等仕置候處是こても新年より一切不取集兎角困窮申立候故無據其意にまかせ置候處追々社頭方及大破候段歎か敷儀共奉存罷有去る五年以前丑年篠田治郎四郎樣御領知御廻村被遊候節社頭向諸事御尋被成下候に付先年より成來之所申上候處口上書差出候樣にこ被仰下候に付口上書指上置候猶又此度從　御公儀樣御見分被仰付候に付私共氏子七ヶ村々役人立會信太除地境目御案內仕則御分間被成下候通り相違無御座候右境內之內無益に有之候平地之芝地等も有之御儀に御座候得者是等之地所格別之差支にも不相成義に付御上樣御開發にも被爲仰付被成下候得者第一御爲にも相成可申哉幷御宮葺替も出來社頭繁昌仕氏子等も立行諸修復葺替等も時々出來候樣に仕度願に奉存候左も無之候而は困窮之氏子共に御座候得者社頭修復は勿論葺替等も大社之儀に而中々當時氏子等の自力には難行屆歎ヶ敷奉存候に付何卒　御上樣御

賢慮を以村役人へも御利解被爲仰聞御開發にも相成候はゞ御爲にも相成幷御宮氏子共も繁昌仕本社末社其外諸建物及大破候乍去葺替式は修復繕等出來候積破爲仰付尙又宮付之者共も日々御供所へ相詰め神供獻上仕天下泰平御武運長久五穀成就御祈禱無怠慢相勤社頭繁昌仕候樣仕度此段御賢慮御願奉申上候猶又私共先年より薪等之手當社家山幷本社廻り是迄通被爲仰付被成下社家やしき之儀は先御裁許にも有之此地所之儀は御宮續にて則王子村庄屋へ宛還每年屋敷年貢米一斗五升宛私共方へ取來罷有候何卒御賢慮を以社頭葺替修復も出來氏子共も立行私共も日々御供所へ御詰御祈禱相勤御宮も繁昌仕候樣被爲仰付被成候はゞ私共子孫迄も御慈悲難有仕合奉存候以上

一橋殿御領知泉郡信太社

神主　田邊掃部　印

長者　中村式部　印

下社家　平田金太夫　印

寛政九年巳六月十八日

御見分

西村左太郞樣

〇越後國曼荼羅會我禪師房故跡

大織冠鎌足十六代伊豆國住人久須美四郞太夫家繼嫡孫伊東次郞祐親入道寂心嫡男河津三郞祐道ハ安元二丙申年十月十一日伊豆國久須美ノ庄狩場ノ歸路赤澤山ノ麓八幡野邑兒倉追立ト云所ニテ工藤左衞門尉祐經ガ爲八幡野三郞行氏ガ放ツ矢ニ中リ三十一歲ニシテ亡命ス

河津三郞祐道嫡男曾我十郞祐成同舍弟時致俱ニ建久四癸丑年五月二十八日夜駿州富士野於狩場父ノ讐工藤左衞門尉祐經ヲ討捕ル祐成ハ諸士ト戰テ討死シ時致ハ捕レテ誅ニ伏ス兄弟ノ骸ヲ富士野松風庄厚

原邑ニ葬ル

河津三郎祐道三男僧ノ實永〔禪師房幼名御坊丸〕ハ越後國山東郡〔今三島ニ改ル〕西越庄眞言宗醫王山曼荼羅寺ニ在シガ二人ノ兄弟敵討ノ事ニ依テ同年六月鎌倉ニ被召于時同年七月二日相州甘繩ニ至ル時死刑ヲ蒙ル由ノ若說テ聞汚名ヲ殘ン事ヲ愁於旅亭自殺ス于時十九歲實永ガ骸ヲ越後國曼荼羅寺ニ葬リ今尙存ス〔曼荼羅寺ヲ今寛益寺ト改ム〕曼荼羅寺舊跡ハ今ノ寛益寺ヨリ西南ノ方十五六町山ノ奧ニテ大寺ノ由其後佐渡國エ引移リ今以テ佐州ニ曼荼羅寺ト號シ御朱印地五百石被下置由寛益寺ハ曼荼羅寺ノ塔頭ノ由依テ實永ノ古墳モ以前ハ曼荼羅寺舊地ニ有之處後年今ノ寛益寺ノ裏ノ山ノ岨エ引移ス又同國同郡國上寺ハ建久ノ比寛益寺兼帶ノ寺ノ由依テ實永ハ國上寺ニ在ル由ヲ世ニ言モアリ實ハ本坊ノ曼荼羅寺ニ在シ也

○陸奥國平泉中尊寺鐘銘

抑考平泉中尊寺草創歲序長治二年春藤原淸衡公忝賜攝河鳥羽勅詔靈場也爰建武四年回祿成阿閦塊堙頽榮勵推鐘利生志于茲誌

闢山曉鐘覺無明眼鷲嶺晚嵐拂煩惱塵摧伏醜魁威降靈仙悉拯六道下逶九泉劍輪輟苦鯨音無邊普配聖賢四化父母利物心賢鑄施金錢銘加（字歟）鏤字永不朽傳

康永二年〔大歲癸未〕七月日

鑄師散位藤原助信

願立權律師　賴榮

大旦那左近將監平親家

大旦那當國大將涉彌義慶

○平泉醫王山毛越寺義經堂棟札寫

義經廟上梁文

陸奥州高舘者。源氏義經故城也。經薨後。遂作荒墟。天和年中。當州大守仙臺羽林綱村公家臣河東田氏長兵衛定恒。來治諸郡之次。登此山訪遺塵。寒煙蔓草。四顧荒凉。故老相傳。五十年前。此地有靈祠。定恒慨然而歎曰。義經大將軍賴朝公令弟。其軍功威名。市豎街童。無不知焉。豈有不封尺寸地。剪一莖茅。而安厥神靈乎。即與平泉衆徒共議之而白公。太守命之。草創一宇。以鐵瓦葺之。成號之曰義經堂。厥功厥悳。雖專歸太守。原厥濫觴。實出自郡吏定恒之善心。善心豈可不獲善報乎。可嘉可尙。仍賦一偈。充上梁文。偈曰。

以平等心爲基址。　靈廟新成輪奐美。
俎豆來藻川漣漪。　簷甍高館城蒼翠。
焄蒿悽愴如見之。　勿疑台靈垂光賁。
蓋代功名昨夢回。　從前汗馬總兒戯。
假令四海鬪英雄。　爭似早出離生死。
血流漂鹵古戰場。　純白蓮華捧雙趾。
我有一卷了義經。　天龍八部常側耳。
幸是猛烈大丈夫。　降伏魔軍起佛地。

大功德主奥州刺史僊臺羽林伊達英冑藤原朝臣綱村公

監造　川田勘助篚成
矢吹宇左衛門良成

大工十右衛門

天和第三癸亥十一月七日松島山下比丘通玄達敬識

○金田八幡宮記錄

奥州栗原郡金田莊吾勝鄕三迫金成邑金田八幡宮幷別當社司鄕事來歷累代相續記錄覺書之寫

古老の傳に、人王五十代桓武帝の御宇延暦十四年乙亥春坂上田村麿勅を奉て奥州霧機山の賊を御誅伐被成置征夷大將軍に任ぜられ候處惡路王が子高丸猛惡日に重り月に增し遂に九十万の徒黨を集て亂を起し國郡を侵し候に付仍亦同二十年辛巳の夏將軍田村麿再勅を蒙りて是を征せんが爲に東奥に御下向被遊候節も亦此處に屯し給ふ事あり時に田村麿清淨潔齋にして大小の神祇及び金山彥命に保食神等を祈り奉る其靈感不空して里民多くの砂金を掘得て奉り候ゆへ軍料に乏しからずして數十萬の陣旅を賑かし給ひ終に容易高丸及び諸の凶賊を誅して國中平安の後地名を賜て此處を金田の里と號し御歸京の後平城の聖帝に奏し奉り重て東奥に策打て大同二年に數々の神社佛閣を建給ふ時金の神金山彥命に保食神とを金田の里に刺史縣令に命じて宮社を御造建被成置金田明神と號し給ふ是當山の地主明神なり亦田村麿此地に營し給ふ時神人出現し給ふて告て曰く吾は是天下の土君なり故に國底の神となづく吾は是時に應じ機に隨ひ化生出現のゆへ氣の神と號く吾亦根國底國に鹿備疎備來らん物率ひ守護故に鬼神と曰く又仁和太利も蓋し水渡の略音也鬼渡の二字美和太利とよむ朕は是猿田彥太神也神代の太古は鬼太神と號し岐神となりて諸の不順者を誅し給ふ時備後の谷川に石橋を渡し經津主太神武甕槌太神の嚮導となり船軍し給ふ時船玉神と成り海を渡て軍將を守る山川萬里を走り四海を立に渡る故に香渡太神と曰く今汝に力を戮して凶徒を誅すべしとのたまひ夢覺て田村麿恭敬禮拜し亦軍に出づ時に神人有りて箭を放つ其姿魁夢見る人に異なる事なし故に田村麿其神人の現給ふ處ごとに社を建て是を祭る其

最初粟原郡金田里是則當社也及磐井郡流上油田邑同郡東山興田本吉郡波志土邑等に其社あり當山境內續に神祠ありて大同二年に湧出たる御手洗あり田村麿此靈水を以て祓除して宮殿に登り鬼渡の宮猿田彦大神本地大悲千手觀音を恭して仰ふ付て拜み奉る爾來此神泉を土俗呼て彌曾祇の清水と名付世に旱魃といへども盡ることなく八千代の下に深々と流れて田地を潤し誠に神變微妙の秘水なる其後人王七十代後冷泉帝の御宇天喜年中鎭守府將軍伊豫守源朝臣賴義公八幡太郎義家公御父子安倍貞任宗任を御誅伐のため當國に御下向之時國中所々において大に御合戰被遊候處衣川の合戰に官軍悉く敗北被成置賴義公并御嫡男義家公郎從藤原景通大宅光任淸原貞廣藤原範季藤原則明主從七騎に被爲成候而東西に御分れ御落被遊候所磐井郡流鄕高倉莊金澤邑において夜明方不思議に御父子一處に御會被成置候故其所を今に東雲里と申傳ひ其地を朝日館と申候是を世に天喜の七騎落と申候由土民百姓等是を見付奉りて飯をかしきて奉りし故飯倉と所名を賜はりて右金澤村の內にはへり武勇の百姓ありて近鄕の土民を率ひて最初に馳參し御父子を守護し奉りし者に男澤といふ地を被下流鄕に其村在り段々官軍集るといへども糧盡弓矢を失ひ旗幕等もなきゆへを以て國人集り見次奉りて頃は八月上旬の事故に土民集りて青稻を刈敷ならべ(以下闕)

○越前加賀白山麓

越前加賀白山麓尾添荒谷二ヶ村國郡替候儀糺書付

乍恐以書付奉申上候

一白山麓尾添村荒谷村二ヶ村之儀者元祿年中迄加賀國能美郡に有之候所其後何々之譯を以白山麓と唱候哉右見合に可相成書物類有之候はゞ不殘持參致候樣被仰付候に付左に奉申上候

元來白山麓村々之儀者十八ヶ村共加賀國能美郡に候處右之內十六ヶ村は天正年中以來越前國大野郡

之內へ入候由に候處白山權現之儀に付右十六ヶ村之內牛首村風嵐村こ加賀國能美郡尾添村こ及出入候處百三十八ヶ年以前寬文八申歲同郡尾添荒谷兩村こも公儀へ御取上に相成〔越前加賀〕白山麓こ唱御代官杉田九郎兵衞樣御支配所に被仰付候由且右十六ヶ村之儀も右貳ヶ村御取上に相成候節一同尾添村へ對し白山權現之儀に付出入出來夫より兩國御諍論に罷成御雙方樣より江戶表へ御伺被仰上候處九十四年以前寬文八申年十六ヶ村幷尾添荒谷兩村共に〔越前加賀〕國白山麓十八ヶ村　御料所に相成申候依之私共兩村者十六ヶ村こは御納所筋別段之譯に御座候右之通少も相違無御座候以上

寶曆十一年巳五月

越前加賀國白山麓尾添村庄屋
治郎兵衞　印
長百姓　彌四郎　印
同　七郎兵衞　印
同　甚左衞門　印
同　與三郎　印
百姓代　忠左衞門　印
荒谷村庄屋　甚五郎　印
長百姓　與七郎　印
同　次郎左衞門　印
百姓代　四右衞門　印

天野市十郎樣
御役所

越前加賀白山麓村々假名附帳　小出大助

小出大助
御代官所

越前加賀白山麓之内　十八ヶ村

他領入會無之　牛首(ウシクビ)村
右同断　風嵐(カゼアラシ)村
右同断　島(シマ)村
右同断　下田原(シモタハラ)村
右同断　深瀬(フカセ)村
右同断　鴇ケ谷(トウガタニ)村
右同断　釜谷(カマタニ)村
右同断　五味ケ島(ゴミガシマ)村
右同断　二口(フタクチ)村
右同断　瀬戸(セト)村
右同断　杖(ツヱ)村
右同断　小原(ヲハラ)村
右同断　丸山(マルヤマ)村
右同断　須納谷(スナウタニ)村
右同断　新保(シンボウ)村

右　同断　　　　尾添（ヲゾエ）村

右　同断　　　　荒谷（アラタニ）村

右者私御代官所越前加賀白山麓村々假名附帳書面之通御座候以上

享和三亥年八月　　　小出大助

御勘定所

下　札

本文越前加賀白山麓之儀は往古ゟ唱來り村鑑帳其外諸書物等右之通認相濟申候尤此村者越前此村者加賀と申儀村限に難相知候右村々總名申來候に付下け札を以申上候

越前
加賀白山麓之内尾添荒谷兩村二ッ折高由來尋書寫

田口五郎左衛門

覺

一白山麓尾添荒谷貳ヶ村二ッ折高之儀古來如何樣之譯にて相成候哉申上候樣被仰渡奉承知候兩村加州御領分之節加賀中納言樣小松に被成御座候時分石盛其外高掛り物夥敷畢竟兩村之儀者至極嶮岨成場所殊に大山之北麓故諸作實成兼困窮之村方に而御納所金難勤可及退轉に付段々御願申上候處村方御檢分被遊其上にて高掛り物半減に被成下其砌より二ッ折高に被仰付候然共御取米者相減候儀難被成旨被仰渡高掛り物計御用捨にて二ッ折高に相成候節ゟ御免相一倍に相極り申御書物等も被下候由に

候得ども尾添村にて預り置候所其後出火御座候而諸書物共燒失仕候尤白山麓十八ヶ村之內十六ヶ村者越前國福井御領分御座候處十八ヶ村之內牛首風嵐兩村ゟ白山麓に御組入有之候儀こ相見右年號幷譯合等も不相知候得ども寬文年中以來都而拾八ヶ村共白山麓こ唱諸帳面其外書物等へも認來申候乍然右之內拾六ヶ村者以前上野郡こ唱候節も有之候に付心得違を以諸書物へ白山麓大野郡何村こ認差出候儀も度々有之左候へば右尾添荒谷兩村之儀も先年能美郡に付心得違を以白山麓に入候後も能美郡こ認候儀可有之哉も難計候得共いづれにも寬文年中以來拾八ヶ村不殘白山麓こ相成候儀無相違旨申傳に御座候尤年數相立候儀に付右見合に可成書物等も見當り不申候間老人共申傳之趣を以御尋に付此段以書付を申上候以上

白山麓拾八ヶ村取次惣代
牛首村
十郎右衛門　印

文化二丑年四月
本陣
御役所

○松前島鄕帳〔元祿十三年〕

一從松前西在鄕幷蝦夷地之覺

一ねふた村　一さつまい村　一あか神村　一雨たれ石村
一もくさ村　一のしの下村　一幾よべ村　一ゐら町村
一おこしへ村　一はらくち村　一石崎村　一はねさし村
一汐吹村　一扇石村　一瀧澤村　一木の子村

一かみの國村
一こかつて村
一こよべ內村
一おやま村
一こりん澤村
一こつふ村
一泊川村
一小島
從是蝦夷地
一うすべち
一あふら
一六條間
一いそや
一ふるう
一ざままき
一かつち內
一しやつほろ
一ましけ
一つるをつへ

一喜多村
一もしり村
一つめき石村
一田澤村
一乙部村
一みつ屋村
一けんにち村
一大島
一ふころ
一ちわし
一をたすつゝ
一岩內
一しやこたん
一もいれ
一おたる內
一いしかり
一べつかり
一こまゝい

一こゝ川村
一つばな村
一おこない村
一目名澤村
一小茂內村
一かはじら村
一くま石村
一おこしり島
一せたない
一しまこまき
一たんねしり
一しりぶか
一びくに
一よいち
一はつしやぶ
一おしよろこつ
一ほろさかり
一ういべち

一ふるべち村
一江差村
一こまり村
一ふし木戸村
一大もない村
一あいの間內村
一ほろむい村
一はませたない
一夕まき
一しりべち
一むいの泊り
一ふるびら
一しくずし
一しのろ
一あつた
一はしへつ
一てしを

一ばつかいへ　是よりそうやの内　一つさん　一のつしやむ
一そうや

離島之分

一へうれ　一りいしり　一れぶんしり　一いしよこたん

從松前東在郷井蝦夷地之覺

一およべ村　一大澤村　一れいひげ村　一よし岡村
一宮のうた村　一ねまつり村　一しらふ村　一福島村
一しりうち村　一わきもこ村　一きこない村　一しやつかり村
一いつみ澤村　一六條間村　一かまや村　一みつ石村
一大當別村　一小當別村　一もへち村　一やげ内村
一富川村　一三屋村　一しよやま村　一へけれち村
一ある川村　一大野村　一龜田村　一箱舘村
一しりさぶ村　一ゆの川村　一しのり村　一錢神澤村
一汐こまり村　一石崎村　一おやす村　一うか川村
一汐くひ村

從是蝦夷地

一はらき　一しりきし内　一ゑけし内　一こぶい
一ねた内　一おさつへ　一おこしつへ　一のたへ
一ゆうらつふ　一くんぬい　一しつかり　一べんべ

一おこたらへ
一しらをぴ
一む川
一にかぶ
一もこち
一たもち
一しらぬか
一のつしやむ
一るうしや
一しやる
一のころ
一しよこつ
一つうへち
くるみせ鳥の方
一いるゝ
一くなしり
一おやこば
一あこゑふ
一ゑころほ

一うす
一たるまへ
一さる
一しぶちやり
一ほろべつ
一こまり
一くすり
一べけるゝ
一りいしやし
一りんにくり
一つころ
一おこつべ
是までゆうへちの内
一つもしり
一もうしや
一しやむらてふ
一くるみせ
一ほんしりおゝい

一ゑんごも
一まこまへ
一もんへつ
一みついたし
一うんべち
一おんべつ
一ちよろべつ
一ちべ内
一べりけ
一うらいしべち
一ゆうべち
一ほろ内
一きいたつふ
一はるたまこたん
一らせうわ
一ゑかりま
一しいあしこたん

一あよろ
一あづま
一けのまへ
一浦川
一ほろいづみ
一こかち
一あつけし
一しろい所
一ふなべち
一はどしり
一のころ
一ほろへつ
一もしりか
一まかんるゝ
一しりんき
一うるふ
一ゑばいこ

一もこわ　一けこない　一もしや　一しいもし
一らつこあき　一うせしり　一れにんげちや　一ふかんるゝあし
一まさおち　一しいもしり　一ゑかるまし　一まかんな
一しりおゝい　一こくめつら
いしかりよりいふつまでの蝦夷居所
一ぬまかしら　一夕ばり　一あつ石　一つうさん
一おさつ　一いちやり　一つうめん　一島まつふ
一いべちまた　一ついし狩　一かばた　一めいぶつ
一夕べち
からこ島
一うつしやむ　一こくわ　一つなよろ　一まをか
一のたしやむ　一おつちし　一きごうし　一いこいまで
一おれかた　一ちやほこ　一なふきん　一にくぶん
一きんちは　一ぴんのき　一うへこたん　一かれたん
一せうや　一しろいこころ　一しいた　一ないふつ
一あゆる
一人居村數八拾壹ヶ所　一蝦夷人居所百四拾ヶ所
一惣島數四拾八ヶ所　一田地高無御座候
永祿十三庚辰年正月日　松前志摩守

○村岡鐵之助

村岡鐵之助は村上義清が乳母の子なり義清亡びて後は二君に事ん事を口惜く思ひて一處に足を留めず爰かしこを徘徊しけり天性膽氣あり膂力倫を超ければ人を侮りて孩兒の如くに見下し諸國を周遊して行李乏しきときは旅人を殺して其たくわゑを奪ひ抔よからぬ行跡もありしが肥前の山中に白虎禪師といふ機智すぐれし名僧にあひて忽ち猛惡の心をやめ內心慈忍を專らとしけれどもうち見には少もその色をあらはさず大の男の鬚あくまでおひて鬼神羅刹のごとくに見へ常に鐵の大推を打かたげてあるきければ路次にあふもの恐れおのゝきて魂を冷やすといへども、かつて惡事を行はず、深山などにて怯弱なる人を見ては送りて村里へ出し、あるひは盜賊などに遭ひて難儀に及ぶ人を見ては其財寶を取返しなど、專ら仁惠を行ひけり、爰に山田傳吾久種といふ人、生國は勢州の人なりけるが、西國方に仕官してありけるゑ、故鄕に兄ありて病にかゝり其命旦夕に薄るよし飛脚をもて告來りければ、仕を辭して勢州へ趣んとして播州佐夜といふ所にかゝりて日暮けり、此所に赤松彈正左衛門といふ鄕士あり、劍術の達人にて關西に名をしられければ往て門人となる人も多かりけり、久種も兼て一面の交りをも結ばんとおもひけるが公務事鞅掌にて空しく打過けり、幸よき宿りもなければ赤松氏を尋ね一宿をもし、日頃渇望の志をも遂んとおもひ、門を扣ひて案內す、彈正左衛門左右なく出合ひて互に武邊の物語などしけり、久種も文學も疎々しからず打物取ても尋常の士にあらざりければ、彈正左衛門も悅びて暫く止まり給はゞかたゑに藝術をも試たきよし懇に求めけれども、此度は兄のいたはりにて片時も早く故鄕へ趣き申たし國許の用事も相濟侍らば重ての歸路には必ず御尋可申よし念ごろにいひければ、あるじ大によろこびて爰ははしじかなり、賓客のためまうけ置たる一間あり、不掃除なれどもたよりおかしき所なりこなたへとて伴ひ入る、庭に泉石おもしろく疊みなし、折からつゝじ山吹など盛にて鳥の聲などもめ

づらかにきゝなさるべき一間へ招じ、盃とり出て饗應しけり、やゝありて壹人の壯士を伴ひ來りさいはい入來の士あり、此人諸國を經歷し武事煆

稱毛屋金右衞門東作立松懷之子玉手書末書さしてみえず

○遊女玉菊が傳

觀燈の花枝きる事なかれなき玉菊がかたみのほかげ今も心の闇を照らさばおさきまくらの誇りはまぬかるべしや、そも〳〵うかれめのうきて漂ふ世渡りの始は、漢のひろく江の長き物語にてはてしあるべくもあらねど、月ひかりあさやかにその心のはなにほひなつかしきさまは女御更衣の位たかきにもおとらず、まがきのそとすだれのひま見る人の魂はもぬけのからとなりてあふにしかへんいのちはちりあくたさかづきをふくめる唇をながめ、見おこすまなじりをまもりてはおもひなす人おほかれど、そのおひたちのもとはと問へば富る家のむすめにもあらず、あてなるまごにいつきかしづけるにもなし、父かたくなに母引ずりにしてせをとの君のかほにくさげに、あにはたうとんかけものにせまり、またはあげ代さがりとやらんにつまりて此さとへ來たは、ちやうど十二因緣めぐるくるまのわたしがすぐせとあきらめてなをかぞいろのうれへを憂ひ斷へずはらからのくるしみをくるしみてきはまれる年をきりましいとをしむおのこをはなれて孝養ふかきこゝろざしあめつちのめぐみもなどかならん、終に富貴の家にかしづかれて人の鑑ともてはやす孝子あり、また偕老のかねごとむねにわすれず連理のちぎりたがひもてゆきておもはぬかたへ根引のまつ人は千とせさとことぶけと、身はあさがほの露をはかなみ長からぬ浮世におもはぬ人のむしろはふまじと雪をしのぶのみさほ霜にふすやいばのまことに、列女義婦の名をとゞむるもおほしとかや、その中に此玉ぎくてふ君のはじめおはりはかのよし原大ぜんといふものにくはしくのせて見る人袖の露ふかし、さればそのたまをなぐさめはちすのうてなもしな

すゝみなんとて燈しそめつるとうろうもとしに光をまし
是又東作が書きしたる草稿なり

增訂 一話一言 卷三十四

○市谷左內坂書林富田屋新兵衞〔貴親〕母渡邊氏墓の銘

杏花園

善譽心良永壽信女渡邊氏墓銘

永壽尼渡邊氏、父名は藤兵衞、東上總新田野の民草なるが東都の市に家居して薪をひさげり、母は浪花江の藻にうづもれしものゝふの流とかや、氏は何がしなりけん、享保七年壬寅九月に生る、幼名はしま、十九年甲寅十月廿八日父をうしなふ、歲五十五、麴まち第八のまち淨泉寺に葬る、元文二年丁巳の春はじめて尾陽のみたちにつかふ、時に年十六、名を松風と改め、女がたのみつかひの事をつとむ、三年己未の春の夜ふるど□織井のもとにあすのみやづかへの事をうけ給はりぬるに、麴まちのわたり燒亡さふらふとつぐ、松風うれふる色おもてにあらはる、織井そのゆゑをとふに、母なるものゝ老たるがすめるあたりときけば心も心ならずといふ、織井とく人をしてみせしむるに、方たがひぬ心やすかれとて下にはその孝心を感(本ノマヽ)織井その志をあはれみて千代もといのる心にもさらぬ別のありとしきけば、をなじつほねにぐしてつかへ給へなばうしろやすからめなどすゝむるにうれしく、母のがりゆきてこの事をつぐ、母もての外にむづかりて今われにわかち養ふ所は君の祿のあまりにあらずや、われ老たりといへども何ぞ火のために身をうしなふべき、汝公の事をわすれてわたくしの心をいだきもしみやづかへ無狀なりとて罪せられば不孝これより大なるはなしとてうけひかず、人みなあひつたへていへらく、母も母たり子も子たりと、さらばいづ方にまれ男もとめて母をやしなふ事を得ばその本意ならめと、上にもおもほしたりしが、このみかごに立入て呉服あきなふ金左衞門となんいへるぞよきたぐひなると、寛保三

年癸亥しはすの十あまり三日にはあら玉のとしをむかふるまうけにみたちのちりうちはらふにぎはしきまぎれに御暇給はりぬ、これみけしきよき例也とぞきこへし、同廿日金左衛門に嫁す、六日ばかりありて母そのよろこびにたへずにはかに病て死す、年六十五みづから子の手をとりて年比の孝養を謝す、はかなしなどはよのつねにて藤衣はつるゝなるべし、そのゝち一男二女をうむ、男名は貴親字は子周新兵衛と稱す、書をひさぎて業とす、長女先だちてうせぬ、次女酒家家何某に嫁す、寶暦十二年壬午八月七日夫金左衛門死す年六十八、一身の節を守りて再醮の思ひなし、明和五年戊子剃髪して永壽と改、俊鳳上人につきて一向專修の行をつとめ、日々に三萬遍の佛名をとなへて、上が上なるうてなを願ふ、天明五年乙巳六月廿二日病て死す、歳若干、臨終の念正して念佛の業おこたらず、屬纊の息已に絶るこいへども念珠の指猶うごくか如し、嗚呼かなしきかな、東都市谷清光山安養寺に葬る、ことし七かへりといふ年に、孝子貴親みづから行狀のふみとうでゝおのこもじなるいしぶみといふものを女文字にうつしてよとせちにもとむ、やつがれはやくより市にけみするより／＼その子をしり又其母をしれり、義としていなみがたし、口とく書付ぬ、銘に曰く　子は高き行ひとなん　松風のおと今にひゞく　ながく爾の類をたまふ　富田屋の子ともしからず　嗚呼こゝらのふみよむひと　ふみひさぐ人にはぢざらめや

〇徒卒隊記事

一號御徒方永代牒　鈴木新右衛門德積高朗　拾編
城彦右衛門藤原親方　考訂

一大坂御陣之節御供御御徒頭神君駿河ゟ御出陣之御供

松平豐前守勝政

右豐前守組筋者

松平志摩守
右志摩守組筋は後年大久保荒之助組之節割人に成惣組へ過人に成
三井左衛門佐
右左衛門佐組筋は天明年中五番組春田猪左衛門組也
右三組之外にも有之哉未詳
一臺德公江戸より御出馬之御供
阿部左馬之助正吉
右左馬之助組筋は
松平內膳正重俊
右內膳正組筋は承應元辰年渡邊八郎右衛門組之節割人に成惣組へ過人に成
內藤市正
右市正組筋は天明年中四番組稻葉多宮組也
安部彌市郎信盛
右彌市郎組筋は天明年中八番組仙石次左衛門組也
松平縫殿助直次
右縫殿助組筋は天明年中西丸貳番瀨名傳右衛門組也
植村志摩守家政
右志摩守組筋は天明年中西丸三番沼間賴母組也
鋏槃摩蓋抄云

大御所樣御供　御徒頭〔組切ニ組中猩々皮無袖羽織ニ而御馬前に列歩〕

御左　松平豐前守吉勝　　松平志摩守信重

御右　松平右馬介忠頼　　阿部左馬之助正吉

將軍樣御供　御徒頭〔組中猩々皮無袖羽織御持鑓の前ニ列〕

植村志摩守榮政〔初新六後出羽守〕　內藤主稅廣信〔後市正石見守〕

松平內膳重知〔後大和守〕　安部彌市郞信勝〔後攝津守入道淸閑〕

一元和二丙辰年神君被遊薨御奉收神柩于久能山後日光山へ御改收也右之節駿州日光山へ奉供之御徒方

一元和四戊午年神君三回御忌於日光山御法會之節勤番御徒

一元和八壬戌年神君七回御忌御法會之節日光山へ勤番御徒

一元和九癸亥年秀忠公御官職御辭退奉稱大御所樣ニ從是家光公御代也

一寬永三丙寅年公方樣〔大猷君御事〕大御所樣〔台德公御事〕御上洛此時御徒不殘從駕

一右御上洛御留守にて九月十五日大御臺樣薨御

麻布野外に被建御火屋御火葬奉納增上寺奉號崇源院殿一品大夫人昌譽〔譽イ〕和貞仁淸大禪定尼豐臣秀吉公之御養女に而實淺井備前守長政之女也御母は織田信長公之女崇源院殿御腹之姬君被爲有御入內被立中宮後奉稱東福門院樣百拾代女帝明正帝之國母也右以所謂淺井長政從三位中納言之御贈官位有之夫婦之靈牌崇源院樣御別當最勝院に有之

右大御臺樣薨御に付駿河亞相忠長卿京都より早々御歸府

徒卒隊記事補遺

一御徒之名目元祿六酉年製ハ御步行ト認メ同七戌年ヨリハ御徒ト認ル御番所日帳表題モ如此武鑑ニハ

御徒歩頭トアリ林家官職擬名ニハ徒兵〔御徒〕トアリ紀州陰山氏職役配當抄ニハ御徒衛門虎賁ノ類ト
ス澁井太室ガ書ニハ先馬〔御徒〕トアリ足利時代走衆御徒ノ勤方ニ近シ
室町家ノ時走衆ト云者ハ重キ役也然トモ當時御能御前置勤方敷革ノヿナド走衆ノ役也
一元和元年四月四日神君駿府御動座大御所樣御供　御徒頭〔組切ニ組中猩々皮無袖羽織ニ而御馬前ニ
列歩〕
御左　松前豐前守吉勝　松平志摩守信重
御右　松平右馬介忠頼　阿部左馬助正吉
一同十日臺徳院樣江戸御動座將軍樣御供　御徒頭〔組中猩々緋無袖羽織御持鑓之前ニ列〕
植村志摩守榮政(イ)〔初新六後出羽守〕　内藤主税廣信(イ信實)〔後市正石見守〕
松平内膳重知〔後大和守〕　安部彌市郎信勝(イ信寄)〔後攝津守入道清閑〕
右鋏嚢塵蓋抄ニ出
神君御供
松平豐前守勝政　松平志摩守重成
臺徳君夏御陣供奉御徒頭
阿部左馬介忠正　松平半四郎重利〔后任内膳正〕
松平左馬介乘次〔是監物事ナルベシ〕　三井左衛門
右武德編年ノ説也
一元和二年公(台徳公也)ノ臺命ヲ奉テ大御所(神君也)御神號奏達ノ事ニ依テ天海僧正赴二京師一途中爲二警衛一御歩行衆一組
ヲ指副ラル

右東武實錄ニ出

徒卒隊記事

宇治行之内名乘相知レ候分

〔寛永十癸酉〕栃木與五郎友綱　〔同十一甲戌〕神尾宮内少輔守晴
〔同十二乙亥〕近藤五左衛門用行　〔同十三丙子〕喜多見久太郎重勝
〔同十五戊寅〕彦坂平六重定　〔同十六己卯〕坪半三郎定次
〔同十七庚辰〕能勢市十郎頼永（長）　〔同十八辛巳〕石野故八兵衛氏照
〔同十九壬午〕近藤勘右衛門用清　〔同二十癸未〕兼松又四郎正尾
〔正保三丙戌〕猪子佐太夫一明　〔慶安元戊子〕曾我太郎左衛門包助
〔同　二己丑〕岡部小右衛門忠次　〔同　四辛卯〕初鹿野傳右衛門信唯
〔承應元壬辰〕多門傳八郎信勝　〔同　三甲午〕小出越中守尹貞
〔萬治元戊戌〕黑田源右衛門直相　〔同　二己亥〕中山故勘解由直高
〔同　三庚子〕中西圖書元照　〔寛文二壬寅〕天野佐左衛門雄連
〔同　三癸卯〕永見新右衛門重廣　〔同　五乙巳〕石谷五右衛門武清
〔同　六丙午〕大森半七郎增長　〔同　七丁未〕大久保彦兵衛忠種
〔同　八戊申〕大岡彌右衛門忠高　〔同　九己酉〕岡部左近勝重
〔同十一辛亥〕北條後新藏氏平　〔同十二壬子〕安藤故治右衛門正程
〔延寶三乙卯〕安藤傳右衛門定次　〔同五丁巳〕宮城主殿和澄
〔同　六戊午〕松平内藏助正勝　〔同　七己未〕能勢惣十郎元之

〔貞享二乙丑〕大岡忠右衛門忠眞　〔同　三丙寅〕松平左門忠治
〔元祿元戊辰〕柘植五太夫正信　〔同　五壬申〕吉田故小右衛門盛孝
〔同　六癸酉〕山口勘兵衛直之　〔同十二己卯〕夏目藤右衛門信武
〔同十四辛巳〕安藤後治右衛門定房〔正德元辛卯〕林藤四郎忠勝
〔享保五庚子〕吉田小右衛門盛治　〔同　六辛丑〕向井兵庫政暉
此外御徒頭名乘未考
寛永正保慶安御成之記ノ中ヨリ抄書之分
一寛永十七庚辰年三月十九日日光へ御供ニ參候分
小出越中守　岡田淡洲　石野八兵衛　栃木與五郎　大彦十　堀樺右衛門　松平新平　宮城三左衛門　近藤勘右衛門　牧野佐渡守　北條新藏　兼松又四郎　曾根太郎右衛門
御留主に四組
彦坂平六　依田內藏助　坪內半三郎　能勢市十　御成日數四十四日也
同晦日日光道中火事有之時之御定書御老中被仰渡候
一四月三日二丸御對面所へ晝過ニ召今度日光御成ニ付道中御法度之通相背申間敷候火事又喧嘩有之共御泊之御殿むざと懸集申間敷候左樣之刻猥に有之候ては人之褒貶如何に思召候組中へも其段々可申渡候御目付衆にも右之通被仰付候間右之通相背候はゝ諸頭共耻こ可被思召候間嗜可申候由色々之上意之義御書院御小姓組小十人組御步行頭計也同日仰渡濟九ッ過に高田へ御成ぶち打在之六ッ時分に還御
一五日四ッ過に御本丸へ御移徙不殘御供上下にて罷出る御立關より御入殿長上下也〔御移ニ付國持衆

大名衆出仕〕六日國持大名又は三千石迄太刀にて御禮勿論大納言殿方御出仕
一七日近藤勘右衛門兼松又四郎松平新平所より日光へ召連人數御定之外之義民部へ御斷申御定之外之人數書出目付衆へ渡遣可申由觸狀來る曾我太郎右衛門書出候は高四百石人數十人〔此外乘馬一疋侍三人挾箱一人馬取二人沓持一人以上七人〕
一八日八ッ過被爲召曾我太郎右衛門など日暮時分栃木民部少輔內田信濃守被仰渡上意之通小十人頭御步行頭御駕籠之左右を二人宛四人步行にて御供申候右より目安等上候はゝ御右之方之者取次樣子可申上候か又は御老中へ樣子可申との事也御左ならば同前也一方之方にて取次候はゝ殘一方はかまひ申間敷候但狼籍者候共其方者計支配仕一方はかまひなく御供可申と堅被仰出候組中之御徒衆にも其心得可申付との事也年寄一人若き者一人組合二人宛御供申筈也
一十一日より御留主之御番曾我太郎右衛門請取御傳馬之手形受申候
一十二日四ッ前に小十人組頭御步行頭民部前へ出る彌先日之通御供之樣子に可仕候成敗程之者は御社參候間しかり候て置候へ之由上意也同日增上寺へ四ッ時御成
一十三日四時御當地御發駕日光へ御參詣也
一廿三日八時過江戶へ御着也
一五月二日酒井讃岐守下屋鋪へ九ッ時御成六時還御八ッ前より御能五番御座候其跡にて加賀肥前守小姓にておどり七おどり御座候
一惣而鐵砲之音仕候とて阿部豐後守被仰付近所之同心町へ曾我太郎右衛門組三人遣三所へ申遣御城之內鐵砲打申間敷由申遣
一七日明八日御能御座候付而御勝手方役人究。諸役人も出仕也

一公卿饗應奉行高田庄右衛門彦坂平六組共に
一殿上人饗應奉行堀權右衛門組共に
一坊官北面御座敷御勝手共に落合小平治三宅半七組共に
一惣御振舞奉行兼松又四郎曾我太郎右衛門
一樂屋奉行高木筑後守北條新藏
一芝居之役坪内半三郎組共に能勢市十郎は組計也
一御前詰石野八兵衛牧野佐渡守坪内半三郎能勢市十郎兼松又四郎栃木與五郎堀權右衛門松平新平宮城三左衛門彦坂平六曾我太郎右衛門依田内藏助
　以上十二組一組より三人宛合卅六人夜之内より町人共御白洲へ入る
一八日御能御座候公家衆國持衆大名衆御馳走御徒頭前日之通四ツに初千人（惣振舞ノ事ナリ）振舞兼松又四郎曾我太郎右衛門組四ツ時御能はじまる
一十二日御城廻御成田安御門より外川を御成赤坂御門より内へ御成掃部屋敷下を御通り御厩にて何もに水被仰付候御供番近藤勘右衛門曾我太郎右衛門勘右衛門組より四人太郎右衛門組より四人源左衛門喜左衛門十左衛門九左衛門およひ申候七ツ半過還御
一十六日紀伊大納言殿へ早朝より國持年寄衆御譜代衆大番頭御書院番頭御小性組番頭弓鐵砲之頭御使番御徒頭被召寄御振舞能五番在之候
一御徒衆年寄又は御供成かね申ほとの者十人出し申候樣にと志摩守申渡牧野佐渡より廻狀來る時紀州樣御屋敷にて出入之公事（審也）取仕る也
一十七日紅葉山へ御社參御供番能勢市十郎牧野佐渡守同日二丸へ御成御能

一廿七日朝六ッ半に出御水戸殿前こび坂傳通院前薬種畠にて朝之御膳被召上候高田通還御被成候九ッ前に還御御供番曾我太郎右衛門近藤勘右衛門
一廿九日六ッ半に品川御殿へ少之間御入澤庵へ御成終日被成御座候御兵法など御座候御供番近藤勘右衛門北條新藏
一六月二日酒井讃岐守下屋敷へ御成七ッ半に還御　御供番坪內半三郎北條新藏馬場にて小性衆馬乗候事
一三日堀田加賀守下屋敷へ朝六ッ半に御成晝之九ッ過に還御小性衆水上覺
一七日柳生但馬守下屋鋪へ八ッ時御成五ッ過に還御御兵法御座候御供番堀權右衛門朽木與五郎也
一八日讃岐守下屋鋪へ御成八ッ半過に御入夜五ッ半過に還御御兵法御座候御供番松平新平大彦十
一十二日御城廻水戸殿前より牛込筋御成日暮に還御御供依田內藏彦坂平六朝加賀筑前守へ何も振廻に參家督の悅に能在之候
一十三日大僧正御馳走御能被仰付僧正御振廻七五三奉行彦坂平六組共に僧正同所次之間振廻三左勝手年寄衆兼松又四郎千人前大彦十依田內藏助樂屋朽木與五郎
一十七日紅葉山へ御社參御供番坪內半三郎北條新藏御宮番松平新平近藤勘右衛門
一廿六日火之番之衆八ッ時御老中被仰付候曾我太郎右衛門組より小池甚兵衛と申者出也
一七月三日高田薬種畠へ御成御供番坪內半三郎北條新藏いよめ取に御歩行衆幷頭衆もはいり申候事
一四日田安口より赤坂邊迄御成日暮還御御供番堀權右衛門朽木與五郎
一十一日八ッ過に市谷筋外川を御成巌生柳生下迄御成夫より還御御供番彦坂平六松平新平芝に火事在之火元へ彦十郎參候事

一十二日讚岐守下屋敷へ御成夜五時出御五半に還御ぶち打御鐵砲花火有之御供番太郎右衞門三左衞門
一十三日西丸へ八半に御成日暮還御御鷹のこや仕候上覽被遊候御供番内藏平六
一廿二日柳生下屋敷御成御供番彥十又四郎也
一廿四日增上寺へ九ツに御成法問有之御供番新平彥十
一廿八日高田藥種畠へ御成御供番勘右平六
一八月五日堀田加賀守へ御成日暮候而還御御供番又四郎半三
一十二日九ッ時俄に御成八ッ前に田安口牛込水戶殿前又田安之御門内より土居内市谷之土居内半藏町御門へ御出紀伊殿下屋敷前赤坂より麻生に御出それよりため池通還御日暮前御入御供番太郎右衞門三左衞門
一十三日海へ御成之由に候へ供千壽より御鐵炮被遊候隅田川にて御膳上る日暮に御舟にて還御五ッ過に御城へ御入被遊候御供又四郎平六
一八月十七日紅葉山へ四ッ過に御成御供番八兵衞新藏
一九月十五日大彥十郎組之者一人國母樣へ被遣事御切米百俵程に候也曾我太郎右衞門組より書出し一人遣候事
一十月十一日此間大僧正煩に付中根壹岐守申渡候ニて市橋三四郎被申渡候上野に喜庵立竹御付置候而御步行衆五人此内一人組頭上野に付置候而氣色之樣子御城へ注進可申由也急成事故御臺所番を遣候由是は御徒頭申合也
一廿一日大久保筋へ御成日暮還御伊豆守被仰渡候明廿二日尾張大納言殿水戶中納言殿爲御馳走石神井にて鹿狩被仰付伊豆守參候就夫御步行衆一組頭共に參候筈也堀權右衞門組共に參候其後權右衞門吳

服三大納言殿より被下候
右寛永十七年へ中御成之記ノ中ニ御徒頭名前見へ候分並組中へ掛リ候分抄出之
此年御成日數百五十八日也〔按此比御成御供ハ二組計ト見ユ〕
同十八年ヨリ慶安三年マテ十二ケ年之間日記追々抄出スヘシ　大田覃誌
○武藏國豐島郡の事
豐島郡之上　古松軒草稿
武藏國〔四神地名錄の内抄書〕
日本惣國風土記第八十四〔古名舊記ヲ尋ルタメニ拔書ス此故ニ全カラズ〕
武藏國豐島郡
名浦二ケ所　岡一ケ所　河二流　池二ケ所　泉三拾ケ所　宮祠九ケ所　寺院七ケ所　墳墓六基
豐島郡　或祇島東限下谷岡西限箕田南限藍田川北限向岡
占方或浦方
占方神社　瑞歯別天皇御宇六年戊申六月所祭大物主神也
隨願寺　慶雲三年丙午依不比等之願而立之
月頭
白鳥神社　白雉二年辛亥五月所祭日本武尊也
德業院　白鳳二年甲戌少僧都義也
江戸或荏土
江戸神社　大寶二年壬寅所祭素盞嗚尊也

眞如院　和銅元年戊申九月

荒世陵　小泊瀨稚鷦鷯天皇庚辰二月野見茂臣有復死于玆

湯島

湯島神社雄　天皇（本ノマヽ）御宇二年癸丑八月自宮所祭天手力雄神也

神田或韓田

下谷岡

篠輪津池

荒鄕墓

　荒墓神社大化二年丙午所祭猿田彥

廣岡

箕田

箕田八幡神社　天平六年辛未八月十五日自宇佐宮遷御于玆

　右二書ハ信ズベキ古書ナリト云ヘ𪜈今地名ヲウシナウ所多シ何國モカクノゴトシ

　　角筈村

六所山長樂寺と號せる新義の眞言宗有り、大猷院樣府中六所明神へ詣ふでさせ給ふ還御のみぎり此寺へならせ給ひしとて、夫より六所山と稱せし由、此寺に大猷院樣の御眞跡とて至て古き橫ものゝかけ地一幅寶物として珍藏す、是を拜し奉りし時、其文に

　以一張弓勢定天下

以三尺劍光安國土

眞僞の事はしらざれども御文章にて御武將たる君の語ともいふべし、かくの如きの掛物にこそ目に見へぬちみもうりやうのるいもおぢおそるべし、恐れあり有事ながら御氣象周の武王にも劣り給ふまじと感伏して拜せし事なりし

角莕村十二所權現之略圖

方言ニ土俗十二双ト稱ス、圖ノゴトク別當成願寺ヨリ穩居所ト稱シテ樓ヅクリノ家アリ、參詣ノ人爰ニ休ス茶店トモ云フベシ

池ノ長サ百二十餘間横五十間三十間又二十間

社傳に曰、昔時紀州より鈴木九郎何がしといへる浪士來りて中野の鄕に住す（すべて此邊は古の中野鄕なり）本國なるゆへに熊野十二社權現をおのが宅外に勸請して信心渴仰おこたる事なし、此故にやありけん家富榮へて金銀倉に滿、爰を以て國民中野の長者と稱す、長者が性質吝かにして金銀をかくさん事を欲し、奴僕をしてひそかに彼金銀を負しめて近鄕の幽林人なき所へ運び、原野をほりて埋み隱事數回なれば持運びし奴僕人に告知らさん事を忌みきらひ歸路におよぶ比は必ず日をくらし橋のもとに切り殺して水に流す事數人におよべり、此故に土俗姿不見の橋と稱し、又俤橋ともいふ、言ふ心は奴僕の物を負ふて往くは見れどもかへる姿を不見（正保年中の比と言傳ふ）いつの時にや有けん、大君御放鷹のみぎり當鄕へならせ給ひ還御の節長者が事蹟上聞にいたり姿見ずの名よろしからず、是よりして淀橋と稱すべしと鈞命有り、此故に今は淀橋といふ也、さて長者が隱惡報應すみやかにして壹人の愛女蛇身の姿をあらはす、長者大に悲しみ泰屋禪師を招請して正觀禪女の血脈をうけさせ經文數卷池に投ぜしむ、このゆへを以て彼女佛果を得て上天せりと、爰におゐて長者一念發起して剃髮し正蓮と法名し金銀をなげうち、今玉郡なる多寶山成願寺を建立す（十二所權現の別當寺

なり則長者が住居せし宅地なりと言傳ふ也、是より玉郡成願寺の所にしるす

上石神村

龜頂山三寶寺新義眞言宗にて守護不入の檀木を建たり、御朱印十石古跡所ときゝて立寄しに燒亡によつて寶物なしと答ふ、外村にてきけば小田原北條氏康氏政の書簡ありといふ、住持いかゞ心得しにやなしといふて見せず、いかんともなしがたし

同村

三寶寺池と稱せるあり、凡圖のごとし〔圖ナシ〕三寶寺池とはいへども三寶寺の池にはあらず地名也此池は井の頭の池より小なりといへども池の面きれいにて水淸し、いかなる旱りにも水少しも減ぜず、是より下流の村々用水として益ある池なり、水鳥鯉鮒も多、中にも卯月の頃よりは大鵁來るといへり、大鵁とは平生の鵁よりは甚大いにて味ひ佳也、上方にては至て賞翫せる夏鳥也、井の頭より互へ野井村の善福寺池此三寶寺池水脈通ぜりと見へて關村土支田村の出水も氣道ならんか、何れも水滿々としていかなる旱魃にも減ぜる事なし、且井の頭の池と此三寶寺池は中に至て深き所ありて底知れずと云、按に虬るるにやあるべし、虬は形粗龍に似て深き水にすむものと云、土人池とは稱すれども堤もなく自然と其池窪くして水涌湧出る所なれば小といへども湖といふべし、此池つゞきに古城跡あり、豐島左衛門何某といひし人の居城なりしに太田道灌の爲に討亡されて家滅亡せりと云云、此古城跡分內平にして廣く北に深き池を帶す、大手は沼田にて左右はから堀深く堀廻しなか〳〵よき平城なり、今に其形をうしなはず所々に櫓にても建し所と見へて築山の小山もあり、豐島氏故ありし人にや詳ならず

豐島家譜〔親常追加〕

元亨年中武藏國足立郡多摩兒玉新倉豐島五郡領主豐島郡石神井城主豐島左近太夫景村

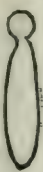
關村

此所は新座郡豐島郡多摩郡の界なる大いなる村也と云ひ傳ふ、上古に上方より奥羽への行道筋にて關のありし所にて關村と稱し來りしといふ未詳

・同村

水の涌所二百間餘の池あり、一面にあしかや生じて池とも見へず、しかれども水出る事おびたゞしく五月入梅の節是より下の村々水損せる事にて川もなき所にて難儀せる事不思議といふべし、扨三年以前此池のうちにうなる聲あり、其おと怪しき聲にしてしかも高き事其あたりに響くほど也、數日の事にて晝はうならずして夜の九ッ過よりうなり出す事有、近郷の者是を聞んとて後にはおびたゞしき聞人にて大勢にて聲をあげ石をなげうちてうなる方へ四方より何によらす投かけしかば大い成る水鳥飛出て立去りしといふ、何鳥といふを知らず、或人の云蘆切鳥(アシキリトリ)といふものゝよし、されども古しへより蘆切鳥と稱せる大鳥未聞、怪しといふべし、虛說にはあらず

下石神井村〔土人の方言にしやくし村といふ也〕

この村に石神の神社と號せる僅なる小社あり、神體は石にて神代より已前の石劔なり圖のごとし

石劔之長サ二尺餘丸サ太キ所にて一尺色薄青く實至てカタク重キ事鐵のごとし

世に云、日本の開闢は天神七代を初とす、夫より以前にても人なきにはあらず、今の臺灣呂宋蝦夷などのごとくに仁義五常といふをしらず、たゞ禽獸のごとくなりしを國常たちの尊勇智ありて終に海内を略し給ひしかど、劔刀類さらになく、遙の後素盞嗚の尊山田の大蛇(ヲロチ)を退治ありて初て天の村雲の劔を鑄給ひしとやらにて、それまでの鬪諍(タヽカヒ)の具は木石を以製せし物にて、今の世に思ひ察せるとは大いに異な

る風俗なり、曲玉の類にても神代のむかし察し給ふべし、爰に圖せる器は神代以前の石劍にまぎれなきものにて天下の珍器といふべし、僕近江の石亭が珍藏するを見其由來も聞し事也、土人の言傳ふは井をほりし時地中より出しとなり、村名を石神井村と稱せるも古人よりの事といへば定て故ありし事なるべし、事長く爰に略す

谷原村

谷原山妙樂院長命寺と稱す眞言地也、土人ひがし高野山といふ、遠からぬ世に此村に增島某といひし人佛心を發し、紀州高野山に登りて年久敷木食の僧となる、或夜弘法大師の夢相を蒙りて露佛を得てひがし高野山を建立す、尤大槃能寺院なり、緣記にはさまぐの夢物語の不思議を記せり、佛家の虛言は夢にかたらず事にて重寶といふべし

中村

瑠璃光山南藏院醫王寺眞言宗にてよき寺なり、御朱印十二石八斗餘、由緒もあらんと住持に對面して開山などを聞しに、近年よりの住職にて何も不存〳〵と云、かゝる出家の世に多きも世の流行といふべし

柏木村

醫光山圓照寺眞言宗にてよき寺院也、本尊藥師の靈佛にて醍醐帝の御宇筑波の貞崇僧都の安置と云云、平將門朝敵となり逆威を振ふの時藤原の秀鄕是を亡さん事を謀るに折ふし重病におかさる、當時の藥師に祈りしに病忽に平癒せり、秀鄕大ゐによろこび總州にはせむかひ終に將門が首を得たり、凱陣の後此地に大伽藍を建立して將門が着せる處の甲冑を此所に納む、今よろひの渡し兜の森と稱せる地是也、今小社を建て鎧大明神と號す、兜を埋しといふ地にしるしの松あり、至ての大木年ふりし松と見へ侍る老樹也、それより後故ありて衰廢せしに建仁年中の比江戸民部太輔賴介といひし人再興せり、それより

もまた相州鎌倉合戰の時、爰かしこにて相戰ふ事ありて賊の爲に燒崩さる永仁の比〔以下闕〕

○義殘後覺抄

松永彈正少弼洛東在鄕各戰之事　附永原壹岐守討死之事

一色殿に舊功せし老士のいはく、尊氏公の御治世も累代にをよび給ふといへごも慈照院までは御威光もめでたく、諸國よりかしづき奉りしなり、はじめは室町に御座ありしが後には東山白河をひらかせ給ひて爰にすませ給ふ、去程に大名高家東山殿と號して出入し給へば京白河とて富貴せしなり、これより末々になりたまひては次第に權威もかろくなり御領もうするのみならず、稍ともすれば國人等逆心をおこして京中も修羅の巷となりぬれば、在家の人も落うせていつとなくあれはて錦地たちまち田土となる、諸方の修理をくはゆる人もあらざれば賀茂河貴布禰河ひとつになりて萬里小路通りへ落くる程に、井せきをくませ柳をうえて河よけとす、後には在家となりて俗柳の馬場といふ、しかる所に萬松院義晴公の代にあたつて四國の三好筑前のかみ長慶同宗三同修理太夫等智略をもつて攝津國河內大和をうちなびけ、津のくに江口中嶋に城をとりたて四國勢をこめをき便宜をうかゞひて萬松院殿をほろぼしたてまつるべき計略をなすほどに、つゝむとすれば綺すでに露顯しければ義晴公大きにいきどをり給ひ、其義ならばいそぎ江口の城をふみくづせとて細河武藏守晴元に一千五百の人數をあひそへてつかはし給ふ、武藏守はせむかひさん〴〵にせむるといへごも三好多勢なるによつて手おひ死人おほく出來て引しぞく、かさねて勢をもよほして一命をすてゝたかゝひけれごも長慶修理太夫等猛威をふるふによつて武藏守さん〴〵にうちなされ主從二騎になつて京都をさしておち來る、義晴公やすからぬ事におぼしめして江州佐々木六角判官定賴に加勢をつかまつるべきよし再三おほせられけれごも、定賴御うけを申さず、その子細は當時公方の權威も末にならせ給ふ、又三好はすでに五畿內の權威をもつ

て已の時とかとやけり、かゝる猛將を敵にうけて何かせんとて御見かたをつかまつらねば、萬松院どの力なく江口の城をせめほぐし給ひ、いかがすべきと深案行略し給ふ處に、不慮に腫物いできさせたまふ、されば醫術さま〲つくさせ給へども定業このときをかぎりけるにやつゐにこれにて御他界ましまます、されば御長男光源院義輝公あひつがせ給ふ所に、三好左京大夫岩成主稅介松永彈正少弼久秀等京都にしのび入て義輝公を一時にほろぼし奉るこそむざんなれ、そのゝち松永京都の守護として在京の地子諸役をあらためけるに、名にしおふ都もあれはてゝたうきびをつかねて柱としたるわらや所々にありければ、たゞ在鄕のごとし、かくあるによつて、久秀さあらば都近邊を手につけんとてさと〲むら〲を仕置せしにたやすく屬せず、先田中には渡邊善定、しゆかく寺には十乘坊の律師、山中には磯谷民部少輔等近鄕の權をとつてあへて松永をものともせず、彈正その儀ならばかたはしにふみつぶせよとて一千五百の人數を卒して田中おもてへおしいるところに、渡部十乘磯谷等二千の人數を追まはしみたらし河にうつていで、なんぞ惡逆無道の三好にしよくせんや、松永が弓箭の手ぶりはしつつるぞあますなもらすなとてみたらし河を打越無二無三につきかゝるほどに、一陣二陣打やぶられしかば松永案に相違して京都をさしてひきしりぞく、鄕人どもはのきおくれたるものどもをこゝかしこに追つめ、百三十あまりと打とつて勝どきあげてかへりにけり、そのゝち松永たび〲よするといへども一度も勝利はなかりけり、かゝるほどに佐々木祥禎はみたらし河のむかふに一城をかまへて永原壹岐守重宗を城主としてあふみをぞ守護させにける、ある時松永二千の人數を率し壹岐守が城へおしよせけるかねて用心したりければ、こゝと〲くいであひ火花をちらしたゝかひけるが、又松永うちまけてしごろになりて敗軍し、うちゝらされたる兵ども南をさして落けるを、こゝに追詰かしこに追ふせ、うちとる所二百五十とぞきこへける、かちどきを三度あげてめん〲居館へぞかへりける、さるほどに久秀は夜

にいりて敵はさだめて晝のいくさに大利をえてくつろぎぬべし、いざや夜うちに入て手いたくあてゝみんとて、荒手をすぐつて五百人みたらし河をうちわたつてながはらが城へおしよせときをどつとぞ上にける、その折節壹岐のかみは粥をまいりてありしが、膳なかばにときの聲きこえければあやしやたれなるらんといへば、番のものども敵がつきて候と申、もとよりひるの軍にくたびれければ手まはりの者どもゝめん／＼が私宅にかへりて前後もしらずふしたり、城のうちには上下二十人ばかりならではなかりけり、されども壹岐のかみちつともさはがず鎧かぶとの緒をしめ手鑓をひつさげ出たまへば、小性に少太權太馬淵八郎兵衛由良源内茨木傳之丞をさきとして以上七人壹岐守が弓手妻手をぞつめにける、寄手大手の門をうちやぶり雲霞のごとくみだれ入るをやにはに十人ばかりつきふせたり、このいきほひに辟易してむら／＼はつとにげくづす、久秀馬上にていふやうはたゞものども射とれや矢種おしみそと下知しければ、雨のふるほどゐたりけり、壹岐守よろひにたつ所の矢は九すぢおりかけたり、きたなきやつばらかなものども城へ入べしとて主從さつとひきたりけり、かゝる所にたいまつにやおそれけん又ときの聲にやおどろきけん馬武者一騎城中へ一もんじにかけいりけり、馬淵これをみてはしりかゝつて馬のふとばらあなたへとをれとつくほどに屛風をかへすごとくに弓手へどうとたふれければ壹岐守この武者をおきもなをさずつきふせたり、そのゝちよせ手我先にとこみいりければ中間六人ありけるが晝のいくさに兵具あれて弓はあれども矢はなし、鑓長刀も手廻りになかりしかばこゝに雨坪の水たゝきに手ごろなる石一間四方にうめ置けるを究竟の事こそあれとて、六人してこゝをせんどゝうつほどに甲の見けんむな板むかふずねをきらはず透まもなく打ほどに、さしもの寄手も暫これにてさゝえたりかゝるうちに壹岐守は廣間へかへつて鎧ぬどすてゝ腹十文字に切てぞ失たまふ、七八人の兵どもゝ諸方に火をかけみな／＼自害してこそうせにけれ、松永は火の手をみてすは敵は自害した

りけるぞ思ふ圖にのせたる夜討かなとかちどき擧てぞかへりける、武略智謀のほまれあつて剛强の名を得たる壹岐守も運つきぬれば勝もかぶとの緒をしめざるとぞいひあへりける、

百〻之數奇の事附別寬が事

古き數奇者の無類なる物語のついでにいはく、あるとき太閤玄以法印をめしておほせいだされけるは、北野の右近の馬場に於て一日に百座の數奇を興行すべし、このむねを大名小名によらずしらせよとおほせいだされければ、德善院うけたまはつて諸大名へこのよし申わたし給へば、こはありがたき御興起かなとて、われも／＼と數奇屋をたてたまひ和漢の珍器をあつめ山海の珍ぜんをつくし御茶をあらためて御まうけをぞしたまひける、かゝりける所にこゝに堺の町人別寬といふ數奇者あり、この御會をきゝ及びつら／＼あんじけるは、あつぱれ前代未聞の美麗かな、さればそれがし身不肖にありといへども茶湯に入魂しさしやくをあぐる事世にしれり、末代の物語にこの御會をよそながら見物せずんば數奇道の名おりと思ひて、いそぎ京へのぼりて右近の馬場のみなみのはづれに竹柱にかやぶきの數奇屋をたてゝぞゐたりける、さるほどに秀吉公百座の御會もすぎぬれば還御ありけるに、みなみをはるかに御らんじて玄以をめしてむかふに見ゆるは何ものぞと御たづねある、德善院うけたまはりて申されけるは、さん候あれは堺の町人に別寬と申候ひてちやのゆを心かくるものにて御座候が、この御會をよそながらおがみたてまつらんとて昨日よりもまかりあるとぞ申さるゝ、太閤きこしめし一興あるやさしきものかなとわらはせ給ひて、このついでに風情をみんずとおほせられていらせたまふ、別寬まかりいでゝ謹てかしこまる、その出たちは下には紙龍ひとつうへにはしぶかたびらをうはおりてしゆきんを帶にしてぞゐたりける、秀吉公おかしくおぼしめし亭主おもしろし一ぷく所望せんとて座につかせ給ふ、べちくわんうけたまはつてかねて支度せしは土間に蘆屋のかまをじざいにかけて湯をたぎらか

しをきければ、あら茶碗にて雲脚をぞたてまつりける、太閤きこしめしてさても亭主は日本一の作意かな、百座の珍味飽腹をかねてぞんし香煎をいだす事今會の最上なりと御感あつてたゝせ給ふ、それよりべちくわん數奇屋のくわんじやうをうつたりとよろこびける事かぎりなし、そのゝちふしみの御城へめしよせられ御茶をくだされ珍器なご拜領つかまつりにける、都鄙にその名をよばれてうらやまざるはなかりけり

覃按書畫一覽ノ貫姓稱未詳住山科醫師古道三ト友タリト云

於聚樂伊豫德猪入江大藏相撲の事

こゝに伊豫の德猪之丞と申て天下無双の大ちからあり、十四五の比ほひより四國の中に肩をならぶる者なかりしかば、秀吉公きこしめしをよばれて二千石にてめしをかれける、又毛利のちうなごん輝元の家中に入江大藏之丞とて凡日本一の大ぢからあり、あるとき太閤聚樂へ御成なされければ、諸大名伺公したまふ、そのとき秀吉公おほせ出されけるは、いかに毛利中納言の家中に入江大藏之丞とて大ちからのあるよしをきゝをよび申されば、予がかゝへをく伊豫の德猪之丞とすまひをとらせて見物せばやとおほせいだされければ、輝元それこそやすき御望に候とておほせつけられければ、則兩人すまひの出立にて行事つれて御しらすにまかり出る、兩人一禮してちから足をふんだる氣色はつくりつけたる二王にちつともちがはざりけり、德猪之丞そのせいは六尺七寸かたのはどのひろき事きるもの背中三幅なり、尋常のものゝ夜着におなじ、又大藏之丞はせいは六尺八寸筒づくりきるもの右におなじ、諸大名これをみたまひてさても〳〵かゝるいかめしき人間も世にあるものかな、つたへきく河津また野といふともかほごにはあらじ、あつぱれ今日は比類なき見物をするものかなと躬づくろひしてぞ見え給ふ、しばらくありて大はどの緞子一卷づゝいだされたり、兩人はこれをとつてひつしごきこしに

しむ、そのうち秀吉公なにゝても力をみせよとおほせいだされければ、大竹のまはり一尺五六寸ばかりに見えけるをながさ二間半にきつて一本づゝ兩人が前にをく、大藏はこれをとつて本口のふしちかなるところよりひし／＼と押ひしぎ下帶の上にくみかけたるはたゞ筒桶にことならず、德猪之丞もおつとつてひし／＼とひしぎてこれも腰にぞおしまきける、秀吉公御覽じて力業はなにか／＼とおほせらるれば德猪之丞つゝと立て三間ばかりさつてはしりかゝつて弓手のかひなを大地へぐつとつきこふたりければ、かひなのひぢしりまでぞ入にける、大藏これをみて四間ばかりすさつて弓手のかひなをにぎりつめてゐひやつとおしこみければ肩さきまでつきこふだりしばしあひしらふてぬきければ御前一同にどつとほめさせ給ふ、秀吉公御らんじて力のほどは見えてありすまふあはするにをよばず、みな／＼入よと御諚ありければかしこまつてぞいりにける、相撲の勝負を御らんぜぬ御作意のほどかんじたまはぬはなかりけり

松山高野山へ發向之事

或沙門のいはく、むかし守屋の大臣は、佛法をわが敵なりと心得て根をほつてほろぼさんとせしが却てその身ほろびぬ、信長公も守屋が變化にや、我朝のぶつぽうさん延曆寺すでに八百年このかたはんじやうせしを一時に燒亡し滅靡し給ひ、さて又高野山をほろぼさんとしたまふに、高野法師たやすくまけられぬ事を立腹し給ひ、多勢をもつて一時にほろぼせんとて松山城州に五千人の軍兵をぞつかはし給ふ、即時にはせむかひ高野山より七里ばかりこなたなる谷內といふところに陣をとつて先陣後陣をぞ相定ける、さるほどに山法師會合してせんぎしけるはかなしきかなや、このときにあつて當山滅却うたがひなし、そのしさいは敵は日々にせいをかさむ味方は日をおふて滅盡す、これを思ふに佛法はめつの時きたつて大師も山をさり四所の明神も應護むなしくなきがごとし、松山數千の軍勢をもつて明日よ

するなれば今度滅亡うたがひなし、蟯螂が斧なりともわか法師はむかふべし、老僧は四所の明神大師に祈誓をぬきんづべしとて谷々に退散して甲冑をよろひむかふ法師三百人には過ざりけり、たうけの川おりふし水かさまさりてたやすくわたりえぬおりなれば河のこなたにたてをつきならべ矢ぶすまつくりてまちかけたり、松山が先陣かはのむかふにはたさしものかぶとほしをかゞやかして雲霞のごとくに陣取たり、かくて時刻もうつればたがひに矢いくさをぞはじめにける、松山がせいはいかにもして河をおしわたらんはかりごとをめぐらしけるが、たゞ騎馬を乘いれて水をせかせてかち武者をば下をわたせと下知しければ、そなへをくづして色めきたつて見えければ法師どもこれを見て矢だねをゝしまず射ておとせと、さしとり引つめすこしもすかさず射たりける、かゝる所に俄に河霧おりたつてものゝいろあひもさだかに見えざるに、松山が先陣むかふをきつとみわたせば山も野もはたさしものにて軍勢は十萬もあるらんと見るほどに、こはいかなる事にやと氣をうしなふところに、四所の明神の使者に白犬黒犬は霧間がくれにかけいでゝ軍勢の中へ一文字にむかふ程に、てきのまなこには何とか見えけんわれさきにとくづるゝ程に後陣のせいもこらゆべきやうあらすして一ごうに敗軍したりけり、松山もやう／＼谷内さしてぞおちたりける、このとき松山が人數三百あまりうちとられけり、後にこれをきけば八面八臂の赤體千の矢をもつて獅子に乘じてむかふほどにきもたましゐもなくにぐるに手足もなえはてゝ東西もわきまへざるときこえけり、奇妙ふしぎと申もをろかなり。

木食上人大坂へ登城之事

そのゝち秀吉公の御治世となりて、高野の長吏ならびに老僧御禮にあがるべきよし御諚使をと請たりける、八谷會合してせんぎしけるは、この秀吉公の主君はこの山を大敵にしたまへば今たばかりよせて死刑流罪におこなはれんためにこそ候はめと、おの／＼ぞんするによつてあれにゆづりこれににじり

て日々に評議しけれども、ゆかんといふ僧一人もなし、かくて遲參にをよびなばいよ〳〵御ふしんかうふるためしいかゞせんとあるところに、ある僧申されけるは、所詮あんずるにちかき比この山へのぼりし木食をたのむべし、かれはよろづさいかくにしてあんぶかきものなれば公儀のとりつくのひにしおちあるまじきとぞんずるよしを申されければ、僧等まことにこれこそ至當のれうけんなれ、さあらば木食をめせとてよびよせける、そも〳〵この木食は生國江州北部の住人なりしが一所懸命の地にはなれしかば世をうらみてしよせん高野山にのぼり木食をたてゝ往生の素懐をとぐべきと思ひさだめて、たうけの河にてこりをとつて御山のかたをふしおがみ、我ふるさとをさつて大師をたのみ高野山にのぼるよりしめてはふたゝびこの河をわたるべからずと大願をたてゝ高野にのぼりけり、かくてしばのいほりをむすび木のみをしよくして經をよみ念佛し、つれ〳〵なるおりふしは歌をよみ獨吟に連歌などをして光陰をゝくるほどに寺院の僧等ちかづきて寺へよびて茶をひかせ掃除などをさせてあなたこなたへもくじき〳〵とぞめしつかひける、されば衆徒會合のざしきへまかりいでゝ沓ぬぎのあたりにかしこまりなにの御用候やらんとぞ申されければ、長吏申されけるはたゞいまなんぢをよびよする事別の子細にあらず、御邊もさだめてきゝ及び申べし、殿下さまより高野の老僧にいそぎ御れいにまいるべきよしの御諚使をくださるゝ、しかれども山僧の事なれば公儀の調法なし、なんぢは年比といひそのうへ才覺ある人なれば山の代僧にまいりてたび候べし、さもあらば向後其方の望みなにゝてもあらばかなふべしとぞ申されける、もくじきうけ給ておの〳〵かやうに御たのみ候うへはいなひがたく候へども、それがしこの山へのぼらんとぞんずる時たうけの河にて大師へふたゝびこの川を今生にてわたるまじきと申ちかひを立てゝ候へば當山をおり申事はなるまじく候と申、諸僧きゝ給ひてその義は心やすく思ひ候へ、一山が大師へわび申べきのあひだ罪はいさゝかも御へんにはかくまじきぞと申さ

れければ、木食このうへはちからなしとて支度して大坂へこそまいられけれ、諸僧よろこぶ事かぎりなし、さるほどにもくじきまいりたるよし申あぐれば秀吉公まぢかくめして御邊は高野山の長吏なるかとおほせくだされければ、さん候木食上人とは愚僧がことにて候と申上る、秀吉公きこしめしてまことに木食をたつる事殊勝にこそ覺ゆれと御氣色よくして逗留させ給ひて高野山のやうすを段々に御尋ある、もとより文才深厚のもくじきなればなにかひがごとあるべき殿下大きに感悦まし〳〵てその儀ならば向後高野山の支配を木食上人にまかせをくなり、もし異議にをよぶ僧これあるにおいては上人こゝろ次第にいかやうにもはからひて無事におさむべし、大師の仕置のごとく佛法勤行をむかしに歸し經學を業とすべし、甲冑武具等出家のうへにいるべからず、はやく點檢してかりおろすべしとぞおほせわたされける、御上意をうけたまはつて木食はまかり立ければさま〴〵のろくごもくだされけり、かくて上人は大坂よりこしにのり足輕五十人たまはりてければこの人々にしゆごせられて高野のふもと木の目たうげに一宿してこゝより山へつかひをたて給ふ、一山の老僧を初としてのこらず上人のむかひにまいるべきよし申つかはしければ、滿座の僧等大におどろきこはなにごとしつる事ぞや、かゝる慮外千萬のつかひを木食は越ものかなと評議しけるが、又一方にはいや〳〵さにあらず殿下樣よりいかやうの事をおほせらるゝもはかりがたし、先いはんまゝにゆくべしとて、老若の僧衆は木の目たうげへぞつどひける、もくじきは座上にすはつて、いかに高野の法師ばら向後一山をもくじき仕置いたすべし、子細は山にてきかすべし、僧等木食がこしをかきて山へあげよと申さるゝほどに、六七十人の侍前後にあつてきびしくことを制すれば異議にをよばずおの〳〵こしをかきて山へこそあがりけれ、一山の長吏となつて制法をこの木食よりをかれける、さてこそ山もおさまりつゝがなきこそめでたけれ

○雲茶會初集〔文化辛未四月二日發會〕

會主　平々仙人

雲茶集序

雲茶店は大成殿のうしろ韓田の神社の前にありて茶は雲脚と卑下すれども花香は御茶の水にもまされりこゝに月ごとの二日を約し玉くしげ二百年（フタモヽトセ）このかたの書畫器物をあつめて中古をしのぶ媒とすそのつどへる人々の鳥の跡はちかき宮居の納鳥よりも多く椎の木のむなぎの千筋にわかれて湯島にかけし松竹梅二重の塔と高きをあらそふ猶谿谷の晴雨をいとはず苗木山のしげりゆく後の榮えをまつものならし

文化ときこゆる暦も八まき重なれるとし卯月のはじめ遠櫻山人鶯谷のやどりにしるす

雲茶會客品

一慶長の比縫箔小袖のきれ

一丹繪二枚〔竹ぬき五郎　鳥居淸倍畫　草すり引〕

一古板市川才牛不破伴左衞門のせりふ

一元祿の比ほめ詞

一元祿板雨夜三盃機嫌二册

海棠園所藏〔佐々木萬彥〕

一寬永中古烟管一

一元祿中典鋪（シチヤ）招牌（カンバン）一

一靑樓盞臺一

一宮川長春自畫自像一軸

一戶田茂睡翁宮途にある日鑰印受取渡し書付

老樗菴主所藏

一万治高尾自筆色紙

揚屋さし紙二張〔高尾うす雲〕　合装一幅

一延寶年間よし原の圖〔菱川師宣筆〕

一雛屋立圖作美少年人形

山東菴所藏

一慶長十八年より正徳二年迄淨瑠理太夫説經等口宣之寫　二冊

正徳三年四條河原　名代改帳

一野郎立聞〔難波貞享三年〕　三冊

一しぐれのせりふ　三の巻〔一二巻闕年號不知〕一冊

一八重垣雲のたえま　四の巻

一中村巻慶子菊畫一幅

一日清流水唐舘餅屋のみせの帳

杏花園所藏

一慶長庚戌近衛殿下一筆天神　一幅

一大坂落城圖并古瓦二箱

一青山石　越後妙高山産

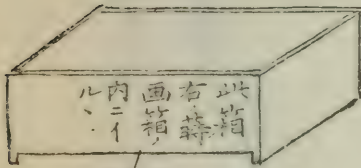
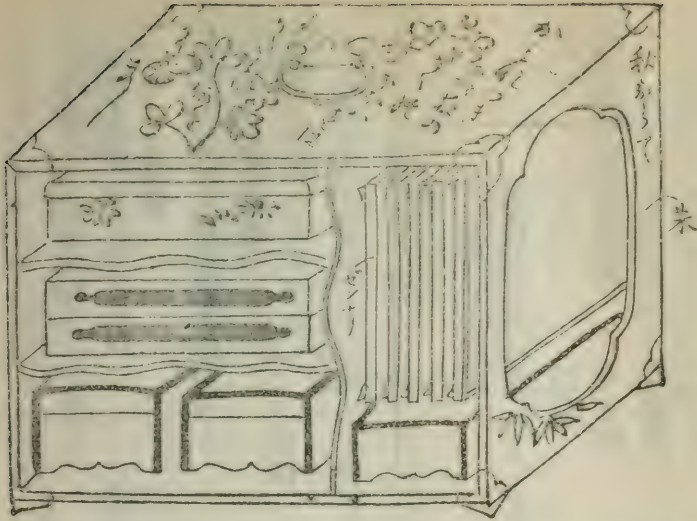
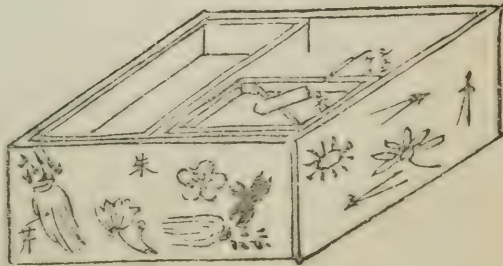
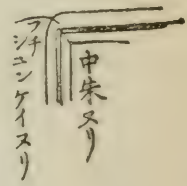
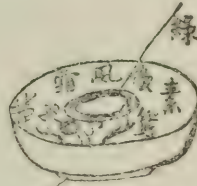
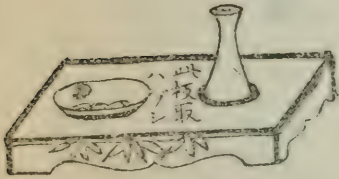
青山堂所藏

一元祿寶永の日記
一普戸隱御開帳の童謠引書四天王大江山入
　享保中五百羅漢建立俚歌
　明和元申年初而秩父開帳諸所より奉納附
一貞享中伊豆山中鹿笛
一花むらさき贊
一志道軒芳月堂　はしら繪板元
　奧村文角政信筆
　　　　紀　東　所　藏
主品
一古こよみ板木菓子盆十人前
一慶長四年産元祿三九十二歳の書澁江英三年賀
一傾城かけ物
一明暦三丁酉板花傳書五冊
一人形つかひおやま掛物
　　　　雲茶店主量山所藏
當日品題の中抄書目錄　　杏花園主人
一山村長太夫座芝居棧敷入用書付
一大名温飩盒器一式同箱書付、幷、初代路考の盃
一伊万里柿右衞門燒物人形の事
一寳永四年來り犬の義に付書付

一寶永六年丑二月十五日御書付寫
一享保七年寅質屋仲間連判帳
一元祿五年質屋簡板渡候書付並簡枚
一大和繪師東川堂里風
一宮川長春
一雨夜三盃機嫌
一市川柏筵なる神狂言の時のうた
一大石内藏介手鎗
一雛屋立圃所作美少年像ふくさ模樣
一芝居棧敷入用書付　反古庵藏

以上

霜月三日
　星野文十郎樣
山村南三がい壹
一壹分　棧敷
一六分　しき物
一百文　茶辨當
一八匁　二出もの
一拾匁　りやう利

朱
此箱有蒔画箱ノ内ニイル、
箱ノ底漏空ア
緑
青
中朱ヌリ
フチシユンケイヌリ
此板取ハヅシ
黒
黒
朱

一大名温飩器〔青山堂所藏〕
箱ノ蓋ニ書付候寫
一寶永元年小石川傳通院前升屋與左衛門店米津屋長左衛門道具大名うんどん器物一式
享保元年蕎麥一式
一伊万里柿右衛門作美人像〔振袖打かけ松に藤下着菊〕
別ニ圖アリ　　右青山堂所藏
一來リ犬之儀ニ付訴訟申上候口上書之寫
一傳通院門前町之者共申上候此比町内ニ來リ御犬殊之外多御座候て不斷かみあひ晝夜共に所之者又は往來之者にほゑ掛り候に付近所之者出合追かけ申候得共夜更候ては道通り又は所之者諸人難儀仕候自然怪我も御座候ては如何と奉存候に付御訴訟申上候御慈悲に御移し被遊下候樣被爲仰付被下候はゝ難有可奉存候以上
寶永四年亥五月
傳通院門前町
月行持　市郎右衛門
同　五郎右衛門
同　伊兵衛
同　三五郎
同　武兵衛
同　與惣右衛門
同　市郎左衛門
御奉行所樣

一寶永六年丑二月十五大納言樣定意之趣寫
一北丸御普請停止之事
一飯田町其通りに可爲居成事
一美濃守父子西丸窺御機嫌に罷出御側衆へ對面可致退出事
一對馬守越中守西丸へ不罷出御本丸計相勤可申事
一佐渡守御用節御前にて老中上座可爲事
一近江守義月番計相勤上へ申上候義何にても可致無用候下々より訴可承事
一美濃守以來平川口より乘物可致無用事
一上臺所町上り候節御免可爲居城事
一惣而町中前々より致賣買候物何にても前々之通無遠慮可致賣買事
一生類前方思召被仰出候上は以來下々難儀に不及樣に諸事可申付事
一町內困窮に及不申樣に諸事可致事
一中野犬小屋以來無用町中より出候犬扶持御免之事
一近年檜山御留候得共以來御免之事
一大錢通用彌堅無用之事
一惣而奧通り御普請前之通御用之事
一御出棺以後御小性御小納戶桐之間計御番相勤其外爲引可申事
一大名奧詰停止之事
一間部越前守殿へ何にても何方よりも音信可致無用事

一成満院護持院西丸登城無用之事
右之通十九ヶ所御張紙に出申候
丑二月十五日
右西川氏所藏古帳の中より抄出す

一享保七年質屋仲間連判帳寫　老樗菴藏

覺

一質物取候節置主請人住所見屆兩判取質物取可申候自今以後相違仕間敷候事

一毎月寄合仲間相互に判形吟味仕紛失物品廻相廻り候節仲間中別而入念吟味可仕候少も油斷有間敷候事

一從前々新規に仲間入致候節者爲仲間弘め振廻等並に料紙代金子三百疋差出し候處に中興は猥に罷成定置候品相敗不屆に付此度仲間中相談之上にて相極前々致來候弘め振廻向後相止自今爲料紙代金子三百疋可被差出候仲間中相談にて急度相究め候上は少も揃背有間敷候依之仲間金爲企壹人前より金百疋宛差出都合壹兩也勿論壹分に付壹ヶ月に利足八文宛相加元利共に仲間帳面に相添次々之月行事へ無相違急度相渡可申候事

右之通仲間申合せ之上向後少も違背無之急度可被相心得候爲後日連判證文仍而如件

享保七壬寅年　井筒屋庄右衛門
七月　伊勢屋三右衛門
行事　伊勢屋勘七
伊勢屋善三郎

上書ニ

京保七壬寅年

質屋仲間連判帳

七月吉日

老樗菴藏すきかへし半切紙也

覺

本郷六町目

伊勢屋三右衛門

右之仁新規に質屋致候に付御定書并に簡板相渡候其元組合へ被入向後可被申合候以上

元祿五年　　質屋

未九月六日　　役所　㊞

本郷六町目

質屋

月行持衆

質屋の軒に
懸候簡板

此札両面共別
ニ墨スリアリ

一美人圖　大和繪師東川堂里風圖之　青山堂所藏

一寛保二正月元旦宮川長春六拾一歳自像自畫　老樗菴藏

一雨夜三盃機嫌二卷　花禪子藏

序文の中に

寶や水道一盃難波一盃白河一盃此三水を呑ぬ人のならぬ事とも冷しや其品々を定めたればこれなん雨夜の三盃機嫌と名付侍らんか

于時元祿五若水日浸筆於加茂川流

水笛庵痩牛□

此書文政二年己卯春收得藏于南畝文庫中（己卯孟夏三日甲子雨中書七十一翁）

一市川柏筵なる神の狂言せし時大名題に書そへしうた

あま雲の空にたつ名やかみつけに有といふなる鳴神か嶽

右花禪子所談

一大石氏鎗（兩國橋今川燒もち屋主人所持談洲樓焉馬携來）

故淺野侯の義臣復讐の遺器を拜して

器のみ殘りてぬしはなき魂になみたの外は何を手向けん

日州佐土原城主島津氏家臣

能勢澤右衛門源陳秀上

一雛屋立圃所造偶人　山東子識

紫　青　綠　朱　紫　黃　綠　金　青　青　紫　青

右人形をつゝみし古包袱

一昔戸隱御開帳之童謠並享保中五百羅漢建立之節流行俚歌

紀　束

こんご深川戸がくし開帳みこの評判つよければそんなじやない〳〵そんなではないわいなア

右文化八未年に七十二歳翁十五六歳の時戸がくし開帳有之せつはやりしうた也

引書繪本四天王大江山入東藏

五百らかんのしつぺいちやうじゆ〳〵こん度おしやかのごうくやうひの木のおがさに江戸まち〳〵を朝はなんほう日はなんぼうかんすいんでんちやの木こならばいんすやこんすやちよつきりなむおみこうふ〳〵なむちよつきり大ほさつぼんさんしんぜませう

是は東姉八丁堀五郡目廻船問屋川島家へ嫁し當年六十五歳十六歳の節緣付若年の節しうこめに三味線共に習覺申候

わたなべがやかた
いばらぎごうじ
はふをけやぶり
雲中へ
にげる

繪本四天王大江山入東藏本

おばの手じや
ないわいな
そんなじや
ない〳〵

書入如此

紀束

○雲茶會二集〔文化辛未仲夏初二〕

青山堂

一相州鎌倉七里濱圖〔江漢司馬峻愛宕山額〕大一幅
一太閤豐臣公千なり瓢簞二鈴
一御上覽角力之式番附〔隱雲解一冊一葉(箱入)〕
一万治高尾所持龍菱の櫛一枚(箱入)
一宮本武藏永禎書一卷〔元和二丙辰歳春三月十六日書〕

尙志堂

一〔寬永正德〕の比稗史
一樽やおせん戯場之冊子
一名人佐野川市松肖像〔柱かくし〕二枚
一元文三午年赤坂玉川の引札

紀束

一享保六年貸金券〔元乾金貳拾貳兩新金〆拾壹兩〕
一吉原亦郡大文字尾古烟草盈〔但燒印〕
一明和年和歌四天王石野廣道詠歌之短冊
附寶曆八寅年春興双六江戶宗匠之發句

杏園

一童蒙先習〔慶長板小瀨甫菴〕二冊

一五節供盃（描金九月雛アリ）五盃箱入）

一寛政七年三芝居假名手本忠臣藏狂言時澤村宗十郎所持鹽屋判官腹切　並敵地案內圖

附橘千蔭翁長歌　寛政六年十一月顏ミセ入代り番付同七年都座番付

雲茶店

一三浦屋孫三郎杯臺（大文字屋市兵衛監定文樓之燒印）

一吉原商人若衆姿の繪

但此若衆繪うり　荷物は吉原の體を搆繪うり

後骨董集ニ入

一吉田蘭香謾筆鷹之繪（古障子に得たり）

附

下總八幡不知之標題黑表紙（稗史作者四方赤人畫工鳥居清經）

此本古板の草双子に表題を新にかへたるもの也

中ニ　| 作者吳增左 |　とあり

一青山堂所藏古印

華人所贈角印

中華傑段館印材木

一太閤千なり瓢箪二ツ

金箔色甚ヨシ中ニ石アリ鈴ノ如シ

一宮本武蔵書巻

門外講
經説法

兵法地理之大事
方圓分度之規矩
圓者周旋而有大定
方者大定而合周旋
大圓分度
前後南針

上下懸線
遠近準繩
險易水平
小圓分度
地平南北正
十二支宮線

宮本武藏

元和二丙辰年
春三月十六日

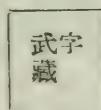
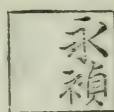
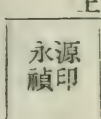
上
源印
永禎

字
武藏

松平伊織殿

一萬治高尾櫛　青山堂所藏

長六寸
幅中央一寸六分
兩端一寸二分

龍菱の蒔繪也

一相撲田樂曳尾菴所藏
備前國和氣郡吉永村民家ニ文字刻タル味噌桶蓋あり同村武元周平ト云者讀見ルニ正和中ノ物ナリ即

詩繪香合

京山人撰
坐間走筆
不工

タスキアリ
鉢卷シタル
ハ若衆ナリ

繪蒔香合考

按に是寛永時代の蒔繪也洛北修學寺村或は松ケ崎等の連目躍の圖なるべし肩にかけたるたすきの如きは丹前帶といふもの也松の葉一の巻三絃鳥組の歌に京ては一條といへるは是也これは始て本手組をつくりたる時の歌なれば寛永の時代にあたれり

山東菴

一新撰ひいながたの序　瓢水子　京傳云瓢水子ハ淺井了意ノ號也

昔は異國の始人みな鳥獸の肉を茹毛(クラヒ)を着たり黄帝初て蠶を養て衣を作出したまふ後の人色々衣紋を工めり本朝には天せう太神の御女稚日女尊保食命の蠶となりしを飼て齊服殿(インハタドン)にこもりし神の御衣を織初たまふ應神天皇の御宇に呉國より呉服穴織兄弟に縫工女をそへて渡されしより本朝普く機織事を知れり其後其錦は高麗國より來る故に狛錦と歌にも讀り綾絹皆異國より御調に渡せり繡は古備大臣人唐して習傳らる是よりさま〴〵の衣紋を工て織縫染て着といふ此ひいながた二百種はわかき老たるそのほど〴〵好所此外に漏べからず今改めて往當(ソノカミ)の模樣をばかへずといふ

山田市郎兵衞開板

于時寛文六年七月吉日

繪樣以上二百

寛文六丙午年八月吉日

寺町通二條上ル町　山田市郎兵衞板

增訂一話一言巻三十四終

○南市令罪案抄　自寛政八年辰 至享和文化年

寛政八辰年

中之郷瓦町
家持久藏親
小左衞門
辰五十五歳

右之者儀先達而到何方ゟ燈籠佛と唱候三尊之彌陀分身讓受所持いたし候旨申立候得共同人身元も不相糺殊に貸金引當に候はゝ佛像先方へ差置返金滯候節別に讓證文を以請取內拂に可致處無其儀素人にて質物同樣之取引致し讓請候と之申分は難立其上俗家にて神佛諸人へ爲拜人集いたし候儀者不相成儀に不心附日々參詣人引請初穗禮物等受納いたし候儀には無之候得共燈籠佛之敎と名目を附食物藥種灸治等を申敎又は心得方枚行いたし相渡候段奇怪異說人集に相當り不屆に付所持之燈籠佛取上江戸拂

同年

酒井雅樂頭足輕
源內事
眞田文次
辰三十五歳

執心に存候女之儀より及不法候吟味

右之者義伯父次兵衛養娘みね事袖岡義新吉原町に遊女奉公いたし居候に付妻に相成候樣度々文通致し又は罷越候處一向取敢不申候に付酒狂之紛刀を拔立喚被捕押其後孫兵衛方へ罷越袖岡を妻に貰與候樣彼是難澁申懸其上仲人庄七取計不宜こ相疑同人を威し可申こ存當四月廿二日夜主人より預り置候鐵砲を密に隱し持出し同夜四半時頃庄七居宅へ鐵砲打込迯去り候段市中之無厭其上御曲輪近邊をも不憚剩　御城之方へ筒先を向ケ打候段旁不憚　公儀を仕形重々不屆に付存命に候得は獄門

尾張殿家來

伊東金藏悴

伊東三之助

辰二十四歲

同年

右之者儀吉田梅庵家來榎本友次幷中間友平兩人往還にて上け候凧落懸り尾は此者居宅家根より庭へ下り候に付家根損し候より事起り弟五之助憤り表へ出凧を踏破り候はゝ相制可申處無其儀此ものも俱々破り一旦宅へ立歸候處右友次友平儀破り候凧を表より塀越に投込候上聲高に惡口および候に付右之者共を取鎭不聞入候はゝ梅庵方へ相屆候樣父金藏申付候はゞ取計方も可有之處友次取懸候樣子に候迚刀を拔友平は棒を以可打懸體に付五之助も罷出是又刀を拔兩人にて友平へ切付候處門內に迯込候を猶も理不盡に門內迄附入梅庵方勝手より住居へ亂入致し奧庭にて友平へ數ケ所爲手負既同人疵所之內左之手中指無名指は切落食指は屈伸不叶片輪にいたし右體狼籍之始末旁尾張殿家來悴之身分にては別而不屆に付遠島

尾張殿家來

伊　東　金　藏

辰六十三歳

右之者義吉田梅庵家來榎本友次中間友平兩人往還にて上ケ候凧落懸り尾は此者居宅家根より庭へ下り候に付家根損し候より事起り次男五之助憤表へ出凧を蹈破り候處惣領三之助も倶々破り一旦立歸り候處右友次友平義破り候凧を表より塀越に投込候上聲高に惡口および候に付三之助へ申付取鎮に遣候處手間取候間居宅窓より見候處相手友平は棒を持三之助へ可打掛體に付五之助へ申聞候處是又刀を拔打合友平へ手疵爲負猶又梅庵内へ追入候間驚悴共を可制と罷出候處梅庵方住居へ亂入致し候樣子に付此者も門内迄入悴共を呼出引連歸候義にて此者申付右體狼籍爲致候には無之候へ共相手之者共惡口におよび難捨置候はゞ梅庵へ懸合取計方も可有之處殊疵人友平息有之儀承り貰受悴共に爲討果慮外もの討捨之屆差出候はゞ可相濟と押量梅庵身分御醫師と申儀乍辨居友平を貰受度旨使を以申込候始末尾張殿家來之身分にては別而不埒に付百日押込

文化三寅年

淺草三好町

善兵衛店

辰　五　郎

寅二十八歳

右之者儀當十月廿二日夜五半時頃渡世先より罷歸候節居宅前にて其砌は名前不存西丸小十人都筑金吾儀此もの妻かねを往還へ押伏罷在かね儀助け吳候樣申泣居候間譯は不相分候得共理不盡之儀と存じ右金吾を突退ケかねを逃し遣候處金吾儀刀を拔切掛り候迚直に右刀をもぎ取候上は取計方も可有

之處無其儀其刀にて金吾を及殺害候始末不屆至極に付死罪

文化六巳年

大岡久之丞御代官所
攝州西成郡曾根崎村
播磨屋次兵衞借家
住吉屋もと代判
南豊事
永　　助
巳四十九歳

右之もの儀兼て身分之世話致し遣候秀弘より講釋之手續にも致し候樣差越候書面は近來異國人渡來之異說を認有之講釋等には致がたく候得共珍說に付讀本に綴候はゞ品に寄俵屋五兵衞方にて貸本に可致旨申聞候迚利欲に泥み兼て承りおよび候風說又は住所不知ものより借受寫取候書面へ作意を加へ秀弘より差越候書面之趣をも實事と聞候樣增補致し剩致て恐多儀又は重き御役人之名前を顯し別而右之内には無跡形儀を以對　公儀恐入候儀共實事之樣書顯し合巻拾冊に綴立北海異談と表題を記五兵衞へ賣渡其上大坂町奉行吟味之節右體讀本に綴候儀は押隱し秀弘より差越候書本之儘五兵衞へ賣渡候旨申僞候始末不恐　公儀仕方不屆至極に付引廻し之獄門

當時無宿にて
軍書讀渡世致し候
秀　　弘

此者儀攝州曾根崎村南豊事永助は兼て世話に相成候迚近來蝦夷地へ異國人渡來之異說認候書面を講釋之手續にも可相成哉と駿府本通貳丁目忠五郎より借受寫取右書面へ作意を加古來之軍書等に附會いたし重御役人之儀迄無憚書顯永助へ差遣し候故既同人儀猶又增補致し風說又は外より借受候書面を取交無跡形虛僞を實事と聞候樣致し度迚恐多儀共品々書顯讀本に綴北海異談と表題を記大坂大豆葉町俵屋五兵衞へ賣渡候始末に相成候段不恐　公儀仕方不屆に付遠島

大坂大豆葉町
佐渡屋重助借家
俵屋
五　兵　衞
巳四十二歲

右之もの儀猥成異說に取交候書物は寫本にても取扱間敷旨兼て御觸も有之處攝州曾根崎村南豊事永助知人より貰ひ候近來異國人渡來之異說認候書面を讀本に綴貸本に致し候はゞ利德も可有之旨申聞候故永助儀無跡形恐多き虛僞を書綴北海異談と表題を記合卷拾冊に仕立候得共他見を可憚事共有之貸本には如何と乍心付買受七郎右衞門町剛藏へ賣遣既同人其外之もの共貸本にいたし候始末に成殊絕版之繪本太閤記信長記をも貸本に致し候段旁不屆に付輕追放

大坂七郎右衞門町二丁目
尾崎屋長兵衞借家
奈良屋仙右衞門事
剛　　藏

大坂三鄕拂

申渡同樣之事故略す　巳五十二歲

寛政十二申年　外　貳人

下目黑町
忠助店
忠兵衛召仕
喜　八
申十九歲

右之者義幼年之娘かよを押而强淫いたし同人相果候には無之かよ儀乍幼年色情之心有之常々此ものへ戯れ候義者一件吟味之上無相違候得共かよは主人の娘殊に幼年ものに候處色情を以此ものを慕ひ候共交合いたしかよ相果候始末不屆に付死罪

文化五辰年

奥坊主
永井久淸祖父にて
出奔いたし候
來　旦
辰年五十六歲

右之者儀道具市相催し口錢を取可申ミ本所相生町四丁目五郎右衛門武州寺島村利兵衛坂本町壹丁目三右衛門申合五郎右衛門利兵衛は會主に成須崎村料理茶屋にて道具市相催代金は百日目勘定之積に

て當日取引不致尤直段下直にては口錢之高も少く候迚此者は道具目利功者之積に致し假令ば壹兩位之道具を壹兩貳分又は貳兩位こ發言いたし夫より段々爲糶上高直段之者へ賣渡其上三右衞門發意にて北鞘町德兵衞店三郎次郎を相招同意之者共申合此道具買受候はゞ格別之德用も可有之抔申成三郎次郎儀連衆に加り候樣致し成多分之道具同人へ爲買受剩右始末露顯可致存候迚出奔いたし候儀共旁不屆に付遠島

坂本町一丁目
長兵衞店
三　右　衞　門
辰三十九歲
外　壹　人

右之もの義來旦申に同意致し五郎右衞門並武州寺島村利兵衞は會主に成道具市相始來旦は目利功者之積にいたし成道具不相應之直段を以高直に賣買いたし五郎右衞門は口錢配分受其上三右衞門儀北鞘町三郎次郎を申欺連衆に引入可申旨發言致し同人を連參り多分之道具爲買受候始末不屆に付三右衞門は敲之上輕追放五郎右衞門は家財取上江戶十里四方追放

大貫次右衞門御代官所
武州葛飾郡西葛西領
寺島村百姓
茂兵衞借家
利　兵　衞

辰三十八歳

右之者儀來旦申に同意致し此者幷本所相生町五郎右衛門は會主に成坂本町三右衛門一同道具市相始來旦は日利巧者之積に致し成道具不相應之直段を以高直に賣買いたし口錢配分受其上三右衛門申に任せ北鞘町三郎次郎を連茶に引入多分之道具爲買受剩右道具代金滞四百三拾兩を此者より三郎次郎へ貸金之積にいたし同人悴三谷三九郎より金子爲差出三郎次郎へも配分可致旨申談此もの名宛之金子借用證文三郎次郎より受取三九郎方へ右證文を以及懸金候儀共旁不屆に付敲之上中追政

坂本町二丁目上納地
清兵衛店
源七親
夜　梧
辰五十八歳
外九人

右之者共儀來旦申に任せ武州寺島村利兵衛本所相生町五郎右衛門坂本町三右衛門一同打交り須崎村金太郎宅へ寄合道具市相催來旦儀下直之品をも高直に發言いたし銘々持寄候道具高直に賣れ候故面白存尤買受候品も右に准じ高直に候得共相互之儀に付損金は有之まじくと存賣買いたし百日目勘定合之節差引買方多き者は金子差出賣方多き者は番子受取右體不正之賣買いたし候段不埒に付夜梧外七人は過料拾貫文づゝ吉藏宗融は自訴いたし候儀に付同三貫文

北鞘町
德兵衛店

三郎次郎
辰三十三歳

右之もの義從弟三右衛門申に任せ來旦宅へ罷越同人并三右衛門五郎右衛門寺島村利兵衛一同道具賣買いたし候を見物いたし居來旦は目利功者之由にて夫々直段發言等いたし賣買致し候を面白存右道具買受賣捌候はゝ德用も可有之趣に候迚多分之道具買受代金差引勘定之節五百拾壹兩之内六拾五兩差出殘金拂方差支候迚利兵衛申に隨ひ三九郎より金子爲差出配分可致こ利兵衛名宛にて此もの借主之證文認利兵衛へ相渡候義共旁不屆に付江戸拂

享和元酉年

黄蘗宗最乘寺
元弟子
德芳
酉四十八歳

右之者義先年一滴菴に有之卽非和尚之木像道具屋內に有之趣及承歎ヶ敷存右木像を取戻度又は同宗貧地之寺々へ助力致し法類共之身分取立遣度こ一途に存込信心歸依之もの多く相成候はゞ右心願成就可致こ宗法に無之抜刀を持其外手品を附加持祈禱いたし候段利欲に拘り候儀には不相聞候得共右體之儀に付本山より申渡掟等も有之處相背右始末に及び候段不屆に付脫衣江戸拂

享和二戌年

神田紺屋町二丁目
金十郎店

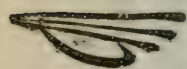
文藏

右之もの儀不如意にて取續難相成候迚不斗存付年號元明と改元有之旨僞自分にて板行に致し又は相認壹枚に付四文つゝに賣歩行候段不輕義不恐　公儀を仕方不屆に付中追放

○茅野和助書簡

頃日者預貴札辱致
拜見候先以貴樣御家內
彌々御堅固被成御座候由珍重
奉存候然者當城之儀
如來意候拙者共心底
御察之通乍此上與五郎殿
申談諸事首尾好引
渡し等相濟以後以參
可得御意候早々被懸御心
預貴札忝奉存候恐惶
謹言

茅野和助
常成

神崎半右衛門樣
貴報

茅野和助書狀美作國勝南郡勝間田驛本陣庄屋多吉方にて申請候神崎與五郎親半右衛門は右庄屋多吉親之伯母聟にて有之候に付多吉方へ別家作り差置候由に付和助方より之文通有之其外書通有之致一覽候事

明和七寅九月

右本書は中山半太夫と申者作州往還の節貰請候由に付倅直三郎より借得て寫申候

右池田正樹より借得て寫

○室新助書簡

八月十三日の貴翰九月四日に至て到來忝拜見仕候何方に淹滯仕候哉南部兄より之副書も同日にて御座候先以尊履御清勝旨欣躍不過之奉存候今以　公務殷繁不被得官暇候由御賢勞之段奉察候先頃進呈仕候軍器考序相達御懇懃之御謝詞恐入奉存候□共頗應賢意候旨被仰下多幸之至に奉存候同文通考序之義蒙仰委細御書體被仰下且又別幅に目錄題注被記之候被入御念候儀と奉存候黔驢技窮可申候へ共先如何樣共構思仕候て追て可受御指敎候

一當仲秋上丁釋菜　先聖廟へ　御拜謁之儀委細被仰下忝仕合奉存候凡吾黨之士に在て恐喜感動不可過之御儀に奉存候　先聖御尊崇之禮古今にこえ候儀天下の耳目を新に可仕候是より追日奉仰　聖朝之外無他候但近年藩國之衰弊以之外に御座候東西兩京共に華□〔麗カ〕日盛に候故列國も其風に罷成物價騰貴之上には先朝に至而進奉多端御營造之御手傳などゝ申儀相續候故士は常祿を減し民は常賦を倍し候て士民之窮彌益に御座候其餘弊于今未已歟是は强幹弱枝の策と申者有之候へ共　聖代四海一家の儀に御座候へは左樣にて有之間敷奉存候畢竟太平日久罷成候へは自然にかやうに有之物と相見え申候近來賄賂塞此一事にても諸國のくつろぎ申儀不大形候此上は奢靡を抑へられ恭儉を崇びられ土木之役日息衣食之

源日開候て一統安泰之　御代に罷成候樣にと杞人之憂を貽し申迄に御座候世俗齷齪の徒には是等の儀ともに語るにたらず候尊兄に非ば爭でか及此可申候哉御一覽の後被投火中可被下候

一南部兄ももはや其元發足にて可有之やと奉存候久々にて歸家候て大慶之段令察候去年以來尊兄無御暇御參會も稀疎成樣に承及候御意外之義に奉存候頃日承候へば尊兄近々御用に付御上京のさた有之由申候彌事實に候哉向寒天御苦勞成御儀に奉存候

一田鶴樓佳章御傳示辱奉存候何れも古雅に相見へ珍重に存候就中寶鏡暈生書來爲隣などおもしろく奉存候和韻之事被仰下候貴命難默止候に付不殘和候て進し申候乍恐被相違可被下候本詩韻字巧妙之處は中々和韻難計候得共腐材今更可仕樣も無之候此間高棣が和唐人早朝大明宮作の詩を見申候て不勝技癢いさゝか効顰候間別幅に書付候て進呈之仕候高評承度候へは御慰にもと存候て序ながら越申候

一望（脫字ガ）九左衛門田中左源次（大カ）へ之御狀共相違申候左源太へは相屆申候九左衛門は儉家用事に付只今在京仕候に付一類共迄遣申候早速便に京師へ遣可申候稻若水へ御傳言も京都へ可申遣候只今京へ罷歸申萬々期後間（明カ）之時候頓首再拜

九月十八日　　室新介

直清

新井勘解由樣

座前

〇雨森東五郎書簡

正月十七日之貴札乍御廻報致拜見委曲之御紙上誠如面晤圭復仕候先以貴樣彌御堅固被成御座候由珍重不過之候先年以來四五度も御狀被下候由邊方之義に御座候故何方に沉浮いたし候哉何も相達不申遺恨

千萬に御座候其内同室松浦氏へ御寄附被成候御狀は成程相逹申候其折節私朝鮮に罷在候て委細に御返事申述候尤物名御尋之義も其御狀に相見へ大概分明に相知申候者は書付御返事申入候ても是又其元へは相逹不申候由殘憾之義に奉存候右之書狀賴申候仁に相尋候所慥に木下公御家來に賴置候由申候へごも最早去々年之義に御座候へは相知申間敷こ奉存申先以貴樣御義段々御格式も結構に被　仰付殊預攀龍附鳳之榮被成候段偏稽古之力同門之榮不過之奉存候殊　世子君御學術御精研に被成御座候段不尋常候之由被仰聞誠に闔國之大慶こ乍恐奉存候我々義邊地に罷在段々白髮も生候へは精神も以前には違申候殊に去年以來は左脚腫痛仕行步も不任候處有馬へ投浴いたし候以後過半ゟ快罷成候へ共兎角は癈人にも罷成可申候哉就夫候ても一しほ舊日之御參會存出し暗淚滿面之外他事無御座候南山氏又は岡島氏不絕御參會も御座候由萬々御浦山敷奉存候

一先年松浦氏へ御附送被成候御書簡之內に被仰聞候物名御返答は申入候へ共相逹不申候由被仰聞候故相知候處左に錄し懸御目候

鯖(サバ)魚

青魚カズの子のをや魚にて對馬にてはセガイこ申候江戸にもたくさんに有之者に御座候ても名を失念いたし候

大口(タラ)魚　作吞魚非なり

此分朝鮮にて分明に相知れ申候物に御座候此外は朝鮮にても物名は方語多御座候て不分明候尤館所へ參り候者之內には思之外博物之人も無之候て物ごこの吟味難仕候朝鮮こても中華こは土地隔絕なる事に御座候故物名などの分明に無之候儀は日本に大違は無之相見へ申候其內典文物又は風俗禮義守國の法教人の術などは感入申候事多相見へ申候筆紙には難申述候あわれ近年之內得貴面委曲之御物語仕度奉存候儘の事御吟味被成被置候事も可有御座候へども我々兼て存じ候は山のかすみ候事を申候ものこ

存居申候て紅霞彩霞などゝ申候言葉不審に存候所朝鮮にて承候へばやけの事を霞と申候其後字書考見申候へは日傍形氣と有之候へば朝鮮にてやけと申候義分明と被存積年の疑を晴し申候宮刑之割勢と申義も朝鮮にも宦官有之候とくと様子を承候に睪丸を拔去候事に御座候海参之事を如男子勢などゝ申候へば勢と申は陰莖の事の様に相聞申候へども醫書に勢は外腎也と有之候へは是も朝鮮にて申候通にても可有之候哉其上宦官之義陰莖を切り申事にては無之由申候へば日本の覺違にても可有之候哉ヶ様之義に付朝鮮之義は中華へ毎度往來仕候故吟味精敷事多御座候三國の內にては日本ほど諸事不吟味成事は無之樣に相見へ申候あわれ〳〵近年之內得貴面諸事御物語仕度奉存候　一木下平三郎公にも惟今は結構に御務被成候へども御暇も無御座御學術研習の義も無御座候由先年の御狀にも被仰下候左様可有御座と奉存候何とぞ御門下にも名譽之人出來仕候樣に有之度義と奉存候貴樣には只今學問の義御免許を御蒙被成候由結構成御首尾御羨敷奉存候義に御座候當所之義毎々韓人に出合申候義に御座候へは暫時も學問廢情いたし候ては間に逢申事にて無御座候へば思召之外苦心いたし候事に御座候元來不才の拙者事に御座候に段々精神ものおぼゐも減損いたし候故難義仕候事に御座候其外にも不任心事のみ多御座候て本島の宦仕今更追悔いたし候事に御座候

一先年私心腹の話申進候義別の事にても無御座候此段は貴樣思召之程も如何に奉存候へども切迫之餘顯於言辭申候事に御座候拙者遲留斯島。已過十稔。人情風俗。無一適意。觸景感懷。如坐針氈。日夕愁嘆。不勝椎胸。第窮鳥困魚。已墮籠鉤之中。終無解脫之望。此生遺憾。何以加此。足下以龍潜之舊。膺寵任之榮。不知亦有意於拔諸泥淖。推之靑雲。肯爲司馬之楊得意耶。唐人之俗語。陰溝洞裡蝦蟆。思量要天鵝肉喫と申事御座候是は雲に梯などゝ申心と同然にて御座候私存寄の義も蝦蟆之思量に違申事無之如何程御心易奉存候ても被申入筈にても無御座候へども右申候通當地之住居萬々殘念之義に存候委細之義は筆紙に難申盡候殊爲邊地之鬼

候事一生之大憾と存候乍然今更脱身之計決て無之候富貴榮耀を望候念は天日在上毛頭も無之候へども何とぞ一生之内に邊地羈留之苦を免たく存候に付萬々の一も貴様之御力にて預御提拔候事も可有之哉と不得已心腹之趣委細之書付致呈覧候へども其書狀相達不申候由是又天數と奉存候其折節鹿品成絕句二首致進呈候左に錄之懸御目候

一從辭紫陌。鬢髮日蒼々。惆悵上林賦。難逢得意楊。

四海誰知已。乾坤一病身。休怪彈冠急。靑雲有故人。

御閑暇之節高和所希御座候 此度南山氏へも以書中申入候 乍慮外御傳達奉願候 猶期後音之時候 恐惶謹言

三月朔日　雨森東五郎

名乘

新井勘解由樣

○近藤正齋瓊浦雯襍抄

寛永十九年平戸帳人數改帳

一年拾チ　いよ屋千松

母生所長崎のもの前廉よりきりしたんにて御座候得共竹中釆女正樣御代に當町にてころび法華宗に罷成本蓮寺を賴申候貳拾五年以前になんばん人に寄合子壹人もち申候に付寛永拾三年(午カ)さしに天川に被遣候

一年拾四　池本小四郎

父生國高麗之者幼少より長崎當町に參則きりしたんに罷成其年天川へ參慶長貳年に長崎當町に歸宅
仕候竹中釆女正樣御代同町にてころひ同宗同寺を賴申候爰元にてなんばん人の子やしなひ申候に付
寛永十三年のこし天川へ被遣候

元祿八年亥五月三日

一拾六番船唐人共へ被仰渡御書出之寫
耶蘇宗門之儀累年嚴重に　御制札之旨諸唐船相諭處邪說書交候書籍持渡不屆之至に候併書中不明改
不慮に持渡候處吟味之上就爲分明其科を宥一船商賣不免之後書燒捨出帆申付候雖然天學實議等其外
御制禁の名目悉書面に有之處重疊不念之至に候條持主費計庵は勿論船頭何元亮此兩人向後日本へ渡
海令停止畢

五月

今村源右衛門日記抄

寛永年中羅馬人薩州屋久島へ參り其後江戸へ相送られ候節右一件長崎にて取扱有之由にて譯司共へ
承る所當時紅毛小通司並今村才右衛門父今村源右衛門附添來りし由依てその家へ問し所當時の道中
日記一冊あり日並の記にて不用立事のみなれ共見合の爲左に抄し置也

一寶永六己丑九月廿五日長崎出立同年十一月朔日江戸著翌七年庚寅二月九日長崎歸着

一寶永五年子永井讃岐守別所播磨守在勤之節薩州屋久島へ漂來致候異人御當地へ被差越同十一月八日到着翌丑九
月廿五日佐久間安藝守駒木根肥後守在勤之節右異人江戸へ被爲召候事

一十一月朔日卯下刻品川發足已中刻江戸着直に小日向切支丹山屋敷に異人召連身の廻り相改並邪宗門

道具目錄を以引渡申候
一呂宋へ里數御尋に付私共仲ヶ間帳面之内より相調候處千三百里と有之候段備中守殿へ申上る
一十一月廿二日山屋敷へ源右衛門兵次郎喜七郎罷出候處備中守樣八郎右衛門樣御出今日新井勘解由樣異人に御對談被成異國筋其外諸事御尋被成候間隨分心及び候程推量之儀迄も委細に申上候樣尙又異人にも御尋之義何事も不隱有体に申上候樣前以可申付置旨被仰付候に付其段異人へ申聞せ候處程なく勘解由樣御出異人へ御對談異國筋並其外之事共御尋申中剋御仕舞被成候
一十二月六日備中守樣より源右衛門御呼被成其方逗留之內異人へ相尋置候樣にと御書付一通御渡被成候

備中守樣より異人へ相尋可申事御書付之寫

一南斗は日本を何程はなれて見へ申候哉
一北斗は日本を何千里はなれ候て見へ申候哉
一いたりや國は南蠻國の內にて候哉尤南蠻國の都より方角はいづれの方へ當り候哉譬は朝鮮國と申惣名にて新羅百濟高麗と申樣成議にて候哉
一切支丹宗門不弘以前は佛法にても儒道にても有之たる事に候哉
一人參は南蠻イタリヤ國などにても朝鮮人參を用ひ候哉但ロワマなどにも人參有之候哉常々病氣の時分南蠻人も人參用ひ候哉
一伽羅は南蠻の內より出候所も有之候哉尤南蠻にても伽羅を用申候哉
一本唐と天竺と南蠻より地續にて候哉
一イタリヤ國より唐迄何万里有之候哉

一渡海の內天竺之地之內を何千里程乘候哉唐地之內をも如何樣にのり日本へ渡海候哉定て日本へ參り候時分は唐と天竺は左に當り候哉右方にも大國有之候哉何と申國大國にて候哉南蠻は日本より北面の間に當り候哉

一イタリヤ國日本へ途敢の內何と申所眞中にて候哉

一砂糖は國々より出し候油の類にて拵候由申候左樣にて候哉勿論其所々にて拵樣も違可申と存候

一日本程の島國も多候哉何とて日本を上國とは申候哉

一蒼海荒海にて大魚獸其外異形の物も有之候哉

右之通宗門に不被懸儀に候之間無急度聞合申度候以上

十二月

一十二月七日八郎右衞門御逢被成被仰渡候は此間異國人詮議之節申上候日本へ渡り候趣意又籠屋之夜番人少なに被仰付被下候樣異人願申義など承り候通書付今晩明朝にかけ差出候樣今日被仰付候

異國人口書左之通相認差上

一私儀日本へ渡海仕候義者ロウマの切支丹の惣司ホンテヘキスマキシモスと申者相談之上日本へ渡り切支丹宗門の法を勸申候樣にと申付候故渡海仕候會而以國を望又は見分仕候心底にて者無御座候

一日本にて切支丹宗門御制禁之義成程國元にをゐて存知罷在渡海仕候上は如何樣の御仕置被仰付候共又は御歸し被成候共御下知次第可仕覺悟にて渡海仕候若又宗門御用ひ御座候得者本望至極に奉存候

一寒氣の節に御座候得は夜に入別而寒申候に付大勢の御番衆御難義可有御座候間晝之內は如何樣に

御座候共夜之間は人すくなに御番御勤被成候樣仕度奉存候若又御氣遣に被思召上候はゝくさりを
以成共御つなぎ可被召置候私事少も不苦御座候
右之趣御詮議之節異國人申上候に付私共承候通書付差上申候以上
丑十二月七日
今村源右衛門印判
加福喜七郎 仝
品川兵次郎 仝

一十二月十日就御用山屋敷へ源右衛門參上仕候樣備中守樣より被仰付早速參上此間御渡被成候御書付
之次第一々相尋候間又備中守樣へ爲御屆罷出る
異人相荅候趣
一南斗は日本より四拾度程南へ參候はゞ見へ可申候
一北斗は日本より四拾度程南へ參候はゞ見へ申間敷と奉存候
一イタリヤ國は南蠻國の內にて御座候但奧南蠻と申候類の內にて御座候由申傳候南蠻國の都とはい
づれを差可申哉國々多御座候得ば名差がたく御座候尤南蠻と申國々は阿蘭陀國より南方にあた
り申候故南蠻と申傳候哉但又日本より南に當り候外國之內咬𠺕吧又は呂宋などにホルトガル國ス
ハシヤ國のもの多く住居仕候故日本より指而南蠻人と申候哉實說難知御座候且又南蠻國の方角は
日本より西北の方にあたり申候尤新羅百濟高麗と申樣成譯にも少は似申候併一國宛國主御座候て
勿論詞も違ひ申候
一切支丹不始以前者佛法の樣成宗旨にて御座候由に候得共只今の儒道にても佛道にても無御座候
一人參はイタリヤ國の方角には曾て無御座候尤用申儀も無御座候

一伽維の事右同斷にて御座候
一本唐天竺南蠻其外餘多の地續大國御座候
一イタリ國より唐迄凡〔下闕〕
一外國より日本へ渡海の內天竺唐土の內〔中闕〕尤天竺唐は左に見へ候て參申候右之方へも遠方アフリカと申候餘多大國御座候
一日本より南蠻國は北面之方に當り申候
一イタリヤ國より日本の地迄の內にてカアボボヲチスフランスと申あたり大躰眞中に御座候併少しイタリヤの方に近御座候
一砂糖本唐其外方々之外國又は咬𠺕吧國なごより出申候油の類にて拵申候由の說御座候得共慮說と奉存候尤拵樣同事と奉存候其故は咬𠺕吧國其外何國にても唐人拵申候由
一日本程の島國多御座候日本を上國と申候は暖國熱國の黑人抔とは違智惠も有り禮義等正敷國の寒暖も加減能御座候故申候由
一蒼海荒海にて鯨樣成大魚又は海犬人魚セロビなご申候てアツトセヒの樣成獸の形の物も御座候由に御座候
以上
一十二月廿九日山屋敷へ備中守樣八郎右衛門樣御出異人例の場所へ被召出八郎右衛門樣御役人を以右の御書付御讀被成候通異國人へ申渡候處承知仕候由且又日本へ渡り候も切支丹宗門勸申ため計にて候外の意趣には曾て無御座候尤ロウマ宗門の惣司より申付候事僞無御座候疑敷被思召上候はゞ日本人の內歷々の御方御兩人ロウマへか又は唐迄成共被遣御聞可被成候又は唐へ書簡を被遣候て成共御

尋可被成候右之通御座候上は如何樣之御仕置被仰付候共少も違背仕間敷候且又日本の像にて渡海仕候義は其國の御法度の事に御座候故日本人の像にまなび申候其故は唐へは唐人の像東京へは東京人の像にて參申候右少も僞り不申上候然上は右宗旨之上にて如何樣こも御仕置に被仰付候はゞ悅ひ申候若又少計構候處被仰付宗門敎候義御赦免被成候はゞ本望至極可奉存之由異國人申上候ホルトガルフランスなごより參候類又は日本の故こ被思召上候はゞ別て難儀至極奉存候由申候夫れより異人は牢屋へ被遣異人申上候通書付差上候樣被仰付則御扣共三通相認差上申候

異國人申口の覺

一今日被仰付候御書付之趣委細奉承知候只今迄御いたはりの段は難有奉存候併切支丹宗門の法を數爲申命御助被差置候はゞ幾重にも難有奉存候但右宗門無御免命計御助被置候儀は差而御禮可申上樣も無御座候由申候

右之趣異人申上候に付私共承り通書付差上申候以上

丑十二月廿九日

今村源右衞門印
加福喜一郎同
品川兵次郎同

一正月十三日御城へ罷出候處備中守樣八郞右衞門樣播磨守樣外々御兩所樣御立合にて備中守樣被仰渡候は其方義今度異國人に附致大義候依之今日暇被下置御銀拜領爲仰付候旨被仰渡則付紙頂戴被仰付候夫より兵次郞喜七郞被召出右同前に被仰付是又御銀拜領被仰付候

一正月十七日朝三人共に山屋敷へ參り候處舊冬被仰付候以後常よりはいちかましく相見候故色々申聞候得共和ぎ申躰相見へ不申候に付御兩所へ參り昨日歸り候により後の樣子幷十五日に食事も致間敷

由申候段承り候通御届申上右之様子故出立も少相待居申候

一正月十九日朝五時江戸發足二月廿九日巳上刻長崎歸着

　文化十二年乙亥四月借抄于近藤正齋

　○富士山本門寺曾我物語

曾我物語巻第一

　幷序　本朝報恩合戰謝德鬪諍集

夫申日域秋津島從國常立尊以來天神七代地神五代都合十二代神代爾置地神五代末御神申早日且居尊出御代御在治本朝七千五百三十七年其次出御代御補申大和日高見尊治本朝十二萬八千七百八十五年其次出御代御神申早富大足尊治本朝七千五百十二年其次

　初巻の初丁に

　曾我物語巻第一　　富士山本門寺〔常住〕

　日義

初巻の末に

　于時天文廿三年甲寅卯月五日書之訖

　日義

末巻の末に

當山第十在日殿聖人初名日義天正十壬午年二月六日逝年五十七　富士山〔北山〕本門寺什物
右曾我物語何人ノ作ニヤ定テ僞書ト知ヘシ。

〇正德六年日記抄

正月〔正德六丙申年〕
一朔日日和夕邊よりの火事明けがた迄もえ鍜治町南側家中燒申候南側福田や市郎兵衛家のやねにも飯田町定火消溝口式部消口取被申候横町釘屋長左衞門家の角池田屋のやねをばひぢ方民部消し被申候火しづまりて道具抔運びもごし一日骨折はたらき申候
一二日天氣けふも餘りの荷物穴藏よりいだし一日つかれ申候
一三日日和帳こじ上書抔いたし申候此日火事燒場見物いたし候風吹申候
一四日日和よし
一五日日和風はげしく吹申候此日宗師樣習初め餅を燒て銘々菓子盆に入出して仕舞申候
一六日日和半切箱竹永包紙折出し包紙はりかへ荷買入終日荷拵いたし申候
一七日日和濱町へ禮勤申候名主へ紙貳そく扇箱一ッ組中へさんぶた箱五ッ木工左衞門へ紙一そく杉箱一ッ錢百文年玉此日築地へも禮勤申候祖父へ半切百枚祖母へ紙一束年玉にいたし候
一八日雪少ふり候此朝六ッ時分芝の曉跡に火事有之候此夜藥師參りいたし候
一九日日和今日より初商に出申候　一錢貳貫九百六拾文ッヽ
一十日日和今日夕方大風吹申候
　一錢三貫文ッヽ　　一壹分に七百四拾文ッヽ
一此夜四ッ谷新宿の中程より出火內藤宿不殘燒失いたし候同夜八ッ過四ッ谷御たんす町より火出火事

有之候

一十一日日和風吹申候夜五ッ前谷中池の端榊原式部守屋敷表門脇より火出池の端通りより南へ神田白銀町本町石町不殘河岸より呉服御用後藤縫殿介家通りぬし町釘店通り大傳馬町伊勢町堀江町小網町堺町通り不殘燒失いたし靈岸島永久橋向北南殘申濱町東横町通りより北八丁堀五丁目へかゝり靈岸島向燒失日本橋東南茶碗店より通三丁目雲切散目薬屋の角迄燒此所木挽町定火消松平駿河守樣消口取申候其より万町横町通り不殘燒失本材木町四丁目迄燒失松平因幡守樣やしき南表長屋片側殘不少燒失此通りはかや場町同心町通り九鬼大隅守樣屋敷通り燒來り本多遠江守樣屋敷殘り是よりはすなりに北八丁堀へ燒出申候

一十二日風吹申候夕べ仕舞候道具不取出して休居申候晝九ッ時本郷に火事有之大火にて候本郷二丁目より火出下谷の燒跡迄燒失いたし止り候よし

一十三日天氣曇り此夜下谷に火事有之千壽之由に候

一錢貳貫八百文つゝ

一此所々大火事に付材木殊外高直にて松板壹兩に八拾五枚程せしが廿五枚壹兩にいたし候大工八日壹兩にて一日貳朱いたし候能き大工は一日五百文四百文にて候左官小まいかきも同斷大八車殊外運賃高直にて候

一未晦日之火事本多中務少輔屋敷より出候此御屋敷に前廉より鬼門に當り候此度迄鬼門切不申候故此度御切被成候火事出候前に怪異有之候御門のかざり松の眞木折候事竹三度迄立替折れ申候此夜本多樣の御泊り番にて御城に詰被成候留守にて候火事七口より出候よし御臺所御廐其外七所よりもえ出申候よし申あへり

一十三日之夜の火事千住二丁目より出女郎町不殘燒申候

十四日之相場

一錢貳貫九百三拾文つゝ

一十四日日和のごかにて候今日屋敷町にても柳にてもけづりかけに致し門にかけ槇木に一年の月の數を書門に立置申候相撲邊之在郷にては今日柳の枝に團子をさし家の廻りへさし置又神にも祭る由

此夜芝居町に手あやまち有之候由

一十五日日和木挽町勘彌初狂言若水仕合曾我狂言一番目より見物いたし候

一今日國々にてしめかざりをつみ上やき申候よし上には扇抔を結付燒申候又中國尾張抔にはしめかざりをつみ上其前にわらを一だかへ程つゝになひ申木を兩方かたごりて左義長燒申候大勢打よりて綱を引面々に伊勢の國の錢金を半田村に引ころ近江の國の糸綿を尾張の半田に引ころなご云はやし手を上けで引候内につみ重しかざり燒き申候又田のくろつゝみ抔をも一に燒ありき申候よし

木挽町勘彌初狂言

若水(ワカミツ)仕合曾我　森田勘彌

祐成はすわふに殘す村千鳥

一和田義盛　仙國彦助　　一一萬　市川門太郎

三つ有こても蝶は時宗　　後に鬼王

一箱王　袖岡庄太郎　　一鬼王　勝山又五郎

後に團三郎　　後に祐成

一團三郎　市川團藏　一朝比奈三郎　富澤半三郎
後に時宗
一工藤介經　濱崎磯五郎　一又野五郎　松本四郎五郎
一大いそ虎　藤村半太夫　一けはい坂少將　玉澤林彌
丙申正月初狂言

一今度十一日之火事に方々にて人死有之候前度々火事にも人死御座候
一十六日日和のごかに候
一錢貳貫九百五拾文　一槇椅壹分三拾四把
一十七日天氣風吹申候
一此日晝七ツ過八町堀稻荷之前角屋より火出家三間燒失いたし候雨風有之候
一壹分に錢七百十貳文
一十一日之火事に日本橋西にて橋坂二間に三間程燒柱四本闌干五間程燒失いたし竹やらいを附馬車通し申さず候
一十七日之夜八ツ時築地松平左京太輔（夫カ）樣中屋敷より火出候前酒井修理亮樣屋敷跡南北橋板まて末は飯田町北側裏を燒通りて此所角定火消溜池之端近藤彥九郎樣消口御取候それより鐵砲洲材木屋へ出さぶさ橋邊り東は海際之方三町に竪五六町程燒失築地松屋裏右衞門方に見舞働申候夜七ツ過迄九ツの頃より燒出し明日迄火消不申候て曉にしめり申候風西北にて候
一十八日日和風吹申候晝九ツ時淺草十王町銀座會所より火出東へ本庄新大橋廻向院近邊土屋相摸守下やしき阿部豐後守下やしき不殘燒失いたし候回向院は燒不申候松平越中守隱居やしき不殘燒失其よ

り筋違に深川雲向院之堂は不殘寺中片側燒申候て火しづまり申候風は西北風にて候
一十九日天氣曇る此夜□いたし申候
一廿日風吹申候天氣よし晝七ッ時權太原に火事有之大火にて暮時分しづまり申候
一廿一日風吹申候晝九ッ過芝田町七丁目の邊に大火事有之晝七ッ時分火しづまり申候後に聞候へば品川門前町より火出濱川佐水邊迄燒失いたし候由
一錢貳貫九百五拾文づゝ
一廿二日終日雪降申候今日富之介誕生日之由正德五年乙未正月廿二日晝八ッ辰の刻に富之介生れ申候
一此頃の火事付火も多く有之候由にて殊外用心いたし裏店路次出入夜五ッ切にて錠をおろし御屋敷も暮六ッ切にて仕舞申候中橋下槇町にては火付をさらへ公義へ出し候へば小傳馬町籠屋十一日之火事に燒候故先町内へ御預け被成候其外麻布百姓町にても裏に火付候を見出しさらへ申候由又鈴木町にては裏店のひあはひに有之候臼の上にわら御座候上へ熊野炭の起りを見出し消し申候よし
一廿三日雪降申候夕べよりの雪風の吹まわしにて一尺程つもりし所もあり又二寸計の所有之候晝八ッ前より七ッ前迄之內降止候て終日ふり申候
一廿四日天氣雪消申したれ共雨のごとくに候
一廿五日日和いまだ雪消やらず候
一廿三日之夜雪降候折から本鄉追分より火事出十物店迄不殘燒失いたし候由
一今年伊勢山田燒失同龜山東海道油井かん原不殘燒失致候由
一廿六日日和今日ゟ河岸湯屋平右衞門湯たき申候て入申候
一廿七日天氣今日裏の屋根指板いたし吹申候

一廿八日天氣よし此夜庚申待に紺屋善兵衛方へ行申候
一廿九日日和よし今日又屋根吹來り屋根吹申候
一錢貳貫九百六拾八文ッ、

申正月新板本

一好色和裝棊　三卷　彩色繪八文字や八左衛門板
一同万石船　三卷
一同一代能　三卷
一役者願紐解(グワンヒボドキ)　三卷　八文字屋板
一好色風流情色紙　貳卷　江戸山泉堂新板
一輕口めつた的　五卷　はなし本京伏見や板
一同手箱の玉　五卷　江戸板也
一役者我身寶　三卷　申のこしの評判江嶋屋市郎右衛門板

正月中火事　拾三度
正月日和日　廿六日　同降日　三日

以上

申二月記

一正月廿九日今夜九ッ半時豊島町より火出ばくらう町四丁村松町富澤町よりかまくら町牧野備後守樣やしき燒失水野隼人樣屋しき切にて火しづまり申候西北風にて候
一正月十一日火事以後堺町薩摩太夫外記四五日煩相果申候よし宿はかやば町に有之候よしの說

一朔日日和風はげしく吹申候晝九ッ過弓町こうふやのこやより火出即時に消し申候よし

一正月晦日豐島町火事に豐島町にて人死有之候よし新大橋迄不殘燒失橋ぎわにて横田備中守樣やしき燒殘り候松平因幡守樣秋元伊賀守土屋相摸守間部越前守抔不殘燒失

一同夜東海道新町九ッ時より曉迄燒失いたし候

一久我燒失有之候宇都宮などこも江戸のごとく切々出火にて一間屋にて燒留り候に今度の火出來家四五拾間程ヅヽ一度に相燒申候

一大坂などこも切々火事有之候よし

一二日日和

一三日日和晴明

一四日天氣曇る九過より雨ふり候

此日堺町小芝居大坂三國小太夫手まりの曲見物拾文ッヽにて見せ申候同みせ物長崎島小人飛揃長西宵五拾八歳かるわざ長拾二三歳成子共程にて候顏[ ][ ]ありからだより大きく一寸法師こ云にて候拾文ッヽにて見せ申候

一五日日和堺町土佐上るり藏開大福長者見物歸り根津御旅にて四國野父太郎みせ物見物いたし候

一今日より夜不寢之番鍛治町貳丁表店之分亭主こ河岸之床こ自身番こ兩所貳人ッヽ相詰夜中相廻り申候町中何れも如此にて候

一今日阿部豐後守樣京都へ御參勤にて江戸御立にて候

一公儀樣より火の元念入不審なる者有之候はゞ召連番所可罷出旨被仰付候

一近頃槇木炭高直に成申候

一熊野炭「壹俵にて」上五百文　次四百文　一槇「壹分ニ」上拾六把迄　下廿七八迄
一五日白米相場
　一壹分ニ　白米壹斗五升
一六日曇る八ツ過より雨ふり申候
一七日曇る此夜本郷四丁目本多中務樣下やしきより火出餘程燒失いたし候
一八日曇る烏森稻荷祭禮今日有之候七日は練にて候晝七ツ前あられ降申候
一九日日和初午宗傳樣へ行申候寺登り男子十三人女子四人都合十七人有之候此日築地矢の倉稻荷祭禮屋臺四ツ五ツ有之候
一十日日和晴明夜八ツ時分に大き成地震ゆり申候築地夷講に行申候
一十一日日和よし
一十二日曇る夜雨少ふり申候
一十三日朝曇る風有晝より天氣
一十四日日和朝風吹申候朝五ツ過日本橋平松町通り丁之北側より火出向側へうつり北側之末は左內町迄不殘片側燒不申候平松町火元之際藤堂民部樣消口被取候其上北側燒殘り申候向南がわは材木町河岸迄燒出し筋違に材木町三丁目迄燒申候て火鎭り申候通町之方は一町半程つゝ町並不殘燒不申候晝四時分火消え申候風北風にて候
一同日九ツ時神田鎌倉河岸之方に火事有之早速消申候
一同時番町之方に火事有之早速火しづまり申候
一此日燒殘りし日本橋人通り多く有之候故中間より橋踏落候人二人川へ落候へ共干潮にて候故泥に成

出申けがは無之候
一同夜八ッ時分上さや町湯屋より火出早速消申候火消二頭被參候
一松平土佐守樣やしきから木立に二月廿日迄に一万六千兩一坪に付八兩つゝに請負人有之候
一南鍛冶町吉田自菴殿屋形金貳百兩に一切請負人有之候
一十五日雨少降る晝より日和よし
一十六日終日雨ふり申候
　一錢三貫拾文つゝ
一十七日日和曇る
　一錢三貫拾文つゝ　　一切賃四拾文つゝ
　一壹分に七百五拾貳文うり　一銀七拾壹匁七分
　一米相場古米〔兩に〕五斗かへ
　一槇榾壹分に三拾把　　一炭壹俵三百八拾文つゝ
一十八日曇り天寒く風吹申候折々あられふり殊之外寒申候
一十九日天氣風はげしく吹申候東西土烟を上恐しき風にて候
一廿日風吹申候天氣寒く候
一廿一日曇る時々雨あられ降申候
一廿二日朝九ッ前雪ふり申候三寸程つゝつもり晝より天氣晴風吹申候
　一錢三貫五文がへにて候
一此日晝七ッ過に五郎兵衛町中程傘屋裏より俄に火出すぐに五郎兵衛町新道西河岸北こんや町川際迄

燒付候疊町半町燒申候此所本多遠江守樣消口御取候依之疊町通り京橋際迄表通り店不殘燒殘り北こんや町の火乘物河岸より南京橋向南一町目半町餘不殘燒失此火金六町へもえ出半町餘燒申候此火水谷町へ燒出一町不殘燒失いたし是にて火しづまり申候暮六ッ過迄燒申候西北風にて候但し五郎兵衛町河岸より表通りこんや町迄不殘燒のこり申候

一廿三日日和今日はきのふ穴藏へ入候道具終日取出し候晝麻布六本木の邊に火事有之候早速きえ申候夜五ッ過雨ふり出し申候

一廿四日日和よし晩方愛宕參りいたし申候此日晝九ッ前櫻田酒井石見守樣御臺所より火事出早速きえ申候

一廿五日日和のごかにて南風吹申候晩方麴町天神參いたし今日は天神眞筆の御影開帳有之候境內狹く堂の前に松梅柳なご多く有之緣日はにぎやかにて候見せ物猪(イノシ)鷲見物いたし候

一同夜九ッ過本鄕に火事有之候此夜四時より雨ふり申候

一廿六日雨天晩方日和にて候朝五ッ時初雷なり申候只一ッ

一廿七日日和のごかにて候晝九ッ時日に笠有之候八ッ前消申候堺町竹之丞芝居万歲女鉢本四番目見物いたし候都太夫一中風流そこは小町鉢たゝき上るり竹之丞が所作有之候同日根津御旅にて島狼見せ物見申候牛の如くにて角なく牙大きにて黑き長き毛一身にはへ牛のうなるごこく成聲有之候

一同夜山王前ながこ馬場間部隱岐守殿屋敷より火出四五間燒申候

一廿八日日和のごか今日阿蘭陀唐人御城へ上り歸りに御老中へ廻り申候本多中務樣前にて見物致し候唐人四人參り候

一廿九日南大風吹申候天氣よし晝七ッ時築地畠山下總守樣隣やしき藏のやねより火出やね潰ひ不殘や

けて火消申候同樣五ツ過青山の方に火事有之早速きえ申候
一卅日和堺町夢想權之助兵法芝居見物拾文つゝにて候芝居は今月廿八日より始め申候
一錢三貫三拾五文つゝ
申二月新板本
一世間子息氣質　全五卷　未の極月より出申候　作者其磧
一今源氏空舟　全六卷　江島や一郎右衞門板
一好色万寶節用　全三卷
一好色不老門　全五卷
一堺町勸三初狂言
今年十三年忌閏二月十九日に法事をいたし申候よし狂言に政之助曾我の老母に成團十郎に異見のしうたんに申候二月は火事故世間さわがしく有之候間閏二月にいたし候よし
一紙子にて傾城をこなし候は大坂にて坂田藤重郎江戶にて中村七三郎兩人にて候よし此度團十郎老母の紙子を着て居候大谷廣右衞門狂言に申候右二人の事は風流三國志と云本に有之候よし
閏二月一日より二の替り
〇南朝賸粉
南朝賸粉
南朝嫉麗本風流。義士將軍共一儔。三百年來陵谷變。祇有孱王一酒籌。燕子演成已困闌。桃花曾唱過江春。繁華終古舊明月。照向誰家哀怨嗔。
右雲程所作粉本。偶於篋中檢得先生桃花扇夢中花葉自笑之語。重光協洽姑洗上浣。　曉泉姜壿曉泉

寫山樓畫本印

南朝牘粉

按ずるに、これ南京の名妓李香の像にて、手中の扇は桃花扇なり、李香明末にいで明亡るの後にも聲譽いよ〳〵高ければ、南朝牘粉といへるなるべし、たゞし板橋雜記及び侯朝宗が李姫傳には、李香といひ桃花扇傳奇及び吳鏡庵等のいふ所はみな李香君と稱せり、板橋雜記に李香身軀短小膚理玉色。慧俊宛轉調笑無双。人名之爲香扇墜。余有詩贈之。曰生小傾城是李香。懷中婀娜袖中藏。何緣十二巫峯女。夢裡偏來見楚王。武塘魏子中爲書于粉塗貴陽楊龍友寫崇蘭詭石于左偏。時人稱爲三絶。由是香之名盛于南曲。四方才爭一識面以爲榮。とあり、四方の才子ひとたび面をしるを得れば榮とすといふをみれば、當時聲價の高き事知るべし

按ずるに、生小傾城の詩桃花扇傳奇には何緣を緣何に作りて楊龍友の作とし標注にこの詩は余澹心代作なりといへり、又樂戶の盛なるを擧て李卞爲首沙嫄次之。鄭頓崔馬又其他次也。といふをみれば李香卞玉京の技の絶好なる事知るべし、また李貞麗者李香之假母。有豪俠氣。嘗一夜博輸千金立盡。與陽羨陳定生善。香年十三。亦俠而慧。從吳人周如松受歌。玉茗堂四夢皆能妙其音節。尤工琵琶。與雪苑侯朝宗善。閹兒阮大鋮欲納交于朝宗。香力諫止。不與通。朝宗去後有故開府田仰以重金邀致香。香辭曰妾不敢負侯公子也。卒不往。とあり

按ずるに、侯公子に勸めて阮大鋮の交をしりぞけし事、幷に田仰が金三百鍰をもて李姫をむかへて一見せんといふを固くしりぞけし事詳に李姫傳に出せり

これによれば李香の幼年より音曲に妙に且見解あり、節操ある事しるべし、桃花扇傳奇によるに李香君はじめ侯朝宗に梳櫳をゆるせし時、朝宗一柄の扇に詩を題せるを送る、夾道朱樓一徑斜。王孫初御富平車。青溪盡是辛夷樹。不及東風桃李花。と云詩なり、香君此扇を秘藏せしに世の亂れにあひ

て行わかれ田仰の強て香君を迎んとせし時も此扇にて人を亂打しつゐに暈倒して頭の血にて扇を汚す、後侯朝宗を思ひて扇をみる〱眠りしに楊文驄といふ人訪ひ來りて扇に血の點じたるを見て盆草をしぼりて繪の具とし、畵て葉を添へ血點を花として折枝の桃花の圖をなしぬ、此扇此傳奇の種也最後に張瑤星といへる道士の壇場にてはからず兩人めぐりあひし時扇は道士に破りすてらる、扨このふたり道士の教化を得て悟道し侯朝宗は丁繼之の弟子となりて道士となり、香君も卞玉京の弟子になりて女道士となり、その〱南北に別れ去りて修錬せしといへり、桃花扇は雲亭孔氏の作にて大に流行せしものゝよし也、燕子箋は石巢傳奇貳種の一なりと云、桃花扇傳奇には阮大鋮が獻ずる所の曲なりといへり

南朝賸粉圖一幅崎陽春孫二郎所惠藏于家

右寫山樓谷文晁所考也

文化癸酉孟夏念七甲子寫于緗林樓中　杏花園

○酒井靱負亮裁判

酒井靱負亮殿小兒及刄傷御裁斷

文化四丁卯年九月十六日於若州小濱渡邊應作劍術稽古場にて青山鐵一郎（右馬之助弟十三歲）三浦熊次郎（茂八郎弟十二歲）口論之上鐵一郎事熊次郎へ切付候處熊次郎刀之鯉口堅く不拔合內に疊かけ三刀迄眉間を切付候に付熊次郎は倒れ候由其中に應作鐵一郎を取押へ刀を奪ひ取押鎭候熊次郎疵わつかに付步行にて罷歸候由其後双方より其趣訴疵平愈之上打果し申度段申達之右に付追て御裁斷之趣如左

青山右馬之助より江戶都筑助太夫方へ文通寫

一筆致啓上候ゝゝゝ然者一昨五日老中江見求馬方より以手紙鐵一郎へ御直に被仰出候御用御座候間七

ツ時御作園場へ私共并親類之者兩人致同道罷出候樣申來私鐵一郎本多孫左衛門八木原傳次郎方同道にて罷出候樣先方も同樣にて茂八郎熊次郎加藤祖太夫行方儀太郎同道にて罷出候處無程殿樣被爲入只今罷出候樣大目付中差圖にて何れも一緒に御次之間へ罷出候處上之御間御唐紙明候に付何も致平伏罷在候處鐵一郎熊次郎方へ是へ出よと御意被遊則兩人席を進み罷出候處被仰出者鐵一郎熊次郎先達て於稽古場致爭論及傷候之始末委細御聽候右之上は鐵一郎に有之而は一旦切付候處外より引合存分に得不達候上は何れに存分に不致候ては差置間敷所存に可有之と思召候熊次郎方に有之候ては刀拔兼るより內に疵被附其儀に被引分候上は心外に可存義疵平愈之上は尤存分に可致存念に可有之哉と思召候御上にても同樣被思召候事に候併ながら一旦引分れ今更双方任候者一人は可死一人は疵を蒙り其上切腹に而も可被仰付左候得者無益之事に命を落し候儀には有之間敷哉全體先日之一件双方共幼少に候處健氣之義末々御用に可罷立者にも可相成思召候得者惜儀と思召候乍去是以其儘に被差置候筋に者無之候得共不及是非義に候得共爰に一ツ思召御座候兩人共今存分に可致旨被仰出候得者唯今双方に相果候命暫く之內御預り置可被成候間何ぞ事御座候節於御馬前其命を忠の爲に捨候者先祖へ對し候ても子孫に對し候ても格別之功と思召候兩人共右之思召聞入吳可申哉了簡御尋被成候之旨被仰出候右に付求馬方御請可申上旨挨拶も有之鐵一郎熊次郎兩人共奉畏難有段御請申上候處又々被仰出候は段々被仰聞候趣聞入吳御機嫌に思召右之通御請申上候上者此以後遺恨有之候得者舌二枚遣候と申者にて士之致間敷義に候何分双方共無遺恨此以後相親可申候右に付御持合之御酒可被下候間兩人盃可仕旨被仰出兩人共御膝元迄被召呼御盃被下直に其盃にて互に盃致候處返盃被仰付夫より其御盃を又熊次郎へ被下置又返盃被仰付夫より其盃を直に兩人へ被下候間每月五日に互に寄合則今日も鰹節一種切之御肴に候間右一種切之肴にて右之盃にて酒たべ彌以義氣相立候樣互に相みがき可申候其故に盃に御直に義之字御認被成蒔

縮に被仰付可被下候間生涯此一字を不忘出會致候樣に被仰付且茂八郎私幷双方同道にて罷出居申候親類へも此以後双方睦敷出會可申旨被仰付右之御酒被下候間何も頂戴可仕旨被仰付何も御前を引取候て御酒頂戴仕居候處又鐵一郎熊次郎幷茂八私共御前へ罷出候樣被仰出又候罷出候處鐵一郎熊次郎居候側へ御寄被遊猶又此以後相親み遺恨に存間敷旨吳々被仰付茂八郎私へも猶又心易き可仕旨被仰出直に御歸城被遊候誠以難有奉存候乍慮外御安意可被下候

十一月七日　　青山右馬之助

都筑助太夫樣

猶々熊次郎方疵も最早愈申候て成程少々疵は見得申候得共格別之義には無之候熊次郎年は拾一に御座候が元氣成子にて爭論に及候節も可仕合こ申出候鐵一郎切付候節も刀の鯉口堅くぬけ兼候内に疵を被付其節もいまだ刀を拔不合先に切付候者卑怯の義こ聲を掛候由引分候後疵療治等之節も甚元氣成事之山感心仕候いづれ此以後は鐵一郎こは兄弟同前之義こ存候、、、以上

番頭
兄右馬之助
青山鐵一郎
拾三歳

馬廻り
兄茂八郎
三浦熊次郎
拾一歳

右都築助太夫ミ青山右馬之助親類にて助太夫は當時江戸住居若殿様御附相勤居候也

○牛天神下孝心の者

金杉水道町家主井筒屋佐兵衛店に近年引越し參り申候竹帚商賣仕候吉五郎ミ申候三十七歳母親へ孝心之者に付當六月四日町奉行永田備後守様へ御呼出し御白洲にて孝心に付銀五枚爲御褒美被下置誠に難有事に候歸りに八丁堀御掛り様へ被呼被仰聞候は是迄孝心之者度々心得違いたし慢心おこし却て御褒美頂戴之後不孝にて被叱候者も有之候事故猶又此上大切孝心可仕由被仰聞候

孝心之始末は未だ承り不申跡より承り可申上候

傳通院前葛籠や駿河屋善兵衛より申來

○清水御屋形御成の節表御供方御料理物調　享和元酉年三月伺濟

一御酒　若年寄衆　二人

一御吸物鯛切身　めうミ　御側衆　七人

一御肴　三種　勤番支配衆

内　但若年寄衆御側衆御用意之分代り付

一種　鯛魚でん　外御用度三人

一種　御煮染　鹽煮あはび二　皮付長芋　長ふき

一種切漬鮓　鯛二切　さより二切　ゑび一　たて　せうが

一無汁三菜　但坪計代り付

坪　畑白切身　くわゐ　木くらげ

香の物　奈良漬
味噌漬茄子　飯
猪口　聚菜
つくし
燒物鯛味噌漬
一御菓子　拾三　羊かん三　外良餅二　草包餅三
紅梅餅三　山吹朧まん頭二
〆拾三人
一御酒
一御吸物　鯛切身
めうこ
一御肴　二種
一種　鯛魚でん
一種　切漬鮓
前同斷
一赤飯　但胡麻鹽無之
あわび三　小串魚二
一煮染　椎茸二　長芋三
芭豆腐五
一菓子　拾一
やうかん二　外良餅二
草包餅二　色付包餅二
白朧まん頭三

御小姓　拾貳人
御小納戸　三拾壹人
御醫師　二人
御繪師　二人
西丸御小姓　五人
頭取　一人
御膳番　一人
御次詰人　六人
取扱頭取　一人
御膳番　一人
奥之番　二人
御次番　五人
御伽　四人

〆八拾二人
一御酒
一御吸物　鯛切身
　　　　　めうご
一御肴　二種
　　一種　鯛魚でん
　　一種　からすみ
　　　　　但五切竪切
一赤飯　但胡麻鹽無之
一煮染　但前同斷
一御酒
一
一肴　一種
　但硯蓋物
　　小串魚　二
　　かまぼこ　三
　　くわゐ　三
　　蓮根　五
　　皮茸　見合

御醫師　二人
御用意　七人
御膳奉行　壹人
御膳所同御臺所頭壹人
西丸御膳奉行　壹人
御膳所組頭　一人
同御臺所人　八人
同小間遣頭　一人
表御臺所組頭一人
表御臺所組頭三人
御賄組頭　一人
御賄調役　二人
同吟味役　二人
同御酒役　二人
御廣敷伊賀之者四人

一赤飯　胡麻鹽付
煮染ハ無之

御膳所小間遣組頭一人
同小間遣拾一人
同陸尺　六人
御風呂屋小間遣一人
同六尺　二人
御賄六尺頭二人
同新組頭　二人
同調吟味下役三人
同六尺　七人

公家衆御馳走に付

文化六年己巳五月二日御能組

翁　三番叟　彌太郎

前ツレ　日向富三郎　千歳　大藏　彌惣右衛門

天女　深尾灌八郎
市郎兵衞
十太夫　三郎右衛門　惣右衛門
井上忠兵衞　權兵衞
玉の井　源七郎　新九郎　又六郎
竹内四郎兵衞　伊右衛門
大供福三郎

八島　金剛太夫　井上忠兵衛
彦太郎
竹内四郎兵衛
兵助　權九郎
庄吉

芭蕉間　觀世太夫
彦太郎
彌太郎弟子
春日九郎八
市郎兵衛　小左衛門
庄兵衛

黒塚間　八左衛門
源七郎
池上助
彌太郎弟子
鈴木三左衛門
助五郎　六藏
兵次郎　小八郎

祝言高砂　庄左衛門
新之丞弟子
富田次郎左衛門
權平
山田金三郎
助三郎　文次郎
五郎助　富五郎

水掛聟　八右衛門
しうと　平野卯之助
女　藤井兵三郎

鞨座頭　傳右衛門
きく都　名女川六之助
勾當　成井源之丞
同　村越善次郎
同　杉原半兵衛
通人　成井銀五郎

八島間
那須　勘藏

玉の井間

鈴木左四郎
兒玉吉次郎

朝山角兵衛
上松堅之進
山本政次郎

增訂一話一言卷三十五終

增訂一話一言 卷三十六

○鈴木白藤所藏白石著述目

新井君美著述目錄　鈴木恭藏

畿内治河記 一　干支考 一
春秋考 一　新井家系 一
遺文 一　退私錄 一
三家考 一　紳書 六
讀史餘論 六　五事略 二
五山の長老朝鮮客使に館伴たる事 一
朝鮮信使進見議注 一　教諭諺解 一
俳優考 一　將軍宣下議 一
觀樂筆談 一　江關筆談 一
采覽異言 一　孫子兵法擇 一
國書復號記事 一　蝦夷志 一
南島志 一　折焼柴 六
經邦典禮 衣冠部一　東音譜 一
白石雜記 一　家禮考 一
藩翰譜 二十卷

○澂月亭叢書目 白藤

澂月亭叢書甲之部
阿部定次記　慶長記
聞見集　茗話記

伊東法師物語
老人雜話
坪弓老談記
關ヶ原之節
藤堂家覺書
和泉守家記
北川覺書
立齋舊聞記
三河物語大久保彥左衛門記
佐野宗綱記
福富覺書
右近衛少將家覺書
諸士軍談

乙篇之部

管窺武鑑
聞書帳
小牧戰話
同或說
昔物語

景憲家傳
岩淵夜話
小須賀氏覺書
老士物語
細川家覺書
おあん物語
朝鮮陣之節古文書
公程閑暇雜書
大和軍記
舘林城覺書抄
吉野甚五右衛門覺書
反町大膳申狀
山口久庵話
慶長記
松陰私記
長久手
幸島若狹大阪物語
片桐

越後國内輪弓矢　近藤
毛利　九鬼
清水　本多
水野　有吉
朝鮮日記　多賀谷記
小田天菴記　南部根元記
細川家覺書　幽齋樣覺書
越前福井鑑　管谷傳記
渡邊勘兵衛武功覺書　權現樣御一代記
壽齋　藤堂氏覺書

丙篇之部

岡田竹右衛門覺書　樫井台戰覺書
古老夜話　黑田家舊記
土氣城覺書　里見九代記
水谷蟠龍記　水谷記
武功實錄　足立物語

○躬絃和文並和歌　文化十年癸酉三月七日
同十二年乙亥翁病死
やよひばかりすみだ川にあそぶ記

月は春のやよひの月日はじめのなぬかの日をぶねみつをならべてすみだ川の流にさかのぼらんとする事あり、されどかの嵐の山のふもと川にうかべりしかしこきみやびをまねぶとにはあらず、たゞねひゆく春のけはひをもてはやさんとてのすさび也けり、けふしも此ごろの雨なごりなくはれてつくばたかねはまゆのごと雲ゐにかすみ行水はあるをながしたらんやうにていときよら也、岸の柳の春風にくしけづり堤いをぐさの朝露にひげをあらふとみゆるもけふのあるじまうけとこそおぼゆれ、やう／＼ふた國の名におへる橋のわたりも漕過ぬれば盃あまたゝびすんながれてまらうどもあるじもこもなへる人／＼もおなじくいへらくけふいとありがたき日也、いでやさほ姫にぬさ奉らんといへばをとめ子が糸によるてふたへなる聲してうたひ出つ、これが中にとしたかきおきなは世にきこへたるものしり人にて、つかみじかきふんでをとりて何くれとものかきたるを、みつの舟の人／＼いかで得てしがなとあらそひいふもをかし、稲荷のみやしろある所にてあるじいざこゝにといへば舟をさかじふりたてつ、おそくとく堤にのぼりてみわたすに、さくらはまだしきころなればそこはかとなき賤が軒に桃の花のゑみすけたるもをかしなどいふほどに榮之のぬしとてゑをいみしうかき給ふ人あへり、かの物しりの翁いざ給へとていざなひ行つゝ白鬚の神の杜のかたへなる西藏院といふにやすらひぬ、こゝにいとをかしき事あり、こさふくえぞかしまの波のをちよりもて來たりとてたかさみさかばかりめぐり一さかばかりなる黑き石のかたちいとをかしきに注連引はへたるあり、こはなぞやとてをとこもをみなもくつがへりわらふに、あなかまさねかたのちうざうの昔物語もとせいしいふは例のものしりの翁也かし、かのゑの道のたくみなる人たゝうがみに此石のかたをうつして翁からうたつくりたはれ歌よみなごするほどに、菅のねのたとへなる日もふじの高ねにかたふきぬ、今はとてふなよそひして歸らんとするに、としにまれなるけふのはる日のをかしかりつる事をしるしてよとしひてそゝのかさるゝを

いかゝはせんそも〳〵けふのまらふござねは良道のぬし藤堂主計號龍山名良通あるじは成眞(シゲ)稱桂雲院三作ものしりは南畝の翁、さては酒をたすくるをこめふたり、猶ここ人〳〵もいこおほかりけり、それが中に酔しれて其事をしもみゝずがきにかいつくるは寶田の里人稟がもこの翁彌弦になんありける

舟のうちによめる

をぶねさす隅田川原の春風に
　柳も釣の糸はへてけり

つゝみにのぼりて西藏院にやすらふ

かつしかや堤づたひの松陰に
　世をふる寺の春ぞしづけき

夕つかた

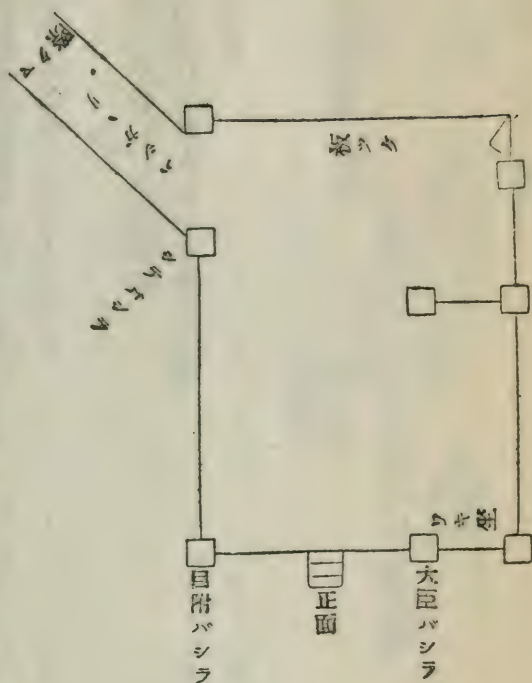
なにこなき春のあそびにけふも暮ぬ
　あはれおほかるいりあひの鐘

○翁三番叟次第

式三番翁立

一面箱狂言師　翁太夫シテ　千歳　シテヅレ觀世流寶生流今春金剛
喜多にては狂言師面箱にて兼相勤

三番叟狂言師　笛　小鼓脇鼓先手　小鼓頭取　小鼓脇鼓胴脇

大鼓　太鼓　地謡

右之順に出る初め面箱出て目附柱の際に踞き翁正面にて下に居るを見て千歳以下皆跪き居る千歳はシテ柱の際に居る三番叟以下はやし方皆橋がゝりに居る翁正面にて禮をして坐につく面箱翁の前に行面箱のふたを明面を出す時千歳脇坐に行坐す面箱は面を取出しふたにのせ置て千歳之次に坐すはやし方一人づゝ順にシテ柱にて禮をし坐につく地謠は板附之方より出て柏方之後に坐す小鼓三人床几にかゝる笛座附を吹出す小鼓素袍肩に脱く笛座附之末ヒシギを聞小鼓打出す

翁謠出す

一ごう〳〵たらり〳〵らたらりあがりらゝりごう 地 ちりやたらり〳〵らたらりあがりらゝりごう 翁所

千代迄おはしませ　地　われらも千秋さむらはふ鶴と龜との齢にて　地　幸心に任せたり　翁　とう／＼たらり

／＼ら　地　ちりやたらりたらりらたらりあがりらゝりどう　千歳ノ舞初る　なるは瀧の水／＼日はてるとも

地　たへずとうたりありうどう／＼／＼　千歳　たへずとうたり／＼　舞　君の千とせをへん事も天津乙女の羽

衣よなるは瀧の水日はてるとも　地　たへずとうたりありうどう／＼／＼　舞スム　笛ヒシギ千歳元之座ニ著

翁あげまきやとんどや　地　ひろばかりやとんどや　翁　座して居たれども　地　まいらふれんげりやとんどや　翁

千早振神のひこさのむかしより久しかれとぞ祝ひ　地　そよやりちや　翁　凡千年の鶴は万歳樂とうたふたり

又萬代の池の龜は甲に三玉をいたゞきなぎさのいさごさく／＼としてあしたの日の色をろうじ瀧の水

れい／＼と靜に落て夜の月あざやかにうかんだり天下泰平國土安穩今日の御祈禱なりあれはなじよの

翁ともよ　地　あれはなじよの翁ともそやいづくの翁どう／＼／＼　翁　そよや翁舞　千秋万歳のよろこびの舞

なれば一舞ひ舞はふ万歳樂　地　万歳樂　翁　万歳樂　地　万歳樂

右にて翁濟　翁千秋　這入る　三番叟シテ柱に著坐　打大つゞみ出

三番叟

一おゝさへ／＼よろこびありや／＼わが此所より外へはやらじとぞおもふ　舞もみの段濟黑面になる

三番叟

一あゝら目出たや物に心得たるアドの大夫殿にちよつとげんぞう申ウ

面箱

一てうど參りて候　三　一たがお立にて候ぞ　面　一あどと仰候程に某隨分物に心得たると存おあどのために

罷立て候　三　一ほゝう　面　一今日の御祝儀を千秋万歳と目出たきやうに舞ふてをりそへ色の黑い尉どの

三　一今日の御祝儀を此色の黑い尉が千秋万歳と目出たきやうに舞おさめうずる事は何より以て安う

候先おごの大夫殿には元の座敷へおもおもご御直り候へ　面　一某座敷へ直らふずる事は尉ごのゝ舞より以て安う候先御まい候へ　三　一まづ御直り候へ　面　一先御舞候へ　三　一イヤたゞ御直り候へ　面　一アヽラ目出たやさあらば鈴をまいらせふ　三　一アラやうがましやな鈴の段濟仕廻なり

翁立　千歳の舞　翁の舞翁がへり　三番叟もみの段

黑色の面にて　素面ニ而

鈴の段

右之通之順に御座候

〇寛政譜なりける時和歌

霜月廿一日寛政譜なりて奉らせ給ふ夥目の間にして執政の御かたがたに見せ奉りたまふにをのれらも此事にあづかりて其席につらなりぬるかしこさをふして思ひつゞける　正邦山本忠兵衛

冬ながらひもとく花の下風にたもはつへある袖の梅が香

寛政重修諸家譜千五百三十冊を奉らせ給ふ事をことふきてよみて奉る　弘賢

ものゝふの八十うち人の家のふみちませあまりを傳ふかしこさ　義方

〇志賀隨翁和歌會一觀於印南社

家家のちすぢもゝ筋いこしげきしらべや代々にくりかへすらん

もろ人の家のいこ筋をりはへし文のにしにの卷やいくまき

春毎に松のみこりの數そひて千代の末葉のかぎりしられず

藤恕軒志賀氏隨應行年百有餘歳
○發句
去申年下總國　八歳の小女子を產ける時何人の句にや
帶解は去年ことしは岩田帶
○卯花園漫筆
卯花園漫筆五本は昌平學舍官本也卷首に文化六稔孟夏東都石上宣續の自序あり
○妖狐禁文
御先手
松平左金吾
定虎

妖狐禁文

士民百姓等誤て狐を以て稻荷の神なりとおもへり因と玆野狐稻荷の神號を盜み甚しきは人を害す天のせめ遁るべからず幼兒狐の穴のあたりを汚しあるひは驚しなどする時は忽にあだすことか夫れ人は萬物の長狐は人のために狩場の獲物なり我十一ケ村の人民は小兒たりといふとも狐には替へがたし我知行せしむる地に生ずる所の狐は是我が狐なり人をおかすにおいてはたとへ士民の祭る所稻荷の神號ありといふとも私の淫祠なり豈ゆるすべけんやたちまち破却せしめ十一ケ村の狐穴をほらせ悉うち殺我が十一ケ村に狐のたねをたつべし誤てけんぞく人をおかすとも其頭たる狐是を制し人のうれるなきやうに制禁を加ふべし是我が心なり此段深く承知せよ
年號名乘判

安房國長狹朝夷兩郡內
十一ヶ村
狐等

○寺社什寶一覽 金輪寺 圓滿寺 護持院 護國寺

王子金輪寺什寶 辛未六月十三日虫干

日錄

一不動座像 妙澤筆　立一幅

二童子　小立二幅

背書

天平寺　于時天正貳年甲戌

奉修覆金子共寄進　權大僧都玄秀修

石動山　九月吉日　秀榮

一兩界曼荼羅　二幅

一金輪マンタラ 馬　象　立一幅

一若一王子宮 御室御所御筆　立一幅

一五大尊 文覺上人筆 古畫絹地　立一幅

一十王地獄圖北室院什物　高野寫 小野篁畫寫　彩色　立十幅

外地藏　一幅

一以空像　在

一梵字　中　立三幅

一大師像　右

十六觀音

一木□僧正已空等引金剛書　立十六幅

山崎觀音寺　土岐家

一不動尊專心僧都畫　二童子共　立一幅古物

一不動明王大師筆卜云未詳　立一幅

一愛染明王弘法大師筆　立一幅古畫

一本地佛以梵字畫紺紙金泥　立三幅

裏

武州豐島郡若一王子權現之本地者彌陀藥師千手之尊影也別當金輪寺宥相法印所望新圖焉故使家士赤尾加兵衛清繼隨舊圖以金泥梵文莊嚴之附于寶庫而永冀家門榮全者也

永祿十五郡立季姑洗上弦從四位下高睦誌　[祭酒]

一來迎彌陀三尊紺絹金泥　筆者不知　立一幅

阿彌陀之三尊一鋪爲自身滅罪生善末代利益衆生新奉圖繪之者也于時寶徳三年辛未八月十五日開眼共養畢長谷寺僧琳美行忍房爲道慶禪門妙心禪尼各々菩提乃至法界平等利益六親眷屬七世父母成佛
今泉州家原之住主榮春天文十九年庚戌七月十五日書之

一藥師十二神絹地總覺大師筆古畫　立一幅

一ダキニ天狩野永眞筆　立一幅
奥書院御座之間フスマ狩野永眞筆牡丹也此節畫セタルナント住持ノ物語也

一　立一幅
邊霜昨夜墮關楡吹角
當城片月孤無限飛霜飛　［王印登瀛］［閬洲］印ノオシ所面白シ
不度秋風吹入小單于　閬洲

一山水見洲　立一幅
大福ナリ先ニ藏セシ人横ニ斷截シテ卷物トセシヲツギ合セテ立軸ニセシ也上ノ方少シキレタルナルベシ

一大般若波羅蜜多經卷第三百四十九活板本
奥書奉施人　武州豐島熊野權現御寶□
文保二年戊子初秋
大施主右衛門尉平行秦敬白

一飛鳥山花見の歌どもあまたあつめて一巻とせし中に
咲つゞく花はゆきかとちりしきて

川なみふかくにほふ春かぜ

といふをうけ給はりて

ちる花は雪とちりうく瀧の河

なみのあやをる浪の春風　　道筑の書なり

按冷泉爲久卿和歌多し嶋島信遍と唱和ありこれもその一ならん歟

一百尺闌干落碧潭白雲多處
坐青嵐客來不厭松醪薄別有
醍醐似蜜甘　　右一
秋風蕭瑟帝都隅帝子吹簫鳳有
無白日霜壇何所見鬼神朝罷鳥
相呼　　右二
歸沐承　恩遊祇林微霜九月落溪
陰懸泉下見三千尺孰若吾人秋興深
右三　　秋日遊禪夷山　芙蓉道人

立一幅

一益王書
秋望群峰散紫烟芙蓉片々落
尊前偃人一去空回首黃鶴重
來定幾年　宸丶（此字不明）　[印]　[益王]

一常信富士圖　　横一幅

一

一福祿壽[鄕柳]鹿　　啓書記　三幅

一松に日の出大和大守拾遺吉里書　一幅

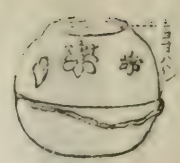
一林和靖同筆

一探幽

一　　　　　堀田加賀守

王子別當

正□[盛カ]

御□中

尙々其他行記之事被

仰付道春法印被參候以上

一昨日　上樣被爲　御腰

懸忝被存に付昨日沓御出殊に

柿一折御持参過分存候尙
追而可申述候恐惶謹言

十月十三日

一鈴木權兵衛　詞書
狩野尙信主馬畫　泥書こも

一熊野三神傳記　嶋鳳卿　一卷

護持院什寶辛未六月十四日虫干

一趙子昂竹里館圖　白描著色　横　一幅人物甚奇也
大德元年趙以下不明

一後水尾院菊御歌　横　一幅

ちりうせぬ
此ことの葉
の
種となる
花も
いく世の
秋のし
らきく

一南無筑波大權現　尊朝親王御筆　立一幅

一沈南蘋柳八哥鳥　立一幅

乾隆戊寅三月寫林以善筆衡南沈銓

一不動尊　二童子　古絹地　筆者不知　立一幅

一尊朝親王色紙　二枚　立一幅

長生殿裏春秋富　君が代はちよに八千代にさゝれいしの

不老門前日月遲　いはほこなりてこけのむすまて

一清明上河圖　錢塘夏芷製　一卷

引首

清

明

上

河

圖

克晦　黃氏孔昭

末ニ

七引ノ文アリ　文中ニ示夏廷芳所臨清明上河圖

此圖ヲ見テ病ノ愈ルヿアリ

容菴先生病ニ臥シテ清鑑子來リ問フ問答ノ文也
歲在己未夏五月之望工部左侍郎掌通
政司事容菴艾字撰幷書　伯寛　艾字之印

奥ニ
右一卷夏芷畫也莫疑焉
狩野法眼探幽　探幽

大明錢塘夏芷字廷芳畫山水人物精緻傳色
甚重　夕顏菴僊　羅山

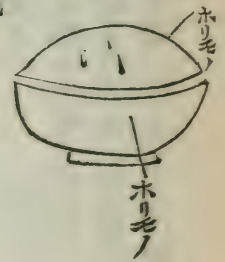
江雲滑樹

一呂紀花鳥絹ヤブレテ損　大立二幅賢慶僧正代内藤上野介より來
左　銀木犀　芙蓉　鷺
右　竹　芙蓉　萱艸　鴛鴦

一可翁建武比ノ人　釋迦　文殊　普賢　絹地　立一幅
釋迦文珠普賢ノ面相甚奇ナルモノ也別ニ摸ス

一弘法大師金字書　靈鷲山三字額字ノ体也　立一幅

一弘法大師行草小字紙地藥袋帋ノ如キモノ也　一卷
察知論文卷一沙門遍昭金剛トアリ
筆勢飛動奇中之奇希世ノモノ也
一巨勢金岡筆　藥師十二神　日光月光二菩薩絹地　立一幅
一四樓陳所有書五律三首　立三幅
一光明皇后筆紺紙金泥金光明經　一卷
一琥珀念珠　一連
一菩提樹子念珠　一連
五百羅漢彫刻珠ゴトニ羅漢四五體ヅヽ彫リ其形アザヤカ也
一赤栴檀立像釋迦御丈六七寸許　一體
一廻向地獄文世尊寺殿筆　一卷
一土佐繪職人盡絹地　十餘枚
一水晶珠徑一寸餘　一顆
一菅神像絹地筆者不知　一幅
面相幷黑袍ノ袖奇々
一同白髮像　一幅

一堆朱菓子盆蓋アリ　無銘　二

一堆朱下地菓子盆彫物甚奇也

裏ニ

大明萬曆乙未年製

一薬師十二神將絹地　筆者不知古キモノ也　立十二幅

一御安鎭四臂不動尊　新畫　二幅

一筑波山縫起眞名　一卷

一同かな緣起畫人

一天冠

一衞立ノ繪　探幽彩色金地

一話一言卷三十六

一灌頂佛具　表　松竹鶴　裏　柳ニ鷺此方ヨロシク見ユ

一行厨

一黄山谷書

宣和

大江東去拍　山谷書

岸　驚

濤　時

時　赤

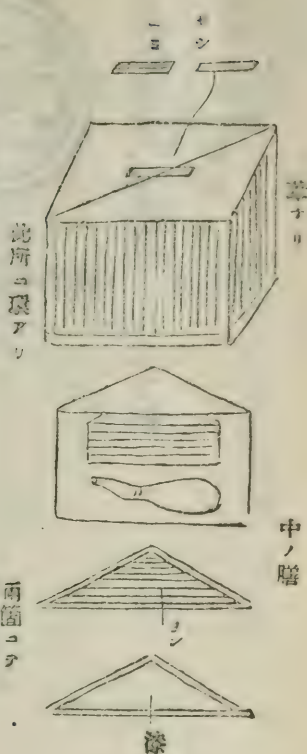
壁　、、氏　如

夢

上袋ニ

元祿十三年

辰三月六日

上様ゟ参る

湯島萬昌山圓滿寺什物　辛未七月廿六日一見

一弘法大師御影　眞和親王御筆　一幅

一法華經　一紙　聖德太子御筆　但扇形額

一辨財天木像　弘法大師御作

一御加持貝石同　一顆
一心經同御筆
一足利十五代之畫像　一幅
一尊氏畫像　一幅
一織物畫像　一幅
但畫像ノ儀ニ　延文三年戊戌年四月二十九日
等持院殿妙義仁山大居士　尊儀　トアリ
一大日如來像弘法大師御作
一天竺佛阿彌陀如來尊氏軍中守本尊
一足利代々系圖　一卷
一室町殿日記　十五卷
一紫色之佛舍利足利傳來
一義滿公法體像　一幅
一義照公畫像　一幅
一刀八毘沙門神影尊氏公軍中保護　一幅
一御香宮明神像唐作
一二王唐作　一對

一天竺國阿育王窣堵婆石八万四千造立之內裏ニ參寥子ノ書アリ

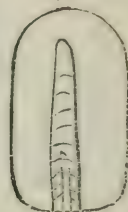
　裏ニ彫アリ

　　阿育王窣堵波山莊嚴　　磨滅シテ見エサル所アリ

　　骨裡隃庶難供券

　　功德不思□議歟

　　　參寥子

石形

長五寸餘

如此自然ノ紋アリ

一心經　弘法大師御筆　一幅　號鼠心經

一不動明王御影　興教大師御筆　一幅

一開山義高僧正八十歲自壽像　一幅

一同三衣　珠數

一十六善神　金岡筆　一幅

一六觀音　弘法大師御筆　一幅

一地藏菩薩　卓磨法眼筆　一幅

一渡唐天神影　近衛殿御筆　一幅

一天神御影　近衛殿御筆　一幅　上ニ御筆アレモワカラズ

一白玉　一顆

一馬玉　二顆

一能作生金玉大明神々躰　一顆

一瀧ノ玉　一顆

一獅子玉　一顆

一牛玉　二顆

一來迎佛作不知

一不動開山筆　一幅

一兩頭明王　一幅

一來迎佛　一幅

一瀟湘八景詩歌　持明院前權大納言基時卿御筆　一卷

一歌卷物大乘院宮御筆　一卷

一攝州摩尼山略記　一卷

一虚空藏　一幅

一觀世音探幽筆　一幅

一一字金輪尊影　一幅

一十六羅漢大掛物　三幅對　南都一條寺殿後足利新公方御筆

左右羅漢　覺慶筆

中尊釋迦　守信筆

一龍尾足利傳來
一唐ノ頭
一相口　一　無銘
一白鞘太刀　一振　大兼光作
一天國短刀　一口
一寶劍　一振　備中水田國重作
一薙刀　正國作
一守刀　長舟祐定作
一神君束帶御像　大猷院殿御筆　御緣起　堂上方四人書
　御白髮像
一龍尾傳來記
　抑此火除大蛇劍は長二尺五寸横五寸餘其形劍のことし往昔足利何某貞和年中に武者修行として諸國をめぐり給ひし時下野國日光山の麓において頻りに黑雲覆ひけれども足利何某恐れ給はず天國の寶劍を以て切取らせ給ふ所の大蛇の尾なり今において日光山の麓において尾切龍とてすむよしにて火除第一の寶物也
　此外さまぐ\なる佛繪數幅ありしがしるすにいとまなければこゝにもしらぬ　文化八辛未七月廿六日拜見
　虫干例年七月廿六日廿七日兩日也と聞しが定れる事なしとぞ
一開山覺海權僧正略傳
日向國產薩州ニ任ス、紀州伊都郡高野山金剛峰寺光基院ニ住持ニテ木食修行、武藏國江戸下向有

テ谷中善光寺ニ居住ス、人皇百十四代東山院御宇寶永六己丑年勅許宣旨有上卿德大寺大納言公全卿職事万里小路頭辨尙房蒙、五月三日ニ參內之御禮參、同月七日昇殿免サル口宣案文當寺有權僧正義高上人行年八十五歲、寶永七庚寅年中旬江戶湯島四丁目地ニ寺門建、則奉行本多彈正少弼忠晴、正二位內大臣右近衞大將征夷大將軍家宣公依テ御志願萬昌山圓滿寺成就ス則開基覺海權僧正

人皇百有十五代今上皇帝御宇ニ享保三戊年六月七日薨行年九十五歲、京都仁和寺御室御所院家武江湯島豐島郡萬昌山圓滿寺金剛幢院木食義高覺海權僧正

右略傳系圖下書之儘寫　　文寶亭

護國寺什寶

一山水立軸　文五峰畫

一羅漢立軸　秋月等觀畫

一室出生寺圖横幅大幅　彩色

一涅槃横幅大幅　正信畫　鳥獸ノ中ニ猫アリ

一隱元禪師像立軸自贊

一一枚起請横幅　增上寺方丈筆

一山水立軸裱褙清人　陳章侯畫

一鶴龜壽星三幅立軸　探雪筆
一桂
　石竹龍膽双幅立軸　輝正叔畫
　　　　　　　　　　臺表具
一草花蟲立軸　江白川畫
一朝鮮滄浪居士書横幅
　　壬戌菊秋トアリ
一白雨圖横幅　法印探幽作　淡墨妙
一菊横幅　主信筆
一和歌横幅　仙洞震筆
一鍾馗立軸　嚴有院殿御自筆畫
一壽老人鶴龜　立軸　右大臣丶丶筆
　常憲院殿御畫
一畫牛立軸二幅黑斑　內大臣丶丶筆
　　　　　　　赭斑
　常憲院殿御畫
一文珠
　普賢　立軸　双軸
一憲廟御筆
　孝心是佛心　內大臣丶丶
　孝養孝行無非佛行

一 元祿三年庚午十一月十八日從
台駕詣雜司谷觀音堂
妙麗端嚴面目眞高堂𢌞立彩楹新
祇今天下車同軌上壽祝
君如意輪　　弘文院林春常
庚午冬十一月十八日與林學士附
驥尾詣大聖護國敎寺學士賦一絕奉祝
台齡予亦忘固陋嗣其韵尾云爾
玉體放光旨爾眞慈山鐘谷應聲新
大君枉駕凌霜路福壽無疆如意輪
知足院權僧正隆光
林學士弘文院春常先生與筑波山主權
僧正隆光英師從　台駕一日躋攀我山
欵大悲尊德奉祝　君齡各賦一絕喜
而弗措不顧唔短卒爾和之
命駕神齡救世眞聖朝祝壽頌聲新
瑞雲常覆仙臺上護國千秋轉法輪
神齡山第二世法印賢廣
一隆光六十　牧野七十　某七十

護國寺僧正快意　元祿癸未十六年二月廿一日（鳩杖　藜杖）

一神山家光公　立軸

一悉地院憲廟　立軸

是ハ本堂ノ額ノ御下書ナルベシ

一不動（紺帋）千体　大師筆　立

一不動立　元祿六癸酉年辛未明日

（纜　獨鈷）　般若窟持明大沙門寶山湛海六十五歲畫　大和ノ伊駒山也

一白澤　常親　立

一櫻　けふこすは　あすは　天しん法親王　御歌畫　横

一觀音　窓庵

一大乘義章　賴瑜　折本

一達磨　無畵名

一慈童　光貞畫也

一草花　折本

一心經　大師

一理趣經切　同

一古鏡　蜀江

一香爐　壽星　十

一古硯　富士　西行　松梅

一古硯　雲　雲

一羅漢　立　古畵　可翁讃　絹

一元祿壬申六月四日遊護國教寺賦即景奉祝

大君

護國祝君聖代仁　法堂夏氣密雲勻

千年梅李本根固　今日風光綠樹新

大學頭林整宇

壬申夏六月四日與林學士遊神齡山

護國寺和即興韻

護國利民君子仁　神齡山上法雲勻

大悲潤物夏天雨　氣運應時執政新

知足院僧正隆光

榮春　隆光

一色紙二幅 立軸 桂昌院様御筆

もろこしにひかりをてらせ五地の寺
君かあゆみをよろつ世までこ

かけまくもかたじけなしや大悲にも
君がまことをうけざらめやは

一巻物一巻

観音にまうでゝ

此寺のあらんかぎりはちかひぬる
君をも守れ大慈大悲も

高き屋の松のめぐみにおのづから
五地の御法も長くてらさん

右二首者

桂昌院様御歌也庚午九月廿五日護國寺
観音堂へ御参詣被遊云々　下略

従四位下侍従兼備後守

源成貞

一色紙二幅 立軸 桂昌院様御筆

うしこらをかけてぞたのむなむ大ひくにのためこていのる若君

今ぞしるわが立杣ののりの庭うけ入との玉のうてなを

一色紙二幅立軸

憲廟親筆　たらちねのちとせのよはひ末高く
かはらぬやごにきますたのしさ

桂昌夫人御筆　萬代のこしにもあまる君がやごに
こも引つれてあそぶ老鶴

一黄檗僧書三幅　立軸

櫻花　年々請我賞櫻花茶熟香清意氣多
玉艶芬芳千萬古遼天鼻孔轉風騷
未年仲春　隱元書

悟其如來肯色玄沙　獨湛書

白桃　枝々盡放花靈雲一見心開
洛陽三月事繁華桃樹
瓊姿只合在瑤臺誰向江南

紅梅　處々栽雪滿山中招士隱泉流
梅下送香來　大眉書

一新古今集和歌所常光院堯憲法印御筆
飛鳥井雅章卿外題

一夕きり　本阿彌光悦筆
小堀遠州外題

一源氏物語　水無瀬親賢卿御筆
一小倉山莊色紙和歌百人一首　冷泉故爲綱卿筆
　了延極札
一江月和尚
一松花堂昭乘　兩筆

　是

　　後醍醐天皇廟

　彝地留蹤
　太上皇結緣佛法沒商量晴中明也正灯焰三百年來仰德光　十二世孫僧宗玩拜

　　奉和

　身にかへて民をめぐみしとのはの露にぞ殘る玉の光は

　　　　昭乘

一慈眼大師御眞筆
　山里は世のうきよりも住わびぬとの外なる峯の嵐に
一文覺上人筆
　年始御吉慶等は同事に候我文覺こ申事手打て笑人有之候月岸より相傳是尤候一傳別書記之又玉蓮
　一枝送持せ候倚寺願（額カ）の事今月相定候上可申候
　　　何月
一朝鮮僧松雲大師　名惟政　書
　海色連天色歌聲似笑聲荒城
　圍十室路々故鄕情

錦茄松雲書

右は慶長之初朝鮮御陣以後隣交斷絶いたし候故又々隣交取結び候樣にと權現樣より被仰候慶長五六年頃兩度日本へ參候よし

一定家卿筆

四番左兼直右武修　下畧

一宮內卿少筆

中〳〵にむかしの夢のまゝならで
おごろかれぬる事ぞくやしき

一聖廟筆　經文

一日野大納言光豐卿大短册

月よりも吹落てすゝし天津風
雨はれわたる夏山の陰
光豐

一蘇東坡書

寫竹
之意
不在

一瀟湘八景　探幽法眼筆　堂上方御贊

一長頭丸短册

長頭丸
みなひさのひるねのたねや

繁而　　　　　　　よはの月
在幽　一澤菴和尙短册
尤美　おもふこも戀こもよしやみちのくの
軾　　磐手のやまのいはてやみなむ
[子瞻]　[東坡居士]　　冥之

○鉤吻
オホゼリ　古名俗稱水邊ニ生シテ花葉トモニ芹ニ似テ大ナルユヘ名クル歟
鳳凰竹　花戸ノ雅名根ノ形龍骨木ニ似テ圓シ故ニ名ク
萬年竹　根ノ形節アリテ綠色ニシテ莖中空穴アリテ竹ニ似タリ故ニ名ク又花戸ノ稱
花ワサビ　花戸雅名形チ頗山葡菜ニ似テ圓シ切テ嗅ハ烈香ナルヿワサビノ如ク味辛シ
エンメイ竹　同上
芹葉鉤吻　本草啓蒙ニ金匱要畧ヲ引テ云ク鉤吻與芹菜相似誤食之殺人ト云云
常正按ズルニ、此草奥州二本松ノ澤中武州玉川邊ノ池澤又千束ノ池ノ深水中ニ尤多シ、冬ハ根ノミアリ形チ獸角ニ似テ綠色節アリ、圍リ三四寸長サ四五寸ヨリ一尺餘ニ及ビ、枝ヲ多ク分ツ、春ニ至テ葉ヲ生ス、形チ白芷ニ似テ莖ニ紫色ヲ帶ビ白粉アリ、夏ニ至テ莖直立シ三四尺ニ至テ花傘狀ヲナス、白

色ノ碎花アリ、又白芷或芹ノ輩ニ似リ、根葉ミナ切テ嗅ハ芹或芎藭ノ香ニ似テ烈ク少ク臭氣アリ、味辛シ、其舌ヲサスガ如キハ毒アルユヘナリ、石井盛時ノ話ニ、多摩郡和泉村泉龍寺ノ地內ニ涌泉アリ、下流多ノ田ヲ養フ、此池水ニハナワサビ多シ（此寺靈驗ノ子持地藏アリ）文化十二年江戸植木屋何某泉龍寺ノ地藏菩薩ニ詣テ此草ヲ見出シ採テ市中ニ賣ル、大ニ利ヲ得タリ、是ヨリ數度此所ニ行テ此草ヲ採テ弘シヨリ近國マデモ探シ求メタリト云云、又千束ノ池ノ水乾キオホゼリ水上ニ出ルヲ見テ多ク掘トリ、同十三年江戸市中ニ持出花ワサビト名ケ多ク賣ル、人ソノ形ノ奇ナルヲ見テコレヲ園ニ植ルモノアリ、松本愼思ノ話ニ、先年藍水先生奧州採藥ノトキ其地ニ一ツノ流水アリ、土人云ヒ傳フ、此水中ニ毒蛇アリ、故ニ此水ヲ口ニ入ルレバ必疾テ死ニ至ル、其下流ニテ大ニ食傷シテ苦ム、故ニ今ニ至リテハ鎌鍬ノ類ヲ洗フヿモセズ、常用ノ水ヲ遠ニモトメテ不自由ノ土地也ト云フ、藍水コノ事ヲ聞テアヤシミテソノ流水ノ邊ヘ行テ見ルニ、水ノ傍ラカノオホゼリ多ク其餘草深ク叢生シ人跡ナシ、先生本草ノ學ニ志深クシテ此地水ニ乏シキヿヲアハレミ、又此流水ノ不用ナルヲ哀ミテ、コノ地ニシバラク足ヲ止メ、土民數十人ヲヨビ集メ各鎌クマデノ類ヲ持タセ先生サシヅシテ水草ノ草ヲ悉クヌキサリ、終ニ清水トシ、シバラクアリテ先生自ラ此流水ヲクマセテ茶ヲセンジテコレヲ飮ムニ何ノサハリナシ、餘人モ又此茶ヲ呑メドモ嘗テ障ナケレバ、今ニ此水ヲ用ユルト云、又コノ頃ロ小野蕙畝ノ話ニ、麴町ノ市人ハナワサビヲ買テヲロシテ食ス、シバラクアリテ臟腑ヲ覆スガ如クオボヘシニ、終ニ苦痛ヲナシ言フヿアタハズシテ手ヲ握リツメテ死ス、明日コレヲ見ルニ皮膚ミナ紫色ニ變ズルト云云

文化丙子仲夏十日計府中ニテ屋代氏ニカリテ寫ス　杏花園

○櫻花帖題跋

植木八三郎繼峯京都在番より携へ歸し一帖

櫻花帖目錄

一外題　岩倉三位殿
一畫題　花山院大納言殿
一かな序　廣幡大納言殿
一かな跋　芝山權中納言殿
一眞字跋　林泉院六如上人
一かな序　閑田子伴蒿蹊
一眞字跋　皆川愿先生
一櫻花銘　畠中胴脉先生
一眞字跋　唐人　錢宇文撰
　　　　　同　陳國振書
一三十六品　三熊海棠思孝妹
一櫻花畫工　露香女
以上

一櫻花摸寫三十六品者京師三熊海棠本朝の櫻花のまことをゑがきはじめたり海堂はもと御室の家臣三熊藤八郎の二男にして、弱冠をのづから雅韻あり、仕官をいとひ生涯妻をも具せず、常に諸州を巡歷し諸畫に妙を盡し、また文學も通ずる也、海堂ひと日思ふに、我國櫻を以て諸花に冠たり、しかはあれど本邦古今の畫師櫻花を畫がきたれどもたゞ婦女の翫びのみにして其眞を得ざ

ることを歎き、又松岡玄達先生の櫻編を見るに甚だ多端にしてわかりがたきを深く考、凡四十年の春毎に京師はさらにして遠き國〳〵へまでもよく櫻花の正僞をあきらめ、彼は何々のみはへこれは何々の變花、傍ら晴雨寒温を以て花の狂ふことはやきこと遲きことをもよく〳〵かんがへ、歳々之を詳かにわかち、たゞ櫻畫の一すじに心をこめ都て三十六品を撰びて、櫻編の繁きを省き根本を正して世に名をしらるゝ者也、こゝにおいて世の人これを賞翫しこぞつてこれをもてはやす、其妹露香女其畫法を傳へつぎて櫻畫は兄の海堂にまされり、其露香女も寛政の末に死し、今其畫法を傳ふるものなし、おしむべし、はた露香存生三十六品を畫がきて世に全ふするものは紀州侯へ一帖奉り、幷に此帖こ二品より外に我國になし、又此櫻畫帖はたゞ人のもてあそび物ならず、みな正花を以てうつし得たれば春毎に櫻を愛する人の鏡とも見るべし

　海堂幷に露香の小傳は畸人傳續畸人傳に委く見へたり

書三熊露香畫櫻花三十六品帖

三熊氏。以其兄平素好描櫻花。因傳其法。亦臻巧妙。爲世傳賞。頃又畫櫻花三十六品。各細盡其形狀。以爲一帖。携以詣予。請作題辭。予嘉其以閨閤之質。而善職其棣蕚之美也。因爲書。

寛政丁巳季冬廿九日　皆川愿題

櫻品甚多。今擇其尤者三十六種寫生。以爲一帖。三熊氏女露香所製也。其兄思孝以畫櫻擅名。露香常侍側。遂學得其法。思孝沒後。世人視露香。猶其兄也。思孝無兒而有若妹。亦可以無憾焉。

六如杜多

三熊華顚子此花にすけるあまり畫に書おこりすてふふることを口をしことてさま〲心をつくし、其まことを寫をしえたり、されば人も又たぐひなきをめでゝきそひてこれをこふに、いかゞはせん年比な

やみてつひに泉に歸りぬるは時かもこゝに醍醐の山縣蕪亭ぬし、親しきあはひながら之を得ざるををしみて其いろとなる露香女をして此帖をうつさしむ、常にこのかみにとひきゝてやゝ趣をえたればさてさてしも端にことくはへんことをもとめ給へれば、たゞありのまに〱しるす、おのが辭の花なきはうつしゑの花にけおされてともみゆるされなんかし

洛南閑田廬蒿蹊書

櫻譜三十六品者兄三熊思孝圖也

丁巳春　霞香女臨寫

櫻譜三十六帖は故三熊思孝の圖にしてそのいろと露香女のうつせる也、このかみの筆の匂ひをとりつたへてよくそのをもむきをえたり、此畫にむかへば陽春の心地せらるゝのみにあらず、よきてふけともあつゝへすあすは雪とぞともかこたずいつも心のどかなれば津の國の難波のうらみなきものといふべし、されば名だかき人々の唐のやまとのことのはを加へてそうくわんかぎりなし、愚老にもことがきせよとある人のもとむるに辭すれどもゆるさゞれば、おもひいづるまゝをつくろはずして禿筆をはすることとしなり

前權中納言持豐

草云縉紳不事國文如此其文宜在蒿蹊下

櫻華藪　通齋書

雪とよみ雲と詠めしは櫻のほまれにして、世々に名たゝる山多しといへども今更述るにいとまあらず、爰に醍醐蕪亭といふ者あり、花を愛する事尋常にすぐれて咲を待散ををしむ、志四時あらむことを欲すれどもあめ地の氣候かぎりあれば力なくや侍らん、さいつ頃三熊思孝といふもの花を愛して四十の春を送りぬ、こゝに丹青をこまやかにして我邦に始て櫻の三十六品をわけ寫す、其いもうと成者又よ

く書法を傳ふ、蕪亭彼品々を書がゝしめ一帖とす、書中の妙艶思孝が遣力顯然として匂ふが如くゑめるがことしかゝる色香も人しらぬ谷の埋木と朽ん事本意なければあらかじめこゝにしるしぬ

うつしみる心の色のあさからぬ

花はちるとも香ににほふらし

ひつじの春　　亞三台源前秀

○天明七未年江戸御救金米

一此度飢饉にて天明七未五月江戸中町家御救米並御救金高

御救金　貳萬兩

御救米　貳萬俵

大豆　貳萬俵

一江戸中町數貳千七百七拾貳町

一家主貳拾萬八千五百餘人

一人數百貳拾八萬五千三百人

內　男五拾八萬七千八百餘人

　　女六拾九萬七千五百餘人

外ニ

一座頭三千八百四十餘人

一出家五萬三千四百三拾人

一諸神主三千五百八拾人

一山伏七千貳百三拾人
一壹萬四千五百餘人新吉原人數
　内八千貳百人男
　六千三百人女
外ニ
　貳千五百人遊女かむろ
〆百三拾六萬七千八百四拾四人
　○大田氏隨筆 覃云未レ詳ニ何人ニ中多ニ醫事ニ恐是太田徵元
　　　　　　　 又云此隨筆大田氏ニアラス望月三英作也
一衆方規矩は古道三の作也、本は名方數集千百二十方と號す、北山壽庵删補と云あり、南川道筑訂補と云あり
一板倉助次郎と云者あり、是は板倉九右衛門とて三の丸樣御用人務居申其二男にて才子にて候き徂來南郭に從學びて學者に成立たり、然共大酒にて人柄不宜候、西臺候の狗監にて三十人扶持被下候て儒者に召出され候所に仕損有之儀にて被召上改易に成候て右九右衛門跡實兒も御罰を蒙り家斷絶仕候助次郎板倉美仲とて講釋抔をして芝邊に居たりけるに夭死したりける、板（倉カ）家武田長春院の奥方里也
一十三經註疏にも惣目錄無之鳴島道筑心付惣目錄を仕立置たり、尤萬曆嘉靖汲古閣三通り惣目を一書として仕立て家藏するよし
一表御右筆に近藤源次郎と云人あり、蘆隱と號し老莊見識也けるよし○四流と云町人の隱居老莊者と稱して老子を講釋して歩行たる由
一二十一史畧 万曆板第一によし、嘉靖板はあしゝ、近明州の板宜候由是を湖本と云よし

一京都に正水と云能書あり、草書淵海と云を著し志津摩流と申候由

一御醫者に大膳亮好庵と云ありて先祖寛永の比歟古今醫統醫學入門萬病回春本草綱目右を自筆にて寫され候由大部なる名もなさ書を寫されたるも無益の樣なれども古人は道に志の厚き事根氣の强き事此にて相知る也下器

一長崎天文西川如軒と云ふ學者ありける由、怪異辨斷華異通商考と云書を著せり、其子忠次郎弟か姪か要人とて兩人江戶へ下り忠次郎は淺草大火に井の中へ入命を助かりたる事など有り、有廟天學を御好被成候間被召出天文役に被仰付而柳原地を被下司天臺を立相務候也天經或問をも板に出せり惇廟の時に成土御門と隙ありて不首尾に成司天臺も取上られ病死跡除滅せり、弟要一旦養子に成たるが先達て死せり、一體は豪傑之者也

　覃按明和安永ノ比目白臺御徒ニ西川龍之進ト云人あり忠次郎ノ親類ナリト云

一道春の比士岐道圓と云儒者ありける博識の由これは元來書物屋の由

一正德の間にも經來り彌兵衞と云本屋剃髮し尾田玄古と名づけて江戶へ下れり馬場信武と云て軍談ものを著たるも此人の由

一木下順庵門弟稻生若水は加州にて高祿を取京に居たるよし、精力を本草に盡たる由種々著書もあり、扨又庶物類纂と云書千卷編集して加州に納めたるよし、千卷と云は難成事なれども扨學者のためにならぬ大造なるものにて無用の長物と可云かな、有廟の時承及候は類纂御用に上可申候て御寫被仰付とやらん獻上とやらん實五百卷餘出來て三四百卷未殘闕のよし、丹羽正伯に被仰付て拵足被成候よし數年御用とて引込居申候き實說とは存候、後には千卷に足申候由承及候上は御素人之儀ゆへ年恐其害之由にて候に正伯事若水門弟にて拵足し申候と御請申上候心底不屆成事にて世上之學者を恐

ず耻さる儀不埒之至未熟之學者と我等は見かぎり申候、本道を申候ならば若水は豪傑の士殘欠なること實體なれ門弟の私共手際に中々書足し可仕ものに無御座候と遂て御辭退申上候て上にも隨分御聞請可被遊候儀未熟の取さがしと被存候いか樣山師の樣成所有之學者にて本の學文には無之本草の書はよく合點も致候由元丈は學問能き日門（同學）にて一生正伯をば承知不致申候と申候實にもと被存候

一當時顧齋流是計は唐めきたる手也、是は高元岱（玄獻）俗名深見親右衛門とて寶永の比被召出長崎出の人也、獨立の弟子にて獨立とも云也、顧齋は元岱姉子なるに天狗にさらはれたる事ありて二男姉子に成今の新兵衛也、顧齋は一生浪人にて新兵衛殿に養はれ手跡にて暮し居たり、大酒飲にて痔疾ありて平日病氣度々をこりて煩候き是はちと唐樣めきたる也下畧

一水戸樣に志摩（吉津摩ナルベシ）一郎左衛門と云書手養雪と云三國筆海堂と□たり、是も朝鮮流のよしあまり好手とも不被存候結句史館の淺香覺兵衛と云儒者の手は唐に近き也

一江戸に赤井明啓得水と云唐樣あり出來さぬ手也

一人見友元林道春の門弟にて名高き儒者上る被召出官儒となり世祿せり、元祖の友元竹洞先生と云、唐樣の能書にて候き著書はなし此家に董其昌がかきたる所の大平御覽あり舍弟元德官醫になり本朝食鑑を著す、食物之善開闕よき書也き

一昔は大名衆に數多學文好き有たる由脇坂殿第一之由死去後家來不埒にて書物拂に出候由八雲軒と云朱印押有之

一養安院藏書の名あり先祖浮田宰相朝鮮より書物を夥敷歸陣の節船數艘にのせ持歸られて養安院へ遣したる由、今より二代前の雲夢先生は徂來の門人にて學醫也富書の沙汰は此以前よりの事也

一江戸傳馬町木綿屋隱居池永道雲と云もの一生精力を印石に盡したり、萬象一刀と云書印譜を著したり

一有廟の時享保中東醫寶鑑の板行御用向を寄合の細川桃庵に校合訓點等被仰付たる也、其節京都より隨一の草字書西村立敬と云を御用にて召下されたる由、後に西殿壽軒と改名金池院門前に居宅せり、其比須原屋新兵衛と云もの初て唐詩選の小本を板下に書せたる也、元禎と云草字名人あり其弟子の由直鳴し也、堀川の書共其外立敬多くは認るよし物語也

　覃云堀口氏ノ云ヘル櫟壽軒ノ𠂉ナルベシ櫟ト云姓ハカリニ作リタルナラン

一堀大和守殿に山谷手跡之横掛物被掛御自慢にて覽候所世上に是迄有合たる山谷手跡とは違ひ是又懷素之流の事也

一道春の作板に出た秘書之由我等藏書中に硯北漫抄と云有、梅村載筆と云も合卷にて有之由珍書之由

一望火樓と云は今の火の見櫓の事野間三竹之望海錄か又は北溪含毫かの內に出たり、宜室志を引て日本の今火消屋敷の事詳に出たり、宣室志は百川學海の中に出たり後生の人可考事也

一先御代奥御儒者中村新藏は元御醫者中村元春中候由學文好にて室新助門弟に成儒者に成度願候所御先々代には願叶不申先御代御聞濟願之通被仰付候由講習餘筆讀詩管見と云書著したるなり云云

一江戸小田原町今は肴屋共なり、佃屋半右衛門子儒者に成青木文藏となり、小鍛冶市兵衛倅高野才助蘭亭と云詩人に成、東屋藤十郎は河東と云一節の半太夫節大夫に成、三人共に天下に名を得たり、文藏は京都へ登り堀川へ諸生に成候て東涯門人と成江戸へ下りて數年我等出合候所に大岡越前守殿狗監被致蓬摩竿を植させて其後近鄉古文書を尋候事被仰付其後紅葉山同心に被召出夫より御儒者評定所役に立身したる人也、古今に勝たる豪傑人也、經濟纂要と云書著して献ず、物產を甚好みたる也

蘭亭才助時分には文藏又は不怨不尤など云人に出合たりけるに野呂世話にて南郭へ引付て夫より詩人と成ける、徂來被申候も才助も儒者にはなりがたし詩人には成べし、尤十七の時より目見へずしたりける後につぶれ切たる也

一堀川の門人戶田山城守殿儒者に長澤順平と言老儒有ける、兩人の子を持たるに六歲にて兩人共目を失ひ盲兒と成ける、學問器量にて好きにて好き學者と成立たり、兄不怨齋弟は不尤所と名附たり、同門故に叔安心安く我等も出合たり、不尤所王道內篇と云書を著したり君侯に國替に從て肥前之國へ移て參候不怨は松平出羽守殿儒者に成江戶に居候き其後間もなく死せり

一松平美濃守殿御出頭全盛の時に京都より柏木藤之丞服部幸八とて兩人歌學者を呼下し被召出候服部は母方古之連歌師長嘯之末孫之由にて兩人共に納戶役相勤居申候由其內に惣右衞門の勸めによりて儒學の心掛有之儒者に成立たり、後に隱居して保山と被申候其節に數奇在之無理にいとまを乞浪人と成小右衞門と改名せり、不首尾故屋敷出入はせぬ也、池端に居たり、依之芙蕖館と齋號をせり、其後に芝筋へ移居して僧徒其外を敎授せり、後に切通邊へ移又赤羽根橋邊へ移りて此所にて死せり下略

以上

增訂 一話一言卷三十六終

○其角書簡

歳尾之爲御壽如例年遠來之處酒料壹封蕗鹽漬一桶被贈下御厚志之程幾久歎致受納候御序御家内はじめ御社中へもよろしく御傳心下さるべく候しかれば去十四日本所於都文公年忘之一興御催し有之嵐雪杉風我等も一席にて折から雪面白降出し風情手にとるがごとく庭中の松は雪をいただき雲間の月は暗を照らし風興今は難捨して夜たゝ更行事ももはや丑みつ頃になり行犬さへ吼ずうちしづまり文臺料紙も押かた寄四五人集りて蒲圖をかつき夢のうき世といふ間もあらせずはげしく門をたゝくもの兩人互鬪に案内し我等は淺野家の浪人堀部彌兵衛大高源吾にて今夕隣家吉良上野之介やしきに押よせ亡君年來の遺恨を果さんとて大石内藏之助始都合四十七人門前に相イみ唯今吉良氏を討亡し候處近隣の御好み武士の情萬一御加勢も候はゞ末代之御不覺と存候願くは門戸を嚴敷御防火之亢御用心下され候はゞ忝存といひも果さずたち出るその勢の神妙たることいふべくもあらず今は俳友もこれまでなりとて其角幸こゝにあり生涯の名殘をみんとて門前にはしり出ればおの〳〵吉良家にしのびいり候ほどに

泉州堺某所持其角眞筆寫

倚々文童御土産偏願入申候以上

我雪とおもへばかろし笠の上

と高〳〵に一聲呼はり門戸を閉して内を守り塀越に提灯燈なりて始終を窺ふ事そのあわれさ骨身に

しみ入女人の叫び童子の泣聲風飄々こ吹きそふて曉天にいたりては本快已に達したりこて大石主稅大高源吾物□□源吾謝儀を伸たるここ武士の譽こいふべきなり

日の恩やたちまち碎く厚氷

こ申捨たる源吾が精神いまだ眼前に忘れがたし貴公年來之熟魂故具に認め進じ申候早春まで彼是御指操御出府候はゞ彼落着之承屆無餘義伏竊に及申候はゞ竊に追善も相營可申候先は餘日も無之書餘期貴面之時候恐々謹言

十二月廿日　其角

文鱗様

月雪の中や命の置ごころ

寒菊や古風の殘る硯箱

○長崎實錄大成抄

自叙

長崎一邑は西海邊僻の地にして昔年數家の樵魚等自から生業を營む而已にて諸民來集り驛路より都國に往來する等の事無之元龜元年西洋の商船初て當湊に令着交易を通ぜん事を願ひ求む然るに彼徒內心に陰謀を巧み商賣に事よせ切支丹の邪敎を勸ん事を欲し市中に在留之間人を誘ふに因果報應の說を以てし或は數奇の寶物を與へて愚民を惑亂せしむ爰に於て無知之輩彼敎に隨ひ靡き遂に此地の神社佛寺

を破却し蠻國の祀堂を造立し年月を經るに隨ひ惡行益熾なり天正十五年關白秀吉公此事を聞し召され甚以其非義なる事を怒り給ひ則其頭人を本國に追返され切支丹の邪教を禁止せられ長崎を公料に召上られ奉行所を立て令堅守らる但爲商賣往來するものは免置候雖然彼種々の巧計を盡す故愚民等甚惡執に染着信伏する者一圓絶せず數年の後南海山陽兩道及び五畿內迄に延蔓り益邪宗門を弘めし故大勢の捕手を出され數百人を捜捕へて悉く御仕置に行はる慶長十九年に至り彼徒が建る所の祀堂を悉く打碎て燒捨にせられ彌邪教を嚴禁といへども猶また長さきに隱れ居て教を唱る者斷絶せず寛永十五年に至り島原一揆の邪黨誅戮の事有此時にをいて嚴しく被禁絶長崎在留の蠻人ども不殘被追返以後決而不令渡海樣に被仰付之同十八年に至り以後再度災を生ん事難計之旨爲上意黑田鍋島兩家に被仰付湊內に域營を搆へ砲臺を築き軍船火器等を列置不意の警に備へる又唐船阿蘭陀船長崎湊に限り交易を遂しめ他所にいたる事を免れず依之諸國の商人この地に來り集り事務日々に廣く人衆日々に繁く萬事隆興して則通市豐饒の場所となり既に如斯成時は豈記錄なかるべけんや當地元龜元年を開基として今年に至て百八十餘年に及び其間數通の記有之といへども簡略にして備らず缺□にして精からず或は人の聞知たる事を重出し人の知ざる事を窮め盡す事なし何ぞ全記と稱せんや余公務の暇に博く求め徧く問ひ諸說を考合せ古老の傳話村夫野人の談話といふ共其證跡ある事は是をとめ置繁きを削り略せるを補ひ務て正實明細なる事を要し勞思多端にして草稿を改替る事も數度に及び年月を經る事も數年にして猶いまだ全備する事を得ず但十分にして二ツを缺其間余が力の及がたき事あり每に念ふに公儀の御威光を藉るに非ざれば明白する事有之まじ如何して何事を遂げんやと年來心苦を病めり爰に去る寶曆四年秋菅沼公御奉行たりし時右の草稿を一覽に備る處辱く御賞美を蒙る其詞に曰凡一郡一縣に記錄なき事有べからず況や長崎は唐國外國渡りの津にして國家の大事に係る事あり豈載記無るべけんや今に至る迄全

録無之は誠に闕文なり今其方此記を編輯ありしは是義擧なりと謂つべしと其篤志を稱せられ其功の全畢ざる事本意なしとて御役所御文庫の圖籍を披閲する事を許され又諸社寺院其外諸役所舊等に命ぜられ倶に數通の秘記を出して參考を令助らる爰において諸記を究合せ舊說の誤を質明し此時大に集成して愚が三拾年來の本懐を遂る事を得たり幸是より大なるはなし其奇怪の話說信用なりがたきものは悉く捨て取らず其證跡ある實事を撰み部を分つ事十二卷又百八十餘年の年表を編し其年中に有し事の名目を擧げ其詳なるは何卷の内に有之よしを記し其事を繰出し易からしむるもの四卷都合十六卷長崎實錄大成と稱す其文の卑に拘らず事實の詳明なるを要するのみ此以後同志の士若逐年の事務を續編するものあらば此書も泯ずして余が志も永年に及んと云爾

維時

寶曆十年歲次庚辰仲秋望前二日　　本邑晩生田邊茂啓謹撰

長崎實錄大成惣目錄

第八卷　阿蘭陀方來歷之部
第九卷　阿蘭陀船入津並雜事之部
第十卷　唐船方來歷之部
第十一卷　唐船入津並雜事之部
第十二卷　從日本異國渡海之部
異國船並異國人來着之部
從唐國日本人送來之部
年表擧要
第十三卷　元龜元庚午年起
元和九癸亥年止合五拾四年
第十四卷　寛永元甲子年起
天和三癸亥年止合六十年
第十五卷　貞享元甲子年起
寛保三癸亥年止合六十年
第十六卷　延享元甲子年起
長崎建始御料所被仰付之部
長崎開基之事
一西海道九州肥前國彼杵郡長崎ハ元之名ハ深江浦ト云リ其地極西ノ邊僻ニテ往昔世ニ知ル人稀ナル故古代ノ事實分明ニ傳來無之或書ニ此地古代瓊杵田(ニギタ)津深澤江ト云シ由書載セリ一説ニ此處元ノ名ハ玉ノ浦ト云シ由當時渡海ノ唐人長崎ヲ瓊浦ト稱セリ于玆年來ノ舊記古老ノ傳語等ヲ徧ク考ヘ合スルニ古

昔長崎小太郎戸町藤次郎千綿太郎時津四郎浦上小太夫是等ノ武士兵亂ヲ避テ此邊境ニ流落シ縛民等ヲ從懐ケ自カラ其所ノ領主地頭ノ如ク成來リ此地ノ農夫漁人等他方ニテ長崎者ト云習シ遂ニ此所ノ名ト成シトナリ此小太郎十代ノ孫左馬介實子無之有馬左衛門佐ノ三男ヲ養子トナシ家督ヲ嗣シメ左馬介ト名付其子甚左衛門十二代ノ孫也其妻ハ大村民部少輔純忠ノ息女ナル由然ルニ天文年中如何ナル故ニヤ甚左衛門將軍義輝公ノ命ニ背ク事有テ長崎ヲ立退キ筑後ニ流落セシ由其時長崎ノ地ヲ大村家ニ給ルト云

一説ニ甚左衛門緣者タルヲ以テ大村ニ退去セシトモ云リ

一舊說ニ文治年中右大將頼朝卿六十六ヶ國ノ惣追補使ニ補セラレ諸國ニ守護ヲ立テ庄園ニ地頭ヲ置ルヽ時ニ當テ家人長崎小太郎ニ此地ヲ被給ト也其後北條家足利家興廢數百年ノ間諸國大ニ亂ル九州ニハ菊池少貳大友島津ノ輩各武威ヲ競テ兵革止事無之此トキ小家ハ從二大家一弱者ハ强者ニ困メラルト云ヘトモ長崎氏遂ニ他ノ幕下ニ屬セズ甚左衛門馬場村ニ居屋鋪ヲ建（今時庄屋ノ居宅其屋敷ノ跡也ト云）春德寺山上ニ域郭ヲ構ヘ家人等ハ馬場村中川村片淵村ニ扶持シ置ト也然ルニ近方ニ深堀ト云在所（長崎ヨリ南方三里）領主ヲ茂宅ト云高濱ト云在所（長崎ヨリ南方六里）領主三浦ノ末葉トテ互ニ數百人ヲ催シテ合戰數度ニ及ブト云トモ遂ニ勝負ヲ決セズ且又文祿元年島原町ニ一ノ堀豐後町ニ二ノ堀勝山町ニ三ノ堀ヲ修築ス是ヲ三ノ尾ノ要害也ト云云　略

一元龜元年庚午長崎湊ニ南蠻船始テ着船シ商賣ヲ遂テ向後長崎ヲ渡リノ津ニ定メ度領主大村理專ニ願シ故翌年三月家來友永對馬ヲ長崎ニ遣シ地割ヲ福島原町大村町外浦町平戸町文知町横瀨浦町六町建ツ其後博多町櫻島町今町五島町內下町出來シ二十餘年ヲ經テ文祿ノ初ニ至リ二十三町出來ス町々頭人ニハ高木勘左衛門後藤惣太郎高島四郎兵衛高木新七町田宗賀白倉如菴吉岡九兵衛馬場甚兵衛須川

上水山本庄左衛門等也此内高木高島後藤町田四人町年寄ト成ル　略

一逐年諸方ヨリ來リ集テ住居ヲ願フ者多ク成シ故慶長二年以來田畠ノ地ニ町割有之元和ノ初ニ至リ四十町出來シ定免ノ銀ヲ上納セシム

一天正十五丁亥年秀吉公島津爲征伐九州ニ發向有之凱陣ノ時筑前博多ニ暫ク御逗留有之其比長崎ノ頭人共博多ニ參上シ御目見ヲ願フ由然ルニ於彼地御老中ニ無禮ヲ成セシ故如何ナル者ゾト御僉議有之處彼者共ハ數年長崎ノ地ニ南蠻船ヲ相付ケ切支丹ノ邪法ヲ信用シ神社佛寺ヲ破却シ所々取拂テモ其心儀ニ計フノ旨御聞ニ達シ甚以不法至極也トテ右ノ頭人𪜈即刻追立ラレ伴天連共ハ早々可令歸國旨長崎表ニ藤堂佐渡守ヲ差遣サレ御條目ヲ以テ急被仰渡之

定

一日本者神國たる處に切支丹國より邪法を授け候儀甚以不可然事

一其國郡之者を近付門徒となし神社佛閣を爲打破前代未聞にて國郡在所知行等給人に被下候義は當時之事に候天下之御法度相守諸事可得其意候處下々として猥成儀曲事に候事

一伴天連其知慧之法を以て心ざし檀那を持候半と被思召候處如右日域之佛法を打破候事曲事に候條伴天連之儀日本之地には被差置間敷候間今日より廿日之間に用意仕可歸國候其內下に伴天連に不謂儀申懸る者あらば可爲曲事候事

一黑船之儀商賣之事に候條格別之事年月を經諸事賣買可仕事

一自今以後佛法之妨を不成輩は商人之儀は不及申何にても切支丹國より往返不苦候條可得其意事

天正十五年

一同十六戊子年寺澤志摩守藤堂佐渡守兩人被差越長崎御料知ニ被仰付之旨重テ御條目ヲ以被仰出爲御

代官鍋島飛驒守ニ長崎御預ケ被置之
唐船入津並雜事之部第十一巻
寛永十三丙子年
一當年ヨリ唐船不殘長崎湊ニ令着船一切他方ニ往來スルヿヲ禁ゼラル
寛永十六己卯年
一唐僧普定渡海崇福寺在住其後歸唐
正保元甲申年
一今年明朝亡テ清朝ニ一統シ世祖皇帝即位有之改元順治ト稱ス
一林友官黄五官周辰官三人邪宗門爲御僉儀江府ニ被召其後長崎ニテ切支丹目明（メアカシ）被仰付〔第七巻ニ見ヘタリ〕
正保二乙酉年
一唐僧逸然渡海興福寺第三代ノ住持トナル
慶安元戊子年　二拾艘入津
一唐僧百拙渡海崇福寺第二代ノ住持トナル同時淨蓮覺聞渡海寺ニ（寺號脱カ）在住シ其後歸唐
慶安二己丑年　五拾九艘入津〔以下入津略ス〕
一唐僧薀謙渡海福濟寺興開山トナル
慶安四辛卯年
一唐僧道者渡海崇福寺第三代住持ト成其後歸唐ス
承應二癸巳年

一唐僧澄一渡海以後興福寺中興二代住持トナル

承應三甲午年

一唐僧隱元和尚渡海興福寺ニ在住有之隨從之僧廿人渡來リ内十人ハ始終隱元ニ陪侍セリ〔第五巻ニ見ヘタリ〕

覃按末次氏舊記承應二癸巳年七月四日隱元禪師安海船ヨリ來於長崎宿万屋町糸屋七郎右衛門所夫ヨリ興福寺へ被參候

明暦元乙未年

一今年隱元和尚城州宇治ノ北ニ黄檗山万福寺開創有テ初祖ト成但去年隨侍ノ僧貳十人ノ内十人今年歸唐ス

一唐僧木庵渡海福濟寺ニ在住ス同ク慈岳隨侍シ以後同寺重興二代ノ住持トナル

明暦三丁酉年

一唐僧悅山渡海福濟寺ニ在住ス

一同即非渡海崇福寺中興開町ト成ル

万治三庚子年

一福濟寺在住之木菴攝州普門寺ニ入翌年黄檗山第二代ノ繼席トナル

一唐僧曇瑞渡海後改千獃崇福寺中興二代ノ住持ト成

寛文元辛丑年

一唐僧高泉渡海直ニ黄檗山ニ到リ第五代ノ繼席トナル

寛文二壬寅年

一今年清朝第二代聖祖皇帝即位改元康熙ト稱ス
寛文四甲辰年
一即非和尚豐前小倉城主小笠原氏依招待彼地ニ廣壽山福聚寺創建有之主法四年ノ後長崎ニ歸住ス
寛文六丙午年
一是迄唐人市中旅宿ニ在留セシ處今年ヨリ惣町中ニ順番ヲ定テ宿町附町ヲ勤シム
寛文十庚戌年
一隱元隨侍ノ獨知名ヲ慧林ト改今年黄檗山第三代繼席トナル
寛文十二壬子年
一魏九官之琰其子高同豐僕喜四人渡海シ依願長崎住尤御免日本人ノ形ニ成ル子鉅鹿清左衛門同清兵衛
僕魏五左衛門ト成ル
延寶元癸丑年
一唐僧東瀾渡海以後福濟寺第三代住持ト成ル
延寶二甲寅年
一唐僧玉岡渡海以後崇福寺ニ看坊ス
一同雪堂渡海以後同寺在住以後依招請伊豫松山ニ行
延寶五丁巳年
一今年黄檗山爲末寺當表ニ萬壽山聚福寺建開基鐵心住持ス
一唐僧心越渡海興福寺在住以後依招請水戸ニ行
一同慧雲渡海同寺在住以後依招請伊豫ニ行

天和元辛酉年　九艘入津
一近年米穀不作殊ニ今年唐船入津甚少ク地下諸出銀闕減シ市中以ノ外飢饉ニ及ヘリ仍テ正月中旬ヨリ
　福濟寺慈岳和尚施粥有之
一九月下旬ヨリ崇福寺千獃和尚施粥有之
天和二壬戌年　貳拾六艘入津
一去秋ヨリ崇福寺施粥有之年ヲ越レ𪜈猶々飢饉甚シ仍而當二月米四石程ニテ凡三千人ニ與ル程ノ粥ヲ
　炊ク大釜壹ツ鑄サスル釜ノ高サ六尺五寸程徑五尺五寸重目千九百六十五斤釜ノ縁廻リニ聖壽山崇福
　禪寺施粥巨鍋大和二年壬戌仲春望後日ノ字有之則當寺遺物也
貞享二乙丑年　七十三艘入津外ニ積戻拾二艘
一八月朔日ヨリ唐船荷物入土藏ニ公儀ヨリ封印始ル
一小川町宿ノ唐船ヨリ寰有詮ト云書物持渡ル被遂吟味之處書中ニ天主耶蘇教御制禁ノ文有之ニ付書物
　ハ燒捨ラレ一船ノ唐人禁足ニテ積戻シ被仰付
貞享三丙寅年　八拾四艘入津外ニ拾八艘積戻シ
一唐僧悦峯渡海以後興福寺第三代住持トナル
貞享四丁卯年　百拾五艘入津外ニ廿二艘積戻シ
元祿元戊辰年　百拾七艘入津外ニ七十七艘積戻シ
一當年九月新ニ唐人屋鋪造營被仰付〔第十巻ニ見ヘタリ〕
元祿二己巳年
一閏正月唐人屋鋪成就ニ付八百屋町宿ノ唐人館內ニ入初ル

元祿六癸酉年
一唐僧梅山渡船改獨文以後福濟寺第五代住寺トナル
一同子嚴渡海改雷音以後興福寺第四代住寺トナル
一同靈源渡海崇福寺在住ス
一同大衡渡海崇福寺第三代住持トナル
一同超嵒渡海大浦林氏茶屋ニ在留シ同年歸唐ス
元祿七甲戌年
一唐僧喝浪渡海以後福濟寺第四代住持トナル
元祿八乙亥年
一崇福寺千獃和尙黃蘗山第六代ノ繼席トナル
元祿十五壬午年
一去ル卯年ヨリ今年迄新地土藏成就ス七月十七日八百屋町本下町宿ノ唐船荷物初テ此地土藏ニ入
一七月咬𠺕吧船ヨリ廿祖ト云女唐人連レ來此女福州ニ渡度キ由ニテ滯船中館內ニ住シ本船歸帆ノ節連歸ル
寶永二乙酉年
一木菴隨從ノ悅山和尙黃蘗山第七代ノ繼席トナル
寶永四丁亥年
一興福寺悅峯和尙黃蘗山第八代ノ繼席トナル
寶永六己丑年

一唐僧列光渡海崇福寺第四代ノ住持トナル
一同義勝渡海同寺第五代ノ住持トナル
寶永七庚寅年
一唐僧全嚴渡海以後福濟寺第六代ノ住持ト成ル
正德元辛卯年
一唐僧旭如渡海以後興福寺第五代ノ住持ト成ル
正德四甲午年　五拾一艘入津〔外ニ平戶領破船一艘〕
一御老中久世大和守漢文ノ御令狀被差下其趣近年唐船定路之外ニ乘通リ於諸所拔賣致不法ノ働ヲ成ス者有之ニ付海邊ノ國々備ヲ建置若以後亞行者有之ハ急度可召捕旨以來堅ク御國法ヲ可相守旨御書載有之此後歸帆ノ唐船ニ右ノ御令狀一通ツヽ相渡サル
正德五乙未年　七艘入津外ニ無牌ノ船十二艘積戾
一二月上使仙石丹波守御目付石河三右衛門當表ニ發向アリ向後唐船方商賣御新例ニ被改定信牌御法相始リ一ケ年船數三拾艘ニ被相定御約定之趣諸船主領掌之上信牌一枚ツヽ受用持歸ル
享保元丙申年　七艘入津外ニ無牌船十九艘積戾
一此砌在唐ノ船主共申合セ去年信牌ヲ領受ノ者共日本ノ年號ヲ用ヒ彼方命令ニ隨ヒ叛逆同前ノ由訴書ヲ官府ニ差出セシ故節縣官ヨリ布政司按察使總督撫院ノ上官ニ相達シ遂ニ朝廷ニ奏問アリシ故容易ニ裁定難相成今年モ同船入津無之奥船ハヨク入津セリ
一當四月積戾ノ船汝謙船諸處ニ漂流シ七月薩摩領ニテ破船シ當湊ニ送リ來被遂御僉議處胡亂ナル仕形ニ付唐人屋鋪札場ニ一船ノ唐人三十九人籠置ル

一當表在舘ノ船主共唐國ノ取沙汰ヲ聞此後信牌ヲ領スルヿ如何有ベキヤト疑念區々成シ處郭享統ト云船主壹人當御役所ニ直訴書ヲ差出シ諸船主信牌ヲ領シ難キニ於テハ我等壹人ニ何十枚ニテモ與ヘ給ルベシト我等手前ヨリ何艘ニテモ船ヲ仕立可令渡海万一於唐國此事咎ヲ請ケ一命ヲ終ル𪜈時運ト存ジ毛頭遺念無之旨一心ヲ定テ訴出シカバ諸船主共承屆此義氣ニ勵マサレ皆々信牌ヲ領受スル事トナレリ

一崇福寺無源和尚黄檗山第九代ノ繼席トナル

一在津ノ唐人共依願新加信牌拾枚與ヘラル

一去年ヨリ籠置レシ劉汝謙一船ノ唐人共船諸主依願當正月歸帆ノ船ニヨリ連レ歸ル

一八月七日陳祖觀船一艘入津シ於唐國去々年以來取上置レシ信牌上官ノ裁判相濟當五月不殘本主ニ被差返近日追々可令入津旨注進則當八月中旬ヨリ同十二月迄四十三艘入津セリ

一興福寺旭如和尚黄檗山第十代ノ繼席トナル

享保四己亥年

一三月唐醫呉載南海來ル福濟寺ニ在留同六月病死

一六月何定扶船ヨリ唐僧道本渡海崇福寺第六代ノ住持トナル 下畧

一從江府去ル酉年以來新加牌增與ヘラレシ處明年ヨリ最前ノ定數三拾枚ツヽ可相與旨仰付ラル

一是迄商賣高四ツ實積リノ處向後新辟半減積ニ相定ラル

享保五庚子年

一二月丘戀觀入津ス唐國ニテ信牌ヲ奪取レシ由訴出テ重キ可被遂御吟味旨積戾被仰付

一同月二番伊孚九艘ヨリ御誂ノ唐國牡馬二疋牽渡ル但夜ニ入本船ヨリ馬ヲ卸ス則御用ニ差上ラル

一今度唐人屋鋪境內ニ新獄屋ヲ立ラル小倉ヨリ送來シ唐人三人入牢仰付ラル
一福濟寺獨文和尚黃檗山第十一代ノ繼席トナル
享保六辛丑年
一六月陳振先渡來近郷山野ニ出テ藥草見分ス
一七月廿一日番船ヨリ唐醫朱來章渡來同九月彭城藤次右衞門宅ニ令在留ラル
一唐僧杲堂渡海興福住第六代ノ住持トナル
一今年四月臺灣ニテ朱一貴大勢ヲ相催シ謀判ヲ起シ數十日合戰ニ及ビ六月征伐有之其黨類ヲ生捕リ八月北京ニ相渡サレ重キ刑罰ニ處セラルヽノ旨諸船風說有之
享保七壬寅年
一唐僧伯珣渡海以後崇福寺第七代ノ住持トナル同仲瑛同時渡海同寺ニ在住ス
一興福寺杲堂和尙黃檗山第十二代ノ繼席トナル
一唐僧大鵬渡海以後福濟寺第七代ノ住持トナル
一今年十一月十三日康熙帝崩御御當年六十九歲在位六十一年第四王子雍親王胤禛當年四十三歲讓位ノ遺詔有之來卯年正月改元有之由入津ノ諸船風說アリ
享保八癸卯年
一當年大淸雍正元年
享保九甲辰年
一郭亨統信牌御法ノ初年義志有之其上御用ノ唐馬牽渡シ御褒美トシテ一生限恩加信牌相與ヘラル
享保十乙巳年

一二月五日六船番ヨリ朱佩章朱子章朱來章兄弟三人渡海ス官梅三郎宅ニ在留セシメラル
一六月十八日拾四番船ヨリ唐船醫周岐來渡海ス柳屋次右衛門宅ニ令在留ラル
一小倉ヨリ送來シ入牢ノ唐人三人依願歸帆ス
柬埔寨國王六佛嬌花信牌願之書翰一通並本國出產ノ品廿種進貢ス其趣昔年ハ貴國ヘ商賣船數多差越ノ處近年國務繁ク中絕ニ及ベリ仍テ三年前ヨリ貢船ヲ造リ今年家臣偓雅帶𠫤文得理ヲ初柬捕塞人三人瓜哇人六人唐人五拾六人乘組渡海ス則江府言上有之本國信牌一枚與ヘラレ出產ノ貢物ハ御受用無之
一十二月九日四拾一番船ヨリ儒士沈燮菴渡來
享保十一丙午年
一十月九日二拾六番船ヨリ唐醫趙淞陽渡海ス阿間八平次宅ニ令在留ラル
一在留ノ朱佩章唐國射騎ノ者可連渡旨前年ヨリ御請合申上信牌被下置ノ處當年三拾三番船右ノ牌ニテ入津シ射騎ノ者ハ渡船ヨリ渡來筈ノ由當年中ヨリ翌未六月迄不渡來故一船積戾被仰付
享保十二丁未年
一六月廿一日唐國射騎陳采若沈大成馬醫劉經光渡來
一七月廿六日柬捕塞本國ヨリ貢物一艘入津ス但仰付
一唐僧竺庵渡海興福寺第七代ノ住持トナル
一十二月二十八日番郭享統船ヨリ御用ノ唐牡馬一疋牝馬二疋牽渡ル但夜ニ入本船ヨリ馬ヲ卸ス則御用ニ成ル
享保十三戊申年　貳拾貳艘入津

一六月十三日鄭大威廣南仕出ノ船一艘入津シ象二疋牽渡ル牡象七歳ニナリ牝象五歳ニナル由南京造ノ大船ニテ象使ヒノ廣南人二人相添入津ス同十九日右ノ船ヲ大波戸ニ引付材木ヲ並ヘ陸路ニ作リ續テ象ヲ本船ヨリ卸シ唐人屋鋪上段ノ明部屋ニ差置ル

　但同九月十一月夜牝象斃ス

享保十四己酉年　三十貳艘入津

一三月十四日牡象一疋宰領拾三人附添長崎出足ス但一日五里三里ニテ泊宿ヲ定メ諸國通リ筋ノ所々ニ前以象ノ食物道橋等ノ用意可有之旨以御書付仰越ル京都着ノ節禁庭ニ被爲牽入叡覽夫ヨリ江戸表ニ五月廿五日着仍テ濱御殿境内ニ牽入置ル

享保十六辛亥年

一十二月三日三拾七番船ヨリ畵工沈南蘋連渡ル

享保十八癸丑年

一四月向後唐船一ケ年貳拾五艘ツヽ御定ニ被仰付之

享保十九甲寅年　三拾一艘入津

一正月十八月西御役所ニ於テ唐人戯（曲歟）由有之

一興福寺竺庵和尚黄蘗山第十三代ノ繼席トナル

享保二十乙卯年

一今年八月十六日雍正帝崩御在位十三年九月三日新帝即位御諱弘暦尊號乾隆今年廿二歳來辰年正月改元有之由諸船風説アリ

元文元丙辰年

一當年大淸乾隆元年〔二月九日唐館出火同二丁巳年二月四日唐館出火〕

一近年日本諸國ヨリ出銅令減少ニ付來未年ヨリ唐船壹ケ年二拾艘ツヽ可令入津旨仰出サル

元文三戊午年　五艘入津

元文四己未年　二拾艘入津外ニ朝鮮破船

一四月十日朝鮮船ニ唐人百人乘リ入津ス但一艘船主吳書旦船百六十七人日本ニ趣シ處去十二月二日大風ニ逢朝鮮ノ內耽羅島(タンラ)ニメ破船ス內八人溺死ス三人凍死シ相殘百五十六人朝鮮ニテ介抱ニ預リ米薪魚菜衣服等相與ヘラレ其地方ヨリ朝鮮國王ニ訴シ由ニテ四ケ月程逗留シ免許ノ上朝鮮船二艘ヲ與ヘラル仍テ此船ニ百人乘リ當日入津ス今一艘ニ五十六人乘シ船ハ五島沖ニテ見失シ由追テ其船平戶領ニ漂着シ同十五日當湊ニ遂來番外ニテ商賣仰付ラル

一六月十八日四ノ刻館內未六番龔恪中部屋ニ潮州人大勢押寄船釘(フナクギ)尖竹(トガリタケ)等兵具ノ如ク拵テ甚及騷動龔恪中方石礫熱湯等種々方術ヲ以防之騷亂ノ內工社二人即死ス十一人手疵ヲ負フ依之同廿日龔恪中人數四十二人御役所ニ召シ被遂御僉議其夜右ノ人數興福寺ニ差遣同廿三日新地ノ內ニ圍ヒ差置ル

一七月廿日館內ノ潮州人共新地ニ可押寄風聞專ラ有之ニ付同廿八日暮方不意ニ唐人六十九人御役所へ被召出處御玄關前ニテ一同ニ聲ヲ立テ甚及狼藉故悉ク搦捕拾八人櫻町獄屋ニ被差遣廿五人ハ明船ニ遣サレ其餘廿六人ハ館內ニ差歸シメ八月朔日十八人出牢明船ニ被遣

一九月六日新地ニ差置シ龔恪中館內ノ諸唐人ト和睦ノ扱ヒトナリ館內ニ歸住ス

元文五庚申年　貳拾五艘入津外ニ迎船一艘

一六月廿八日東捕寨國出ノ船ヨリ生玳瑁一ツ持渡ル館內ニテ小役ノ者二人ニ養ヒ方ヲ見習セ八月廿三日江府ニ差上ラル其節足輕二人被相添大坂迄右小役ノ者差添道中ノ間養ヒ方ヲ足輕ニ見覺サセ小役

二人ハ大坂ヨリ當表ニ歸リ足輕附添江府ニ差上ラル

寛保二壬戌年　拾五艘入津外ニ迎船一艘

一十二月江府ヨリ近年諸國出銅減少ニ付向後一ヶ年唐船拾艘宛ニテ年分銅百五拾万斤可被相渡旨仰出サル

延享二乙丑年　貳拾艘入津外ニ迎船一艘

一福濟寺大鵬和尚黃蘗山第十五代ノ繼席トナル

延享三丙寅年

一五月江府ヨリ向後唐船定數拾艘之外古牌拾枚迄ハ入津御免ニテ一ヶ年銅二百万斤可被相渡旨仰出サル

一龕雲章唐僧道源可連渡旨信牌一枚相與ラル

寛延元戊辰年

一近年唐船方諸事相滯由ニ付御勘定奉行松浦河內守長崎御奉行兼帶ニテ到着アリ先ツ三四年以來滯留ノ唐船拾八艘當冬中不殘令歸帆ラル

寛延二己巳年

一正月向後唐船商賣方御仕法被改定壹ヶ年拾五艘ニテ一船銀高二百七十貫目配銅拾万斤可被限定ノ旨船主ヨリ配銅證文ヲ令差出ラレ此以後增賣割增迎船等ノ證據書其外他船ニ送荷物借ハ荷物等一切不被差免一船限ノ商賣ハ可被仰付旨以漢文仰渡サル

寶曆二己卯年

一當年定船數ノ外番外船二艘可令入津旨御免有之十月十一月二艘來着ス又一船ニ二艘分ノ商賣被差免

ノ處拾番船拾四番船一艘ニテ二艘分宛ノ荷物積來リ諸定例出銀等二艘分ツヽ差出シ銅俵物等二艘分宛積返ル

寳暦十一年巳年

一十月廿九日於唐館内爲法事三ヶ寺ノ僧徒ヲ請シ終日誦經シ長二間ホドノ小唐船二艘ヲ造リ諸貨物船具諸器物等ニ至ルマデ一切積載翌十一月朔日稻佐裸(ハダカ)島ニテ燒捨之

寳暦十三癸未年

一數年來唐船一艘ニ銀壹貫百目宛被相渡之處當年より此事相止

一七月七日九番王履階船入津唐國ヨリ元絲銀三百貫目持渡ル此代リ銅三拾万斤内正銅七分俵物三分可被相渡約條ニテ二拾ヶ年可持渡憑文渡置ル

　但今年俵物佛底ニ付正銅三拾万斤相渡サル

明和元甲申年

一五月十日四番〔宋敬亭黄奕珍〕船入津唐銀百貫目持渡ル

一七月廿四日拾三番吳杲亭船入津唐銀二百貫目持渡ル

一去ル寳暦七年向後廣東人參持渡マジキ旨被仰渡ノ處其後モ密々ニ隱シ持渡候ニ付燒捨拂捨ニ成依之去未年一切賣買停止被仰付今年九月三日唐人屋敷門前ニテ廣東人參四百五十斤餘燒捨仰付ラル

一秋田銅山出銅不進ニ付來酉年ヨリ當分唐船方渡銅貳拾万斤可被相減ニ付如古例一船八万八千斤ツヽ可被相渡哉又ハ一ヶ年船數二艘可被相減哉右兩條之返答書可差出旨被仰聞候處諸船一同ニ一艘ニ銅拾万斤宛被相渡年分船數拾三艘入津ノ積リニ相願出ル

　但年分二艘減少ニ付諸定例令闕少ニ付銅廿万斤代銀貳百三拾貫目ヲ拾三艘ニ割合一船拾七貫六百

九拾目餘ノ外荷物持渡六割六分相增其內二艘分諸定例五貫四百四拾目餘差出シ殘惣俵物ニテ可被
相渡旨被仰付之

明和二乙酉年

一當二月在館ノ船主龔子興崔景山願出ノ趣唐國ニ日本ノ百令文金有之代リ物宜シキ品與ヘラル丶ニ於テハ才覺ヲ以テ可持來旨依願兩船主ニ憑文二拾五枚宛被與置之

一三月七日四番程冀若船入津三拾九號唐銀百貫目持渡之

一五月七日六番楊寰九艘入津崔景山御請ノ古金壹兩二分文金百壹兩持渡之

一同晦日七番崔景山船入津本主御請ノ古金六拾五兩三分乾金二銖判四ツ文金六百四拾九兩持渡之

一同日八番游樸菴船入津但三拾號唐銀貳百貫目ノ內此船ヨリ百貫目持渡憑文ハ追テ持來ノ由也

一六月十三日拾番龔子興船入津本主御請ノ古金七拾九兩一分乾金三兩貳步文金千貳百三拾九兩三分元金八兩持渡之

一同船ヨリ三拾號銀貳百貫目ノ內百貫目分唐金ニテ持渡憑文ハ貳百貫目之高也

異國渡海御免之事 第十二卷

一文祿ノ初年ヨリ長崎京都堺ノ者御朱印ヲ頂戴シテ廣東東京占城柬埔賽六昆太泥暹羅臺灣呂宋阿媽港等ニ爲商賣渡海スル事

長崎ヨリ五艘

末次平藏 二艘 船本彌平次 一艘

荒木宗太郎 一艘 絲屋隨右衛門 一艘

京都ヨリ三艘

茶屋四郎次郎　一艘　角倉　一艘
伏見屋　一艘
堺ヨリ一艘
伊勢屋　一艘
以上

一去ル文祿初年ヨリ四十餘年異國渡海御免有之處寛永十三年ニ至リ向後日本ヨリ異國渡海一切御制禁之旨御條目ヲ以テ被仰出之〔第十一巻ニ見ヘタリ〕

第九

鳥船　此船ノ式鳥ニ像ドリタル故鳥船ト名ヅク
沙船　此船ノ式河中淺水ヲ行ク船ナル故沙船ト名ヅク

附タリ船具名目ノ略

船頭（オモテ）　船尾（トモ）　正桅（ヤホラハシテ）　頭桅（ヤホラハシテ）　使韆（セミ）
車子（ユキトウ）　篷帆（タケホ）　布帆（ホハカマ）　裙篷（ホハカマ）　帆架（ナヽヌサ）
尾樓（トモヤグラ）　竹篙（ミサホ）　號帶（フキナガシ）　宰旗（ハタ）　媽祖旗（ロキテウハタ）
順風旗（カザキリ）　艙蓋（コナリフタ）　水仙門（船傍出入口）　舵（カヂ）　勒肚索（ロクトヅナ）
木錨（キイカリ）　鐵錨（テツイカリ）　棕索（シユロヅナ）　篠索（トウヅナ）

右之外船中ノ要十二支ニ像リタル名目如左

子　鼠橋　矢倉ニ上ルハシゴ
丑　牛欄　矢倉欄干

寅　虎尾帆　ヒカヘ索
卯　兎耳　桅上ノ夾木
辰　龍背　船底カハラ
巳　水蛇　水除ノ横木
午　馬面　帆スワ
未　羊頭　索字具
申　猴袋　船停物ヲキ所
酉　鷄樹　船底ノ板
戌　狗牙　船底ノ索ヲ掛ル木
亥　桅猪　桅根ニテヒカヘ木

船中人衆名稱如左

正　船主　副船主　脇船頭
財副　筆記勘定役　總管　一船諸用ヲ掌ル
客長　船中ノ客　杜主　船持主
夥長　按針役　舵工　梢取役
頭椗　椗役　香工　神船ヘ香花ヲ供ス
押工　大工　直庫　太鼓役
大繚　帆綱役　一仟　大帆役
二仟　第二帆役　三仟　第三帆役

亞板　帆柱ニ上ル役　總舗　飯ヲ炊ク賄役
老火　工社ノ頭　工社　水手
小厮　小者

○珍重坊道安が傳

雀海中に入て蛤となり、理助芝居に入りて珍重坊となり、再變して珍重坊道安となる、抑此人若き時浪花島の內木綿町住吉やとなんいへる挑灯屋なりしが、産れ付たる操好にて身代は宵の口に吹消し、安蝋燭の流れわたり、古人近松門左衞門をはじめ太夫三絃人形役者一人として親しからざるはなけれども、語りもせずひきもせず、沈香もたかず屁もひらず、只賑々と目出度かりける男なりとて、竹本大和椽が烏帽子親にて珍重とは號(ナヅク)たり、近年東都に來りても立入處いやまして珍重〳〵と呼立られ、取立の淨璃理會數十金集りたるもころりと棒にふるさとの親類なんどに贈り遣し、猶又元の珍重にてあれば呑なくてものみ呑々遊び〳〵て五段目の一幕は日本回國のおもひ立、法名もありの儘珍重なれ

珍重をかへして讀は提行て
餅つく比にごそと剃髪

福内鬼外戲誌

珍重坊口上

へゝゝ御馴染の珍重坊、此度思ひ立そりこぼつた赤同心あたまから丸の裸で生れ、腹に蒲團をつくれば寒さをしらず、醉倒れて蚊のくふもしらねば蚊屋かふすべしらず、呑たいより外慾しらず、藝能なんにもしらず恥しらず遠慮しらず、あつかましう出入すれば日本の名人衆しらぬといふ事なく、何の因縁やらしらずに行先で酒を振舞はれ、難波の白梅都の瀧の水、東の隅田川三ケ津の酒を呑つくした

れば、こても事に日本國中を廻り酒の海をこへ酒の瀧にうたれ、難行苦行修行のうへにては酒如來の御厨子建立仕り度き大願にて御座候間、御なじみにあまへ六十六ヶ國の酒手を是迄の御芳志に酒ねだり仕る、ごまのはいの一世一代こ思召御寄進なし下され候はゞ一升の御恩こ有難く奉存候以上

世話人

近松半二

傳へ聞貴長房は鶴にのりて萬國を廻り、今この珍重坊は樽にむち打て六十餘州をめぐる、その樂しむ所いづれかまされるや

盃のうちに四季あり酒の春

六十歳戯吟

竹本近江大椽

未十一月冬至日

清一

右高名の輩に傚ひてこゝに結縁す

のめやうたへや一寸先は闇の夜なるを此信旭房六字稱名の蒙光を以てあきらかに六十六部の妙典を納てのち西方願王善逝の來迎にあづかり廿九種莊嚴の別大戯場に生れ聖衆のヒウヤドンに獅子吼音の三きりに涎をながし七重寶樹の道具立より八功德池の水場なご親くみん事も遠からずまづそれまでは沙婆界のにごり酒を般若湯こも醍醐味こも舌うちしてのめや歌へや一寸さけはやめぬよ

六十六字闘

こくめう齋

鯉も出よ氷のうへを天德寺

時安永よつのとし師走月念五

○琉球の雛

琉球の雛丈二尺計面部なし、（白絹）衣紋四十一重皆白綾帶同結めなし、襟に赤き組紐をかくる長五寸餘帶の間に挾む雌雄同形なり、ふりのひもの中に紺壹筋入を男とす、上着地紋の色綾厚三寸餘

丙寅暮春於山東京傳宅見之

○酒　糺

唐灃州宴。酒糺崔雲娘形貌瘦瘠。每戯調擧罸衆賓。兼恃歌聲。自以爲郢人之妙。李宣古當筵一詠。遂至箝口。詩曰。何事最堪悲。雲娘只首奇。瘦拳抛令急。長嘴出歌遲。只見肩侵鬢。唯憂骨透皮。不須當戸立。頭上有鍾馗。出雲溪友議

唐杜牧罷宣州幕經陝。有酒。肥碩而詞讐。牧贈詩。糺云。盤古當時有遠孫。尙令今日逞家門。一車白土將泥項。十幅紅旗補破裩。瓦官寺裡逢行跡。華嶽山前見掌痕。不須啼哭愁難嫁。待與將書問岳神。出雲溪友議

右太平廣記二百五十六嘲誚部四

○擁書城小集詩附白藤詩

擁書城小集　南畝翁

培塿無松柏。書城列鼓鐘。駒河雲霧隔。不見玉芙蓉。

奉酬南畝君　鈴木恭

鶯口翻楓葉。鬢雲連鳳釵。莫將楊柳陌。不及駿河街。

時迎名妓阿勝豐島。勝不至。翁詩云云。勝時爲妓班之魁。都人臨風迎接。唯恐在後。島姿色技藝。若有遙超于勝。所不及者。欵待之妙耳。而名在第二。予竊不平之。不啻以同鄕之故。爲之左袒也。若有大具眼〓牝牡驪黃之外者。所不敢論也。勝住駿河街。島元在牛門。今移家于楊柳陌。此日歌高尾懺悔之曲。故詩及之。

○菴山茶寮記　仙臺

郊之南。瀕乎水。水之陰。褱乎山。山則翠羽之丘。土人環而家焉。幽奥若盤中然也。余恒愛而遊焉。將落一椽於玆而老也尙矣。甲午春。始命徒起役。乃因地於山。就材於林。導汚爲池。隨崇爲基。沮洳者溶洋。翳薈者明秀。斯欂斯椽。載葺載塗。求微者易遂。勿亟而潰于成。爲室者兩。爲隔者六。取陰於夏。承陽於冬。可以蠲煩而生白。導和而納粹也。坐收四序之勝。默御六氣之變。延白雲爲不請之賓。結淸風爲同龕之侶。幽步脩吟。不知老之將至也。於是乎。建和凝之湯社。設呂溫之茗讌。遞會相邀。以擬鄕飮。春花醉露。紗帽晨岸。秋卉飽霜。筠策夕攜。鐵聲淸越。報不速之客。爐香紛馧。闢宴間之主。賓之初筵。禮數秩々。文火細煙。聽澗底之幽松。素瓷醲甌。撩壺天之碧雲。乾西江於一吸。參東院於千古。樂亦至矣。顧其人之處世。所希求非一。鷙志在木。鵜志在水。或僑旅窮髑。隴種園畝。或左右墳籍。旦暮聖賢。然耿介難保。心戰易臞。丈雉尺鷚。固有涯分。或周々銜尾。徒自衿喜。鯈魚護鱗。

抵不動。其交接也。嚶鳴相召。韻頑相命。抵掌永夕。宴讌餚蔌。安知歷獗相愛。各爲其身。一旦不相得。風雨寥焉。今也二三素友。尋寂漠之盟。歃澹泊之液。白首同歸。氷霜一色。其於交游。不尙優乎。余也雖未遂素願於隱。毎斯焉考槃也。則亦足以稱隱已。天目所謂六牖不扃。一榻翛然。古鏡無塵。照映今古者。抑不可以跂及。惟是一味禪宴。快晃飽者。皆冥天之靈也。佗亦奚願焉。且也敎稱。除實相之外。皆屬狂顚。况吾黨。分以法爲身。法豈有隱顯乎。正倒一臂。舒綰一條。雖則鞅掌之日乎。亦唯徜徉之年也已。

仙臺南山　古梁　自記

翆羽之丘　仙臺城山曰瑞鳳翆羽之山（ミツトリノアヲハ）

呂溫　當作錢起　東院　即趙州

○小山園記

鳴海下鄕氏者。實尾張之素封也。細根山數百頃之地。皆爲其有。先世歸禪。濟洞諸善知識。皆締交親炙。造一庵於山。號寂照。奉圓通大士像。乃定朝所作。又有出山釋迦像。銅古製妙。又有佛舍利。林丘寺所賜欒山。向造寶塔藏之。並眞諸此。扁圓通閣。不閣而閣之者。崇大士也。閣後有湛然菴。安西行法師手刻觀音像。置大般若經六百卷。歲請淸衆。課誦無怠。門曰迎靑。而到處扁題。皆諸知識所筆也。山不甚高。有平坦可眺者。有幽邃益靜者。所遊觀不一而足。名寬字君栗者。號欒山居士。頗有文好事。與余相交。因以小山名之。擬淮南往々取其勝命題。蓋倣摩詰輞川之詠。不幸早亡。景雄嗣之。亦能貞純克家。屢請余一遊。余比年有江戸之召。每往來鳴海。寬政己未五月。約過其地。自有松北轉數里。主人出迎。縈廻山路。恍覺與濁穢隔。南有大將嶺。乃織田信長所營陳處。其西大海。浩蕩波濤。而多度朝熊蒼茫乎煙雲之間。北則藍原猿投山諸地環擁之。而御嶽廻秀于雲外矣。東則參信諸山迤邐相連。儼

渉半日。得尋勝究幽。尋到扶翼亭供給。傍有蕞爾三兩家。皆爲下郷氏羅作。戴之若君。可謂太平逸民哉。景雄乃請余作記。兼賦詩。以題諸勝。夫處富貴者。必有榮利之累。無榮利之累者。必有貧窮之患。無患無累者。其唯素封乎。素封之樂。君栗既知之。今景雄嗣之。其樂曷如。聞恒把鋤穫結草鞋。以種植爲樂。其亦庶幾乎。余雖不敢比摩詰之撰。亦得共半日之樂。聊識其梗概如斯。夫摩詰亦深于佛者也。景雄能纘先生之緒。則圓通之閣。湛然之菴。亦可以言吾樂矣。

圓通閣

圓眞與通實。觸處莫盤桓。百卉當春媚。一輪入夜寒。

湛然菴

西行所刻觀音像。靈甚。古有觀音阪者。小堂安之。今移之此。而坂趾在下郷氏宅地云。

大士元成隊。普門自湛然。般若波羅密。衆禽鳴樹巓。

好辭龕

芭蕉翁之石浮屠也。傍樹芭蕉。昔者翁有故往來斯家。々有其笈并墨痕。好事者必問之。

莫道彫虫技。飄流存美名。春風牽堵側。又見綠芽生。

采蘭徑

岩間逕曲。春蘭郁々。可以采々。

嶂々抽芳處。春風谷口多。靑山須永矢。奈此考槃何。

四望臺

有圓通閣之巽。四面松林。有躑躅蕨菜。秋則生松蕈紬蕈之類。可請野膳。其所騁望。西南大海。而内海衣浦見焉。晴朗則伊吹鈴鹿諸峰可指點也。東北則鎌倉古道二村山在近。而信之諸山。羅

立可眺。

縱目衆山列。盪胸大海寒。占茲高敞處。眼界甚麼寬。

白雲岡

安愛宕祠權現石像騎猪。尤爲古物。莫知所由來。白雲額池。無名所書。蓋愛宕山號白雲寺。直東北者。云猿投山。而桶挾在南。丸根鷲津在西。皆古戰場云。

戈鋋一陳逝。陵谷轉堪悲。謹贈白雲去。蒼茫覆古祠。

觀濤阪

西枕大海。布帆往來。笠寺星崎在近。而朝熊多度諸山縹渺乎煙雲矣。前則鳴海池鯉之間。乃東海道。人馬絡繹。上之一快胸宇。

扶杖坂頭望。滄波萬里開。長風宗慤與。直欲駕浮杯。

柿靈祠

自還喬門。而到扶翼亭。乃上下所流憩也。人丸像。頓阿所作。以安壇上。遷喬額。清沈草亭所書。扶翼二字。采諸蔡君謨萬安橋碑中。而家藏其石本云。

山中多勝事。流憩集茲亭。滿袖標霞色。沈吟謁柿靈。

妙音池

池中置辨才天祠。橋以通之。池多蓮花。遶以棣棠。

菡萏開方沼。宛如八德成。中存天女廟。心淨水還清。

菅神廟

菅公威靈。海內所知也。祠廟頗壯。儼然如在。左右石燈。永存祀典。原爲鳴海根古屋城鎮守。乃

織田信長臣佐久間信盛所有。而今傳之下鄉氏。
千秋此如在。祭祀豈尋常。松保忘年色。燈存不夜光。

紫藤架

架在菅廟傍。比花之開。鬱如紫雲。

紫氣度長架。垂々瓔珞似。由來奪朱色。未說桃兼李。

櫻花埒

櫻花乃日本所賞。到處爲多。而此山谷幽棲之地。嫣然娛目。尙何芳野嵐山是求耶。其下可以調馬。

爛熳千株色。穠花正發新。占來芳野勝。坐可閱三春。

丹楓塢

秋後之景。殆可與櫻花埒相角也。

丹葉曬斜日。勝於二月花。鄉園稱洵美。人欲錦衣誇。

望雪林

自春至秋。卉木叢林。百態千狀。莫不悅心目。及玄冥之令行也。祇當綢繆牖戶。塊然自熱。所以軍瀾限界。坐馳眺望者。其唯雪乎。然雪非得其所。無興無趣。是故灞橋之驢。不可豫而期。剡溪之棹。不可坐而乘。是此園之所以特命其勝也。

積雪朝來光。千林都作白。一樣憑高看。玲瓏無所擇。

寬政庚申十月壬申　前南禪見相國北禪八十二翁顯常撰

古之以園爲園者。率名存物亡。何獨平泉之可尤也。小山之園非園也。先世歸佛。乃置圓通閣爲鎭焉。爾來循地所宜表諸勝。蓋至樂山而大成矣。諸如余所記。與摩詰輞川相比類焉。可謂小山之園矣。夫創

建固難。續亦不易繼。自今爲下鄕氏者。能守故業。接物以慈。行己以儉。孳々勿弛。上崇圓通之尊。下懲天神地祇之庇。恭敬無怠。則素封之業。永世不替。余之所記。亦附傳不朽。是所庶幾也。紙尾有餘。因走筆與之。

蕉中老人

告四方諸賢。而廣需寄題。今揭蕉中和尚記題者。不特賞其筆。欲令就此以知園之梗槩也耳。

享和壬戌夏　景雄謹識

○岡八郎兵衞事

元祿十二年己卯九月廿六日記

御小性組小笠原長門守組岡八郎兵衞事去九日七時當番より罷返り候節芝土器町四辻にて伊達美作守通り懸り候八郎兵衞供をわり候由にて先供之家來理不盡に組付候故拔打に切候得ば家來五六人組付大小をもぎ取候其內美作守乘物は通り過候右被切付候家來かけぬけ參候故八郎兵衞鑓を持跡より追懸參美作守玄關迄參候依之右美作守方より案內有之て御目付水谷彌之助天野傳十郎罷越其後番頭小田切土佐守北條右近大夫仁木周防守並組頭近藤源兵衞能勢市十郎美作守宅へ罷越八郎兵衞儀は宿所へ罷歸候
右之旨趣に付て被仰出候次第

申渡之覺

伊達美作守

先頃於途中岡八郎兵衞と出入之節不埒成仕形不調法に被思召候逼塞仕可罷在旨被　仰出之候以上
右之通田村右京大夫同助大夫召之於御黑書院溜以書付老中列座土屋相模守申渡之兩人美作守宅へ罷越申渡之

申渡之覺

岡八郎兵衞

先頃於途中伊達美作守罷通り候節供をわり候段理不盡仕形不調法に被　思召候依之小普請入被　仰付候逼塞仕可罷在候以上

右之通長門守へ以書付土屋相摸守申渡稻垣對島守侍座永井美濃守も罷在長門守宅へ八郎兵衞召寄之美濃守も列座にて長門守申渡御目付近藤平八郎罷越

岡八郎兵衞へ慮外仕候伊達美作守家來三人從美作守伺之通美作守方にて死罪申付之候也

十月廿八日

松平陸奧守召之伊達美作守儀在所へ遣置度之由願之通達

上聞勝手次第國許へ可遣之旨被　仰出之然ば美作守へ分遣置之三萬石は陸奧守へ被返下之旨被　仰出之趣小笠原佐渡守傳達之老中列座席は白書院緣起

○長崎二人罪狀告示

長崎船津浦
源太郎子
伊之助
年二十一歲

此犯原有債錢逼于窮苦糾合福次郎隨雇善次郎丑之助字十等三名爲作水手即時相約云果得贓物改日分配等語于亥十二月十四日夜潛往河下唐船不惟偸盜棕索磁器等許多各宗甚至將赴來之唐人抛入海中等情那善次郎指揮及至丑之助將唐人抛入海裏之際應該阻當而並無此擧以致唐人溺身死此等事端全係此

犯造起意端潜往偸盗以至于此罪悪難容今奉
部諭准此押送各街即刻梟首示衆
丙子三月

長崎村船津浦
福次郎弟
善次郎
年三十二歳

此犯背従伊之助及兄福次郎之言約定改日得贓分配等語仝丑之助字十一起受雇水手于乙亥十二月十四日夜潜往河下唐船况恐有後患將赶來之唐人投入海中等語指點丑之助以致唐人溺水身死至于此状罪悪難容今奉
部諭准此押走各街即刻梟首示衆
丙子三月

○桐長桐芝居松梁落候事

葺屋町
桐長桐

右芝居元狂言座市村羽左衛門興行仕候砌四ヶ年以前酉年十二月類焼仕翌戌年春普請之節芝居梁に相用候松材木東海道程ヶ谷宿日蓮宗にて寺號不相知右寺中杉山大明神境内に有之候松三本伐出し梁に用ひ普請出來仕候處右松は神木之由にて祟故歟芝居不繁昌之由此節色々取沙汰も有之芝居出方之もの共先月下旬杉山大明神へ参詣に罷越先方にても祈禱相頼罷歸芝居にても祈禱可致と芝居並町内商人共中合

谷中善龍寺寺中本壽院住持日慈外出家九人相賴今朝五時頃右僧拾人罷越芝居裏口より這入舞臺正面へ曼荼羅を掛け備物等仕法花經千巻陀羅尼讀誦相始候こ無程表之方より三本目舞臺上梁より三間半程隔り長サ拾貳間餘末口壹尺五寸之松梁壹本中程より折れ家根坪凡六拾坪蕎込申候尤怪我人等は無御座依之此段御屆候上候以上

葺屋町
名主
庄左衛門

子五月三日

文化十三年丙子也

○和州鑄物師共より書上候古文書

和州鑄物師共ゟ差出候
御牒並座法掟目許狀寫

藏人所牒　燈爐御作手鑄物師等所
勅印　河内國丹南郡狹山鄕內
日置庄鑄物師散在等所

應令早任代々御牒並將軍家下文下知

等停止諸國庄園守護地頭預所沙汰
人等諸市津關渡山河海泊津料關料
市手山手率分例物以下煩就中淀河所々
關々大津關所新儀今案煩狼藉事
　使御藏民部大丞紀元弘
右如斯　勅役所被出仰也　諸國鑄
物師　全賣買業可令　御公用勤仕諸
國諸庄園守護地頭預所沙汰人諸社神人
以下諸市津關渡山河海泊津料關料市手
山手率分例物以下煩於鑄物師者東西南北
入亂任法度旨諸商賣不可有違亂妨者也兼又
海道邊鞭打三尺二寸者可爲馬吻料若依惡路
馬荷物落事在之爲地頭政所可被負送猶
於鑄物師中與自國他國相論者在之沒收所
帶一門可被行死罪者也
使
牒得被御作手在方摠官鑄物師等去
月日解狀偁謹考舊貫諸道細工人
等就身々藝能令交易賣買色々私物

者是定例也仍鑄物師等往反于五畿七道諸國令賣買鍋釜以下打鐵鋤鍬以其利潤(勅事)令備進御年貢以下臨時召物之間可令停止諸國諸庄園守護地頭預所沙汰人等諸市津關渡海泊山河津料煩之由忝成賜御牒以下關東御下知狀畢仍賣買經廻所々敢無守護地頭之處木曾亂逆以後守護地頭以下甲乙人等令譴申云鍋釜以下打鐵鋤鍬等者勿論也令賣買布絹類米穀以下大豆小豆之條不可然之由構於新儀今案動欲令致市手津料之煩隨要用令賣買何嫌其色哉所詮於鑄物師等之所持物等者不嫌其色可令停止新儀今案煩之由重成賜御牒欲備向後之龜鑑矣者早依申請可令停止諸國諸庄園守護地頭御所沙汰人以下新儀今案煩狼藉之狀所仰如件御作手鑄物師等宜承知勿違失牒到准狀以牒

勅印

仁安二年十一月日　　出納明法生中原

別當左大臣兼左近衛大將藤原　藏人文章得業生藤原

頭左近衛中將兼右衛門權佐藤原　左衛門權少尉菅原

權右中辨平朝臣　左兵衛權少尉藤原

右衛門權佐藤原朝臣

鑄物師職座法之掟

一御公用被　仰出節者尊

朝恩無遅滞相務儀可爲專要事

一御即位之砌者任先々吉例御祝儀勤仕之儀

不可疎略事

一諸役（勅印）御免除之事無市料山料率分例物以下

並諸關海河渡等之煩可致往還猶鑄物師中

自國他國相論之族有之者則沒收所帶一門

之輩迄可被行死罪儀者數通之御牒文言

有之事

一鐘鑄等之事者一國一郡ニ御牒並舊書等

所持之者有之所ヘ者假令舊書頂戴之雖爲
鑄物師其所ヘ入亂鑪相建令鑄營儀堅可
爲停止其所由緒之鑄物師於無之者格別
也況他方ヨリ入込候者互以入魂安靜ニ可勉事
一受領之事者其人體計ニ而無繼目輙子孫
相傳儀有間敷事
一新鑄物師者勿論　御代々　御牒並
御綸旨之御文言至爲御禁止之儀猶寶
德年中差出請文百九八子孫之外新儀之煩
不可企巧聊於違亂之輩者於不令停止者
既被成下處之舊書並仁平年中令經歷
供御人詮無之事
一依勤職勝手廻國并相替譯有之早速可
申訟事
一御倉代替之節者祝儀如例可致馳走事
右之趣經　高聞永爲鑄物師職座法
定置處也若於違變之者急度可遂
糺明者也仍如件
天正四年八月十三日
御藏宗弘判

鑄物師職之事舊蹤分明之條
愈尊
朝恩可從座法舊規之狀如件

安永四年十一月　　御藏佐渡守齊部宿禰判

三　　寫

眞繼美濃守ゟ差出候書付類寫

藏人所牒　河內國丹南郡狹山鄕內
日置庄鑄物師等

應早進上鐵燈爐以下御年貢事

使

牒得件鑄物師等去月日解狀云號藏人所
供御人鐵燈爐以下於御年貢可進上抑罷入
供御人意趣者居住之所興福寺御領日置庄也
任傍例有限所當官物之外無他役被雜役
免除衆又爲鐵賣買京中往反之間爲衞士幷

使廳下部等依被取夫觸事有煩仍爲逼件
煩各賜短冊諸國七道幷京中市町和泉河內兩國
市津往反之間爲逼件役注子細言上如件者件
燈爐尤以可爲公用依請且爲雜役免除且仰
左右衞門府幷使廳諸國七道可令免除件役
之狀所牒如件敢勿違失故牒

仁安二年正月日

出納明法生中原
藏人左衞門權少尉菅原
別當左大臣兼左近衞大將藤原朝臣　左兵衞權少尉藤原
頭左近衞權中將兼皇后宮權亮藤原朝臣　左衞門權少尉藤原
權右中辨平朝臣　阪鴨河使左衞門權佐
勘解由次官藤原朝臣

御油判

藏人所御倉民部大丞紀高弘朝恩之事
諸國鑄物師鍋釜鋘打鐵鋤鍬等上司以下役錢
之事彌以可被全知行者也兼又於鑄物師者
關渡悉以諸役御免除之筋目不可有相違之由
鎌倉殿仰所候也仍執達如件

文治五年卯月十九日　　　時正承

○淀屋三郎右衛門闕所道具

一金屏風　五十雙 此外數しらず
一珠玉之船　三艘 渡繻珍にて帆掛 唐人形數不知
一琉球花毛氈　三百六十枚
一印子鷄　二羽
一同ヒヨコ　七 今度拵立
一同雀　六
一金銀鳩　五十一
一印子碁盤　一面 但黒石金 白石銀
一金竹流　三十七本
一水金　一萬五十斤
一枝珊瑚珠　尺 六本
一珠玉之類　二百七十三 其外數不知
一唐石硯　一面
一手水鉢　一 地赤銅唐草 金銀彫入
一錦印金織之類　代一萬兩
一水精之障子　八十八枚 但九間

一長羅紗　十三枚
一朝鮮人参　七十五斤
一辰砂　七十斤
一伽羅割刀　百三十丁
一毛氈十間物　四十枚
一徽宗皇帝繪　十枚
一掛物夏繪濱林雪其外世上名有物　二百三十幅
一同五兩より百兩餘の掛物　五百幅餘
一腰物　七百廿腰 右折紙外に五兩より百兩までの品數不知
一茶湯道具　三十七 代金千二百兩より五百兩迄數寄屋道具此外數しらず
一黄金長持　二棹 紋丸の内に丁子紋有
一判金　三千枚
一小判　十二萬兩
一銀子　八万五千貫目
一錢　一万五千把 但五貫カラケ
一船　百五十艘 五百石より千石まで
一元船　二十艘

一金子　一億餘　是は大名方へ借置候手形
一銀　八万貫目　是は公家衆へ借置手形あり
一金　二万兩　是は五代目女房歴々より被下候處死去以後埋置今度堀出す
一材木　二千七十八本　其外所々に有之
一土藏　七百三十戸前
一寳藏　十七
一米藏　八十
一大豆藏　八十
一雜藏　五十
一大阪にて屋敷　廿八ヶ所　内表口一丁餘十八間三十二間迄
一所々屋敷　六十四軒
淀に三十軒京に十三軒伏見二ヶ所大和十八ヶ所
一知行　三百三十二石　是は御用立の大名〻被下候
一田地　百五十丁（本ノマヽ）
山城にて百五十丁淀に五十丁大和に十二丁丹波に廿八丁和泉に十八丁
右は檜山のよし
一封金　九億八千貫目

右淀屋三郎右衛門九代相續如斯大名弘め代々候外に印子の鶏七今度掛立其外借金御用金こ名付自由働中候故闕所被仰付候

遠島　　　　三郎右衛門

御叱置　　　手代拾人

○三州大樹寺村農家天正十七年古文書

御朱印也大サ曲尺一寸也

一御年貢納所之儀請納證文明鏡之上少も於無沙汰者可爲曲事然者地頭遠路令居住者五里中年貢可相届

但地頭其知行在之者於其所可納之事

一陣夫者二百俵に一疋一人充可出之荷積者下方升可爲五斗目扶持米六合馬大豆一升宛地頭可出候於無馬者歩夫二人可出之夫免者以請負一札之内一反に一斗充引之可相勤事

一百姓屋敷分者百貫文に三貫文充以中田被下之事

一地頭百姓等雇事年中に十日充並代官請三日充爲家別可出之扶持米同前事

一四分一者百貫文に二人立可出之事

一請負申御納所若大風大水大旱年者上中下共以春法可相定但可爲生料之勘定事
一竹藪有之者年中に公方へ五十本并地頭へ五十本可出之事
右七ヶ條被定置也若地頭及難澁者以目安可申上候所仍如件

天正十七年十一月十七日　　小栗二右衛門尉
吉　忠

印大サ曲尺一寸也

右三州額田郡大樹寺村百姓久七持傳之由右本書同州同郡西藏前村庄屋半兵衛持參爲見候に付寫置候事

〔同僚高木氏ゟ借寫〕

○寛政二戌年二月人足寄場之儀に付書留同縮圖

戌二月十九日松平越中殿御渡候御書付寫
長谷川平藏

此度無宿共加役方人足に被　仰付候間右御用可相勤候場所之儀は石川大隅守屋敷裏葭沼壹萬六千三十坪餘御用地に相成右之内取建被　仰付候間御普請奉行へ相談其方請取地所築立等之儀は追々可被相伺候

一右御場所以來加役方人足寄場と可相唱候

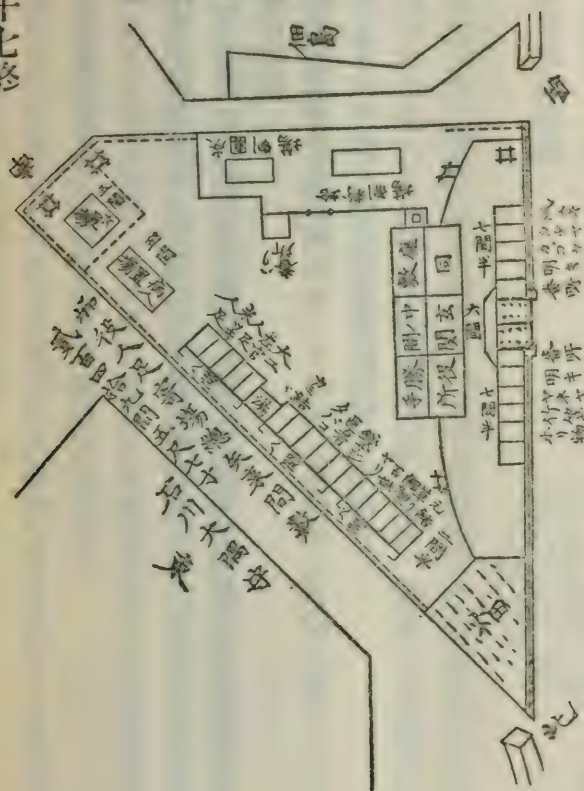
戌二月廿六日

此度加役方人足寄場取建被　仰付候

一人足とも作業之儀は勝手次第得手之儀は爲致申候
一職業いたし渡世相續可致體成候者は寄場差免家業可相成程之手當差遣し身寄之者へ引渡身寄無之候は其者出生之所名主或者地役人へ引渡家業爲致候樣可申渡候
一職業を怠り又は申付不相用者は手鎖入牢其外咎被申付候儀者其度々不及伺存寄次第可被申付候
一重病又長病之分は溜預申付輕キ分ハ寄場にて手當可申付候
一門出入嚴密にいたし立入候町人共は鑑札相渡し泊有之樣可被致候尤番人共改方入念候樣可被申付候
一火之元之儀入念可被申付候
一寄場諸色入用手當は米五萬俵金五百兩來年よりは米三萬俵金三百兩之積りを以て御勘定奉行へ相談入用次第可被請取候尤年々仕拂之儀御勘定奉行へ可被申聞候
一人足とも追々相增候節は御藏人足其外御小普請場川浚之場所へ差遣し其外遣方心付之儀は追々可被申聞候
右之通可被得其意候
寄場人足共御仕置申付候儀
一盜いたし候者死罪
一徒黨ヶ間敷儀いたし候者死罪
一於寄場博奕いたし候もの死罪　但手合にかゝり候者其始末に隨ひ輕罪可申付候事
一職業不精又は申付不相用類再應咎申付候ても不承請候者は遠島可申付候事
但輕き者は佐州又は豆州島へ可遣事
一博奕又は惡行等不致者は其品に寄相應之褒美をあたへ可申事

一其方共儀無罪之者に付佐州表へ可差遣處此度厚　御仁惠を以加役方人足にいたし寄場へ遣し銘々仕覺候手業を申付舊來之志を急度相改實意に立歸り職業出精致し元手にも有付候樣可致候身元見屆候者年月之多少に無構右場所を差免百姓出生之ものは相應之地所被下之江戶出生之ものは其場所へ店をも爲持家業可爲致候尤從　公儀も家業道具等被下候歟又は其始末に寄相應之御手當可有之候若又ケ樣に厚　御仁惠之儀も不辨申付相背職業不精に致し候歟或は惡事等於有之は重き御仕置可申付者也

戌二月

加役人足寄場繪圖

增訂一話一言卷三十七終

○明和元申年原武太夫書置候書物 一時奇人名前有之

明和元 十一月

先年より出入せし人數有增印す書落のぶんは思ひ出し次第一笑ともに認之

一諸大夫 一布衣 一寄合衆 一御役人

一法印法眼之醫師

一出家紫衣 靈巖寺 池上本門寺 此外諸宗不殘

一儒者 堆橋主計 石川利助 荻原惣右衞門 深尾權左衞門

一天文 青山藤十郎 幷 古蓮谷

一歌人 東將曹 內山傳三 萩原又三郎

一れん歌 寺町百庵

一茶人 幡頭鷗翁 酒井日向守 齋藤賴母 兒島源兵衞 山口黑露

一宗師 貞佐 越渡 老鼠 古湖十 曲庵 乾十 春來 紀逸 祇丞

買明 田社 舊寶 來示 左簾

一狂歌 五十夢

一誹諧師 麥阿 貞丸 瀧玉 椿井 右之外數不知

一算術　關新介高弟　宮地新五郎
一能書　烏石　顧齋　大暁和尚　本目權左衛門　蜷川八右衛門
一大文字　一粱
一劔術　平井八郎兵衛　森戸三太夫　村上淨翁　中村三太左衛門
一鑓　松本利左衛門　大場勘介
一弓道　德田大七　高須十郎兵衛
一鉄砲早打　漆崎清左衛門
一鉄砲張　益田新□(休カ)
一馬術　柴崎惣兵衛　大石彌右衛門　小久江左内　鶴岡丹下
一鐙(具カ)足師　岩井源左衛門
一繪師　狩野祐清　狩野梅軒　宗利
一能太夫　觀世三郎四郎　ワキ　進藤流　藤井工石
一笛　古名人　二曾又六　野本幸次郎
一小つゝみ　長命喜兵衛
一大鼓　葛野九郎兵衛　福王半助
一たいこ　服部百助
一狂言師　大藏彌太夫
一幸若　秀平

一檢校　藤上　藤谷　岩崎

一勾當　早川　富世　右外座頭數不知

一八人藝　わせき　藤都

一頭梁（棟カ）　甲良志摩　辻村豐後　平内備中

一諸御用達　町人　人數不知

一所々名主數不知

一細字書　大場仁左衛門

一神道者　戸田信濃　絹崎近江　藤池和泉

一樂人　角くら八幡社人　加茂監物

一湯治場亭主　湯本九藏　湯之澤大こくや市右衛門　一の湯喜介

一鞠　柴木廣壽　同平馬　太田昌榮

一時計師　木村近江

一燒物師　名失念

一佛師　左近　七郎兵衛

一こも僧本寺　淺草一月寺　左内坂鈴賓寺　左内坂下安樂寺

右之外こもそう數不知

一藏前者　一日本橋者　一小田原町者

一講釋師　志道軒　左文　立竹　いつしやうけん　壽仙

一仕付方　森一學
一角力取　あや川　立田川清八　行事　庄之助
一人切　山田淺右衞門
一三絃師　近江　柏屋　石村
一諸流淨るり太夫元祖土佐太夫を初かぞふるにいとまなし
一三絃諸流不殘
一琴　横田勾當　染部　田都
一三芝居太夫元不殘惣役者はやしかたがく屋木戸茶屋
一狂言作者　傳十郎改　津村治兵衞　津村三郎治　並木良助　堀越二三治
一歌　中山小八　松島庄五郎
一身振師　三樂　新次
一こはいろ　坂東與兵衞　荻野万之助　左七　べつこう　此外數不知
一吉原五町の名主不殘亭主共人數不知中の丁茶屋たいこ持舟宿女郎かぶろ
一おどり子しづや　ぞうの千代小かねをはじめてる小てるるせよしてうかぞふるにいとなまし
一よび出し茶屋　女名失念　ゑびや方より
一比丘尼　せいこ
一品川本宿新丁兩名主ていしゆとも人數不知
一ひかわ　鼠や　あつぎや
一音羽町　松川屋　いづみや　いせや　大黑や

一せんじゆ　永樂屋仝左衛門
一きつねつかひ　未得
一いづなつかひ　京八
一しやうぶ師　わらや小八　せいぞう五郎兵衛　こた庄兵衛　びくに善兵衛　かどみ源兵衛
せきだ次郎兵衛　瓜の仁右衛門
一欠込者〔男達〕五郎左衛門〔浪人〕川村九右衛門〔こばや〕作十郎〔浪人〕伊三郎
〔こはく〕藤九郎〔多介子〕重次郎〔俵屋〕善三郎　前島勘三郎　都味中　藤永勾當
一欠込女　かゑい女房　三中女房　叶屋安兵衛女房　鈴木やよし　森田文左衛門女房　買明女房

席遊娘

此外に身を投る女をたすけ世話せし事有り引渡證文今以有之
大勢にくひたてられし米なれば貧乏せしもことはりぞかし
右原富五郎〔後改武太夫〕原富こいへる翁書をけるものに見へたり
市谷大隅町〔後尾州御やしき園込になる五段坂邊也〕にすみて御先手與力をつとめし人其比三絃の名人也武藝にも達せしこ云予十六七のとき加賀屋敷原〔市谷〕内山賀邸先生の宅にて見しに惣髪にて太刀こしらへの大小をさしたり七十位の年なるべし
〔三線〕きぬたの傳別に寫有之
或云京鹿子娘道成寺の節は原富のつけし也こ云尾州章善院殿にしたがひてしば〳〵青樓に遊びしこ云士の編笠をきずに廓中に入しは此人よりはじまれりこぞ
○誹諧師乙由書簡寫〔後稱麥林〕

尙々此度遺族は題發句
之分御座候卯花櫻
　頃日　素　心　尼　參　宮
ほとゝぎす菖蒲以上四冊に御座候
　にて逢申候是より
又昨日水鷄□こゞき申候是も
　熊野路へ明日發足
あとより點いたし可進候
　この事に候今日俳諧
他行歸宅以後
　いたし明日も逗留
さて〳〵取込申候
素心はからずも見へ申候て
　被致候樣留申候へども
せがまれ右之分迄出來申候
　大かた發足の樣子に
殘りは追付あとより〳〵以上
　見へ申候然ば我等他行
之内參居候題發句

之巻素心一兩日
せがみ被申候て急に點
いたし候幸陽里
明日其地へ發足
之由先出來之分
遣候俳諧巻ごもは
追付松木殿より便
有之間其節可進候
扨々せわしく難儀
いたし．且又先日
京にて元相子へ緩々
俳談申候跡より狀遣し
可申候御參會候はゝ可然
御心得賴入奉存候
松江千代へも緩々
出合申候希因子
龜州子なごへ跡より
可申入候早々以上

五月十日　乙由

左　靜　樣

ウラ書

麥林叟の消息一軸は往し年北國行李せし比加賀の暮柳舍にして今のあるじ後川が附與す處なり久しく庭中にひめ置旅にうかれ出る年々もやせ骨にせたらおひ身をはなさぬ寶とさせしも既みそぢに近し傾くよはひのたのみすくなくなき跡に殘りものせんも何がし法師がさみせし事などそゞろに思ひ寄られ掛物てふものに調じ出つゝ廿餘子にわかち行末永く殘して此翁したふ本意ももろこもにこゞまれかしこ天明けきみつのこし良夜の案上に

書こゞむ事しかり

方圓居卷阿

卷阿之印

是ハ亡友卷阿居士ノ書也天明ノ比ノ事思ヒ出ラル

文化十四年丁丑六月十六日ノ鶉走筆寫之　　蜀山人

○狩野系圖

大職冠十二代之後胤二階堂遠江守藤原爲憲之家嫡孫狩野助宗茂之家嫡也如雪亂芳軒異朝之人也來朝而爲狩野祐清生國京州也

祐清法眼　俗名四郎次郎
元信法眼　俗名四郎次郎號
祐雪
雅樂助
越前之土佐光信聟
乘信　俗名次郎
眞咲法眼

了不—了乘—元俊隼人秀信—春雪隼人信之—梅榮一學知信
伊識威信
式部重信
泰笑求馬亮信
春輿相信

松榮法眼大炊助直信—永德法印源四郎尙信
宗秀法眼秀信—眞說法橋元信—左門
岩滿
休伯法橋左衞門長信—休伯左衞門昌信—休頓左衞門友信
休宅里信
數馬征信　眞說聟
休圓內記淸信—休山內記是信

右京光信　土佐將監聟トス
右近孝信
右近信秀—探幽法印釆女守信—洞雲法眼釆女益信
圓藏院妙覺寺
源七郎
自適齋主殿尙信
洞春良信
探雪圖書守致
探雪主殿守定
右京時信聟
右京時信
永眞法眼安信　右近信秀聟
古川法眼右近常信—永眞聟
如川周信
隨川岑信
榮川
內藏助親信—永叔明信

○元信門弟

養雪
珠牧
玉樂
梅閑

北條氏直熊花狩野

○松榮門弟

松白―與兵衛
　　　與市
　　　與六郎

內匠宗―內匠狩野
　　　　大學氏信―柳雪秀信
　　　　　　　　　梅雲爲信

內膳狩野一翁重郃―內膳一溪重良―主税良信左門春信
　　　　　　　　　織部―翁重頼―三五郞重利

○永德門弟

祖酉狩野―外記素山信政―壽石外記秀信
山樂狩野修理元頼―修理　　　洞元久馬生信
休雪源助
一雲瀧三郞
主膳狩野
道味狩野源助
友松海北

○休伯門弟

友我山本
友益狩野氏信―伯圓
　　　　　　　春悅
隱破柔究利―左兵衛貞寛
勝田陽溪竹翁
元休

○右京門弟

小左衛門
新右衛門―杢助
茂左衛門
久左衛門
弘以狩野彌三左衛門―弘甫彌左衛門
　　　　　　　　　　弘除理右衛門

○御徒七番組書留之内數條

一公方樣御機嫌御勝不被遊候に付昨晩七ッ過御三家御登城水戸殿尾張殿には御退出紀伊國樣爲御後見昨亥之上刻二之丸へ被爲入候只今廻狀來候

五月朔日

一二之御丸爲窺御機嫌出仕之覺

五月三日惣出仕　四日万石以上　五日出仕に不及　六日万石以上　八日御三家御譜代　九日外樣万石以上　十日諸番頭諸物頭御役人寄合　十一日國持並四品以上　十二日高家衆詰衆同嫡子詰衆並同嫡子御奏者衆同嫡子　十三日御三家溜詰御譜代　十四日諸番頭諸物頭諸役人寄合　十五日不及出仕　十六日惣出仕　十七日不及出仕　十八日外樣万石以上　十九日國持並四品以上

一半藏御門　竹橋御門　安田御門　淸水御門

右古來之通向後往還有之候筈に候間四ヶ所御番所へ可被相達候尤向々へも通達可有之候以上

右之通り廻狀有之爲御心得如此に候已上

六月廿一日

源　兵　衞

太　左　衞　門

一うち責子は鳥を拂行也待せこはしげりへ先へ行居る鳥追立られてしげりへおりんとする處を御鷹合候山數多からせらるゝ時は最前のうちせこ直廻り先へ行待責子に成最前の待責子は亦うちせこに成代り〳〵に仕候待せこの所御着座也

一つかれ責子とは御座所之所にはり雉子に御鷹之合候と其御鷹につき走り行候てなりこめ申候但なりこめとは雉子の落申所を申也

一貴子の言葉ゑいこゝ〳〵と申也聲を懸けて行心なり
一山をかけ候言葉は鳥をかける事きじより發る
一鳥をおさへ候事雁白鳥は羽をおさへ候候鴻鶴ははしばん川からすは足尤からすも足也
一平川口より御內證にて淺草下谷へ度々被爲入奧勤衆も羽織にて御徒向は上下にて當番勤來候處當番より急に御供に出羽織と上下とまち〳〵に相成此方より相願羽織にて勤る尤當日計之事
一奧一ノ御挾箱黑縮緬御羽織入有之趣に御座候
　黑縮緬御羽織被召被爲入候事御見上申候事
　　寬永七年三月
一戊正月廿五日護持院跡明地御成
　壹番　數馬組共
　　　壹橋之內大手之方見通シ竹橋御門外雉子橋迄
　貳番　半四郎組共
　　　神田橋外見通シ鎌倉川岸町屋見通シ三河町左右横町澁江玄悅脇通稻葉丹後守左右横町迄
　三番　靱負組共
　　　內藤日向守屋敷番所横町より安藤右京亮屋敷橫町松平伯耆守屋敷橫町駿河臺迄
　四番　新平組共
　　　松平紀伊守屋敷より飯田町坂下橋迄小川町水道橋所々橫町迄
　五番　善左衞門組共
　　　雉子橋之外御堀端御普請小屋飯田町坂下迄

六番　小右衛門組共

飯田町御用屋敷前坂より清水御門之方所々見通り餅之木之方迄

七番　新六郎組共

飯田町坂上より田安御門之方御堀端一番町通牛込御門之方迄

御供代り　久五郎組共　彌左衛門組共

御側

高井五左衛門　市川甚五郎　土備半之允

頭役

中島次郎左衛門　牧三郎左衛門　鷲巣彌左衛門　上野七郎左衛門　土屋喜右衛門

吉川二郎左衛門

御小性

上村源四郎　奥村三平　同秀之助　大久保熊之允

御近習役

富松喜右衛門　市川十次郎　村島清三郎　竹本澤右衛門　上原與三郎　島崎市郎右衛門

御抱守

石場吉兵衛　彦坂丹右衛門　伊藤彌太郎　小林利右衛門　中村元右衛門　熱善之丞　岡山左五郎

爲井吉太夫　弓削多彌左衛門　熊倉斧右衛門　太田權右衛門　菅谷五一右衛門　小笠原彌太郎

中之間番頭

桑原權左衛門　奥御番頭　鈴木三郎兵衛

御膳番
落合鄕八　飯塚源右衛門
近習番
鈴木丈右衛門　田屋仙右衛門　寺島藤四郎　松下專助
右之分二丸罷有候不改晝夜斷次第二丸役人百人組大手櫻田可申達候
一御納戸歸番之儀大御番頭小十人頭へ被仰渡候
一御徒目付小人目付げんじ候樣に御目付へ被仰渡候則御徒目付貳拾五人小普請入
右之通戌十月朔日被仰付候
一大猷院樣御代慶安四卯年戶田五郎左衛門組之節日光山へ御入棺之節落髮にて奉供大切に可仕旨久世大和守殿被仰渡御扶持方並御褒美頂戴仕候御番休相立申候
一捨文有之候節不及差出候燒捨可申候然ども御目付中之宛所又は頭抔之宛所にて候はゞ承合可申候以上右之通り被仰出候
寅二月
酒狂致し刀脇差にて人疵付候者之事
一其主人へ預置疵付られ候者平愈次第療治代出させ可申候療治代出がたきものは刀脇取上ケ酒狂人は主人へ可相渡事但取上候脇差疵付られ候ものへとらせ可申事
一右療治代疵の多少によらず中小性體に候はゞ銀貳枚徒侍は金壹兩足輕中間は銀壹枚差出させ可申事
酒狂にて人を打擲致候者之事
一右同斷但刀脇差取上ケ候に不及身上限り諸道具取上ケ打擲逢候者へとらせ可申事

但右酒狂之儀主人へ斷候節欠落ニ申立候共主人方を罷出三日之內にて候はゞ欠落に相立申間敷候事
右三ヶ條町人は則牢舍申付候次第同斷但主人無之ものは宿所へ歸し可遣事
酒狂にて諸道具損さし候者之事
一過料出させ損失之ものへ取せ可申候輕き身上之ものは身上かぎりに可申付候事
寅三月十六日
○彈左衞門由緒の事
一彈左衞門善七五年以前度々御裁許有之候處善七より彈左衞門支配にて無之段相論去ル廿一日評定所へ被召出候由
彈左衞門　善七　一類七人（是は善七方七人ニ云）　貳人者　三人者
右者非人支配
一去ル廿一日評定所にて被仰渡候は五年以來度々御裁許有之善七を彈左衞門支配に無之段相論不屆に候當善七十三歲幼少何事も不存候處に右七人者共相論依之七人者彈左衞門へ被下候彈左衞門方之仕置に可申付候右七人之家財闕所に可仕候旨被仰付候處七人之者之內壹人無念存評定所之石垣に頭を打付舌を喰切申候由則彈左衞門方より壹人に四人宛相付評定所牢輿に乘町與力衆同心押彈左衞門方へ被參候由
一彈左衞門より善七方之屋敷七人之者家財闕所に差遣候處善七屋敷之內騷動にて善七立退候由右屋敷之內門を閉內へ壹人も入不申候由二人者三人者は七人者に組不仕候に付御搆無之善七幼少に付御公儀より貳人者三人者へ善七御預け善七守立候樣に被仰渡候彈左衞門鎌倉住人藤原賴兼寬文七年未三月二日以付書申上候次第

右は二月廿二日於江戶金剛太夫能有之廿三日より天氣惡敷廿八日より亦初り以上四日迄諸□□桀棧敷は□□舞臺樂屋以下は酒井讃岐守殿御取持にて結構成樣子之由初て能仕候太夫より兼て彈左衞門方へ案內不屆に付舞臺打破候ゝたくみ廿八日之朝諸大名衆町人等貴賤群集之處能初り可申時分彈左衞門手合之者五十人程召連鑓長刀爲持以使金剛太夫是へ罷出候得可申子細有之候其上可相渡物有之候急度罷出候得ゝ申遣候得ば太夫出合不申時御老中より御意被成候て彈左衞門退出可仕候能濟候て御尋被成候に付如此書付

鎌倉住人藤原賴兼彈左衞門穢多より下し者

穢多長吏彈左衞門　猿引　渡守　座頭　非人　山守　青屋坪立　舞々　鉢叩〔筆結墨師〕　猿樂　結搦　關守　陰陽師　土器作　鏡打　壁塗　石切　獅子舞　鑄物師　放下師　蓑作り　傀儡師　笠縫　辻目暗　傾城屋

右之外道之者數多附有之盜賊輩除之賴朝卿より御判有之湯屋風呂屋傾城屋下に付人形廻し淨瑠璃語は傀儡師下に付貳拾八番下可爲也賴朝卿よりイミナの字其外系圖有之候以上

一御意被遊候は前方被仰出候去年も冬被御出候御勝手之儀段々御指詰被遊候上去年之御損毛に付去暮之御切米之內當春迄御借り被遊候事に候夫故當年は被下置候御切米御拂底之御事に候段々當春は右之不足すたりにも可被遊哉ゝ被爲思召候亦は御人をも可被減ゝ被思召候程之御事に候併夫にても御仕置被爲遊候哉ゝ申にては無之御不便に被思召候右之損毛之儀は天下半分ゝ申程之儀にても無之僅の事に候得共右之通御勝手御指詰被遊方も無之思召候依之諸役所御儉約之儀被仰出候得共思召候樣に不相屆候此上御手廻にて御膳所御小納戶觔御身之上之儀彌以御詰可被遊より外之儀無之候兩役所にて只今迄段々諸事被仰出候得共此度も右之躰之儀にては無之何も信實相心得可被勤候右樣之御損

毛にさへ御切米等も得御借不被遊候程御勝手御指詰被遊候前々は時々御切米御借被遊候も順送に被下御手廻に被遊候儀にて無之候彌以右之通りに諸役所萬端心を付候樣にと被仰出候得共末々迄は遠き事故思召候樣に無之候萬端御不自由成を上に御すき被遊候てヶ樣に被仰付候哉と面々身之上考見可申此上は御身勵と被思召故手廻之儀隨分御詰被遊候御勝所御召方只今迄致方は誰にても可成義に思召候自今御事欠之儀なと存ては成申間敷候勿論兩役所いか樣に致候とても少も御定に成申候程之儀は無之候得共左樣に捨置可申樣に無之右御切米等得御借不遊候事に御政務之御甲斐なく御人少も難被遊程に御迷惑に被爲思召候御手廻り之儀諸役所之承傳にも可罷出事にて勿論外之手本に可致との思召にては無事に候偏に御身之御勤と被爲思召御事に候間信實に相勤候樣にと被仰出候以上

寅五月廿六日

右御徒方書留に見ゆ

〇安政改元林家書上

明和九辰年十一月改元之年號文字御尋之節申上書付寫

年號文字九號幷見仕候處何も出所等宜御座候其內安永文長之二號宜奉存候

安永

文長

安ノ字上ニ付候ハ安和安貞

永ノ字下ニ付候ハ寛永實永

文ノ字上ニ付候ハ文明文祿

長ノ字下ニ付候ハ建長慶長

安和　　冷泉院
安貞　　後堀河院
寛永　　後水尾院
寶永　　東山院
文明　　後土御門院
文祿　　後陽成院
建長　　後深草院
慶長　　後陽成院

前々年號文字相考候處二號共宜奉存候其内安永之方寛永寳永之例御座候て別而宜奉存候以上

十一月四日　　林大學頭

○文化改元記

文化
周易曰。觀乎天文。以察時變。觀乎人文。以化成天下。
後漢書曰。宣文教以章其化。立武備以秉其威。

嘉德
左氏傳曰。上下皆有嘉德而無違心。
史記曰。長承聖治。群臣嘉德。

嘉政
唐書曰。嘉其美政。題賛於聽事。

萬寶

　文選曰。蕩乎大乎。萬寶以之化。

嘉永

　宋書曰。思皇享多祜。嘉樂永無央。

文政

　尙書孔傳曰。舜察天文。齊七政。

萬德

　文選曰。萬邦協和。施德百蠻。而肅愼致貢。

年號字七號之中文化嘉德可然

主上　仙洞　思召候尤丞相衆中へ　勅問有之候處兩號多被擧奏候但文化之號殊可然哉之御沙汰に候得共於關東思召有之候者嘉德之號可被用候歟兩號之中關東思召被　聞食可有御治定候此旨關東へ宜被申入候事

十二月

　　傳奏衆被致持參候書付寫

改元に付赦之事先例之通可有御沙汰候事

　年號改元之儀に付傳奏衆被申聞候樣申進候書付

今廿七日廣橋前大納言千種前中納言拙宅へ被參年號文字之儀御內慮被　仰進候旨にて勘文一通並七號之文字唱假名附一通被致持參候に付差上申候右七號之中文化嘉德可然

主上　仙洞　思召候尤丞相衆中へ　勅問有之候處兩號多被擧奏候但文化之號殊可然哉之御沙汰に候得

共若於關東思召有之候者嘉德之號可被用候歟兩號之中關東思召被　聞食可有御治定候此者其御地へ宜申上由兩卿書付被相渡候間則致進達之候右之趣爲可申上次飛脚を以申上候以上

十二月廿七日　　青山下野守

年號改元之儀に付其御地御返事之儀並赦之儀に申被進候書付

年號改元之儀に付被申聞候趣正月十五六日頃迄に其御地ゟ御返事有之候樣可致沙汰旨傳奏衆へ申聞候則致持參候書付寫入御披見候依之差急申進候に付若道中川支等も難計候間東海道中山道兩方へ同樣之宿次刻附差立申候尤東海道之方へは兩卿被致持參書付本紙差進候中山道のかたへは右寫にて致進達候

一改元に付赦之儀先例之通可致沙汰旨是又兩卿へ申聞候則被致持參候書付寫入御披見候例之通改元翌日輕罪之者赦可申付哉相伺之申候以上

十二月廿七日　　青山下野守

○本朝國號考〔垂加文集〕

五畿內

山城〔山州〕　大和〔和州〕　河內〔內州〕　和泉〔泉州〕　攝津〔攝州〕

東海道

伊賀〔賀州〕　伊勢〔勢州〕　志摩〔志州〕　尾張〔尾州〕　參河〔參州〕

遠江〔遠州〕　駿河〔駿州〕　伊豆〔豆州〕　甲斐〔甲州〕　相摸〔相州〕

武藏〔武州〕　安房〔房州〕　上總〔總之上州〕　下總〔總之下州〕　常陸〔常州〕

東山道

近江〔近州〕　美濃〔美州〕　飛驒〔飛州〕　信濃〔信州〕　上野〔野之上州〕

下野（野之下州） 陸奧（奧州） 出羽（羽州）

北陸道

若狹（若州） 越前（越之前州） 加賀（加州） 能登（能州） 越中（越之中州）

越後（越之後州） 佐渡（渡州）

山陰道

丹波（波州） 丹後（丹州） 但馬（但州） 因幡（因州） 伯耆（伯州）

出雲（雲州） 石見（石州） 隱岐（隱州）

山陽道

播摩（播州） 美作（作州） 備前（備之前州） 備中（備之中州） 備後（備之後州）

安藝（藝州） 周防（周州） 長門（長州）

南海道

紀伊（紀州） 淡路（淡州） 阿波（阿州） 讃岐（讃州） 伊豫（豫州）

土佐（土州）

西海道

筑前（筑之前州） 筑後（筑之後州） 肥前（肥之前州） 肥後（肥之後州） 豐前（豐之前州）

豐後（豐之後州） 日向（日州） 大隅（隅州） 薩摩（薩州） 壹岐（壹州）

對馬（對州）

右依釋師鍊實之。具記之。俗稱山城曰城州。呼周防曰防州。猶之可也。阿波曰阿州。伊賀曰伊州。近江曰江州。美濃曰濃州。佐渡曰佐州。丹波曰丹州。總野之上下。稱上州呼野州。越備之前後中。稱越

州呼備州。筑肥豐之前後。稱和筑州肥州豐州。則不可也。山崎嘉識焉

○庚申（同）

太上感應篇曰。有三尸神。在人身中。每到庚申日。輒上詣天曹。言人罪過。（三尸在人身中每至庚申日與身中七魄上詣天曹言人罪過乃其職也按經所說修眞之人先當絕去一云三守庚申三尸伏七守庚申三尸滅守者不寢也イ欲三尸得以言其過也一云甲寅日三尸遊兩手當去兩手指甲甲午日三尸游兩足當去兩足指甲此名斬三尸隨所在而去之內則守心外則去甲此修行之初法也嘉按三守七守見段成式酉陽雜俎

宣室志云。僧契虛遇仙人。曰爾絕三彭之仇乎。彭者三尸之姓。學仙者先絕三尸。注。彭瓆彭琦彭琚。

徐氏筆精二曰。道家說三尸即三彭。謂彭琚質彭琦也。唐詩守庚申之說本此。

柳柳州罵尸蟲文。見柳文十八。羅景綸書罵尸蟲文後云云。見鶴林玉露天集四。

群談採餘十辨惑部曰。道家言。人身有三尸蟲。謂之三彭。每庚申日。乘人之睡。以其過惡。陳之上帝。故學道者。過是夕輒不睡許郢州詩云。夜寒初共守庚申。是也。柳子厚集有罵三尸蟲文。吳淵穎有三彭傳。則儒亦以爲有是物矣。嘗記避暑錄話載程紫霄詩云。不守庚申。亦不疑。此心嘗與道相依。玉皇已自知行止。任爾三彭說是非。此近道得孔子禱久之意也。

續日本紀卷九。神龜元年。冬十一月。庚申。召諸司長官並秀才及勤功人等。賜宴於中宮。賜絲各十絇。（嘉按聖武天皇即位改元神龜爲元正年號者誤矣以曆推之冬十一月朔丁巳四日庚申）

延喜帝庚申御遊。（見西宮記）

朱雀帝天慶二年內裏有庚申御遊。（年表）

一條帝長保元年五月九日庚申。（以曆推之是月朔壬午無庚申六月朔壬子九日庚申）有三尸御遊。五年六月二日庚申。殿上守三尸。（年表）

菅家文草。守庚申詩二首有之。
庚申夜寐時誦歌。見淸輔袋草子。
俗傳庚申緣起。帝釋使猿來天王寺云云。是浮屠竊道家說造之耳。夫守庚申之惑甚矣。不足深辨也。柳文之竊玉露之譏。皆可以打破酒囊飯袋。而羅氏爲優矣。程道士爭得丘禱之意。其滑稽可哂耳。
本朝庚申元祭猿田彥神。相傳之秘訣也。頭詠之歌。伊勢御師口傳有之。（良顯云近來蟠龍子著俗說辨義庚申之事不知我國神道之秘訣而妄論之無稽之說也凡世儒不學神道而議我國之事故其謬多是疎格物致知之故也）

○名物出猿入猿之御鐙傳來寫

應永中將軍足利義滿公御隱居鹿園院殿御馬妙術に御達之上御自身に鞍鐙を御打被遊候然る處御夢中に猿之御幣かたげ居候を御覽被遊依之御年御四十一ミ二に右出猿入猿之御鐙を二足御打被遊尤其砌八幡へ御側衆三七日日參被仰付將軍にも二十一日之內御精進御けつさい御愼被爲在御武運長久之御祈願被遊御出陣之節は右御鐙を御乘替に被遊正月御乘初之節は右御鐙御飾附被遊御持傳之趣にて殊に疱瘡前之ものに戴かせ候得ば決而輕くいたし候由申傳候一名御守鐙とも勝利鐙とも世に申傳候出猿之御鐙は松平阿波守樣御所持此度外方より之は入猿の御鐙に御座候猶委敷は本書に有之

辻山城守
政雄

二ッ折裏白

紋入猿之鐙一覽

致候之處東山三代目

将軍
義満公鹿園院殿御正作に
無怪者也御秘蔵尤の事に候
爲後日仍添狀如件
文化十三年丙子年　辻前山城守
正月廿一日　入道篤翁判
追加寛政年中此御鐙
一覽吟味之上添狀認置
候得共燒失に付此度
再覽之上添極相認進
候者也

○白川侯和歌

寛政五丑年御補佐松平越中守殿巡見之節
丑三月廿三日山田旅宿にて長閑なる春雨に時を得て荒田うちかへすさまいと賑はし我輩は今日の雨をうしといふ也されば矢人の悦所は函人の愁る所也只その輕重を計りて本末を考へてその得失をも知るべき也只目の前の榮辱にひかれて姑息によりて苟且におちいるこそなげかしけれ

源　定　信

民草のうるほふ雨に時を得て古きにかへす春の小山田

其澤未徧民落未改困窮未愈がごとし爰に至て我輩の罪にして言べき言葉もなし
右丹州へ〔御勘定奉行郡代兼久世丹後守〕
今日人々いふ空の半に白妙に聳へたるは又たぐひあらじ實に富士に勝る高きは有まじといふにこそ
彌高き若が裏にくらべては塵ひちなれや雪の富士の根
右森山源五郎へ〔御目付〕
○丹後國成相寺境内地裂候御屆〔文化元子年〕
私在所丹後國宮津城下より乾之方山手貳里程隔候て成相寺觀音安置仕有之候去亥年十二月下旬より右境內池之坊と申畑より鐘樓堂下迄百間程地裂陷入候處當子正月下旬より次第地裂所に寄候ては七八尺づゝも陷入候場所有之地裂候處晝夜に五三分つゝ陷入候樣子に相見申候其外谷間國所も有之境內諸堂社並寺院住居類候所々有之追々取片付申候段在所家來共申越候尤人馬怪我無御座候異變成義に付御屆申上候以上
四月十三日　　　　松平主計頭
右なり合觀音は西國三十三所札所にて日本三景之天の橋立と承候尤地震等も無之自然に陷入候由及承候
○信州地陷候御屆〔文化六巳年〕
文化六巳年三月廿五日御用番牧野備前守殿御退出後差出之
私在所信州安曇ツミ郡中谷ナカヤ村枝鄉大久保土谷ツチヤ村枝鄉吉尾同宮本石坂村枝鄉堀地同下澤原來馬村枝鄉山中央に人家有之候處當二月廿一日より右山中所々割動拔下り候樣子にて人馬共に近邊村々へ引退候然處同

廿四日暮合後に至南北五百間東西九百間餘之場所一時に拔崩前書四ケ村枝郷六ヶ所家數廿七軒田畑共押埋申候尤人馬怪我無御座候變事之儀に付此段御屆申上候以上

三月十五日　　松平丹波守

在所之日附

○京傳机塚

京傳机塚碑文相願候に付

口上之覺

〔京傳〕姓磐瀨氏名醒字酉星醒齋と號す一字京傳又山東庵と號す文化十三年丙子九月七日沒す國豐山回向院に葬申候

磐瀨朝臣人上〔陸奧國磐瀨郡人外正六位上兒部人上神護景雲三年三月辛巳姓を磐瀨と賜〕の遠裔にて御座候

近古磐瀨資詮と申候者太田道灌に仕候て謀慮の臣たりしに道灌亡後去て勢州に住し世々鄕士にて數代〔　〕仕候〔京傳〕父は信明と申勢州一志郡の鄕士信篤の二男にて江戸へ來り某侯に仕候へども多病にて仕絆を脫し市に隱申候〔京傳は〕信明の長子に御座候母は大森氏

〔京傳〕若年の頃花柳に遊て其光景を著作いたし又は野史の戲編を著し候へども性來篤實にて親に仕て孝行仕候て筆と心とは甚相違仕候事御存之人物なる事御認め奉願上候才力學量の義もよろしく御擧奉願上候

〔京傳〕生前之遺財にて家弟〔百樹〕碑を建候事御認め奉願上候

御落款の義は

御號○○　御姓○○　御名○　に被成下被度願上候

右筆者之義は雅慮には相協申間敷候得共私相認申度奉願上候とても私生涯碑文之書を相賴申候馬鹿ものも有之間敷候間せめては兄の碑文相認後年にいたり悴や孫どもにかたみとも見せ申度生前の耻大方の笑は覺悟の前に御座候

淺草觀音地中人丸堂の前榎大樹のもとへ建申候

右碑のめぐりへ四ツ目結の竹垣いたし芝をふせ下た草あしらひ景色をとり申候

碑寸尺　總高六尺四五寸

碑面へは〔京傳〕生前題し置候古机の記をしるし碑蔭へ

御文章奉願上候

記を題し候古机は碑下へ瘞申候

その事は古机の文の末に

右一則は家兄生前題する所其机をこゝにうづめて爲建之と申事を漢文にて

年號　　京山磐瀨百樹題並篆額

など可仕哉此義も御さしづ奉願候

〔京傳〕古机の記の落款は　山東庵京傳　と可仕哉に存候磐瀨醒といたし候ては古机の文並俳諧歌に對

しあまり落欵かたく且俗に通じ申間敷候

古机の記

明和六年といふとしの二月ばかり齢九歳といふに師のかどにいりたちていろはもじならひそめしをりかぞいろはのもとめえてたまはりしふみづくゑぞこの机なるその日よりこのつくゑのもとさらずつくれる冊子は百部をこえつもれる歳は五十にあまれり今はおのがこゝろたましひもほれ〳〵しうまなこもうちかすみゆくにつくゑも耳おちあしくじけゆがみてもろおいにおいしらへるさまなるはあはれいかゝはせむ

耳もおち足もくじけてもろともに世にふる机なれも老たり　山東庵京傳

○醒齋翁の机塚に詣てよめる長歌　四方歌垣眞顔

山東江門に生れて牟奈伎なす香委しき名を香疾のはやくよりして天つちにとゞろかしける落瀧津岩瀬の小父は小米雛ちひさき時ゆおほぢうばの昔々に語繼言繼來ぬる古事のことの傳へをおむかしみ思ふさがありてひいな草根とび薬ごひに間さぐる耳の垢取みゝの底にとまれる事等竹馬のこゝろにのれるふし〴〵のなにはのことも手習の机によりて石などりひとつおとさず丸盡し縮にさへ寫し年月とつもれるまにも思ほさくいそのかみ雛ふるき世を今のうつゝにみるが如あらせんものと鏡磨とぎし心を振おこしつめるいさをは山の井のあさくはあらぬ淺黄椀ふたとせみとせ飲くひも味だにしらず寝ふしもうまくはなさで風呂褌かきあらためしいく巻のふみを携へ名古屋帯打くむ糸のより〳〵に暇ある日は茅巻馬きうりの牛の牛は牛馬は馬づれと虫垂のきぬのうらなき友どちをかたらひあるき春部には上野の岡の櫻蔭花をみる日も芳野なる花の果物いかにして得ましとねがひ秋立ば隅田河原にすむ月を翫ぶ

夜も駒形の螢のあこを追ひしのびをぐらき方は道々の人にもたづね自らもさこりわきため玉かたま籠挑灯のもるゝなく燈をかゝげ見世棚に火榻の櫓硯蓋齢の末に若草の後妻打の手摺小木こしのはじめに玉はやす聟を祝へる粥杖の古ものすらを置並て商ふが如こゝたくのここ書まじへ珍らしき書こなしつゝ夏の日のねぶりを醒し長き夜の酔を醒しぬうべな／＼醒の翁こ人皆のたゝへし事も此ふみを見てぞしらるゝこれぞ此浮世袋の底寶打出の槌の價なき寶なりけるつぎ／＼に出る寶をいつしかこ待をるほごにいかなりし宿世結の玉の緒か世を長月の名にも似ず菊の籬にさき立て豆腐に見ゆるもみぢばの過ていぬるこ岩がくれ隠れ遊びのうつたへに影だに見せず聲もせず成にし日より目なしごち軒の雀の鳴くらす友をあごもひ今日さらに涙の雨のふるづくゐ後のかたみこ棄籠し塚に香焼むく／＼の小袖の袂しぼりつるかも

反歌

此山の花や紅葉を机代春秋こはむ塚もなつかし

〇諸國銀銅山名

一野州足尾銅山　吉川永左衞門
一奥州半田銀山　寺西重次郎
一石州銀山　阿久澤修理
一但州生野銀山　恩田新八郎
一攝州多田銅山　石原庄三郎
一出羽國幸生銅山　池田仙九郎
一備中國吉岡銅山　松平越後守御預リ所

一陸奥國叶津村出銅　松平肥後守御預ヶ所

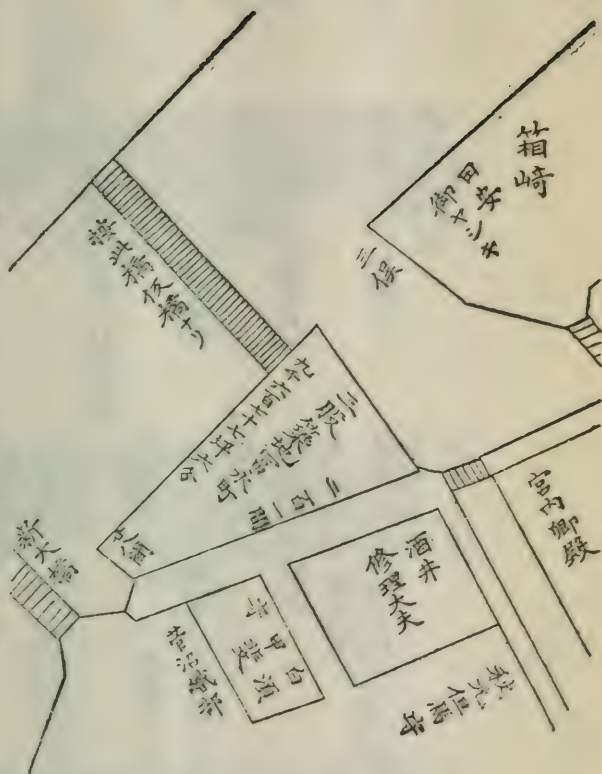
○新編江戸志抄

新編江戸志

引用之書目

舊事紀　日本書紀　續日本紀　日本後紀
三代實錄　文德實錄　類聚國史　神名帳
扶桑略記　公卿補任　一宮記（建保頃荒木田氏印）
諸神記　武藏風土記　元亨釋書　和名類聚抄
万葉集　伊勢物語　八雲御抄　井蛙抄
更級日記　名所方角抄（宗祇）　慕景集（太田道灌）　名所類字和歌（細川玄旨）
萬葉代匠記（契沖）　勢語臆談（仝）　勝地吐懐編（仝）　東鑑
源平盛衰記　參考太平記　鎌倉大草子　關東治亂記
北條五代記　北條盛衰記　豫章記　武德編年集成
家忠日記　關難問記　本朝通紀（長井定宗）　將軍家譜（道春）
本朝三國志　婦女傳系　諸家續胤　諸家醫傳
武家名數（門龍子）　諸家系圖　猿樂傳來記　寛永記
和漢三才圖會（良安）　高野事略　了譽上人行業記　北國紀行（堯恵）
丙辰紀行（道春元和ノ頃）遠遊紀行（山崎）　鎌倉紀行（戸田氏）　木曾路記（貝原氏）
驛路鈴　東海道記（松井喜春）　神社考（道春）　神社啓蒙（白井宗因）

諸社一覽　神社略記（荒木敦春）　紫一本（侯逸元和頃）　武藏野路草（法源）
名所談（元祿七年梓）　江戶雀　江戶鹿子（松月堂不角元祿二年）
江戶砂子（沾凉享保十七）武藏野地名考（田澤義章享和之頃）　江府名勝志（南陽子享保十八）
詩家地名考　地名箋　南向茶話（酒井忠昌）　求凉雜記
高田雲雀　落穗集　舊事茗話　新著聞集
江戶繪圖（寬文天和寬永元祿）　耳底記（光廣卿ノ耳底記ニ非ズ近世ノ俗書）
著聞異事　新見隨筆（正朝入道享保ノ比）　温故隨筆（竹叢平高尙）
宗祇廻國記　國名風土記　國華萬葉記　珍書考（鵜飼信興元祿頃）江家次第
可成談（徂來）　擧白集（木下長嘯）　風土記殘編辨（平祖衡正德頃）
都のつと（釋宗久）　政談（徂來）　兵家茶話　秋ね覺
東武編年錄（道春）　大系圖（公定朝臣）　諸社諸寺緣記　同舊記
政事要略　鎌倉志　犬追物記（林春齋）　神明憑談（多田義俊）
關東古戰錄（槇島氏）　雜話筆記（白龍子）　螢雪新話（紀音子）　萬葉考（眞淵）
寺社拾遺　鎌倉九代記

江戸志巻一

安永壬辰年馬込勘ヶ由願之三股新地築立御用掛御目付河野吉十郎安嗣〇九千六百七十七坪六合號三股富永町

寛政元己酉年冬大川浚に付如元堀之河となる御手傳立花左近將監阿部伊勢守秋元但馬守被仰付候此土を假橋を掛深川へ運靈雲院其外へ置候由

加賀美遠清之圖

同書卷三

神田社

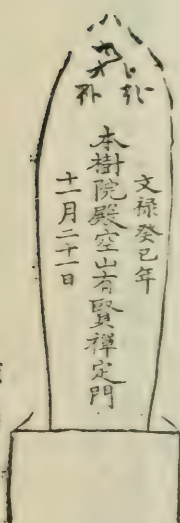
江戶砂子云略

按ずるに江戶砂子に延文頃より將門靈を祭神田二座とする事誤なり寬永記曰寬永三年十一月十日京都より公家衆下向是は行幸御禮の爲也此時烏丸大納言光廣卿江戶須田町を通られしに垣結廻したる古塚ありける御覽して如何成者の標こご尋られしに是は平將門也勅勘の人故古へより如此誰祭る事も成ざる由申ければ光廣卿將門は朝敵たりこいへ共武勇の名譽ある人也最早年久しく歷たれば勅免有て八所御靈の僞に任せ神靈を祭らば國家の鎭守共成べきとて將軍家へも窺れ歸京の後奏聞有て勅免有しかば近所故神田明神の社内に祭り貴賤群集して參詣せり寬永三年十二月九日勅免有ける也神託により九月十五日祭禮有こ記すしかれば將門を相殿に祭りしは寬永よりの事にして往古の沙汰にはあらず江戶砂子誤れりこいふべし

同書卷五　近藤金八義休

孤雲山乘蓮寺

淨土　增上寺末

板橋信濃守墓

右は乗蓮寺境内にあり

覃云今此古碑をすてゝ新碑を建つと云

伽羅稲荷社

一名木下藤吉伽羅稲荷と云その本源鎮座の年歴をしらず予一とせ此稲荷へ詣て社僧に尋ぬるさいへども縁起さだかならず本意なく歸り侍りき

同書巻六

旭曜山末成院常照寺〔上高輪〕

天台　上野末

太子堂　十六歳御影御自作

稲荷社

庚申堂　青面金剛は民部卿作也　縁起〔略〕

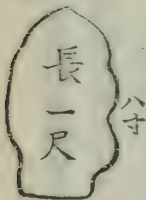
松花石　當寺實物長一尺幅八寸程厚サ五寸計前橋少將の亭へ天女持来りしを當寺へ奉納申候ことかや其箱の銘に

奉納古木化石一物

江戸城外志波聖德太子堂

萬治元年閏十二月廿二日　前橋少將忠清

長一尺

八寸

同書巻七

赤坂

或人の云赤坂の見付は寛永十二年乙亥十一月十一日よりはじめて建往來せしと赤坂名主秋元八郎左衞門方帳面書留ありと云又いはく左の趣秋元八郎左衞門方古帳面在之由八郎左衞門が父貞雄へ瀨名貞雄ナリ物語の由書付留置候

一貝塚と云事赤坂鮫ヶ橋抔を云上古は大久保四丁町邊梅ホノマヽの木市谷麴町五丁目邊までを貝塚と云南の方は西の久保ふきで町邊迄貝塚の內也とぞ

一赤坂一木町の町家になりたるは天正十九年の事也

一上古は人次と書しを後一木と書替たり是上一木下一木兩所共に大木ありし緣也上一木といひ傳へしはくらやみ坂禪閣業王寺に大木の榎ありて一木藥師と云下一木の大木は元氷川辨天の社內の榎也但下一木も藥師在也淸岸寺の藥師也是上一木の藥師と同作同木なるよし申傳へたり

一赤坂田町町家となりしは寬永十二年同十三年兩年に町家となる

一赤坂傳馬町の町家となりしは寬永十六年の事なり

一赤坂御門外の稻荷を玉川稻荷といふよしこれは水道方玉川庄右衞門勸請の稻荷にて神木に柳ありノマヽ上古赤坂御堀ばた黑田家館の邊迄の間を柳堤と云云是上古秋元八郞左衞門畑境の柳の由也片黑田家辻番所の側に在也柳は右古柳の內の木なりと云云

同書卷九

堅川

續砂子に一ッ橋長九間三のはし長九間中の橋に新辻番とも四の橋十間五ッ目は橋なし船渡也六ッ目も橋なし橋々の間凡四丁程あり

貞雄云堅川は淺草川の入口より逆井の渡し迄一里八丁四拾八間ありと云

撞木橋　中のはし前三方に掛るを云
扇橋　　小名木川通り新高橋の所三方に掛るを云
同書巻二
新吉原ノ次ニ
枕橋　反圃慶印寺の石ばし也片葉のあしあり
覃按今俗に源吾橋の所をいふは誤也
○高陽闘飲巻（中屋六左衛門酒家ナリ擁書漫筆ニモ此酒戦ノコトアリ）
高陽闘飲序
千壽驛中六亭主人。今茲年六十。於是開初度之宴。爲闘飲之會。乃先期發招單。大集都下田間之飲客。如狂花（俗言波良多智上戸）病葉（俗言爾武利上戸）酒悲（俗言奈起上戸）歡場害馬（俗言利久津上戸）之類。則槊斷卜吉之日。相會者凡一百餘人。皆一時之海量也。各々左右分隊相座。每方一人升席。左右二人相對而擧白焉。乃立觴政。置錄事而督之。嬌女三人侍其側而給仕焉。皆柳橋之名妓也。一人捧盃而進舍其前。二人各執注子。左右注之。其酒則所謂玉綠。即伊丹之上釀。其羮則鯉魚。即綾瀨之鮮鱗也。肴核雜陳。種々不一。其盃則措金彫鏤。實希世之珍也。自五升而登之。或一斗。或一斗二升。受三斗爲至大而已。或有一口吸盡者。或有數口而竭之者。大小之盞。一々傾其籌者。是爲第一名焉。其餘則次之爲差。各々簿錄。以課甲乙輸贏。其籌不滿斗者。不在此數。各々双手捧盃引滿。轟飲不餘一滴。實如長鯨吸百川矣。觀者皆吐舌。座客喝釆不已。至飲畢。衆莫有多言喧嘩。皆致禮辭謝而歸。余亦酒人也。雖然吾自知其量之不敵。退逃其隊。在傍而觀之。乃歎云。古人謂酒有別腸者。如今日之人者邪。宋張安道劉潛石曼卿。日夜對飲。而不別輸贏。明王漸白下道士。闘飲而定甲乙。水蓮道人輯酒

顚。無懐山人著酒史。以述其事。爲太平之盛事。不亦宜乎。嗚呼主人壽已六十。而又自祝此太平之盛事。則主人之先。其有天之美祿者乎。時文化十二年歲舍乙亥冬十月廿一日也。

關東鵬齋老人興禪龍父撰

後水鳥記

文化十二のとし乙亥霜月廿一日江戸の北郊千住のほとり中六といへるものゝ隱家にて酒合戰の事あり門にひとつの聯をかけて不許惡客〔下戸理窟〕入庵門としるせり、雨山先生の書なり、玄關ともいふべき所に袴きたるもの五人、來れるものをの〳〵の酒量をとひ切手をわたして休所にいらしめ、案内して酒戰の席につかしむ、白木の臺に大杯をのせて出す、そのさかづきは

江島盃〔五合入〕
鎌倉盃〔七合入〕
宮島盃〔一升入〕
萬壽無彊盃〔一升五合入〕
綠毛龜盃〔二升五合入〕
丹頂鶴盃〔三升入〕

をの〳〵その杯蒔繪なるべし

干肴は臺にからすみ花鹽さゞれ梅等なり、又ひとつの臺に蟹と鶉の燒鳥をもれり、羹は鯉のきりめ正しきにはた子をそへたり、これをみる賓客の席は紅氈をしき青竹をもて界をむすべり、いはゆる屠龍公文晁鵬齋の二先生その外名家の諸君子なり、うたひめ四人酌とりて酒を行ふ玄慶といへる翁はよはひ六十二なりとかや、酒三升五合あまりをのみほして坐よりまかり通新町の秋葉の堂にひとひ一睡し

て家にかへれり、大長ときこえしは四升あまりを盡して近きわたりに醉ふしけるが、次の朝辰の時ばかりに起て又ひとり一升五合をかたふけて醒をとききのうの人々に一禮して家に歸りしとなむ、掃部宿にすめる農夫市兵衞は一升五合もれる萬壽無疆の盃を三ツばかりかさねてのみしが、肴る蕃椒みつのみたりきつとめて叔母なるもの案じわづらひてたづねゆきしに、人より贈れる牡丹餅といふものを圍爐裏にうちくべてめしけるもおかし、これも同じ邊に米ひさぐ松勘といへるは江島の盃より飲はじめて鎌倉宮島の杯をつくし萬壽無疆の盃に至りしが、いさゝかも醉しれたるけしきなし、此日大長と酒量を戰しめてけふの角力の最手(ホテ)占手(ウラテ)をあらそひしかば、明年葉月の再會まであづかりなだめ置けるとかや、その證人は一賀新甫鯉隱居の三人なり、小山といへる驛路の佐兵衞ときこえしは二升五合入といふ綠毛龜の盃にて三たびかたふけしとぞ、北のさと中の町に住る大熊老人といへるは盃の數つもりて後つゐに萬壽の杯をかたふけその夜は小塚原といふ所にて傀儡をめして遊しときく、淺草みくら町の正太といひしは此會に赴んとて森田屋何がしのもとにて一升五合をくみ雷神門まで來しが、其妻おひ來て袖ひきてとゞめしをいなとてすまひければその邊の者の俠客の長とよばるゝもの來りなだめて夫婦の者をかへせしが、あくる日正太千壽に來りてきのふの殘り多きよしを語り三升をます飲せしとなむ、石市と聞えしは萬壽盃をのみほして醉心地に大盡舞のうたうたひしもいさましかりき、大門長次と名たゝるをのこは酒一升酢一升醬油一升水一升とを三味せんのひゞきにあはせをの〳〵かたふけつくせしも興あり、かの肝を膾にせしといひしごとくこれは腹を三杯漬とかやいふものにせしにやと云べし、さばくらう町の茂三は綠毛龜を傾け、千住にすめる鮒與といへるも同じ盃をかたむけ、終日客をもてなして小盃の數かぎりなし、天五といへるものは五人とゝもに酒飲てのみがたきは皆たふれふしたるにをのれひとり恙なし、うたひ女おいくお文はひねもす酌とりて江島鎌倉の盃にて酒のみけり

其外女がたには天満屋のみよ萬壽の盃をくみ酔人をたすけ得てみづから酔る色なし、菊屋のおすみは綠毛龜にてのみおつたといひしはかまくらの盃にて飲ちかきわたりに酔ふしけるとなん、此外さけを飲といへどもその量一升にみたざるははぶきていはず、文晁鵬齋の二先生はともに江島鎌倉の盃をかたふけ小盃のめぐれる數をしらず、歸るさに會主より竹輿をもて送らんといひおきてしが今日の賀筵に此わたりの驛夫ども樽の鏡をうちぬき瓢をもてくみしかば驛夫のわづらひあらん事をおそれしに、はたしてみな酔臥て輿かく者なし、この日調味の事をつかさどれる太助といへるは朝より酒のみて終に丹頂の鶴の盃を傾しとなん、一筵の酒たけなはにして盃盤已に狼藉たり　時に門の外面に案内して來る者あり、たそと問へば會津の旅人河田何がし此會の事を聞て旅の宿の主をともなひ推參せしといふ、すなはち席に臨て江島鎌倉より初て宮島萬壽をつくし綠毛龜まで五杯を飲ほし猶丹頂の盃のいたらざるをなげく、ありあふ一坐の人々肝をけしてこれをとどむ、かの人のいふ去がたき所用のありて明日は出たゝんとすれば力およばず、あはれあすの用なくば今一獻つくさんものをと一禮してかへりぬ、この日文臺にのぞみて酒量をしるせしものは二世平秩東作なりしと、むかし慶安二のとし大師河原池上太郎左衛門底深がもとに大塚にすめる地黄坊樽次といへるものゝむねとの上戸をひきぐしおしよせて酒の合戰せし時、犬居目禮古佛の座といふもの水鳥記に見えたり、ことし鯉隱居のぬしに到りてふたゝびこの戰をもやふすと告るまゝに犬居目禮古佛座禮失求諧千壽野といふ事を書贈りしかば、その日の懸物にはせしと聞えし、かゝる長鯨の百川をすふごときはかりなき酒のともがら終日しづかにして亂におよばずまた禮義をうしなはざりしは上代にもありがたく末代にも又まれなるべし、これ會主中六といへるものゝ六十の壽賀をいはひてかゝる希代の戯をなせしになん、かの延喜の御宇亭子院にみき賜りし記を見るに其選に應ずる者わづかに八人、滿坐酩酊して起居靜ならず、あるは門外に偃臥

し、あるは殿上にゐもいはぬものつきちらしてわずかに亂れざるものは藤原の伊衡一人にして駿馬を賜りて賞せられしとなん、かれは朝廷の美事にしてこれは草野の奇談なり、今や墨田河の流つきせず筑波山の茂きみかげをあふぐむさしのゝひろき御めぐみは延喜のひじりの御代にもたちまさりぬべきを此一卷を見てしるべきかも

六十七翁蜀山人緇林樓上にしるす

右後水鳥記一篇原本佚焉今據齋藤雀志君所藏高陽鬪飲圖卷補之明治癸未八月　南洋學人識

酒戰場中勒酒兵。東西排列各策名。肴如陵酒如海。飲似千尺横潮鯨。時今太平無一事。纔於醉鄉見戰爭。鸞鸑杯鸕鷀杓。滿々斟來輕々傾。將此酒軍有所向。定識天下無愁城。生來我亦太愛〔酒之〕。糟邱會欲因君營。

題酒戰圖　詩佛老人大窪行

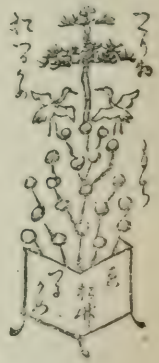
前年余在崎陽。屢與唐客劉景筠江芸閣輩飲。皆能飲其酒。而不能飲吾酒。因叩其說。乃云。苦醇釅而頭痛矣。試味其所賚紹興酒者。其淡而帶酸。飲至數十盞。始能面潮紅已。因是觀之。八僊歌中。三盃已上。飲至五斗者。亦甚易々已。頃千住中六隱居。以酒戰圖卷乞跋尾。南畝醉客記之。鵬齋酒人序之。盡矣。如余小戶。夫復何言。唯記前年與唐客飲事而返之。嗚呼使此酒兵與彼十萬。相當千倉海上。則其能不醉倒而歸者。亦僅三人也已。乙亥嘉平月。寛齋寧題。時年六十七。

○元和七年辛酉十二月資勝卿記〔女御樣御脇フサキノ事〕

元和七年辛酉十二月十五日

一女御樣御脇フサギ也〔資勝卿記〕

御わきづけの御いはひのしだい

めし物御はたこうばいふたつゐり御はりはかまの御うへにいつゝぎぬ色は薄色御もんあふひのま
る御かけおひおなじ御もんにからおり
物御うしろのもはつねのごとく御なが
かもじにて御ざへ御なをりなされ候て
かう御いはゐのやう

かた／＼に三ぜんづゝ
以上六ぜん御すはりな
され候これはなをいか
物と申候

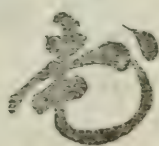
右左にいか物三ぜんつゝ
中にひきわたし御ほうさう御てうしのくこんつぎに三ぼんだての御いはひみな御ぜんに松たけつる
かめゐをかき申候なり
四はうにむすびまつをたてすみ／＼にしろきねりいとふさ／＼とむすびさげ中の御ぜんにはこはく
御おほきにきやうにして金がみにこしをまきうへにまくわうりほごにつくね申候御こは三ツすへ二
の御ぜんくさのすぎなりの御きやうさてその外はつねの七五三にて御ざ候これはこなたの御てんに
て
御まへ
上々ふは大なごんのすけ殿御てながはひやうぶ卿殿御まへしこうはごん中なごんわたくし大御ちの
人
左に御みすをかけ御しのびにて
うへ様　女院の御所様御けんぶつなされ　女御様の御うつくしさ
うへ様もながめいらせられ候つる
はれの御ぜんひやうぶ殿げにもめされ候てめでたくうつくしささすが　みだい様めしつかい入候こ

女院の御所樣御ほめなされ候てわたくしまでまんぞく申候計にて御座候十五日は
上樣御しやうしにてさて又十六日御所へなしまゐらせ候ほんの御ふた所樣御いはいにて候つる十六
日にはだいはんごころさ申候所にて　女御樣御きぬまへのごさくめして御ひたいにさしぐしさ申て
色々の物御さしなされ候て同じ所のはうへむかはせられ三たび御はいさ申候事なされ候てさて
うへ樣の御まへゝならせられ候御ざはいつも　公方さま御さんだいの所にて御ざ候三こん御ふた所
樣御まへこをりて女御樣の御しやくにて
うへ樣へまいられ又
うへ樣の御しやくにて　女御樣へまいられ候このいはひは女中たちまぜずに御ふた所さまにて候御
さかづきあがり申候このさしぐしあそばし候へばてん人などのやうでよくにあひて御うつくしさ
うへ樣さき／＼へならせられ御ごをりなされ御すがたながめいらせられ候つねのごさくの御きぬよ
りちいさく御身さまもよくにあい參らせ候うつくしさ御まへのしゆうもいまひさめ見申たきこほめ
申され　みだいさまの御めにかけ參らせたくこぞんじ候ばかりにて御ざ候つるあこさきわけきこへ
申まじく候へ共申上候ひろう候てくだされ候べく候めでたく／＼／＼かしく
　上々婦さま
　あはさま
○細井廣澤書牘
尙々御入念候御書中忝奉存候
　貴　札　忝　致　拜　見　候　大　暑
野婦家兒へ御傳筆申聞候忝奉存候由

之時節御堅勝珍重
中文三郎廣き所へ參候こて悦申候い上
奉存候私儀今度無存懸
百人組與力闕へ被
召加殊に舊功等も相立候上
學問手迹等迄御用にも可
指立旨にて御指入こ申
事に罷成候外實こもに難有
奉存候然ごも組屋敷程遠
存候て御遠々敷可罷成哉こ奉
存候御內樣へも宜奉賴候爲
御祝儀鰻魚一折被懸
貴意忝奉存候恐惶謹言

六月二日

組屋敷
青山百人町也

知愼

細井次郎太夫
知愼

松島自由樣
貴復

丁丑仲秋九日寫
此眞蹟購得藏于杏花園

○源氏湖月抄書ぬき殘紙〔蓬生卷〕

あらかりしこし。らうごも（ひたちの宮の廊也）ゝたうれふし。しものやご（雑舎なるべし）もの。はかなきいたぶきなりしなごは。ほねのみわづかにのこりて。立ごまるげずだ（孟下女）になし。けふりたえて哀にいみじき事おほかり。〔よもきぶ〕

○ふるめきたるみづしあけて。からもり。はこやのこじ。かくやびめの物語のゑにかきたるをぞ。こき〴〵のまさぐりものにし給　河唐守藐姑射刀自赫奕姫いづれもふるきものがたりの名也　蓬生

○いまのよの人のすめる經うちよみをこなひなごいふこごは。いごはづかしくしたまひて。み奉る人もなけれご。ずゞなご取よせ給はす　細花蘭大臣有仁公迄は珠數をごり給ふ事なし檜扇にて經陀羅尼の數をごり給ごこ云々　蓬生　河弊

○ねなきがちにいごゞ覺ししづみたるは（末摘のさま也）。たゞ山人のあかきこのみひごつを。かほにはなたぬごみへたまふ御そばめなごはおほろげの人のみ奉りゆるすべきにもあらずかし。くはしくは聞へじ（細双地也）。いごおしうものいひさがなきやうなり。冬になりゆくまゝにいごゞかきつかむかたなく（細よりつかん方もなきと也）かなしげに。ながめすごし給。たゞ山人のゝゝ細説にあれごも只鼻をいふなるべし誹諧にごごよりていへる孟是は心得がたき事なれご末つむの鼻の赤事を狂言に木實一をかほにあてたるやうにご書なり抄ねなきがちなるゆへ蓬生に鼻もいよ〳〵あかくなる也　蓬生

○續古今集抄

打むれて若菜つむのゝ花がたみこのめもはるの雪はたまらず　従二位家隆

順德院御歌

波まより夕日かゝれる高砂の松のうはばはかずまさりけり

後京極攝政前太政大臣

霞こも雲こもわかぬ夕暮にしられぬほどの春雨ぞふる

從二位家隆

雲はなをよるの春風吹はらへ霞にゆるす朧月夜ぞ

○草履打意趣松田敵討の事

草履打意趣松田敵討名前

木名　松井

六條判官爲義四男松井冠者維義十八代松井右近將監忠次依

台命家名賓名改一字拜領

源康親　周防守　　康重　周防守

康映　淡路守　　康贊　彈正少弼

康員　周防守　　康豐　周防守〔此代草履打騷動アリ〕

康福〔御老中從四位侍從〕周防守〔康豐ノ奥方ハ龜井豐前守茲政末女〕

康定　當主周防守〔始左京亮〕

五万四千石　石州濱田城主

宇多源氏龜井

源茲矩　武藏守　　政矩　豐前守

茲政　豐前守

五女松平周防守康豐室

兹親(チカ)　能登守　　兹滿(ミチ)　因幡守

兹胤(タネ)　隱岐守　　矩貞(ノリサダ)　能登守

四万三千石　石州津和野城主也

時に享保九年甲辰四月三日虎御門内松平周防守康豐上屋鋪奥にて御側女中お道急に召に付局澤野上草履をはき候に付澤野色々惡言申候に付お道身分難立存致自害相果候に付召仕さつ主人敵澤野殺之

龜井家士落合某女

局　澤野　六十一歳

側女　みち　二十一歳

右みち父は元來大和國郡山岡本佐五右衛門城主本多唐之助家老にて千石領せしが右家斷絶に依て浪人となり本苗は正木氏にて筋目正敷士也浪人の内御旗元より御家老に被抱知行六十石に有付妻の名字岡本に改む

おみち召仕

おさつ　二十四歳

父は毛利甲斐守家來小人組頭五石二人扶持松田助八

奥家老　堀野次郎太夫

大目付　小池理右衛門

右に付おさつ事立合有之候處明細にて相濟

おみち死骸は周防守旦那寺へ念頃に葬り澤野死骸は親類へ引渡おさつは助八方へ下り其後佐五右衛門養子に相願引取直に周防守へ御抱名を松尾こ改年久鋪勤其後神谷何某依願妻に引取右助八町屋鋪調給

岡本松田神谷三家鼎のごとく繁昌榮けるこ也

南畝云楊容黛作鏡山舊錦繪こ云淨るり本に澤野を岩藤みちを尾上さつをおはつこ書替て草履打の狂言は歌舞妓にても專ら流行なり

〇谷中延命院御仕置一件〔享和三亥年〕

亥六月六日入　脇坂淡路守懸り

谷中日蓮宗
延命院

日　道
四十歳

右之者儀一寺之住職たる身分をも不顧淫慾を恣にし源太郎妹きん又は大奥部屋方下女ころこ密通に及ひ其外屋形向相勤候女兩三人へ艶書をおくり右之女參詣之節密會をこげ或はつやなごゝ申なし寺內に止宿致させ殊にころ懷姙のよし承り墮胎之薬を遣し惣て破戒無慙之所行にて其上寺內作事之義奉行所へ申立候趣こ引違ひ勝手儘に建直し候事共重々不屆之至に付死罪申付之

谷中日蓮宗
延命院納所

柳　全
六十六歳

此者儀延命院所化にて女犯不相成身分に罷在ながら新吉原五十軒屋清太郎母りせと密會いたし及女犯候段不屆に付晒之上觸頭へ相渡寺法之通可取計旨申渡引渡遣もの也

亥七月廿九日

立花左近將監家來
平田久太郎伯母
尾張殿若年寄相勤候
初瀬事
なを
三十三歳

其方儀屋形向奥奉行相勤候節延命院日道申に任せ艶書通し其後延命院へ罷越通夜いたし候旨申なし日道と密會に及び殊に書付を以相尋候節一旦申陳じ候段不埒之至に候依之永之押込申付もの也

西丸奥梅村下女
靈岸島長崎町壹丁目
和助店
喜平次妹
ころ
二十五歳

其方儀大奥方下女奉公相勤候節延命院日道と密通いたし候段軽きものとは申ながら不慎之至候依之武家方奉公を構押込申付者也

一橋用人
井上藤十郎娘
は な
十九歳

其方義屋形向奥奉公相勤候節延命院日道申に任せ艶書を遣し其後密會に及び殊に書付を以相尋候節一旦申陳じ候段不埒之至に候依之永之押込申付もの也

紀伊殿家来
書院番
石川與左衛門妻
一橋奥相勤候
ゆ い
三十歳

其方義屋形向〔校訂者曰以下闕他本を以て新に補足す〕奉公相勤候節延命院境内祖師並腰籠の大黒を信じ去年六月通夜致候砌住持日道申に任せ密會に及び不慎の至に候依之押込申付者也

谷中善光寺前町
家主源太郎娘
き ん
二十三歳

其方義延命院日道と密會致候段不埒に付押込申付者也

池の瑞仲町長左衛門店
金三郎母　りよ

通鹽町勘七店
傳右衛門母　つて
五十歳

新吉原五十軒道源右衛門店
武左衛門方に居候
清太郎母　りせ
四十三歳

谷中觸頭　瑞林寺

三十日押込

武州豐島郡新堀村
名主

權四郎

組頭　長右衞門

急度呵

七月廿九日

右延命院の座敷殊の外美麗なりし由其上造作珍らしく今壁にてありし處歸へりに見れば襖となり或は障子と變りてあり又二階へ上れば忽ち上り口無くなり何方よりも下へおりる事なり難き由此外樣々なる造作ありし由かゝる美麗の住宅も事落着の後は皆々打毀ほされていつしか草のみ生ひ繁れる野原とはなりぬ淺間敷事ともなり。

○内山先生狂歌

一中と言ふ醫師大迂詐つきにておゝしいつく〳〵二十一聲なくといひし時其聲多少ありければ大うそをつく〳〵ぼうしもふうそはよしにさんしち二十一中

增訂一話一言卷三十八終

增訂 一話一言 卷三十九

○畝問池答〔南畝問輪池答〕

問古は日に三度づゝ食事いたし候哉、軍中には夜食なしと承候いかゞ、莊子に莽蒼にゆく者は三飡して足るといへばかの方にても一日に三度に候哉、此方の古書にて御考等無之候哉

答西土の故實はいまだ考ず皇朝にては治亂の差別なくさだまれる食事は上一人より下万民まで一日に二度なりその證は天子大床子御膳〔內膳司の供する所〕二度也〔朝巳時夕申時と寬平御遺誡にみへ後醍醐天皇の日中行事には朝午刻夕申刻とみゆ建暦御記には上古朝夕近代一度としるさせ給へり〕此外に朝餉の御膳〔女房の御供仕〕三度めし上らることありこれは內々の事ゆへなるべし〔大床子は御すくりなるべし朝かれいの御膳源氏物語の比は三度なりともおもはる建暦御記には一度としるさせ給へりこれは內々にて小供御とて御乳母の沙汰するを三度めし上らるゝによりて也但し朝餉の御自注に朝夕夜供としるさせ給へるはむかしのことなり〕武家の式もさぞ有けん御當家にても朝夕は御汁添御菜數もあり御三度めは御汁も添ず御菜數も少なし又永夜には御四度めもあれども猶更事そぎたるさまなり享保の御時は昔のためしを思召けるにや御三度めは召上られざりし也今も田舍にて節供には二度〔朝五時夕七時〕食する所あり〔兒玉郡の風俗〇常は三度なり其上に長日に小晝飯を用永夜には夜長といひて食することありこれ朝夕二度の外はみな臨時に設くる意なるべし〕武家にて二合半二度を一人扶持といふも古きさだめなるべし

問清流記といへる書は御當家御先祖の事を記せるものゝよし德川三河歷代などやうのものに候やさ

れご水府の烈祖成績の引書にも見えず如何

答いまだ見ず

問上方西國邊の村名に夙(シユク)こも夙村こもいふ村多しこれは古あひの宿にて本宿にあらぬもの丶名にやいかゞ

答いまだ考ず

問此方にて書を板行にいたし候はいづれがはじめに候哉且活字本のはじめいかゞ

答佛書は大和の京よりたしかに所見ありて鎌倉時代より漸々に行はれたり儒書は正平以前に論語印行せしぞ始なるべきくはしき事は別に考あり〔御目にかけ候間御覧の上御増訂希候〕活字板は駿河の七書大蔵一覧常光寺板の經書をはじめ慶長より古きものいまだみずくはしきこゝは活板考にしるせり〔いまだならず〕

印書考〔稿本〕　　源清道著

貝原先生の和事始に日本にて書籍を板に刻む事其始をしらず元久三年山門申狀に法然坊所造選擇集者謗法書也天下不可止置之在々所々所持幷其印板大講堂取上爲報三世佛恩可燒失之由奏聞仕候畢こあり是を以て見れば此時已に選擇集を板行せし也しかれば書籍を板行する事猶其前久しき世よりありけるならん伊勢〔貞春〕先生の正誤に按此事東鑑等には見へず何れの書に出たるや可レ考按に印板元久より以前ありし證東鑑土御門院正治二年正月十三日の條に經金字法華經六部摺寫五部大乘經こ見へたり〔摺寫こは板にてすりたるなり〕是を以て考るに正治より前久しき世よりありしなるべし

清道云貝原氏山門の申狀を引るはいまだしき也選擇集土御門院御宇開板の序あり平基親所著なり選擇集開板の證には此序を引べき也叔家翁先年書肆に於て貼葉の選擇集を購得たり字様作者の書

に疑なし惜かな序を脱せりこれ家藏中印本の最古なるものなり凡皇朝印板の最古なるは南都法隆寺の東圓堂に有所の陀羅尼なり是は稱德天皇御願にて寶龜元年四月戊午四寸の小塔百万基を造らしめて諸寺に分置せしめ給ふ其塔の中心を空にして藏めらるゝ所也事は續日本紀に見へたり予親しく其陀羅尼を觀るに銅板のごとくにして字體尤奇古なり今存する印本此右に出るものはあるまじきか

正誤又曰右は佛書なり儒書を板に刻む事始はしれざれども正平の比既にありし也其證攝州大坂に木村吉右衛門と云者あり〔蒹葭堂と號す〕釀ゝ酒家也其家に古板の論語一部を藏む巻尾に文あり曰堺浦道祐居士重新命工鏤梓正平甲辰五月吉日謹誌とあり正平甲辰は十九年也北朝崇光院の御代也經書を板に刻む事既に此比ありしなれば猶是より前ありけるなるべし

和事始又曰夢窓國師の弟子妙葩相國寺の祖なり夢窓多く佛書詩集等を板に刻めり多くは妙葩が跋あり又高師直が板行せし佛書あり其後兵火にかゝりて彼板も盡く燒亡ぶ其故に不傳といへり師直が板行せしは師直が跋あり又美濃の瑞龍寺にも板あり長門の香積寺に三重韻の板あり亦角倉與市太秦の僧に史記の諸の本を開板せしむ嵯峨本といふ是也杜子美千家注を足利本といへどもさにはあらずむかし朝鮮に便よき時我國の紙を遣はして板をすらしめたるこそ程敏政が心經附注などは朝鮮より其板わたりし也近世の板印は慶長の末に庭訓節用集など少々有しが寛永六年の比より多くなれりとかや正保の末よりいよ〳〵多く成て今は其數をしらず

正誤云按慶長の末にとは誤なり慶長の初より節用集などありし也予が家に慶長二年の印板の節用集を藏たり是れ證なり

清通云我家藏する所舊板論語〔これ正平板の元本也〕及び正平板の同本翻刻本〔時代不詳筆者の題

名あり」天文板凡古板の論語都て四部此餘正平以前より慶長に至迄印板の儒書佛書等予が家に藏する所も數十部に及べば其餘數多有べきなり今家に藏むる古板の書目及び家翁目撃する所をあはせて左に記す慶長年より印本盛に行はれ其書世に普く知る所にして其數も亦多ければこゝにしるさず

家藏古板書目

作者眞跡板選擇集〔土御門院御宇〕　弘安板法華三大部八十餘卷〔貼葉本〕
正安板弘法大師請來目錄　正和板廬堂語錄
嘉曆板臨濟錄　嘉曆板圓悟錄
貞和板雲臥紀談　正平前板論語
正平板論語　正平後板論語
貞治板禪林類聚〔二十卷〕　應安板了庵語錄
嘉慶板冥樞會要　嘉慶板五百家註柳文
明德板氏族排韵　應永板三國佛法傳通緣起
文明板聚分韵畧〔薩州所刻〕　延德板臨濟錄
明應板三體詩　文龜板三教指歸文
大永板御成敗式目　大永板醫學大全
享祿板御成敗式目　享祿板聚分韵略〔日州眞幸院藏版〕
天文板論語　天文板難經俗解
永祿板韵鏡　文祿板性靈集

此外宋板及元板翻刻年代不知書數種を藏す年紀不詳といへども應永前後の板なるべし

家翁目撃古板書目

寶龜板陀羅尼　弘安板傳心法要
弘安板傳法正宗記　貞治板元亨釋書
貞治板空華集　應安板開福寧語録
永和板元亨釋書　明德板元亨釋書
應永板五百家注韓文　明應板論語
永享板臨濟録

右印書考稿本借得輪池藏本而附記

丁卯仲冬十一日　杏花園

問三浦介を大介と稱せしはいかゞ

答子の義澄も介になりたれば父義明を大介と稱せしなり父子三位の時父を大三位といふ類なりこの比は上古の人父子相續て介に任ぜしなり義澄介に任ぜし事吾妻鏡建久三七廿五にみへたり

問村といふはいつ比より稱し候哉

答古事記に熊野村みへたるが始にて延喜式尾張國馬津新溝兩村といふ事みへたれど是はまれなる事にて今の世のごとく郡の下にことごとく村有にはあらじ類聚名物考に云村は人の群居所なればいふ也法は國郡鄕縣とはいへれども村はその内に入ず今は鄕縣は絶て村のみいへり古の鄕縣即今の村也さればこそ和名抄の鄕名は今の村名となれり弘賢按に日本書紀には郡家二字をムラとよめり古書に群郡通用の例あれば群家の義にても有べきか又文字は本のまゝにて義訓にても有べきか今の如く村をのみ稱

すること何時よりといふ事詳ならず匡房卿の歌に吉田の村の秋おさめまきの村つら〳〵椿俊成卿の作りかさねよまきの村人などみえ明月記に庄園可被寄云々何國何村哉とみへたるによればこの比より漸々行はれしものにやあらん

古事記〔神武記〕神倭伊波禮毘古命從其地廻幸到熊野村

延喜式〔兵部〕尾張國驛馬〔馬津新溝兩村各十疋〇これのちに二村山といふ所なり〕

明月記文曆二年閏六月廿三日一昨日禪門内於御前議定被宿仰事立庄園可被遣云云何國何村哉

夫木抄〔近江〕　匡房

時雨せぬ吉田の村の秋おさめ苅ほす稲のはかりなき哉

まきの村つら〳〵椿つら〳〵に思へば久し君が八千世は

長秋詠草

君が代は千重の垂藏ひまもなく作りかさねよまきの村人

名寄〔近江〕　式部大輔資業

我君につかへまつらん苔莚石根の村の万代までに

夫木抄〔丹波〕　資忠

しづかなる長田の村にすむ人の苅つむ稲のはかりなき哉

再按に延暦十四年の應改建倉院事とある格文に村邑遙阻絕臨之處宜量地便每鄉置之とみゆ此上文に鄉の事を議せるなりこれによれば鄉は地名村邑は鄉の内にありて人家をさすことあきらかなりこれ一切經惠琳音義に村は聚落なりといふにあへり

村字經史に所見なし惠琳音義大寶積經村墟の注に寸尊反集訓を引云聚落也又古今正字を引云從木寸聲

或作郵
問下馬札はいつ比より始り候哉南都のある寺の下馬札とて石に彫り候は菅家の御筆など申傳候を見候事有之大阪天王寺の下馬札も石にて朝鮮人の筆と申候又鎌倉の寺院の門に木戸のごときものあり
これは馬とどめといふものにや

答二字札のはじまりいまだ考ず養老令に下馬の禮はみへたれど札の沙汰はなし曾所祐信が書しといふ事廣元日記やらにみへたるは信じがたきことながらいかさま鎌倉將軍家の比ははやう有もやしけん模本には大師といふもあり近江國には道風朝臣の書と云傳たる下馬碑も有よし也したしくみしものゝ内にては高雄の下乘碑に正安三年十月日造立之權大僧都永瑜と題せしあり石山寺の下馬碑は近江の佐々木の家士田中采女の書といふ其肉書今寶藏にありといへり寺院の門に木戸のごときもの田舍には有もの也名目いまだ考す〔馬とゞめはトツナギのことにても有べきにや車ヤドリにむかへて考ればしかおもはるゝなり〕

南畝云古き狂歌に清水へまいりの人は觀音の堂といふより馬とゞめかなといへるは今の下馬のやうにみゆいかゞ

弘賢答馬とゞめのこと再按に清水の馬とゞめ今は二王門前に在一宇の空屋をかまへてこれを車やどり馬とゞめといふされども和やの拾柴抄に車やどり馬留西門の下刻階の北にありと注したれば二王門の内に有しとみゆ然れば今とは内外の違ありさりながらむかしとても堂の近邊まで馬にのるべき事はあるまじきなり此狂歌は馬とゞめ清水に名高ければ馬を叱するドウといふ聲を觀音の堂にそへてその詞の緣までにてよみしなるべしいづれにも馬とゞめといふ留は車宿の宿のごとく馬を引入てをく義なるべし下馬のことにあらざるべし

問江戸の女子七歳にて帶解といふ祝あり上方にはかつてなしいつの比何を本とせしにや

答上方にはかつてなしといふこと不審後水尾院の年中行事に九歳の時紐おとし有兼て御前より御服一重うき織ものゝ帶一筋參る御祝の時着用皇子は半尻皇女は襠計着也とみへたり但しこれは九歳なり武家にては七歳の時とおもはるそのはじめはいまだ考ず

問本朝にて製する所の紙の名いかゞ

答和名類聚抄云。兼名苑云。紙〔之爾反和名加美〕紙有色紙。檀紙。穀紙。屋紙。河苔紙。松紙。斐紙。薄用紙等名也。〔流布の本脱字あり今は天文本を引〕讀耕齋の考に屋の上紙字脱するかといへり此外延喜式に麻紙あり世流布の紙の名は近年印行の紙譜に詳なり僕別に紙譜の擧あり凡斐紙類穀紙類楮紙類雜紙鮮と四種に分て名目を部類せんとおもへどもいまだ稿ならず

○酒井讃州家訓

此度愚意の趣一々書顯し何れへも申聞候我等不得不才の身として幕下より本家の続を繼今度家督蒙仰斯其方共の上に立候事誠に恥入候事に候得共かく相成義全天授と存候得は不及ながら天の思召を不奉請候ては不叶義天は則生之生育を司り人に在ては仁の一字を要領と聞及候得ば何卒仁恕を本とし人民撫育の道行ひ度事に候併我等生質不肖にして人君の道に達ん事を憂ひ當惑するのみに候君も民も同じく天の生ずる所にて耳目鼻口に異なることなく唯德器其任にたゆるを以て君とすと聞及候得ば某が昏愚誠に汗顏の至に候天民は苦身して人に使れ緻衣麁食して耒耜を手にし春秋耕耘してその績を勵みその功を立大分を安んずる事に候得ば君も奢侈安逸にて猥に人を使が勤にあらず民の向背は治亂のかゝる所故兢々業々として朽索の六馬を馭するが如しとも申候此語を讀毎に恐入候事に候且天下は天下の天下にして壹人の天下にあらずと申候得ば乍恐

將軍樣に被爲在候ても御預り物也況やその餘諸侯をや全先祖の勳功により過分の領地御領り申奉る上は乍不及も治國安民の道心懸ずしては不叶事と存候誠に人君は民の父母と申候得ば父母の心を以て民に臨み仁義の道を下へ施し民と苦樂を共にして民その所を得させ候が君たるの勤と存候へば此道理を能辨へ私智を用ひず公理に隨ひ國家を治度候間何れも此旨を存じ心付候事も有之候はゞ何卒諫くれ可申候古の聖賢の君すら諫鼓謗木の事ども有之諫を求め給ふ況や凡愚の某政令の正しかるべきとは決して不存候得ば何事によらず諸事不宜儀有之候か又は何日も存寄たる事も有之候はゞ何卒致上書心付呉候樣賴候右は全く上人君の邪正により下人民の苦樂に關り候事といへば大切の事に候聊も無遠慮腹藏諫呉可申候併其身の惡事を諫め候はゞ顏色のよからぬ事も時々可有候得共全體之心底毛頭左は無之實に不肖之某民心に違ん事を恐るゝ所より實以直言諫爭を求め度存事に候へば某も隨分右之處は嗜可申候間その所は決して心遣致さず假令その事不體に候とも機嫌を不計些細の事たり共申聞呉候樣一向に賴入候

一家中之士不撰貴賤學問可致候學問は人の人たる所の道を辨へ候事にて別に替りたる事を學ぶにては無之候併當時學問致し候者之內にも結局不致者よりも劣り候ものも有之躰に候學問の弊は大抵二通りにそこね候歟と某は存候其譯は己才智にほこり我意を張り聖賢之言葉をかりて自見を飾りみづから高ぶり人を輕しむる樣に相成左樣に無ものは種々の書籍を取扱ひ文字能覺へ學者の樣に見へ候得共學問の致方違候故實は心身の益無之唯書物を翫び徒に日を送り何の益も無之事故拔群不學之者に劣り候事に有之候全體學問と申は人の道を辨へ候事にてその修行は心身の功夫心の邪正行の善惡を致吟味候て君父に忠孝を盡し兄弟に友愛親屬は筋目を不違懇にいたし傍輩互に信を本とし家來には憐愍を加へ候事など先此等が學問の道にて肝要の儀と存候間常々何れも心懸け志有輩は聖賢の道に

益を得候樣に折々致寄合吟味致度事に候

一論語に子游が澹臺滅明を求たると答ふる條士の心得有べき事に候滅明は心身の便りを求めず才覺を專らとせず己を枉て人に諂はぬ正しき所顯はれ候又公用の外我門へ出入せず一向に附屆せぬを以賞美するは子游なればなり又祁奚に晋君の問れしは何れか其方之跡役たらしめんと有ければ解狐が宜と答へしに夫は其方讐にあらずやと問はれしかば君の人を尋給ふ吾讐を問給ふにあらざれば讐なれども善き人故解狐を進しと答ふ又其何れか國尉といふ官に擧んやと問れしにわが子の祁午といふものを選擧いたし又前の如く對へにて子なればとても任に勝るを以て進めし也是誠に至言といふべし外擧に我仇讐をさけず內擧に我親戚を回さず善士といふべき也家中の士上下心を公にして惡を退け善に進度事に候某も不肖に候へ共明君賢主之跡をも慕ひ後代迄も排擯を蒙らず候樣に致度事に候又其方共も同樣之事に候得ば艱苦を不厭忠誠を勵み後々迄も良臣と呼れ候得ば祖先の忠孝是に越たる事有間敷候間自今以後勵合可申候

一當時士の寄合を聞及候に多くは禮儀を不正徒に酒宴遊興に日を送り譯もなきに聲高になり又人の噂などいたし醉狂の後小歌座上に取はやし禮讓不參屆義も儘有之哉に候是は心得違の義に候夫士は四民の中にても尊き事に候を乍存鄙しき體にもてなし士たるの道を失ひ候は誠に氣の毒の至り三民には劣り候哉と存候その譯は士農工商夫〻に司どる所の職を附農は耕作を爲し工は梓匠陶冶となり商は諸の賣買を勵み何れもその職を精出し妻子一族を養ふ事に候扨士は何を職と定め候哉得と致合點見可申候語に君子義を以爲質と有之候得は士之特所は義の一字と被存候此義理の筋目無之時は人に節義廉耻の心なく父子君臣の次第亂れ候故士是が爲に義を司り下を治るの職に備ふ斯ほど尊き天命を蒙りたる士の事なれば此後右の心得にて參會の節も一際目立候程に士の交りは禮義作法を正し

謙退辭讓を本とし賤からざる樣に一言申出すとも跡先をふまへ書籍の詮議義理の物語武藝の話などいたし或は國家の大體治國安民の道など評論いたし手輕に寄合相互に心付家中能風俗を學び可申候

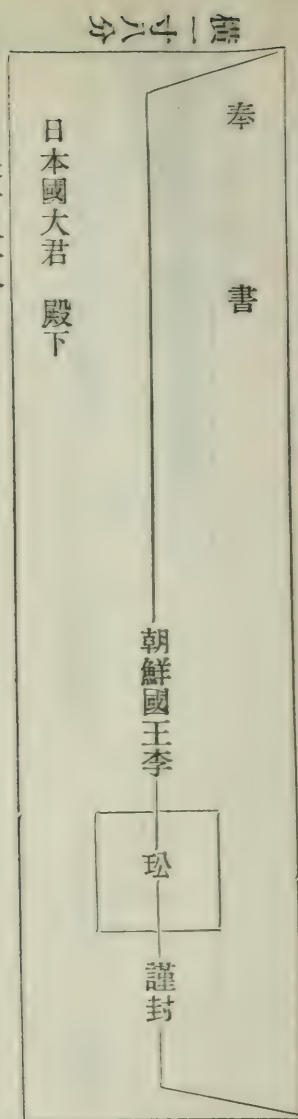
一家中の士武備忘る間敷候分限相應に心懸可申候武具馬具太刀刀も用に立候を專らとし綺羅を不好隨分麁相に可仕候平生衣類その外の調度兎角麁相成に越たる義は無之候無益の品用意に不及事に候弓馬劍鎗軍學等武の道は可成たけ不案内に無之樣稽古致し不斷手馴達者丈夫に有之候樣に心懸け出精可致候

一家中の士勝手向取續候樣諸事分限相應にいたし我程をはかり勝手難澁に不成樣に心懸可申候尤儉約の意趣は仁義をたすくる爲の儉約にて候得は先差當り其身勤向の入用武器の繕ひ相應の嗜み不足手支無之樣心懸諸事儉約可致事に候得ば平生の衣服調度の類いかにも質素を專とし立派を好み申間敷事に候武器は第一可嗜儀は勿論に候得共是迚も外見の花美を不好兎に角士の本意を不失質素の古風に立戾り可申候去乍若親類の内貧窮又は他人にても知己の者の中に至りても誠に不得止事譯にて致貧窮候もの有之雖見捨取計遣し候左樣の儀にて自分の勝手難澁いたし候者却て奇特の致方と存候又酒宴遊興に耽りて不參屆者有之候はゞ親類の者心付異見を加へ士の道を不失樣に助合可申候左樣の士を見捨候もの士の本意とは不存候何れにも此後相互に士の道を磨き合節義を守り禮讓謙退を本とし武藝學問を勵み集會の節禮法を正し書籍の詮義義理の物語抔致し假初にも賤き物語抔言の端にも不出酒宴遊興に不耽禮義作法正しきを以て家中の士平生の心懸と可致候

右之條々某存付たる所少も飾りなく申聞候畢竟從

公儀被　仰出候武家諸法度並吾家前々より定置處の條目に不違樣にいたし度存るよりの事に候但不肖の某事なれば自身是とする了簡毛頭無之候間最初にも申聞候如く此書付上にても了簡違ひと存る儀も

有之候はゞ面々無腹藏可申聞候
文化三寅年十一月

○文化八年辛未朝鮮國往復書翰

朝鮮國王李　玜　奉書
日本國大君　殿下
聘使之禮曠踰四紀遂承
殿下克纘
洪緒
誕撫區域
休聞所及欣聳曷已茲循故常庸伸

賀儀至於易地行聘之擧寔出
兩國惇好之義也不腆土宜聊寓遠忱惟冀
益懋令猷
茂膺休祉不備
辛未年二月
朝鮮國王李　玜

廣二寸

敬　復

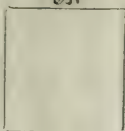
朝鮮國王　殿下

日本國源

謹封

長一尺一分

日本國源
敬復
朝鮮國王殿下

嵓价厎止
華緘隨達因悉
啓居寧謐欣幸靡極今者以吾承統業蒙脩
　聘儀
珍貽稠疊殊感
隆誼如其成禮津島則事雖從新意在循舊所以
　度時制宜而致
兩國之好也率具輶品寄諸還使惟冀
彌揚景烈
允受純　不備
文化八年辛未月日
　日本國源

　○寛政十一年癸未金地院書上
　　覺
一本光國師傳長老
御用相勤候節之御記錄全部四拾七卷正德二辰年七月廿八日新井筑後守殿へ差上候
一正德三巳年五月九日異國日記御記錄寫被　仰付之旨森川出羽守殿にて被仰渡同六月五日右御記錄部

合七册新井筑後守殿へ差出候

一御條目御案文之寫四册享保四年二月十一日酒井修理大夫殿へ差上候

一當時所持之藏書本光國師時代　御當家之事を記候書物左之通御座候

一本光國師日記　四十七卷

一異國日記　二册

一御條目〔四册〕　合二册

一異國渡海　御朱印帳　合一册

一異國御書草案　一册

一〔禁中公家武家寺社〕諸法度　一册

一公儀御仕置御定書〔二册〕　合一册

一公裁秘鑑要錄　三册

一御政事御日取書　一册

一御條目寫　一册

一從公儀被　仰出御書付拔書〔一册〕　合一册

一武系居諸

一御祈禱御禮獻上覽　一册

一禁中公家諸法度　一册

一高野山御法度書　一册

一□□古語〔三册〕　合一册

一國師按紙拔書　一册

一本光國師錄撮要（一册）　合一册

一國師職務考略記（一册）

一異國日記御記錄雜記　一册

一武家嚴制錄（百三十卷）　合十五册

内前廿九ヨリ四十迄十一卷不足

後一二不足申上候得共不足不仕候

都合八十二册

右之通　御用ニ付差上申候以上

金地院役者

松　月　庵

寛政十一己未十月

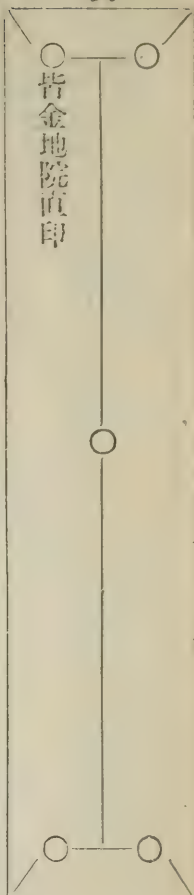
寺社

御奉行所

寛政十一

未十一月八日

伊豆守殿へ以近藤吉左衛門進達

御遣狀百ヶ條寫

覺

一御遺狀御寶藏入百ヶ條寫　一册

右

東照宮樣御神秘之御條に付封之儘差上申候以上

未十月　金地院

○明高啓季迪傳

高啓字季迪。長洲人。博學工詩。家北郭。與王行比隣。其後徐賁高遜志唐肅宋克余堯臣張羽呂敏陳則皆卜居與相近。號北郭十友。又以能詩號十才子。張士誠據吳。名士響集。啓獨依外家。居吳淞江之青丘。饒介之丁仲容素以詩自豪。見啓詩驚異。禮爲上客。客謝去。仍隱青丘。自號青丘子。洪武初。被薦偕同縣謝徽召修元史。授翰林院國史編修官。復命教授諸王。三年秋。帝御闕樓。啓徽俱入對。擢啓戶部右侍郎。徽吏部郎中。啓自陳年少。不敢當重任。徽亦固辭。乃見許。已竝賜白金放還。啓嘗賦詩。有所諷刺。帝嗛之。未發也。及歸居青丘。授書自給。知府魏觀爲移其家入郡。旦夕延見甚歡。觀以改修府治獲譴。帝見啓所作上梁文。因發怒。腰斬於市。年三十有九。明初吳下多詩人。啓與楊基張羽徐賁稱四傑。以配唐王楊盧駱云。（明史藁列傳百六十一）

抜獻徵錄卷二十一有李志光編修高公啓傳

〇寛永元年八月小石川龍興寺値靈樹院百日忌偈

寛永乙酉八月念日直靈樹院

百日忌因思頃者恃蒙

台命恭献遺物愚堂墨跡

一幀和歌二十一代集源氏物語

各一部其墨跡有靈雲

桃花悟事故拙偈及此爾

百日風光恃自來

無前無後亦奇哉

靈雲拍手愚堂笑

靈樹桃花滿地開

全透居士

右小石川服部坂上龍興寺什物

〇元祿年中水野監物御預義士物語書留

十二月十七日夜神崎與五郎物語

一私儀當正月より罷下方々に居申候近頃は上野樣やしき近所にでいしゆに成居申候やしき内へ入り申度候へ共嶷敷候て漸六月十八日に一度扇うりに參あらまし見申内に不見知ものゝ由にてとがめ申候ててうちやく仕候體に成候て罷歸候常々刀脇指等其外之道具は近松勘六富森助右衛門と申同志之も

の御當地に居申候右兩人儀は最前大學儀を內藏介　公儀へ願を申上候故如何被仰付候哉此段承次第申遣候とて顯はし候て暮し申候內藏介儀上方にて山科に居申候當十月末罷下候
一私儀壹人右之通春より罷下候て彼御やしきの樣子を窺候儀を請合罷在扨山科へ之通路は右兩人之もの迄書狀を遣しそれより飛脚に遣候
一內藏介儀不勝手に御座候故前々より久々內匠頭江戶番をも不申付指置候き然共去春落去之節配分仕候金子をも內藏介を不申請何もへわけ候てくれ申候諸道具等賣拂候て其金子百三四十兩を以私共を始同志之もの共を養申候若きもの共勝手のつゞきかね候もの共など早く討度がり申候をとかくとくと樣子も知れ候てと申候て留申候夥敷心懸にて候
一私儀內々樣子を承候は三百石より廿石迄之侍十八人中小性に十一人步士廿六人坊主足輕追廻しのもの雜兵合百四五十と承候吉良樣他への御出入にとくと知れかね上杉樣御下やしきに御座候て當三月比只今のやしきへ御移候て普請も近き比迄にて濟候樣に承候殊外要心被成候樣に承候
一妻子を致所持候もの共播州又は京大阪に指置片付候ものも御座候其通捨置候も御座候私も相應に妻子を持申候播州に指置候て私儀は京都にて半弓を細工に拵賣可申候とて罷出候于今京に罷在候分にて候結句不入ものと存候て其後不通にて罷在候
一堀部親子江戶勝手にて居申候き家來壹人見屆可申とて門を乘申候迄附參候其外前原伊介杉野十平次など彼是七人程江戶もの在之外は皆在所より先比下り申候
一內藏之介罷下候て早速も討可申事候へ共私壹人にて承合置之儀欲には猶以入念承合候とて遲成申候當月六日と存候所五日之晝他出被成候て御歸宅知れかね候故相延十四日之曉と存候へば御成之御沙汰故相延申候

一討申候前申合之儀は內藏介万々を廻候て申合候かなたこなたに散候て樣々の體にてくらし罷在候內藏介江戸不案內に候故同志之もの共（以下闕）

精進日

二日　五日　九日　十四日　　横川勘平殿

無　　神崎與五郎殿

無　　三村次郎左衞門殿

無　　間瀨孫九郎殿

無　　村松三太夫殿

無　　奥田定右衞門殿

九日朝　廿五日朝　十四日朝夕　　間十次郎殿

十四日　十八日　廿八日　　茅野和助殿

十四日　廿五日　　矢頭右衞門七殿

覺

一鼻紙袋　壹ツ

內ニ貳朱金壹ツ有之　主不相知

一巾着　壹ツ

內ニ金貳歩貳朱銀三金之はづしせつぱ有之

右は奥田定右衞門

一守袋　壹ツ

右之通慥に請取申候爲念如此に御座候以上

　　　　　　　　　　　　　　　泉岳寺□

　　　　　　　　　　　　　　　　喝道印

二月五日

　　水野監物樣御内

　　　淺井半右衞門殿

九人衆へ承合候書付

一頭巾〔鉢金柿布縫含安ノ字書付有〕　村松三太夫

一頭巾〔同斷秀ノ字書付有〕　岡野金右衞門

一頭巾鉢〔金うんさい縫含良金と書付有〕　大石主稅

一頭巾〔鉢金緞子縫含小の字書付有〕　潮田又之丞

一頭巾〔鉢金黑皮縫含〕　大石瀨左衞門

一頭巾〔鉢金天邊黑皮しころ島皮縫含〕　中村勘助

一鉢金〔淺黃布縫含しろこなし〕　千馬三郎兵衞

一鎖頭巾　貝賀彌左衞門

　　神崎與五郎物語

一去年赤穗之城何之手無之相渡候事家老内藏助本意には不存我々共も其心底に候へ共大學へ何とぞ名跡をも被　仰付被下候樣にと御檢使荒木十左衞門樣榊原釆女樣へも御願申上候處御承知被成候旨御挨拶に候夫に少も滯り候事候へば大學へ之不忠に存其通に相渡し申候就夫當六七月迄見合候へ共何之御沙汰も無御座候然る上は何とぞ亡君へ之奉公にと存立申候然共上へ對し少も存寄無御座候義

には無御座候其時分諸人咄無不申斐可被思召と存候然共右之所存故只今迄見合申候由申候

御預者諸道具之覺

間　十次郎

一刀（鋒少折物打こぼれ有之）

一脇差（小刀有）

一鎖着込小手共に

一鎖股引

一脛當（淺黄絹縫含）

一袖なし羽織（すためん）

一三尺手拭（桃色羽二重）

奥田貞右衛門

一刀

一脇差（小刀有）

一皮着込

一股引（茶宇島）

一脛當（黑茶宇縫含）

一守袋

一巾着

一三尺手拭（かば色絹）

矢頭右衛門七

一刀
一脇差（小刀無之）
一皮着込
一小手
一股引（郡内島）
一皮脛當
一三尺手拭（白布）
一布切二ッ（淺黄）

村松三太夫

一刀（鋒少折物打こぼれ有之）
一脇差（小刀有）
一皮着込小手共に
一同股引（脛當縫含）
一三尺手拭（淺黄布）

間瀬孫九郎

一刀
一脇差（小有刀）
一皮着込小手共に

一同股引（脛當縫含）
一上帶（白布）
一三尺手拭（島布）

茅野和助

一刀（割笄有小刀無之）
一脇差（小刀有）
一鎖着込小手共に
一鎖股引
一鼻紙袋
一三尺手拭（白布）

横川勘平

一刀（鋒五寸程折及こぼれ有之笄有）
一脇差（小刀有）
一皮着込（白木綿肌着添）
一股引（脛當縫含）
一三尺手拭（白木綿）

三村次郎左衛門

一刀（鋒少折物打こぼれ有之）
一脇差（小刀ひきはだ有）

神崎與五郎

一皮着込
一同股引（脛當縫含）
一三尺手拭（柿布）

一刀
一脇差（小刀割笄有）
一鎖着込小手共に
一股引（茶絹）
一脛當
一鞢
一鼻紙
一足袋
一頭巾（鉢金皮縫含）　一
　小野寺幸右衛門藤原秀富と書付有之
一頭巾（鉢金柿布縫含）　一
　勝田新左衛門武堯行年二十三歳と書付有之
一頭巾（同斷）　一
　安の字書付有之
一頭巾（同斷）　一

秀の字書付有之

一頭巾〔鉢金うんさい縫含〕　一

良金こ書付有之

一頭巾〔鉢金緞子縫含〕　一

小の字書付有之

一頭巾〔鉢金黑皮縫含〕　一

一頭巾〔鉢金黑皮縫含しころ島皮〕　一

一鉢金〔淺黄布縫含しころ無之〕　一

一鎖頭巾　一

一鎖鉢巻　一

一長太刀鋒〔こぼれ有之〕　一枝

一長刀〔金物銀桐菊の紋有〕　一枝

一鑓　四本

三本直鑓

内

一本十文字

一半弓　一張

尻籠添

矢十七本

十五本速水滿堯こ記

内一木茅野常成と記
一本矢印無之
替絃一筋
一袖印　四
二ツ小野寺幸右衛門秀富行年廿七と書付有之
内一ツ貝賀彌左衛門友信と書付有之
一ツ書付無之
一三尺手拭（白布）　八筋
一手拭（白赤）木綿　二筋
一鼻紙袋　一
一鼻紙　四折
一扇子　五本
一たはこ入　一
一きせる　一本
以上
御目錄之通慥請取置申候爲念如此御座候以上
二月五日
泉岳寺内
喝道　印
水野監物樣御内

淺井半右衛門殿

覺

一小袖　三十四
一半小袖　四
一胴着　四
一綿子　一
一帶　九筋
　内　丸縫壹筋
　　　布帶壹筋
一夜着　十
一蒲團　十
一枕　九ツ
一浴衣　六ツ
一風呂敷　四ツ

右目錄之通慥受取申候爲念如此御座候以上

泉岳寺内

二月五日　喝　道　印

水野監物樣御内

淺井半右衛門殿

右於水野家臣田口氏席上寫了

○天明改元詔

詔、賓準的於劉漢建元之遺音長振。尋濫觴於　本朝大化之餘風久傳。是以創業之君。登極必改正。修德之主。繼統又新元。朕苟以庸昧躬。唯賴良弼之力。載臨大寶位。將遵列聖之訓。宜改舊號。以施新化。其改安永十年。爲天明元年。主者施行。

天明元年四月二日

二品行中務卿臣織仁親王　宣

正四位下行中務大輔臣藤原朝臣

正四位下行中務少輔臣藤原朝臣敬信〔奉行〕

攝政太政大臣從一位臣藤原朝臣

從一位行左大臣臣藤原朝臣

從一位行右大臣臣藤原朝臣

從一位行內大臣臣藤原朝臣

正二位行權大納言兼右近衞大將皇太后宮大夫臣藤原朝臣家孝

正二位行權大納言源朝臣信通

正二位行權大納言兼左近衞大將臣藤原朝臣政熙

正二位行權大納言臣藤原朝臣

正二位行權大納言臣藤原朝臣實起

正二位行權大納言臣藤原朝臣公明

正二位行權大納言臣藤原朝臣實祖
正二位丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶實種
丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶伊光
從二位行權大納言臣藤原朝臣輔家
正二位行權中納言臣藤原朝臣有美
丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶宗美
丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶爲榮
丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶冬泰
丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶愛德
丶丶丶丶丶丶丶丶菅原朝臣胤長
從二位丶丶丶丶藤原朝臣隆建
正三位行權中納言臣藤原朝臣
正三位行權中納言兼皇太后宮權大夫臣源朝臣前基
正三位行權中納言臣藤原朝臣
參議從二位行左近衞權中將臣藤原朝臣實同
丶丶丶丶丶右丶丶丶丶丶丶丶丶實紐
參議正三位行右近衞權中將臣源朝臣重嗣
參議正三位左近衞權中將臣源朝臣
丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶藤原朝臣廷季

參議正三位行左衞門督臣藤原朝臣資矩
參議從三位行左大辨臣藤原朝臣經逸
參議從三位行左近衞權中將藤原朝臣
詔書如右請奉
詔付外施行謹言

〇明和五子年御抱入場所高の事御書付

明和五子年九月被仰渡候御書付寫
諸組抱入場所與力より支配勘定被　仰付候節唯今迄取來高之樣被　仰付候得共自今支配勘定場所高にて被　仰付勤候內元高之通御足高可被下候此度與力より支配勘定へ被申聞候者も有之候間右之通にても相願候哉之旨此度書出し之向々一統に一通り掛合候上可被申聞候事
右之通之御書付出候に付尙又頭を以相願置申候書付寫
此度支配御勘定場所高に被　仰付勤候內元高之通御足高に可被下置旨奉畏候右之通にて奉願上度奉存候以上
九月　吉田三郎兵衞

〇備中國古城跡
備中國小田郡　星田村
一金黑山といふ古城跡あり城主三村信濃守と申傳ふ也
同　川面村
一古城跡あり城主不知後鳥羽院御殿跡の山申傳ふ閑計にて舊地也

一古城跡二ヶ所あり城主相分不申候　奥山田村

同神石郡　笹屋村

一城跡と申傳たる山一ヶ所有之

同安那郡　東中條村

一古城跡壹ヶ所あり城主宮野若狹守と申傳也

栗根村

一古城跡壹ヶ所有曾根長門守といふ城主のよし　西中條村

一古城跡壹ヶ所城主宮野勘ヶ由のよし申傳へ也

同甲怒郡　小堀村

一城(跡カ)主壹ヶ所城主新見能登守と申傳也

○箱根湖

箱根湖並こうが島間數大積り覺

一こうが島　竪三丁半餘

橫廣き所六丁餘

同せばき所四丁餘

但往還端陸續海へなり

山にて御座候

一湖之長サ　貳里餘

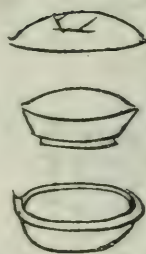
内目代木迄壹里半餘
目代木より西駿河方へ貳拾丁餘
入組相見へ申候
廣き所三拾丁餘
同せばき所五丁餘
右之通り間數書付差上候樣こ被〔虫バミ〕
間數之積り書付指上申候相違無御座候
箱根三島町問屋
年寄〔虫バミ〕
元祿十一戊寅年五月
御代官樣
右竹橋御藏古文書の中に見へたり
覺
山中村より箱根町迄之道法壹里貳拾丁
右同斷古文書
去七月從　公方樣被　仰付候　御祈禱爲御布施
銀子三拾枚被下頂戴爲に奉納仕候爲其如件
八幡山御祈禱
豐　藏　坊

慶安二年九月廿七日　　孝雄（花押）

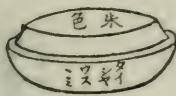
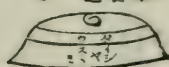
曾我丹波守殿
松平隼人正殿
横地市郎右衛門殿
駒井清左衛門殿
深津茂左衛門殿
永田傳左衛門殿

右古文書計府に見へたり

○唐津古陶器譜

文政改元七月二日水野家臣田口氏齎來見示

寛政年中佐用郡神領自土中所得堀之古器

居水輪　ウスベミ色クスリナシ

文化二乙丑春肥州唐津大桐村於社地所得堀之古器

〇東厓先生名幾志

姓氏名字之別。其來尙矣。上世固無徵也。唐虞之際。舜姓姚。禹姓姒。契姓子。相別以名。則曰棄。曰契。曰皐陶。曰夔。曰龍而已。或謂皐陶字庭堅。伯奮。仲堪。叔獻。季貍。列諸八元。伯夷叔齊亦不詳其名。自周以前。蓋亦有字矣。連姓而名之。末之聞也。周公曰姬旦。召公曰姬奭。後人之追稱耳。非當時之制也。書曰。有鰥在下。曰虞舜。則亦有氏而連名矣。爾後有伊尹。有傅說。有呂尙。皆氏而名之。降及後世。莫之易也。死而謚。周之道也。前乎此。上而爲天子。曰帝堯。曰帝舜。曰大禹而已。或尊其廟曰神宗。曰高宗。曰中宗。湯自曰小子

履則名也。而又稱成湯。其謚之漸乎。自周而後。天子曰王。而以謚配之。曰文王。曰武王。諸侯曰公。大夫以字。旣而姓分而爲族。亦曰氏。春秋左氏傳曰。天子建德。因生以賜姓。胙之土而命之氏。諸侯以字爲謚。因以爲族。蓋姚也。子也。姒也。姬也。姜也。嬴也。風也。姞也。芊也。皆姓也。孟孫也。仲孫也。國也。罕也。展也。取諸字。戴也。桓也。取諸謚。司馬也。司空也。巫馬也。中行也。取諸官。南宮也。□也。韓也。魏也。趙也。取諸地。皆氏也。爰稽當時之制。以名配官。曰史佚。曰祝鮀以名配氏。曰臧孫辰。曰仲孫蔑。以字配氏。曰閔子騫。曰宓子賤。省呼之曰顏淵。曰季路。以字配官。曰令尹子文。曰大宰子餘。以謚配氏而字之。曰孟献子。曰晏平仲。曰陳文子。以名配字。曰共叔段。曰夷仲年。曰叔梁紇。自秦漢而後。氏盛而姓隱矣。不問其爲姫耶。爲姚耶。史稱之曰姓劉氏。曰姓孔氏。則氏與姓混矣。配之于官。曰蕭相國。曰李將軍。曰溫御史。配之封邑。曰謝康樂。曰魏鄭公。曰王荊舒。配之所治。曰董江都。曰韋蘇州。配之貫籍。曰柳河東。曰呂藍田。配之于謚。曰諸葛武侯。曰韓文公。曰呂正献。配之行第。曰元二。曰魏三十六。又配之于官。曰杜二拾遺。曰嚴八閣老。配之所居。曰杜少陵。曰張橫渠。配之別號。曰白香山。曰蘇東坡。曰陳簡齋。曰袁了凡。則亦彌文之所致也。

享保丁酉七月下澣。長胤識。

〇僧光謙〔天台山靈空〕秘密竹記

吾得一奇竹。其高三尺許。幹本圍八寸。長一尺。而派爲三竿。各有枝葉。扶疎可愛。栽之窓前。名秘密竹。或問其說。曰。子不聞吾祖釋秘密三身乎。一身即三身。名爲秘。三身即一身。名爲密。此竹從下而見之。一竿而三竿。從上而見之。三竿而一竿。可以表秘密三身矣。且夫三身即三德。三德即三諦。三諦也者第一義空。天然之性德也。有情無情。莫不皆具此性。則我之與竹。一如無二如。古詩云。對竹悟心空。此豈庶幾之。豈不眞勝友乎。問者首肯。因爲之記。享保乙巳十一月下旬。老苾芻光謙。書於幻々菴。

右二條出于張州井夢澤熙朝文苑〔卷七〕

○野語述說抄

○今茲天和壬戌春。有荒幽之災。予幽居隣村。狗盗鼠竊之徒最多矣。民捕之私刑焉。或縛手足。而投木曾河千尺之底者。蓋不知幾百人也。蓋其罪以不宥之。亦仁人君子一見之。則安無哀矜之耶。云云。○寛文壬子春。予寓止于武府。一日登于池田帶刀公望火樓。〔注略〕望火小吏曰。今日不レ火幸也。予怪之問曰。火預可知之耶。何以知之。曰有失火。必其氣先顯然。故知之耳。予退歸二逆舍一。未幾有失火。司權氏撲滅之。人皆欣々然。云云。○蘇子瞻秋陽賦。釜星之雜出。又灯花之双懸。奴婢喜而告予曰。此雨止之祥也。愚偁讀之。不知釜星何物也。今民間見鍋釜下之火。點于百草霜(ナベズミ)。則以卜陰晴霖旱。所謂釜星是也。言其點火之形勢如星閃々然也。俗曰耕夫(タウデ)。亦取義於其象之相似耳。云云。○愚謂我邦永祿天正之間。始傳木綿之種自中國乎。故此物在人間。今僅一百有餘年。胡爲其來也遲矣。祖母在嘗語曰。我十五六時。在東濃岐阜〔始着木綿之服。當是之時。人珍之。如綿紗花綾耳。雖其後有木綿之種栽。人未知其製。以是紡織之粗惡鄙陋。不如今之工好精緻也。蓋今而想之。其始亦與陶九成所記率相似而已。相傳上世以來。至永祿天正。下民之服。皆麻葛之類也。故至今謂賤者之服名二布子(ヌノコ)一。是其遺語也。云々。○若木ノ下デ笠ヲヌケ○東濃岐岨河下。巨石在水中。激波驚爛。可謂羊腸虎胃灘也。故舟覆檝摧。而葬于河魚之腹中。幾千万人許也。寛文年間。舟子相議。則禱二爾于天照太神一。標二于巨石上一。以二中臣祓一。爾來水勢漸減。而遠於巨石之嶮。舟無傾覆之難矣。於是人無不爲服敬於神靈之妙也。蓋此等雖似好事。愚所目擊。而無妄者而已。云云。

壺峯子。本姓片桐氏。今改爲松井。名精。字仲允。〔貞享元年序〕

○天明三年癸卯洲崎望汰欄食次同

御吸物　こふからしみそ
　　　　鯖
　　　　もみ大こん

御茶はん　御飯切あへ
　　　　　やきごうふ

御肴　鯛小付
　　　れんこん
　　　木のめす

一豆くわい

御　不分御飯

御焼物　もろあじ
　　　　半べんうま焼　田楽ノゴトク青串ニサス

御肴　ここふし
　　　あなごかばやき
　　　鯉
　　　小さゝい木のめあい
　　　さるぼ
　　　はまぐり

御香物

御茶わん　うすへず
　　　　　こんにやく
　　　　　からし

御吸物　うすみそ
　　　　焼まんぢう
　　　　はだな

御烹物　むしり鯛
　　　　菜　筍
　　　　麩　　木子ヲ□キサシ鯖ノゴトクシタル也

御小皿　小川たらさ
　　　　葛いり酒
　　　　わさび

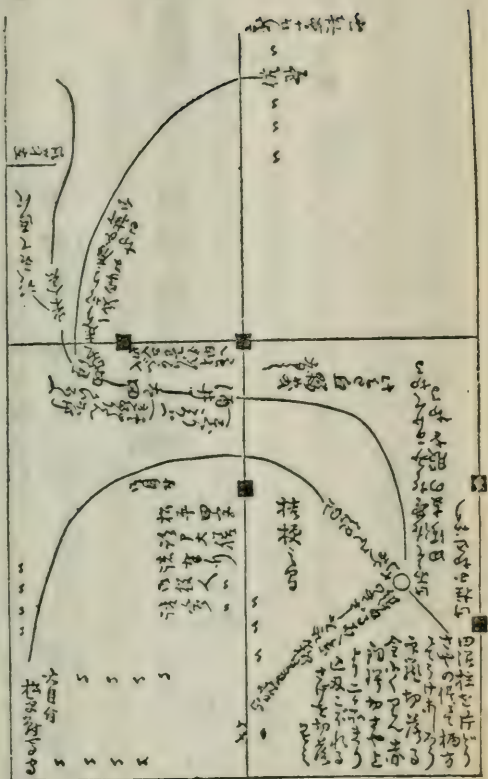
御吸物　さより
　　　　黒くわる
　　　　ぼう風

御肴　ゆば
　　　岩たけ
　　　みつば
　　　一白うを玉子鮨
　　　生すし
　　　たで

御膳

御汁　蕨

○天明四年甲辰三月新御番佐野善左衛門若年寄田沼山城守殿中手疵一件

天明四辰年三月廿四日蟾川相模守組新御番佐野善左衛門於殿中若年寄田沼山城守へ手疵爲負候節左之趣

一、田沼山城守は於殿中早速療治御手當被仰付駕籠にて大手通り神田橋屋敷へ退出す

一、佐野善左衛門は網乗物にて御徒目付御小人目付差添大手通り揚座敷へ被遣候

一翌日より評定所御詮議初り

御詮議掛り

大目付　大屋遠江守

町奉行　曲淵甲斐守

御目付
山川下總守
御徒目付
八木岡政七
尾本藤右衛門

一御詮議相濟四月三日申渡之覺

佐野善左衛門

去月廿四日於殿中田沼山城守へ手疵爲負候亂心といへ共山城守右手疵にて相果候切腹被　仰付候者也

新御番
蜷川相模守組
佐野善左衛門
辰二十八歲

切腹

右於評定所大目付大屋遠江守町奉行曲淵甲斐守御目付山川下總守立合遠江守申渡爲撿使下總守相越候

四月三日

切腹場所御出役
御徒目付
八木岡政七

尾本藤右衛門

牢屋奉行

石出帶刀

兩町奉行與力四人

同斷同心四人

曲淵甲斐守組同心

介錯　高木伊助

四十一歲

小介錯　大瀘五郎次

三十六歲

右申渡相濟評定所御時計七ッ半過御目付山川下總守爲撿使牢屋敷へ相越候處下總守衣服着替出役御徒目付御詮議掛り八木岡政七尾本藤右衛門先へ相越石出帶刀兩町奉行與力同心牢屋敷門前へ出向案內候て切腹撿使場へ下總守相越無程善左衛門を駕籠にて乘せ來り候與力出向御勤はこ問候へは新御番蜷川相模守組佐野善左衛門こ答年迄承候て直に切腹場へ連行座付候時分介錯人高木伊助善左衛門左之方へ出自分は曲淵甲斐守同心此度介錯被　仰付候段申候こ善左衛門挨拶に御太儀に存候見苦敷無之樣に賴入候段挨拶有之候こ小介錯大瀘五郎次右之方へ出御支度可被成こ申候得ご善左衛門無答直に肩衣をはね兩はだぬぎ小介錯之者へ脇差をこ申候其時五郎次三方に紙にて卷候脇差を載善左衛門向へ三尺計出候て引候こ善左衛門のび上り手を出し候處を介錯人伊助首打前に皮をかけ候間其儘臥候を小介錯五郎次首をおこし又の皮を九寸五分にてかき落し撿使之方へ見せ申候こ御徒目付八木

岡政七介錯人之方へ向ひ下總守切腹見屆候段探撈す其時死骸へうすべりかけ申候こ直に下總守侍草履取操入衣服叉着替退散評定所へ立歸り大目付大屋遠江守町奉行曲淵甲斐守撿使山川下總守一同に御用番周防殿へ御屆に被參候
一切腹之場所揚座敷番所座敷疊前々より上家無之候よし
一善左衞門衣服水淺黄無紋之袷國斷麻上下着用
一介錯小介錯兩人共に麻上下着用
一御屆之節周防守殿直に御逢被成御屆之趣御聞屆有之右刻限其夜五ッ時過に相成候

佐野善左衞門相番
筑山伊左衞門
山下彌左衞門

右兩人へ申渡左之通り

一佐野善左衞門去月廿四日於　殿中田沼山城守へ手疵爲負亂心こは乍申右手疵にて相果候付切腹被仰付候此段頭へ可申達候
一善左衞門死骸相番願之通勝手次第引取候樣右兩人之者へ被仰渡死骸石出帶刀より相渡す
佐野善左衞門

刀　長サ貳尺貳寸五分
　銘　加州住陀羅尼橘勝國
脇差　長サ壹尺七寸五分
　銘　粟田口近江守忠綱

百姓牢
牢
揚り屋
切腹之場所
同心
同心
同心
同心
與力
與力
介錯
小介錯
同心
同心
石出帯刀
月番
與力
與力
揚座敷
御目付
検使
御目付
番所
揚座敷
揚座敷
番所
揚座敷
番所
入口

善左衛門死骸淺草本願寺寺中神田山德本寺に葬す
天明四辰年
元良院殿釋以貞居士
四月三日　　　　佐野善左衛門藤原政言墓
一二番町御厩谷佐野善左衛門屋敷上り候段は御普請奉行家作上りもの小普請奉行へ御書付を以渡知行上りは御勘定奉行へ御書付にて相渡る家財は善左衛門父へ被下相成候兩親伯父妻子共親類方へ引取候樣被仰渡候
四月三日　若年寄衆御叱之趣
酒井石見守
去月廿四日其方共退出之節新番佐野善左衛門義致亂心田沼山城守へ手疵爲負候節何者共不知後口之方より拔身を持駈參り候故右中之間へ拔き候よし申聞候得共致同道同役之內にて手疵負候儀に候得ば其節取計方も可有之儀　思召候此段申聞候樣被　仰出候
太田備後守
去月廿四日其方共退出之節新番佐野善左衛門義致亂心田沼山城守へ手疵爲負候節中之間俄に騷々敷相成山城守脇へ寄候を見請何事に候哉聢と見請可申と同所に立留り候旨申聞候得共致同道同役の內にて手疵負候儀に候へば其節取計方も可有之儀に　思召候此段申聞候樣被　仰出候
米倉丹後守
去月廿四日於中之間新番佐野善左衛門致亂心田沼山城守へ手疵爲負候せつ其方義月番遠江守御用向有之土圭之間に罷在候に付其方も山城守と離れ致退出候其節之樣子不相知旨申聞候得共旣に奧之御

〆りの儀心付中之間より這り口之戸建させ候趣に相聞候左候得ば同役共中之間之方に罷在候儀に候へば其方義も取計方も可有之處〆り之内に罷在候段如何に　思召候段申聞候様被　仰出候右於御用部屋出羽守列座大和守申渡之伺之上　御目通り差控被　仰付候

町奉行
　山村信濃守
御勘定奉行
　桑原伊豫守
同斷
　久世丹後守
御作事奉行
　柘植長門守
御普請奉行
　青山但馬守
小普請奉行
　村上甲斐守
小普請支配
　中坊金藏
新番頭
　飯田能登守

御留守居番
堀内　膳

去月廿四日新番佐野善左衛門致亂心田沼山城守へ手疵爲負候節未何れも中之間に罷在候事に候へば取計方も可有之樣思召候此段御沙汰に付於中之間久世大和守殿御書付を以被仰渡候

御目付
柳生主膳正

松平對馬守佐野善左衛門取押候節參り懸脇差請取候に付御咎に不及一通り御座敷叱り

大目付
久松筑前守
牧野大隅守

去月廿四日若年寄退出之節新御番佐野善左衛門致亂心田沼山城守へ手疵爲負候節其方共中之間に罷在出合申候段申聞候得共拔身を持候趣見請候はゞ早速取鎭め方も可有之處手間取候故山城守鞘にて會釋いたし候內疵も數ヶ所に相成候既に右之疵にて相果候別而其方共御役柄之儀不心懸に被　思召候依之差控被　仰付候

右於大和守殿御宅大目付大屋遠江守立合大和守殿被仰渡候

御目付
井上圖書頭
安藤郷右衛門
末吉善左衛門

去月廿四日若年寄退出之節新御番佐野善左衛門致亂心田沼山城守へ手疵爲負候節其方共桔梗之間に相詰罷在出合候段申聞候得共早速取鎭方も可有之處手間取候故山城守鞘にて會釋いたし候內疵も數ヶ所に相成候旣に右疵にて相果候其方共別而御役柄不心掛に　思召候依之差控被　仰付候

御目付

跡部大膳

松平田宮

去月廿四日若年寄退出之節新御番佐野善左衛門致亂心田沼山城守へ手疵爲負候節其方共中之間に相詰罷在候處誰こは不知桔梗之間之方へ拔身持參候に付早速追駈候段申聞候得共其方共儀よりは相離罷在候松平對馬守遲も抱留候へば其方共儀は間近にも罷在候故如何樣にも取鎭め方も可有之處手間取候故山城守鞘之まゝにて會釋いたし候內手疵も數ヶ所に相成旣に右疵にて相果候御役柄別而不心掛に　思召候依之御役御免寄合被　仰付候

新御番

萬年六三郎

猪川五郎兵衛

田澤傳左衛門

白井主稅

去月廿四日若年寄退出之節相番佐野善左衛門致亂心田沼山城守一手疵爲負候節其方共御番所に罷在候間善左衛門騷出候節差止可申處善左衛門義中之間へ罷越候間御番所も明き候に付立戾り候段申聞候得共一列之內より走出候事に候得ばいづれ差押へ可申處無其儀不埒之至に　思召候依之御番御免

小普請入被　仰付候

右加納遠江守殿於御宅大目付大屋遠江守御目付山川下總守立合遠江守殿被仰渡候

四月七日

大目付

松平對馬守

右者新御番佐野善左衛門亂心いたし山城守へ手疵爲負候節組留候段達　御聽年比に合心掛宜神妙之至に被　思召候依之貳百石御加増被成下候之旨

右於芙蓉之間老中列座大和守申渡之

四月七日

○日本七種始〔京洛七野〕

日本七種始

人王五十九代

宇多帝ノ御時正月上ノ子日初而供七種

京洛七野

紫野　北野　大原野　内野

平野　嵯峨野　蓮臺野

右野守歲々順番ニ而大内江奉供之

荆楚歳時記云
正月七日俗以七種菜作羮
食之人無万病矣
七種正歌藏玉集ニ
芹五ぎやうなづなたびらこ佛座
すゞなすゞしろこれぞ七草

せり　漢名芹　大原野産
なづな　同　薺　内野
ごぎやう　同　艾　平野
たびらこ　嵯峨野
佛座　同　元寳草　蓮臺野
すゞな　同　菘　紫野
すゞしろ　同　蘿蔔　北野

○文政二年己卯林祭酒〔衡〕歳日詩
己卯元旦
四序又逢環一循
乾坤俯仰物皆新
年々唯有桃符句

瑞日祥雲語毎陳

右ノ詩ヘ點ヲ付上候ヿ古來ノ例也

大學頭林衡

増訂 一話一言卷三十九終

増訂 一話一言 卷四十

○凹凸窠

楊升菴文集〔六十四卷〕云。畫記云。張僧繇畫一乘寺壁。遠望如凹凸。近以則平。名曰凹凸花。俗呼一乘寺爲凹凸寺云。

按石川丈山一乘寺村に詩仙堂を建居る所を名づけて凹凸窠といふその居る所の形によるとはいへど實は一乘寺を名づけて凹凸寺といふに本づけるなるべし

○宋詩二陳

宋詩に二陳あり一は陳師道字は無己后山と號す一は陳與義字は去非簡齋と號す明の胡元瑞詩藪に曰。

宋之學杜者。無出二陳。師道得杜骨。與義得杜肉。無己瘦而勁。去非贍而雄。后山多用杜虛字。簡齋多用杜實字。

宋王偁東都事略〔卷一百十六〕云。陳師道字無己。徐州彭城人也。少刻苦問學。以文謁曾鞏。鞏奇之。元祐中。蘇軾傅堯兪孫覺薦于朝。爲徐州教授。除太學博士。初師道在官。嘗私至南京謁蘇軾。至是言者彈其冒法越境。出爲潁州教授。紹聖初。言者復論師道進非科策。罷歸。久之爲棣州教授。除秘書省正字。以卒。師道家素貧。自罷歸彭城。或累日不炊。妻子慍見不恤也。諸經皆有訓傳。於詩禮尤邃。爲文師曾鞏。爲詩宗黃庭堅。然平淡雅奥。自成一家云。

明錢抑之南宋書〔卷六十三〕云。陳與義。字去非。洛人。上舍甲科。歷太學博士。高宗南遷。避亂襄漢。轉湖湘。踰嶺嶠。紹興中。累官翰林學士知制誥。至參知政事。予祠卒。容狀儼恪。不妄言笑。薦士于朝。退未嘗以

語人。長于詩。體物寓興。淸邃紆餘。上下陶謝韋柳間。自號簡齋居士。有無住詞一卷。劉須溪先生評點簡齋詩集卷之十五。無住詞十八首。增注。無住者。湖州青墩鎭僧舍之菴名也。公紹興間奉祠寓居焉。卷中詩詞皆可考。而詞亦多其時所作。故以題集金剛經應無所住而其心。菴名本此。明焦竑侯國史經籍志〔卷五〕

陳師道集十四卷　又外集六卷〔又理究一卷又長短句二卷〕

陳與義簡齋集二十卷

秘書　鈴木白藤より文通に

陳后山詩註〔十二卷朝鮮板〕　五冊　門人彭城陳魏衍序

元城王雲題

天杜任淵

后山詩集目錄年譜附

跋に弘治丁巳秋九月朔石淙楊一淸識

右は珍奇之書之由楓山にても別庫に相貯へ大切にいたし置候品にて御座候〔正月幾望〕

〇虙譯傳記

虙譯傳記〔國字解三卷〕山本守秀解注

寛政七年卯十一月　皇都書林

麩屋町松原下ル町　升屋庄兵衛　板

寺町松原下ル町　梅村忠兵衛

是は虚無僧ノ家ニ傳ル俗書ナルベシ普化禪師ノ傳ナドアリ

○武徳鎌倉舊記　武徳鎌倉舊記後編十三ヨリ第廿四ニ至ル

鎌倉繁榮廣記第一之巻

延享二年丑正年吉日

京ふや町通せいぐわんじ下ル町八文字屋八左衛門板也

と題せるもの十二巻延享二乙丑青陽上旬作者（八文字）自笑が序ありて歴代の軍書にもれたる事どもを拾ひ纂め全部十二巻に編て鎌倉繁榮廣記と號し世に弘め畢とあれども自笑などが作るべきものにあらず實朝卿一代の事を記せり是は其書に記せる武徳鎌倉舊記と云へるものゝ後編にしてかゝる一種の僞書なるべし（己卯閏四月小盡清晨）

○堤氏藏書目錄

有親君御願文傳記　　徳川世記

御十代考（大久保忠寄）　　岩淵夜話別集（上下　大道寺友山）

○成憲摘要（上下　丸山可澄）　　○參州一向宗亂記

三方原合戰記　　林鍾談二（岡田幸右衛門）

○板坂卜齋覺書　　○大阪陣覺書（山口久庵）

北川次郎兵衛覺書　　○秀頼公籠城記

文廟御傳略（篠山吉之助）　　御忌辰記（源朝風）

御三家忌辰記（源朝風）　　諡號雜記

千年山〔朝風〕
御三卿譜三 〔朝風〕
豐太閤朝鮮軍令
○朝鮮南大門合戰記〔天野源右衛門〕
大正寺淺井暇合戰記
○小松物語
浮田秀家記
井伊家記
黑田記
○依田記
松平十郞左衛門記〔源忠勝〕
水野左近武功覺書
淺川傳右衛門聞書〔三〕
庵女談
安藤帶刀物語覺書
堀直寄記
老蟹談
老人雜話〔上下〕
勇士物語

福井鑑〔上下〕
吉支丹山來記
豐太閤遺物帳
大和軍記
○村井勘十郞覺書
○武田勝賴滅亡記〔尼理慶〕
○藤堂高虎記
鳥居家記
片桐記
那須記
本多利長家覺書
烈公遺事〔湯淺元禎〕
聞見集二 〔石川新兵衛〕
故諺記
水野隼人正覺書
翁物語二 〔小早川能久〕
講習餘錄〔淺見安正〕
備前老人物語
古老夜話

武功實錄
○寛永小説二〔林信篤〕
定西法師琉球物語〔朝倉景衡〕
秦庵戯言〔二〕
○浪合記
事物權輿
○査祆餘錄
○新蘆面命
武具要說〔高坂彈正〕
昔物語〔新見法入〕
○四十六士論〔太宰純〕
○野夫談〔横井也有〕
天龍秘錄
稻亭物怪錄〔上中下〕
○封事〔太宰純〕
並呑錄〔上中下〕
無名氏隨筆〔上下〕
以酊菴事議艸〔白石〕
○邏馬人欵狀
石谷士入記
渡邊幸庵對話
改元物語〔林忠〕
○最明寺殿庭訓
永祿以來出來初
茗話
○慶安四年江驛往復書
○盍徹問答
薫風雜話〔澁川時英〕
赤穗義士書翰
讀四十六士論〔松宮俊仍〕
○江島罪斷事略
反汗秘錄〔私云白河少將中山亞相事也〕
雜著〔徂來〕
獨語〔上中下　太宰〕
○寓意艸〔上下〕
○將軍宣下三十一度儀不同次第〔白石先生〕
進呈案〔白石〕
魯西亞人來舶記

伊東見達筆記
天正十八年三千石以上分限帳
甲府家分限帳
尾張家有司錄
水戶御附人姓名帳
○諸家臣万石以上並城主記
徂來先生事記（同雜著）
金花根元記（源朝風）

以上

神祖泉堺記事（柏崎永以）
○諸大名家中分限帳
天草記（立花宗茂）
兩陣覺書（水野勝成）
山本學齋覺書
城戶豐前記
元和小說
古士談話
落穗舊談（三）

新樂閑叟筆記
慶長四年諸大名分限帳
舘林家分限帳
○自紀藩供奉姓名帳
島津家分限帳
熊澤先生行狀（湯淺元禎）
諸家賜松平記
江守翁物語
北條家分限帳
江上合戰記
天草記（十時三彌）
渡邊勘兵衛覺書
駿河土產
靈巖夜話
將士美談
古言名玉二（天野彌五右衛門）
窓のすさみ（松崎祐之）

同拾遺〔同〕

○雨夜燈〔湯淺元禎〕

雨窻友〔三〕

○鳩巣小說〔三〕

千代見艸〔上下〕

村越道伴記

並河太左衛門記

○井伊万千代記

右菱錄

藩史別錄

○仰景錄〔二〕

事語繼志錄〔四〕

加納五郎左衛門直恒行狀記

山形軍記

里見記

正保遺事

○毀屋紀事

○老話

野芹〔上中下〕

諸家所替記

諸國城主次第

御三代勝事記〔川口長孺〕

肥後物語〔龜井魯〕

宗心渡天記

右は堤氏より借抄す〔寅十月〕

押山氏の記に見ゆ

己卯三月廿七日抄錄

○南畝文庫所藏の印也

○犬追物記

一犬追物記　林　春齋

正保三年四月七日薩州太守島津氏招衆閣老於芝別墅觀犬追物云云

右鵞峰文集卷十五ニ出ヅ

犬追物御覧記〔寫本〕

正保四年丁亥十一月十三日將軍家武州王子村ヘ渡御アリテ犬追物ヲ御覽セラル是ハ松平薩摩守光久（本氏島津）其家ニ傳習ハス由緒アルニヨリ上覽ニ備ヘ奉ラント連ニ執事ノ者ヲ以テ望申シケレバ御許容アリテ此村ニ新ニ棧敷ヲカマヘ馬場ヲ築カシム云々

右一帖忝蒙　台命列供奉之後候棧敷之末而始終縱覽之他日逢薩州之家老久通尋其儀式且問御前之次第於前橋侍從以記之爲一卷而呈侍從其副本於書庫者也

春齋

種按ずるに鵞峯文集にのする所は正保三年四月七日芝の別野にて犬追物をなして御老中の御覽に入し漢文の記也寫本にある所の犬追物記は上覽奉入し和字の記也

○天台敎

安南郡督吳越錢氏。多因海舶通信。天台智者敎五百餘卷。有錄而多闕。賈人言。日本有之。錢俶置書於其國主。奉黃金五百兩。求寫其本。盡得之訖。今天台敎。大布江左。（楊文公談苑）

右皇朝類苑卷七十八に見へたり

○青木昆著述目錄

經濟纂要前集（十二卷）　同後集（五）　同續集（五）
官職略記（十三）　刑法國字譯（十二）
國家食貨略（一）　○國家金銀錢譜（一）
○昆陽漫錄（四）　草盧雜談（一）
續草盧雜談（二）　○咨問小錄（二）
○奉使小錄（一）　對客夜話（一）

一夕話(一)　續一夕話(一)
雜集(一)　郡名考(一)
和蘭貨幣考(一)　和蘭文字略考(一)
和蘭和譯(一)　和蘭勸酒歌解(一)
和蘭櫻木一角說　和蘭話譯後集(一)
長崎聞書　○甘諸
○丶丶
通計廿五種自筆本藏于其家　○は家藏せり

祝允明の評集に櫻の詩あり(懷星堂集三十卷一帙牧野和州所藏)

○祝允明櫻詩

和日本僧省佐詠其國中源氏園白櫻花

剪雲彫雪下瑤空。綴向蒼柯翠葉中。晉代桃源何足問。蓬山異卉是仙風。

荅日本使(姪橘名省佐相國寺僧)

日邊來時幾何時。聞說古中後到寅。(海船行憑指南鍼。日本在寅申。南折西指申。却廻還近乃中國寅。寅讀若夷。) 遙仰北辰趨帝座。欲經南甸駐行塵。詩名愧動鷄林客。禪諦欣參鷲嶺師。回首山川渾渺邈。只看明月慰相思。

右五山菊池氏の物語也

○澹居藁詩

元の至正年中澹居子名は至仁字は行中熙怡道人は鄱陽の人也法を元叟端和尙に得たり澹居稿の中に

送龔謙上人還日本幷簡双林明極和尚

十年問法天王地。萬里鄉山碧海東。雲室有禪傳鼻祖。蒲帆無恙轉秋風。潮連蓬島晴雲白。霞擁扶桑曉日紅。爲問双林老尊者。尺書還寄北來鴻。

按明極は所謂俊明極なり

送謙上人還日本幷簡天龍石室和尚

回首扶桑若箇邊。春風万里上歸船。神龍饋供雲迷海。仙女吹花月在天。密意西來端有得。新詩東去豈无傳。若逢石室煩通問。歲晚南湖學種蓮。

○賣廟

張謂撿正中書五房公事判司農寺上言。天下祠廣。歲時有燒香施利。乞依河渡坊場。召人買撲。王荆公秉政。多主謂言。故凡司農起請。往々中書即自施行。不由中覆。賣廟勅既下。而天下祠廟。各以緊慢。價直有差。南京有高辛廟。平日絕無祈祭。縣吏抑勒祝史。僅能酬十千。是時張方平留守南京。因抗琉言。朝廷生財。當自有理。豈可以古先帝王祠廟。賣與百姓。以規十千之利乎。上覽疏大駭。遂窮問其由。乃知張謂建言。而中書未嘗覆奏。自是有旨。臣僚起請。必須奏稟。方得施行。賣廟事尋罷。（倦遊錄）

右皇宋事實類苑（吉州太守江少虞所著）卷七十八に出たり按するに享保元文のころより東都所々の神社佛閣の側に私窠子を置て脂粉錢を上納せしが寛政のはじめ白川侯の 新政にことごとく罷められしことありて今はなし賣廟の事に似たることなるべし

○遍照院前大僧正頼印行狀繪詞（十卷）抄

抑遍照院内大臣僧正頼印ト申スハ上野國群馬郡榛名山ノ人也父ハハヾカリアルニヨリテ隱密ストイヘ

ヒ人モテ推量スル者カ隨テ三條内大臣公忠公ノ猶子トシテ内大臣トゾ申ケル二條ノ攝政殿連々ノ御書ニモカヤウニアソバサレケル母ハ中關白道長公ノ後胤榛名ノ座主快忠ノ嫡女也母塔元亨二年ニ信州諏方ノ下宮ニ詣テ男子ヲ祈〔中略〕
同元亨三年〔癸亥〕四月十四日寅刻誕生母塔平安也亥年ノ巳月寅日寅刻出生ストテ名ヲ寅亥トゾ申ケル嘉曆元年院主五歳ノ時慈母同道シテ鎌倉永福寺別當二條殿僧正房道承ニハジメテ出仕僧正鍾愛感嘆ノアマリ竹薗御産ノ實ニ給ラレシ所ノ榛名山ノ執行職幷左マキノ御劔一腰ヲ讓與セラル御懇志ニコタエテ遂ニ出家ヲトゲテ當山相續相違ナキモノ也
寶蓮院前大僧正賴仲ハ道承ノ御門弟也然而世變シテ將軍一統シ給ヒシ故ニ鶴岡八幡宮ノ別當ニ補セラル道承ノ御舊好忘ガタキニヨリテ上州ヨリ尋出奉テ院主十四ノ年建武三年八月廿一日彼室ニゾ入給ケル曆應三年十月二日出家ヲトゲテ登壇受戒ノ爲ニ上洛ノ處ニ神行ニヨリテ山門閉籠ノ間重テ翌年四月八日ノ受戒ヲトゲ同六月一日ヨリ賴仲ニ隨奉リテ三寶院十八道ノ加行ヲハジメラル四度相續シテツイニ康永二年十月九日雪下新宮ノ別當坊ニシテ授職灌頂ノ密壇ニ入室ニ加行中〔八月二日〕夢ミラク東寺ノ南大門ニシテ弘法大師ニアヒ奉ル墨ノ衣ニ五條袈裟ヲカケ左ニ杖ヲ携テ短冊ヲサシハサム御詠アリ
　尋ハヤ月ノ出シホノユフ浪ニタテノカラサノアサヽフカサヲ
件ノ札ヲ南大門ノ前ノ塚ニ立給フ是ヲ推スルニ東寺修理ノ勸進ノ札カトモヲモヘリ若我自餘再興ノヿアラバ東寺ノ修造ヲ申沙汰スベキヨシヲゾ心ノウチニヲモハレケル
文和二年二月廿八日任權律師〔于時卅一歳〕
同三年八月十八日任權少僧都〔年卅二歳〕
延文三年七月六日任權大僧都〔卅六歳〕

岩松治部大輔直義ハ左馬頭義兼ノ嫡々トテ源家無双ノ人ナリ觀應二年ノ比將軍ト錦小路殿ト不和云云錦小路殿ニ心ヲヨセシニヨリテ隱家トナレリ爰ニ關東管領畠山阿波入道ニ誓御不審ヲ蒙シ時本領子細アルベカラズトテ召出サレテ康安二年ニ豆州立野城ヘ發向ス御所進發ニヨリテ道誓ハ京都ヘ參兄弟共ニ降參ス此條直義ノ高名也鎌倉還御ノ後ハ早速ニ本領還補スベキトコロニ兎角延引シテ其期ナシ隨テ直義院主ヘ參テ申テ云此事人間ノ力及ザル處也伊御加持力ヲ仰ベキヨシ歎申サルヽ間八幡ノ本地ノ護摩ヲ一七日勤行シテ卷數ヲ遣ハサルヽ處ニ同時ニ還補ノ御教書到來手ヲ拍テ法驗ノ地ニヲチザル事ヲ賞シテ上州丹生郷ノ慈恩寺ノ別當職ヲ奉ラル當寺ハ中納言健師忠快ノ草創靈佛ニシテ其瑞繁多也

貞治二年十月廿日叙法印四十一歳

榛名山仙ノ洞ト申スハ仙人ノ在所ニテ今モ鈴ノ響ヲ聽讀誦ノ聲ヲ聞所也瀧ノ水上辨才天ノ岩屋アリ此所ニテ行スルモノカナラズ白蛇ヲ拜シ金銀ノ錢智惠辨才ヲ得者也云々

應安二戊申年十一月三日院主江島ニ詣ス諸龍ノ岩屋ニシテ法施シ給フ傍ニ風雷神出現色赤シテ長五尺バカリ也〔畧〕

同四年七月晦日又參詣ノ時モカクノ如シ其時ハ青蛇也〔畧〕

院主生年正月一日ヨリ毎日補闕ノ勤トシテ五輪塔婆八万四千基地藏菩薩六万体手ヅカラミヅカラ香烟ノウヱニ摺寫開眼シテ滅罪ヲイノリ給フヿヲコタラズ云云

觀應二年二月廿日新田義興朝臣判反ノ時榛名新座主忠尊同心合力隱ナキニヨリテ彼座主職ヲモチテ治部卿法印賴晋ニ等持院將軍御判ヲ下サレ然レ圧本主サヽエ申ニヨリテ今ニ延引スル處ニ新座主更ニ先立テ六月十三日頓滅又ノ本座主快尊同廿四日頓共ニ讓ニ及バズトイフトモ快尊末子快承新座主ト號シテ管領タル處次年三月八日頓滅セシカバ其跡ナキガ如シ隨テ等持院殿ノ御判モモダシガタキ上此職ヲ

望申べキヨシ諸人諫メ申間院主神慮ハカリガタキニヨリテ權現ノ寶前ニシテ神鬮ヲトリテ是非ヲ決スべキ處ニ三度ニ三度申べキヨシヲ得タリ神慮ニマカセテ訴狀ヲアグル所ニ御沙汰落居シテ院主付ラル榛名山ニ靈鳥アリ奇聖ト號ス件ノ靈鳥御沙汰早朝瑞ヲ示ス云云

此前ニ永相二年ノ亅アリ又七月ノ亅アリ

同廿八日夜院主夢ミラク筆匠道阿來命シテ筆ヲ製ス道阿先二十管ノ眞毛ヲ製スサメテ夢ドキシテ云筆匠ノ名ハ道阿ナリ製スル所ハ心ナリ阿字ハ菩薩心ノ種子也道心堅固ニメ阿字本不生ニ達スべキ亅ヲゾ授給ヒケルツギニ三七日ノ斷食相違ナクシテ結願セラレシ亅人間ニハ比類ナキヨシ貴賤讚歎セズト云亅ナシ

同廿九日三七日斷食ノ願滿ストイヘドモ生涯ノ間菜食スべキ志ナリ爰ニ同十二月七日梶原備中守先社務僧正ヘ參リテ申テ云遍照院數日斷食驚入候ノ處ニ重テ菜食ノヨシ承驚歎候祈禱事憑ミ入候處若大事出來候ハヾ珍事ニ候心テ一ニシテ教訓ヲ加ラレ候ハヾ本意ニ候猶以異儀ニ及バヽ公儀アルべキヨシ仰ラルヽノ間備中守ニ賴使大僧都ヲ相副テ院主ヘ參子細同前院主尊意ノカタジケナキニ應ジテ使節ノ前ニシテ始テ飮食スル者也殊更龍蹄一疋御使ニ引トナム

豆州江馬寺ニ舍利アリ關東無双ノ重寶也古ノ別當改替ノ刻竊ニ隨身セシヨリ以來莵角相傳シテ今ハ箱根ノ衆徒權現ノ助阿闍梨相得シテ寸モ身ヲハナタズ爰ニ箱根別當弘實法印權ニヨリテ方便シ取テ頸ニ懸テ上洛ス永相三年十一月ノ比弘實夢ラク獨ノ沙門來テ云鎌倉遍照院法印ハ則チ地藏菩薩ノ分身也然トイヘドモ只錫杖ヲ持シテ寶珠ヲ持セズ（ム歟）是俗体不足也所詮汝所持ノ舍利ヲモチテ院主ニ與べシ然バ汝モ自訴ノ本意ヲ達シ彼モ利益無邊ナラスト弘實心驚トイヘドモ件ノ寶珠ヲ他ノ有ニナサム事ヲ吝惜シテ是ヲ與ヘズ翌年二月十五日夜又弘實夢ミル事先ノゴトシ此度若承引セズムバ汝ヲ罰スべシト弘實今度

ノ感夢ニ驚テ侍ヲ使トシテ御舎利ヲ院主ニ獻ズ彼書狀事シゲキニヨリテ是ヲ載セズ其後世間出世期セザルニ吉兆出來ス二月廿二日關東護持僧ニナシ加ラル十二月廿四日權僧正ノ官ニ任ズ同五年安房國岩井ノ入不斗モ鶴岡八幡本地供道場ニ寄附セラル七月上總國上迫村ヲ金澤光德寺ニ寄附セラル同七月管領上野國片山ノ西ノ村ヲモテ八幡本地供道場幷新宮ヘ寄附セラル康曆二年ニ願成就院ノ供僧職ヲ安堵シ同東寺ノ二長者ニ加ハル永德元年武州慈恩寺ヲ拜領ス寺領七郷ハ義政入給ニナル間今度落居シテ一圓ニ寺家ヘ付ラルヽ者也同二年雪下新宮別當ヲ還補ス先年瑞相アリシ事今ノゴトク覺ヘテ感淚ヲモヨホス下總大河戶鄕ヲモテ光德寺結緣灌頂ニ御寄附梶原美作入道ニ景鷲栖ヲ寄進ス問注所淨善八新方ニ田畠十町寄進ス同三年武州鹽船寺ヲモテ二階堂式部大夫入道及政院主ニ奉ル同年御厩領ノ關所ヲモテ熊野權現四季護摩料所ニ寄附ス武州忍領ヲモテ箱根別當弘實永代ヲ限テ院主ニ寄附ス此外吉事カズヲシラズ云々

夫東關ノ護持僧ハ二條殿僧正房遺跡トシテ院主望ナキニハアラズ然レ圧閑ヲ愛スルコヽロザシアリテ漸ク交衆ノ義ヲトヾム爰ニ大御堂ノ別當前大僧正守惠御祈禱奉行トシテ小田ノ筑後入道性宗ヲモテ伺申サレテ云院主ヲモテ護持僧ニメシ加ラルベシト武衞又本ヨリ然トシテ則御教書ヲナサル于時永和四年二月廿二日也云々

永和四年十二月廿四日任權僧正〔五十五歲〕

永和五
同年鎌倉左典廐大一定分重厄也殊謹愼輕カラズ隨テ二階堂安藝守ヲモテ院主ニ仰ラレテ云今年尤愼ムベシ來四月廿八日ヨリ五月ニイタルマデ殿中ニ參住シ給フベキヨシ仰ラルヽ間領狀申サル使節勸盃三獻一重一東ヲヒク廿八日ヨリ（吉イ）一字金輪ノ法ヲ殿中ニヲヒテ始行コレソ護持僧ノ御祈禱ハジメナリシ件ノ僧六口每事息災法也此修法中大慶三箇條アリ一ツニハ關東前管領上椙刑部大輔入道道彌去三月八日

自害ノ刻杳兒道合土岐善忠對治ノ大將トシテ數万騎ヲ卒メ上洛ス□伊豆ノ三島ニ信宿ス爰ニ道合管領タルベキ由仰ラルヽ間尊命ニヨリテ四月廿八日開闢ノ時分歸參シテ出仕ス二ニツハ道彌自害ニヨリテ關東野心ノヨシ洛中ヘ撤スル間武衛驚テ自筆ノ告文ヲ認メテ瑞泉寺古天和尚ヲ使トメ將軍ヘ陳謝申サルヽ所ニ同五月二日將軍自筆ノ狀ヲ以テ子細アルベカラザルヨシ返事アリ三ツニハ京都ノ管領未定ノ所ニ同日志波治部大輔義將ナ以テ其任ニ補セラル都鄙ノ兩管領同時ニサダマリシカバ梟害ノ義悉ク和睦ニ歸ス豈天下ノ大慶ニアラズヤ此三ケ條修中ノ法驗タルヨシ一人ヨリ万人ニイタルマデコレヲ悅バズト云フ事ナシ

小山下野守義政ハ秀鄕ノ後胤トシテ天下無双ノ大名也勅命ヲ輕ジ鈞命（旨本）ニ背ク事適居朝ノ隸由也ツキニ康曆二年六月十五日鎌倉武衛制（征カ）罸ノ爲ニ發向先上椙安房入道道合同中務少輔入道禪助木戶將監入道法季等ヲ大將トシテ十ケ國ノ勢ヲ卒シテ義政館ニ下着ス義政降參ノヨシヲ歎キ申ス間同九月十九日大將三人村岡御陣ヘ參着然レ（兩本）𪜈義政年內參陣セズ翌年二月十五日武衛重テ發向今度ハ上椙中務少輔入道禪助木戶將監入道法季兩大將トシテ先陣ニスヽムツキニ十三箇國ノ勢ヲ卒メ敵城（適イ）ヲカコム其陣ヒロクトヲクシテ鳥ノトブ事雲衛ニ迷フ武衛威ヲ振テハカリゴトヲ垂帳ノ外ニメグラス義政野臥ヲ四方ニ放テ御方ノ通路ヲ塞ギ火事夜々ニ發テ諸陣安穩ナラズ武衛倩コレヲ案ズルニ佛神ノ加護ニアラズハ靜謐其期ナカラムトテ院主參陣アルベキヨシ御書再ビニ使節タビヲカサヌル間十月九日鎌倉ヲ立テ同十二日太田範連ノ陣ニ參着ス凡下向ノ躰乘輿ノ前ニ相傳地藏菩薩ノ御厨子ヲカヽセ奉ル每事加被ヲ憑故也尾堤ト御陣トノ間十里ナリ此間ニシテ強盜ヒマスキナシ院主下向ノヨシ聞シカハ義政彼法驗ヲ怖テ三百騎ヲ出テ今難所ニシテ院主ヲウタムトウカガヒ先懸三十騎計ニ野臥等ヲ相副テ出ス處ニ御陣ヨリ迎ノ

爲ニ百餘騎甲冑ヲ帶シテ尾堤〔坂イ〕參向スル間カナハズシテ無爲ニトホリ給フ其跡ノ旅人悉ク奪ヒトラレキ云云

同十三日壁關伽棚等ヲ渡シテ殿中ニシテ六字法始行伴僧六口青黑色淨衣也爰同十六日亥刻武藏上野ノ白旗一揆兩大將ニモ案内セズ鷲ノ外城ヲ責入テ挑戰事數同敵御方ノ軍勢打死手負數ヲシラズツキニ外城ヲセメ落ス間外城ノ勢鷲城加ハル者也コレゾ敵城沒落ノハジメナリシ今日六字法中日ニアタルトテ御方貴賤上下法驗ヲ悅ビ城中ノ一族他門效驗ヲチヂテノヽキケル御感ノ御敎書ヲ被成テ云

當于六字經修法ノ中日ニ鷲城沒落冥感令然者也殊可被抽丹誠候狀如件

永德元年十一月十八日　　氏滿〔在御判〕

遍照院僧正御房

同廿日信濃入道信諾使ニ來テ云ク武羅御加持アルベシト院主ノ云ク幸ヒ今夕ヨリ不動法始行尤一七日加持ヲイタシ申ベシ凡武羅ハ五大明王ノ三摩地法門也蘇武始テ製セシ故ニ武羅ト書又袍衣トモ書モノ也云々

爰ニ爲重中納言勅撰ヲ承テ詩歌ヲアツムル時院主鶴鳴天聽ニ達シテ其撰ニ預ル黄門自筆ノ狀ヲ献ジテ云

新後拾遺〔雜春歌〕

題不知　　權僧正賴印

コト浦ノ春ヨリモ猶カスメルヤヤクシホガマノケフリナルラム

永德三年十二月廿五日上將ニ暇ヲ請テ金澤光德寺ニ閑居ス同四年七箇尊ノ護摩ノ企一切經ヲ寫ス其內證ハ專ラ斷食ノ爲也其故ハ高祖大師三月廿一日入定尊齡六十二暮齡大師ト同ジ月モ亦三月也指ヲ折テ

其日ヲ算フ爰ニ二月二日上將ノ駕ヲ蒙リ俄ニ臨ム歎話シテ云リ諸道悉ク微セリ眞言一道バカリ効驗ヲ失ハズ小山ノ陣ニ於テ院主ノ法驗ヲミル尤敬信スル所也願ハ護身法ノ傳受ヲユルシ玉フベシ院主ノ云ク關東護持ノ宿老大御堂若宮也尤御傳受アルベキヲヤ重テ云ク敬信ニヨリテ懇望ス云々仍テ印明ヲ授ケ奉ル御布施トシテ隨方ノ秘劔ヲ院主ヘ献ゼラル云々

光德寺結緣灌頂ハ鎌倉左武衛發願也源右幕下鎌倉草創以來御願トシテ彼大法事ヲ行ハレス何ニ況ンヤ不朽ノ御願末ダ其例ナシ武衛ト院主ト師檀他ニ異ニシテ此大會ヲ申シ行ハルヽヿ利益衆生ノ方便何事カコレニシカン勅願ノ御願皆ナキガ如シ末世ノ今ニ至リ毎年勤行ノ料所トシテ下總國大河戸郷ヲ寄附セラル永德三年十二月四日開闢已來イマダ退轉ナキモノ也

三寶院流ハ醍醐嫡々ノ正統トシテ秘佛靈寶ノ本尊聖教等師資相承シテ新玄大僧正覺雄大僧正ニイタルマデ傳來相違ナキ所ニ元弘大亂ノ刻後醍醐天皇一統シ玉ヒシカバ關東ノ僧俗參洛セズト云ヿナシ隨テ覺雄〔于時權僧正〕上洛ノ時極樂寺長老印教上人ハ印可ノ弟子タルニヨリテ本尊聖教等ヲ預ケ置ラルヽモノ也覺雄附弟道快僧正彼本尊聖教ノ返サルベキヨシ極樂寺ヘ申遣ス所ニ年序ヲ經タルウヘハ返スベカラザル由返事ス〔中畧〕

至德二年
同五月廿四日武衛眞言御傳受ノ次ニ院主此事申出サルヽ時二階堂式部大輔入道友政ヲ奉行トシテ寺家ト問答スベキヨシ仰付ラルヽ間再三問答ストイヘ𪜈進ズベカラザルヨシ申ウヘ剩ヘ友政奉行タラバ寺家忽チ面目ヲ失フベキヨシ申ニヨリテ問注所信濃入道淨善ヲ奉行トシテ再往問答子細同前隨テ京都ヨリ御教書ニ被成テ云云々〔中略〕

至德二
仍テ十一月一日奉行明石左近將監行氏布施主計允家連寶蓮前大僧都相覺法印權大僧都賴祐權律師賢政

法橋乘秀等極樂寺へ向フ所ニ先ヅ花形ノ箱〔被納靈寶日記在別〕御筆ノ孔雀經三卷八祖相傳袈裟一帖雲加持五鈷等ヲ請取モノ也同四日祖師眞筆ノ聖教等一合仁海僧正眞筆兩界成賢僧正眞筆ノ兩界曼荼羅覺樹院持尊彌勒等悉ク渡取之奉行兩人新宮別當坊へ送入奉ル此ヿ自宗ノ重事タル所ニ相違ナク本院へ歸入ノヿ誠ニ宗三寶御加護兼テハ院主德行ノ力タルヨシ貴キモ賤キモ稱美セズト云ヿナシ

至德三

同五月廿七日小山若犬丸（小山下野守義政子ナリ氏滿軍記弱犬丸トアリ）打出テ下野國祇薗城ニ楯籠ヨシ同廿九日方々ヨリ早馬參ル所ニ當國ノ守護代木戸修修理亮多勢ヲ卒シテ同國フルエ山ニ陣ヲ取所ニ若犬丸競ヒ來テ散々ノ合戰ニ及ブ間守護ノ勢ウチマケテ足利莊へ引退ク同七月二日御所御發向アルベシ院主同道申サルベキヨシ友政ヲ使トシテ仰ラルヽ間辭シ申サレガタキニヨリテ供奉セシメ玉フ所ニ同十二日若犬丸沒落然レ𪜈猶行末ヲ尋ンガ爲ニ下總國古川鄕ニ陣ス云々

小田讃岐入道惠尊ハ八田四郎朝家嫡々トシテ關東譜代ノ武士也去永德二年永賢法印（小山下野守義政剃髮ノ名也）退治ノ後諸大名武衞（草云）（可補氏滿軍記）ノ供奉シテ在關セシ隨一也爰ニ去至德四年五月ノ頃野田入道等忠古河ヨリ囚人搦メ進ズ子細ヲ尋ラルヽ所ニ小山若犬丸惠尊ガ館ニ居住シテ野心ヲサシハサムヨシ白狀隨テ同六月十三日惠尊幷子息二人召籠ラレテ人々ニ預ケラルヽ所也同七月十九日上椙中務少輔入道禪助ヲ大將トシテ小田へ發向ノトコロニ小山ノ城ヲ沒落シテ男躰城ニ惠尊子息兩人執行信田以下若黨一族悉ク楯籠ノ間禪助多勢ヲ卒シテ男躰山ノ麓ニ陣ヲトル作ノ城ハ自然ト要害ニシテ人ノ徃來モタヤスカラザル間兩家ノ間陳取ニ及ザル所ニ將軍海老名備中守ヲ使トシテ役等ヲ扶ケラルベキヨシ口入ノ間去喜慶（嘉慶）二年五月廿二日惠尊幷子息孫四郎召出サルヽトイへ𪜈嫡子太郎ニ於テハ那須越後守預ルモノ也爰ニ夏ノ季御修法院主當番ノ間五月十五日ヨリ千手法殿中ニヲヒテ始行同十六日雷鳴アリ賀瑞ノヨシ申サルヽ間武衞敬信ノイロ也同十七日

ノ曉俄ニ大將以下ノ諸軍心ヲ一ニシテ陳取ノ爲貴ノボル所ニ折節修理ノ料ニ鹿垣木戸以下トリ破リタル所ニ御方ノ勢霧ニ迷テ陣取ノ所ヲ過テ左右ナク城中ニ責入間各力ヲ勵シテ勝ニ乘ジテ責戰フ間御敵百餘人腹切テ城中灰燼トナスモノ也此由同廿日注進即時ニ梶原美作入道ヲ以テ仰ラレテ云御効驗今ニハジメザルヿニ候トイヘドモ今度ノ御尊名當篇ニ絕タルモノ也就中木尊千手十八日沒洛前代未聞ナリ（木當作患歟）彌信仰他事ナシ殊御感ノ御教書ヲ成サルベシトテ淸式部入道是淸執筆云

相當千手修法中日男躰城沒落之條冥感所令然也彌可被致精誠狀如件

嘉慶二年六月一日　　御判

永福寺別當僧正御房

筥根別當弘實ハ行實別當嫡々トシテ社務相續ノ仁也爰ニ建武大亂ノ時恩ヲワスレ讎ヲ構ヘテ實盛法印伯父契實別當ヲ打テ社務職ヲ掠メ玉ハリシヨリ以來兩流ニワカレテ互ニ非ヲアゲ疵ヲモトム永德元年五月廿四日ノ夜弘實ガ被管ノモノ夢ミル院主弘實相傳ノ文書ヲ持メ御所ヘ參テ申テ云弘實相傳ノ文書如此御裁許尤然ベシトヨル。翌日侍所ノ沙汰ノ時當別當宗實山上ニヲヒテ衆徒十三人ヲ誅罸セシ罪ニヨリテ弘實理運ニ任テ還補シ本意ヲ遂スルヿ併院主ノ恩力ナリトテ武州忍郷ヲ以テ永代院主ヘ寄所申ケリ

賴印僧正狀十卷〔合爲二冊〕上野國群馬郡〔□□〕村所藏也信充聞此書秘在榛名山募求有年是歲夏得和州刺史宮道君之書遂以謄寫子々孫々能保護勿輕視云

文化十三年丙子秋九月源信充

右二卷中ヨリ瑞夢ノヿヲ除キ事實バカリ抄寫〔己卯季夏荒和祓前一日書〕

○日本詩紀引書

日本詩紀六卷〔活版〕　上毛河世寧子靜著

引用書目

懷風藻　万葉集　凌雲集
文華秀麗集　經國集　雜言奉和
續日本後紀　性靈集　殘菊詩卷
田氏家集　菅家文草　菅家後草
水石亭詩卷　天德鬭詩　應和詩合
扶桑集　本朝麗藻　和漢朗詠
江吏部集　類題古詩　永承詩合
天喜詩合　本朝文粹　續文粹
作文大體　朝野群載　新撰朗詠
教家摘句　江談抄　階莚詞藻〔本名無題詩集〕
續世繼　源氏河海抄　著聞集
十訓抄　往生傳　一人一首
歷朝詩纂　壼籍錄　公卿補任
公卿類傳　大系圖　編年錄

右四十二部或有合雜言殘菊水石教家四部名詩文警句者今從舊題

○佐々軍記二條　生駒竿靈巖洞

佐々內藏亮源成政は尾州春日井郡の產にして比良の城主也織田信長につかへてしば〳〵戰功を勵し越中の守護に封ぜられ外山の城に居住す信長薨逝の後織田信雄に屬し羽柴秀吉と戰ひ名を日域にあらはせりこの役に秀吉天下掌握の後成政が信雄にくみせしをにくみ事によせて滅さんことをはかり給ひける天正十五年六月二日秀吉公薩州島津征伐の後肥後南の關に御陣をすへられ有功の輩に所領を賜るとき肥後國をば佐々成政に賜り陸奧守と號せらる是成政を滅されんが爲也と後にぞ思ひ合せける〔中略〕同月六日成政熊本の城に入ければ當國の諸城主國侍各出府せしめける〔中略〕成政つく〴〵と思案しけるは當國は數十ヶ年守護とてもあらざれば國中の田畠を檢地すべしとて生駒小千(ヲセン)と云ものに竿を打せ是までは何町何反といひしを何石ときはめける〔土俗傳へて生駒竿と云一反三百六十步なり〕云々〔略〕
天正十六年五月十四日於尼崎成政切腹
天正十六年閏五月秀吉公肥後國の內二十五萬石を加藤清正に賜り同國の內二十四萬石を小西行長に賜りしかば同六月十三日兩人大坂を出船し二十三日に豐後鶴崎に着廿七日に肥後にいたり清正は熊本の城行長は宇土の城に入たりける云々

右佐々軍記卷七八ニ出ヅ

大永八年九月三日鹿子木三河守源親員入道寂心逆修ヲ飽田郡雲巖寺靈巖洞ノ側ニ建〔中略〕大元明州ノ沙門東陵永璵茲ニ來テ靈洞ノ側ニ梵宇ヲ建寳華山雲巖寺ト號ス故ニ東陵ヲ開山トス曹洞宗也岩上ニ題スル靈巖洞ノ三大字ハ小篆文ニシテ東陵書ノ三小字ハ楷書ナリ共ニ陵ガ筆蹟ト云其景勝他ニ超タリ〔下略〕

右佐々軍記卷十ニ出ヅ

安永年中吾友菊池衡岳〔名禎字叔成〕の弟樋口元良〔名器字季成〕其君熊本侯の駕に從ひて肥後にゆきて歸し時此靈嶽洞の事を語り三大字ことの外見事にして巖に彫付たるが筆者はしれずといひし

が東陵書の三字は小字とあれは見へかねたるなるべし今年此書をよみて此事を思ひいだし懐舊の思ひにたへすこゝに書つく

文政二年己卯七月十日のあした　杏花園

○平泉實記

〔陸奥〕平泉實記五卷　陸奥氣仙郡相原友直著

寛延辛未（寶暦元也）歳春社日の序あり西播那波師曾寶暦壬申の序あり橋本見齋好孺の序もあり通編賴朝卿泰衡征伐の事を記して東鑒により舊跡をたづね村老の談を錄す武德鎌倉舊記などよりは實錄もあるべし近來松前の往來多くして秀衡の事など遺聞多し〔己卯七月十二日一讀過〕

○山家義苑

山家義苑　雲間沙門　可觀述

山陰法孫　智增證

双遊　金錍義十篇　総別　辨岳師三千書

時皇宋嘉凞戊戌

比丘良阜刊于白蓮

卷上ばかりにて半本なり宋板の書なり天台の法門を述し書なり

○易纂言

易纂言〔元呉澄書〕　徂來先生の行草の書なりと云

易纂言

象上傳

彖者。文王所繫六十四卦之辭。彖傳者夫子爲釋文王之彖辭而作也。經有上下二篇。故傳亦從經而分上下。陸氏曰。彖斷也。以斷一卦之吉凶者。案字書彖即豕字。從互從豕。互豕頭。象其上銳之形。蓋野豕也。其頭最有力而銳。善斷物。故假借爲決斷之義。音與豕同。又音承至切。因假借其義。又假借其音。爲通貫切。

予かつて加川元厚が藏る所の唐詩訓解ㄷ古今和歌集ㄷをみる訓解は父の命によりて先生書する所の楷書也古今は假名の體本阿彌光悦に似たり楷書は拙き方也き其比書籍の不自由なる事みつべし

○二十二史文抄

二十二史文抄　納蘭常安履坦選評

明史の文は李于鱗王元美一編もなし

○同明史文抄の中利瑪竇が事

明史文抄卷之六

請遣還大西洋國人利瑪竇疏　朱國祚

國祚。字兆隆。秀水人。官至大學士。謚文恪。萬曆二十九年。爲禮部侍郎攝部事。時大西洋人利瑪竇入京師。中官馬堂。以其方物進獻。國祚上疏。

會典止有西洋瑣里國。無大西洋。其眞僞不可知。又寄居二十年。方行進貢。則與遠方慕義特來献琛者不同。且其所貢天主。及天主母圖。既屬不經。而所携又有神仙骨諸物。夫既稱神仙自能昇。安得有骨。則唐韓愈所謂凶穢之餘。不宜入宮禁者。况此等方物。未經臣部譯驗。經行進獻。則內臣混進之。非與臣等溺職之罪俱有不容辭者。及奉旨送部。乃不赴部審譯。而私寓僧舍。臣等不知其何意。但諸蕃朝貢。例有回賜。其使臣必有宴賞。乞給賜冠帶還國。勿令潛居兩京。與中人交往別生事端。

自是正論。紂念臺亦言。當放回本國。永絶異敎。此疏與呂黎佛骨表同功。〇此疏從外國意大里亞傳錄出。

再上疏　　朱國祚〔見前〕

利瑪竇自言。自萬曆九年。泛海九萬里。抵廣州之香山。至二十九年。始入京師。是年八月。國祚又疏。

臣等議令瑪竇還國。候命五月。未賜綸旨。毋怪乎遠人之鬱病病而思歸也。察其情詞懇切。眞有不願尙方錫予。惟欲山棲野宿之意。譬之禽鹿久羇。愈思長林豐草。人情固然。乞速爲頒賜。遣赴江西諸處。聽其深山邃谷。寄跡怡老。

前疏莊。後疏婉。合之則双美。〇此疏從外國意大里亞傳錄出。

覃按ずるに帝京景物略に利瑪竇形の事あればつゐに中國にて死せしこみゆ利瑪竇碑文も寫し置り

〇甘藷

甘藷　享保年中昆陽先生靑木敦書〔文藏〕上總國塚崎町千町田へはじめて命下りて植初しこいふ甘藷山口觸山〔植之肪田安士〕より贈れり昆陽甘藷の事書上にも有之百姓の言葉に符合せりこぞ文政二年己卯冬月廿九日にしるす

〇清國地志の事

清國地誌撿目

題言

凡府州縣志ノ庋藏ハ

有德大君ノ盛意ヨリ出テ各地盡ク收儲セラルベキ盛擧ナリト云ヘリ則享保七年四月松平加賀守綱紀ガ獻本保定河間等十三府志ヲ御庫ニ收メラルヽノ類其採訪ノ至レルヲ聞ベシ爾來舶來ノ地志陸續新收

ノモノ亦少トセズ其兩京十四省志ハ既ニ全備シタレドモ各府州縣ハ僅ニ四分ノ一ノミ固ヨリ數屈指ニ遑アラザルヲ以テ從前ノ御庫書目モ順序統紀未ダ一定ニ及バズ各志ノ單本收貯ノ存否モ遽ニ辨斷スベカラズ故ニ今收否ヲ撿査スルモノ左ニ開列ス

清國

兩京　通志已收

十四省　通志已收

百九十二府　府志七十一部已收　百廿一部未收

二百三十二州　州志五十二部已收　百八十部未收

千二百八十六縣　縣志三百八十九部已收　八百七十九部未收

右未收ノ地志陸續全備アリテ有德大君ノ盛意ヲ紹遵セラルベキ一擧アラン事ヲ欲シテ乃林祭酒ト會議シ本月四日京極參政ヘ建言シテ搜訪書目ヲ長崎鎭府ヘ降シ清商ヘ諭シテ陸續載來セシメ舶載書目進呈ノ林祭酒ヘ降シテ撿閱收貯アランヿヲ請フ其呈案下ニ載ス今又屬吏石井文夷ヲシテ收否撿目二部ヲ錄セシメ一部ヲ局中ニ存シ一部ヲ林家ヘ交附シテ他日ノ撿閱ニ便ナラシム又以テ御庫書目ノ順序統紀向來ミナ此ノ撿目ヲ照シテ其次第ヲ立テ新收ノ度ゴトニ朱ヲ塡テ墨ト爲ントス其明以上ノ地志ハ別ニ各部類ヲ設ク是地志ノ用ハモト當代ノ制置ヲ觀覽センガ爲ニシテ前代ノ沿革今此際ニ取ルヿ無キガ故ナレバナリ

文化十四年丁丑十月

例言

一凡各地ノ志元以上ニ未ダ其備ルモノヲ見ズ明ニ逮ンテ制度一變シ省府州縣ノ志往々ニ出ヅ清ニ至テ建置大ニ革リ各地ノ志始テ全キヿヲ得タリ今　御庫已收ノ地志明撰亦少シトセズ然レ𪜈斑駮ニシテ取ルヿナシ此編モト清志ノ全豹ヲ獲ンヿヲ欲ス故ニ單ニ清修ヲ具條ス

一此編ハ專ラ廣輿古今鈔ニ據ル其撰乾隆三十四年ニ成テ建革ノ最モ後ニ出ルヲ以テノ故ナリ

一凡地志順治康熙ノ撰モ時トシテ牴牾セルアリ是雍正以後ニ復變革アレバナリタトヘバ江南省徐州府潁州府ノ如キ已收ニ順治撰徐州志潁州志アリ是州ヲ府ニ陞セザル以前ノ志也又福建省直隷龍巖州ノ下ニ附スル康熙撰龍巖縣志ノ如キハ縣ヲ州ニ陞セ又直隷州ニ陞セザル以前ノ志也凡此類ニハ州外縣ニ△外ヲ冠標シテ各條ノ下ニ附載ス

一已收ノ志ハ墨書シ未收ノ志ハ朱書ス是將來新收ニ從テ朱ニ墨ヲ塡テンノ便ヲ求ムルガ爲也

一省府及直隷州ハ統轄ノ名也故ニ一字ヲ擡頭シテ收否ノ諸志ニ別ツ其他ノ冠標便覽左ノ如シ

◎　省（南京同之）　〇　通志
◎　府　〇　府志
回　直隷州　□　州志
△　縣志

是より先に十餘年前一年夥敷府州縣志持渡候事有之是迄無御座品之分は不殘林家より御用に書上候處餘り書籍數多く候こて調進方不被仰渡候義も有之由

先年崎陽ノ會所役人春孫次郎ヨリ藩州府志二帙ヲ贈レルヲ文庫ニ藏ス是等モ商賈ニ出候節買置シナ

ルベシ是ナドモ朱墨ノ中ニシテ官庫ニ不レ見ナレバ珍藏スベキモノ也

○戸田茂睡翁歌

夕霧に谷中の寺は見えずなりて日ぐらしの里にひゞく入相

○法華經唐本

妙法蓮華經弘傳序　終南山釋道宣述

楷書兒事也無筆者名

杭州瑪瑙寺南房明臺流通（一部七卷）寺

○酒顛童子像

酒顛童子古像一軀栗原柳菴所贈是は妙安寺看職廣海院敬寶上京の時江州高宮驛骨董店にて求候由中傳店主傳云大賀大明神寶庫中より出もとは頼光四天王の像ともに額に作り有之由

大江山緣起に八月十日は童子忌日なりとありよりて八月十日客を會して童子忌をせんと思ひしが病後酒宴を好ずよりて止

○娶婦以茶（白河燕談）

白河燕談（卷二）　三卷（序ニ辭於南紀寺韜跡洛東洗心於白河流トアリ享保己酉洙意齋自序アリ）

聘婦以茶

客問。嫁娶禮。送レ茶者有レ之。何謂乎。答曰。明陳晦伯大中記四十四日。凡種ニ茶樹一必下レ子。移種則不ニ復生一。故聘レ婦必以レ茶爲ニ禮儀一。固有レ所レ取也。今本邦婚禮約結時。聘物贈副レ茶。此禮何時起。未レ知。

按ずるに此比聘婦に茶を送しや今はなし

置後按此風俗長崎にあり婦嫁時茶を包て持參すること長崎風土記に委しく見ゆ

○阿彌陀經脫字〔選擇集〕

選擇集〔寬永板〕

故龍舒淨土文云。襄陽石刻阿彌陀經。乃隋陳仁稜所ㇾ書。字畫淸婉。人多慕玩。自二一心不亂而下。云二專持名號以稱名故諸罪消滅卽是多善根福德因緣。今世傳本脫二此二十一字一。〔以上〕云々。

于時寬永十六年〔巳卯〕三月十五日

知恩院三十二代榜蓮社雄譽松風〔八旬六〕

大谷寺〔仁一〕納置板本　　五條七左衞門久重彫刻

蕉窓漫筆

蕉窓漫筆三卷上野新田義重山大光院沖默義海上人の著す所也緣山大僧正定月和尙尾州八事山諦忍比丘華頂山入信精舍妙導師の序あり義海上人は寶曆五年乙亥の年に遷化其徒備前福山定福寺惠雲眠龍師隨喜助刻の資を合せて彫刻せり〔知恩院門前澤田吉左衞門發行〕明和四年丁亥の九月也十三年忌のとし也此書谷響集櫻陰腐談などゝは違ひて一味に佛法の事のみを記せり淨家の大手筆といふべし〔八月廿日一讀了〕

○幻住菴淸規抄〔禪家の引導の文あり〕

普應國師幻住菴淸規〔延祐丁巳冬幻住沙門自序アリ元ノ仁宗ノ年號四年丁巳ナリ〕

○日用須知十條綱目

日資　　月進　　年規　　世範　　營辨

家風　　名分　　賤履　　攝養　　津送

○二月十九日觀音菩薩生日云々
○三月高峰和尚愍忌（愍忌八誕生日也）
○十二月初一日高峰和尚忌
○津送

人之生也樂人之死也哀双林入滅槨示双趺化火自焚幻影何在二千年外之陳跡八万餘刧之遺骸無家之客委在叢林彼此有身其誰能免松龕素幔瓦篆青灯事在預爲禮宜必備衣盂估唱板帳支收既無間於死生安可昧其因果耦道要共還眞源死生之義昭然建化之功備矣

亡僧或自能沐浴更衣坐脫即與入龕供養其病重或不能自了者須待其氣絶令燒湯報首座鄕人與之沐浴著衣著衣之法無間有無冬夏但舊布中衣一腰浴裙一腰舊襪一双上則舊布衫一領舊布直裰一箇掛絡一頂尋常數珠一串就剃鬚髮整頓入龕其餘袈裟鉢盂并種々行李抄劄既定待出龕日估唱錢物入板帳支收以爲津送入龕之法須預備麻骨蔑等類置疊亡僧兩腋之下次用乾柴四面挨排定當然後掩龕用長條合縫公界印押封閉龕門前立位牌一座書云新圓寂某上座覺靈香火灯燭請首座大衆諷大悲咒一遍回向

諷經功德奉爲新圓寂某上座入龕之次莊嚴報地十方三世

既入龕竟即與鋪設剪大紙幡四首書無常偈云諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅爲樂掛於龕側雲柳兩瓶供養帷幔帳設隨宜展布一日三時隨公界粥飯供養大衆三時各諷大悲咒回向云

諷經功德奉爲新圓寂某上坐覺靈莊嚴報地十方云々

其三時諷經鄕人亦有大悲咒一遍鄕頭出龕前燒香鄕末擧經回向

留龕至第三日公界造祭食五味供養至晚念誦方當念誦時分鳴鐘磬鳴板衆集菴主出燒香上湯茶上食畢退禮三拜即念誦諸方有兩序出班燒香菴居不講念誦云

切以生死交謝。寒暑迭遷。其來也雷激長空。其去也波停大海。是日即有新圓寂某甲上座。生緣既盡。大命俄遷。了諸行之無常。乃寂滅而爲樂。恭裒大衆。肅詣龕幃。誦諸聖之洪名。薦淸魂於淨土。仰憑大衆。念淸淨法身。云云。

今禪家ノ送葬ニ唱ル所ノ引導ノ語如此又無緣草子ニ見ヘタリ

每一聲鳴磬一下擧大悲咒一遍回向云

上來念誦諷經功德奉爲某上座覺靈莊嚴報地伏願神超淨域業謝塵勞蓮開上品之花佛授一生之記再勞尊衆念十方三世云云

復擧楞嚴咒一遍行道回向云

諷經功德奉爲新圓寂〔某甲〕上座覺靈莊嚴報地十方三世云云

鄕人上祭畢大衆入座喫湯誦金剛彌陀等經表伴靈之禮約至二更盡時分回向衆散是日或有點心或無點心隨亡者有無不拘

明日衙罷公界分付扛索擧龕裝畢乃有起龕念誦云

欲擧靈龕赴荼毘之盛禮仰憑大衆誦諸聖之洪名用表攀違上資覺路念淸淨法身云々卽請起龕佛事擧龕出門大衆各執雪柳一枝柴薪一段默持經咒送至化壇菴主做佛事下火畢維那擧荼毘十念云

是日即有新圓寂某上座既隨緣而順寂乃依法荼毘焚百年行道之身入一路涅槃之境仰憑尊衆資助往生南無西方極樂世界大慈大悲阿彌陀佛〔如是十聲至阿彌陀佛四字是大衆同和十聲乃云〕上來稱揚聖號資助覺靈惟願慧鏡分輝眞風散彩菩提園內開敷覺位之花法性海中蕩除塵心之垢茶傾三奠香爇一爐奉送雲程和南聖衆即擧大悲咒一遍畢回向云

上來念誦諷功經德奉爲新圓寂〔某甲〕上座覺靈荼毘之次莊嚴報地十方三世云云復擧楞嚴咒

當日公界爲亡僧設供一堂齋罷取出亡僧行李對衆驗封皮分曉打開鋪定維那大衆搭袈裟鳴磬一下念誦云
浮雲散而影不留殘燭盡而光自滅今玆估唱用表無常仰憑大衆念淸淨法身云々　下略
予年來禪家〔臨濟〕の送葬をみるに此趣あり念誦の文にいたりては今も此文を用ゆ五百年來の舊文なり

○都賀六藏

都賀氏名は庭鐘字は公聲大江漁夫と號す又辛夷館とも通稱六藏大坂人儒を業とす〔書畫便覽〕上田餘齋翁は此人に學べりと云所著康熙字典考異今の和板に附錄す又戲作する所英草紙しげ〳〵夜話あり世に行はる今の都下よみ本の風はこれを學ぶに似たり〔己卯十月哉生明〕

○神田旅籠町名主中村氏書留抄書

享保七寅年二月
一所々見付御門へい寅二月三月中不殘御取拂跡へ小松植り候事
覃云此時の戲言にアルヘイチトリテ松風トハチクハシナ〻ジヤといひしとなん
寶永七寅六月廿二日樽屋
一町内職人共之内武藏守と申者有之候向後名改可申事
寶永八卯二月廿四日御觸
一自今御成之節町々之者男女共に拜可申事
卯三月廿一日御觸
一辻駕籠書上　同廿五日樽屋へ駕籠持名連鬮取いたし當り候分は棒に燒印請申候不當ものは向後家業相止申候町方三百挺寺社方百挺御代官所貳百挺都合六百挺に究る

卯五月
一頃日小兒順禮之姿にて七觀音八藥師參致候義誰申出し何之願に參候哉御尋に付參候もの書上同廿七
日町連判
正德三巳年三月廿五日能登守樣遠江守樣壹岐守樣御立合名主舟持へ被仰渡
一二挺立御停止　一屋形船御改　一辻駕籠數減少
一遊女御改　一出居衆御吟味　一人宿組合御止
一端々借屋御改
右之趣御書付を以被仰渡
巳五月八日御觸
一山王祭禮巳年根津午年明神未年に可仕旨
巳閏五月十六日
一御代官領町屋町御奉行支配に成同廿六日町人共御番所へ御禮
正德五未年三月廿六日
一百六拾七歲志賀瑞翁其外長命人之事
未十二月十七日御觸
一武士地に町人差置候儀御制禁
享保元年
一京町三浦孫三郎抱かうし遊女みはな出入〔申九月十六日〕
享保二酉年

一大鋸町桐屋甚右衛門手代藤八主之爲を存じ我がもゝをそぎ大根に包差上候御吟味之上御褒美之事〔酉十一月〕

酉十二月十七日

一豐島町伊兵衛店加兵衛出居衆辻番人

若君樣祖父之由大久保木左衛門と僞何角かたり取欠落

享保三戌年十一廿五日ならや

一欠付人足之義貳町四方其外御定之場所切にて遠方へは罷出まじき事

戌十二月四日越前守樣へ御立合

一町火消組合朱引被仰渡組貳町四方欠付之義は朱引にても罷出可申事

戌十二月六日ならや

一町火消片假名付組合相極此邊はソ組之事

南は昌平橋北は金澤町東は旅籠町西は本鄕元町也

享保六丑年五月廿五日喜多村にて御書付

一古林見宜來ル廿八日より林了喜宅に講釋之事同廿九日高倉屋敷にて講釋之事同廿八日療治之事

丑三六月十一日

一神田新銀町米屋十左衛門店大工七兵衛博奕宿いたし候に付家之前に三日さらされ家財御取上家主過料之事

此時より家財御取上にてさらし者初る

丑三月十一日樽屋年寄中

一永代橋御取崩し被仰付深川難義之由手前修覆にて差置申度段奉願御免に付往還の者より貳錢つゝ修覆料之事御尋同十三日御返答書

丑三月廿八日

一關八州川船之事去子年迄川舟奉行相改候處向後棟梁鶴飛驒相改候事

丑四月十三日ならや

一菖蒲甲人形類之義先達て御法度之趣被仰付候へども當年は商賣御免之事

丑七月十三日ならや

一藥草功者成もの御尋

丑八月十九日廻狀

一定火消はや太鼓向後相止鉦太鼓打交並太鼓知らせ太鼓右三品に相極但四ヶ所御役やしきにては御曲輪外二三町之出火に貳ツ拍子木十四五打候筈之事

丑十二月朔日ならや

一本屋雙紙や共所持之書物册數作者板元年號御改

丑十二月廿九日喜多村七兵衛殿にて

一惣町中御年頭減少仕のし百把貳斗入酒十樽に相成候名主并角屋敷町人は向後三本入扇子献上可申候事　但只今迄献上物員數は丑正月七日日記に有之

享保七寅年四月廿日頃より六月頃迄

一染井花屋重兵衛方に長壹尺三寸程異木生じ木色黃にて花之色金色之由貴賤くんじゆ仕候事

寅七月十八日喜多村申渡

一金佛木像建立こして車に乘せ引廻り之義無用之事

寅七月日本橋御高札

一新田願之義五畿內は京都町奉行西國中國は大坂町奉行北國筋關八州は江戸町奉行所へ可出旨日本橋
　に御高札相建申候七月廿七日寫之

寅八月九日茶屋有之町々名主へ御尋

一うなぎをからし酢にて給三人相果候由之事

　覃按近來鰹之差身をからし酢にてたべ即死のよし長崎にては鰻を酢味噌に和へて食もおかし

寅八月廿日道御奉行より廻狀同廿四日樽やにて申渡

一千川上水之義中與より懸候事に付當十月切相止候由

寅十月朔日

一本多唐之助樣十一歲にて御死去御舍弟喜十郎樣郡山より十月廿七日御到着十一月五日十二万石被召
　上新規に五万石被下候事

寅十二月十日御觸喜多村請負判

一當世上に有之無筋噂事并男女中合相果候類心中と申觸板行いたし讀賣候義前々より御停止之事

享保八癸卯年正月九日御觸

一乾字金并元祿以來之銀に引替去寅年限り當卯年よりは潰金銀に成候間潰金銀之割を以金座銀座へ可
賣渡事

　子五月乾字金他國へ出すまじき事

○四月御觸乾字金通用去々年限り同引かへ金銀共に來寅年限之義先達被仰出候通

卯二月廿日御觸同廿二日ならや請負判
一男女申合相果候者死骸取捨幷存命に候へば非人手下之事惣て此類繪雙紙かぶき狂言に作り申まじき
事
卯五月
一護國寺門前音羽町九丁分幷青柳町上下賣女差置候に付町屋御取拂
同
一町御支配御公儀橋十七ヶ所書付〔卯十二月〕
辰年
一芝口御門跡土手石垣取拂之義五月十九日御觸
　覃云今ノ松坂屋ノ前ノ由
辰六月廿一日奈良屋にて年番へ
一町中讀うり御曲輪内へ出す間敷事
辰八月五日御觸
一渡草御藏前札差宿此度百九人に御定
辰八月廿四日樽やにて年番へ
一切れ金通用相滯り候に付六百人之兩替屋共向寄々にて組合之義
辰九月七日樽屋
一町々佛師鑄物師方にて唯今三尺以上之佛像造懸有之者書上
享保十巳正月十九日ならや

一鳥屋御停止
同廿八日　飼鳥は八人之内鳥問屋より請うり御免
二月廿七日　美濃守様御内寄合にて上方下り飼鳥問屋四人被仰付
巳三月十七日日記に有り
一明神之繪馬鷄飛候由申候事
午二月御觸
一倒死病人水死其外異死遞子等向後芝口町に御札建候義
午二月當座帳に有り
一本所入江町に賣女差置町内欠所之事
午三月廿八日ならやにて被仰渡
一神田明神能之義午年壬歳未年舞臺申年入目三分一酉年同斷戌年より能興行之積り
午五月八日樽屋にて被仰渡
一和泉橋之義此度佐久間町一丁目より懸ヶ候所橋之義は只今迄之通公儀橋之由
享保十二丁未年閏正月三日樽や
一温飩蕎麥切煮賣之者共火を持あるく事御停止
未正月五日樽や
一古鐵買共火事場へ不罷出候樣に前々被仰付
同正月九日
一町々米舂共只今迄日用座方へ百拾文ツヽ

未四月十二日越前守様
一旅籠町二丁目より湯島本郷片かは傳通院前迄ぬり屋
未五月
一龜戶天神近所香取明神へ常陸國より安波上杉大明神飛來候由貴賤群集其上屋臺大分出候義未六月十
四日越前守樣にて御停止被仰付
覃云此頃アンバ大杉大明神食タリ飲ダリヨイヤサヽ云歌流行之由承及候
享保十四酉年四月九日馬持有之町々へ御觸同十九日總町中へ御觸有之
一江戶近在より江戶表へ出稼いたし候駄ちん馬之義三傳馬町にて鞍判を請一ヶ年に助馬三疋ヅヽ出之
三傳馬町下知を可請
四月廿六日ならや
一願人共譯もなきなぞはんじ物板行いたし町方店々へ配り置跡にて代物取候義向後一切仕間敷旨
酉五月廿一日北村
一五月廿五日象江戶着
一南部興福寺勸化能新大橋土屋但馬守樣上屋敷明地にて日數二日寶生太夫相勤
酉九月廿日日記に有之
一上野屛風坂下禪宗光岸寺坂本地藏酉四月頃より風流候事 流行ヵ 酉年中
酉閏九月十九日
一藥種問屋廿五人之外大傳馬町組藥種や十九人問屋並に被仰付其外之者は直荷引請之義彌御停止但御

擕撫之物六十四品

酉十一月九日奈良屋

一町々耳之療治功者にいたし候もの御尋

享保十五年戌二月八日美濃守様被仰渡同九日御觸流し

一町中人宿貳百二人にて向寄にて三十四十人程組合

戌二月十七日

一病藥を委細認候普救類方之事

戌三月廿八日

一東鑑寶鑑と申醫書之事

戌四月廿一日喜多村

一仁和寺御修復に付三ヶ年正五九月護國寺富突之事

覃按春臺刺牌記有之

戌五月六日越前守様

一神社佛閣へ大挑灯無用之事

戌十一月廿七日

一尾張中納言様御逝去

覃按此次は章善公也

享保十七子年

一子六月廿七日下野守様御内寄合

子年秋

一西國邊凡四百八十万石程稻虫いり御大名幷御領村々迄拜借金被仰付候事　飢死人大勢之事

子極月より町々飢饉に付飢人有之御救として町々へ御米被下

享保十八丑年三月十三日喜多村

一仁和寺御門跡富突只今迄護國寺に候處丑五月より申正月迄深川永代寺にて興行之事

四月朔日ならやへ書上

一町々火之見櫓梁木相止鉦に相成候事〔同廿日より〕

一永代橋往來錢七ヶ年相濟丑六月朔日より無錢にて往來

六月十七日廻狀

一高田毘沙門富突永々二月六月十月廿八日

一丑七月十日前後より江戸町中其後國々在々迄風邪はやり同十八十九日比風神送り夥敷に付同廿日御觸有之

丑六月十八日

一嵯峨釋迦開帳(ママ)向院にて丑四月二日より六月三日迄

一新材木町かどや彌兵衛手代長兵衛主人に忠行成故於下谷御數寄屋町表五間一尺裏行廿三間之町やしき拜領之事

丑十月八日御觸

一和人參製法いたし賣弘め候事

十一月廿五日ならや

一谷中感應寺富突來寅年より三年
丑十二月十日樽や
一前句附札出し候もの早々可取拂事
丑十二月廿一日
一柳原明地幷神田紺屋町邊明地廻り矢來植込菜園場薩摩芋作り床番や御免
享保十九寅年三月廿日樽や
一小田原町新河岸之者願に付御成前四ッ時迄商賣船通用
寅三月廿四日樽屋
一丹羽正伯書物編集に付諸國之產物俗名
寅三月廿三日樽や
一神田花房町之町名被仰付
　商賣物河岸通り差置候義寅四月十一日御免
寅十二月十三日奈良屋
一町々火之見櫓鉦向後相止喚鐘つり可申事
享保二十卯年七月三日
一晝過大雨ふり東西くらく龍卷候事
　濱御殿近所より木挽町邊河原崎權之介芝居屋根瓦卷上ヶ夫より三十間堀京橋中橋日本橋邊左右瓦卷上候事
卯七月六日越前守樣御內寄合

一小傳馬町馬喰町旅籠屋之外旅人留め間數事

卯九日十日

一尾張中納言樣御嫡子國丸樣御逝去三日鳴物御停止

辰八月十日

一深川八幡において安波大杉大明神開帳に付被仰渡

辰八月廿二日奈良や

一永代橋修覆に付辰九月朔日より十ヶ年之間往來之者壹人壹錢つゝ可出事

元文二巳年

一京都淨花寺泣不動巳四月朔日より開帳廻向院

一巳五月三日松永町出火上野御本坊烟燒

巳十月廿八日

一月次廿八日御禮正二四七十二月計にて其餘月は廿八日出仕相止候事

　覃按此時ノ歌ニ正二醫者四アハセモヨク今年ヨリ盆ト暮トニ禮ヲウケケリ（異本ニ藥禮ヲ取ル）

巳十二月廿五日

一尾張中納言樣御嫡子龍治代樣御逝去三日鳴物止

右神田旅籠町名主中村氏舊記

　御番所並年寄衆被仰渡御觸流拔書トアリ

文政己卯小春八日抄書（後此全書藏本ニイタシ候事）

増訂一話一言四十終

○五朝小説二條

一明海鹽董穀が碧里雜存云。齊民要術。後魏時書。其言一石註云。當今二斗七升。此不可曉。然考魏時長安童謠云。百升飛上天。是以百升爲一斛。則魏所謂斛。正今所謂石。今時無此制也。今官製五斗爲一斛。蓋取其輕而易擧耳。實當古斛之半也。今米一石重百二十斤。正合四鈞爲石之說。〔明人小說〕

按大坂にて一石の事を俗に百升と云

一淸源洪文科が語窺今古云

偶錄

乙卯季夏。同方孺顯鮑稚修。客蕪關吉祥寺。時案頭有李于鱗選詩一册。雖平昔所觀覽。其補註多警語。恐過目遺忘。因錄之。如王勃別薛華詩云。送々多窮路。皇々獨問津。悲凉千里道。悽斷百年身。心事同漂泊。生涯共苦辛。無論去與住。俱是夢中人。又如明皇登花蕚樓聽歌。李嶠詩云。山川滿目淚沾衣。富貴榮華能幾時。不見只今汾水上。唯有年々秋雁飛。二詩皆覷破閻浮世界。讀之令人爽然。偶錄之。予閱曇花記自悟一首。有舊觀皆是幻。新寵亦非眞。總屬空中境。渾疑夢裏身。童顏難再得。老鬢易催人。試看空郊外。峨々白骨新之句。亦附之續貂云。〔明人小說〕

右の二條は五朝小說より抄出す

按此比市河寬齋先生著す所の談唐詩選〔寬齋以文政庚辰七月十日下世此書絕筆也〕をみるにおゆる李于鱗が唐詩選ある事をのせたり、この語窺今古の中に引所の李于鱗が選詩一册といへる

ものを見す、平昔所ニ觀覽ーこあればもろこしにては平昔見る所の書こ見えたり、談唐詩選に云

李于鱗ノ撰著ニ古今詩刪アルヿヲ知リテ唐詩選アルヲ聞カズ、詩刪ハ王元美序ヲ作リ刊行シテ盛ンニ當時ニ行ハル唐詩選ハ滄溟集ノ中ニ選ニ唐詩ニ叙一篇アルノミニテ其書ノ世ニ行フ者ヲ見ズ、姦猾ノ書賈コレヲ窺ヒ知リ無識ノ村學究ヲ倩ヒ、現行ノ唐詩選ヲ編ミナセリ、利ニ趨ルハ商賈ノ習ヒナレバ我モ〳〵ト是ニ效テ唐詩選ヲ刊行ス、或ハ二三首ノ增減ヲナシテ分別ス、大抵ミナ當時名家ノ評注ナド、稱シテ世人ヲ欺ムク、晋陵ノ蔣一葵箋釋ト稱スアリ、又李于鱗選注陳繼儒增評ト題シ唐詩訓解ト稱スルアリ、又鍾惺譚元春同評ト稱スルアリ、又袁宏道注釋ト題シテ唐詩狐白ト稱スルアリ、又蔣一葵箋釋唐汝詢參註徐震重訂ト題シテ唐詩選彙解ト稱スルアリ、其他釋大典稱スル所ノ鍾惺評注劉孔敦批點ト稱シ、蔣一葵箋釋黃家鼎評訂ト稱スル者ハ余未ダコレヲ見ズ、コノ數種世間ニ流布スレドモ皆書賈ノ假托セル僞本也云々

○唐翁承贊詩

唐翁承贊字文堯。莆田人。乾寧間。登進士第。詠槐花詩。雨中粧點望中黃。勾引蟬聲送夕陽。憶得當年隨計、吏。馬蹄終日爲君忙。〔万姓統譜卷一〕

○狸塚

上州館林茂林寺〔禪宗〕より一里ばかり西に狸塚（ムジナ）こいふ村あり、一村狗を畜ふ事を禁ず、高源寺こいふ寺あり、茂林寺の末寺也、かの文武火の茶釜は貳斗ばかりもいるべき大きなるもの也、蓋はなしこ云、高源寺開山を正鶴こいふ、今より二百八十年ばかりむかし也こ、狸塚のもの丈助物語れり、此頃茂林寺の守鶴の書るもの墨本にしたるを得たり、書も見事也、忍賓こいへる二字をかけるをも先のこし寫し置り

火　輪次直堂
防　終而後始
　　館林　茂林寺什寶守鶴和尚書

○槐記抄

槐記〔六卷菴柳巷云一名雜話ト云〕ハ保壽院法眼山科道安こしごろ前攝政太政大臣家熙公の門に參候して和漢の事歴古今の人物有職の事香茶事立花投入等の故實までことくく筆記せし物にして享保九年〔甲辰〕の序あり

閏四月ノ下ニ

後西院ノ御時山茶ヲ御好アリケレバ處々ヨリコレヲ獻上ス珍花ハ手鑑ニ〆極彩色ニテ片表ニ九ツヅヽ花ヲ記サレシニ年々ニ册數多ナリケルホドニツイニ五十卷バカリニナレリ所詮カギリナキ｢ナリトテ止ラレタリコレニヨリテ思フニ菊ノ椿ノト云モ人ノ數奇ニヨリテ數多ニナルモノトミヱタリ一々漢名アルベカラズ

或時參候

凡一藝ニ長ズルモノ其極ヲ極ムレバ他ニモ自ラ通用セズト云｢ナシ難波故中納言ナド蹴鞠ニ其極ヲキハメタルモノト可謂紫宸殿ノ亂間ノケタ三ツアルヲ人々望次第ニ越サセテ見セタル人也若キ公家衆ノ集リ鞠ニテ紫宸殿ノムネヲ越サスルノモノ非ズコレヲ故中納言シバラク思案シテ高サ十五間ノ所也イカサマニモ越難シ併縁アラバ越サスベシト云皆々所望シケレバ屋ノムネハ鱗形ナリヤト問テ直上ニ高足ヲ蹴上テ棟ノムカフノ方ヘ落如シニ念ナクト御所ノ中庭ニ落タリソノ目ノ付所各別ナリ〔下略〕

九月七日

惣メ後鳥羽院以來ノ眞記ハ後光明院ノ時ノ禁裏炎上ニ悉ク亡ビタリ御道具ニモ天下ノ名物ドモ皆燒失セリ眞ノ天災ナルベシ中井定覺ガ若カリシ時ニテ此時ノ火消ニ參リシガイツモ咄セシハ小御所ヘ火ノツクト見ヘシ其屋大井ドモニ御泉水築山ヲ隔テ向ナル御文庫ヘ打カブセテ燒立ケルホドニ人力ノ及ブ處ニハアラザリシナド語ルサモアルベシ五間ニ八間ノ御文庫三ツドモニ一度ニ燒失セリ惜ムベシ然ルニ壺切ノ御劍ソノ外ニ今二振ノ御劍モ念ナク燒失ケルガ後日ニ柄モ鞘モナクテ身バカリハ燒跡ヨリサガシ出シ奉ルニ兎ノ毛ノ先ニテツキタルホドノ疵モナシ不思議ト云ベシ今ノ御劍コレ也ト仰ラル

後西院ハ各別ノ遠慮アリシ君也新院ニヲリイサセ玉ヒシヨリ唯一向ニ禁中ノ御記錄ヲ御筆ニテ大方ノコラズ遊バサレテ兩部トナシ院ノ御文庫ニ收メラレタリ初ハイラザル御事也ト思シガ果メ右ノ災上ニ一册モノコラズ燒失タレドモ此新寫遺リシ故ニヨリテ今ノ御記ノ分ハ皆後西院ノ宸翰ナリト仰ラル

御家ノ御記錄ハ幸ニメ應仁ナドノ大亂ニモアナタコナタト預ケタレドモ終ニ無事ニ遺リテ貞信公ナドソ眞記モ今ニアリ凡千年ナリ目出度御事ト謂フベシソレ故凡ソ何事ニテモ今上ノ御用ニ御尋アランニ餘リ事闕クヿハアルベカラズト仰ラル昔ノ文ハ各別ノ人才ト見ヘテ貞信公以來代々ノ先祖ノ袋°中又今ノ樣ナルヿニテハナシ公事奏議ノ夥シキヿヲサバキ何角ノ中ニテ日記ヲ書セラルヽニ三十餘行ノ系ニテ二十四五枚三十枚ナドノ日記多シソノ中ニテモ宇治ノ川逍遙ノ嵯峨ノ遊覽ノト云テ詩歌管絃ノヿモア、リカヽル御心故ニコソソノ記モ出來タレト仰ラル凡ソ當職ノ中ノ記錄ハ末ザマノヿハ各別コトヾク自筆ナリソレ故御上ニモ御當職ノ間ハ一日片時モ御暇ナシ御學問等ノヿモ思召ノヤウニハナラス唯アケクレ右ノ舊記ヲ觀テ夫ニ應ズルノ心得ノ外他事ナシ御記錄三十八匣アリ後西院ノ御筆ヲ思テ舊キ衆中ノヲモナル者ハ大方ニ二三十年以來新寫自書メ河原ノ御別業ノ御文庫ヘ收ラレタリ皆マデハ思モヨラズト仰ラル憚多キヿナガラ各別ノ才ノ美ト申モ恐レ多キヿナリ

太閤秀吉ノアルトキ狩ノカヘリ供奉ノ體上覽ニ入ベキマヽ南門ノ前御通アレト願ハレテ御許容アリシカバ其日南門ヲ啓テ上覽アル三藐院殿ニモ御出アリシユヘ始終ノ裝束付ニテノコル處ナク記サレタリ事夥シキ丁ハ言モヲロカ也先手鶴百羽青竹ニ結付二行ニナラビ其次ニハ雁二百羽同ジクナ云ヤウニ事ヲ華美ニヨセテ見物スルヤウニ興行セラレタリト見ヘタリ家康ナド以下ノ衆中騎馬ノ分ハ皆鷹ヲ手ニスヘテ通ル秀吉ハ朝鮮ノ乘輿ニ乘テ唐冠ニ唐服ヲ着シ鴞ヲ手ニスヘテ南門ノ前ニテ酒ヲ請ハレタリ殿上人諸卿モニ出合テ南門ノ前ニ席ヲ布テ宴ス右ノ鴞ノ首ヲトラレタレバ作リモノニテ中ニ肴ヲ入ラレタリ太閤ノ物數奇左モアルベシ今ノ世ヨリ推ソハ輕キ丁所司代ニモ左樣ノ所行ナルベキヤソレユヘ聚樂ノ行幸モ事ハ夥シカルベシ儀ハ二條ノ行幸ホドニハ備ランヤイナヤ

乙巳正月五日暮參候

左府公鷹司卿御侍座御床ノ掛物後水尾院御八十一ノ御歲旦ノ御歌　前立花

此春ニセメテ驚ク身モ哉ハヂ多フシテ命長サヲ

コレハ其年ノ春參シニ此老法師ノ歲旦ヲ見スベシトテ其坐ニテ遊バシテ下サレシヲ表具シタリト仰ラル

次ノ御床ニ三幅對中ハ役ノ法性寺殿兩方ハ逍遙院殿御父子ノ唱和ニテイツレモ歲旦ノ詩也

九日參候

台作御見セナサル

一事無成又添歲。群方脫却出群方。迫春偶至綠衣客。午睡覺來梅更香。

イト目出度アリガタキ丁ニ拜誦ス

廿一日參候

キノフノ立花ノ御潤色ヲ拜見スベキノ由仰ニテ拜見ス次ノ御床ニ尙信ガ三幅對ノ〔中文珠右枯木ニ尾長鳥左枯木ニ鳩イト見事也〕左右ノ表具ハ齊ク中ハ左右トハ參差トメ異也不審ニテ別ヲ懸ラレタルニヤト申上シニ凡ソ三幅對二幅對四幅對八幅對ノ類對ノカケモノト表具ハ極テソノ法アリテコトニ三幅對ノ中ニカギリテハ兩脇トハ別ニスルガ作法ナリ古キ對ノカケモノ皆其法ニ合〔大德寺ノ古キカケモノ是也〕今ニモアレ古キ掛物ノ一幅物二幅物ヲ見ルニ是ハ中ヲ拔テ二幅カケタルモノナリ二幅對ノ傍（カタハラ）ヲ掛タルナリトハ即時ニ知ラル其法二十七色ナラデハナキモノナリ〔コレモ澤山ナル人ノヿナリ〕近代ノハ其法ナシ色紙ニテ雛形ヲ成ヲカレタリ近日御見セアルベシト仰ラル二幅對三幅四幅ノコトハ承リ及ベリ八幅對ノヿハ不覺悟ノ由申上ルコレハ東山ノ八景ヲ八幅ニセラレシヿ名物記ニ見ヘタリ今陸奥守ニ四幅對ガアリソノ外一幅二幅アリ奈良ノ菊屋ガ所持ノ徐熙ガ鷲ノ繪ノ掛物コレ天下ノ名物ナリ毎度三菩提院殿ノ見テ置ベシト仰ニテ見侍リシガ如何サマニモ又類アルマジク見事ノモノ也サレ𪜈菟角二幅ノ傍ト見ユル由ヲ毎度三菩提殿ト申合シガ果ノソノカケモノニ添タル澤菴ガ一卷アリソレニ是ハ〔シユカフ〕家藏ノ重物ナリシヲ一幅ハ彼ニ一幅ハ此ニト書タリスレバ彌ウタガフ處ナキ二幅對ノ傍ナルヿ明ナリ古ハ加樣ノヿモ甚丁寧ナリシト見エタリ

中ノ表具左右ノ中ヲリンホウニメ上トニツカヒ左右ノ一文字ヲ中ニツカヒ一文字ハ別ノモノナリ

甲辰正月

或時宗白ト一所ニ參候ノヿアリケル御談ニ琉球ノ程順則ハ年來故アリテ折々書翰ヲ奉ル去年輪番ニテ本唐ニ行今年カヘリテ土產ニ孔子ノ廟ヘ參リ孔廟ノ傍ニ昔子貢ノ樹ラレタリト云楷木ノカブアリテソノ木ハ枯朽テ又側ニ若木ノ楷木ノ後世ニウヘタルアリソノ昔ノ楷木ノ杭ノ一塊ヲトリカヘリテ內ノ方ヲ漆ニテヌリ楷盃ト號メ又一卷ヲ捧クソノ形古木ニメ今樣アルベキモノニアラズ然レ𪜈公曾テ酒ヲ嗜

玉ハズイト惜キ事也覆ゾ見レバ木理從橫高下凸凹ソノ形假山トゾ見バヤトヲボシメシテ其旨ヲ仰ツカハサル程氏モ辱キ事ニ思ヒケン叉假山記一巻ヲ書テ奉ル今日御見セナサルベキノ由則物外樓上ニ青貝ノ一間バカリアルベキ御几ノ上ニ洲崎ヤウニ砂ヲ蒔テカザラレ其傍ニ二巻ノ記ヲ置ル宗白ト一同ニ拜見ス

或時仰ラルヽハ古今シカト究ガタキモノハ五色也延喜式等ニ何ニ何ヲ何ヲト加ヘテ染レバ何色ニナルト云其色今ノ色ニアハザル事多シ同シアカキト云ニモ赤アリ朱アリ緋アリ紅アリソノ外モ亦然リ內々詩文等ノ色ノ處ノコラズ拔書サセタリ艸木ハ色ノ自然ナルモノナリ本艸綱目ノ艸木菓果ノ色字ヲサノヽニ援書スベキノ由命ゼラル年ヲ經テ生色抄畧八巻ヲ撰テ奉ル

公甚ダ御感アリテ御肴並巻物且群玉韵府ヲ下サル外題御筆ノ由且御筆ノ物下サルベキノ由何ニテモ文句願奉ルベキノ旨仰下サル則孫思邈ガ膽大心小ノ四句ヲ願奉ル翌年唐綸ノ絹地ニ右ノ御染筆アソバサレ表具並箱等皆上ヨリノ御物數奇ニテ拜領ス面目アマリアルモノカ

支干未詳
五月八日參候

兼テ指上置候度量ノ考「古譯通說」御返シ字ノ誤モ訂正スノシニ付兼々御ウハサノ三器通考ヲ御カシアルベキノ由仰ラル

同九日

三器通考拜借ス尤秘スベキ由仰ラルヽソレニ付兼テ仰ラルヽ通リ日本ニテハキト知レザルモノハ御府ノ周尺ナリ法隆寺ノ尺モシカト周尺トモ定ガタシ御府ノ尺ヨリ長シ御府ノ周尺ハ六寸四分弱法隆寺ノ周尺七寸餘アリシカレバ逆モ尺ト云モノニハ證ニシ難シ何ゾ外ノ器ニテコレガ三寸アル器也ト云モノガ出レバ代々ノ尺ヲソレニ合セテ三寸ニ當ル尺ヲ何ノ代ノ三寸ト究メテソノ世カラワリ出スヤウニスレ

バ終ニ成ベキ〻ナリ是ニ付テ淡海公ノ令ニ載タル天皇ノ内印外印ト云モノアリ御所ニモ其璽ヲヲサレタル者アリコレガ令ノ寸法内印三寸外印二寸八分トアリコレニ代々ノ尺ヲ合セテ見レバ漢ノ尺ガ下ドニ當ル是ヲ本ニシテ代々ノ尺ヲワリ出スカラハ成ソウナモノ也ト仰ラル

十八日

進藤刑部大輔へ御成云云

今日數奇屋ニテ御咄ニ春屋ハ遠州ガ持ハヤシケルヨリ澤菴江月トモニ流布ス宗和ハイカイキライナリイツモ無禪ガ咄ニ宗和ノ申サレシ今日モ好茶湯ニ行タリ何モ出來タレモ例ノ坊主ノガ床ニアリテト嘲ラレシトナリ應山ニモ春屋ホド黑キ手ハナシトテ御シカリナサレシ惡筆ナリト仰ラル澤庵ハアマリ贊物多キ贊澤庵ト云シ由也歌ノ贊物別シテ多シ歌ハ烏丸光廣ノ弟子ニテ餘程ノ修行ナリトゾ光廣ノ異見ニテヒラニ歌ヨム〻ヲヤメラレヨ禪ノイラヌ〻也ト云遣サレシ返事ノ奥ニ夢窓有庭之癖。雪舟有畫之病。愚有和歌之癖。ト書テソノ奥ニ世ノ中ノ人ニハ癖ノアルモノヲ我ニモユルセ敷島ノ道ト云ヤラレシト云ヘリコレヨリ光廣モユルシテ指南セラレシト也

廿一日

文章モ上代三百年前ノ書ハ令ヤ延喜式ヤ江家次第等轉倒ハ勿論漢朝ノ文ニ耻ル〻ナシ定家時代ヨリノ日本流ノ文章ガ一流出來テ文字ノ轉倒等コヽロヘ難キ〻アリ總メノ藝モ同ジ書ニテモ唐繪大和繪ノ差別ナシ筆道ニテモ唐樣日本樣ノ差別ナシ土佐樣ハ日本繪御家樣ハ日本流ト後ニハナリタルモノナリト仰ラル

六月十五日參候

古ヘヨリ軟障曲屛トテ今日本ノ屛風ノ〻ニ用タル〻歷々ノ書ニ見ヘタリ尤ラシキ字也ト思フカラ如何

樣ニモ漢ノ書ニアルベシト近年思召テヒタモノサガサルレドモ見ヘズ宿儒老僧ナドヘモ問ヘドモ不知ト答フ源氏物語ナドニモ軟障トイデヽ古ヘヨリケンセウト讀來レリ季吟ナドガ湖月ニモケンセウト假名付シテ出處モナケレバ音義モナシ何ト工夫シテモ文字ハ漢字ナルベシト思召テ久シキ御不審ナリシガ此度フト通雅ニテ御見當アラレシ軟障曲屏ハ其制出于日東ト書タリサレバコソ制モ文字モ日本ヨリ出タルトハ知ラルレトノ仰ナリ〔下畧〕

八月十三日參候

此度關東ノ姫君樣御逝去ニテ御忌ニテ奥ニ成ラセラレテ御伽ニ參リテ最サフ〳〵シクテ御興モナシ更行マヽニ雨モハレ朧ゲナガラ月モ指出テ少シ興ゼサセマシ〳〵シヲ便リニ女中〔吉岡於秀〕左兵衛ノミニテ世モ山ノ噺シノ御次デニ此座席ハ古ヘ櫻ノ御所ニアリシ御書院ニテ名物也奥州正宗福島大夫ナド常々參リ會タル所也此ヲシイレ古ヘハ疊數ノ間ナリシニ或時鼠ノ入リテ躁シカリシヲ應山ノ鼠ナラント仰ラレシヨリ片田正宗福島大夫兩人ツヾイテ推入ヘ入テコヽヨカシコヨトサガシ求メルニ外ヨリハ取逃シケルカト切々御尋アリシニ念ナクトリニガシタリ既ニ推入ヲ出シカバ如何ニヤ〳〵ト御尋アリシニ大夫證シテ申上シハ由ナクモ取ニガシタルハ無念ノ至リ也人ナラバ北シハセジ物ヲト申サレタリ如何ニモ人ナラバ北スマジキ者共ナリト最笑シカリキトテ毎度御噺ナリトゾ

福島大夫ハ常ハ最モ物ヤワラカナルモノニテ人ノ噂ノヤウニハナキモノナリシガ或時應山公ノ滋野井ヲ供ニテ福島ガ旅宿ト茶湯ニ成ラセラレシガ待合ニテ大夫御迎ニ出ラレシニ中門ノ外ニテ蜘ノ巣ノ面ニヒタトカヽリケルヲ手ニ推拭ヒテ御挨拶ヲ申入ラントセシヲ滋野井アナアサマシ此掃除人ハアハヤ手打ニナルラン不便ノヿヤト思ヒシニ應山ノ御挨拶ニ今日ハ何ヨリモ珍キ馳走ニアヒタリ待合ヘ着ト齊クアノ喬松ノ梢ヨリ蜘ノ舞サガリテ中門ノ袖スリヘ掛渡シテ織シホド漸クニ出來タル所ヘ亭主ノ出

ラレシホドニ今少シ見殘セシ丁ノ殘念サヨ蜘ノ振舞カヲテヨリ仰付タランナド御戲アリシニ大夫モ最興アリテ辱キ丁ニ思ヒ掃除ニハ氣モツカズナリヌ此丁ハ後ニ大後草ト云假名物ニノセタル由仰ン

九月十六夜

此夜國史經籍十卷拜領ス〔中略〕

昔シ四方市ト云ヘル盲人ハ名譽ノ調子聞ニテ人ノ吉凶悔吝ヲ占フニ少シモ違フ丁ナシ廣山ヘハ御心安ク毎々參リテ御次ニ伺候セシガ晩年ニ及ビテ申セシハ由ナキ丁ヲ覺ヘテ甚ダヤミ終リ人ニ交ルコトニ其人ノ吉凶皆耳ニ響テイトカシマシト申タルヨシサルホドニ度々ノ高名擧テ數ヘガタシ此四方市朝夙ニ起テ僕ヲ呼サテ〳〵惡キ調子也此調子ニテハ大方京中ハ滅却スベキゾイソキ食ニテモ認メテ我ヲ先嵯峨ノ方ヘ誘ヒ行ケト云日頃ノテギハモアレバ早速西ヲサシテ嵯峨ニ行嵐山ノ麓大井河原ニ着テ暫ク休息ノ云ヤウ未ダ調子ナヲラズアナイブカシ大方大火事ナルベシト人家アル處ヲ離レテ此ヘ越セシニ未ダ同ジ調子ナルハ此モ思フ處ト覺ユ愛宕ニハ知レル坊アリ此ニ誘ヒ行ケト云イザトテ又上リ〳〵テ其坊ニ着ク坊主出テ何トノカク早クハ登山シケルヨト申セシカバ然〳〵ノ丁ナリト答フ此ハイカニト問フニモ尚安セラズ少シニモ高キ處ヘ參リタリシト云某ノ處ハ護摩堂アリ此ニ行カレヨトアリシカバ此堂ヘ入テ大ニ悅ビ扨々安堵ニ住セリ調子初メテ直リシトテ唯イツマデモ此ニ居タキ由ヲ申セシガ頓テ大地震ユリ出シ夥シキ丁云バカリナシ〔世間ニ云寅ノ年大地震〕何トカシケン彼護摩堂ハ架作ニテ頓テ深谷ヘ崩レ落テ破損シ四方市モ空クナル六十餘リニテモアルベキカ此一生ノ終ニ人ノ吉凶サヘ姦ホドニ知ルモノヽ已ガ終ル處ヲ不知ノミニアラズ死場ニテ安堵シタル丁コソ不審ナレ吉ノ極ル處ハ凶凶ノ極ル處ハ吉ナレバナルベシ毎度無禪ガ物語ナリト仰ラル

同廿八日參候云々

漢語ヲ譯スルヿモメツタニハ言難シ近年日本ノ語ノ漢ヨリ釋（譯カ）シ來ルモノ多シ歌ナド讀テ點ヲ請タル文モアリ日本ノ小歌ヲ釋タルモアリソノ中ニ吉野ノ山ヲ雪カトミレバ雪ニハアラデ花ノフヾキト云ハ恐ク語ノ顛倒ナルベシ吉野ハ花ノ名所ニテソレヲ詠ゼシニハ吉野ノ山ヲ花カト見レバ花ニハアラデ雪ノフヾキト云ハヽ義平穩ニテ作意アルベキカト云尤也トテ大笑ナサル此君ノ御博才今更云ベクモナシ毎々感懼シ奉ルヿノミ也

丙午正月八日參候

逍遙院ハ歌ノ趣向ニハ古今ニ超絶シタル人也コノ頃サル方ヨリ硯ノ蓋ニ銘ヲカキテ下レヨト所望ニ逢テ何ヲカ記スベキゾト思惟スレ圧古硯ノ銘モアマリ耳ナレタリト思ヒシガ幸ニ逍遙院ノ硯ノ歌ニ古硯銘ヲ一イキニ讀レタルヲ書テヤリタリ

墨筆ヲサヅアダモノト見ル石ノヲノレ靜ニ世ヲツクシ侗

トセラレタルヲ書テ遣セシト仰ラル

十一日參候

常修院殿ノ常ニ御物語ニ疊ニ本末ト云ヿアリ多ハ人ノ知ラヌモノ也本末ヲ吟味シテ敷タルタヽミハ少キモノ也氣ヲ付テミルベシト仰ラレシガ眞ニナキモノ也疊ノヌイ出シ方ヲ本トス目モロクニ子ジレモナシヌサイキハ何トシテモ目モ半ニカヽリ子ジレアル故ニ爐ノキハ本ノ方ヲシカ子バジダラクナルモノ也ト仰ラル今モ幸雪〔常修院樣御近習〕ナド能覺テ居テ疊屋ガシラレタリト申ス

三月四日參候

花ヲ入ルヽヿ今ノ世ニハカツテ穿鑿ナシ大方ノ人投入ト云ハ立花ナドノ樣ニタメツユガメツ入ルヽヿデナシ枝ノナリデ其儘ニ入ルヲ投入ト云ト覺テ居ルハ大ナル心得違ナリ昔ノ人ノ生木生花ノ枝ナリヲ

傷マズト云ハタメヌ了イガメヌ了ニ非ズ只其木其艸其花其枝ニヨリテソレ／＼ニ生レ付タル質ノ樣ニ生付テ傷マヌヤウニセヨト云了也サルホドニ梅ヲ生テ桃ニナリ桃ヲ生テ梅ニナル了アリト云ハコノ了也是一大事秘藏ノ了也人ニ慢ニ談ズベカラズ譬ハ桃ハ枝ノ生付タル處ノヌルキモノ也ソレヲ理屈ナル枝ヲアヂニ生テ賞翫スソレハ花ハイカホド出來テモ桃ガ梅ニナリタリト云モノ也梅ハ枝ブリノ詰屈ナルモノナルヲ蘂枝ノ長ノ長キマヽニ生シハ梅ガ桃ニナル杜若ハ立華ニテモ前置ニハ傳授ニスル了也莵角生レツキ花ノ高ク葉ノヒキヽモノナレバ何方ニテモ花ヲ高ク葉ヲヒキク生ルガ習ナリ菖蒲ハ花ヨリ葉ノ高キモノコレガ生付ナレバ何方ニテモ花ヲ卑ク葉ヲ高クスル是ガ違フト杜若ガ菖蒲ニナリ菖蒲ガ杜若ニナル類也ヨク／＼心得ベシト仰ラル

柳ヲ生ル了習アリ凡ソ花ヲ生ルト云ヘバ葉ハイケヌ筈也柳バカリハユルメ生ル立華ニテハ十一月朔日ヨリ二月晦日マデ此外ハイケズ此時ハ別ノ葉モナキ時ヲ用ルハナゼニゾナレバ定家ノ十二月花鳥ヲ究メラレタルニ柳ヲ第一番トセラレタルヲ出處ニ生ル了也

三月晦日

今日アユノ考申上鰷ヲアユト訓ズルハアヤマリナリ香魚ト書テヨキ由松岡氏ノ説也シカレドモ卷懷食鏡ハ香月牛山ノ作ニテ玄達ノ序文也然ルニ鰷ヲアユト訓ズ貝原篤信ノ大和本草ニハ條魚一名香魚トメ兩航雜錄ヲ引テ一年モノヽ由見ヘタリ中村惕齋ガ訓蒙圖彙ニハ年魚ト書タレ圧出處ナキ由申シアグ何レ圧面白シ明日トクト御考アルベキノ由仰ラル

御家御書物目錄ヲ御見セナサル書引ニメカシラ字ニテヨセラレタリ雨冠ノ部ニ雨航雜錄ハ正說邪ノ中ノ書ニテ誰ガ作ナリト載ラレタリト驚キ入タル了也

五月三日

准后樣八世君樣安君樣御有氣入晝上ノ御殿參候福引足袋二足紫服紗〔鹽瀬拜領〕御百味〔アキクサノリ〕小文匣〔人形二ツ〕御裾分晩ドノ御殿參候福引仁淸香合〔ウロコガタ〕拜領御百味〔小鯛〕拙モ有卦ニ入タル由上聞ニ達シ仰セニテ御手ヅカラ御染筆ノ御繪〔御内印有〕御作ノ竹花生箱入拜領〔中畧〕兼テ御物語ノ茶筅七種ノ形御見セナサル

アラホ〔大小〕　シケホ〔大小〕　ツボミ〔大小〕　大茶筅

七月十六日關白家久公鷹司右大將入江樣御成東山ノ大文字御覽イトユヽシキ御〻也仰ニイツモ仰アル無禪ハ珍シキ男也關白ニハ覺ラレタルヤト御尋アリシニ御六ツノ歲ニ死タリ幽ニ御覺アル由仰ナリシカレバ高良ニモ三浦ニモ勝タル男也無禪ガ七歲ノ歲ヨリ長山公ノ御前ニ召ツカハレテ三藐院殿應山公良山公禪閤准后關白マデ凡テ七代ノ間近衞殿ノ門ヲ出サル奉公人ニテ年ハ百十九歲ナリト云歲ヲ云ハヌ男ニテ定カニ知タル人ナシ〔無禪ガ歌我トシヲイクツニナルト人トハヾ七八九十百マデノ中〕元來ハ長山公春日御參詣ノ砌拾ハセラレテ連テ還御ナリシ者トミヘタリ幼少ノ時ハ名ヲ捨々ト呼レシトカヤ手モヨク書連誹モヨク仕タリ大上根ノモノニテ色々ノ書タルモノアリ鼠ノ記風火論ナド最面白キモノ也就中良山公ノ御爲ニ美濃帋ヲ四半本ニシヲ極細字ニテ古文ノ前後集三體詩上中下長恨歌琵琶行ノ類凡ソ十一部カヲ一册ニメ御旅行ノ爲ニ書タリ加樣ノ物數々多シ一生机ト云〻ナシニ書タルモノ也相國寺門前ニ宅アリテ同町ノ數ノ中ニ寺子ヲ取リテ渡世シタル浪人アリ大阪籠城ノ刻不圖一朝カノ男二三人甲冑ヲ帶メ發足シタリ此長曾我部ナル由後ニ知タリ此時モ同町ニテハ異キ出立ノ男カナト直ニ目ニ當テ見タリト語ル後ニ聞ケバ寺町今出川ノ辻ニテハ二三騎バカリデ馬鎧等ヲモタセタリ寺町三條ニテハ二三百騎ニナリ伏見ニテハ大方千騎ニモナランカト人々云アヘリ珍事ナレバ町所ヨリ訴出シカバ板倉ノ某大ニ怒リテ夫ト知ラバ討テ捨べカリケル物ヲト云シトカヤ加樣ノ物ガタリ日々數多ミナ實見

ノヿニテ最面白キヿドナリ已前ノ御咄ニ此無禪ハ二條行幸ノ御供ヲモ布衣衆ニテ勤タル男ナリ此時ノ美麗ヲモカズノ〻咄シタリシガ又今様ノヿ共ニアラザリシトナリ其時［□□］ト云シ女中ハ即チ中和門院ノ御供ニテ七日ノ間城ニ居タル人也毎度ノ咄ニ何角ト云中ニ女中ノ局二三十間並立テ其前ハ通リ縁ニテ局ヘツヽノ前ニ手水ノ處アリテ上ヨリ竹ニテ掛樋ニテ流スヤウニ仕カケテ晝夜暫クモ間斷ナカリシガ水ニハアラデ好ツカヒ加減ノ湯ニテアリケルトナン又アルマジキ御馳走也

霜月四日御茶　深諦院殿　拙〔中畧〕

御掛物〔後西院宸翰　タトヘバ切紙ノ幅ニテ傍ヘヨセ御歌アリ末ニライ紙大分アリ〕

身のうち茶のみつゝしのぶ事こてはそれより後のむかしがたりぞ

御咄ニ此御製ハ後西院ムカシノ茶湯ノ御時茶湯ト申ヿハ中古ノ義ナレバ詩歌ニハアルマジキヿ也ト申シカバ

勅命ニ左ニテハアルマジ濱ノ眞砂トハ云ガタシトテ即席御製ニテアリシ

十六日〔朝夕〕參候

小池坊ト混池院ト常憲院殿ノ御前ニテ參集セラレシニ混池院ノ惣録小池坊ニ向テ頃日眞言ノ灌頂ヲ見シガ悉皆傾城ノ道中ナリト申シヽカバ小池坊ノ曰ソチハイツ傾城ノ道中ヲ見シヤト問混池院ノ曰某眞言タリシ時見タリト云小池坊曰傾城ノ道中ヲ見物スルヤウナ眞言ハ得テハ禪ニナルモノ也ト云ハレテ一句モアカラザリシト申セシ也大ニ御感アリテ當時廬山ノ御前ニ澤庵和尚ノ侍リテ御暇申サレシニ今暫シト御留ナサレシニ今日ハ法華八講ノ中日也御暇申サント出ラレシヲ呼返メ八講ニ中日トハ如何トアリシカバ澤庵答曰四ツ椀ノ中椀ノヤウナル物ナリト思召セトテ退出セラレシトカヤ此頓知ニメハ茶湯モ上手ナル筈ト仰ラル

草按混ハ金ノ字ノカナ書歟コントヨマセン爲ニ書シカ

極月五日參候

先日ヨリ求ラレシ珍書ニテ目モアハズ嬉シサヨト仰ラル拜見ハナラヌ物ナルベシト申上シカバ潛ニ見スベシ唐ノ六典ナリ六典ト云モノ先近代ハ珍シクマヽアレバ嘉靖本ノミ也先年荒井筑後守ガ書寫ノ本ヲ獻上セシモ嘉靖本ノ寫也御前ノ本ト異ナルヿナシソレ故先年ヨリ思召立テ此六典ノ磨滅ト闕タル處ヲ新舊唐書ソノ外唐代ノ書𪜈ニテコト〲ク正サレタリ是見ヨカシトテ此書寫ノ本ヲ御見セナサル蠟ウチノ紙ニテ六典一部コト〲ク書寫ナサレテ點ヲ付ラレ磨滅ト闕字トヲ他本ヲ以テ頭ニ書加ラレテ大方ハ恨ナキホドニ成就シタリ此ハ諸家ニナクテカナハヌ物ナルホドニ板行ヲ仰付ラルベキト思召ケレ𪜈今少シ御心ニカヽリシカバ本六典ハ唐ノ法ニテ板行ニ行ハレシハ宋ノ紹興ノ本ガ根ナリソノ後絶テ又正德ニ一本板行アリシガ又斷絶ソノヽチハ全ク滅シタリシヲ明ノ嘉靖ニ印本シタリシ由嘉靖本ノ跋ニ見ヘタリソレヨリ以來御心ニカケラレシガ几。終ニナリテ如何樣一兩年ノ内ニ右ノ御本ヲ御藏板アルベキト思召シ折カラ去年中旬ノ頃田舍ヨリ五六部來リシ書ノ中ニ正德板ノ六典持來リテ御覽ニ入ル早速召上ラレテ其ヨリ以來晝夜御校合アリシ。一最前ノ磨滅ヲ補ハレ闕疑ヲ舉ラレシ所々𪜈一々符節ヲ合セタル如シ然ノミナラズ嘉靖ノ本ハアリモアラヌモノ板行ニシタリト見エテ大分ニ落タル處モアリ全ク別ノ物也此嬉シサ晝ハヒメモス夜ハヨモスガラ寢ラレズ六十ニ餘リテ此ホドノ嬉シキコトハナシトテ御本ヲ拜スレバ「草ニ恭惟至篤好哉可嘆々々」最前ノ頭書𪜈ヲ一々ニ藍書ニテケサレタリ拜感餘リアルヿ言語ニ述ガタシ今マデモ最早板行セヨカシト進ムル人多カリシガ惡ク板行セバ悔シカルベキニ幸甚ナルヿ也六年ノ精力何ノ益ナシト思ヘ𪜈此精力ノ冥加ニテアルヘシト思召ス是ヨリ又アラヌ心付テ今一部新書メ此度ノ正本ヲ正メ紹興ヨリ正德マデノシレヌ分ハ其通リ正德以來嘉靖マデハ明白ニ校

正ノ板行アソバスベシト思召。ナトナリ惣ノ今ニハジメヌヿナガラ此公ノ思召立ノタネノ精キヿ如此感嘆肝ニ銘ジテ難有コソ覺ユレ

丁未　九日參候〔錦小路　拙〕中略

墨跡ノ掛物ト畫圖ノ掛物トハ夏冬ニヨリテ心持アリ覺悟セシヤト仰ラル兩人共ニ時節相應トカネテ奉存ヨシ申上グ墨跡ナドハ文ガラ或ハ月日アラバ時節相應ニスベシ畫圖ハ夏ハ冬ノ圖ヲカケ冬ハ夏ノ圖ヲカクルヿ也ト仰ラル

廿三日〔中略〕

堆朱堆紅堆漆紅花綠葉トノ差別ヲ窺フイヅレモ時代コレアルモノ也堆朱ハ己ガホラント思フホド朱ヲヌリアゲテソノ漆朱ヲホリタルモノナリ堆紅ハ底ニ朱ヲヌリテ其上ニウルシヲヌリテソムヲホリテ朱ノ處マデホリツメタルモノ也又一遍ハ朱一遍ハ黃ウルシ一遍ハクロウルシト次第タスリテソレヲホレバ色々ノ筋ガ出來ルコレヲ何ナル故ニカ堆漆ノ手ト云ノ。ヌリヤウガラ時代ガラヱガラノヿ詳ニ遵生八牋ニ見ヘタリ

楊茂張成ヲ世間ニ作ノ香合トテ千年ニモ及ブ樣ニ云フ明ノ萬曆時代ノ物ニテ土工ナリ張成ハ細ナル工ヲ尊ビ楊茂ハクワラリトシタルヲ尊ブ

水仙ノヲリハノヿメツタニハセヌヿ也初雪ノ後ナラデハセヌヿ也是モヨクキコエタルヿカナ初雪ヨリ前ニ折藥アルベキヤウナシ

枇杷ノ花ト柳トハ生ルニ時節日限アルモノ也枇杷ハ十月朔日ヨリ十月晦日マデ柳ハ霜月朔日ヨリ正月一パイギリ也立華ニハ二月マテモ立ルカ

柳ハ御傳授ノモノヽ由兼テ承ハル何時ヅハ拜見イタシ度存シ候ヘ圧終ニ拜見イタサヌヿハ何ナルヿニ

ヤト窺フサレバトヨ立花ニハ傳授ニスレドモ投入ニサシテソノ吟味ナシト云ヘドモ立華傳授ノ心ニテ生レバ各別生ヨシ柳ホド生ヨキ物ハナシイカヤウニモ入ラルヽモノ也此御所ニハ其方見ル通リ庭ノ入口ニ大木ノ柳木アル故ニ終ニ生タルヿナシト仰也

廿六日〔中畧〕

投入ニ決シテ用ヒヌ花アリ金錢花ト沈丁花ト也金錢花ハイクツニテモ花皆仰キテカクル花生ニハ見處ナシ〔中畧　波丁花ハ　ニホヒヲキラフ歟重テウカヾフベシ〕

雞頭花ハ投入ニハセヌヿニヤト窺フ昔常修院殿ノ進〔遵カ〕ハセシヿアリナルホドサビタル鷄頭ヲネジメニ入ラレタルハ面白シ大ニ見ヿナルハ立花ニサヘ入ラレズト仰ラル

八月三日ノ條ニアリ

四月ノ次ニ

廿四夕參候

新井筑後守ガ軍器考東雅ナド如何サマタヾモノニハ非ズ東雅ハ何トゾ其主意アルベキヿ也未ダ通篇見トフサネバ其主意知リガタシ軍器考ハサテモノヽ日本紀已來和書ノ分ヲ精選ニ載スト云ドモカザリタヿハナヤナクヒナドノヿハ官家拜禮ノ式ニ〆武家軍用ノ物ニアラズ故ニソノ事ハ余ハイザシラネバ暫ク其名テ記〆其事ハサシ置由ヲ書タリ和學ニ委キヿ兼テ其方モ聞及ブ處サルニ官家ノヿハ官家ニ讓リテツクヿ大器ナリト御褒美ナサル及バヌヿナガラ知リタルヿハイラヌヿマデモ書ノセタキモノナルニ知リタルヿヲ書ノセヌハ一篇ノ格別正シキ故也ワヅカニ其例ガ違ヘバ一書ノ主意タチガタシ尤ナルヿト申上グ

八月十二日參候

イツモ無禪ガ噺シモ後水尾院樣ノ御所ヘ成セラルレバ御大廣間ニ御輿ヲカキアゲテ下々ハ出デヽ後御戸ヲ開カルヽ處ヘ應山ノ烏帽子ヲユガメテメサレ白衣道服ヲカケテ平折敷ニ熨斗鮑昆布ヲハサマルヽヿ毎度ノ格例ナリト申シキ

晦日參候

後宇多帝ノ遺勅ニテ一切唐僧ノ分ハ禁門ニ入ラレヌヿ黄檗坊主ノ參內ハナシト仰ラル然ラバ昔シ高麗人ノ鴻臚舘日馬等ノヿ源氏ノ君ヲコマ人ノ相セシナドハイカニヤト窺フ往古遣唐使ノアリシ時ハ唐人モ日本人ニ交リ日本人モ唐人ト交ル遣唐使ノ止シ後ハ唐人ノ禁門ニ入ルヿハナキヿ也後宇多帝ノ遺勅ナレバ也ト仰ラル然ラバ後水尾院ハ隱元禪師ヘ□法ナサレシハ御對面ハナキヿニヤト窺フイカナ〳〵天子ノ唐僧ニ御對顔ハ絕テナキヿ也ト仰ラル

霜月十日參候

輿ノ御床ノ花入ニ大水仙ヲ入ラル〔見事ナルヨシヲ申上グ〕葉ハ今一枚モアラバ尙ヨカランカ水仙ニカギリテハ同ジヤウノ葉ヲ二ツヽカフ是ヲ水仙ノ二ツ葉ト云〔中略〕

手習ノ二字ヲ和字ノ樣ニ覺エタルハ違ナリ漢字也筆道ノ書ニ見ヘタリ筆道ノ法ニ五習ト云ヿアリ手習モ其一ツナリ眼習耳習口習手習心習ト云心ニ習テモ手ニ習ハザルヿハ事カナハズ手ニ習テモ心ニ習ハザレバ始メ行ヿアタハズ先手ニ習ヲノレヲ心ニ得レバ自由自在也シカレバ手習トハ能和訓セリ〔下畧〕濃茶ニ初むかし後むかしト云名ニ付テ昔ノ字ニサマ〴〵ノ說アリト申ス廿一日ニ取タル花故ニ昔ノ字アリナド附會シテ申ハイカガト窺フ 仰ニサレバトヨ無禪ガイツモ申セシ唯今ノ昔ニマサリタリモノハ茶也秀吉ナドノ時分ハシブ茶トテ味ノ澁キヲ用タルヲ其後製ノ白茶ト云モノヲ出シテ又モトノシブ

茶ニナリシガドフシテモ昔ノ白茶ガ好トテ白茶ニ極リシト也初後ハ初メテ芽ヲ出シタル眞ヲツミタルガ初也其ワキヲカヽエタルヲ二番ニツミタルガ後也右ノ白茶ニ極リタルカラ昔ノ初昔ノ後ト云コヽロニテ初むかし後むかしト云也ト仰ラル

極月十六日

石見守宅ヘ渡御〔意齋拙〕

掛物〔薩州探元繪ニ程順則ガ讃〕

香合〔ナマリノ黑ヌリ唐物〕

會席

汁〔カボチヤ　タヽキナ　ウスフクサ〕　蕈云番南瓜ノ面目ナルベシ

平皿〔ハンヘトヂ　鴨ノ細キリ　青ミニヨメナ〕

燒物〔ホヲホ　色フチ〕

吸物〔タマゴ白ミ　ツク／＼シ〕

菓子〔モロコシ　シキサトウ　梨〕

花生〔マトナシ御作〕　花〔白梅　フキノトフ〕

水指〔シガラキ〕

茶入〔大海　金花山ノ手ノ由也〕

袋〔丹地ノ安樂菴〕

茶杓〔宗和〕

茶碗〔カラツ新渡〕

暮前還御

右數十條山科道安法眼所著槐記（六卷）抄出

文政己卯霜月中旬七十一叟書于病床

○石斛

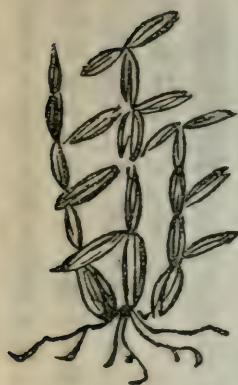
浪華の近藤正齋（重藏名守重御弓矢鎗奉行）己卯臘月十五日發の書簡に此比傳承候へば京攝ともに石斛至て流行一根七八金に至り候由摺物入手則呈上候（其文如左）

四季ノ形寫　　モエギノ斑文也　　百川（子海）

春　金剛丸

夏　金花山

緑葉白斑文

秋　都覆輪

冬　青丸

覃云。四季名杜撰。出何本草。可笑々々。

こゝに石斛と名づくる小艸あり閑雅の逸物にして暑地なきも寒暖土地の嫌ひもなく作り樂しむにいとやすふして愛する人多し近き比やんごとなき御たちにも數品の石斛を集めたまひこの艸和名いわごくさ　いわくすり　などいふて言のはの御すさみのたねともならんとめでましければこのむの友どちよろこびあへて數品のあつめを望み遠近に同好の友の廣し〔覃云此文拙キ「のノ字ヲ見テシルベシ〕こたび四季の壽てふ摺物を綸がき春秋のうつりかはるかたち冬は下葉よりうつろひて落葉となり根に來る年の新芽をもよふし身につもる老の數おもわすれ春まちごふに思ひつゝかく四時のたのしみつきせぬも遠近に沙汰せんと同好つどひすりものひらきする事しかり

草の名によりてや人の好らん
　いわくすりこそ弄ける

覃按本草綱目〔第二十卷〕

草之九〔石草類一十九種〕

石斛〔本經上品〕

釋名。石蓫。〔別錄〕金釵。〔綱目〕禁生。〔本經〕林蘭。〔同〕杜蘭。別錄時珍曰石斛石義〕未詳其莖狀。如金釵之股。故古有金釵石斛之稱。今蜀人栽之。呼爲金斛花。盛弘之荊州記云。耒陽龍石山多石斛。精好如金釵是矣。林蘭杜蘭。與木部木蘭同名。恐誤。

集解別錄曰。石斛生六安山谷水旁石上。七月八日采莖陰乾。弘景曰。今用石斛出始興。生石上。細實以桑灰沃之。色如金。形如蚱蜢髀者佳。近道亦有。次于宣城者。其生櫟木上者。名木斛。其莖至虛長大而色淺。不入丸散。惟可爲酒漬煮之用。俗方最以補虛療脚膝。恭曰。今荊襄及漢中江左有二種。一種似大

麥。累々相連。頭生一葉而性冷。名麥斛。一種莖大如雀髀。葉在莖頭。名雀髀斛。其他斛如竹。而節間生葉也。作乾石斛法。以酒洗蒸暴成。不用灰湯。或言生者漬酒。勝于乾者。頌曰。今荊州光州壽州廬州江州温州台州亦有之。以廣南者爲佳。多在山谷中。五月生苗莖。似小竹節。節間出碎葉。七月開花。十月結實。其根細長黃色。惟生石上者爲勝。宗奭曰。石斛。細若小草。長三四寸。柔韌。折之如肉而實。今人多以木斛混之。亦不能明。木斛中虛如木。長尺餘。但色深黃光澤耳。時珍曰。石斛叢生石上。其根糾結甚繁。乾則白軟。其莖葉生皆青色。乾則黃色。開紅花。節上自生根鬚。人亦折下以砂石栽之。或以物盛。挂屋下。頻澆以水。經年不死。俗稱千年潤。石斛短而中實。木斛長而中虛。甚易分別。處々有之。以蜀中者爲勝。

修治。斅曰。凡去根頭用。酒浸一宿暴乾。以酥拌蒸之。從巳至酉。徐々焙乾用。入補藥乃效。

氣味。甘平無毒。〔普曰神農甘平扁鵲酸李當之〔〕時珍曰甘淡微鹹之才曰陸□爲之使惡凝水石巴豆畏雷丸僵蚕〕

主治。傷中。除痺。下氣。補五臟。虛勞羸瘦。强陰。益精。久服厚腸胃。〔本經〕補內。絕不足。平胃氣。長肌肉。逐皮膚邪熱。痱氣脚膝疼冷。痺弱。定志除驚。輕身延年。〔別錄〕益氣除熱。治男子腰脚軟弱。健陽。逐皮肌風痺。骨中久冷。補腎益力。〔權〕壯筋骨。煖水臟。益智淸氣。〔日華〕治發熱自汗。癰疽。排膿。內塞。〔時珍〕

發明。斅曰。石斛鎭涎澀。丈夫元氣。酒浸酥蒸服滿一鎰。永不骨痛也。宗奭曰。石斛治胃中虛熱有功。時珍曰。石斛氣平。味甘淡微鹹。陰中之陽。降也。乃足太陰脾足少陰右腎之藥。深師云。囊濕精少小便餘瀝者宜加之。一法。每以二錢。入生薑一斤。水煎代茶飲。甚淸肺補脾也。

附方〔新二〕睫毛倒入〔川石斛川芎藭等分爲末口內含水隨左右㗜鼻日二次　袖珍方〕飛虫入耳〔石斛數條去根如筒子一邊紝入耳中四畔以蠟封閉用火燒石斛盡則止熏右耳則虫從左出未出更作　聖濟〕

小野蘭山翁本草記聞云

石斛〔イワニナ　覃按イハトクサ歟　イハクスリ〕　集解　蚱蜢〔イナゴ〕

又蘭山翁大和本草ノ考アリ〔書名未詳〕云

石斛〔通名〕イハドクサトモ云石ニ生モノ也莖木賊ノ如ク節ゴトニ一葉ヅヽ生ズ竹葉ノ小ナルモノヽ如シ花淡紅色白色ノ二種アリ

松岡成章〔玄達〕怡顏齋蘭品云

杜蘭　一名　石遂　金釵　禁生　林蘭　石斛　百丈鬚　和名　石斛(セキコク)　岩木賊(イハトクサ)

本草綱目云。其莖狀如金釵之股。云云。以蜀中者爲勝。〔本草見前故畧〕

輟耕錄藥譜云。百丈鬚。石斛也。

達按。杜蘭處々山中絶崖間生之。種樹家以椶毛包絡。挂搭簷下。夏月開花。雅潔芳韻。可與風蘭並供清玩。東壁所謂斛莖長及尺餘者。嘗聞丹後山中多產之。

覃云或云日光山中多有之。

又云此頃京攝ニ玩ブハ丹後ヨリ來ルナルベシ

蘭品所載圖

杜蘭

本草綱目（卷之二十）所載圖

增補地錦抄（染井伊兵衛　寶永七年寅初春日本橋南一町目須原茂兵衛板）卷之六
石斛（初中）葉は笹のやうにて草立は木賊のごとくなる小草也
白き花さく石上枯木カなどに生るもの
後藤梨春物品目錄　草木育種に不ㇾ見
○對雪家稿抄
對雪家稿（諏訪備前守賴音詩稿七卷古寫本）
○都松　世謂熱海號帷子里。田中有松。謂都松。俗曰。染殿后之塚上樹也。枝々葉々垂西。曰是憶洛陽故也。傍有小川。謂糸川。
○寬文甲辰冬十月彗星出巽隅
○乙巳元旦（五首之一）
春到江東十萬家。和風遲日映梅花。深紅淺紫從斯發。先看朝來一片霞。
○六鄕（寬文六丙午九月二日發江府到于豆州熱海云云）
來往幾回過六鄕。江村一曲水流淸。玉川醮得長橋影。疑是龍蛇波底橫。
○小田原（此所民家賣屐故及句中云云

○丁酉自鑑記　明暦歳次丁酉正月云云。二日。不意災于越之後州牧中將之館。十八日。日暖。至巳時風烈。江城之北本鄕本明寺災火。出東南及海濱。十九日。小石川與糀町災火。又出東南西及海濱。從金城殿樓。及四方諸侯。大館商工之家。蕭寺伽藍等。盡成焦土云云。二十日。風靜。已見燒燼之所。恰如郊外無人所。漠々曠々。不知所遊。云云。總之下州隅田川邊肯骸。收彼骸骨築大塚。傍植堂名無緣。云々。方匠爭功。百工盈街。上命暫休金城之營。先民屋。不日依舊。國用不乏。然上自公卿。下至庶人。禁珠玉金銀之飾。止錦繡綾羅之奢。堯屋殷輅當髣髴。熟思此災却回大古聖代之風。妖不勝人乎。不可得而誣。又慮後災。矮高宇減大家。移商賈之屋。廣岐路。阻以長堤。此所振古有火災數矣。必因北風。故艮隅丘陵大厦亦移之。他又新命秋山氏町野氏近藤氏內藤氏水野氏永井氏等。並國司郡牧。來會于斯者。構高樓定金鼓之制。議見熖。則持滅火之具。奔走而集。暫時稍消焉。雖然天作之災。猶未息乎。且因都城之繁榮。超越于遐代。而人多。人多故多竈。竈多故失火多乎。自冬至春。頃年々多火災。明年戊戌春正月十日。又有災。風烈自本鄕至海邊。廿二日。又災。是其大者也。小災率不隔三日。然撿十日與廿二日之災。減丁酉之災半。自臘前至今春。亦災多。正月十四日。災數千戶。是又減戊戌之災半。蓋天作之災息。而終人勝妖者乎。天謂者何。所謂時運之理也。人謂者何。所謂政務之術也。云云。

○白雲山中有鳥。唱佛法僧。故號曰三寶鳥。曾聞紀州之高野。野州之二荒。並此山三處有焉。

○火車切月之記　日者征夷大將軍正一位家康公之家臣。有松平五左衛門尉近政者。住于上野之國三之倉所。一日朋友之妻死。送櫬於野之時。隨衆綿共行郊外。時俄然天起黑雲。雷車驚耳。電光入眼。風疾雨烈。各消魂冷膽。一片之黑雲。降于櫬上。雲中出一手。攫櫬而欲昇。於是近政前奏刀。斬其腕。所切落之手。見之有三爪。々根生黑毛。爪色如青磁之陶先尖也。俗所謂火車者也。近政爲奇爲怪。採皈吾家。爲家珍。是非其人之壯勇。其刀之利銛。何可免此難哉。由此寶其刀。而藏之久矣。其刀藤島友重之所作也。余祖父諫

訪因州太守頼水。隨大將軍家康公幕下。居于信州諏訪之城。家臣有諏訪美作守頼雄者。娶近政之女爲妻。近政時添所斬火車之刀。及爪一。遺頼雄。頼水乞刀。以傳二男若狹守頼鄕。々々者。余家君也。爾後其刀相傳。在余庫藏。爪者頼雄之苗裔大學（吏部主事唐名）頼及藏之。今尙在焉。爾後得一爪。而添此刀。作記以令後昆知其來由者也。于時延寶三年乙卯臘月下旬。從五位下諏訪備前守源頼音書。

望云。此文此書。作者世系。歷々可見。因抄出全文。

○烟酒

鷲峰文集（卷五十二）

烟酒之行。旣五十餘年。蕎麪之行。殆三十年。共是雖益於人。亦無害者必矣。蕎麪可以救饑。烟酒可以消食。小皿之草。一管之烟。不可爲毒。大器之饌。十椀之食。恐有脾胃之煩。取捨以爲如何。

辛丑孟冬　戲荅惡烟酒文

是によりてみれば春齋も烟草は好きとみゆ

○隨庵諧語抄

隨庵諧語（二卷）夏成美輯錄

元祿七年の比芭蕉の家兄松尾氏の後園に無名庵をいとなみ建し八月十五夜入庵のときの猷立とて尾張國より寫しこせり

八月十五夜

せうが
ふ
のつぺい　こんにやく
一煎物　こぼう
木くらげ
里いも

ゆ
吸物　つかみ豆腐
しめし
めうが

中猪口　もみうり
　　　　くるみ

肴　にんじん
　　やき松茸
　　　くはし柿

す　しぼり汁
　　しやうゆ
　　すり山のいも

吸物　松たけ

冷飯

こりざかな
一芋煮入
さけ

上野館林松倉九皐が家に芭蕉庵再建勸化簿の序素堂老人の眞跡を藏す所々虫ばめるまゝをこゝにうつす九皐は松倉嵐蘭が姪孫なりとぞ
（虫バミ）は庵裂て芭蕉庵を求十（ム）（虫バミ）を二三生にたのまんやめぐみを數十（虫バミ）生を待んや廣くもとむるはつて其おもひやすからんと也甲をこのまず乙を耻る事なかれ（虫バミ）各志の有所に任すこしかいふこれを清貧とせんやはた狂貧也と貧のまたひん許子之貧とれすら一瓢一軒のもとめ有雨をさゝへ風をふせぐ備なくは鳥にだも及ばず

誰かしのびざるの心なからむ是
草堂建立のより出る所也
天和三年秋九月［］汲頤主之旨
濺筆於敗荷之下　山素堂

一五匁　柳興
一拾五匁　楓興
一四匁〔イセ〕勝延
一三匁　傳四郎
一壹匁　小兵衛
一貳匁〔永原〕愚心
一五匁　ゆき
一三匁　九兵衛
一三匁　八兵衛
一貳匁　不嵐
一貳匁　不外
一貳匁　不卜
一五匁　洗口
一貳朱　枳風
一五匁〔川村〕半右衛門

一三匁　四郎次
一四匁　長叶
一四匁　茂右衛門
一四匁〔赤土〕以貞
一五匁　七之助
一五分　彌三郎
一五匁　五兵衛
一四匁　六兵衛
一五分　伊兵衛
一壹匁　秋少
一壹匁　泉興
一壹匁　升直
一五分　中樂
一壹匁　勇根
一銀壹兩〔鳥居〕文鱗

一五匁　擧内
一壹匁五分　藤四郎
一三匁〔羽生〕調鶴
　次叙不等
一貳朱　嵐雪
一壹錢め　雪叢
一壹錢め　重延
一壹錢め　正安
一壹錢め　幽軒
一貳匁　嵐柯
一　嵐竹
一破扇一柄　嵐蘭
一竹一尺四五寸　山店之

一五分〔川村田〕三郎兵衛
一五分〔川村田〕市郎兵衛
一五分　幕角
一銀壹兩　嵐調
一三匁　源之進
一よし簀壹把〔代壹匁〕嵐虎
一五分　疑門
一五分　むら
一壹匁　親信
一五匁
一大瓠一壺　北鯤之

せはを昔常陸國本間氏に寄宿して醫を學ぶ其時の自筆の誓詞いまつたへて本間松江が家にあり其文
相傳醫術啓迪院一流秘書秘語那豈漏ㇾ他乎若於二違背一者大小神祇別而生緣氏神可ㇾ蒙二御罸一者也仍而起請文如ㇾ件

貞享三年
丙寅四月十二日　物部道意

本間道悦様

松尾桃青

○延山日潮上人書

辰五月十五日四谷南寺町正覚寺にて延山日潮上人の書をみる世に所謂ウシホ日潮也アサ日潮ウシホ日潮と云ふ行學院日潮聖人明應九年庚申六月廿五日入寂在位四十年と身延鑑にみゆ

○本國妙といへる三大字

○歩々同道作佛事人伸後生廣宣禮
撞鐘吹螺告四方早來拜我如來使
遠寺法縣

飯高日潮書

飯高の檀林能化の比の作なるべし

○新年春未辛客說肇辰歡
方外有眞樂雪中容膝安
兎狗殘壽在侍暖老懷寛
七十今朝滿雖衰不減餐
癸亥元旦吟
賜紫身延方丈日潮書

覃按癸亥ハ寛保三年なるべし身延鑑に六牙院日潮聖人寛延元戊辰年九月廿日入寂在位九年と

あり

此一幅を乞得て歸り藏于家〔辰五月既望書〕

○序江漢先生死生〔元人姚燧〕

其歳乙未。王師徇地漢上。軍法。凡城邑以兵得者悉阬之。德安由嘗逆戰。其斬刈首馘。動以十億計。先公受詔。凡儒服挂浮籍者皆出之。得故江漢先生。見公戎服而髯。不以華人士子遇之。至帳中見陳琴書。愕然曰。回紇亦知事此耶。公爲之一莞。與之言。信奇士。即出所爲文若干篇。以九族殫殘。不欲北。因與公訣蘄死。公止共宿。實譏戒之。既覺月色皭然。惟寢衣留故所。公遽鞍馬周號積屍間無有也。行及水裔。見已被髮脫屨。仰天而祝。蓋少須臾踏水未入也。公曰。果天不生君。與衆已同禍矣。其全之則上承千百年之祀。下垂千百世之緒者。將不在是身耶。徒死無義。可保吾而北無他也。至燕名益大著。北方經學實賴明之。遊其門者將百人。多達材。其間燧生也後。不及拜其履。前獲識其子卿月者七年矣。凡再見之。初以府僚見之洛陽。雖嘗以好見。余猶未語此。今以憲屬來鄧始及之。且德先公不忘也。燧曰。嗚呼。自先公言之。夫既受詔。出之軍中。而使之死不以命。非善其職。且儒同出者將千數。縱得如先生一人。而使之泯沒無聞。非崇其道。此公所憚而必生之也。自先生觀之。孰親於其七尺之軀。而大其所關。人持瓦缶將敗之。猶有惜而不果者。必茹毒羅禍。不可一日居。故忍而爲此。出處非不思也。中夜以興。蹀膏血以闘魑魅。徑林莽以觸虎豹。而始及水。仰天而祝。其行非不決也。夫思而後行。行之不決。則其勢多難奪於中路。使非先公自行。而他人赴之。能捨所忍。爲以伺其復生之志。收其已逝之魄。反就是一日不可居之禍毒乎。由是言之。先生之死。求以無辱。不以全歸其生也。不以有赴而以知已。此其胸中摸制一時。相爲高下之權衡也。然古之人爲知已死者有之。無有爲知已而生者。先生以古人所不爲者。報之先公。而先公所受先生也已多矣。奚德哉。卿月與余相視一泣。卿月請。序所與言者贈之。

右元文類巻三十四ニ出ヅ

○牛込行元寺復讎の碑

天明三年癸卯十月八日牛込行元寺にて敵討あり寺門の内の柳の木のもとにてありしかば一の碑をたてゝこれにものかきてよと寺主のこひしまゝ此寺に觀世音あれば

念彼觀音力　還著於本文

といふ文字を書つかはしてその碑の背に隱語にて

癸卯天明陽月八　二人不戴九人誰

同有下田十一口　湛乎無水納無絲

二人は天なり九人は仇なり敵うちしものは富吉といひし故同下の田は富の字十一口は吉の字なり敵の名は甚内といひし故湛に水なく納に糸なきは甚内の字なりその比寺主人の見てとやかくいはん事を恐れ碑面の字ばかり刻して背の字は刻せざりしが近比〔文化十二亥年也〕三十三回の忌にあたりてもはや年へし事なれば子細あるまじきとて刻そへしといふ〔庚辰五月十一日晨〕

○白賁野芳宜園の事

南郭の白賁野橘千蔭の芳宜園の名めづらしき事に覺へしが白賁園芳宜園共に鵞峰文集にありて第二義なり鵞峰集はよみし人まれなるべし

○聚頭俗韻

聚頭俗韻といへる寫本以呂波を以て和漢の熟字をあつめ見よきやうにしたるものなり和字は少く漢字多し通鑑史漢說郛正字通通雅品字箋諸書を引て博く覽し人なるべし僧泊如の谷響集稻若水の本草荻生の譯文などゝいへるを見ればこれらより後の人なるべし〔大塚判事携來示〕

引書の中に木下道圓考證好靑雜錄あり〔好靑堂漫錄ともあり〕又榊原篁洲考證あり荻生譯文を引〔大給ともあり〕

斗覺　韓退之答張十一功曹詩云。吟君詩罷看霜鬢。斗覺霜毛一半加。自有此句。而東坡亦云。黃昏斗覺羅裳薄。後山亦云。斗覺文字生淸新。皆本此。品字箋云。斗覺猶言驟覺也。

○白石手書五條寫

白石新井〔君美〕手書の一卷を見しまゝ走筆うつし置

讀仁德帝紀

吾讀帝紀。而後人君務財。天下之不仁。莫甚焉。帝之不仁。可謂甚矣。然天下號爲仁聖。無他。蠲除天下三年賦役耳矣。夫飢者莫擇食。渴者莫擇飮。民之苦于虐政。殆有甚於飢渴焉。帝發政施仁。民被其澤。蓋古今之所不及。而帝親行之。宜乎天下之稱以爲聖也。詩云。刑于寡妻。至于兄弟。以御于家邦。言先王親其親。而仁其民也。吾竊怪其澤足以被于生民。而恩無以保妻子兄弟。帝於其仁。是誠何心哉。史載帝作壽陵事。而今所存山陵陂池。其廣袤皆與諸陵式合。古者帝陵之制。未有如此之大者也。因此推之。帝嗣位之初。躬行節儉。以惠其民。蓋所謂將奪之。固必與者歟。史亦稱。帝之末年。妖氣稍動。叛者始起。於是輕賦薄斂。以寬民力。則果其奪之矣。雖然帝不遠而復。修其政令。天下復安二十餘年。嗚呼帝亦英特之主也哉。

甲辰五月二十日　　源君美識

垂仁皇后之禍

古事記略曰。皇后母兄沙本毘古王。開化帝孫。彥坐王子也。王陰蓄異志。因誘皇后。謀以簒立。即授七首。敎之曰。方其酣寢。乃得從事焉。帝嘗晝寢。枕后膝而臥。后憂心傪々。及此因思。我兄所謀。若是之時也。不覺泣下沾帝面。帝驚悟曰。我今夢暴雨自沙本來。一小錦蛇纒繞我頸。是何祥也。后乃嗚咽。以其情告。苦請伏

罪。帝曰。非皇后之罪也。即發近縣卒。命討沙本毘古王。王嬰城而拒之。后徙跣而出自後門。走入于城。時后既有娠。帝勅莫急攻之。及后生子男也。后抱寘諸城外曰。天皇若以爲子。幸賜收養焉。帝乃募壯士曰。幷獲其母。及后授皇子。因欲執之。髮髢衣佩。觸手皆絕。進不能獲之。〔古事記云。天皇欲必獲皇后。乃選軍中多力輕捷之士曰。倂取其母。若身若首。隨手所觸。急捉而獲之。后心亦疑之。乃自髡戴其髮。玉緒及衣。皆用酒腐。故其所執。皆斷裂。遂不能獲耳。玉緒者絲繩貫玉。以纏手爲之飾也〕帝師人問曰。凡名子。其母名之。此兒以何名。后對曰。當今城中火作。而生于此。宜稱本牟智和氣御子。〔本。火也。牟智。貴也。和氣。別也。古男子稱。〕又使問曰。養兒如之何。曰。宜擇于諸母與可者。又復問曰。后宮之事。當經者誰。曰。妾聞。旦波比古多々須美智宇斯王之二女。淑範懿行。宜皆爲內助耳。皇后遂與其兄。焚死于園中。嗟呼后與聞兄謀。其力不能回。亦不忍不告。旣以告矣。豈復忍令我兄獨死于罪乎。方其有娠忍死。須臾使其生兒。幸得所託天也。及城將陷。對帝之言。委曲周悉。皆當于理。非其視死如歸。而能若此乎。嗟亦烈哉。帝當其大義。則滅其親。而今觀與后相問。猶及其後事。何其哀也。雄略之世有曰狹穗彥玄孫齒田根命者。雖行不軌如王。而罰弗及厥嗣也。秦誓曰。有罪無罪。予曷敢越厥志。古者仁人恭行天之罰。豈復有他哉。蓋天下之公義也。夫苟天下之公義。不可得而私。亦不可得而避也。帝於是擧。則仁之至義之盡矣。

甲辰三月廿七夜燈下書　　君美

景行拜彥狹島王爲東山十五國都督

初景神命皇子豐城入彥。令治東方。及帝之世東方。大亂。天威一震。海外有截。帝乃使王嗣前業。莅于舊邦蓋以東人之望也。東人傷王不來。竊取其屍。以歸葬焉。嗟夫東人慕王。如此之切。乃其追思前王。久而不忘也。非皇子之化及人深且厚。曷能至此哉。周人思召伯。而愛其樹。況於其子孫者乎。王之子。〔御諸別王〕克世其德。甚得兆民和。夷人率服。來献其地。卒使廟廊之上莫有東顧之憂。詩曰。大邦維屏。大宗維翰。懷德維

寧。宗子維城。其斯之謂與。厥後子孫受姓者三十二氏。世承其祀。千有餘年。善之所積。其慶有餘。豈不信哉。帝八十一子。未有一人受大國者也。而帝亦懷其德。委王父子。以東山十五國事。是亦可以觀其無所容私于天下焉。昔賢論二南之化。以歸于文王之德。帝之爲德。可謂至矣。

甲辰三月二十五夜燈下書　　源　君　美

武內大臣釋寃

應神戊戌年。夏四月。遣武內宿禰監撫西方。大臣母弟甘內宿禰。以其兄反謀告。帝遣使誅之。大臣乃自嘆曰。嗟我無罪而死邪。壹岐直眞根子曰。公之無罪。天下共知之矣。躬自詣闕。披陳其情。而死未晚也。世人且稱。吾酷肖公形貌。請我今代公死。即自伏劍而斃。大臣悲慟。竊自脫身。浮海而南。抵紀水門。直赴闕請罪。帝更加按問。昆弟爭辨。遂不能斷。乃勑二臣。請神探湯。〔探湯。北史云。每訊寃獄。不承引者。置小石於沸湯中。令所競者探之。云理曲者。即手爛。即此。〕弟則敗矣。大臣遂欲殺之。帝勑赦其罪。

美曰。管蔡流言。周公以懼。雷風動威。成王乃悟。武內宿禰。帝室懿親。勤勞皇家。歷事四朝。年殆二百。及其探湯。僅免一死。嗚呼君臣之義。兄弟之恩。雖曰聖智。亦爲難能也。其他則又何說。若夫壹岐直。則可謂死友矣。豈亦易得者也邪。

甲辰閏四月　君美書

題采覽異言後

浙西李之藻。刻萬國坤輿圖。萬曆年間。大西利瑪竇。重修攷定。附以南北半毬圖。事具二子所叙。而一時薦紳揚景淳吳中明之徒贊述焉。正德己丑冬。〔美〕得遇西人。乃按其圖。訪以方俗。其人曰。此圖明人所作。稍似眞密。然與地理不合。莫由依據。敢辭。〔美〕意謂。彼不解漢字。强爲之辨。曰是則歐邏巴人利瑪竇所攜入于中州者。世稱其善。子無取焉。獨何與。曰。某未嘗聞我有其姓名者也。曰。西教東漸。自利氏始。子不知其

人可乎。彼笑而不答。既而索得西圖於官府。以示之。披翫久之曰。是和蘭鏤版。蓋百年之物也。雖我西土。亦不易得。〔某〕與此圖。唯得三見之矣。於是左把右指。章步而亥算。使人不待窮夫轍迹。而周遊乎八極名山大川。擧望而出殊方絶域。隨顧而在。亦奇矣哉。誠得其術也。明年春。和蘭入貢。〔美〕私其使者以質焉。對曰。輿地全圖。舊有數本。此版弊邑所刻。去今既及一百十三年。先是。西土佛來釋古者。始倡天教於東南諸州。其塔今在印度地。香華之盛。一百七十年於茲矣。歟羅巴人未聞有利氏之子者也。〔美〕尤怪焉。嗣後適得金閶鍾始振闢邪論於新增大藏函中。因知竇本生於廣東旁近海島間。北學於中國者。實非西方之人。則前者之說。果不誣矣。李氏之徒。徒嘆其學在夷。而不知用夏變於夷也。故今我是編所採。其說係之明人者。蓋從其實也。源君美書〔一本有癸巳之秋四字〕

山海經。帝令竪亥步自東極至于西極。五億十萬九千八百八步。竪亥左手把算。右手指青丘北。淮南子。禹使太章步。自東極至于西極。使竪亥步自北極至于南極云々。

右白石先生手書土肥氏所藏走筆寫之

文政三年庚辰竹醉日後七十二翁覃書

覃按。甲辰者。蓋享保九年甲辰也。其讀仁德帝紀而曰。人君務財。天下之不仁莫甚焉。似譏一時新政也。不知痴人夢中如何々々。

○皇帝勅諭日本國王源道義書

皇帝勅諭日本國王源道義。朕誕撫萬方。愛養黎庶。一視同仁。無間彼此。咸欲其無寇攘災沴之虞。無飢寒疾疢之苦。老者得養。幼者得息。暨鳥獸魚鱉。飛走蠕動。跂行喙息之類。咸欲其生遂。此

上天之道。仁政之大也。故四方萬國之來庭者。諄諄誨諭。欲其上順

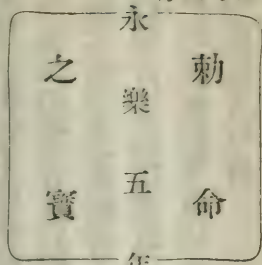
天心。保恤生靈。惟王資性温淳。敦厚周愼。恵和膚敏。恭倹慈仁。聰明特達。而賢聲素彰。律己愛民。而善道益著。奉藩守職。欽承罔違。昔者海寇攘竊。肆虐邊隅。彼此爲梗。民罹其殃。朕命王殄滅之。以除蟊蠹。

王即發兵掩捕。破其舟艦。戮亡黨與。擒其首賊。遣人繋送來京。而渠魁遠竄。海島偸息。鯨波魚蝦。出沒莫適其鄉。舟楫猝不能及。鋒鏑猝不能加。施之以德。不能以懷。動之以威。不能使畏。王乃晝夜謀思。至忘寢食。四出追襲。百計以擒之。茲爲遣使上表。献俘于庭。詞意懇悃。衷情溢見。朕覽讀再三。甚深慰悅。嘉歎不已。王之忠誠。可以貫金石。可以通神明。允合

天心。式慰朕望。自今海隅肅清。居民無警。得以安其所樂。雞豚狗彘。舉得其寧者。皆王之功也。眷茲偉績。寤寐不忘。臨風顧懷。良切于中。夫治天下國家者。能體天地生物之心。去災捍患。使天下國家大安。萬民熙皡。功莫大焉。則

天心悅鑒。使享有無窮之福。子子孫孫。不替益盛。此爲善之報。理固然也。王之修身體道。樂善不倦。昭令德於東隅。播芳譽於中國。垂光青史。與天地悠久。誠所謂賢人君子。有志大丈夫哉。日本自有國以來。如王之賢達者。盖未之有也。自古賢者無不好善。而好善者無不蒙福。王之好善。則必享有福祿。永永無窮

矣。茲遣人以勅諭王。申以寵賚。用致朕嘉奬之意。懋膺降眷。體朕至懷。故諭。

永樂五年五月二十六日

○鄭成功書簡

明延平王鄭成功（賜号國姓爺）ガ自筆ノ書簡長崎ニ住スル弟ノ七左衛門ヘ（始ノ名次郎左衛門ト云）贈り候寫並七左衛門公儀ヘ願候訴狀ノ寫（寛文五年借抄于多胡玄承）

我年來與虜征戰。虜被殺不可勝計。今年五月間。復大殺虜兵。滿洲眞虜斬殺已盡。自虜入中國。未有如是挫敗者。虜甚驚怕。自請割地求和。中國在我掌中矣。吾　弟能不加（外聞ヨシ）否。緣我日事戰勞。無一暇晷。今年失寄銀兩付用（ツカヒレウ）。中懷歉々。茲（ヌメテ）敲二東來船一。即寄來銀五百兩。吾弟可察（メ）入收用（ヲ）。極欲致敬（日本）國王。以虜氣未灰。道途阻梗。無處可辦大禮物件若微物致意。恐非我大體面。故未有以相將。今虜已乞和。容來日購求以奉。想　國王必能諒之。並叔來船被火。　國王牽衆奔救。及造船等之事。我感在五中。自當稱謝。親誼遠暌。懷念情殷。來札有如面晤。因鴻附問。不盡依々。此達。

名　具正幅

左沖

日に船ノオクリキン

東洋牌餉銀原定伍百兩。客商請給。須ニ照額輸納一。吾　弟受其實惠。方可給與。切不可爲商人所　瞞。短ヲ少餉額ニ也。已即發給十牌壹張。寄交省官處ニ。可就彼對領。出征戎務方殷。餘不多及。此札。

名　具　正

五月初七日申時沖

東洋船牌。應納餉銀。大者貳千壹。千兩。小者亦納餉銀伍百兩。俱有定例。週年一換其發船之時。須察船之大小。照例納餉銀與　弟。切不可爲所賣。聽其短少。不侫有令。着汛守兵丁地方官盤驗。遇有無牌及舊牌之船貨。船沒し官。船主能ト拏解。玆汪實升一船。係拾年以前所給舊牌。已經地方官盤驗解報。接吾　弟來字。特破例從寛免議。但以後不可將舊牌發船。恐遇汛守之兵。船貨即時撥上。斷難逍遙。其悞事不小。切宜愼之。所請新牌。即着換給。交ニ汪實升一領去。如短ニ小吾　弟餉銀一後年再不給發也。此札。

名　具　正

六月十二日巳時沖

乍恐謹而御訴訟

一私儀於今町七左衞門と申者にて東寧鄭國姓爺之弟當錦舍爲には叔父にて御座候私先年は母一所に平戸に住居仕候其刻鄭一官並兒國姓爺儀は大明泉州と申所に住居仕候然處に當所西中町銀吹七官と申者存生之刻私母儀泉州呼度由父一官國姓爺兩手前より度々賴申越候に付右七官方より秋田屋庄五郎と申者を迎に平戸へ差越申候就夫母私を召連御當地へ罷越候て一官父子より母を呼申段慥に承居候

其刻私拾歳罷成候故捨置隔遠海泉州へ罷渡り候事難儀之由母申遣候へば其翌年弟七左衞門幼稚候へば難見捨由仰遣され候儀尤存候併七左衞門爲には猶以來親にて候へば如何樣にも私可存候壹人之弟にて候へば母之仰違背仕間敷由申越候處私十六歳之刻は母難遁樣に國姓爺申越候處故母も返事仕兼國姓爺より數年色々申越候へ共其方を不便に存無爲方不罷渡候然共今度は成間敷と返事致候はゞ其方立身可難成と存候當分母子之別を悲しみ候ても末々其方爲に不宜候間縱罷渡り我身は如何樣に成候共

御公儀樣被爲成　御赦免候は可罷渡と返事可致由私へ言聞せ國姓爺方へ右之趣申遣候　御奉行馬場三郎左衞門樣御代にて右翌年に國姓爺手前より御訴訟申上候然は被爲成　御赦免三十年餘以前四月十五日泉州へ罷渡候に付其方成長致候砌　御當地へ國姓爺差渡候船々より銀子五百貫目請取渡世可致候此事泉州にて國姓爺へ具に可申渡候と母申船に乘申候御事

一母儀泉州へ着岸仕候て私身體之儀國姓爺へ申渡候に付國姓爺を惣領と思はれ幼稚之七左衞門を日本へ留置罷渡られ候上は母之仰を毛頭向背仕間敷と提請合申候由國姓爺幷母兩手前より私方へ具に申越候其年之九月廿九日泉州へ大敵發向いたし國姓爺居城を攻申候處難防厦門と申所へ母落行候を被虜候に付賤敵之手に渡り可被討果事心外に存自害致候國姓爺母之遺言を相守翌年より當分爲粮銀少之音物八九年差渡申候其以後家來助爺と申者に國姓爺申付壹ケ年金子五貫目宛拾貳ヶ年之間助爺手代ども方より我等請取申候御事

一右之通に母討死仕候は承屆親之敵と申兄之敵にて不一方大敵に御座候得ば一度泉州へ罷渡國姓爺之馬之口に付添母並兄之大敵を討亡申度念願にて數年御訴訟申上候に付御奉行樣私も國姓爺へ書簡遣申樣にと御座候就夫節々書簡差遣し候得共一圓屆不申候其子細は御當地にて國姓爺船頭共奢多く御

座候に付私之御訴訟相叶泉州へ罷渡り候は船頭共身持之儀則國姓爺に告知らせ可申候然則皆之者如何こ船頭中申合居不申候依然國姓爺より私儀被爲成御渡候樣御訴訟不申上候に付不罷渡于今殘念至極御座候右之仕合にて御座候へば其比國姓爺方へ母遺言之噂不申入候所拾五年以來於東寧國姓爺病死仕候存生之刻兼て私儀錦舍方へ國姓爺申聞置候に付相果申候以後錦舍國姓爺遺言を相守り渡爲相續之旨申壹ケ年銀子貳拾貫宛去年迄十三ケ年請取申候御事

一國姓爺相果候刻は錦舍並家來之助爺も一所に厦門こ申所に罷居父病死之儀錦舍義不存候然處國姓爺相果候以後家來助爺企謀叛錦舍を可討果手立致候を錦舍承屆早速助爺を呼付誅罸仕候此儀を助爺弟亥官承付國姓爺之金銀並荷物等盜取船に積助爺一類不殘福州へ落行候助爺存生之刻兼て船手之役を國姓爺申付候故助爺之手代共渡海自由に致　日本之御地へ渡り銀子大分に預り召置申候是以元來國姓爺之銀子にて御座候處に國姓爺をかすめ右之通に隱置申候助爺一類共最初致逃脫候刻助爺家來之者共餘多降參仕候此者共助爺存生之砌り日本へ預ケ置候銀高書付錦舍之方へ差渡申候依然御當地に錦舍手前より乍憚節々使者を奉進候御事

一拾貳年以前に錦舍差渡申候使者蔡政こ申者にて御座候　御奉行所島田久太郎樣より西中町銀吹新七郎所へ被仰付候此蔡政右預銀之御訴訟申上候間宜被爲　聞召出銀子被爲成御渡候者共内を五百貫目叔父七左衛門方へ可相渡之旨錦舍堅申付候之由蔡政私へ申屆候則蔡政之宿右新七郎具に承屆申候御事

一錦舍去年四月に泉州へ罷渡于今居付申候右に致逐電候助爺手代龔三娘去年罷出　日本之御地に大分之銀子國姓爺へ密々にて私共預り召置申候此銀子受取差上可申こ降參仕候大敵之家來共に御座候得共錦舍差赦召仕候御事

一右三娘與官二人之者共去夏御當地へ罷渡候其先に若津仕候錦舎手之船頭々之勝娘ミ其外之船頭共寄合仕預銀被爲成　御渡候共此内五百貫目之銀子叔父七左衞門方へ渡申間敷ミ言合書備を認助爺孫より之書備ミ申并證文差上申候へミ貳人之者ミも方無恙銀子被爲成　御渡候刻銀子請取之證文に右船頭頭之勝娘判形仕差上申候勝娘支配致錦舎手之船に積歸唐仕候御事

一日本之御地にてさへ謀計を企虛言を申上候者共にて候へば泉州錦舎前にて以之外讒言致し候に付錦舎書備を以年々銀子貳貫目宛續申候處に當年は貳貫目銀も遣し不申私前々ゟ借銀大分に御座候然上錦舎ゟ續不致候に付當時妻子之守°不罷成候故不及力家屋敷を沽却仕候此先は稚女子共を引連路頭に立可申仕合無爲方難儀此事に御座候錦舎儀は近年於在國殊外仕合能御座候剩去年は御當地にて大分之銀子請取申候處賤下に申傳候詞を錦舎致承引伯（祖歟）母并父之存思を忘候て壹人之叔父ミ不通に罷成候事淺猿心底にて御座候年憚從　日本之御地渡海も罷成申儀に御座候はゝ私相渡り諸事欝憤を申晴度是耳奉存候誠私身不勝に候へ共錦舎叔父にて御座候に右之躰にて零落致候ては先祖母并兄（祖カ）之名如何敷存候殊に母并國姓爺代々之遺言五百貫目其紛無御座候母儀は泉州にて討死仕候處に伯母并父國姓爺之遺言を錦舎違背仕候へば不奉顧恐御訴訟申上候從御慈悲之御上私及困窮候通被爲　聞召五百貫目之銀子錦舎船頭共へ被爲　仰付被爲下候は私子々孫々迄被爲成　御赦候旨偏難有可奉存上候以上

延寶四年　　　　今町
辰九月　　　　田川七左衞門

進上
兩御奉行所樣

右桂山彩巖所記

文政元年戊寅臘月十九日鈴木猶人寫來

○壽藏

後漢書六十四列傳五十四

趙岐云々。建安六年卒。先自爲壽藏。圖季札子產晏嬰叔向四像居賓位。又自畫其像居主位。皆爲讚云々。

〔信充按此事隸釋附圖にも見へたり〕

註。壽藏。謂冢壙也。稱壽者。取其久遠之意也。猶如壽宮壽器之類云々。

○安土山記

古曰。太山之前難爲山。大海之前難爲水。日域六十六州之一州曰江。江左有山。名曰安土。其山不在高。其名高太山也。蓋夫非山之獨得名。有寬仁大度人居也。劉夢得豈不曰乎。山不在高。有仙則名。水不在深。有龍則靈。夢得之一言。可拜按焉。層轡之峙臨乎上者。自然金城也。滄波之渺莊乎下者。自然湯池也。自天地開以往。雖有此山。一人無識者矣。葛原帝王的的令孫。平清盛二十一代之華胄。前右府君者。禁庭綱紀。武門棟梁。而實大織冠武也。先是。天正四年之春。一見此山。便識萬古城地。開闢洪基。權輿于此矣。力士星馳揚名。巧匠霧列運斤。則不終三年。而其功大成矣。潸慮夫數百丈之石壁。千萬間大廈。何翅力士之力巧匠之巧乎。唯流出府君之一胸襟而已。日機之所明。意匠之所巧。離婁之明。公輸子之巧。不可跂而及者也。峻宇高堂之複碧廬者。極夜摩都史之壯麗兮。直欄橫檻之翬翠崖者。盡秦樓魏闕之華美兮。布地磚礦者。承露內潤。背屋瓦甍者。帶霜外光。西湖月之上玉階者。供府君之夜遊也。南浦雲之飛畫棟者。催府君之朝吟也。瀰々松風之動金鈴。聲呼萬歲山耶。紛々白雪之映珠簾。影含千秋臨耶。權門貴戶之園山鱗然也。遠水鱗[illegible]也。盡是無不丹漆黝堊。寶塔之突兀出林間者。疑繪遠寺。釣艇之ノヘ浮蘆邊者。怪圖歸帆。瀟湘十里風景。嘉陵三百里山水。不可同日語焉。英雄豪傑之擁輔轂。出入于相府。貴介公子之纖錦袖。往還于官途。爭紅華紅葉

色也。億兆民之富而驕者。鐘鳴鼎食之家也。見者反目駭汗。聞者拍手賞嘆矣。江南白鷗懷悳占間。江南梅華被化含笑。信及豚魚。咸知艸木。當此時。市人歌于市。野老抃于野。行者遜路。耕者遜畔。雖堯舜民文武民。不可讓焉。加旃廼土道衰。修神社佛閣之破。續斷橋平嶮路。是故四夷献貢米復焉。八蠻解辮服膺焉。或臂俊鷹。求臣乎其幕下。或上良馬。請將乎其麾下。吁策勳偉矣。凰鳳現瑞。麒麟呈祥者。非今時何時乎。向所謂太山之前難爲山。天下人亦將曰安土山。之前難爲山。野衲雖蓬衡蕞品楞散陋姿。管見此山。豈無感慨乎。卒綴卑詞者八韻。述盛擧之萬乙。伏乞笑覽。

六十扶桑第一山。老松積翠白雲間。宮高大似阿房殿。城險固於函谷關。若不唐虞治天下。必應梵釋出人間。蓬萊三萬里仙境。留與寛仁永保顏。石壁嵯峨三百尺。野僧只恨不窮嶺。玉樓金殿秀雲上。碧瓦朱甍輝日邊。帝釋梵王疑在地。夜摩兜率怪離天。山名安土太平兆。武運先知億萬年。　岐下沙門南化

○煙筩銘

唐堂集〔卷之二十四〕

煙筩銘　清華亭黄之雋石牧

此嘗草食火飛灰之管。盤古以來見者罕。今世耽之逝不返。嗚呼酒有尊飲有盌。

○煙戒

歷驗老壽。無喫煙者。作此自戒。

幼駭所見。折蘆爲筩。捲紙於首。納煙於中。成就火吸。忽若中風。閉睫流涎。謂醉之功。久而盛行。徧種斯草曬葉剉絲。匪甘匪飽。銅竹鏤工。荷囊製巧。纓辮横銜。脂髮斜皺。吾獨違衆。誓不沾牙。嫉如冶葛。〔食之立死。見朝野僉載。又本草經作野葛。即鉤吻。〕屏若顛茄。〔百粤閒有草。結實如小毬。俗名顛茄服之則心狂。見賢奕編。〕有里前輩。饗予褒嘉。不逐流俗。非君子耶。逮三十五。暨陽舟次。歲暮曉寒。擁衾不寐。卯友津

々。曰煖且醉。遽喪其守。索而嘗試。入唇三嚥。啓齒一呼。四肢軟美。八脈敷舒。相遇恨晩。大智若愚。四十餘載。晷刻必需。亦潤文心。亦綿詩力。思之不置。棄之可惜。如惑狐媚。如蠱妖色。一朝覺寤。忍爲殘賊。昔韓尙書。嗜酒與煙。不得已去。二者何先。答曰。去酒。佳話流傳。〔事載分甘餘話〕。曩予附和。今不謂然。咽喉寸膚。食草呑火。非獸非鬼。奚願之朶。熏舌尙可。焚腸殺我。老耄作戒。銘諸座左。〔唐堂集續卷之四〕

○濃茶薄茶之式

〔風爐爐〕濃茶之式

水指茶入飾置　茶盌持〔右ニ持左ノ手添ル也〕出テ据リ左ニテ假座ニ置右ニテ茶入右ヘヨセ左ニテ茶盌取右ヘ持直組合〔爐ノトキハ茶盌左ニテ取右ヲ添又左ニテ組合〕水建ヘ蓋置入柄杓掛左ニテ持出居リ建水膝頭ノ通リヘヲキ左ニテ柄杓取カマヘ蓋ヲキ取小板左ノ角少シ放シ置〔爐ノトキハフタヲキ持廻リ爐フチノ右疊ノヘリヨリ疊ノ目三ツ目ヘ置〕○拔物ノ蓋ヲキハ柄杓左ニテ取少シ上ゲテフタヲキ右ニテ取柄杓ガウヲハヅシコボシヘ掛置持廻リ扱イ定座ヘヲク〕柄杓ニテ引禮△建水少シ出ス〔曲水建ノトキハトヂメ客附ニシテ出此處ニテトヂメヲ壁付ヘ廻ス〕△住居直ス△茶盌右ニテ取左ソヘ持直シ右ニテ向ヘ置〔爐ニテハ左ニテ取右ヘ持向ヘヲク〕△右ニテ茶入取前ヘ置左ニテ押ヱ右ニテ紐トキ引手ヲ仰向ケ左右ニテ茶入右ヘ廻シワナヲ直シ右ニテ押ヘ左ニテ紐引出シ袋ノ口向ヲユルメ手前ヲユルメ左右ノ紐直シ右ニテ上ヨリ取上左ヘウケ持右ニテ袋ノ口向ヲ明ケ手前ヲ明ケ茶入取左ニ袋持居茶入前置袋ノ口延シ返シトンボウ頭右ニシテ〔風爐ト水指ノ間建水ノ先ヘヲク〕△帛左ニテ腰ヨリ取角ヲ二枚重ネ取左ヲ配內ヲ外ニシテ三隅ハライ四隅目ノシ右ノ人サシ指ハナシ角ト角ヲ持居ハラウ〔音アリテヨシ○帛ノ隅ヘ親ユビ又ハ人サシ指ヲ入ルト覺タルハ惡シ〕右上ケ左下ケ左ニテ三ツニタヽミ中ヨリ折〔此時身ノ眞中ヘ持來ル〕右ノ拇先ニテ折又左ノ方ヨリ折右ニ持人サシ指ビヌキヒザノ上ヘ引左ニテ茶入

取フタ向手前トフキ脇ヲ右廻シニ拭フクサ持直シ下ヘ少拭心持ニシテ帛膝ノ上ヘ引茶入水指ノ前左ヘ置「爐ハ爐フチノ左角ト水指トノ間筋違ニ水指ノ方ヘヨセ置○巣ノ有フタノ茶入ハ初袋ヘ入トキ巣ヲ右ニシテ入置始終右ニ成ヤウニ扱爐ハ初ヨリ左ニシテ始終左ニ成ヤウニ扱」帛タヽミ直シ左ノ掌ヘ持茶杓取帛ノ上ヘ持來リ帛ヲ折掛ルトキ茶杓廻スカイ先仰向ニシテ向ヘ一ペン拭茶杓少シスヂカヘ脇ヲ拭又半ニ拭カイ先シカト拭帛口渕ケ茶杓取入ノフタ巣ノナキ方ヘ掛茶筌取ヲキ合、爐風呂共ニ茶入ノ右也」帛右ヘ取トキ向ヘ折返シ水指眞蓋ノ手前ノ方二ツ拭「共蓋ハ不拭」帛取直シ腰ヘ付ル茶巾取水指ノフタヘ置「茶巾三ツニ折右前ニ成夫ヲ眞中ヨリ二ツニ折又二ツニ折又少シ折入置」△茶盌手前ヘヨセ柄杓右ニテ取左ヘウツシ節ノ一寸程ノ所持カマヘ釜ノ柄取柄杓右ヘ持「此時左ノ指節ノ」向一寸ホド先ヘクレバ湯ヲ汲茶盌ヘ入柄杓釜ノフチヘ少スヂカイニ置「引柄杓置柄杓切柄杓ノ三段有何レニテモ○爐ノトキハ湯ヲ入ヒシヤク左ニカマヘ釜ノフタシメル是ヲ中フタト云ナリ」茶筌取茶ワヘン入左ノ手ニテ少シカタムケ茶セントウシ三度「茶セン三度共ニ押ツケ湯ニヒタシ」アトサワ々々ト立手前ヨリ向ヘ廻ヌキ出シ元ノ如ク置合ル茶ワン右ニテ取左ヘ移シ湯コボス右ニテ茶巾取入眞中ノ折ヲ大指ドニシテ取フリカヘ手前ヲ向ニシテフチヘ掛三度廻シナガラ拭茶巾中ヘ入「此トキ眞中ノ折向ニ成」摘ミ左ヲ拭右ノ方中ト拭置右ヘ茶盌持下ニ置茶巾取釜ノ蓋ヘ置「爐ノトキハ水指ノ蓋ヘヲク」茶杓取茶入取蓋ヲ取茶盌ノ右エ置「耳ノ有茶入ナレバ廻シテ茶ヲクム」茶ヲ入ホドキ茶杓ニ付タル茶ヲ茶ワンノ縁ニテハタキ茶杓茶ワンノフチ右ヘヨセ掛ヲキ「耳ノ有茶入此處ニテ初ノ如クナヲス」蓋ヲシテ元ノ座ヘヲキ茶杓取左ソヘ持直シ「持ナヲシ又ハタキタル儘直ニカケテモヨシ」茶入ノ蓋ヘカケ水指ノフタ取左ニテツマミカヘシ右ニ取水指ノ左エ立掛ル△柄杓上ヨリ取左ソヱ持直シ水ヲ釜ヘサシスグニ湯ヲ汲入「爐ハ水ハサヽズスグニ湯ヲクム」少湯ヲ釜ヘ戻シ柄杓元ノゴトク掛ヲク△茶筌取點ス茶セン中ヨリスキ元ノ如

ク置右ニテ茶盌取左ヘウケ呑口廻シ右ニテ出フクササバキタヽミ折目客付ト茶ワンノ方ヱ向ケ出ス△上客茶盌ノ側ハヨリフクサトリ茶ワンノセ本坐茶ワン下ニヲキフクサ折目茶ワンノ方ト手前ヘシテ惣禮有フクサ取茶ワンノセ戴キ飲△主角カケ上客ヘ向居〔爐ニハヒシヤク取釜ノフタシテ杓コボシヘカケル但カウヲハヅスフタヲキ取建水ノ次ヘ置客ヘ眞向ニシテ居〕末坐飲トキ主點ジ前ヘ向柄杓取水指ス歟茶巾シボル歟〔爐ニテハ點ジ前ニ直リ蓋ナキ左ニテ取右ニテ元ノ坐ヘヲキ左ニテ柄杓取カマヘ釜ノフタ取柄杓釜ヘ掛右ニテ茶巾取釜ノフタヘヲキ右ニテ水指ノ蓋取左ニテ取ツマミ水指ノ方ヘ成ヤウニシテ立カケ置〕△帛茶盌カヱラハ帛取折直シ腰ヘ附ル茶ワン右ニテ取呑口手前ニシテ下ニ置惣禮〔中仕舞ノトキ扱物ノフタヲキアツカイテモ扱ナシスルモ也〕△湯一ツ入右ニテ取左ヘウツシコボス右ニテ前ニ置客ヨリ仕廻ノアイサツ有請テ柄杓上ヨリ取持直シ水ヲ汲入茶セン取サハ々々トソヽギ茶ワン左ニテ少シカタムケ茶筌トウシ三度〔初ト違茶セン押ツケズ〕跡サワ々々ト立向ヘ廻茶筌元ノ坐ヘヲキ右ニテ茶盌元左ニテ水建右ニテ下ニ置茶巾入茶セン右ニテ取左ソヘムスビ目ヲ上ニシテ茶ワンヱ入茶杓取建水ノフチ左ニテヲサヘ茶杓ハタヽキ右ノ膝ノ上ヘ手ヲ引左ニテ建少引帛左ニテ腰ヨリ取茶杓持チナガラ初ノ如クサバキ茶杓拭事初ノ通仕廻ニカイ先拭右ノ手少下ヘ廻シ左ノ方ヘ廻シウツムケ茶ワンヘ掛帛ニ茶附タルトキハ建水ノ上ニテ右ノ手ニテハタク帛仕廻腰ヘ附ル〔フクサノ茶ヲハタヽキ帛持ソヘ建水此時引テモヨシ〕茶入取初組合ノ坐ヘ置茶ワン右ニテ取左テソヘ右ニテ元ノ座ヘ組合ル〔爐ハ左ノ手ニテ組合ル〕柄杓上ヨリ取持直シ水ヲ釜ヘサシ柄杓左ニカマヘ釜ノ蓋シメ柄杓引右ニテ水指ノフタヲ取左ニ持右ニテツマミ取フタヲシメル△客ヨリ道具好ム受テ柄杓取左ニテ建水ヘカウヲハヅシウツムケ掛蓋ヲキ右ニテ取左ニテ建水ノ跡ヘ置〔爐ニテハ柄杓タヽミ蓋置持兩器ノ前ヘ向〇袋建水ノ先ニ有トキハ此處ニテ建水ノ次ヘ配ル〕茶ワン右ニテ取左ニテ假座ヘ置〔假ノ座セマキトキハ右ノ手ニ

テ置テモヨシ〕茶入取角掛〔爐ハ客ヘ眞向ニ向フ〕下ニ置帛取サバキ拭事初ノ通帛右ノ膝頭ノ前ヘ置〔爐ハ右ノ膝頭ハヅシ右ヘヲキ〕茶入廻シ巣ヲ客ノ右ニシテ環付通出ス〔爐ハ巣ヲ左ニシテ〕帛取腰ヘ付風爐ヘ向左ニテ茶杓取手前ヘ返シ右ニテ中程ヲ取茶入ノ右ヘ並べ置〔爐ニテハ水指ヘ向テ茶杓取〕袋右ニテトリ口ヲ手前ニシテ底ヲツマミ茶杓ノ次ヘ出ス〔袋トンボウノ方茶杓ヘ向〕柄杓左ニテ取右ヘ持蓋ヲキ左ニテ取右ヘウツシ三指ニテ持左ニテ建水持立左ヨリ三足引左ヘ廻リ入△出テ茶ワン左ニテ取右ニテ持左ソヘ立右ヨリ三足引右ヘ廻ヘ入△出テ右ノ手ヨリ出シ水指持立三足引右ヘ廻入△道具返リタルトキ出テ客ヘ向上ウ計禮袋取底向ヘ折茶杓少シ筋カイニ其上ヘノセ持茶入右ニテ取立入也

附薄茶

濃茶スミ茶盌ソヽギ下ニ置客ヨリ直々薄ノ所望有受テ禮茶盌少シ向ヘ出置立△立テ勝手ヨリ菓子持出上坐ヘスエ入△棗持出スワリ前ニ置帛サバキシテ棗左ニテ取上向手前拭帛少筋違ニ載掌ニテ拭帛ノ手膝ヘ引棗建水ノ脇ニヲキ帛仕廻茶盌引ヨセ湯ヲ入コボシ茶巾取拭茶巾入右ニテ下ニ置茶巾取釜ノ蓋ヘヲキ茶杓取棗取茶ヲ汲入棗元ノ座ヘ置茶杓茶入ヘ掛點ジ出ス客呑内ニ勝手ヘ入烟草盆持出直ニ點前ヘスワリテ客ヘ點出ス此時飾替茶杓客ヨリ茶入好ム好ザルトキハ直ニ飾替取水指ノ右ノフチヘ載茶入ハ手前ヘ取置棗左ニテ上ヨリ取茶入ノ跡ヱヲキ茶杓掛置茶入右ニテ棗ノ跡ヘ置茶盌返リ夫々仕廻事前昔濃茶ノ式ニ有リ

薄茶之式

水指持出置〔風爐ハ右ノ疊ヲ行引手左ヨリ爐ハ眞中ヲ行引手左ヨリ〕棗右茶盌左ニ持出〔疊ヲ行ヿ前ニ同〕棗置茶ワン右ソヘハナシ左ニテ組合〔棚類ハ茶ワン持出假座ニヲキ棗棚ヨリヲロシ茶盌左ニテ取右ニテ置爐ハ左ニテ茶盌ヲク〕柄杓建水持出柄杓左ニカマヘ蓋置右ニテ取小板ノ角ヘヲキ付柄杓引〔爐

ハフタヲキ持右ヘヒザヲヒラキ廻リ置扱モノヽフタヲキハ柄杓左ニテ少上ゲフタヲキ右ニテ取柄杓ガウヲハヅシテ掛ヲキ蓋ヲキ左ノ掌ヘ置廻リヲキ付ル〕茶釜取向ヘ置〔風爐ハ右ノ手爐ハ左ノ手〕右ニテ棗取前ヘヲキ帛腰ヨリ取右ニテ角取左ヘ手配取サバキタヽミ右ニ持棗脇ヨリ取拭置付帛サバキ左ニ持右ニテ茶杓取拭棗ノ上ヘヲキ右ニテ茶セン置帛腰ヘ付茶ワン手前ヘヨセ右ニテ柄杓取左ニカマヘ釜ノ蓋取茶巾釜ノ蓋ヘヲキ柄杓持直シ湯汲入柄杓釜ヘ掛茶筌トウシ三ツ茶ワン右ニテ取左ニ持コボシ右ニテ茶巾取茶ワン三ツ内共拭茶ワン前ニヲキ茶巾取釜ノ蓋ヘヲキ右ニテ茶杓取棗取蓋ヲ取茶ワンノ脇右ノ膝頭ノ方ヘヲキ〔棗ノ外前ヘ取蓋アリ〕茶ヲ汲〔茶ハ向ノ方ノ山ヲ汲〕茶杓ニテ茶ホドキ茶杓ヲハタキ棗フタヲシテ元ノ座ヘ置茶杓元ノ如ク水指ノ蓋右ニテ取右ニテ置爐ハ左ニテ置柄杓取湯半分程入餘リハ釜ヘ返シ柄杓掛茶セン取リ茶點右ニテ茶ワン取左ソヘ持直右ニテ定坐ヘ出△茶盌返リ右ニテ取前ニヲキ湯入スヽギコボス客ヨリ仕廻ノアイサツアリ受テ右ニテ茶盌前ニヲキ柄杓上ヨリ取持直シ水汲入柄杓掛茶セントウシ三ツ略シテ二ツニテモヨシ右ニテ茶盌取左ニテコボシ右ニテ前ニヲキ右ニテ茶巾入ル〔略シテハ水ヲコボシ茶巾取茶盌ヘ入夫ヨリ前ニヲイテモヨシ〕右ニテ茶セン取入茶杓コボシヘハタキ左ニテ建水少シ引左ニテ帛取タヽミ茶杓拭茶ワンヘ掛帛ハタキ〔此處ニテ帛左ニ持ナガラコボシ少引テモヨシ〕右ニテ棗水指ノ前ヘ置茶盌〔凡爐ハ右ニテ取左ソヘハナシ右ニテ組合ル爐ハ右ニテ取左ニテ組合ル〕柄杓上ヨリ取持直シ水ヲ汲釜ヘサシ柄杓左ニカマヘ右ニテ釜ノ蓋シテ右ニテ柄杓引水指ノ蓋ヲスル〔風爐ハ右ニテ取左ニテ持ナヲシ右ニテフタスル爐ハ左ニテ取右ニテスル〕右ニテ柄杓ヲ取リクリコシ左ニテフタヲキ取リ右ヘ持チソヘ〔爐ハ水指ノ方向〕左ニテ建水持チ立左ヨリ足引左ヘ廻リ入出テ兩器〔茶ワン右ニテ取左ヘウツシ棗ヲ右ニテ取又兩手ニテ兩器一所ニ取テモ〕持チ立右ヨリ引右廻リ入△出テ水指引〔右手ヨリ掛ル〕

文政二年〔己卯〕五月六日鍛冶書僧賓來　七十一翁

〇露地の草履

露地の草履手を以て扱ふ事世に不審する所にて毎度咨ふるに言葉なく候とかく疑ひ不解趣に候手に諸の不淨をふれて心に諸の不淨を請すとは神道のこと草也先佗茶の筵席は別世界と心得可申候白心淸淨にして寂寞たる所を白露地といふ此境に遊ぶ人は本來心を具して淨穢の差別なき事を知る何の淨とか說き何の穢とか說かんといへり今時草庵の茶は此意味を摸したるもの也眞似といへども誠心にその功を積時はおのづから白露地に至るべし故に休居士の壁書にも手水の事專ら心頭をすゝぐと有て手を能洗へども口中を能洒げともかゝれず候眞巖和尙羽帚の讚に

茶爐頭上無賓主。拂盡人間名利塵

茶室には人相我相を斷て賓主無二なるをいふ又人情を省き人欲の私を除き去る五塵六慾皆名利の塵也この塵を拂ひ盡して六根淸淨なる時は汚穢も冒す事あたはず日月の大千沙界を照して淨穢を厭はざるにひとし此意を自得せざる時は草履にかぎらず疑ひ多かるべし又茶の風流もうさく樂しみすくなからん

又

道安の書に路次の草履は扇を以て扱ふ事古實也と有考るに利休露地草庵の茶事製作以前の事と相見候然るに道安も古實也と書おかれたるものの歟

きたなしと思ふ心のきたなさよ本何もなきこゝろならずや

丶丶庵　宗無

右己卯初夏應命書寫呈几下

押山安富拜

○江戸金石雜誌〔蜀山人書於浪華米屋町僑居未成書〕

わらはべの玩ぶ難波の希有といふものをみしに此地の寺社市店につきてめづらしき事を書しるせりふるきとしのぶ長き日のすさびに金石の事をはじめとしてひとつふたつ書つく近比江戸淺草のものみやこにのぼりしにみやこ人そこは淺草の雷門の前にすみ給へるやといふ中々とこたふまことや風雷の神には胸乳なしときゝしがいかゞとゝはれて所にはすみ候へどさだかには覺え侍らずとこたへしもいと口おしく老のひが覺へもいとはぬなるべし

享和辛酉水無月廿四日　蜀山

淺草寺の鐘

本堂の前の鐘樓の鐘の銘　武藏國豐島郡千束鄕金龍山淺草寺鐘銘とありて至德四年とありつねにつく鐘は錢塚辨天の前にありて元祿六年牧野備前守成貞二百兩を寄進して時の鐘とせり

上野の鐘

東叡山の鐘は寛永年中に鑄しには土井大炊頭藤原利勝とありて林道春の銘也此鐘は深く藏めてつかず近頃までつきし鐘はわれがねの響ありしを鑄直したり

同大師堂の鐘

大師堂の鐘は願主の名を削りたりまた「大猷院殿ヽヽヽヽ ケヅリアト」尊前とありけづりし名は慈眼大師ともありしかしらずけづりしあと見ぐるし

增上寺の鐘

鐘の乳なし故にいぼなしといふ八ッ七分をつく鐘也鐘のあつさ扇だけあり大につけば芝浦の漁獵なし

とて小音につく也されごそのうなる聲江戶中にひゞく也

石町の鐘

石町の鐘は昔し安宅丸の舟の中にありし鐘を市中に下されしを火災にやけて今は寶永年中に鑄直せし也

法明寺の鐘

雜司谷法明寺の鐘は年號未詳めぐりに算盤升曲尺を鑄つけたり法明寺は威光山と云東鑑の威光山なるべし賴朝の鶴牧田あり

竹之丞寺の鐘

本所六ツ目自照院は二代目市村竹之丞出家して權大僧都賢盛となり開基せし寺也鐘の面背に南無阿彌陀佛南無妙法蓮華經を鑄たり四面に歌舞伎役者幕引木戶番の名をほりつけたり

養福寺の鐘

日暮里補陀山養福寺の鐘の銘にすてがなをほりつけたるもおかしみづからもよく〳〵讀にくかるべきと思ひしにや

鑄二華鯨一工

東長寺の鐘

大久保久能町かめわり坂〔俗名〕の東四谷自證院の西に靈龜山東長寺といふ禪寺あり此鐘の撞木のあたる所に舟のろかいを鑄つけたりいかなる事ぞと住僧にとふに衆生濟度のため也とぞ

深草元政鐘銘

赤坂圓通寺〔法花宗〕の鐘の銘十二支の名を頭にをきて書しは艸山集にみゆ今は燒て惡筆にて法名の中

へ交へてきりつけたり俗悪みるにたへず谷中大乘寺〔法花宗〕の鐘銘かきし事身延紀行にみえたれば行てみしにこれも燒てもとのすがたにあらず

隱元禪師草書の鐘銘

駒込土物店白華山養源寺の鐘は萬治年中の銘にて隱元禪師の草書を双鉤してほれり

惠光比丘の鐘銘

牛込山伏町常敎寺〔淨土眞宗東派〕の鐘銘は寛文年中惠光比丘の銘也惠光比丘は元亨釋書を注せし人也

人見友元の鐘銘

千駄谷寂光寺の鐘銘は貞享年中竹洞野節とあり人見友元の事なり

下河邊行平奉納の金口

建久年中下河邊行平の奉納せし金口(ワニグチ)芝烏森稻荷にあり

信玄の塔

武田信玄の塔といふもの深川海福寺にあり

光孝天皇御陵の石燈籠

麻布廣尾天現寺に光孝天皇御陵の石燈籠といひ傳へしあり

涅槃石

麻布なだれといふ所の一寺に涅槃石あり涅槃の像を彫たり增上寺廿四日御廟の涅槃石影向石は吉岡因幡老年にて妙工を盡したれども平人の見るべきにあらず

夜叉神

靑山長者が丸普陀山長谷寺に夜叉神といへる鬼形の石のたてるありもとは靑山百人町細井文三郎〔九

皐と號す廣澤の子」の庭にありしもの也

松化石

池上本門寺の堂前にあり日顗上人の石をたてゝ松化石としるせり

牛　石

小石川牛天神の側網干坂にあり横に臥して大きなる石也

駒留石

本所駒留橋の道の中にあり

烏　石

品川鈴が森の神社の前にあり白く大きなる石に黑く烏の形ありもとは鷹石とて赤羽橋のわきあるやしきの垣根にありしを烏石山人の此所にうつせしと云

夫婦の石の像

夫は上下をき婦は打かけしたる形の石の像本所中之鄕の石屋のみせの側にありむかしあつらへしものありてとりに來らずと云

市谷の石

市谷田町石屋の黑ぼくの石大きなるが一つ御堀端にありもとは二つありて一つは蜂の巣のごとくなる穴ありしがみえず今一つうれのこりて賣れず或云淺野内匠頭やしきの石也と

駒揚の石

駒が原長谷川久三郎下屋敷の角に細長き石たてり竹を以て籠にして入れ置也これは享保の比駒が原御成の時御目にとまりし故也と云

最明寺の塔

最明寺の石塔は品川海晏寺門内にあり

齋藤別當實盛の塔

橋場法源寺にあり法源寺はもと保元寺と書て古き寺也と云

小町の塔

淺草傳法院の内にあり又水戸公の上屋敷にもあり又飯田町櫻井家〔庄之助〕の庭にもあり小町の石の手水鉢といふものあり

住吉の手水鉢

神田明神本社のうしろに住吉の手水鉢と云者あり昔あるもの園ひの庭に置しが祟ありし故茲におさむ

靈驗石

駒込千駄木に專念寺といふ淨土宗の寺あり地藏堂に靈驗石あり

影向石

瀧の川窟屋辨天の宮にありこれ盛衰記などにある瀧の川松橋といふ所也松橋辨天と云長門本平家物語寫本などに松橋を板橋と書あやまれり

○芝愛宕山毘沙門天使者の式〔白子屋素全所記〕

毎年正月三日晝頃鐘樓之鐘鳴候得ば本堂より出きたる若き男麻上下を着し頭に正月の餝ものさま〳〵を兜の如く着なし大太刀をさし雷木をさし添柄の長き大杓子を右につき僕一人黑もめん布子に釘貫の紋大きく紙にて附是も雷木をさし主從とも顏に紅粉をぬり立いたく酒に醉たるを大勢手を引腰をかゝへ仁王門より男坂を連下る使者は高き足駄をはき僕は素足なれどもけはしき石段中〳〵獨して行がた

ければなるべし
此使者を勤る者は山内の茶屋にてこくより
も本堂にて酒盛あり酔たる上にて立出る顔
つきあまのじやくこも見つへき大まじめ也
やがて別當の玄關に至りつゝ立杓子を敷臺へ
はたこつき聲高らかに物もうこいひ入れば取
次の大勢上下にてごうれこ同音に出むかへば
毘舍門天よりの使者こ申せばいざ／＼御通り
こてよろめくをこもなひ中庭の橋をわたりて
奥座敷を見れば上座に別當圓福寺左右に衆僧
座をつらねみな／＼膳部をひかへ居たり御入
口に杓子をつきたちはだかり大音にて
罷出たる者は毘舍門天の使者也院家役者を
始こして地中の面々長屋の所化ごも勝手諸
役人に至まで古參は六盃新參は九盃おのみ
やれ／＼おのみやらぬに於ては此持たる杓
子で扣き申が返答はなんこでござる
一薦挨拶して古例のごこくいづれもたべます

御使者御苦勞でござるおかへりなされといへば
しからばかへり申
とてもこのごとく玄關にかゝり足駄をはき杓子をつき大勢つき添ひて男坂を本堂へかへり入なり

○江府十組諸問屋（十仲間ト云）

一河岸組	本船町	油問屋並綿
一綿店組	大傳馬町壹丁目二丁目	綿問屋
一表店組	日本橋南壹丁目二丁目四丁目	疊表問屋
一塗物店組	日本橋北壹丁目	塗物問屋
一釘店組	日本橋北詰大門通	釘鐵問屋
一通町組	神田より京橋迄或本石町通油町	小間物問屋其外入組
一内店組	本石町四丁目	絹布問屋
一藥種店組	本町三丁目	藥種問屋
一紙店組	本町四丁目或大傳馬町	紙問屋
一酒店組	南傳馬町呉服町五郎兵衛町瀬戸物町伊勢町	酒問屋

右行事二ケ月宛右之順番に勤る又三極印といふあり島極印綿油表極印疊表櫃極印ぬり物是は上方出船の節廻船之舟足を改め打たる印なり入船之節十仲間より改之
但公邊の役にてはなし仲間役也

右享保二十年卯正月菊岡沾涼作續江戸砂子温故名跡志にあり

文化十酉年五月開板

色油問屋　三人
糸問屋　貳拾壹人
蠟問屋　貳拾人
人參三臓圓問屋　壹人
干鰯魚〆粕魚油問屋　拾五人
（通丁組内店組）小間物諸色問屋　拾貳人
茶問屋　貳拾人
塗物問屋（大傳馬町二番組）　貳拾六人
白粉紅問屋　拾貳人
奥川船積問屋　三拾五人
蕨縄問屋　四拾人
綿打道具問屋　四拾七人
茅町組雛人形手遊問屋　拾四人
紙問屋　四拾七人
鰹節鹽干肴問屋　三拾四人
疊表問屋　三拾七人
煙草問屋　四拾壹人

竹皮問屋　拾壹人
草履問屋　拾人
鍋釜問屋　三拾六人
打物問屋　拾六人
下り糠問屋　拾人
下り傘問屋　百拾三人
繰綿問屋　七拾人
下り蠟燭問屋　貳拾五人
下り酒問屋　三拾八人
釘鐵銅物問屋　六拾五人
下り素麺問屋　拾四人
藥種問屋　貳拾六人
眞綿問屋　三拾三人
丸藤問屋　貳拾壹人
丸合小間物問屋　三拾六人
丸合扇問屋　六人
丸合墨筆問屋　拾八人
同新組問屋　貳拾壹人
同煙管問屋　拾貳人

船具問屋　八人
古手問屋　拾三人
〔江州城州〕名茶問屋　三拾人
呉服問屋　五拾五人
〔大傳馬町組〕薬種問屋　貳拾五人
扇問屋　拾六人
明樽問屋　五拾五人
藍玉問屋　三拾八人
大坂旅人足袋屋　〔旅宿八軒三拾貳人〕
麻苧問屋　七拾軒
〔三拾軒組〕下りらうそく問屋　貳拾貳人
〔生布海苔苧屑切〕仲間　三拾八人
水油問屋　貳拾壹人
水油仲買　八十五人
鹽問屋　四人
下り鹽仲買問屋　貳拾壹人
繪具染草問屋　七拾參人
飛脚問屋　壹人
菱垣廻船問屋　三人

木綿問屋　四拾四人
瀬戸物問屋　三拾六人
線香問屋　五拾九人
雪踏問屋　三拾七人
醤油酢問屋　八拾五人
錫鉛問屋　拾人
菅笠問屋　九人

一親元日記文明五年十一月廿九日條云
　紙問丸九郎三郎光以
　　西國紙商人問屋事祖父孝願以來〔下略〕

一佃島住吉明神境内加茂季鷹作碑云
　元祿七年〔中略〕商人を十組に分ちて云々
　　右甚太夫抄出

○宮城野忍報讎の實說

仙臺より尋參候敵討之事
松平陸奥守樣御家老片倉小十郎殿知行所之內足立村百姓四郎左衞門と申者去る享保三戌年白石と申所にて小十郎殿劍術之師に田邊志摩と申知行千石取候仁在之候に行逢路次之供廻りを破り候とて及口論彼四郎左衞門を志摩打捨被申候此節四郎左衞門に貳人之女子あり姉十一歲妹八歲早速に領內を立退仙臺に致住居罷在候而陸奥守樣劍術之師に瀧本傳八郎殿と申方へ兄弟共に奉公に罷出忍び／＼に劍術を

見習六ヶ年之間劒術致修練候或時女部屋に木刀之聲頻に聞へ申候間傳八郎不審に被存伺見られ候處右之二女劒術稽古仕候樣子に候傳八郎子細を尋被申候得ば報讎之心入之由物語申候に付傳八郎感心不淺此より彌以修行致させ蜜々に祕傳申聞され候由高千石今度御加增二千石瀧本傳八郎名を土佐と改む右之次第は當春陸奥守樣へ彼貳人の女が寸志を遂させ度と御願被申上候に付右敵田邊志摩と御引合仙臺之内白鳥大明神の社前宮の叶と申處に矢來を結ひ當卯之三月双方立合勝負被仰付候仙臺御家中衆警固撿分在之候兄弟志摩と數刻打合貳人替る〳〵相戰候て無程志摩を袈裟切に切付申候姉走り懸り留めをさし申候殿樣御機嫌不斜此女子共家中之娵に可給と被仰出候處二女共に堅く御辭退申上候て御請を不申父之敵志摩を打候事元より罪不遁候願は如何樣共御仕置に被仰付被下候樣に申上候得ば猶以皆々感心之上瀧本氏二女に向ひ委細樣子を申聞候殊に太守之御意を違背可申にあらず某も時に有人たり劒術之指南之恩彼是以て我申義そむくべからずと被申候得ば漸了簡に隨ひ納得仕候依之御家老高三万石伊達安房守へ姉妹を引取候て當年十六歳高不知大小路權九郎殿妹娘を引取候て手疵養生被仰付候當年十三歳〔月堂見聞錄〕

○按是世所謂宮城野忍の事なるべし此説事實なれば井上蘭臺の姉妹復讎の文は虛説ならん

○草履打の實說

（イニ享保九年甲辰四月三日トアリ）三月廿七日松平周防守殿奥方に被召仕候御局澤野と申候者中老に瀧野と申者（側女みちイ）少無調法在之候に付御前にて瀧野事每度無調法不屆者杯と殊之外に叱候故瀧野はあやまり居申候て何事もだまり居申候處に御前御申被成候は澤野しかり樣あまりつよし兩人共に先ヅ下り候樣に御申被成候瀧野事淚ぐみ兩人共に直に部屋へさがり候て瀧野召仕申候下女山路と申者に瀧野申付候は此文を母樣へ持て參り候樣に迚相

渡申候山路受取御門外迄出申候得ばいつも御文は文箱に入被遣候に何とも内之樣子不心得候故其儘御文を御門外にてひらき見申候得ば伴之樣子書立一ぶんたちかたき間御前樣にも被申上候故自害を致し可申候御いとまごひの文のよし書しるし在之候故山路ぞんじ候は此躰ならば最早自害可被致ぞんじ候とて先きへは行ず其儘まへの部屋へ返り見申候へば屏風を立て其內に自害をいたし死して居被申候故其前に壹尺貳寸計之脇指在之其儘血をもぬぐひ鞘へおさめ死骸をばふとんにて包み扨澤野殿へ參り瀧野事ちと御目にかゝり度事御座候間御出被下候樣被申候參上可申筈に候へ共ちと氣にても惡敷臥居申候と何心なく申候故直につれだち參候處を山路ふところより前の脇指取出し主のかたきをのがさじと澤野が腹へ押立胸先へさし背まて通し殺申候周防守殿右之段御聞被遊女には珍らしき事と御稱美被遊瀧野の母へ被仰付山路をば娘に致し可申候向後何方へも奉公には出し申間敷候かたづき申候時は可申出候望之通りに支度をも被成可被下樣に被仰付候澤野年三十八（六十イ）瀧野（みち）年廿三（廿一歲イ）山路（おみち召日おさつ）十四歲（廿四歲イ）右之趣あまり珍しき事故書付見せ申候以上〔月堂見聞錄〕

此事又有一說異同已載卷五十一可併見

○黃朝顏の事

石車序

小車の錦かけまくもかたじけなしや神國のかたちこそ成るはじめまことの心を生れ付るは是本朝の常也、ここに時なる都を萬世の鑑と見れば梢の花ぶさまでも同じからず、人なを人なる中に人屑ありて此春の物見車として俳諧歌仙の一卷を作り、諸國の點者二十五人に付墨を願ひうけて其身の樂しみにせし事にはあらずして、先達の非をあらはし頭書するといへども道理に叶ふ所なし、已俳魔の大惡人也そも〳〵發句を五文字なしに拵へ京都の宗匠に此上を置せける

槿に黃あり白き有　　似船
末の世や槿に黃あり白き有　　常牧
僧いかにあさがほに黃有白き有　　我黑
時世かな槿に黃あり白き有　　晚山
蝕の夜のあさがほに黃有白き有　　如泉
當分五もじ置かね申候
槿に黃なるは稀なり　　言水
云遣し侍れどいかなる心にや其いらへなかりし　　方山

此句の心は淮南子を用て作れるなるべしされど淮南子に所謂日及は扶桑也木槿には黃なる物なし況や扶桑をあさがほと覺へ違へし能々此圖を見てしるべし但又此方より助過て淮南子いまだ夢にも見ず槿に黃なるなきゆへに作れるかしらず此類の扶桑に黃なるもなきにあらず汝が云所閻天の礫ひとつも當るべからず孔夫子子貢が能方(タクラブル)ヽ人事もいましめ給ふ汝人の過を揚んよりは已が過を揚べからず

曲江對雨　　杜工部（杜氏名甫字子美）

城上春雲覆苑墻　江亭晚色靜年芳
林花著雨臙脂（濕）　水荇牽風翠帶長
龍武新軍深駐輦　芙蓉別殿謾焚香
何時詔此金錢會　暫醉佳人錦瑟傍

東坡作潤　山谷作老　少游作嫩　佛印作落

臙脂下字蠹魚。依レ之四客置レ字如レ此。

○牽牛

一名金鈴花名牽牛花。
蔓名狗耳草盆甑草。

本艸綱目。時珍曰。近人隱其名爲黑丑。白者爲白丑。蓋以丑屬牛也。金鈴象子形。盆甑狗耳象葉形。云云。集解。恭曰。此花似旋花。作碧色不黃。亦不似稨豆。宋奭曰。花朶如鼓子花。作碧色。日出開。日西萎。云云。今按。子有黑白。花有紅碧白。無黃者也。

○木槿又作木堇。和名蓋說其音。

一名日及。又曰藩籬草玉蒸。
花名槿花。蕣花。蕣英。花奴。
詩曰。顏如蕣花。即是也。

本艸綱目。時珍曰。此花朝開暮落。故名日及。曰槿。曰蕣。猶槿榮一瞬之義也。

爾雅曰。椵木槿。櫬木槿。郭璞註曰。別二名也。或白曰椵赤曰櫬。齊魯謂之玉蒸。言其美而多也。

今按。花有赤白二種。

○扶桑(フサウ)

一名朱槿。莊子曰。烝朱槿。即是也。又曰赤槿日及。

本艸綱目。時珍曰。扶桑産南方。乃木槿別種。二枝柯柔弱葉。深緑微濇如桑。其花有紅黄白三色。紅者尤貴。呼爲朱槿。云々。

今按。淮南子曰。黄白者。即是也。

今度物見車の作者同じく頭書せし兩人徒骨折(ムダボネ)られしほうびに何がな進上申べしと點者衆所々にて内談あそばしけれどもいまだ花榴柘火の車鐵璫鋲車も出ざれば爰に千人持の石車を俳諧まことの道に引掛是に和歌三神も乘移り給ひ物見車を跡へも先へもやらず落花微塵に打くだきぬ又特牛に引つゞきて竹の根鞭を出すとや、時に新鍬といふ題號の書物にも其根鞭をかちかへし塵も灰も残らぬ墓原となすべし先此度は其方手もりのけかとも音信申中にも競駈の鹿を百草の事としつた貌に頭書せしかたへ物覺への悪敷藥喰のために是を遣しける

點者中

物見車作者
同頭書人
參

進上物目錄

第一

○月の科の紙鳶
俳諧の道理をしらず
句病をいたす事

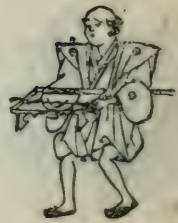
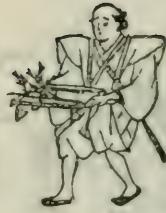
第二

○青い事云菜の花
正花草花の二花に
分る句作をしらざる事

第三

○無理な節付る竹杖
根の字うち越に
すこしも
通はぬ事

第四

○住居譽そこないの釣簾
をさないの正字さへ
しらさる事

第五

○舞臺の烏帽子西目
同じ草の舞臺
沙汰を種々の異こ
いふ事

第六

○根鞭でたゝく馬廻り
打越の子細なきは
大津の六藏も
しる事

第七

○口かしこくいふ口へ此轡
轡こいふ根元をしらず
人倫に覺たる事

第八

○競駈の鹿を一匹
きそひかりの鹿の角
蜂のさしたこゝ
しらざる事

第九
○笑ひ草の百草一荷
　競駈を百草こしつた
　　顔をいたす事
第十
○見る眺望の詩歌の書物
　愚眼にして諸書を
　　見ぬ者の
　　　淺間敷事
元祿四辛未歳中秋

難波
　松魂軒

文政三年庚辰正月廿三日寫竟山口乘坤十二歳

增訂一話一言卷四十二終

増訂 一話一言 卷四十三

○貝原元端同篤信書簡寫 元端三通 篤信五通

多年絶書信御安否承度奉存候不相易大坂に御安居被成遠近之學徒來會愈衆盛に御座候哉又時々東都へ御越被成候而幕下之多士御教導被遊候哉承度候野夫今年六十八歳猶令存命候得共精神昏憊見書さへ不仕養生一遍ゝ心得居申候殊更四五年以前博多ゟ在鄕之舊宅に歸住仕學友無御座徒に送殘年候

既生前之再會絶望遺恨不少候二子兄は十二弟は九歳幼年ゝは申ながら學を好申氣質に非是耳衰暮之憂にて御座候

一弟久兵衛事去夏ゟ寡君用事申付于今令在京候久兵衛罷上候時節も不圖解纜故不呈書失本意候

一黑川氏和州之生計猶艱難に御座候哉衆子之內秀才共有之候哉時々音問御座候哉

秦三益醫業愈行れ申候哉

一今度老夫門人根來元方武谷正迪醫學望にて罷上候兩人共に貧士故元方は外科療治共仕生業の助に仕夫にて上國之寓居つゞき見申度ゝの望にて御座候正迪は醫家鮲公家武家に輕き仕官仕居候醫師に成申樣にゝ望申候兩人共に小學四書之字訓少々自見も成申程之文才にて御座候醫術之御傳授尤經學御指

南望申候にて可有御座候奉
賴候正迪事は讀書之師
なこは仕程に御座候彼是に
付貴家に出入之儀御許
容可被下候
一下河邊長流老猶堅固に
御入候哉足下にも萬葉
之御傳授被成候はんこ
奉察候其外萬葉之傳
授を得申衆幾人御座候
哉承度候
一右申候樣に生前之再會
穎も無御座候願は領返
簡候者貴顏拜謁こ可
存候猶期後信候頓首
二月十五日　貝原元端（花押）
五井加介樣
几右

一兩年過候而罷上候刻

舊臘遇凶禍候に付而
可伺にて候恐惶頓首
人日之貴緘切蒙
三月廿五日　貝原元端
慰問不堪哀感候
五井重節樣
几下
足下去年者御病
氣に御座候由柔齋
物語に承千萬無
心元存候如何之惡
瘡に御座候哉不
及申候得共能々御
養生可被入御念候萬
、、、、、、、、、、
座候者醉仙散能御
座候通聖散ヲ先川
後に醉仙散或先醉
仙散後通聖用申候
も不苦こ見へ申候

去年以來以と來と兩入
治申候只厚味色慾
絕申事專一に御座候
能々醫書共御考被成候て大
風にて無御座候共大風こ
御あやまり被成候分は大事
に成申ましく候若大風にて
御座候を餘御療治にて飲
食無所忌憚候者大に
發り可申候食色の守能
仕候へば無不治候可安御心
候次に拙者事右に申入候こ
こく舊臘老父棄世正月
失三歲之一兒、、、、、、
、、、、、一時に到來
仕候御推察可被成候
去秋之折傷も未快
復歩行もかなひ不申候
併座中はあやうく隻
足にてこびありき申程に

成申候黒川氏和州に
被移居候樣に承候如何
御在付候哉又氣の毒
なる事候ゞてにげて
御上り候はぬ樣に時々御警
戒尤に候又拙者共兄弟三人
共に。（居候之本）一々古禮にはかなひ
不申候へ共三年之間不
食葷酒魚肉分に存居候
遠國之内にて田家に
居申候に付て彌廢學禽
獸に近成行申候心事

覃按
寛文五年乙己。益軒
先生三十五歳。十二
月三日。大父君寛齋
君沒于鄕。
是寛文六年三月書簡
也。

五井加介樣　貝原元端

几右

昨日者拜謁多年
之本望相叶申候昨
日面論之樣に大和行
今年猶餘寒にて花
遲可有御座候者先
今夕舟にて入京可仕候
歟但明早奈良へ罷
越和州遊觀仕可然候
哉乍憚御按量奉
賴候ゞかく黒川氏へは
之御狀御調可被下候京
師和州之遊覽仕舞
猶御心靜に得貴意
度候萬々面期頓首

二月廿一日

右貝原元端手書三通

覃按。元端號存齋。
益軒之仲兄也。元祿
八年乙亥十二月十日
卒。七十四歳。

先日者預御狀令拜
見候御無事備陽御下
著可被成候御發騎之
時分は甚取紛踈節之
仕合以使さへ不得御意
候其御地增善政學
術興起之由承不堪
感歎候貴樣今元
御逗留被成分に相究
候や黒川丈も其元
被罷越由候間萬可被仰
合候朱子行狀一冊送
進候甚好書にて朱學
之大意も見へ候勿論
文公之履歷精詳
にのせ申候御熟玩可
被成候頃鄙生等も諸
文ゞ講習仕候鄙生
事も寡君之命に而

歸國仕候當月十八九
日比大坂へ罷下可申候
當冬又江戸へ参可申候
猶以書中可御意候
不及申述隨分御勤
可被成候恐惶不宣
三月三日　貝原柔齋
五井隱庵樣
几右
五□重節樣　貝原柔齋
先日御出之刻致他行
殘憾不少候頃和州
御越可被成樣被仰候いつ
比御下可被成候や其内
得御意度候此狀自家兄
越候間持せ進候又綱鑑
御求可被成由よき貢本
御座候貴面に可申述候
一家兄〻申越候は鮒子久允へ
通鑑廿冊かし置候急に
見申度候間早々下候樣にこ
申候若貴邊になど歸し
置被申候や于今久允へ置
被申候や御存知被候者
可被仰下候久允も丹州〻
歸被申や猶期面叙候不宣
五月廿七日
尙々彌兵衛殿へは些御用も
御座候に幸之　に御座候以上
八尾彌兵衛殿御出可被成
之由御同道被成宵之間
御咄可被成候拙者も只今
は他所へ居申候へとも追付
罷歸可申候待入候以上
十四日　貝原柔齋
五井重節樣
貝原柔齋
五井重節樣　貴報
往時蒙華翰候處
偶令他適不能
遽答候如來諭
久杜絕不任企得候
御閑居御力學之由
多感〻〻鄙生無恙候
一手前病人御座候間
藿香正氣散一兩
貼可賜候切に御煩
碎致察候猶期御
日候不贅
十一日
罷下候以後以書中
不得御意候彌講習御
懈怠御座有間敷こ
珍重存候家督及令
弟御康寧に有可御座こ
目出度奉存候次に拙者事
家累引越候事令遠
慮事御座候間來春
早々罷上萬々可得
御意候正月二日三日
時分出船可仕こ內々便
宜を伺候間不及御招候
心事期貴面候
右貝原篤信手書五通

右貝原元端及篤信二先生贈五井加助持軒翁書簡。而五井氏所藏也。按益軒年譜。仲父〔即先生之仲兄〕回道。後改名玄端。號存齋。明暦元年乙未。先生二十六歲。四月上旬。將入于江戶。於武川河崎旅舍祝髮。號柔齋。蓋欲爲醫也。後更號益軒。正德甲午。八月二十七日卒。歲八十五。五井持軒。以享保六年辛丑閏七月十八日終。享年八十一。

文政三年庚辰夏五月十七日雨中書

○梅雨

李時珍曰。芒種後逢壬。爲出梅。小暑後逢壬。爲入梅。〔本草綱目〕

埤雅曰。閩人以立夏逢庚日。爲入梅。芒種後壬日。爲出梅。

神樞曰。芒種之後逢丙日。爲入梅。小暑之後逢壬日。爲出梅。

碎金錄曰。芒種之後當壬日。爲入梅。夏至之後當庚日。爲出梅。

月令廣義曰。臞仙肘後經芒種逢丙日入黴。小暑逢未出梅。

四時纂要曰。梅熟而雨。曰梅雨。瑣碎錄云。閩人以立夏後逢庚日。爲入梅。芒後逢壬。爲出梅。按。梅雨詩人多用之。而閩人所謂入梅出梅者。乃黴濕之黴。非梅也。〔五雜組〕

香月牛山翁曰老練ノ陰陽師ニ聞リ、半夏生ノ日ヲ以テ梅雨ハ太半トスベシ。半夏生ノ日ノ十五日前ヲ入梅トシ、半夏生ノ日ノ後ノ六日七日ヲ以テ出梅トシ、前後三七日ヲ以テ梅雨中トスベシ、强テ霖雨スルニ限ルベカラズト云リ。

○東海道驛名古所稱

相模川ハ　今ノ馬入ナリ

天中川ハ　遠江今ノ天龍川也

今浦ハ　遠江今ノ見付也
前田ハ　駿河近于今島田
右梅雨ヨリ以下二條聚頭俗韵ノ中ヨリ抄出ス
〇庚辰九月阿蘭陀俄狂言(二通)

此書ノ「一話一言」巻五十四ニ出ヅ　校訂者曰五十四ハ原巻ニシテ本巻三三四頁ニアリ

庚辰九月廿四日於出島興行

阿蘭陀俄芝居狂言仕組大帳

狂言名題
二人獵師湩賣娘(二段續)

劇場狂言外題　二人獵師乳汁賣娘
舞臺は野山の曙の體
趣向は
乳賣娘「べるれつこ」を獵師「ぎりよつこ」といふ者途中にて見初大きに戀慕し我妻にせんとて頻りにくごけごもさらに從はず是は「べるべつこ」最初に申かはせし男あるが故なり此男故にこそさま〲に流浪しかゝる獵師が無理れんぼにもあひしかど終にはもとの戀人と目出度祝言取結ぶことに成りし體(此娘もとは「リツトル」といふ官人の娘にて父と同官たりし「タンケレイト」といふやさ男にそゝのかされて二人とも家出しこゝかしこさまよひしに「タンケイト」其の身の程を後悔し「ベルレツト」をばだましすかして途中に捨置己ひとり立歸りたり「ベルベツト」はそれとはしら

ずまちにまちても來らざればせんかたなくなく／＼たどり行先もなれぬ旅路のはかゆかずやう／＼とあるしづが屋に立よりて身のなりゆきをつゝまず談れば其家人あはれやふびんとなげきをしづめしばし此所に足をとゞめ時節をまてとねんごろに宿したりかくてあだにも暮しがたく今は乳うる賤の女となりて其おちこちをよばはりあるき今日を營む○乳は牛の乳なり彼國人々用る所なりこなた白酒うりあまざけ賣に似たり

狂言役者替名の次第

獵師ぎりよつと　辰新渡筆者　ひつする
同こらす　在留筆者　ひつする
乳汁賣娘べるべつと　筆者　すみつと
りつとると云官人たんけれいと　辰新渡筆者　ひつする
士卒　筆者　ほうゑる
同　船小遣　れいもん
小役

同　すみつこ

同　でうゐるで

初段〔和解〕

獵師「きりよつこ」同じく「こらす」〔此兩人の獵師共先達て熊の皮百「ギユルデン」賣たることはあれごも射ごめしことは一度もなきことなり〕出る、行きがゝりにちゝ賣娘「べるれつこ」に出合ふ、「きりよつこ」娘が顏かたちうるはしさに見これ、ぶゐんりよに近よりてさまぐ\にくごき、大にれんぼす〔此中仲ヶ間「こらす」はづして行く〕娘はふりきりてさらに隨はず、自らはこなた衆の樣なるむさくろしき獵師なごに枕かはすべきものにはあらず、身はかくこそ成りはてたれ、今とてもぬしたちよりは遙に富める事故あり、身を任せよこは思ひもよらぬ事なりこいふ、「きりよつこ」娘に向ひそなたは我ノ\よりはこめる子細ありこは何事ぞ、してノ\其身の寶こするものは如何なるものぞこいへば、娘答て我れが寶は此ちゝもる一つの壺なりこて空うつむいて歌を謠ひをはりて、娘いふ樣、我此壺の中なるちしるを賣其價もて鷄卵を買ひ是をかやさせにはごりこなし卵を產させ、又その卵をかえし數ノ\の鷄こなし、其數匹にはこりをふやし、數多の鳥をあまた賣て羊を買ふ也、又ノ\是を賣ぞ度ノ\斯のごこくかへさするこきはつゐにあまたの金銀をもふかる故に此壺をこそ我寶なりこいひければ、獵師は負じこ聲はげましほざいたりなく\、われこそいかでおこるべき、熊を狩り得て皮を剝取賣るものならば「ギユルデン」〔銀錢の名〕五十枚はそくざに手に入ぞ、又其金をもつておぬしが出任せいふがごこく、かれにこれこをかへノ\して富を得るこごまだゝくうち、なごかは汝におこるべきこのゝしりけれご、娘は是を耳にも入れず、壺をわすれて走り行く〇「きりよつこ」は跡に殘りて唯ひこり歌を

謠ひ居る○かゝる所に仲ケ間「こらす」熊に追れ息を切て走せ來る、「きりよつと」は是を見て大に驚き、あはてふためきあたりの立チ木によぢのぼる、「こらす」身を隱すべき手だてなく、大地にどふと倒れ臥す、熊は追つめ爪にて掻き廻しければ、其苦しさを泣さけび、命は是までなり助てくれよとあてどもなきによばゝれば、熊はそのまゝかけりのく○「きりよつと」此よふすを見木よりそろ〳〵下りて、「こらす」に氣つけ抱き起し、まて〳〵今に仇打せんといそぎ獵犬ひきに行く○「こらす」はやう〳〵心づきあたりの小屋に身を隱す○かくて娘「べるれごつと」は寶と思ひし其壺はこゝに忘れて打破られ、最早渡世も出來ざると歎きの歌を謠ひ來るに、向より彼「きりよつと」がまた來る、よふすを見て身を隱し居る○「きりよつと」は犬を尋て山〳〵谷〳〵森の中をかけあるきし體にて、著物を破り大につかれ、先程殘し置たる手負の仲間「こらす」はいかにと尋ぬれど影さへ見えね其中に、帽子のそこに落散しを見て、扨こそ「こらす」は熊に取れしやと大に驚き打なげき、むざんなれ不便なり、彼れ壹人を殺されて我のみながらひ居るべきや、我もろとも死なんずとあたりの小屋に釘を打ち綱を下げ縊れ死なんと覺悟極めて綱にかゝらんとせし拍子に、小屋はくづれてぐわら〳〵〳〵隱れて居たる「こらす」がそばへぞ落たりけり、何かは知らず「きりよつと」と「こらす」と顏を打合せ、互にあきれて大さわぎの體○娘「べるれつと」物かげより此ありさまを見て「きりよつと」に向ひ、こなた衆は口ほどにもなきひとつの熊も得射とめず、此ざまは何事ぞといふ○「きりよつと」娘に向ひ、そこの見らるゝが如く我れ何事も事を仕損じ運拙き者なり、あはれそもじおのが心に隨ひ我宿の妻となりて幾久くも我をたすけてくれよかしといふ○「べるれつと」はいやとよ自らも寶とせし乳壺を打破れたる不幸の身の上ぞと答ふ○「きりよつと」是をきゝて大に悦びの體をなし、扨〳〵目出度たがひの身の上、そもじはちゝ壺を破り我は熊を皮を損ひたれば、どちらも同じ富家となりしにはあらずやと大にあざけり笑ふ、仲間「こらす」は

傍に居てひたすらに熊の皮を得そこなひしをくゆるの歌を謡ふ、「きりよつこ」も歌を謡ひながらこゝを立出づ○娘「べるれつこ」も何にか歎息の歌を謡ひ居りたる前へに「こらす」立チよりて我仲ケ間「きりよつこ」そもじの不仕合をあざけり笑ふに、何にとてかえす、言葉なかりしやと尋れば、娘がいふ、わらはゝ斯まで運つたなきものなり、何事もたらはぬ事は見捨て預りたし、こなんもこの場をのきて給はれわらは爰にて身の終りをかくごするなりしかく〱とさめ〲と答れば「こらす」はかえす言葉なくして立退く　幕

無言仕方のみの景事の段

扨「べるれつこ」は只壹人嘆息の歌を謡ひ、大になげきつゝ戀人「たんけれいこ」が繪姿を取出し押ひらきて在すがごとく打向ひ、さて〱御まへはつれなき御かたぞ、我は明暮君を思ひて片ときも忘れし日とてはないぞ、いなかくまで我はたりはてし其年月のうさつらさそれをもしらでふりふりすてしはあんまりごうよくそれでもぬしは濟かへなさ、かつぱと臥してなきしづみ、繪像を大地に引のべて、花をあつめてちらしかけ、泣き入りしやうたいなく〱も、その側に倒れふしてぞいたりける、かくて戀人「りつこる」官「たんけれいこ」はさいつ頃「べるれつこ」をひきつれてかけ落チせし我身をくいて、女をば途中に捨てゝ逃のきしを思ひまはせぶ不便なり、かゝる仕なしの在るべき事か、非義無道なる我ふるまひ、そは心もすめやらず、何とぞ彼を尋出し我あやまりを物語りて、宿に引つれ歸らんと、けふといふけふあまたの士卒を引具して「べるれつこ」汝が慕ふ者こゝに在りと、大文字に書たる旗を押たてゝ、鐘太鼓をならして噺子たて、此所に來り方々尋さまよひしに、はからずそこに物の落てあるを取あげ見れば、我過し頃「べるれつこ」に書せ與し我繪姿なり、こはいかにやと大に驚き、心ゆかしき事なりと、そこらあたりを見廻るに、草むらの中に寢入臥たる女あり、よく〱見ればたづね出さんと、我したふ「べる

れつこ」なれば又もや大に仰天し、心もみだれ胸つぶれ、狂氣のごとくとり亂だし、傍に立より起しも得ず、士卒どもに下知をなしたすけ起せと仕かたをなす○かゝる所にさもけだかき老人の獵師「こらす」を先キ立チとし入來り、あたりを見廻し倒れ臥たる「べるれつこ」を引起さんとなしけるを、そこに有合ふ士卒の大勢、なにじやまひろぐて打てかゝる、主人「たんけれいと」も眼をいからして、老人めがけたゞ一つきに突とめんとひしめきて、よく／＼見れば此老人、我戀ふ女のまことのおや、同官たりし「りつこる」なりければ、互に見合はす顏とかほ、しばしあきれて物をも得いはず○娘の「べるれつこ」はかゝるさはぎにやう／＼に、夢かうつゝかまほろしか、たゞ茫然と立て居る○「たんけれいと」は娘が父の其前にひざまづきて、だん／＼これまで身の不埒ゆるしてたべといふ體をなす、娘はやう／＼氣もつきて顏をあげあたりを見廻し、我父のこゝに來りしことをはじめて知り、又「たんけれいと」が在りしを悅び、心そは／＼氣もうき立ッばかり悅びて、「たんけれいと」もろともに父にひれふし、身のあやまりをゆるしたまはれとひたすらわび、何とぞめうとになしてたべといふ體○引連られし獵師「こらす」此體を見大にいかりてさはぎたつ、「たんけれいと」は是をおさへて其怒をなだめ、彼キャツが頭に花の環をかけ劔をあたへて是よりは獵師頭（ヘルドヘール）の官をあたへ、猶又「たんけれいと」をはじめとして娘と士卒のめん／＼も娘か父にひたすらに赦免を乞ひねがゐしに、やう／＼今までの罪をゆるす○（此時士卒二人出づ）「たんけれいと」は娘「べるれつこ」に花の環を與え（又士卒旗を持出づ）其旗には目出度／＼「たんけれいと」と「べるれつこ」の萬歲樂を祝ひ納ると書記せるなり　幕

阿蘭陀俄芝居狂言

庚辰九月廿四日於出島興行

幕圖之次第

左右に書きある所の旗に書たる詩は

出島におゐてわれ一こ狂言の藝を競ひ戯場を構へアポルロー〔狂言の神の名〕に奉納すこいふ義なり

正面の上にある横文字は

命は短く藝は長しこいふ語なり

正面に書きたるは

香盤なり其側に羽翼ある童子の如きものは神の仕はしめにしてアポルローに花を捧る體なり

香盤のママ、にあらすは

和蘭國王の紋なり其紋中に書たるは我れ防がんこいふ語なり

役者名前

ダアモン〔性急者の名〕　新渡筆者阿蘭陀人　ヒツスル

ラフレウル〔ダアモンの家來〕　在留筆者　ヒツスル

フロンテイン〔ダアモノの下人〕　同斷　バアニル

ボルカムプ　金借シ　新渡小役　ライキ

ユリヤ〔ボルカムブノ娘〕　在留筆者　スミツト

ノタアリス　裁判方の書記役　新渡小役　デロイトル

戯題オンゲデユルデイグ〔性急者こいふ義也〕　二段續

舞臺はボルカムプ〔金借シ〕が宅の體也

趣向はダアモン〔性急者の名〕ボルガムプ〔金借シ〕が娘ユリヤと夫婦にならんとてさまざま苦勞して終に目出度婚姻を結ぶなり

ダアモンはボルカムプが宅に宿り居る客也

初段

性急者「ダアモン」つるつると立出て已が下人に打向ひ諸事埒明ぬ者なりと大に叱り、其方此家の娘「ユリヤ」が部屋に行て故障はなきかとひ來れと言付る○下人問に行く○跡に性急者ダアモン只一人返事遲しと相待居る、然るに兼て性急なる者なれば下人が返事の間をも待たず、自分娘「ユリヤ」が部屋に行たるに故障ありと聞てすごすごと元の場に立歸りて立腹の體をなす、其内に娘「ユリヤ」出る○性急者「ダアモン」娘「ユリヤ」を見るよりも思ひの丈を説きくどく、娘「ユリヤ」渠々相手にならず居たりしがつくづくと思ひ廻し、此「ダアモン」こそは此地によき役掛りの親類もあれば、此度我父「ボルカムプ」訴訟の公事に勝利を得るに幸ひ手掛りと思案をかへて程能くあしらい、公事の世話を賴む○性急者「ダアモン」もこれこそ娘「ユリヤ」を我手に入るゝによき方便と思ひ、取敢ず公事の世話をせんと立出むとす○其時娘「ユリヤ」已が父の來るを見て、先々待れよ我父より公事の次第を得と聞其上にて宜御世話を賴入ると云ひつゝ奧へ行く○主「ボルカムプ」出來る、性急者「ダアモン」主に向ひよろこばしき體をして此度其許には御大切の公事あるよし、拙者御世話申べしといふ○主「ボルカムプ」是を聞て大に悅ひ、公事の次第くどくどしく物語○「ダアモン」兼て性急者なれば長口上に氣をいらちむつと立腹す、然れ共こゝこそは大事の場所、押し堪へずは主「ボルカムプ」が氣に障り、我が懇望の緣談の妨にもならんと胸を押へて堪居る○主「ボルカムプ」も心の内には「ダアモン」はさてさて短氣なるものかなと思へども、左あらぬ體にて公事の始終を申演べ、暫くありて訴狀を取に行く○性急者「ダアモン」は只一人待兼し、

家來「ラフレウル」を呼出し、早く主「ボルカムプ」呼來れと言ひ付る〇家來「ラフレウル」主「ボルカムプ」を呼に行〇斯て性急者「ダアモン」は家來「ラフレウル」の歸り來るを又〳〵待かね、下人「フロンテイン」を呼ぶ〇下人「フロンテイン」來りて、性急者「ダアモン」いひ付るを聞けども、餘り氣をあせりていふ故に得と合點せず〇其體を見て性急者「ダアモン」下人を大に打擲しつゝける、性急者「ダアモン」は只一人腹を立て、我が戀人も家來も我性急なる氣質を知りながら、斯振舞ふかと堪へかねて荒れ廻る、然どもかゝる短氣者とはいふものゝ我にも氣長き事も多かりして心付、イヤ〳〵かくしやべりても濟まじ、早く行て公事の世話をせんと書記役「ノタアリス」の方へと出て行、跡に家來の「ラフレウル」歸り來て暫くの間に主人の行衞しれざるゆへこゝかしこと尋行

幕

第二段目

娘「ユリヤ」は父「ボルカムプ」に打向ひ、性急者「ダアモン」の事をよく執成さんとすれども主「ボルカムプ」は彼性急成氣質にて物事を堪へがたき者なるを惡みて、彼が言葉に從はず、只我が敎を胸に納め置べしと娘にいひつゝ一間へ入る、其所に家來「ラフレウル」來て娘「ユリヤ」の側に立寄り、主人「ダアモン」其御許に對面したきとの事也支はなきやと問ふ、娘「ユリヤ」これを聞て先其事は我父に行て怒をなだめ、其上にてとも斯もといゝつゝ娘「ユリヤ」は奧へ入る〇かゝる所に性急者「ダアモン」は家來「ラフレウル」に言ひ付たる使の返事を待兼て自分此所に來り、家來「ラフレウル」に打向ひ娘「ユリヤ」が返事はいかゞぞと問ふ〇娘「ユリヤ」は奧に立退たりと答ふ〇其時性急者「ダアモン」心付き、我望を遂せんには訴訟の事を速に埒明んこそ近道なれと、我が伯父「公事方の役人なり」に此家の主「ボルカムプ」が公事早くよきやうに捌き呉られよ、然れば此家の娘「ユリヤ」容貌も勝れ才智發明なるものなれば、兼て

我懇望すれども彼が公事速に取扱遣しなば我望みも達すべしと餘義なき次第を荒增に心をいらちあせりかへつてせきにせき込み書狀をぞ書おくる○性急者「ダアモン」またも濟やらず、書記役「ノタアリス」をも呼に遣る、書記役「ノタアリス」來る、性急者「ダアモン」書記役「ノタアリス」に打向ひ、此家の主「ボルカムプ」公事早く濟やうによきに計ひべしといふ○書記役「ノタアリス」聞きよく呑込て立歸る、斯て娘「ユリヤ」出來る○性急者「ダアモン」またもや娘「ユリヤ」に向ひ、おもへのたけをときくどく○かゝる所に畫師來る(是は「ダアモン」已が繪像を娘「ユリヤ」に與んとて畫師に賴み置し故なり)畫師は繪像を畫んとするに、性急者「ダアモン」は暫しの間も靜ならず、身をもだへて娘「ユリヤ」をば見廻しをる、此時伯父よりの返書を持來る○性急者「ダアモン」是を披き見て大に悅び、此家の主「ボルカムプ」を呼び來れよと家來「ラフレウル」に言付る、主「ボルカムプ」來る○性急者「ダアモン」主「ボルガムプ」に伯父より來る返書を見する、主「ボルカムプ」是を披見するに、其書中に「ボルカムプ」は容貌も人に勝れ發明なるものゝよし、我におゐても大慶なりと書あるを見大に驚き、かゝる老人の我を容貌よろしきとはいかなる事とてあり合ふ鏡に已が顏を寫し見る(是は最前「ダアモン」より伯父に送りたる書中に「ユリヤ」の容貌も勝れしと書べきを心いらちあやまりて「ボルガムプ」容貌も勝れしと書送るゆへ此返書にも「ボルカムプ」容貌勝れしとなり)○かゝる所に書記役「ノタアリス」來りて、主「ボルカムプ」に書付を渡す、是を見るに「カラヒン」(人名)を相手としたる公事此家の主「ボルカムプ」勝たりと書付たり、主「ボルカムプ」是を見て大に悅び、いかゞして此公事かく速に濟たるやと問ふ○書記役「ノタアリス」祕して言はず○「ボルカムプ」强て問ふ○此時性急者「ダアモン」傍より我こそ汝が公事の勝を取らせし者なりと呼はるにぞ、主「ボルカムプ」是を聞て大ひに驚き感服す、然れども主「ボルカムプ」はとかく娘が緣談はゆるす氣色も見えざれば娘「ユリヤ」は父に打向ひ、かゝる大事の公事なければ勝

チになりしも偏に性急者「ダアモン」のはからい故、是を辭しては義理立ずこ道理を分てひたすらにな
げくにぞ、父「ボルカムプ」も理に伏して幸ひ此座に居合し書記役「ノタアリス」に言付性急者「ダアモ
ン」こ娘「ユリヤ」こ夫婦の契約相違無こ取極書を目出度書しむる幕終

文政四年正月廿七日寫　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　觸　山

○洛陽本性寺沙門了意著書目錄

洛陽本性寺沙門了意（松雲　如儡子　瓢水子）（點かけ候分所藏文政辛巳六月四日書）
一百八町記（五卷　如儡子）
一新語園（十卷）（延寶九年・辛酉洛之本性寺昭儀防桑門釋了意）
一犬子張子（六卷）（元祿六年癸酉二月義端序ニ洛陽本性寺の了意大德は生平の著述甚多し元祿四年
辛未元旦寂すこあり）
一三綱行實（九卷）　　　　　　　　　一源氏雲隱抄（淺井松雲九卷）
一武家根元（三卷）　　　　　　　　　一孝行物語（六卷）
一百人一首首書（二卷）　　　　　　　一清明占記（七卷）
一本朝女鑑（十二卷）　　　　　　　　一いせ物語抒海（十卷）
賞華吟（三卷）　　　　　　　　　　　一はなひ草大全（一卷）
一法花利益（松雲了意十二卷）　　　　一お伽婢子（十三卷）
一可笑記（五卷大字本モアリ）
　同評判（十卷）　同跡追（五卷）
一堪忍記（五卷大字本モアリ）　　　　一連歌初心抄（一卷）

一うき世物語（五卷）　一江戸名所記（七卷）
一鎌倉名所記　一觀經皷吹（卅卷　了意）
一愚迷發心集直談（六卷　本性寺了意）

○板倉周防守判の古文書寫（慶守二年）

覺

一大野主馬子宗室と申もの近江に居候を於江戸訴人出捕候宗母いんせいは主馬女房にて候是又捕候但いんせいは一亂之刻
權現樣命を御たすけ被成候事
一主馬儀にて存命に有之由取沙汰之年比者七十二三せいころは中程の男やせも又はふとりも無之いろ黑なる男にて候間無油斷穿鑿可仕候若隱置訴人有所を於申來者主之儀者不及申其一在所曲事に可致仰付候間此旨無度穿鑿可仕事
一大野道犬子落城以後法華坊主に成談議を說ありき候由申間有所を存候歟又者其在所に於有て者召連可來事郷中吉利支丹宗門此以前のごとく無油斷穿鑿可仕事
右條々油斷仕脇より訴人出候にをゐては曲事に可申付者也
慶安貳年
丑二月八日　周防　印
建仁寺通
清水寺門前
流閑寺門前
大佛通

大佛通柳原
在々在々
庄屋
百姓中

○續群書類從合戰部目錄

續群書類從

合戰部〔自卷第五百八十至六百五十〕

将門純友東西軍記　泰衡征伐物語　承久兵亂記〔上下〕　竹崎五郎繪詞
、船上記　異本伯耆卷　嘉吉物語　、長祿記
應仁亂消息　官地論　長享年後畿內兵亂記　細川政元記
瓦林政頼記　道家祖看記　立入宗繼記　舟岡山軍記
佐久間軍記　柴田合戰記　賤嶽合戰記　惟任退治記
太閤紀州發向記　同四國發向記　同任官記　細川忠興軍功記
大和記　和田系圖裏書　關岡家始末　、勢州軍記
峯軍記　朝日物語　清須合戰記　名古屋合戰記
牛久保記　今川家譜　、今川記　、永亨記
永亨後記　上杉憲實記　、結城合戰繪詞　、湘山星移集
關東合戰記　三師戰略　甲亂記　、武田勝頼滅亡記
依田記　里見代々記　里見九代記　里見軍記
國府臺戰記　高城家記　、土氣古城傳來記　土氣城双廢記

土氣東金兩洒井記　江戸軍記　長倉合戰記　常陽四戰記
水谷蟠龍記　土岐累代記　、兼山記　堂洞軍記
一柳家記　蘆田記　大塔軍記　川中島合戰記
眞田武略記　舘林盛衰記　新田老談記（上中下）　那須記
仙道記　藤葉榮衰記（上中下）
東奥軍記（上中下）　九戸記　最上義光物語　矢島十二頭記
越州軍記（上下）　加越鬪記　丹州三家物語　三刀谷記
播州佐用軍記（上下）　備前文明亂記　妙善寺合戰記　備中兵亂記
毛利記　太田水責記　湯川彦右衛門覺書　三好記（上中下）
、長元物語　、長曾我部元親記（上下）　高橋紹運記（上中下）　宗像軍記
豐後陣聞書　豐後崩聞書　黑田長政記　、藏書ノ印ナリ

○尚書大傳序

漢濟南伏生。著尚書大傳四卷。鄭康成爲之注。案。伏生傳尚書。授同郡張生。及千乘歐陽生。張生授夏侯都尉。都尉授族子始昌。始昌傳族子勝。爲大夏侯。勝傳從兄子建。爲小夏侯。由是今文尚書。有歐陽大小夏侯。三家之學。立於學官。訖東漢末。相傳不絶。及晉永嘉之末。三家並亡。考漢書藝文志。伏生所傳經二十九卷。傳四十一篇。鄭康成序。謂章句之外。別撰大義。劉子政校書。得而上之。其篇次與藝文志合。即今大傳是也。此書元時尚存。前明未聞著錄。昔歎山東大師伏生冠於漢初。康成殿於漢末。而大傳一書。出自兩大儒。此吾鄉第一文獻也。曩留心訪求。近始得之吳中藏書家。雖已殘闕。然五行傳一篇。首尾完具。乃二十一史史志之先河也。三家章句雖亡。而今文之學存此。猶見一斑。爲刊而行之。

隆乾丙子德州盧見曾序

○楊大年祭皇后文（續百川學海）

前輩曾說化□致祭皇后文。楊大年捧讀空紙。無一字。隨自撰曰。惟靈。巫山一朶雲。閬苑一團雪。桃源一枝花。秋空一輪月。豈期雲散雪消花殘月缺。伏惟尙饗。仁廟大喜其才敏給。有壯國體云々。（宋子俞子螢雪叢談）

○高尾發句

きやくの
　間を
はづして
　きく夜
ほとゝぎす
たかを

右前常音坊所藏

○新吉原九郎助稻荷奉納一卷

初午や紋に染ても薄もみぢ　翅中
紫やはつ午山の鎰わらび　湖泉
見よけふのむかし乙女か華衣　湖漣
はつ午に嫁も姑もたつた河　何江
初午は亭主の好に赤の飯　十町
はつ午や先莨蒻の緣むすび　少長
初午や疑ながらいわし雲　三升

はつ午や錢に糞する雞の聲　訥子
初午や草にも寶珠露の臺　路考
きさらぎや行基菩薩の稻荷山　仙魚
湯の花の柳へ散て雫かな　烏久
菜畑や華に曇らば狐いろ　秀扇
はつ午やうたがひながら神の事　超波
初午や大黑舞の飛鳥河　湖十

元文十己春二月

○記夢

玉厓居士讀書香雪園南亭。永晝微倦。擲卷欲眠。偶見一白蝶飛過枕邊。戲咏云。一種風流淡薄妝。曾將妙舞侍東皇。金衣公子烏衣客。輸與君家玉作裳。吟玩數次。遂復就睡。俄而有報黃公玄公來。心中驚訝。且起而迎之。乃黃袍皂衫二道士也。揖居士而言曰。先生作白蝶詩。痛貶吾屬。吾屬雖微。比彼栩々者。尙爲有分。弗堪受此詬辱。特來申訴。願先生爲改一聯。居士荅曰。唐人有尊題格。古今以爲詠物之法。且一時興趣之所寓。亦自不得不爾。非必貴此而賤彼也。二公幸勿見恠。黃袍道士曰。尊題之法。必須權衡。桃李傍他眞是僕。藤蘿攀爾亦非群。芍藥與君爲近侍。芙蓉何處避芳塵。雖則尊松崇牡丹。自是公論。彼桃李以下群芳輩。誰敢枝梧。實非吾屬衙寃之比也。皂衫道士曰。羽毛新刷陶潛菊。喉舌初調叔夜琴。此非黃公萬世之譽乎。大厦已成須慶賀。高門頻入莫憎嫌。僕亦竊以爲榮。彼栩々者果如何。潛彼燕鶯還散亂。偶因人逐入簾幃。一生擾々。乃如此而已。又有何榮譽。而敢出吾屬之上哉。居士又荅曰。君是輕薄子。莫窺君子腸。二君子之不友輕薄子已知之矣。雖然。黃公之過上林。一色羽毛不川猜。豈於其黃者、獨有所容乎。玄公之困東風。金屋春閑

隨蝶化。蓋於其睡者。則無所忌也。况彼淡妝玉裳者。前身合是飛瓊否。猶鬪蜂黄到內家。其有仙緣。亦未可知矣。豈以殊類俄見訶斥焉哉。且夫褒貶之筆。眞可惜芍藥。未妨妃海棠。桃紅李白皆誇好。須得垂楊相發揮。此固有斟酌。蘭茎皆弱植。桃杏総凡姿。平生不喜凡桃李看了梅花睡過春。直是罵詈。而蘭茎桃李之輩。絶無與梅花爭訟之事。欲哭周文歌燕鎬。還輕漢武樂横汾。雖謂歌頌之體。亦未免爲諛言。然而未聞有周漢二帝之靈傲睨立宗。而加罪于作者之説矣。二公幸留意。二道士相顧。欲有再言。檐鐸一響。忽然而覺。但見花影暗淡。夕陽將沈。彷徨書幌。回想夢中事。林下睍睆。梁上呢喃。恍如聞怨責語。不覺悵然久之。遂乃棄前詩。改賦小律一首。幷記之。時文政己卯三月某日也。

○邪流起本〔立川流〕

三寶院權僧正勝覺〔左大臣源俊房息〕勝覺之下仁寬阿闍梨〔勝覺ノ舍弟後改蓮念〕被配流伊豆國爲二渡世一具妻俗人肉食汗穢人等授二其言一爲二弟子一爰武藏國立川云所有二陰陽師一對二仁寬一習二眞言一引入本所學陰陽法邪正混亂內外交雜稱二立川流一構二眞言一流一是邪法濫觴也

仁寬〔蓮念〕兼蓮覺印澄錢覺明下相承道範眞弁惠深覺明相二傳秘密瑜祇一仍彼流不二清淨一方有レ之中院流邪法交龍光院先師源照〔圓定房〕下野被レ流相二傳邪法一此明澄〔尊信房〕賢誓〔觀信房〕勝深〔一心院圓觀房〕次第相承仍彼流邪法交也

其後弘眞僧正〔文觀房〕後醍醐天皇御謀叛之企御座之時分爲二御祈禱一弘眞御信仰之間有二威勢一本雖レ爲二律僧一成二僧正一披二見處々聖教一作二書籍千餘卷一重々大事印信三十餘通付二醍醐流一造レ之其中多借レ名事在レ之無智者見レ之謂密宗最極更非二實説一又行二吒枳尼法一以二咒術一立二効驗一是醍醐憲深僧正之末流也所謂憲深僧正實深僧正覺雅法印憲淳道順々々下有二隆譽僧正弘眞僧正一〔文觀房〕弘眞疎弟子也受レ法不二委細一

邪流血脈

●俊寬阿闍梨〔後名蓮念三寶院勝覺僧正舍弟也有罪過流伊豆國入室弟子文觀房也〕
—弘眞僧正〔名文觀房武州立川人也一義播州之人也立川本願也〕
—兼念法
—覺印〔諸野山邪流書籍多廣之〕
—澄鑁
—覺明〔入室野山通範眞辨惠深〕
—源照〔圓定房高野龍光院住持也中性院流交邪流人也〕
—明證〔澄イ〕
—賢誓〔觀信房〕
—勝深〔一心院圓觀房〕
勸修寺流交邪流人

●良弘
—眞慶阿闍梨〔名天王寺阿闍梨於天王寺墮落〕
　—寶賢僧正〔三寶院〕
　—隆證僧正〔廣澤人理性院〕
—增瑜〔眞慶資子〕
—明玄〔右同〕

此外邪流人多不載之就中於三寶院混亂邪流人者野山印融也
於唐朝者大藏錄並開貞元新定等錄於本朝者八家秘錄野澤兩流之家々目錄之外者何僞經書邪流也更不可
用者也

平野幽村入立川。黃昏氣冷雨將懸。迷雲癡霧今猶暗。因想妖僧邪觀年。

七月五日過立川。此日屢雨。復屢晴。立川。村之名。在武州多摩郡。昔時妖僧仁寬謫伊豆州。與武州立
川之陰陽家者流某相結。情好日密。遂以密家所傳之義。混陰陽之言。豎邪義。日之立川流。後元建間。
妖僧文觀亦據此義。作僞書以欺人。々亦日之立川流。因偶及此事云。

混外野衲題

王子金輪寺主所賦也。今立川村。改作柴崎村。相傳瀧谷金王傳此流云。

○梁田才右衛門花押

○片猷詩

誰稱洛北有高僧。裘馬門外逐不能。羞我鑑與多病懶。羨君金錫易飛騰。腐儒款待蔬葷味。白社風流山一燈。
見說禪栖幽趣好。烟繙雲綮坐憑陵。

蕉中禪師見杜顧喜而賦得陵字　　片猷拜

○唐高駢〔康駢〕

高駢〔唐〕

字千里。懿宗時。事朱叔明。爲司馬。有二鵰並飛。駢曰。我且貴。當中之。一發貫二鵰焉。衆大驚。號落鵰侍御。

康駢〔唐〕

貴池人。篤于自修。善論議。田頵守宣州。聘駢入幕。常左右碩。畫策禦寇。後薦爲戸部郎。遷中書舍人。〔覃云著劇談錄者〕

右万姓統譜

○大治古寫經

三河□□寺殘本大般若〔一卷〕

大般若波羅密多經卷第三百六十九□□

大治二年〔歲次丁未〕五月十一日書了勸進僧明伊

右三河人□□□所贈藏于南畝文庫

○一本菊

一本菊〔三册〕 物語本也無佛齋藤叔藏

國朝書目錄にも不見 文中に

南無釋迦佛ゝ南無妙法蓮華經ゝ云文あり日蓮宗の人の作なるべし

○題野泊圖 菅晉師

安永庚子夏。歸船自三津。夜碇播洋西。南對小豆山。々頭正吐月。金波接遙天。同儕客滿倉。鼾睡頗覺喧。獨吾未就臥。低唱悄倚舷。一客忽起來。揖吾立檣根。相見無佗語。只稱月明妍。揖師進近前。問君何所云。當此淸妙際。得非思一醺。昨辭繆川館。々主餞一尊。我儕皆小戸。

徒爾載將還。願以羞二君。而慰旅懷酸。二人驚且喜。吹火手自濫。不須肴將核。何問醨與醇。閃々杯中月。相勸更（平聲）鯨吞。却恐吹呼聲。攪醒熟寐人。一客又出蓬。莞爾向吾言。公等何爲者。洋中作斯歡。俗子不知月。唯酒嗜所專。願言陪下座。餘瀝得沾脣。儂亦畜微物。聊以比獻芹。便自開行李。魚鮓薫庖間。搭船元可厭。此夕興何繁。事皆出意外。誰能不頽然。三人相枕藉。不省月已殘。今日看此圖。舊境宛目前。題詩記其狀。嗟老顧我身。會宴歡漸減。行遊意亦闌。奇遇不可追。茫々四十年。

○川傍柳三編序

前句の出て來る事久しかりけり／＼と題にもたれし句作りはさらりと柳に流せしよりその川傍の柳陰しばしがほどにしげりあひて一木ふた木とちりばめし四季のながめに赤澤山しゐの木三編こだてに取て多くの人のあいた口にびんとおろせし定連の句々見るもの腮のかきがねをはづしきくものおちつく膀村を宿がへしたるためし多し詩は平仄の四仄のと尿に行よりむづかしく和歌は手爾於葉うちからしなんでもよしにせいのとは連歌は毒立さり嫌ひ俳諧は猜氣なし發句侍る／＼の前書もうるさし今の世にあたりて天神を動かし紀文を感じ相模女の中をやはらげたけきものゝふ淺黄うら心をやはらぎやつこいふうぶ子はふ子にいたるまでいづれか前句をめでざらめやは

ああきらけき初のこし葉月の比四方赤良のみかけ山のふもとにしるす

四方

巴

○長崎土產

長崎土產五卷は大浪子の所藏なり、かりて寫す事半ならずして、大浪子唐より遠き國へゆかれしかば、いま其家に其書ありや。なしやこの外書畵ども多くもたりしがいかゞなりゆきけん、時に文政三年庚辰のとし文月廿八日蜀山人しるす。

長崎土產卷三

長崎丸山太輔日本行十人女郎合

左方

金山　市之允　花かつら　大和　かほる

右方

出羽　小太輔　小むらさき　夜つま　三河

兩判者〔はかたや新右衞門後家老尼入角おすき後家尼〕

一番持

豐後屋五郞兵衞內

左　金山　年二十二

容貌容儀云ばかりなく末世には稀成ものにてたこへていはんかたなし彌生はじめの初櫻の雨をふくんで咲出たるを彼かほばせになずらへみんには猶うるはしく匂ひふかき方はをくれてぞあるべき曉がたの有明の月の山の端ぢかくさし出たるを黛のかゝりに見あはすれば是もなつかしくらうたきすぢはたへてぞおもはるこぼれかゝる雲の鬟丹花の口紅粉ゑもんつき風流に著なし道中のあゆみは奧州しの正

宗の引馬ふむぞはぬるぞこいはんばかりのいきはりいかなるわるざまの一つ買なり共得難じあゆまじき事にぞおもはる白易居が長恨歌にほめし人は文才のかざりにこそこ目に見ねばうたがはし不幸にして此人長崎にてくちはつる事をおもふに見し人心をつくしはてよこの前世の事にか

伊勢屋太右衛門内

右　出羽

年二十二

是もかほばせの色つや立姿のやさしき似たる物なくまだ春あさき柳の糸のはづかにみだれそめたらんにあはゆきうすき朝の風情さそふ戀風あらばきえうかみだれうかこ思ひわづらひたよ〳〵こしたるおもかげ誠に花鳥の色にも音にもこ書しはのぼりての世のぬれぜんさくなれば式部が筆のそだてにこそこいぶかしちよつこ見あはせたる目の內には公平もむねをごり又よこ云し物ごしには辨列も絶死ぞせんちこかろしなご云て四つ七ッ過したる床の內にてわざこもてくづしてひた〳〵こ手足なごもたされたる男に成てはこりがへ有命ならばひこつは爰にて死たくこそあらめ

右出羽方より難じて云金山は立姿少じや〳〵馬也殊一座のうち言葉多てしなたらずわづかの酒もさし引を言たがりてよろづかご〳〵しく少床の內も大やうなるよしいはどしつぽこしたる方をくれて野郎かけ間なごの風義ならんか尤心ゆきたる人にはさも有まじけれごそれにては遊女のつこめこは云がたしはじめはそだてかこ見るに男にほれらるゝ事琥珀にぢりのつくがこごし玉に疵なり

左金山方より陳じて云一座の言葉は時の興によれりかろき一言にも云をくれてならぬ當話有也かゝるわけは長崎の傾城はしらぬ也都て野郎遊女にかぎらず本性つよきものははじめよりたよ〳〵こし

たる事はなし酒にさし引を過すと云ものまぬものゝ評也遊女の盃に無理をいはずば茶碗にて一人のみたる心地やせん床の内大方成と云も第一人による也たとへば初會にも敵のわけ知なれば自と心取れて持行ねばならぬ也又二ツ三ツ迄はいやに思ふ男も其内誠の心ざし見へなばなどか廻らざらん又人にほれ安と云事身のくせなれば人の妻と成てもやむまじとぞ

左金山方より難して云出羽は大やうよはし一座のはじめよりたよ〳〵としなだれまはりて身に威光なしかの事第一すきにて人の望次第のよし又ほうさきもちといの字なり

右出羽かた陳じて大樣よはしと云事わけしらぬ人の判也遊女は第一所によるべき也京江戸大坂は地下に人多く旅人も絶ず長崎はわづかの湊にて殊春夏は旅人もなしつよきを好むは敵の功者ならねばなしかゝる人いかで此浦にあらんや然ば何をたのみにつよくせんや女郎のつよきは敵つよき也後見なくてつよだてをするは藪樂師の病人ゑらびとてかたはらいたし女はなへてやわらかなるよしとこそ光君もをしへ給へ遊女はなをなよやかならねば男になつかしく逢たき心のこらぬ物也子持がかゝの悋氣を見給へいさかひたゝきあひたるとてはやまずよく男の心にそむかずしてあはれなる折々心をつくしあだを恩にて報ずる樣にすれば人岩木ならずして其情をかんじいか成惡性男も終にはやむためし又一義好物との事仰までもなくひかゆるは我損との悟道也といへり

判曰左右の難陳ともにわけ有てきこゆ金山はつよすぎて敵をあなどると聞しに人により初會よりもてなすといへば是全よはみをしらぬにあらず出羽はなべてよはきといへ共第一所の風義をさとりはじめよりよく人を見分てつとめをなすといへば是又よはきにあらず金州尻にてはぬれば羽州ほうさきにてうけながして共に勝負なければよき持成べし

二番

副島九郎左衛門內

左勝　市之丞

年二十六

かほかたちけだかくはだへやわらかにしてあくまで色白し雪はづかしきこは此人より出たる言葉成べし心あだにしてあつぱれ遊女也むかしよりの長崎の大夫の風義此人に殘りて侍る酒などおもしろく打のみ座つきおも〳〵敷床の內上手にて一儀大好物味ひごふもいはれずちこ傾城盛はすぎつれども卯月半の白牡丹のをのが葉かげに咲かくれたる心地してしばめる花の匂ひ殘れるこや申べからんさびしき折こて人にへつらはずにぎやか成こて人をすてず古の褒姒は烽火を見てゑみがほをなし今の市之丞は彼が笑貌に人々思ひをもやすのよし

豐後屋五郎兵衛內

右　小太輔

年二十三

ちこ色くろけれごもよろづあしからず若輩成時は藝などよくこゝのへ取分仕舞など上手めきてよほごはやられしを近年能もなき付物にほだされ末の契に今のつこめあしく折々子さへもたれければよろづうるはしからずけれごも其付物も今はきれたるよし功者にてよく男をかはゆがる人なれば又はやらるべし天運は往て復るこいへば末たのもし

右小太夫方ゟ難じて云市之丞は第一心あだにして無分別者也行末かけて契し中もよしなき者ゝさし水に中切る事多し殊一座の女郎つき合よろしからずいぢわろく酒などのませて女郎をこめつくる事

すきにて姿には似ぬ事ども也

左市之允かた陳じて云く心あだにして分別なきよし遊女の身にはさもあり度也二心なきつよき敵にひかれては天にも上りをのれが心中を立ては地の下にも埋れんこそ時のうきしづみも有て是がためにたはれたる人もうらみすくなかるべきか遊女に分別有こて何ほどの事あらんや又聊の事に中を切こ云も人に心うつりやすきあたぼれゆへなり是もあはぬむかしより敵のゑりをさぐりてもてなさんよりは取掛るおここのためにはうしろやすき事ならずや自餘の女郎をあなごるこ云も常の女のなすわざにあらず又よくもなき傾城のしやべりまはりてさし出過たるも見にくしたゞもをかるまじきか

又小太夫方より難々を申て云其うか〳〵こ心うつりやすき人こなじみては何のおもしろからんや一夜二夜こいへごもいもせの中こ成て家をゆづる子の親こなるも此道也日も幾度の追出しかぶきを見るにもくはしや方の下手にて理のつまらぬは二度見られぬ也いはんや眞事の色をや

又市州方ゟ陳じて云遊女は心あだにしてうつりやすきをよきこ云にはあらず心あだ成ものは必風流にやさしき也彼夕顏木枯のたぐひこそかりの契にはおもしろけれご雨夜のわけしりも云をかれ侍る又あだ成女のもちたる子こてあだ成はなし腹はかり物也近代日本に二三人の大名にも遊女の腹にやごり給ふ人なきにしもあらず罪なき女はかならず幸にあふこきけば是も末たのもしこ云

左市之允方より申て云いで難をいはゞ楊貴妃李夫人にも墨筆つくべし今小太夫にさして難なし色をも香をも

判曰右小太輔方の難も其いはれなきもや〳〵にあらず又左市之允方の陳々に詰開く所尤至極せり且又市之允より小太夫にさして難なきのよし近來神妙也雖無今市州に小太夫をくらべ見んには花のかたはらの大原木のごこしいはんは云にまさるこはかゝるわけ成べし尤左勝たるべし

三番

油屋太右衛門內

左　花かつら　年十五

生さきこもれる藤の花かづらのいことおぼつかなきさまながら今年初て咲出たるに春風ふかく吹落てさこ匂ひたる心地ぞし侍るかゝる人はまごひつゝ敵の手づよく功者なれば末は雲にもはひのぼる物こぞ

渡邊新左衛門內與三兵衛跡

右勝　小むらさき　年十五

伽羅の香を日見の櫻ににほはせし枝珊瑚珠にさかせたらんは物いはす笑はず人をぬらさずのうれへは絕まし此人此時に出て世の末世ならざる事こ長崎の田舍ならぬ事をしりぬ石上古き傾國は和漢共に知たる人なしちかき寛永のはじめ四の二の戀祖よしの野風はかたりはつたゆれご目には見ず七條の朱雀に成ては八千代藤枝よりして今のよしのもろこしに江戶は千こせ勝山をはじめ今己の時の高雄小むらさき難波は大和萬太をさきにして彼戀死の夕霧今の荻野にいたるまでこあればかゝるあふさきるさにいで難つくまじきはなし今此人の上を難じ見んにはいかなるあた敵の巾著切成こも先打ゑまるべくぞおもはれ侍る顏ばせの色つやまみのけだかき髮すぢめでたく物ごしやわらかにして手足は玉をけづれり副ねのなげふしぬれ第一の御好物此人かたちより心なをまさりて一夜逢たる人は家職をわすれ二夜なれたるものは妻子を捨る都て長崎人の內方に申此人十八九に成らんこき若きむすこ殿にかならず見

せたまふな又おやぢにも

左花かづら方より難じて云むらさきは第一よはしいきはりなど云事は咄にもいやがらるゝ也酒のまねば一坐まだるし物よくもかゝねば文のつけとゝけうとし唯打むかふ人にとりつきだきつきて戀しゆかしのぬれをいふより外傾城の諸わけはしらぬ也いつもぢいさまとゝさまのよき慰にてあまりしづか過てみじか夜なごはなし一つにて明なんかときのごく也又紫と云名も心ゆかず江戸の似せにてかはりやすからんかと心もとなしよはきは後をとりするためし多し

右小紫方より陳じて云都てよはきは云はしらぬ人の評也此比ぶらく煩有て氣むづかしくさはがしき人にはあらぬ事あり酒をのまぬと云も是ならんか本より大上戸のね酒の肴にはなす人とはあはぬなり物よくかゝぬといへども誰も十四五にて能書有りやかふろたちならねばよろづおほとかにして行末猶たのもし紫と云名は女彎のせまき心にちよつと云出せしなり是ほごの者はまつかめとよびてもはやるべし

右むらさき方より申て云まだ棚なれぬ藤に花かづらにてなにはのよしあし云にたらず家よろしからねばもし末はさがりふぢにてもあらんやといとをし

判曰藤の花かづらも紫の緣有といへども色のこきうすきをくらべ見んにはなずらふべくことあらず

筑紫にもむらさき生るとよみ給ふ

言葉の末の世には出來物

四番

油屋太右衞門内

左　大和　年二十二

かほかたちさのみよろしきにはあらねど心ざま成ほどよきもの也さゝ打のみ一座わつさりとしてあはぬさきから心やすくにくきすぢなくかりそめの敵もおろそかにせぬりこんもの也

伊勢屋太郎右衛門内

右勝　夜妻

年二十二

是もさのみよからねど心正直を立てよく物に氣をつけかりそめの一座の人もわするゝことなく七いとこまでも文をつかはしてなじむなり同じうそも人よりはあはれにつきなしよわ〳〵としたる俤日影まつ間の朝がほのをのが露さへおもげにくるしちかき比までは唐人行成しをなじみの鬼も渡りこねば折からあつしく里がちにて嚮の情に敵の涙をかげんしてせんじやう常のごとくいたはりしかばこの比よく成て山へかへりをのづから日本行になりしなり

右方申て云日本行に大和の君有といふ事もしらず

左方申て云夜妻はいつの比より唐人行の輪ぬけられ候哉

判曰左右の申條ともに揚銭の軽重なし雖然と大和はさびしき折とて其位をさげずしていまに唐士のかほを見ず夜妻はやまひをかごとにして唐人行をぬくるともに心さしを立ておもひあがりたる所はたとへ唐人行にいか成美女有とも此人々にはなずらふべくもあらずいづれをまさりいづれををとりとせんもしらずしかし伊勢屋は家よくかりそめにもいやしきわけをきらへば是ほどは夜妻かちたるべきか

五番

豐後五郎兵衛内

左　かほる

年十八

かほはさのみよろしからねど立姿ほそりすはりにてごこやらをのづこ遊女めきたり心だて香車にして
しつぽりもの也つこあゆみ出たる所はまだ初秋の花薄のをのが一本穂に出そめたる心地しておもふあ
たりの空なつかしくこゞろの風もつて待がほに下葉にかよふ露の玉章折ふしのいらへなごもおもはく
らしうかきつゞけさらばこ云てのもこか酒にもまだ夜はわかいの江戸ぶしに引こめられ曉の虫の聲は
荻の上風にかけ合てごふもならぬほごあはれにらうたく隣部屋に聞さへ身にしみわすれんこすれごわ
すられずおもひ出じこおもへば猶あやにくにあこに枕に俤に立つゝ戀こ言物の身をせむる事初て此人
にならひ侍るさぞあふたる人は

油屋太右衛門内

右　三河　年二十三

目眉も形もあしからずむかし大坂屋に大和こいへる聞えし女郎につかはれし人にてよろづよき事も見
しもの也わかき折は猶利根利發にして打見るよりいこしき事數まさりしを此家にうつりて後をのれ一
人かはりたるふるまひもならねばをのづこ心ものちをこりせし也けれごも此家にては又此人也功者也
聖さへ時にあはぬもありくやむべからず
右三河方より難じて云かほるは若輩成時はにくき程つよく云べきはりも云うらむべきふしもうらみ
てよろづわつさりこ罪なき心地せしを近年ねぢけまはりて文にてはこかくいへごもあふては何事も
なしかゝる人の異名を文で申こ云也且又諸わけは内またに付たる膏藥のごこくあたゝまりのつよき
方に必付こいへばなさけをしらぬに似たり

左薫方より陳じて去近年つとめのわけあしきよし聊さにはあらず薫は女郎の私女郎也物しる比より
あしきやりてをつけしゆへわづかのくせもやりて女郎のさし引に成て少成こもつよき方に付てあか
らさまの事もをごろ〳〵しくしかりこらせしゆへ打手もはたらかず世人さも云べし又つよきかたに
付こ云も一こせ二こせはやく日本行にせしゆへちこつとめぐるしく先懇の人を取はなさじこせし也
何かこ云こも所にて一人二人のもの也四五盃すごさせてはごふもいはれぬ所有べし
左薫方より申て云三河はあしき所なし功者にさへあるこいへば申難なし
判曰左薫方より陳する所さも有べし三河は功者なれば難なきよし是又神妙也かほるはこしも若くよろ
づ遊女のしよさもさのみをくれたるすぢなく老さきこめては立まさるべくもおもはれ侍るを三河家の
日本行いづれもよろしからねば三河の功者に物して持なごにすべし
右日本行十人五番の女郎合は遊女のほまれ郎の面目且は異國の間にも成べし次に唐人行の中頓て日本
行のあこをつぎてさもあるべきものあら〳〵批判し侍る長崎土産巻三終

増訂一話一言巻四十三終

増訂 一話一言 卷四十四

○古來俠者姓名小傳

元祖 死人小左衛門

淺草鳥越橋にて侍〔十千亭云矢頭藤助兵衛之練者大小神祇組の組市谷念佛坂に住す後湯島に轉居〕後より組留候處脇差を拔候へとも不爲働候所我腹より組留候者之腹迄脇差を突通相果候也

はなれ駒四郎兵衛〔夢野市郎兵衛兄〕

風呂屋の二階よりおり候所を首を被切前へ首下り候を片手にて押へながら相手を切殺し候然共七十迄存命致し候

夢野市郎兵衛

後にふかの茂兵衛と申候公儀より御尋に付相模國へ參り法身いたし祐生と申沙身仕相果候一生上下によらずいか樣成る强き人にても樣殿を不付於大坂丸山と志賀之助相撲之時志賀之助負と申候へば志賀之助江戸にて懇意に仕候に付大脇指をぬきかけ見物の中へ入志賀之助勝相撲と申無理勝にいたし候天下に無隱事に候

西川氏按京傳事跡考志賀之助相撲合手仁王仁右衛門と有之夢野市郎兵衛後見之節也

ごら庄九郎

元祖勘三郎と致口論勘三郎を切殺し其時の町奉行神尾備前守殿名高き役者切殺し候段不便に思召庄九郎淺草はりつけ場にて打首に致仰付候

唐犬組　居首甚兵衛　小八郎兵衛　手くない庄五郎　こぶり八郎兵衛〔小歌うたひ〇長崎通詞の子也〕
右四人日本橋にさらし者罷成候四人共白むく黑羽二重定紋付着いたし御仕置罷成候
唐犬權兵衛
ふだんもみ裏がんぎのすそべり取上蔦なぶりのいたづら者也淺草橋にさらされ打首也
こう犬與兵衛〔後に十右衛門こ申候〕　こう犬三左衛門　こう犬組　おひやら庄左衛門〔棧敷頭彌七父〕
五郎次五郎右衛門　縫箔や平吉
此分は皆無事にて病死
淺草ざる組　ざる八兵衛　ざる源五兵衛　ざる安左衛門〔是は越後樣へ被進御成敗〕　ざる友之助伊兵衛　めくぼ傳兵衛
右之分ざる組也
和泉長太夫〔和泉長太夫惣領〕
木挽町芝居にて人を切殺御仕置罷成候
木挽町五丁目和泉太夫悴半右衛門天和三亥年閏五月廿一日に入牢同十一月十八日御赦免別人歟猶尋ぬべし
辻切之部　つぢの勘助　きさい五郎兵衛　せうき半兵衛　こぶ市右衛門〔松五郎父〕　扇や與平次
くそつぼ五郎右衛門〔是は十月中旬にふきや町にて晝被切相果候〕　佛師庄左衛門　かみこ市郎兵衛
赤銅藤兵衛
右之分辻切に逢候
つばや源之丞

兄勝之丞兩人共に男立境町に罷有弟源之丞大門口の疊やへ白晝に切込御仕置罷成候

脇差刀上ヶ物師宇平次

大屋五郎兵衞〔尺八の銘人〕こ兄弟之樣仕候處宇平次家にて五郎兵衞切殺白金町の土手へ捨久しく不顯後に顯れ御仕置罷成候

前髮三左衞門

若衆に十三郎こ申を持候處十三郎男だてにてふきや町の大屋一兵衞こ申者を芝居の道にて夜切殺立退候三左衞門兄分故久々牢舍也〔大火事の節御免〕

やわた風呂の五郎兵衞

後に玄朴こ申醫者に成候段々男立いたし江戸を走り赤坂へ遁宿の亭主を切殺越後へにげ喜庵こ申後に江戸へ來る

きれの彌兵衞

首まげきれの彌兵衞〔品川にてうんさんこ申候〕

みけん小左衞門　　こもの十藏〔團十郎父つら內疵〕

赤坂鍔や兵左衞門〔大いたづら右腕に疵だらけ山手に旗本中迄かくれなし〕

赤坂利賓院名代の男立〔山伏也〕　　須田太郎兵衞

こち木六右衞門　　ほごかい勘兵衞〔浪人〕

ひたい次郎　　あほう惣左衞門〔無賴の男〕

がつほう利左衞門　　たにの武兵衞

今井源五

此分歴々筋能男也

赤坂あこぶく利兵衛〔後一二と名付〕　はなさぶ

一時清兵衛〔品川之者〕　小五郎兵衛〔梅澤の者〕

出來星甚五兵衛〔護國寺にて吉左衛門と申候〕

野良三十郎〔仙臺之者木工右衛門と申候〕　田中十郎右衛門

百助と申能き若衆松平相模殿にて祐閑と于今罷在候大男立長脇さし度々喧嘩切合人形遣ひ三郎兵衛と申者と大げんくわいたし候

仙臺四郎兵衛〔日本左衛門と申候小あみ町にて男立也〕

かみなり市右衛門　度々の伊兵衛〔後に東庵と申いしやに相成候〕

ふとの藤兵衛　上州吉兵衛

そうけい太郎兵衛〔神田の男後に三郎右衛門〕

やつこ次兵衛〔江戸追放ふか川に住す〕　うでの庄次郎〔ひたいに惡の字金印有渡邊大隅へ被遣〕

天神三四郎〔背中に八刀大きずあり〕　生付與右衛門

はすつは吉兵衛〔浪人〕　馬場七郎兵衛

在郷久兵衛　くはこう長左衛門

くはこう五郎右衛門〔小船町〕　鑓や金左衛門

犬金左衛門〔白かべ町〕　鑓や金十郎

眞木屋市十郎　逢摩小左衛門

逢摩伊右衛門　同小右衛門〔三人兄弟也〕

會津平右衛門
油や六之助〔半左衛門弟分也〕
跡見ず五兵衛
彌兵衛〔七左衛門弟後に酒道と申す〕
革や角左衛門
市郎兵衛〔善兵衛弟〕
小腕利右衛門
餅や加兵衛
おくわんか治兵衛
みかん五郎兵衛
くじら伊兵衛
おそまき十兵衛〔團十郎しうと〕
あげ足二郎左衛門
弟次郎次〔次郎弟〕
はけの庄左衛門〔浪人〕
こぶの長三
おと丸清三
木戸與五右衛門
柏屋庄五郎

澁かみ半左衛門
雨がへ五郎兵衛
あつみ七左衛門
ときや瀬兵衛
大宮善兵衛
唐人五右衛門
まさる庄二郎
すねはぎ平右衛門
みかん庄兵衛
荒五郎茂兵衛
竹馬三左衛門
大敎院〔田所町〕
わらやの次郎
のでの片志喜三郎
まむし十郎右衛門
だらの六兵衛
金時半兵衛
耳半七
ぬつくり四郎兵衛

古着佐次兵衛
木面八郎左衛門
はげの四兵衛
前髪傳三
そう〳〵小兵衛
矢倉八郎兵衛
大渡し八郎右衛門
はだか八兵衛
米舂十兵衛
馬の庄兵衛
手この金兵衛
くづう與左衛門
めつきの利兵衛

かめんぼう平左衛門
よこの利兵衛
白柄作右衛門
糸びん庄右衛門
馬道具屋や久兵衛
あばの庄左衛門〔後に船橋長左衛門と申陸奥殿臺所頭に相成候〕
小さらし佐兵衛〔浪人後御免〕
こうざる五郎作〔丹波こ云女郎を戀女房に〕
かんばん喜兵衛〔野口甚八事也〕
らつひ半左衛門
紺屋三左衛門〔熊谷の者也〕
まめがに伊兵衛

右之分〆百三十人

武士

鬮屋孫之丞
ふだん頭より口元迄頭巾夏冬なしにかぶる頭に大疵大腫物見苦候に付頭巾かぶり通し異名をナマこ由候八丁堀與力に鬮屋名字あり一家也

鈴木石心

異名せがい坊と申候御臺所頭鈴木八郎兵衛喜左衛門弟一生男立也
増山主水
　異名虫やつこと申候彈正の弟也
大また筧與三兵衛
　大いたづら者吉原をころ付ケ馬にてかけを乘候人也
小また堀又右衛門
　牢人手前として三浦法順所の山の井といふ太夫をあげや久右衛門方にて正月中仕廻歸るさに正月四日大門口にて大勢待請切殺相手不知
鵜飼新助
　能男士手にて大喧嘩何事なく仕廻候ちりやく院甥是に住す後に被召出す八物切十郎右衛門と申候火之番仕候
　西川權按鵜飼十郎右衛門供養塔傳通院大佛前に有之
水野十郎左衛門〔知行三千石〕
　吉原より歸り三浦小二郎同道にて上臈の小袖下に着しいにしへ傳內東やへ被參候大あばれにてあげ幕切て落しさま〴〵六方上へ聞候其上法順內小わたと云上臈つれて走り段々不屆御吟味にて松平淡路殿にて切腹被仰付
　武備睫に云水野十郎左衛門は水野出雲守重仲の長子也
　御日記に云寛文四年三月廿六日〔己巳雨〕水野十郎左衛門不作法之由達上聞被宥死罪一等松平阿波守へ御預ヶ同廿七日〔庚寅晴〕重て不作法之義瑣碎に被爲聞今日切腹被仰付〔委くは巻十八に抄出

すべし」

三浦小次郎

吉や組の頭也され共申分立て牢人被致孫左衛門と申病死す

武備睫に云く三浦小二郎は大御番なりしが後に御納戸役と皮十郎左衛門より手上のものにて異名を吉やこいふ赤坂祭禮の時あばれけるを紀伊大納言賴宣卿御覽有て御老中へ被逹ける故父小左衛門へ御預ケ被仰付けり

横井源太左衛門

御先手吉や組異名を五やと申候

平林十郎左衛門

よしや組御成敗也

相馬小次郎

よしや組大上戸酒の肴にたばこを喰候

ふじ太郎兵衛

旗本大ごもり故引込ゆかうと申在鄕にて人切殺我も死す

小林次郎兵衛

吉や組土手にてけんくわにげ候故足は小ばやしと申候御成敗なり

高木仁左衛門

吉や組大小柄頭におけぞこと申拵出しふだん鐵棒を突土手にて喧嘩死す

及聞秘錄云寛永年中御湯殿役ヲ勤タル高木善宗ト云御坊主流刑セラル扱善宗兄弟久々八丈島ニア

リテ生レタル子其名ヲ仁左衛門ト云成人ノ後密ニ往來舟ヲ憑テ江戸へ出シガ其比江戸ニ時花シ男立ヲ見ナラヒ入ニ彼仲間ニ上野花ザカリノ節大ワキザシヲヌキ一ツノ幕ノ内へ入テアバレ人ヲ追散シ直ニ新吉原へ赴キケルニ水野十郎左衛門ガ同類三十人計カケ出左右ヨリ鎗長刀ニテツキカヽル高木モ二尺五寸ノ大脇差ニテ防キ戦ヒケルガ深手負弱リタル所ヲ鎗五六本ニテ突止タリ云々又池ノ端ニテ御旗本衆兩人鍔店へ上リ鍔ヲ見居候内小坊主外ニ立居シアタマへ小便ヲシテ通リ扨モヨキ小便壺哉ト云テ打過シヿアリ

柴山彌惣左衛門

大小の神祇組頭がんぎ染の紅裏にてふだん六方御成敗也

幡随院長兵衛

能男也花房大膳殿歩行之者六方故牢人短き相口の脇指に大刀さしあくたれ者此時分皆相口に大刀はやり候三井市十郎殿へ呼大勢にて切殺候

及聞秘錄ニハ「幡随院ノ弟也ト云水野十郎左衛門宅ニテ切殺ストアリ」玉滴隠見ニモ亦同

小笠原彌一右衛門

石谷將監殿與力能男にて是も長刀に相口をさし淺黄木綿のぬのこぶごう唐草をちらし其上にはかま着し風呂や中を六方相與力谷彌五兵衛をふるまひに呼先にて口論にて彌五兵衛切殺し内之者不出候內に神妙に宿へ歸り此段將監殿へ申上るたすけ被申度思召色々被致候へ共相手相果候故十日ほど過候て御成敗也父小笠原金左衛門元來歴々の仁也

岩間八兵衛

旗本にて大ばくち打淺草袋町に住すふだん武士町人集り博奕うたせ御詮議にて御仕置也

平岡八
甲州代官の弟也法花宗善立寺の甥異名をめうはちと申候
中川八郎左衛門
女郎あまた請出し公儀の引負四萬兩餘靑山下野殿へ父子御預御成敗
梶川甚五左衛門
吉原狂ひばくち打にて大島へ流人後に御免岡利齋と申候
雲のたへま
松平越前殿相撲取大六方御普請奉行仕よしわらにて成敗也
水野彌太夫
松浦肥前殿にて三百石取り古今不双の男也江戶大火事の時分施行奉行の時ばくち牢人仕金時半兵衛
方にて死去小山治兵衛も久しく置候由大小鐔なごさびも不付所持致候由
小笠原十郎左衛門
父元心弟大學能書也武士作法口上男ぶり無殘所玉の井と云太夫上﨟女房にいたし又女房一人さし置
一生伊達にてくらし吉原にて赤井半右衛門と申旗本と大口論いたし一日上﨟みせへ不出候に付江戶
より夢野茂兵衛來り吉や組廿人ほご吉原にならび居候て中へ來り茂兵衛扱にて事濟候
靑木淸兵衛
甲斐庄飛驒守の與力六方者ふだん吉原に遊ぶ夫故牢人いたし白井小庵と申あべ川町に住す後に公儀
より御尋事有之乘物にのせ大勢にてつれ行候處に途中にて乘物けやぶり大勢らうぜき仕其咎重く獄
門に成候

齋田仁左衞門
　松平越中殿浪人六方者兵法遣ひ
須原六郎左衞門
　大橋流の手書男ぶりおかしく狂言にもまね候由
六之丞
　淺草に罷居候牢人つらの内に大疵有繪の上手天氣能にもげたをはき申候故げた牢人こ申候
神田かげまさ七郎兵衞
　六方ばくち打後に鶴姫樣御臺所頭に成る
伊藤左太夫
　牢人立治ぶしの根元角町松風こ云女郎を女房にする
小川庄左衞門
　伊藤道喜子道林こ申候六方吉原狂ひ計いたし勘當元俗仕雁やおふうこ申を女房にして油町に居源氏の講釋いたす
五十嵐半助
　ばくち打追放後御免又兵衞こ申候隱なき牢人也
友野伊兵衞〔後に彌五左衞門こ申す〕
佐々木分清
　大六方者公儀目いしや
下坂市之丞

刀鍛冶大六方者されども何事なく死す

赤井半右衛門

吉や組大博ち打吉原にて小笠原十郎左衛門と大喧嘩あり

前場久三郎

六方者三味せん上手也

川村十兵衛

異名だるま十兵衛と申候小山治兵衛方にも久敷罷後に竹之丞幼年に付後見仕本町十二屋と申呉服や竹之丞金元いたし候物前に成り金借し可申と約束仕後いやと申候十兵衛立腹いたし我腹へ脇指少々突込候へば驚金子出し候後に大坂へ登り九郎右衛門座の手代になり大坂にて知畧牢人と異名付候案のごとく肥前勘三郎繁昌の時節に下り頭取七郎右衛門方に罷在大坂九郎右衛門座一年下し勘三郎兩座一ツに致し候はど珍敷別て繁昌可仕と申合七郎右門衛つれ候て登り色々手に取候樣に相談極めかたき證文いたさせ七郎右衛門下り又九郎一巻川原崎權之助皆々さし置不申芝居大くひろげ大坂に相待候へ共一人も下し不申大坂にて芝居へかし申候金元こだはり申と申來二百兩爲登申候五百兩爲登候樣にと申來り此方霜月中時分迄芝居不仕其内又九郎堺町權之助木挽町芝居取立跡へも先へも不參七郎右衛門は大坂へ登り十兵衛へ叱し可申と相極申候勘三郎金元共金何ほど出し可申とて役者仲間の金子故金千兩爲登（審カ）候處に名人の瀧井山三郎始其外上手の役者一人も下し不申大坂にてきゝ不申候作や九兵衛小舞たつ阿五九郎是を高切米に付立下し申候其一年より勘三郎家迄賣申候九郎右衛門は江戸より爲登候金子にて大坂大分の借金拂心のまゝに役者抱芝居仕候大坂と江戸の義に候へば公事沙汰に不及候是だるま十兵衛智畧也

白山一學　富永傳右衛門　山嵐三右衛門　ちご七郎兵衛　人切善兵衛　皆々牢人の六方者也
右之分〆四十三人
此書者蜷川親音子之藏本也朝泰有子寫之冉予寫者也
于時安永　乙未二月廿八日　瀨名貞雄
天明五年乙巳十二月廿三日寫　南畝子
武備睫に中山源左衛門といふ男伊逵あり五百石大御番也正保年中麴町眞法寺にて切腹被仰付也
辭世
わんさくれふんぞるべいか今日ばかり
あすはからすがかつかじるべい
○薩州隅州の海中に在之櫻島神火の次第
安永八己亥年九月廿九日之夜酉ノ刻地震明ル十月朔日卯刻より御嶽南の峯に少し煙立登るとみへしより段々と盛んに相成午の刻に至山の腰前後六七合目より神火燃上り黑雲のごとく成煙のぼる事高サ凡五六里計光焰の中霹光曜々諸人目を驚す事限なし燒石霰のごとく降ちらし木石壹丈貳丈の石も火勢にて微塵となる四方八方へ飛散其上國中一時の間に地震十度程宛の震動御嶽火焰の響き晝夜とも雷鳴のごとし凡中國手に取樣に相聞勿論近國へも響きわたり火焰天に滿候故哉近國日州肥後筑後邊之御大名方より追々御見舞之御使者在之候折能西風にて御城下鹿兒島は降物無之處吹戾之風にて壹寸計も灰降つもり候當日迄も燃止事なく六七日以前より燃下り海邊まで燃候はゞ相鎭り可申哉比日は晝夜とも諸事不取散銘々逃支度用意而已に御座候御嶽後邊堺牛根村貝潟中俣垂水邊迄は燒灰凡六七尺計降積晝夜とも晴夜のごとくにて挑灯にて往來致候尤燃がら石東西南北へ飛散海中に二三尺燒石積り其上灰降依

之海上船之渡海難成御嶽前邊へ燃出候時は鹿兒島へは早速遁退候積にて家財諸道具銘々土藏へ詰用意いたし候もはや火勢も少うすく相候成得共大雨いたし候迄は日和にても傘にて往來いたし候間鳥類は燒落獸類燒死海中湯の如くにて魚類夥敷死し浮上り候燒失所々多惣村數十八ケ村燒死人數委細未難知凡九千六百人餘牛馬貳千八百餘不殘綱切追放し候寔牧場のごとし尤當九月廿八日廿九日兩日は島中之御祭にて諸方より人數夥敷入込有之候處俄の大變騷動諸人膽をつぶし恐れわななき我も／＼と船に飛乘命から／＼方々へ遁渡り危命助しも有之火急の變事故船々へのりおくれ狼狽左右の火焰の中に取卷れ或は岩石飛落打ひしがれ死するもの數不知然し博奕谷と申所に岩窟有之此所へ數多遁込候處焰石落かゝり岩窟の入口埋れ死するもあり其中に命有ものは燒落たる鳥類など食物にして五六日之間露命つなぐもあり御嶽後の瀨戸と申所島より向ひ地へ半里計有之候その海中深サ八九十尋之所燃がらの石にて埋もれ一面に干潟のごとし寔信州諏訪の海同前に歩渡り致命助り候者も數多有之助命の人數當分鹿兒島御物より御養ひ被仰付候前代未聞大變故御國中寺社方晝夜御祈禱無限候古今珍事則繪圖相認差上候御覽可被成候以上

亥十月十三日出　　從薩州

續日本紀曰人皇四十七代廢帝寶字八年十二月似レ雷雷爾アラズ時爾當ニ大隅薩摩ノ堺ニ烟雲晦冥而七日之後天晴於ニ鹿兒島ノ信爾村ノ海ニ沙石自集化而三島ト成炎氣銷形勢ノ如ク相ツラナル望見レバ四阿ノ屋根ニ似タリ爲島ノ埋ル物民家六十二區只十餘人也ト云

〇難船紀聞（安永九年子房州漂着）　　南畝子輯

本船無舵無篷難走進港
貴國速着小船牽進救命幸勿再遲感恩不淺
　　　　　　　　　　　　　　　　　南京船主沈敬贍

南畝曰篷ハ席帆也此方ノ人篷ヲ苫ト心得マチガヒシ由也品字箋ニ篷字義アリ

先達而御注進奉申上候
大船之義昨二日村役人共沖合に相掛居候處へ罷越何國之船に候哉と相尋申候所南京國船主沈敬贍長崎渡之積にて南京國より去十一月出帆致候後船にて長崎へ渡候義不相叶是迄漂流致最早粮米薪水等無之及難澁之由相願候故早速白米四斗入拾俵水薪等相渡申候然處昨二日四つ時より大風雨烈く高浪にて沖合に掛り難留體に相見候に付早速助船數艘指出候得共大風雨高浪にて南京船へ近寄不申候半時計湊沖に漂候内辰巳風大雨甚敷相成南京船碇繩房州朝比奈郡と□浦居下流寄申候漸小船四五艘陸を引越南京船流寄候場所へ指出候得共助船大浪にて水船に相成申候然處南京船乘組人數七拾八人之内貳拾八人上ケ介抱仕置候殘り五十人之者未船中に罷在候浪間に見合相助可申候
右之趣早速奉申上候　　　　　大岡兵庫頭領分
安永九子年五月三日　　　　　　忽戸村
　　　　　　　　　　　　　　　　名主
浦賀御番所中樣　　　　　　　　　善右衛門

右ノ書付二通五月中旬家弟島崎榮名清水小十人頭多賀常政ヨリ借リ得テ示ス
安永九子五月上旬
南京船字房國忽戸村流倚唐人共願書

本船被風遇難飄在
貴國現在波大椗地不好
即速稟明
王上即着小船五六十船並通事一員來
至船牽引難船進港幸勿冉遲通
船七十八人性命千累非經速來
救命爲感
本船遇難飄流至此不知貴處是
何地名山中可有　王家頭目唐
通事即速來船聞我道
此山是前是後港在何方
長崎在何方向路多少里
右之書付ヲ以浦賀御所ヘ差出シ申候
右ノ書付五月下旬錦江生ヨリ借リ得テ寫ス　越美明
本船失揖自在故見請使小船助牽入港然官廳有制不得私諸之速已告官不日命下當如所請姑忍之且圖糧米
空遺餽米拾俵幸□（忍歟）却之
南京船主　沈敬瞻
蒙　賜來米拾俵已領感恩不淺來諭一切已悉知但控地不好吏兼無篷無舵懇祈速救入港則無既特此奉覆
右ノ書付二通六月六日當直ノ日金田氏ヨリ借請テ寫

具呈南京船主沉敬瞻爲祈轉啓事切難商于上年十一月間起身不料中送過颶宕洋半載幸蒙
神庇得至
貴國救命之恩沒齒不忘奈商等離鄕半載音信杳然風傷之苦莫此爲甚承諭
官命下始有歸期倘程途遙遠命下未卜歸期難計未免遲延切念長崎現有夥計船五艘在館懇祈
大人先縫長崎俾夥計船知悉回棹時得有口信到家以免父母懸念之苦故特哀懇如蒙俯准則感戴不止難商一
人矣
安永九年五月　日　　南京船主沈敬瞻（朱印）

船圖略之

○船（長九丈貳尺中艙濶貳丈九尺）○舵樓（長三丈濶貳丈四尺）○大桅（長八丈六尺）○紅木桅尖兩根每根（長貳丈六尺）○頭桅（長六丈八尺）○頭揖（長四丈貳尺）○内艙大破（長壹丈二尺五寸深六尺）○同所欄干破（長四丈八尺）

通船共計七十九人（内病故一人）

實七十九人

○官尺式樣一本○貨財簿一本○姓名里記之簿一本

右從岩槻侯呈　藩君之寫　庚子孟夏　醉雪

右ノ書付二通六月六日當直ノ夜元帥稻葉公ヨリ借得テ寫ス

頃接來
諭知悉
政府俯准難商情詞通達崎陽使商夥得悉便寄家音特蒙馳傳捧讀之下深感

厚恩即家下聞知亦沾
雲誼〔商〕乃傳同搃管曉諭通船人衆使彼等亦叨
恩渥今耑申謝仰祈
照鑒此
稟
五月二十六日
難商　沈敬瞻
顧寧遠
右ノ書付一通小野美卿ヨリ借抄ス
○房州漂着大清人稟
具呈南京船主沈敬瞻爲祈轉啓事切〔難商〕于上年十一月間起身不料中途遇颶宕洋半載幸蒙
神庇得至
貴國救命之恩沒齒不忘奈〔商〕等離鄕半載音信杳然風傷之苦莫此爲甚承諭
官命下始有歸期倘程途遙遠命下未卜歸期難計未免遲延切念長崎現有夥計船五艘在館懇祈
大人先達長崎俾夥計船知悉回棹時得有口信到家以免父母懸念之苦故時哀懇如蒙俯准則感戴不止難商一
人矣
安永九年五月　日
南京船主沈敬瞻
敬等特蒙
王命撫恤不勝感激〔難商〕切念開海以來遇颶之船故屬不少至于宕洋半載屢遇颶風不測之期難逃此亦罕
見之事皆因命舛時乖所至幸邀
天眷得至

貴國始蒙救命既蒙給食種々隆情非紙筆可能盡述此恩此德再世不忘今又悉既命有司便達崎音感謝之至
但〔商等〕久客他鄕兼之人衆難流仰懇速
賜歸途則感戴不止一人也
覆
安永九年五月　日　　南京船主沈敬瞻
謹稟者刻下本船水手人等協同
貴地民夫上船起貨其甘草山歸來俱在水中現在其味已出不堪收拾同糞一樣甚臭況包皮繩索腐爛不堪則
恩起上無益望懇
大頭目大人轉達
王使飭令不必起上現在所撈者日內收拾洗洒速
賜歸結早送崎陽則感不淺矣
五月二十日　　難商沈敬瞻具
頃接奉
諭知悉
政府俯准〔難商〕情詞通達崎陽使商夥得悉便寄家書特蒙馳傳捧讀之下深感
厚恩即家下聞知亦沾
雲誼〔商〕乃傳同總管曉諭通船人衆使彼等亦叨恩握今喘申謝仰祈
照鑒此
稟

五月二十六日　難商　沈敬瞻
　　　　　　　　　　顧寧遠

具呈南京船主沈敬瞻爲祈轉啓事切本船木料今日蒙
諭別囑船匠折解一同收結以他船送去故屬
恩典但拆下之料俱是柴坯無用之物若以
貴處破耗日工船費送至長崎商等斷然不安就論送到崎港登岸夫費皆係難商應出之項其數亦不少若以累千
重價而買此炊飯柴薪普天之下無此愚人而況財東處難以剖白乞爲原諒以愚見論之如
貴國有法不便陳留莫妙乎丟去海中爲上計仰祈
轉達
王使恩准所求則感不淺矣
安永九年六月　船主沈敬瞻
　　　　　　　總管林天從

頃承
尊命將用　貴地大船送商等七十八人並所取貨物一併載往崎陽披讀之下深感
貴邦體恤遠商仁施字內無以加于此矣不但〔敬〕等感激卿恩即唐財東亦蒙貺于無既至于腐敗貨物洋中放去
聽憑
主裁可也特此奉
謝伏祈
照鑒
安永九年六月　日　難商沈敬瞻

具呈南京船主沈敬瞻爲祈轉啓事切本船所有大桅頭桅鹿耳正副二椗等物〔商〕等撿視情形決難起上不能

帶往長崎已屬無用不必起矣再舵梗一根長三丈八尺如
貴地匠工有大鋸懇令拖起鋸去兩頭留中間二丈一段又中線鋸開分作二片倘能處置可同舵牙二枝一併帶往
崎陽以充他船之用萬一不能處置只取舵牙二枝帶去餘不必矣伏祈轉致
王使吩咐免議可也此
禀
安永九年六月　日　　船主沈敬瞻
　　　　　　　　　　總管林天從
頃接
台命已悉〔商〕等前禀聲明本船拆下木料皆因無用之物不必帶崎之呈爲商轉達幷請更義無如
官命已下不准所求特鑒苦情恩免轉運夫費等項更屬格外殊
恩披讀之下不但商等銘勒五中即唐山財東亦叨
厚澤于無旣矣肅此鳴
謝無任感激之至
謹
聞　　　　　　　　　　南京船主沈敬瞻
具呈南京船主沈敬瞻爲祈轉啓事切〔商〕等被難至此多蒙救濟又感
王上厚恩特使　大臣撫恤窮商恩握屢加種々隆情難以形于紙筆今當駕途耑申叨謝
洪慈緣有善衷冒昧上陳于左此番商等二人備帶小夥書籍一宗計血本銀壹千五百兩非公司各貨尙有二三餘
存者可比此係二人自出血本備辨冀免蝙頭以充薪水用度今已連本毫無痛心極矣每一念至不覺淚下如

雨此等事件既非交易相關之地本不敢奉告今之所懇出于萬不得已之勢商等愚見俟到崎之日欲求　王
家額外恩賣給商二人少補家中糊口之費庶免心地兩懸苦中苦耳倘能俯准則幸甚矣今特拜煩
大人于　王使前爲商備細轉述苦情懇求
王使回府後在
王上前覆　旨時爲商告陳被難情由俾得
王上矜憐商等苦節上聞々々得諭長崎知悉恩既下頒則難商不幸中之大幸也如蒙
王使慨聽愚誠不特商等二人感激
洪恩即家中老幼均沾　大德于無涯矣
此
稟　　南京船主沈敬瞻
同　財福顧寧遠
安永九月六月　日
本船有鹿耳椗二宗現在拋出深水沙中今蒙
貴民撈取商等意見其物價直無多況民夫在水中撈取曾恐有悞大爲不便不必取矣特此奉
稟
六月二十四日　　南京船主沈敬瞻
今蒙
諭房州朝夷浦地方四月三十日漂有唐船一艘即經題報
江戸府委員査情着將該船修葺若仍可用駛至崎港若大傷不可用即便將別船搬去聽料理定奪等因
批准前來現在細加査報更通船內除身故水手一人外餘皆得生據該船主沈敬瞻所懇係遠洋漂流遇難將此

情由通知在舘各船主轉報回唐俾得心安等情即題
請　江戸府准行前來今〔景〕等奉
命即將此事詳遂在唐財東以及該船人衆親眷得知以免懸念等因俱已知悉切思如此遇難漂至意外之地通
船性命難保幸賴
貴國　仁政以得救度俟後送至　貴港等因寔出枯木生春之
慈恩不獨難商沈敬瞻等感激在唐在舘均同頂祝
大德不朽矣爲此公同叩
謝
安永九年六月

沐恩在舘唐商

亥八番船主朱景陶
亥九番船主周壬祿
亥十番船主黄永泰
亥十一番船主程羲擔
亥十二番船主段亮公
亥十三番船主彭儀來

右清人公文得某氏所藏而寫云是會計府所藏也
天明元年秋九月朔
南畝大田覃書

○天明三年卯七月淺間山燒拔候一件
淺間山燒拔たる川筋通り上州我妻郡石高下知村數

大前村　鎌原村　小宿村　蘆生田村　西久保村　中居村　赤羽根村　今井村
袋倉村　古森村　羽根尾村　半手木村　坪井村　日陰村　長野村　横谷村
川原畑村　松尾村　岩下村
　林村是は坪井村脇未知猿橋裏通り三島村伊也町並根子谷
市城村　青山村
　右二ヶ村は川筋通り高キ所は少々宛殘り候ご相見へ申候
矢倉村　京町
　岩下村邊泥入押流れ是迄
　　利根川通り村々
泥入　不殘流れ
村上村　小野子村　五ヶ田村　姥島村
家流殘十日朝火石にて不殘やける
川島村　南牧村
　御關所高崎樣御預り幷橋流れ御番所屋根迄貳丈計流入
　　　澁川下村不殘流れる　泥入壹丈計押來人々家根へ上り居申候
下金井村　阿久津村　中村　漆原村　半田村
　前橋實正舟渡御番所無難に見附そんじ當時通用不叶高崎領不殘砂降幷泥入
上新田村　下新田村　萩原村　横手村　中島村

川筋通り伊勢崎船渡し御關所流
同舟渡し　泥入
福島村　五科村　新河岸
右之通川筋通り村々押流し申候
天明三年癸卯七月廿一日　本庄宿戸谷　三左衞門より來る
乍恐以宿送奉申上候
一日光道中幸手宿問屋年寄共奉申上候當宿より八町東之方字權現堂（但中利根川之內御座候）昨夜中より今晝八つ時頃迄家藏破損いたし候五六寸角之立柱四五尺丸之梁木敷居鴨居戸板貫桁竹屋根を葺候時之麥藁其外臼杵重箱桶鉢之家具類悉く碎ヶ四五尺丸之生木松杉五六尺より壹丈迄に折皮もすりむけ本末共に箚のごとく相成川幅六七町之內川一ぱいに乘船なご難相成程夥敷流申候此間十餘雨一向に降不申候旱川に御座候所黃色に黑き水急に流三四尺も相增申候男女子共出家溺死之者是迄三四拾人馬十五六疋川緣通り流申候川中向岸之儀は何程流れ申候哉相知不申候右之內破れ候鞍に上州群馬郡川島村こ書付有之候に付右權現堂川岸に掛り居候上州藤木河岸こ申所之船之者へ承候處川島村は湯治場作香保より貳拾里程之由無急度申聞候右泥水故か鯉鮒鯰鱸之類浮上り河岸へ寄夥敷流れ來手取に相成申候
右は先達御觸も御座候變異之儀故乍恐宿次を以奉申上候以上
伊奈半左衞門御代官所
武州葛飾郡幸手宿
天明三卯年七月九日　問屋　文左衞門
年寄　仁左衞門

道中御奉行様

乍恐宿次を以御訴申上候事

一先月末方より信州淺間山震動仕焼砂相降候義數度に御座候處去五日夜中厚サ五分程相降申候別て同六日夜六時より夥敷降出夜中雷電大鳴翌七日晝も如暗夜にて降通し其夜彌大降にて同八日晝四ッ過迄降申候砂厚サ貳寸七分餘壹坪計立候處壹石五斗三升餘り御座候但壹升之砂重サ四百三十目御座候田畑に降し砂五六寸依之作物一同に砂埋申候然ども右之間雨は少も降不申候八日八ッ時利根川石泥之水流大石火乍燃相流川中一向に煙立陸へ押上申候依之富宿五料宿間矢川通路相止日光通り往來相止申候三國通り同様にて通路相止申候乍恐宿繼を以御訴申上候以上

日光御所幣使道
那須郡
群馬郡玉村宿
問屋年寄　三郎治
庄右衛門

天明三卯年七月十九日

道中　兩
御　奉　行　様

覺

中山道　信州佐久郡
輕井澤宿

右宿之儀淺間山麓御座候處去月廿九日より淺間山大燒震動雷電夥敷鳴強百姓にも追々立退き候處當月七日夜四つ時より大石夥敷降懸り年寄又八と申者の屋根へ大石の火玉落懸り即時に燒出夫より四

五ヶ所一圓に燒立一宿不殘燒候趣に御座候名主六左衛門と申者父子水帳其外御用書物取出度身命を限相働外へ取出し申候處被候竹笠并に御座候兩度大石落懸被打倒漸起上り逃去候よし六左衛門娘孫下女兩人相果候歟と存候旨六左衛門申候右之外怪我人死失人程難計御座候

中山道　信州佐久郡

沓掛宿

追分宿

右貳ヶ所も淺間山麓にて前書之通り輕井澤宿同樣之大變と相聞候得共宿中不殘何方へか逃去候哉被是陣屋へ一向否不申出樣子相知(不カ)申候且手代共罷越見分等仕候樣之儀相成不申候

中山道　上州碓氷郡

坂鼻宿

右宿より訴出候は五月廿八日六月廿八日當月五日淺間山燒吹出し灰厚サ霜程降候處當月六日暮六つ時より同八日未刻迄晝夜とも震動雷電仕無法に厚砂降七日午刻より申刻過迄二時半程如暗夜行燈挑灯にて漸川事相達凡石砂厚サ壹尺壹寸程降積り吹溜は壹尺四五寸も有之潰家之分御傳馬役相勤候者二軒其外裏家數多押被潰田畑作毛は不及申青草無之差當馬飼料無之難義仕候間訴出申候

右私御代官所中山道信州上州四ヶ宿此度淺間山燒石砂降就中信州三宿之儀は退轉同然に相成候趣に御座候得共今以燒靜り不申候彼地に罷在候手代共見分に罷越候儀も相成不申候間追々委細相糺可申上候得共先右之段御屆申上候以上

卯七月　遠藤兵右衛門

私御代官所上州群馬郡川島村より訴出候は同國吾妻川通去八日四つ時山津浪にて泥岩火石等夥敷押

出し川島村より李御關所北牧村家居田畑共不殘流失仕候尤山手に少々家居相殘り候迄にて流死候人數相知不申候存命之者は有之間數推察仕候計にて萬一農業又は秣苅に罷出候者は殘可申哉も相知不申候段申之候假相殘候迚も當事渇命におよび可申より外無之旨注進申出候右川通り村々如何可有之哉難計存候旨申聞候に付早速手代差遣見分爲仕追々可申上候得共先右之段御屆申上候以上

卯七月　　　　　　　　　原田淸右衛門

○集千家註批點杜工部詩集

集千家註批點杜工部詩集卷之一

七八ノ卷
永祿二年菊月日　　　　　　　　信州主將
　　　　　　　　　　　　　　　板垣駿河守信方

三四ノ卷
ヽヽヽヽヽ　　　　　　　　　　甲州
　　　　　　　　　　　　　　　春　圓　房

右は堀口幽谷の家藏なり其書古訓點にて板垣信方の手書とみえたり亂世にかゝる風雅もめづらし

闕卷あり全からす

○加州仰西寺尼詩歌

送智旭法師　　　　　　　　　　加州　小淑金澤仰西寺老尼

布衣筇竹杖。雲水一身輕。爲謝祖恩浩。羨師千里情。

旅衣袖寒ぬらしはるゞとこ越の白根の雪のふぶきに

法の師の跡を尋てゆく人に心ばかりをたぐへてぞやる

野も山もわけつゝゆかむ一すぢにあふぐ御法の道はたごらで

○北向

大東世語。江對曰。天竺那蘭陀寺。戒賢論師所住。震旦西明寺圓測法師道場。、、、、。註云。晋法顯佛國記曰。祇洹精舍有二門。一門東向。一門北向。江師所引。或誤記此耳。

○大坂追手燒失書付

天明三年癸卯

一去ル十一日夜大坂追手大御門御多門雷火にて燒失に付爲伺御機嫌明十七日四ツ時溜詰御譜代大名高家鴈之間詰同嫡子菊之間御緣頰詰諸番頭諸物頭布衣以上之御役人

御本丸西丸に登　城可仕候

但病氣幼少の面々は月番老中丹波守宅へ使者可差越候

一右之外萬石以上之面々是又番月番之老中丹波守宅に使者可差越候

一在國在邑之面々は老中丹波守出羽守ゑ飛札可差越候

右之趣可被相觸候

卯十月十六日

〔附〕新女院〔大宮御事〕去る十二日崩御に付今日ゟ十八日迄鳴物停止候

但普請は不苦候

卯十月十六日

○心學の事

心學といへる事京都にて專ら流行す享保の比京都瓦町に石田勘平といへるものありて是を弘む勘平號は梅岩丹波桑田郡人也都鄙問答〔眞片カナ〕齊家論〔平カナ〕を著す門人手島堵庵といへるもの其道を得て大きに流行す前訓、我杖、安樂問辨、朝倉新話等を著すその門人松ばや松翁〔伊右衛門〕尾張屋道順中

澤道二〔糸のいんきよ元は法華宗の僧といふ〕三子を高弟とす俗に松翁を顏回に比し道順を子貢に比し道二を子貢に比すといふ道二東都に來て茅場町醫者米田一貫といへるもの丶宅にて心學を講ず著す所春日和あり〔初名は開帳百日心得草又名道しるべとも云〕又鎌田一學といふものあり賣卜先生糖俵并後編ありべかゝりを著す大抵宋儒の説をもとゝし日用平生目の前の事をとく兒女子の耳に入やすき樣に導しものなり

○熊坂氏恤民書付

天明三年八月十六日奧州熊坂宇右衞門御褒美被下候時御勘定所書付之寫

松平陸奧守御預り所
奧州伊達郡高子村
百姓　宇右衞門

右宇右衞門義貞實成者に付年來村方へ奇特成取計仕候旨村方一同訴出候に付相糺候處親宇右衞門代より常々小前百姓共をいたはり御年貢年々無滯致皆濟寶暦五亥年凶作之節其身并家内之者とも粥を給村内困窮之百姓共へ籾貳拾石麥三拾俵差遣し當宇右衞門代に罷成明和三戌年困窮之百姓共へ麥三拾俵合力仕相續成兼候ものへは金七八兩米麥五六石ツヽ年毎に差遣し不作之年自分夫食不足之節は代金にて差遣し御年貢等差滯候節は村役人陣屋元へ往來も繁く雜用も相掛り小前之ものども痛に相成候義を歎き其砌は金子差出上納爲致都て親宇右衞門代より差遣候分合力仕候心得に罷在候へども返濟仕候者も有之候へば受取置尙又困窮之者ども之手當に仕其外長病にて罷在候者へは米等を差遣醫師を賴み治等之義迄世話いたし又は困窮にて他村へ奉公等に罷出候者へは夫々に手當いたし引戻候樣取計候へば是等之義は年季之義に付員數不相知小前百姓どもをいたはり候に付難取續躰之者も

相續仕候右高子村之義は山間之惡地にて近年水旱損相續村方難義仕候得共右之通宇右衛門年來深切に手當仕候に付百姓共取續年々御年貢無滯上納仕諸事宇右衛門を見習百姓共農業出精仕一村之交りも睦敷罷成候段宇右衛門奇特之義ども村方一同申之郡中へも相響自然ご人氣も宜敷相成候義に付可相成候はゞ相應之御褒美被下置候樣仕度旨陸奥守御預り所役人申聞候〔下略〕

見出し

天明三卯年八月十六日出羽守殿 水野也

御勘定奉行え

松平陸奥守御預所

奥州伊伊達郡高子村

百姓　宇右衛門

銀拾枚

右之者生得實躰成者にて數年村方へ奇特之取計致候に付其身一代刀差免幷子孫迄名字名乘可申候爲御褒美書面之通被下之

右は勘定所之書留を寫置候也

其後又々困窮之者を救候書付熊坂氏よりかり得て寫左に記す

一天明三年癸卯奥州飢饉之節伊達郡高子村百姓熊坂宇右衛門困窮之村々へ農夫食代として借遣し候書付村々より屆書出し候書付によりて抄出す

一箱崎村　家數五拾六軒へ　金貳拾壹兩三歩

卯十二月　來辰六月改無利足にて返濟之積

一同　十六軒へ　金五兩

辰二月十二日　當辰六月廿五日日限無利足

一上保原村　七拾貳軒へ　金三拾兩程
卯九月
卯十一月之内借す但是は他領ゆゑ書面には無之
一信夫郡鎌田村之内阿武隈川東向鎌田村〔高子ノ隣村也〕
家數三拾九軒へ　金拾六両
卯十二月カス　來辰の六月切に無利足返濟之積
一信夫郡瀬上村之内阿武隈川東向瀬上〔高子ノ隣村也〕
貳拾七軒へ　金八兩貳分
卯十二月カス　來辰六月無利足返濟之積

右各届書アリ畧之高子村ノ計記之
乍恐以書付御届奉申上候事
一當村百姓熊坂宇右衛門儀村内困窮百姓手當之義は平年にさへ彼是深切に世話いたし呉候者に付當大凶年に相當り手當いたし呉候義は不珍候得共當年之義は別て厚き深切之取計奉存候に付乍恐品々左に奉申上候

覺

一錢拾三貫三百五十文
是は當二月九日に例年之通農夫食代六月十五日限に返濟之積無利足にて用達呉申候尤日限に返濟仕候
一金貳両壹分ト錢五百文
是は當六月四日に夏成御上納金に此月末迄無利足にて用達呉申候尤日限に返濟仕候

一錢拾貳貫五百文
是は當八月廿三日に私共之內困窮百姓十二軒へ夫食代として合力仕くれ申候但男壹人へ錢三百七拾文つゝ女壹人へ錢貳百五十文つゝ子共壹人へ錢百貳拾五文つゝ但此節米壹升に付錢七拾貳三文位仕候

一籾貳石四斗貳升五合
是は當八月晦日に私共之內困窮百姓十二軒へ合力仕くれ候但此節新米は出來不申古米は疾にたべ盡し且つ調物にも一切無之時節に付誠に及飢渇に申躰の處右之通合力仕吳候を以困窮百姓助命仕候義に御座候

一金拾貳両
是は當九月七日に私共十六軒へ來辰農夫喰調代金に用達くれ申候但返濟之義は両三年之內世柄立直り次第元金無利足にて返濟之積りに用達くれ尤銘々割渡し候金子を以籾相調當時名主宅へ預ヶ爲置來春農夫食に爲貯置申候

一金七両貳分
是は例年之通御年貢金上納仕候に付私共之內極難澁之もの十三軒へ來辰六月十五日限に無利足にて返濟之積に昨廿三日に用達吳申候

一金貳両貳分
是は當時より正月中迄之夫食代に私共之內極難澁之もの拾三軒へ來辰の六月十五日限無利足にて返濟候つもりに昨廿三日用達吳申候

右之週手當仕取計ひ吳申候尤內々右宇右衞門存寄之趣は當年は米穀高直に候得共せめて金錢だに相

出し候はゝ手に入可申候得共來春夏之間は七八月之間に至り候はゝ米穀調物にも有之間敷と相考候趣に付少々貯糀有之分も當年は不相出來年に至り必至之時節に至助成可仕存寄を以當年は金錢を以見繼呉候由是等之處至て深切成志と奉存候こゝに其身は勿論家内中共に雜穀干糅粥等にて朝夕簡畧仕此節金壹分に付米八升六合より九升迄仕候得共一粒も賣拂不申來年に至り村內隣村之救に可仕下々心之由誠以深切成志に奉存候其上悴同苗軍次郎義一ヶ月に三四度ツヽ村内相見舞家內有無をも見屆困窮之私共へ彼是力を付呉候に付はたらき候にも自然とすゝみ有之麥作も無恙仕付仕候來夏之取續にも罷成候義偏に右宇右衛門廣大之深切故と奉存候右品々別て奇特之取計ひ共と奉存候に付乍恐村内總百姓連印書付を以御屆奉申上候以上

天明三年卯十二月廿四日

仙臺伊達御預り所
奥州伊達郡高子村百姓

善八　印
惣太郎　同
勘七　同
平二郎　同
十右衛門　同
庄三郎　同
兵藏　同
八之丞　同
傳藏　同
源八　同
傳七　同
清右衛門　同
與惣二　同

善五郎　同
文七　同
勘四郎　同

仙臺御預り
桑折　御役所

前書御屆申上候通相違無御座候に付奥印仕奉差上候以上

右村組頭　庄四郎　印
同名主　惣右衛門　印

右高子村ヨリ出シ屆書扣熊坂氏ヨリ借得テ寫シ其餘隣村等ノ屆書ハ略シテ其員數計ヲ記置也

覺

奥州伊達郡高子村
百姓　熊坂宇右衛門

一籾七拾石
但　辰巳二ヶ年取立延午より戌迄無利足
五ヶ年賦一ヶ年拾四石充取立候積

右可貸渡村々　高子村　箱崎村
瀬上村　鎌田村

是は右宇右衛門貯置候籾御座候處去卯年凶作に付米排底市中出米無之同人居村幷隣村困窮百姓及飢候程之者御座候に付此節右籾御預所へ差出右村々へ貸付且年々取立之相濟候分借請度旨望人在之候はヽ年壹割五分之利籾を加貸付其年々取立之追年困窮百姓共爲手當其村限圍籾取計候積

右は松平陸奥守御預所奥州伊達郡高子村熊坂宇右衛門義去卯年凶作に付村々夫食雑穀干粮等迄喰盡に相成其上奥州筋米拂底此節米兩に三斗六七升穀麥五斗六七升位之直段にて甚高直に御座候上市中出米無御座買調可申樣無之程にて右宇右衛門居村幷隣村困窮百姓共當時さへ及飢候體御座候處當春夏之間新穀相出候まで之内彌難澁取つゞき之程無覺束必至と差迫餓死にも可至哉相歎勿論其身相應之暮之者にて兼て簡略仕飯米殘少々貯籾御座候間聊に候得共書面之籾此節御預所へ差出右村々極貧之者共へ相應に割合貸手當仕度よし尤困窮者に御座候間不痛樣無利足にて取立之相濟候分は追々貸附毎年新籾詰替に相成候樣致候はゞ乍少分右村々困窮之者計も追年共御救之助にも可相成候間貸附之義御吟味被成下度旨願出に候付吟味仕候處右宇右衛門申出候通去卯年之義は甚凶作之年柄に相違無之且夫食米拜借被仰付候村々も有之候得共全體米拂底の年柄乍少分も右籾貸附候はゝ四ヶ村小前之者共取つゞき一助に可相成哉と吟味仕候間右籾七拾石役所へ爲差出書面年賦之通取立之追々望人有之候はゞ利籾を加貸付成相候はゞ書面之村々追々共手當に可相成候間宇右衛門願之通申渡其村限囲籾に取計候樣可仕哉依之奉伺候以上

松平陸奥守家來
蜂屋又左衛門

天明四年辰閏正月

御勘定所

右相伺候處伺之通可取計旨御下知相濟候間可得其意者也

仙臺御預

辰五月　桑折　御役所

高子村　熊坂宇右衛門方

熊坂氏書狀に云此其村限こ申事は御下知は相濟候事には候得共不宜候譯は若姦なる名主有之候得ば
圍籾は只文具に罷成實用無之罷成候事に候間桑折御藏へ御取立之積に願申存寄に候桑折御藏もすき
間なく候はゝ拙者屋敷之内へ拙者自分入用にて土藏を一ッ追てしつらひ右御圍籾爲御入置候樣にも
願可申こ存居候事也

又云此一件朱文公社倉之遺意にも可有之哉

又云此籾は當三月中旬拙者内分にて割渡し御下知を待候ては喧嘩過の棒なるゆへなり
右之外又箱崎村拾六軒〔辰二月十二日〕金五兩用達上保原村廿三軒へ金五兩用達外に七兩貳分こ貳兩貳
分高子村へ用達是等は書上にももれ候分也

○小野篁作の閻魔

牛込横寺町泉藏院に小野篁の作こいへる閻羅王の木像あり高二尺にみたず古色あり右厨子のうらに

小野篁之作閻魔之三尊實樹山玉淵寺泉藏院へ

奉納所也　　　　　　　　　　　　　　施主

于時寶永四丁亥年　　　　　　　　　　　中村氏寛明

こあり寺に天神社あり當時組合持にて無住なり天台宗上野末也

俗ニ此像ヲ聖像也ト云ハ誤也

○俵の字

俵の字字書米苞の名こする事みへずいつの比よりかいひ出しけん馬端臨通考に唐宋和糴の事を論じて
自唐始以和糴充他用。至于宋。而糴遂爲軍餉備邊一大事。濕豐後始有結糴寄糴均糴俵糴博糴兌糴括糴等
名。何其多也。この中に俵糴こいへる事は俵散の事なる歟

○鱗形屋讀双紙作者

鱗屋孫兵衛方繪双紙作者は津輕侯內に居候吉右衛門と申候輕き者之作のよしあだ名をおぢいとこ申候鯛の味噌づてよもの赤のかけ山のかん鳥などいふことば此男のいひ出せし也と右藩中之人の話也

○兩國橋向築出

兩國橋向築出新地天明五年の事也

川岸長八拾四間　南方拾三間五尺

寬永元年冬より春にいたりてもとのごとく川となる

○二百里

長祿記に高野山の事を記して云二社の鎮守一は丹生大明神とて胎藏界の曼陀羅也次は高野大明神とて金剛界の曼陀羅也惣じて當山無双の靈地にて愛別離苦怨憎會苦の惡心自滅し帝都を去る事二百里鄉里を離れて無人城と云云

按此二百里何町一里にや

○かくれたるしん

かくれたるしんあればあらはれての利生とかや云云

住吉物語にみへたり

○樹上覆裏

樹上覆裏　霜ヨケノ事也司馬相如傳盧橘夏熟註ニ吳錄云建安有ㇾ橘冬月樹上覆裏スレバ明年夏色變靑黑其味甚甘美盧ハ即黑色是也

○徂來詩

徂來先生七律眞蹟一幅〔蕉鹿携來〕

郊園久輟五侯珂。忽抂儒宗復此過。泉石猶餘經濟大。咏歌應發性靈多。吾從孔孟論山水。人道皐夔在薜蘿。總是德星今再聚。願留照映被巖阿。

六義園奉陪國子老先生作伏乞槩政　物茂卿拜

徂來

茂卿

辛巳の霜月十五日の事なりき

蛻翁の書簡も添てあり是又見事なり徂來翁平日の磊落なる書と違ひ敬て書たまへること見へしが彼の一字にいたりて例の磊落なる筆意見えたり起句をみるに保山公隱居の後とみえたり一体豪氣言外に溢れて尊敬の中に慢罵の氣あり前聯の經濟の字面白し咏歌は主人の和歌にても有しなるべし後聯孔孟に從て山水を論ずるといへる國子先生に對して自負の意をふくめり人道皐夔在薜蘿と云る句皐陶夔龍の用ひられざるをなげきて人道といへるも妙々これより德星ふたゝび前々代のごとくにあつまらばその餘光も又此方にも及ばんといへるなるべし國子老先生林大内記信篤君なるべし正德中は白石の勢つよくして用ひられず國喪正議などみても知べし享保の時にいたりて再び用ひられし故六義園にも招請せしかど一體地歩を占めたる傑作にして今時の人の氣象とは天地懸隔なるべし〔十一月十七日記〕

○梅の風

仲冬望の日野村氏の蜀茶梅(サンシクハ)の一枝を携へ來れり名を梅の風と
いふその名の雅なるをもて地錦抄をみるに寶永增補數十種の
中にも見へず廣益三十種の中にもなし附錄〔卷之三〕梅の風山
茶花花形よく二重大りん白地に本紅のさらさいろ〳〵くるひ
咲さきわけのごとくなるもあり一莟ヅヽ紅白さしまぜのごと
くなるもありらんぺにのごとくなるあり又難波津のもやうな
るもあり極上々ながめよし

增補地錦抄八卷寶永七年寅の初春の板也

廣益地錦抄八卷享保四年亥仲春の板也

附錄四卷は享保十八年丑仲春の板なり此一種後に渡りしなるべし

○三州志〔飛州志〕

一三州志は加賀能登越中の三州の地理の事を書る書なり加賀の人の著す所にして今歲〔辛巳〕昌平地理
の事を司れる所に納しといふ市河米菴の話なり今まで加州の地理を書るものなし加越鬪諍記などよ
むによろしかるべきものなり

一飛州志四卷

○羅念菴文集抄〔水次碓戸の事人別改の事〕

明羅念菴文集〔卷二〕前文略ス

今之言水次與縣倉於執事者。不過日均一米也。止遠近之異耳。水次不一。莫考有無。莫定遲速。故無若縣倉

便。此善罔上也。彼固不言主水次者。用米之利於農。主縣倉者用銀。糴米之利市人也。蓋米出鄉。米賤銀貴。用米則破屋窮簷。舂杵立辦。肩擔背負。朝夕可前。大者倉箱。小者甕盎。不事鐍鑰。人自爲守。米既堅好。釜自便利。兩年以來。軍無刁難。民兒稱貸。此水次之成効也。縣倉去納戸既遠。米不易達。催征轉換。交納守支。非獨力可能。縱米入倉。必經多手。需索侵眞。十不餘五。又況歇家與礎戸。表裏爲奸。礎戸把持。歇家從臾。勢不得不至於以銀糴米。方有着落。至於用銀糴米。則已入礎戸掌握。雖官府百計防範。不能制也。

〔下略〕

右與劉櫟亭論水次書に見へたり此書役人の不案内にて市人の便利をいへり水次は淺草の札差に似たり礎戸は舂人の米屋に似たりいづくも人情はかはる事なし

又與臺省諸公論審丁書に

按攢造京省黃冊。不敢虧損原額丁口。曰遵制也。府縣編派。別有實徵數目。曰便民也。原額不敢虧損。故假立推收册。無可據實徵。便於編派。故丁有新舊。歲必增除。此江右之通例也。吉水成丁。男子一十四萬二千二百零七丁。猶永豐一十一萬零。蓋洪武初年之原額也。嘉靖年間。止有九萬七百一十丁。而永豐則減爲五萬八千八百有零。二十六年前。令王君之誥奏本院刊刻實徵。以革宿弊。事例研除補奏止有七萬九百一十七丁。刊册中繳永豐亦減而爲四萬五千七百。此編派之所據也。二十七年。使使司類撰總會文册。吉水仍以九萬舊丁載入課程項下。而永豐得書新丁四萬五千。由永豐推之。他縣可知也。是時申訴再三。未得允改。三十六年。使司編派皇木。又以原額十四萬丁起數。而他縣皆從實徵。日者詳查本府。三十一年。改造實徵總册。吉水仍載十四萬原額。而永豐又書五萬舊丁。彼此舛錯。竟無歸一。夫縣一也。實徵有舊有新之不齊。此欲請者一也。編派一也有用原額用實徵新丁之不齊。此欲請者二也。府册一也。有書原額書實徵舊丁之不齊。此其欲請者三也。切照當道文移浩繁。宜難稽覈。至此極者。要之有司

不及周知。愚民不敢褻瀆。而琊筆者。又欲肆譎幻以存營窟耳。自貽伊阻。夫復何言。〔止〕

此方にても享保六年の此命ありて子午卯酉七年めくに國中の人別を改て計府に出す事あり是又原額を用るあり實徵を用るあり江戸の人別荏原郡〔品川〕葛飾郡〔本所〕足立郡〔千住〕橘樹郡〔西ノ方〕を除きて豐島郡ばかり百萬にあまれり其大きなる事をしるべし天明六年の〔丙午〕改には本國中にて十九萬丁を減ぜし事ありき七年めくに消長ありいづれ人別は原額より實徵は多し

○野州阿蘇郡佐野鄉時平大明神

野州阿蘇郡佐野鄉近村に古江村こいふあり此村にいかなる故にか時平大明神の社ありこれは左大臣時平公をまつりし社にてむかしより此村に梅の木なし梅は菅家の紋なれば所のものいみて他にゆきて梅干にてもくへばたちまち發熱して大になやむよし同村百姓忠八こいよものゝ話なりこ龜屋文寶の筆まかせに見えたり

○萩寺

本所押上村龍眼寺を萩寺こいふ

龍眼寺和尙萩を數奇て數萩をうゆ予に詠ぜよこいふ

きゝしより見る目ぞまさる此寺の庭におりしく萩のにしきは　高辻大納言家長

此寺に碑をたてゝ芭蕉翁の發句をかけり

ぬれてゆく人もおかしや雨の萩

近比萩寺にゆきてみしに此碑なし

○仙臺釘子村百姓敵を被討に參り候實記

奧州仙臺領岩井郡東山釘子村庄右衞門こ申者敵を被討に參り候實記

文政二年春奥州仙臺領岩井郡東山釘子村の百姓庄右衛門歳六十二歳敵を被討に參り候次第は庄右衛門事二十三ケ年以前伊勢參宮に志し壹人にて旅立候處信州□（煤歟）坂へ相越候處向より浪士壹人來りて行合ひ候處かの侍申ける樣我等至極難澁に及候間路用金かしくれ候樣申されける庄右衛門驚入私儀は伊勢參り心ざし報謝を得罷登り候得ば一金の貯も無之候間御用捨被下度と申ければ彼の士申樣貯無之候はゞ衣類にても無心いたし度候士は一懸無心と申出し不叶時は身分も相立不申候間是非無心と申されければ庄右衛門十方にくれ居りけるか（が歟）けはづし逃出しけるに跡より追かけぼくごふ（木刀）を以打れ則氣絶倒臥ける處に衣類脇指路用金共に剝ぎ取れ下帶一本にてたふれ臥居ける所に良暫くありて正氣付起上り四方を詠め必死の思ひをなして居りける所へ年の比五十計の酒醉人よろめき渡り參りける庄右衛門立寄り願けるは拙者儀は奥州仙臺の者に候が此所にて追剝ぎに出合如此相成候御慈悲を以一重被下度命御助け被下かしと願ひければ彼の男申樣其方はおひはぎとか我をはぎ取とや甚だ惡きやつなり其分に不相成抔と惡口雜言致され庄右衛門迚も命助り難し我れ打たれ候棒其所に捨置けるを取て彼酒醉男を打ちければ終に打殺し不得止事衣類はぎ取見れば懷中に金子壹兩有けるを天の與へと悅び取て人殺しなればば見とがめられては難儀成べしと晝夜嫌なく國元さして逃戾りける在所へ戾りては信州にて大病相煩路金も遣ひ捨無横歸宅之由家内へ深く隱し咄さざりけり夫に年々幸ひ引續き相續も宜敷相成釘子村二三番通りの富家と成りける文政二年の春に至り最早我六拾貳歳になりけるが先年人殺したる事朝暮心に絕へず妻子にもふかく隱し口外にも出さず心中に計思ひて暮しわれ人を殺したるむくひ終には子孫にむくふべしと案じ煩ひけるが當年六拾貳歳に相成候へば人間之定命も是迄なりとおもひあきらめて子孫之爲に先年我が手に掛て殺たる子孫の者を尋て敵を打れ候はゞ子孫へむくひも有まじとおもひ付家内之者親類共へ先年伊勢參宮に登りける時信州にて相煩ひ世話に成候方々へも今に謝禮不致候て打

過居候處當年は六拾貳歳に成候間伊勢參宮ながら信州之方々へ禮ながら罷度品々相咄し旅立ける然る處信州□坂に掛りて相尋けるは二十三ヶ年以前□坂にて殺されける人の子孫誰と申人にあるべきやと道行人に問ける所彼男答けるは夫は我等近村に候由申けるよつてしからばおしへ給へとて同道參りける無程□坂にも相成同所百姓彌五郎と申者の所へ罷越ける所振舞これある樣子にて男女大勢取込居りける所へ庄右衞門申入けるは私は奥州仙臺東山釘子村庄右衞門と申者に御座候所御亭主へ御目に掛り御相談申度品々候へば御尋仕候と申ける所亭主挨拶には今日は佛事相勤取込居候間明日成共御會下さるべしとて出會不申庄右衞門押て申樣は假御取込にても一寸御目に掛り申度と申ける居合親類共申けるははるばる遠國尋來る客人如何樣の相談あるや何れ宿を致させ可申迚御覽之通り今日は親の佛事相勤取込居候間はるばるの御尋何にも御止宿下さるべしとゝめられける庄右衞門洗足致し直に座敷へ通りけるに膳最中にて上座に和尚居左右相伴の客居流ける所へ庄右衞門申けるは私儀は奥州仙臺釘子村庄右衞門と申者に御座候が廿三年以前□坂にて此家の亭主を我が手にかけて殺ける間御子孫之御方に討れ申度はるばる尋罷出候間何も樣御取計ひ下されかしと賴入ける和尚始め皆々驚入興さめしばし無言に扣ける所和尚答て亭主彌五郎を呼て申されけるは偖今日佛彌兵衞を手にかけ殺けるものゝよしにて其方に敵を討れ度遠國より尋來る事に候所古今稀なるかよふの義は命を助るも今日佛追善に相成り候間たすけ遣すべしと申されければ彌五郎何れ御膳も相過し燒香相勤御答申上と挨拶有けるに扨燒香も相勤和尚幷に客人も止り居彌五郎に向ひ和尚申されけるは扨又其方親彌兵衞廿三廻忌に當り敵と名乘りはるばる尋來る事古今ためしなき事なりさすれば命も助け遣すも第一の追善なり佛道にも十惡の極罪人もほつ心に至れば是をゆるすと有きう鳥ふところに入時はかりう人も是を取らずと有然れば助るは第一の追善也と申されければ彌五郎申けるは御尤には候へども主と親の敵は共に天をいたゞか

ずと承り子として父の敵草の葉を分ても其儘討ざるは第一の不孝と存じ候間是非に討て父の讎を復したしとて中々承引なし和尚を始め面々も不及是非に敵討に定りける最早夜ふけに至りければ明日家の後の川原にて本望とげべしとて定りける翌日彌五郎支度を堅め脇差携出庄右衛門にむかひ支度被致候はゞ立合給ひと申ければ私儀は立合て勝負をとげ申身には無之御身分の心まかせに討るゝ身分に候へば何の支度も無之と申ける然るに彌五郎携出たる脇指庄右衛門見覺ける故相尋候は扨御身分の指料は御家に傳りし道具に候や又は餘所より求められけるにや如何と尋けるに彌五郎申けるは是は品有之餘所より手に入候指添に有之候と申けり庄右衛門左候はゞ各樣御立合にて御見分下さるべし右之脇指銘は助定にて尺は貳尺三寸燒は亂れ燒目貫は後藤が鷄にてせつぱはゞき金かけに候と委しく咄しけり何れもふしぎにおもひ和尚を始め立合改めけるに少しも庄右衛門が申に紛なしといふ其時庄右衛門申けるは左樣ならば仔細を咄し申べし私儀二十三年以前伊勢參宮を心ざし只壹人にて當所□坂へ參候處向より士衆來りて路用金無心申かけられ一圓貯無之由申候へば衣類にてもかし候樣無體に申かけられ無是非逃去候處追かけられ棒にて打たをされ氣絶致候內衣類並路用金右之脇指共にうばひとられ下帶壹本にて居候所へ年比五拾計の酒醉男よろめき渡り參り候故願ひけるは私儀此所にて追剝にあひ御覽の通り下帶壹本にて命助り可申樣無之候間何卒御慈悲を以一重被下置御助下されかしと願ひければ彼酒醉男其方はおひはぎにて我をはぎ取らんとや甚にくきやつ也その分に成り難き抔と申されけるに左樣の者には無之私儀かくの如くはがれ申候間一重下され御助け下されたしとひたすら願へとも惡口雜言致され無據迚も助り難き命あまり腹立まぎれに私が打れし棒其所に捨て有けるを以打候所あやまつて打殺不得止事衣類はぎとり直に國元へ立歸り候へ共人殺の罪朝夕難除き御尋仕討れ可申と語りければ和尚横手を打扨は左樣なるか其元はぎ取候者は此家亭主彌兵衛が實弟にて若年より惡性者にて終に盜

賊と成りて命を失ひける者なり然れば弟の身代りに立て兄彌兵衛は其元の手に掛り果ける者也さすればこ此方より求たる悪事にて敵を討べき道理なしさるによつて昨日よりかよふのいん縁もあるべきか扣けるよふ申含たり此上は敵討に不及とて何も口々に申けり彌五郎も面目を失ひ止みにけり夫より親類共寄集り種々馳走もてなし四五日逗留して伊勢參宮首尾よく相勤歸國しけれども全體人殺しの罪耻入家内之妻子にも堅く隱して語らざりけれ共信州にて古今の珍事成ゆへ男女專ら噺しこなへけるに付奥州之者信州追分にて委細承りけるこなん在所の者に承るに廿三ケ年以前參宮に立信州にてわづらひ立かへり去年春六拾貳歳にて又々參宮登りけるこ何も噺しければうたがひなき事共也誠に古今稀なる珍事成けるかや

釘子村は北東高山にて山の形は氣仙郡にて海際のよし承る

○裘代の事　裘袋 宮帶　宮體 同

海人藻芥〔惠命院撰〕

僧俗裝束相當之事

法眼ハ俗ノ束帶也裘袋ハ俗ノ直衣也鈍色ハ俗ノ狩衣也衣ハ俗ノ直垂也俗人直衣狩衣時下令着用指貫僧中裘袋鈍色下最令着用指貫之處慈鎭和尙申公家被止之云々當時坊官以下三綱世間法師鈍色等之下用指貫也

法眼裘袋鈍色ノ時者持檜扇衣ノ時者不持也一向中古以來山門南都園城三綱用檜扇頗比興之事也

膽々言〔松岡玄達〕

或人云裘代ヲ宮體又宮帶ト書ク借字也裘代ノ事三光院ノ記ニモ見ユ古ヘハ裘ト云モノアリ源氏末摘花ニモ裘ヲ着タルヿアリ中比其製失セリ因テ裘代ノ名アルニ似タリ袍地ニ作ル袷ニスルナリ色ハ紫

ヤ白ヤ黑ヤアリ是ヲ疎絹ト云今僧家ノ素絹ト云モノト別ナリ

春湊浪話〔土肥經平〕
きうだいといふ衣服靜憲法印弁入道觀など着用の事平家物語東鑑にみえたり裝束拾要には大納言より參議まで法體の人は着用あるものとあれども應永十五年北山行幸の時あるじの鹿園院准后着玉ひ伏見の入道親王栂尾の法親王もきうだいを着玉ひし事行幸記にみえたり又建久二年後白川法皇の法住寺殿へ御移徙の時の記にも鈍色の裘代を御塗籠に置れしともあれば法皇法親王なども召るゝものにぞ是を宮體と書たれども裘代と東鑑に書しや然るべからん

文政元十月十日〔薄やう二枚重ね此服はむらさきせいご〕

仰

山科前大納言どのへ
廣橋大納言どのへ

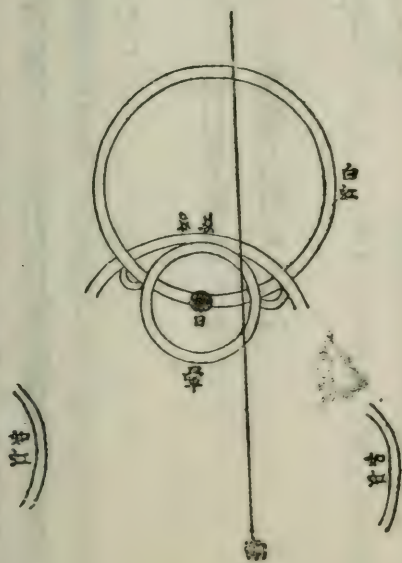
やうに
心得
候て
おはし
まし候
此たび一橋
入道大納言
きう袋
申せ
着用
とて
ゆるされ候
このよし
事

御心得 將くん家
候て より
つたへ よろしく
られ候よし 御さた
かしく

○文政壬午正月日暈圖說

文政壬午正月日之暈圖

日暈圖說

文化壬午正月廿一日丁卯巳。時有白虹貫日。形如環。徑數丈。其一邊別有暈。圍日而交白虹。成連環。其色淡紅。又一虹橫其上。又日下左右各有一小虹。一向內。一背外。其色紅綠。至午時消散。亨按。曰暈曰虹曰霓。其名異而其實一也。太陽照臨地面。水氣爲陽火所壓。而尉蒸地中。終從山谷巖窟地理疎所而上升。隨地面反熱之氣。上到雨際。搖曳靉靆爲雲。雲厚遮蔽日體。則日光不能下透。人自正面下見之。而不看日體。故無暈紅矣。雲薄則日光下垂。而暈虹見也。其色白者。是雲薄而燥也。其紅綠者。雲厚而濕也。厚且濕則抵住日光而透不去。故陽光接陰闇之氣而生色耳。今白者紅者綠者一時双見。是日光所映射之氣。有厚薄疎密。而陰陽鈍駁故也。如夫日東而虹西。日西而虹東。則日光遙映射陰雲。日力微而不能乾陰雲。々々亦濃重。日光透不去。陽光射著水氣。々々含育陽氣。而人在中間。而視其裏面。故好

色著明。而成紅綠之象也。或曰。東虹西霓常而有焉。今也不然。日將午。暈又大小不一。未聞有此異也。曰。日下適有薄雲。而日光逼之則暈見。暈自轉映游氣。而白虹便見。是雲與氣。各有高低也。所映高且遠。則其形小。低且近。則其形大。愈高遠則愈小。愈低近則愈大。而其他抱者背者長者短者。皆是暈虹互相注射。而雲氣各有厚薄燥濕故也。曰。古政失於此。則變見於彼。然則所見之國。其譴何在。曰。夏霜冬雷。謂之大變。猶可也。暈適鐍背抱耳。〔皆月旁氣也〕虹霓可常而見矣。而其理亦濕然。且無害於事。無損於歲也。指爲天變。則不亦矯誣乎。況消而必復天體之常乎。且古畏天變。莫甚於日食。而既有躔度分數可預測於數十年之前。逃之而不得。禳之而不能。而奔走馳騖。伐鼓陳兵。拯救之者。不亦兒戯乎。謝在杭曰。聖人之事天也。無時不敬。而遇其災變。則尤加皇懼焉。曰知敬天而已。初不爲禍福計也。盖自俗儒占候之說興。必以其變。屬之某事。求之不得。則多方傳會。不覺其自相矛盾。而啓人主不信之端。故金陵有天變不足畏之說。雖千古之罪言。而亦自有一段之見解也。宋儒曰。天地之變。非一端也、盡以爲人事致之。則牽合傳會。泥而不通。盡以爲氣數適然。則古人修法正事。反災爲祥者。亦不少矣。要之爲天下主。父天母地。父母震怒。聲色異常。人子當祇栗恐懼思所以平格。不當指爲情性所發而遂已也。依此觀之。何必問其應乎。以余下愚。何敢論天道之微眇乎。唯述所聽。而應問者之請而已。文化壬午孟春下浣。霜圃入江亨謹記。

囀及虹霓說備考　　霜圃亨緝

釋名曰。虹。陽氣之動。虹。攻也。純陽攻陰氣也。

說文曰。霓屈虹。青赤。或白色。陰氣也。

京房易傳曰。虹。日旁氣也。其占云。妻乘夫則見之。陰勝陽之表也。

尚書考靈曜。鄭玄注曰。日旁氣白者爲虹。又曰。日旁青赤者爲霓。

春秋運斗樞曰。樞星散爲虹霓。

春秋元命苞曰。虹霓者。陰陽之精也。
莊子曰。陽炙陰爲虹。
淮南子曰。虹霓者。天之忌也。
文子曰。虹霓不見。盜賊不行。令德之所致也。
黃帝占軍訣曰。攻城有虹從外。南方入飮城中者。從虹攻之勝。白虹繞城不匝。從虹所在乃擊。河圖稽曜鉤曰。鎭星散爲虹霓。虹霓主內淫。霓者氣也。起在日側。其色青赤白黃。
蔡邕月令章句曰。虹。螮蝀也。陰陽交接之氣著於形色者也。雄曰虹。雌曰霓。蜺常依陰雲而晝見於日衝。無雲不見。大陰亦不見。見都與日相互。率以日西見於東方。故詩云。螮蝀在東蜺常在于旁。四時常有之。唯雄虹見藏有時。
又曰。夫陰陽不和。婚姻失序。卽生此氣。
淮南子曰。太古二皇得道之柄立於中央。〔二皇伏羲神農也〕神與化遊。以撫四方。是故虹霓不出。賊星不行。〔賊星妖星也〕含德之所致也。〔含懷也〕
瑞應圖曰。大虹竟天。握登見之。意感生帝舜于姚墟。
紀年曰。晉定公十八年青虹見。
戰國策曰。唐雎謂秦王曰。聶政刺韓累。白虹貫日。
列士傳曰。荊軻爲燕太子。謀刺秦王。白虹貫日。
前涼錄曰。張駿六年。有彩虹五重。隆々如鐘鼓之聲。
春秋潛潭巴曰。虹出后妃陰脅主。五色迭至。照于宮殿。有兵革之事。
史記云。荊軻慕燕丹之義。白虹貫日。太子畏之。應劭曰。燕太子養荊軻。令刺秦王。精誠感天。白虹貫日。

雜兵書曰。日暈有白虹貫內。在外者從所止戰勝。

薛瑩後漢書曰。靈帝光和元年虹晝見。御所居崇德後殿前庭中色青。赤太元。經云。紫霓圍日。其疾不割。〔覃按元當作玄是淵鑑類函避諱云爾〕

春秋孔演圖曰。霓者斗之亂精也。〔注斗失度則虹霓見也〕

史記如淳注曰。虹臣氣。日爲君。又列士傳曰。荆軻發後。太子見虹貫日不徹日。吾事不成矣。

張番漢記曰。靈帝時虹晝見庭中。引議郎蔡邕詣金商門問。對曰。虹霓小人女子之祥也。

詩云蝃蝀在東。注曰。日與雨交。倏忽成質。陰陽之氣不當交而交者。蓋天地之淫氣隨日所映。朝西而暮東也。雨氣成虹。朝陽射之則在西。夕陽射之則在東。

史記云。虹者陽氣之動。

五雜俎曰。夫虹乃陰陽之氣倏忽生滅。雖有形而無質。

後漢書郎。顗傳虹。日旁氣色白而純者名爲虹。

埤雅曰。曰雄曰虹。雌曰霓。舊說虹常双見。鮮盛者雄。其闇者雌也。一曰。赤白色謂之虹。青白色謂之霓。

淮南子曰。天二氣則成虹。

詩大全孔氏曰。双出色鮮。盛者爲雄。曰虹。暗者爲雌。曰蜺。安成劉氏曰。虹之爲質。不映日不成。蓋雲薄漏日。日映雨氣則生也。今以水噀日。亦成青紅之暈。

周禮十煇。九曰隮。注。以爲虹。蓋忽然而見。如自下而升也。春官注。視祲掌十煇之法。以觀妖祥。辨吉凶。煇謂日旁之光氣。三曰。鑴。日旁雲氣刺日。四曰。監。赤雲在日旁如冠珥。七曰彌。雲氣貫日而過。九曰。隮。虹也。孔氏曰。隮虹隮。也。虫升氣所爲。故號虹隮。日東則見西。日西則見東。南軒張氏曰蝃蝀見則雨止。初無東西之分。驗之多矣。陰陽和則成雨。陰氣方凝聚而日氣自他方來感不以正。陰受其感。其正反爲之解散。故

雨不能成也。

天經或問曰。虹係雨際。雲在一邊。日在一邊。日光爲雲斜對抵住。日氣下垂。吸動地下之熱氣。則地之熱氣旋湧而起〔虹起之處或値井、源酒之地、則其氣隨湧而起、人謂之虹、能吸水吸酒也、〕以接空中雨際之雲雲之薄處。爲日光所映射。後面部有黑雲。濃重者。日光透不去。此映射之雲。〔此雲即微薄之雨也〕所以成虹。特無顏色以日力微耳。映日之色。以爲紅綠也。綠者水之氣也。紅者火氣也。是虹爲水火之交處斜相映也。故虹朝西而暮東。中天日光盛時則垂虹矣。試于日在東使一人西邊噴水人從中間看其水珠。皆成紅綠之象。虹之體穹然外黃中綠而裏紅。隨雲之邊幅外薄中厚下愈厚故也。對日成虹而他所復有一虹者。又虹影所自射也。然海現蜃樓皆是遠地樓閣上映于空。々中濕氣倒影水面。人望之樓閣嶒峻。謂之蜃氣者。亦如虹謂之蝃蝀也。時有方士。於東海見虹起處。掘地得紅蟲。能爲媚藥。亦取其類應耳。所以古人以虹爲淫氣屬蟲也。」又曰。暈乃空中之氣。直遇日月之光。圍抱成環。其有缺者有團者抱者背者薄者厚者。皆是氣所注射。又有一等氣在天上。外淺中深如井者。深是氣厚處。日光所照似平深窈一般淺係氣薄日照之。故白色如井。欄。月暈者必在中天。必在望之前後上下弦之內。將晦朔時則無暈矣。然欲風雨月方吸其雲氣。而光所射以爲暈也。故暈氣漸稠而黑者雨徵也。有忽然去一邊者風徵也。忽然全去者晴徵也。然此地見彼地不見。緣其氣不甚高也。

晉元康元作十一月甲申。日暈再重。青赤有光。

金承安八年四月癸卯。日暈二重。皆內黃外赤。

朱文公曰。交暈如連環而貫日。兵起相爭。隋書曰。日有交暈。人主左右有爭者。

漢天文志曰。暈適背穴抱珥虹霓。孟康曰。皆日旁氣也。適日之將食先有黑之變也。背形如背字也。穴多作鐍。其形如玉鐍也。抱氣向日也。珥形點黑也。如淳曰。暈讀曰運。虹或作蝱。蜺讀曰齧。蝃蝀謂之蝱。表云。雄

日蚉。雌曰蜺。凡氣在日上爲冠爲戴。在旁直對爲珥。在旁如半環向日爲抱。向外爲背。有氣刺日爲鐍。々抉傷也。

元任宗延祐元年己亥二月。白暈亘天。連環貫日。〔覃按年表元延祐元年甲寅也己亥大德三年至元十九年也延祐中無己亥〕

順宗至正元年正月。有交暈。左右珥上有白虹貫日。

同二十五年壬□三月壬辰日有暈。內赤外白。如連環貫日。〔至正元年辛巳也二十五年乙巳也必有謬〕

續日本紀。元正天皇養老五年癸巳。日如白虹貫暈。南北有珥。〔養老五年辛酉也〕

日本後紀。桓武天皇延曆十一年壬申春正月。白氣貫。

三代實錄。清和天皇貞觀十六年甲午四月七日未時有重暈。白虹貫日。

土御門天皇建仁二年壬戌正月廿八日見兩輪。

寶曆九年己卯二月九日辰巳時。日有交暈。

管窺緝要曰。日有白暈歲多暴風。春霜雪民多病。白暈再重所見國多風雨。民不安。交暈貫日。其下破軍死將。交暈如連環。兩國爭地有凶國。日本後紀天長元年二月丙戌巳時日輪暈兩傍小有光。宛似薄虹。

〇野翁物語抄三條

病犬に喰れし妙藥之事

本所牛島に伊助こいふ六尺あり此者九歳の時病犬に出合遁れがたき所へ町內の人參り合せ病犬を追拂ひしがその內に手先を喰れける疵は少し故即血はこまりけれご見る內に夥敷はれ上りて痛强く堪がたし此邊に菅野梅翁こいふ隱者ありしが家傳の妙藥なりこて附たるに早速苦痛やわらぎ快成たりその時同樣に病犬に喰れたる十四五歳の友達あり醫師に掛りて療治せしがこれも疵は少し故當分は愈けれご

三拾日程すぎて大熱發し苦しみ死たり伊助は全妙藥にて生延たる故其藥治を傳授して病犬に喰れし人にあたふるに壹人も愈ずといふ事なし此藥血留にあらず血のとまりし時附る也日數過て疵口愈ぬれば功能なしといふその法

黄蘗の粉一匁　　薄荷一匁　　輕粉はらや五分

右三味玉子の白味ばかりにて解きはれたる所へぬれば毒氣ある內は速に乾て落る故何篇もぬる也はらやといふは水銀を製法したる粉にていづ方にもあるものなり三味共に價ひ貴き物にあらずそれ故富る人は返て疑ひを生じて信用せざるありおもふべし

病犬に喰れし妙藥は古金を煎じ服すれば金汁は冷性なる者故濕熱の犬毒を去り平愈すと云又蝦蟇の身をそぎて付るもよしと云へり此外治法種々あり是予が同僚丹羽七左衛門の物語也是等の事は心得置て人の急難をすくはゞ陰德の一助ならむ乎〔或書に見ゆ〕

草臥の藥の事

勤仕に暇なき者たまく遠道する時は足のうら痛み或はまめを踏出して難儀せりそれを助る妙藥を走虎散と云

生半夏　　辰砂　　黄柏　　犬山椒　　楊梅皮

右の五味當分細末にして燒酎にても膠にても鷄卯にても右三色の內にて解き足の裏指の股すべて痛べき所へ能々ぬり置ばまめの出來るといふ事はなくして心易く數里の道を往來する也足へまめをふみ出せしには鬼ぐるみの殼を黑燒にして糊にまぜ張れば一夜の內に痛を去り翌日步行するに少も愁ひなし是等の藥は覺居て人の助と成る事多きものなればこゝにしるしぬ

流行落書之事

頃日江戸の流行もの　長大小にあじろ笠　小額のこして柏木染　麻肩衣に藥草履　大胴亂に白茶柄
御廐平に麻羽織　京棧留に薄色足袋　軍學皆傳惣免許　諸藝の見分むだ騒　武藝の先生御役替　免許目錄金次第　替りの早ひ御役人　昨日の立身今日不首尾　役人四ッ時差ひかへ　御番御免で小普請入
剃下奴の御小納戸　撫付天窓の御役人　天狗咄に弃捐沙汰　惣拜借に年賦沙汰　往昔の役替金次第
當時の立身緣次第　緣有空氣は御小納戸　無緣でならぬは御番入　明和諸向が御儉約　今での御趣意に取締　唱へはかれど金の事　中から下に錢はなし　大町人と御役人　錢金溜る御奉公　賢者も貧では不許判　穩密風聞聽達　江戸中見廻勤仕並　草臥足の廻り衆　能ッなし小普請息子株　誹諧十種香花の會　內々碁將棋酒もあり　植樹唐鳥軍書講　いづれも手辨で六限り　連中殘らず若隱居　又は四ッ時諸役人　再勤望は加らず　舊惡すゝぎの古免許　近所の息子へ無理敎へ　逢對定日惣皆勤　御陰で武藝の御世話役　出家牢入儒者揚り屋　朱子學古學いぢり合　御世古法醫師問答
　藏板著述犬おごし　詩會會讀むだ咄し　聖堂御吟味十五以下　奧衆御吟味惣親仁　明地は殘らず大的場　高低有のは植付場　燒後の門に屋根はなし　あるは殘らず長屋住　大名旗本假玄關　町家はうち迄數寄屋風　安賣引札せり呉服　引なし札付古道具　團扇繪盡し刑事物　千社の張札皆石摺　七色茶漬手打そば　偖また町內減じ方　七分の積金藏が建　家賃年賦は矢のごとし　四文屋運上五文づゝ
　切見世運上二割增　田舍新見世大當り　大見世不殘再返り　地主迷惑道普請　家主難儀木戸の番
店賃嚴敷火の廻り　味噌薪油皆高直　安くて困る米相場　後世や菩提もといよふがなし
此落書は文の道に心あるものゝ作にもあらねば取べき見所もなしといへども移り行世のかたり傳る便りなきにしもあらずよりてその心をとりてこゝに記しぬ牛込大田直次郎が戯歌
　世の中にか程うるさきものはなしぶんぶといふて身を責るなり

まがりても杓子は物をすくふなりすぐなよふでも潰すすりこぎ
孫の手のかゆひ所へとどきすぎ足のうらまでかきさがす也
是大田ノ戯歌ニアラズ僞作也大田ノ戯歌ニ時ヲ諷リタル歌ナシ落書體ヲ詠シハナシ〔南畝自記〕

○禁裡萬歲之御式

此時所司代より警固出役無御座候又諸人の拜見も不相成候故に於彼地も誰も存じ不申候珍敷物にて御座候尤此書面とてもあらましに御座候

京都住　萬歲　小泉豐後

每正月四日紫宸殿御庭にて舞申候裝束は三位烏帽子〔此烏帽子古へ上より給はりし由申傳候〕大紋着〔但下は半袴の如く裾短也○大紋萠黃色ノ薄キ樣ナルモノ、ヨシ紋所丸ノ內ニ笹輪頭ヲ附ル〕服は紅の兩面の小袖〔尤無紋〕下に白無垢を着少サ刀を帶す舞時は兩人共に脫劔也歲若は萬歲烏帽子素襖着〔但下は半袴の如く裾短也○素襖花色肩に模樣有紋所無之〕緘熨斗目〔紋は丸の內に笹輪頭を附則小泉氏の紋所也と云〕を着刀脇指を帶す扨羯鼓中啓を持〔但豐後羯鼓を手に持手にて打之歲若は何も不持して舞地也〕唄ひ物は委敷は存不申候三番叟の舞の翁の舞に似よりしが始めには
トウ〳〵タラリ〳〵ラフ其次に壹本の柱より十貳本の柱と申神々の御名を申終て
德若に御代萬歲と枝も榮へ益マス愛敬ありける新玉の年立開日の朝夕より水も若やき木も芽も咲榮
へけるは誠に目出度候へける
北面の武士大紋長袴にて御階の左りに有て〔附小サ刀ヲ帶シ床几ヲ用ユ〕
勇みませいと大音にて申
其後のうたひ候は空穗猿の猿の舞にうたひ申候に似よりし樣に存候又

太子御誕生の事などあり其跡は年々替り候事に承候舞終候と五位殿上人中啓を持參にて御階〔御階十二段有〕六段目にて北面へ御渡し北面より豐後へ被下候弓場殿(コバドノ)〔此所土間故莚を敷〇弓場殿ハ日華門ノ邊ニアリ〕にて休息仕御料理御酒御鏡餅頂戴仕勘解由使青銅貳拾貫文米壹石持參にて中啓と取替に相成申候

中宮様へ參り候節御庭にて舞始り候と女嬬と見へて白小袖に緋の袴を着檜扇にて顏をかくし御階の上に立ていさみませいと大音にて申候と御翠簾の內大勢の女中の聲にて笑ひ候事御庭迄聞へ女嬬も早くかけこみ申候

頂戴物は御翠簾の內より段々紙に包し鳥目其外色々の物なげ出し頂戴仕候其內に金壹分五ッ五色の糸にて能々からみ候が壹ッ御座候是は

中宮様より賜はり候歟其外院の御所方右之通に御座候

宮方公家方は御召御座候得者參り申候御召これなきはまいり不申候〔附素足にて草履ははき候事〕

抑萬歲の濫觴者

神武帝の御宇大和國橿原郡におゐて音頭を取し者のよし也數代の後絶家す其後同州小泉村の者へ勅有てより以來其事を勤む元來名も無き者ゆへに唯千秋萬歲と申す名に稱し來り候然者いつのころよりといふ事をしらずまた小泉豐後と申ことも古き事なり淸明は同所の生れにして豐後方にては血筋のやうに申せども安家〔今の土御門家なり〕にては別家の樣に仰せられ候今に出入は仕候

右は或人の覺し趣きを書付侍りしとておこせるをこゝにしるすまた豐後がたにはいろ〳〵六ケ敷譯も有之候也

因に云萬歲の唄ふ節は幸若の唄ひ候ふしにゝより候者のよし也又能の狂言の空穗猿の猿の舞候時う

たひ候歌のふしにも似よりし物のよしなり尤時代は萬歲の方古く幸若はその後のもの也こそ

○朝鮮試官契會圖寫

通善郎行平安道都事南瑾〔季献壬子　丙子司馬丙戌別魁〕　栗里　宜寧人

父嘉善太夫禮曹參判兼王衞都摠府副摠官　應雲

朝奉太夫兼大同道察訪李弘老〔裕甫庚申　己卯司馬癸未庭魁〕　東皐　延城人

父通訓大夫行高城郡守　侃

通善郎行江西縣令朴慶先〔伯吉壬子　壬午司馬癸未別試丙戌重試〕　城西　竹山人

父通訓大夫行興海郡守　思恭

禁亂官

通訓大夫行順川郡守黃瑗〔伯玉庚子〕癸未別試梅軒　呂原人
父通訓大夫行軍資監判官　禹卿
入門官
通訓大夫行殷山縣監玄積福〔誠仲辛巳〕戊辰司馬南村　順天人
父學生　紹宗

○萬始統譜云　朴〔普木切姓纂云巴郡夷音變有七姓之後〕
〔漢〕朴周〔見印藪〕〔唐〕朴忠〔親軍指揮使〕〔宋〕朴景〔泉州人潮州通判〕〔本朝〕朴淳〔潘陽人永樂中任新安衛指揮〕朴元亨〔鴻臚序班宣德中使朝鮮交阯人〕朴素〔新安衛左所鎮撫幼孤事母極孝年十六母喪葬間致山去家十里素每日至墓泣拜雖雨雪無間後得壽九十七邦人敬慕之〕

○大佛古文書

態申入候仍大佛本尊之
御用候間からかね
壹萬貫目被買
調被差上木食上人に
御渡し請取上候可
被取置候代物之
儀は御藏米之內
を以可相渡可有
御算用候恐々謹言

八月廿日 長大 正家（書判）

増右 長成（書判）

淺彈 長政（書判）

德善 玄以（書判）

藤堂佐渡守殿 御宿所

○緣山三大藏經緣起

惟夫世尊出世也。度生而已矣。金口所宣十二分教。信用之者。發明自性。過絕苦海。是知聖教所在。即世尊所在也。鶴林示滅幾三千年。流化隆盛。宛如一日者。一是皆由有聖教也。佛國且々置之。東漢迄趙宋。千餘年間翻譯浸備。特以繕寫流通焉。宋元創有印藏。凡二十餘副。弘造華夷。元末兵燹。一時亡失。至明興南北二藏。其如北藏者。禁闕緘秘。請印甚難。南版雖聞許印。其制重大。價直甚貴。致請自少。爰有尼法珍者。欲募刻方冊藏本。簡便弘通。遂爲激發四方。自斷臂示其決志。於此海內感動。諸人戮力。至有破鬻產子應之者。三十年而始就其功。是方冊創制也。星霜還延。此版亦亡矣。萬曆十四年。有密藏禪師。追悼珍尼藏版烏有。欲纘興方冊藏版。化緣時熟。藏版經五六十年而成。是稱明本者也。京師檗山鐵眼禪師。刻大藏於我日東。功亦可謂偉大矣。然是明北藏。而脫誤甚多。不能無識者憾云。有高麗刊藏者。傳國王諱治。素信佛法。深慨震旦藏本。一興一廢。傳寫稍訛。遂致使震旦求宦（宦疑官）本。實趙宋至道元年也。其國素有前後二藏及契丹藏。殊令沙門宋其等參訂校讎。經斗四春秋。版新成。刊刻之久。先宋本二百三十二年。先元本二百八十三年。本邦現在藏本。無善於此版。無古於此版。高麗喪亂。此版亦委煨燼矣。日本大法弘通之盛也。宋元明高麗藏經往々藏之。豈得非佛法東漸之懸記乎哉、吾緣山三大藏者。第一宋本。第二元本。第三高麗本。其宋本者湖州路思溪法寶寺彫刻。南宋理宗嘉熙三年版也。蓋是二十餘副隨一者。日本後宇多院。建治元年。近州菅山寺僧曉入

宋將來。藏于其寺。元本杭州路南山大普寧寺藏也。自彼至元十四年。至二十七年。而版成矣。元第五主世宗時。以思溪福州二本校正。故名元本。亦是二十餘副隨一也。此藏未詳何人將來何寺所藏。或云。豆州走湯縣修禪寺藏也。高麗本後土御門院文明中。和州忍辱山圓成寺僧榮弘將來藏其寺矣。恭以緣山國家祖宗廟庭。蘋蘩如在秘閣。神祖孝思之厚也。下命管山圓成之寺。致其所藏宋元高麗全本於東都。各報賜食邑若干地。完聚三大藏。以賜緣山。爲永藏焉。嗟湯々神祖之貺也。該異域而有之。並古今而存之。雖大東富有。而非神祖聖恩。何以得値斯盛典哉。昔者世尊以法囑累國王者。蓋在於此乎。佛門進學之徒。依此以學。依此以行。則値遇佛世。亦何異之有。然此大藏。往々一經異題。異譯同經不尠。或所盛函號各殊。卒見難分。故今選述總目錄三卷。題曰緣山三大藏目錄。對辨三藏異同。以便於遁校者云。

延享戊辰佛圓寂日

緣山知藏〔隨天〕謹誌

〇寛文年中當世はやり物

肥前本ぶし　やりかんな　人くひ馬に　源五兵衛　新田そしやうに　けいあんや　き舟道行　さんやうた　河崎稻荷　大明神　りうきう人の　こりさたに　唐人下るが　合てんか　たうせん舟の　きのぼりに　鎌倉道心　日參や　古作佛に御すゝめ　いつもたへせぬ　觀世音　さん谷へ通ふは（此字虫ハミテタシカナラス）　駄ちん馬　八文もりの　けんごんや　淺草町は　よねまんぢう　大六天の　かうか山　すほうし立て　かうやくや　はやり過たは　江戶じゆんれい　こふゑひ山の　万日に　牢人さるを　たいじして　八人ざこうの　見世物に　仁王の助が　大ぢから　見に來る人は　布引の　瀧井山三が　をんながた　しばいノ＼は　さかりなり　よゝもゆたかに　をさまれば　一より十まで　よろこびの　いはひの初は

何々ぞ　一能物を　御しおき　二ごり酒をば　つくらいで　三ごく迄も　すみわたる　四海の波もしづかにて　五よは長久　あんぜんに　六に天下も　をさまりて　七斗したるも　いちこくこ　八木やすく　なりぬれば　九るしみしたる　萬民も　十樂ありこ　よろこびて　百王百代　あふぎつゝ千秋樂を　舞こかや　萬物もみな　みのりつゝ　なゝ奥州の　はて迄も　くわんぶん／＼こ　たのしめり

○奇　疾

上野國沼田郡沼田村曹洞宗玉泉寺の末寺同郡座麻村廣福寺住僧勇亮長老其性凶悪にして師の和尚「名を失す」をも兩度殺害せんこせしほごの僧なるよし此廣福寺門前に一人の寡婦あり家貧なれば素より獨住なりいつのころよりか勇亮この寡婦に密通して折々通ひしに叉近きわたりのたわれ男兩三人も忍びて通ふよしを聞て勇亮いかりにたへず或夜ひそかに斧を提て行てかの寡婦が頭上より割下し死體を刀根川の淵にしづめぬ家に人なければ知者なし淫婦は人にいさなわれて家を出行しならんこ近隣の人々も尋る事なくてやみぬさて其後日をへて勇亮背中に奇腫を發し日ならずして其形狀女陰のごこく漸々陰毛を生じ眞の陰門のごこしさしもの悪僧慙愧恐懼にたへずこいへごも人に語るべくもなく醫を頼むべくもあらで治療する事あたはず月日をすぐ今は膿血も出ず疼痛臭氣もなく痒ここもなく自然生れつきたるがここしせんかたなければ罪障滅除のため西國三十三所の觀世音を順拜せんこ思ひ立て寺を他の僧へ讓りて廣福寺を退き去年己卯の初秋旅立て七月十四日小濱空印寺へ立寄る然に今方丈に隨從せる惠亮こ云僧勇亮こ弟子兄弟なれば久々にて對面を悦び折から夏中なれば數日淹留すべしこ止て方丈役寮へも中屆衆寮におらしむ勇亮も兄弟の名ある惠亮なれば傍に人なきをりを得てありし事ごも自ら犯せし罪條を語り則肉袒して背をみするに惠亮うかゞひ見て肝をけし驚しが云べき詞もあらざれば

只罪のほろびんは懺悔にしく事あるべからず衆僧にも語られよとすゝむれども曾てうけひかず却て惠亮を疑ひ此事他聞にもらさば其まゝには置まじと云により只心中に慙愧するばかりなりされども不便なることに思ひて少なりとも罪をかろめやり度人なき折を伺ひ方丈へ來り道海和尚へ子細を告げ和尚も奇代のことゝいぶかしくも思はれて一度見ん事を望む惠亮も罪障消滅のため和尚にも見せたく思へども再び勇亮へ云出る事も叶はねばさまぐ\考へ工夫して晩來彼僧湯をひく折をまつて覗き見給ふべし其心得すべしとて夕べをまち寮の庭に盥を居へ外面の方を向はせ背をうしろ此方になるやうに仕度しぬさて勇亮か行水にかゝるを待て方丈へ告ぐ和尚も見咎められなばいかなる騒動を引出さんも計がたくて恐る\/衣をかゝげてさし足して連子窓の破たるひまよりのぞき見られしに惠亮が云しに露ばかり違ふ事なく今は年月も經しにや陰毛なかば白毛交りて見ゆ此僧當卯四十四歳になりぬるよし同年の霜月道海和尚物がたりありて猶惠亮をも其席へ呼出して委き事を語らしめられし勇亮は順拜をいそぎて七月十七日空印寺を辭して出ゆきしとなん積惡の殃報面りなることゆへ例の矢立腰より取出て記す

當正月空印寺へゆきし時彼惡僧の終りいかに成しやらんと問しに彼順拜をとげてのち又關東へ戻りぬ上州神戸（カウト）清水寺の近所に洞源寺といへる小寺あり檀家なくして寺退轉せしを近ごろ本寺より再建をなさしめて形ばかりの小庵をむすび爰に勇亮を居らしめて舊冬より此寺に住りと

清水寺は天產和尚此寺より空印寺へ入院なり

國手杉田元伯記

○萩をめづる詞

老ては物いきよう（キノマヽ）すくなきならひなるにいとゞ病がちなる身のよろづにものうくてうちこもりてのみ日をふるをある人まで來て萩もやゝさかりになりぬなどか野へ見にとは思ひたゝ（明カ）ざるかしこの御寺こ

この園生などとり／＼に人あくがれゆくとぞいふなるいざたまへかくてのみやはなどゝそゝのかせばさすがに心はうごけどかちよりゆかんさかひは杖ひくほどもはるかなるべく又あまりに人のしげからんもむづかしかるべしといらふるをいざやわがいざなひまいらするはさるかたならず君もしり給ふらんすみだ河をさかのぼる事いくばくもあらで入ぬるいそに棹さしとゞむる所なりといへばさりけり／＼そはわれも問ひなれたる宿ぞさるは人の往來も見とゞすくなきあたりにて舟路のほどもたゞならぬをとこもなひゆく舟よりおるれば白ひげのもりを左に秋葉の社を右にして秋のけしきなか／＼に世はなれて見ゆるもをかし門さし入ればあるじよろこびてむかへいづみさかなにはなによけんなどいふもつき／＼しうやがてあはびさだをかにはあらぬいも根ぬなはなど所につけたる物調じいでゝあるじしたり酒たうべつゝうちながむるにはたはり廣き庭をいくむらのにしきをかしきたらんやうにうゑわたしたるはいと見所ありこれは宮城野の種なりといふげに花ふさ大きやかにてながくれたるは世のつねのにほひならず

　さをしかもさそはれぬべし宮城野の秋をばこゝにうつし來にけり

あるじにさかづきさすとて

　いざさらば袖にほはして秋萩の一花ころもきてやかへらん

かへし　いくたびも露わけ衣きてをみよなど一花と思ひおくらん

ある人　花にそむ心ぞあかぬ夕かけてわれもひもとく萩のあそびは

又あるじ　くれぬとも家路なとひそ秋萩の色なる露に月やゝどらん

よるのにしきにはなさじとおもふあるじの心ばへもたゝまくをしきゆふべになん　春海

右梅屋麴塢壁上ニ所有寫　〔辛未九月二日〕　杏園

○戯子市川團之助書置寫

おきくごのへ　決してなけくまじく候身を大切に母並千之助事たのみ入候

母　様　へ　先達候事深しきつみ御ゆるし下され幾久敷御長壽ねんじ入候

千之助ごのへ　我一心かくご極て死するたましゐ此及物守り刀になされ候へ死ぬる刀にてはなく候

諸縁者親類門弟方へ

我身ふがいなく折あしく病出緣ある櫓へはぢかける事に成行候き防くべき事ならず親の讓し此身も友に名をけがし恥をかき時こは云ながら運あしくぎりをかき恥をかき生て居る事つらく長生すれば恥多し身を全ふして生のぶるこもついには死する身也自害する不孝のつみ寛したまへたゞあご〳〵の事くれ〳〵よろしく賴入る人々の志しをむげにいたし候には似たれども餘り運あしくゆへ此後の命思入候上方兄弟其外貝塚屋へも其外へもよろしく

市川團元悴

俗名　市川團之助〔三十二歲〕

〔辭世〕　田の春はきのふ也けり冬至梅

文化十四年丑十一月

人せうあれば命ある内はつらきひこ〳〵こうらむる事もあれども死ぬるなごこいふきたなき心はなしあこにも天道ましますす其人々死ぬ迄を見よおのづからしるべし我はかまわぬ

○四方眞顔長歌

山道ぬしにつきてあやまちをわび參らす長歌

松しまや　をしまの海人は　こゝろある　ものこ油斷を　しほがまの　しきうつしゝて　くれがしの

ゐんぐわなことは　何がしの　そのもしを草　かきかすめ　おもはぬかたへ　鼬けふり　ふきかけさせし　くるしさに　ちかくは千賀の　うらみをも　いふべき物と　玉くしげ　箱館迄と　ふたりながら　たちにし旅の　衣川　ひもへだゝれば　あし垣の　まがきの島屋　便りにも　かこちやるべきやうもなく　いはで忍の　すりものゝ　えぞしらぬ共　今さらに　ひきかへされぬ　南部駒なんぶんこまり　入る鹿の　あとくさらしの　野邊の露　みかさと申せ　宮城野の　たのむ木の下　雨もりて　ぬれ衣をさへ　そのうへに　おいぬ河原の　狼の　尾につまづける　おもひをし　人には葛のまつばらの　葛をとるてふ　しからごと　世にひろごりて　あなかまや　馬上が辻の　馬市に虎の出べき　やうなしと　空にたゞすの　神あらば　天道人を　ころさゞる　鹿相曾子の　誤りの前後古今の　相違をも　深くとがめて　おほかたに　あさかの沼の　はながつみ　かつもつて身におぼへなき　こゝとおほして　曇りなき　こがね花咲　山道の　水晶輪に　照らしてよ　たのむかたには　はゞかりの　せきとめられし　むらぎもの　心の奥の　ほそ道を　よしな〳〵に　取なして緒絶の橋の　中たへず　行かよはんを　いつしかと　松前昆布の　肩ひろく　きのふにけふの　細布の　身すぼかりしを　忘れなば　君が情は　中〳〵に　忘れず山の　わすれまじ　かくはたのめど最上川　瀬々の岩波　わきよりも　さはりてありて　いな舟の　田舎に下る　ものともが　のぼるをまてと　きこへなば　此月ばかりか　いく月も　安古屋の松に　木がくれて　出べき場へも　出られず　阿武隈川の　うもれ木の　もくしてやまん　身をなにと　仙臺百の　永く世に　目も出ぬ物となりはてん　それにつけても　玉川に　友まごはせし　うら千鳥　よびかへしつゝ　わきがたき　白黑塚に　鬼こもる　ひとつ穴なる　うたがひを　とかんと思へど　これもまた　交り深き　みちのくの　千曳の石の　心地して　になはゞあふこ　をれひとり　かぶりてやまん　しら管の　眞野のかや

原　かき分て　笑はれ草の　種かしま　玉をさがして　何にせん　こはおもへごも　悔しさの　涙の
玉は　保呂津木の　濱邊に拾ふ　津輕舍利　人まごはせの　えせはごは　今弘法の　はこのかひ　今
西行の　似た山こ　岩城の富士の　夏の雪　あまりもろくも　いひけたれ　露しら河の　秋の風　い
こすさまじく　吹あれて　巴がいたる　扇たに　捨られぬべく　なりゆけば　うちはもこより　外が
はま　そこしたここも　語りつぎ　いひ續〳〵に　呼子ごり　入内雀　むらすゞめ　たけき事こは
武隈の　鼻はひしげて　さもらへご　松の二たび　よき人に　みきゝ直して　無名ぞこ　名取の桑子
　御機嫌の　直るたよりを　きぐるみの　神の歎きに　かしこくも　おもひたぐへて　祈る也　哀む
かしべ　ありきてふ　泣辨慶の　立ながら　終に朽けん　錦木の　取あげ人なき　うれひをば　君な
らてたが　きこへあげん　取持給へ　みこらしの　あだちの眞弓　押かけて　たのむ心は　本よりも
　おばへ七ふの　菅むしろ　みふせうながら　歌垣は　四方につゞきて　高ければ　そねめる人も
大木戸や　突棒さすまた　さすかまた　さしむかひては　なじり得ず　えやみの神に　あつらへて
あたむくふてふ　ここわざの　おろか也ける　おろち塚　草のしげみの　かげごこに　舌を出してや
　よころばむ　誰笑ふこも　よしやよし　誰そしるこも　よしやよし　君が會津の　ひきものに　ひ
き合すべき　末いまつ　なみをこへたる　うしこわが　契つきずば　象潟の　月も流人の　たすけ舟
　こぎもごしつゝ　清川に　恥をすゞげる　湯殿やま　月のみ山に　うやむやの　雲霧晴て　吹風を
　なこそこゞむる　關の戸も　秋田紫　最上紅粉　あけや奪ふこ　にくまれし　伊達の錦繡　それも
また　おもむき馬には　うは荷うつ　世のここはりの　くるしさを　かきつくしたる　ここの葉に
あかき心の　あらはれて　玉田横野の　横言も　やがてかれなん　あせみ花　手に汗握る　わびここ
に　つゝじが岡の　つゝしみて　おかさぬ罪や　しらるらむ　しらるこならば　しかすがに　にくみ

給はじ　にくまずば　反古になしてよ　何ごとも　巻そへられし　壷のいし文

うちつけに君をぞ頼む手を摺れご墨つきわるき壷の碑

すくひてよ稀代不正の名取河名を流す目にあひの狂言

四方歌垣眞顔

○日本一阿房鑑（忠臣藏狂詩植木鑿峯）

忠臣藏狂詩集序

予嘗讀毛唐人所著蒲東崔張珠玉詩。而感心乎其叙事體裁。奇妙頂禮屋之仕打矣。遂猿之人眞似。倣西施之顰。賦忠臣藏十一段之詩。詩成而讀之。其一向不面目者盖何也。嗟乎予下手雙六。才之弱固亡論。且夫我邦之於唐人也。彼以其陳奮翰。我以吾伊呂波。其方角亦東西隔絶。奚翅馬道牛町。風馬牛之不相及也。而漫使唐人之聲色。爲我邦之狂言。折骨愈多。取落愈少。南郭小督詞。不及樂天長恨歌。古人已有評判焉。況乃詠儀太股引之下卑、以擬李杜王孟之高調。猶之歌新内潮來于琵琶。而合奏東北高砂于笙篳篥也。可謂不案事之至矣。予有開悟于此。遂棄陽春白雪鰷之上品。新製下里巴人之駄佳詩。詩凡十有一首。名曰忠臣藏狂詩集。比之前之四角四面眞面目作者。似頗得浮瑠璃之趣矣。因又題數言於大序。以授門人。永爲太夫直傳之正本云。

頃歴元年二月下旬半下旬半可山人題下于無二風雅一無二洒落一山手艸堂上

忠臣藏狂詩集　　半可山人著

初段

當社造營全事終。萬民如ㇾ艸太平風。新田乍ㇾ敵淸和末。足利將軍尊氏公。奉納誰爭五枚胄。代參共仰八幡宮。只緣二桃井能堪忍一。師直運强還御巾。

二段目

管領屋形馳走儀。判官使者入來時。娘傳二口上一胸頻踊。母押二脊中一積レ未披。短慮何思奥方歎。誓言難レ背主人詞。本藏心底則如レ此。切落緣先松一枝。

三段目

古歌添制已推量。忽見喧嘩及二刄傷一。何處更追二師直一詰。無レ端却被二本藏妨一。眉間薄手仇難レ報。存外過言恨未レ忘。時有二勘平誤耽一レ色。遙聞二騷動一暮二途方一。

四段目

撿使悠々切腹場。判官覺悟已尋常。無紋請看最期式。羽織莫レ嘲當世長。不三獨御臺迫二悲歎一。並居諸士共愁傷。只應下早渡二屋舖一去上。何用更迎二討手一防。

五段目

擬下向二挑灯一借レ火行上。忽逢二朋輩一兩方驚。石碑料爲二亡君一重。合羽裾陵二大雨一輕。强慾白波街道働。老人暗夜最期情。非レ猪却打二眼前敵一。天使三用金與二勘平一。

六段目

三十可レ憐成不レ成。勘平切腹若何情。賣レ身長使二女房苦一。殺レ舅誰言天道明。金爲二石碑一難二用立一。疵二非鐵砲一始疑睛。應レ知武運未二全盡一。連判新加一味名。

七段目

相逢先問趣二鎌倉一。連判憑レ誰加二寺岡一。非レ色却談身受事。有レ聲難レ捕手鳴方。雜炊自食鴨川水。藝子爭塗淨土光。出レ手何妨還戴レ足。主君逮夜未二曾忘一。

八段目賦二得道行旅路嫁入一

浮世誰云飛鳥川。淵翻成瀨々成淵。大津未泊土山雨。薩埵猶迷富士烟。浪々住家何在。遙々旅路母為連。上京但使祝言整。行末那達妹脊緣。

九段目

漸窮覺悟殺娘遲。未練猶思智力彌。靜捧三方於石出。遙吹尺八本藏窺。何圖小浪祝言日。即是大星發足時。欲識消行此身果。庭前雪積五輪姿。

十段目

儀平守義復誰疑。遮莫我身及難儀。暫叱女房書去狀。又防捕手上長持。芳松尙慕於園乳。了竹元來是藪醫。別有伊吾後生樂。夜中混雜不曾知。

十一段目

相圖呼子夜方闌。亂入何人不潰肝。後陣遙追先手勇。大槌却並半弓闘。刀傳形見討師直。首逢本懷備判官。是亦久敷君代例。義臣之譽此書殘。

跋

忠臣藏狂詩十一篇。吾半可先生之所著也。其妙在于半言隻字。悉生擒淨瑠璃文句。而聲調格律。全使盛唐之身振聲色焉。彼碌々出來合狂詩家。不及企及。固不待余喋々評判記也。雖然世之作詩者。未解淨瑠璃。語淨瑠璃者。何嘗知詩。是以上不入於文雅之棧敷。下不落於俗物切落。惜乎此篇之妙而不通用也。所謂雖有嘉肴。弗食不知其味者非邪。但天下後世。必有半表半裏與半可先生同病者出。始可與定此篇之大極上々吉已矣。

受狂弟子　　穆念仁謹識

○一言奇談

○ちかき頃にや秩父邊の百姓みづから鉄砲をもて己が胸をうちて死すその書置に云く　うき世にあき果申候

匹夫不可奪志咄々西行長明一農父ニ愧ベシ

○ある人耆山上人のもとにゆきてこの比うちつゞく雨にあく道のつらきと申ければされば垣の木に人まれなりと答へ給ふ

彌天釋道安覺レ未レ妙

○寛延二年己巳耆山上人三緣山を出て青山の草堂に隱れ給ふ口すさみに

百が味噌二百が薪貳朱が米壹分じまんの年の暮哉

瑣々タル鄙語一轉シテ大雅ニ入ル

○耆山上人いわく皮相の士はともに語に足らず人その舞臺を見てその樂屋を見ず西行が飛呂敷包背負てあじろの笠かたむけ風になびく富士の煙を詠め居たるはこよなふ心すゞしけれど獨りあるく旅なれば褌に貳分はなくてかなはず兼好がつれ〴〵なるまゝに日ぐらし硯にむかひて見ぬ世の人を友とし庭にかけひの音なふけしききチヨン〳〵の拍子木すみやかにキリ〳〵とうしろへまはらば樋杯瓶はさらなり飯櫃味噌桶酒の通なごあるべし

一段ノ奇快鬼神モ情ヲ隱スヿアタハズ

罵言甚シ

○ある人平賀鳩溪に扶持をあたへんといひければ辭して曰旦那の飯粒が足のうらに粘ときは不自由なりと

畢章コレ少ナキヲ嫌ヘリ

○優人瀬川路考赤坂の一諸侯に寵せらるある人の曰アカサカノハマムラヤ〔濱村屋ハ路考ガ家名ナリ〕

○余かつて明詩擢材といへる書を著して書肆にさづく書肆のいわく書の名四字にして長し願くは明詩擢といたしたきと

必是會講古文辭來

○余髱頭舗にて髮を結せ居たるに田舎者來りて道を問ふて曰寺町の犬寺へはごふ參ります〔牛込寺町ニ猿寺アリ〕

昔趙高鹿ヲ馬ト云シヿヲ聞ク未ダ猿ヲ犬ト云ヿヲ聞カズ

○ある俳優のせりふに親の敵を打たんと朝三暮四に心をくだくといひけるあまりにことばをゑらびて猿になりたるもおかし又わが掌の中にありといひて指にて胸をさしけり心に棚をやつり置けんいぶかし

○余かつて平賀鳩溪に小說の書き樣を問ふ鳩溪が曰小說は戲れごとなれども實事を踏み不申候てはあさとく聞へ候夫も書の體により候譬へば針を棒に云なすは虛の虛なり箸を棒とするに虛の實なり棒を棒にて削て遣ふは實の虛なり棒を棒にて遣ふは實の實なり都て小說は箸を棒にて遣ふ體にて然るべし〔鳩溪稱呼は源內風來山人天竺浪人と稱す著す所の根無草志道軒傳神靈矢口渡等人これを傳誦す〕

辭微而切

○今の春畫に女の孔門を畵ざるは西川祐信よりこのかたなりと山岡澹齋の話なり

○平賀鳩溪が曰詩歌は屁の如しと其不用意を以て得るをいふ又つねにいへらく味噌の味噌臭きと學者の學者臭きはさん〲の者なり

詩集ノ二稿三稿ナル者ハシゴ屁ト謂ツベシ

○又いはく人の世に交はることゝ錢湯に入るが如くせよ穢を以て穢をおとしかゝり湯をして出たる時我身はいつも清淨なりと

○宇野三平のもとに門人來りて曰この比ある儒生大井川に遊びて一句を得たり舟上筏下大井川と三平笑て曰われ好對を得たり名堅人柔石垣町〔豐後節の文句なり〕

○徂來先生近松が曾根崎心中をよみて七ツの鐘が六ツなりて殘る一ツが今生の鐘のひゞきの聞をさめといふに至りて卷を擲つて嘆じて曰近松が妙處この中にあり外は問ふに及ばずと

○南郭先生の曰儒者も冬至を祝ひて周の正月とてうれしがる内が樂なりと

○又いはく字彙は儒者の雪隱なり一日もなくばあるべからず然れども時々その臭きに堪へずと

○春臺先生のいはく六朝の五言古詩は酒のかへりて酢になりかゝりたるなり味ふべからず唐の五言古詩已に酢となりたるなり猶味ふべし

有味

○友人遊女を迎へて箕箒をとらしめんとすある人諫めて曰遊女を迎へて婦となすは溺器を洗つて飯櫃となすが如し百たび洗ふとも潔とせんや

　髒々乎猶蛇日以灰汁一洗

○予小島橘洲と品川を浮遊せしに橘洲戯にいはく三さか屋といふ茶屋の娘甚美なりと予いはく三さかやは何よけん〔催馬樂みさかなは何よけん〕

○友どちと同じく日暮の里に遊びて酒肆にいこふ此ところの名物なりとて薯蕷の田樂を出す價をとへば六錢と答ふ皆其價の高きを笑ふ予がいはく價高しといふ事なかれもし是變じて鰻鱺とならば直八

鋟

俗耳耳掻詩膓瀉剤

○春の末つかた友どちにいざなはれて品川のほとりへまかりける道すがら麻布櫻田町にて茶屋にいこふ聯あり額あり掛幅あり盧同が茶の歌など壁上に題せるさまいとつき〳〵し年の比四十計なる亭主みづから茶を供ず予戯れていはく主人風雅を好めるとみへて聯額の書面白しと亭主微笑していや借り集めたる聯額なりといふ予その言葉の謙なるにめでゝ瓶中の桃椿を題にて

茶ぶくろの紐解そめて三千年と八千代の花の店ひらきなり

是からはこゝを休みとせんじ茶のよし戻りにもよりな山清(サンセイ)

硯箱を乞ひけるにまた清雅なる器なり予出て橘州に語つていはく借り集めたるとは面白し双丘の老つねにこの趣あはひを喜ぶと

○木室卯雲下谷にて火災にあひ藏の前に札を立て曰質物一切うけられ不申候

○卯雲の宅に酒呑童子の土佐節をかたるかたり終りたる時卯雲出て曰唯今の御上るり酒呑童子おしなべて感ぜぬものこそなかりけれ

○優人坂田杉曉清玄になりし時よきあくたいあり此清玄ははもので喰はぬ物は大天狗小天狗四足でくはぬものは巨燵やぐらときやたつ

○稻毛屋東作が日町人の武士つき合いらぬものなりにくい奴とてきり倒されずは甘ひ奴とて借り倒さるゝなるべしいづれにも怪我のもとなり

○其磧がいわく三味線と章魚は血をあらす物也

○俳諧師和推いはく三味線と孝行は男のしらで叶はぬものなり

○華嚴寺鳳潭徂來に謁して曰われ京都にて仁齋に逢ふ仁齋佛をそしる事甚し先生の如きは然らずと徂來笑て曰佛をうつ計があの男のよき處也と

是東海聖人語氣

○元祿の匿從郎八木某が曰盃の二盃目と一僕の供のきれたるはわろき物なりと

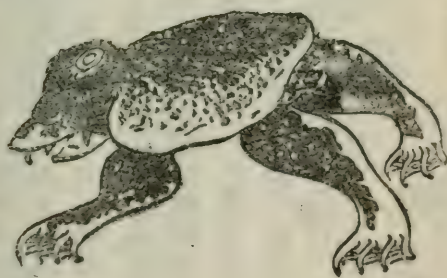
○河童圖說

享和辛酉六月朔日水戸流より上り候河童丈三尺五寸餘重さ拾貳貫目有之候殊之外形より重く御座候海中にて赤子の鳴聲夥敷いたし候間獵師ども船にて乘廻り候へば海の底にて御座候故綱を下し申候へばいろ〳〵の聲仕候夫よりさしあみを引廻し候へば鰯網の內へ拾四五疋入候ておごり出〳〵迯申候船頭ども棒かひ抔にて打候へばねばり付一向にかひ抔きゝ不申候其うち壹匹船の中へ飛込み候故とき抔押かけ其上よりたゝき打殺し申候其節までやはり赤子の鳴聲いたし申候河童の鳴聲は赤子の鳴聲同樣に御座候打殺し候節屁をこき申候誠に堪がたきにほひにて船頭抔後に煩ひ申候打候棒かひなど青くさき匂ひいまだ去不申候尻の穴三ツ有之候惣體骨なき樣に相見へ申候屁の音はいたさずすつ〳〵と計申候打候へは首は胴の中へ八分程入申候胸かた張出し脊むしのごとくに御座候死候て首引込不申候當地にて度々捕候へ共此度上り候程大きなる重きは只今迄上り不申候珍敷候間申進候以上

東濱 權平次

六月五日

蒲山金平樣

○唐唐春

翠溪老人云。正月元旦詩人天民先生宅小集。其相會者。曰儒者五山先生。曰業書者星池先生。曰同前龍山先生。曰畫工竹沙先生。餘外則醫者二三人。我忘其姓名。各爲其所長以樂驩虞如也。星池先生揮筆。書唐々春三大字。終而先歸。而諸先生不解唐々爲何義。或曰星池不學也。偶爾書之而已。或曰唐々爲荒唐之義。不

宜元旦。既而酒酣。罵星池益不止。星池先生門人在傍。不堪聞其言。走歸而告星池先生以前件一事。星池先生勇猛士。赫怒曰。蠢爾小人。何不遜之如此乎。乃作簡。其略曰。諸先生不解唐々爲何義。而漫罵僕。謂僕不學。是諸先生之不學。而非僕之不學也。若欲評僕。則宜讀萬卷書而後斷之。唐々春則唐人李咸用之句。而近出于唐詩金粉。幸勿吝報音。諸先生開緘讀三四。無以答焉。五山先生温柔君子。見使者曰。如來命。僕等不學之過。以觸先生之逆鱗。罪無可謝焉。既而日西傾。各歸。不佞偉知繪事而已。不達文字之事。故不知其孰是孰非。子以爲如何。且質之綠陰細菴二先生。則日咏蠶詩。眞然否。北臺主人爲之一大息曰。聽獄吾猶人也。必也使無獄乎。就全唐詩中。書李氏春雨詩一首。以贈雪溪老人。其詩曰。大帝閑吹破凍風。青雲融液流長空。天人醉引玄酒注。傾香旋入花根土。濕塵輕舞唐々春。神娥無跡莓苔新。老農私與牧童論。紛々便是倉箱本。

庚辰春日北臺主人書　［公簡］［子文氏］　因是先生ノ隱名也

いまはむかし都のかたほとりに手かくわざをなりはひとして時におくれ世にあまされたるふる翁ありけりみづからは時におくれたりとも思はざれば世のまじらひも思ひたえずしてこゝかしこさらぼひありきけりあるとしのむつきはじめ時のはかせのもとにその名きこえたる人々つどふ事ありければこの翁もまけじ心にやあらん例のふるのしめのいたくわたすいいでたるに上下はかたのほとりくじらのかしらさしいでたる引まとひていでたちけるおのれありくとは思へどあしこしもとみにはうごかねばまなこのみかしこげにうちはたらかしてからうじてはかせのもとにゆきけりこれかれの人々うちつどひたるむしろのはしにもをらでみづから思ひあがりてあれば人もゆるさぬむかひ座になんをりける人ごとにめまぜしつゝさゝやきわらへどもとよりものにうとき本性なれば得さとらずさて人々時にあひた

るふみつくり譜かきなどすれどもとより筆のあとこふ人はさらなりかきてんやといふひともなければものかく人のかたうちみやりてねたみをりさてはつべうもあらねばこゝにつどひたる人々をかきわけておのれ時にあひたるとひとつかきてんとて人もすゝめぬをみづから墨すりながし筆うちしめしなどするさまいとをこがましさていかなるとか書いづると人々まほりをればいとおほきやかなる紙に唐々春となんしるしける人ごとにあなおぼつかないかなる事ぞとかたふきゐたれどさすがにまのあたりはとかふもいはでたゞれいのひがごとよと思ひてなんいたりけるはじめこの翁のおもふにはかくこひもとむる人もあらねど一ひらかきはじめなばそれにつきて求むる人もぞあるとて筆をおろしつれどふつにこふ人もあらねばさすがに人わろくてこゝにありつかぬこゝちやしけんいつのほどにかかきけすやうにかへりければまかりし跡にてかたふけいふ人もぞあると思ひて青士ひとりひそかにひそまりはひかくれておるともしらでかの翁かへるすなはち人々ほとわらひて今かきつるを見しやいかなるとぞ唐々春とは物にあたりてまどふ事をこそいへはつ春のことゝいみするならひにはたがひていといま／＼しきとならずや自からはよきことゝおもひてやかきつらんあはれあくまでものにくらき翁にこそされば世にあまされたるもことわりなりけりとてたゞこのことをのみかたらひぐさにてくちのかぎりきわめのゝしりければかのむしろのはしにのこしおきける青士このことをきゝてえたへずしてすべりいでゝときあしをいだしてかの翁の元にぞつげしかば例のかしこげなるまなこめくりかへしはなのわたりおごめかしてひぢもをるゝばかりうちいからしていきまきいふやうさればこそ人はのこしおきつれいとくちおしきわざなりかくてはえやまじ人々のあかれぬさきにいまひとかへりとくゆけせうそこかきてんとて筆もちふるひつけてかの青士にもたせてとく／＼とていだしたてつ主のいふことなればいかゞはせんとてまたときあしをいだしてかのはかせのもとにぞいたりぬさてかのせうそこをいだしゝかば

人々うちよりてみればおのれまかりし跡にていとあしさまに人たちのかたふけの給ふよしとくつぐるひとありてたしかにうけたまはり侍りぬそは人々のまなびのいまだいたらぬにこそあれおのれがあやまちにはあらず唐々春といふことはもろこしのなにがしが詩にあるをもしらで〔晩唐李咸用詩〕とのたまふはいかにぞやいまよりのちよくふみ見たまひてわが筆をばそしり給へとなんしるしたりなみ〳〵のひとのかゝることいひたらんにははらだゝしく思ふ人もあるべけれどとまれかくまれかのしれ翁が何がしが詩をわろく見あやまりて〔散人云非誤解詩是不知詩也所謂少所見則多所怪者矣〕かくいふことなればれいのものにこらへぬすがよとてかたはらにうちすてたるをつかひのおのこ御かへしたまはらんといへばあるじのはかせのいふやうかゝる事にはかへしせぬこそおゝしけれたしかにうけ給りぬとくちづからいへはつかひのをのこかしらうちふりて御かへしとりてまうでこと家あるじのいきまきのたまひつればかくてかへりなばかうぜられなんひたすら御かへし給はらんとおしかへし〳〵いへばあるじのはかせいまはすこしおもかはりしておのれずさよかゝるとのつかひするからはかの唐々春といふとの心わきまへてまうでこしやととへばおのれは使のことなればえしり侍らずことのよしは御せうそこにぞあらめとこたへしかばさてはわらはべのつかひにひとしきわざなりわらはべの使ならばそれかやうに詞がへしせでとくかへりねとあらゝかにいはれて〔又云玉池語氣如親睹〕いまはせんすべなしとてかへりぬのちはいかなりけんさてのこりたる人々いふやうかのしれ翁こぞの冬ものゝ借はたられしにまどひしかそれのみではたらずて春までもまどひしならんさらば唐々春とはかきつらんとて人々うちきようじけるとぞ

或云梧園和文也

唐詩金粉巻一詩令部春

唐々春〔李咸用濕塵輕舞唐々春神娥無迹莓苔新〕

落ばなし

近來栗山北山の山崩れてより文字が關の大道ふさがり唐船の通路あしく大ていの金三兩以上の唐本は一向うれ不申と深艸の本屋丸麥やがなげく夫故全唐詩集などの大部なるものはみるものゝなく手ぢかき唐詩金粉さへしらぬ詩人もありといふに丸麥屋首をかたふけて金粉はしらぬはづなりことしはつ春の狂歌師のすり物のつかひなくしたりといふ

元日のあさ上下にふるのしめ魏々唐々の春の書ぞめ

直の高き全唐詩をば讀ずともせめてこがねの砂をふれかし

からくと笑ふ門には吹風も於玉が池にちらす金ふん　兀阿房

〇欹器之圖

孔子觀於魯桓公之廟有欹器焉。夫子問於守廟者曰。此謂何器。對曰。此盖爲宥坐之器。孔子曰。吾聞宥坐之器虛則欹。中則正。滿則覆。明君以爲至誡。故常置之於坐側。顧謂子弟曰。試注水焉。乃注之水。中則正。滿則覆。夫子喟然歎曰。嗚呼。夫物有滿而不覆者哉。敢問持滿有道乎。子曰。聰明睿智。守之以愚。功被天下。守之以讓。勇力振世。守之以愚。富有四海。守之以謙。此所謂損之又損之道也。

講　義

孔子魯の國の御先祖桓公と申まいらせし君の御廟に入て見給ふに欹器といへるうつわものありきその器のかたちたとへばロのひらきたる小がめのや

うなるものを左右よりつり置るがつねにかたふきそばだちて正しくすはらざるものなりけらし孔子御廟を守れる者にとふてのたまはくこれは何といへる器ぞや御廟を守れる者對へてこれは宥坐の器とて古の帝つねにおはしますむしろの右に置ていましめとしたまふ器なるべしと申す孔子のたまはくしからばわれこれをきけり宥坐の器といへるものは中に水なくむなしければそばだちかたふき又水を八分めにもれば正しくすはりあまりに水みつればくつがへるものなりといにしへの道にあきらかなる君はつねに御坐の側におきてふかき誡となし給へりとてかたへにさふらふ御弟子をかへりみてこゝろみに水をそゝぎ見よとのたまふ御弟子かしこまりて水をそゝぐに八分めなれば正しくみつればくつがへれり孔子いたくなげきてなへての物みなかくのごとくみちてくつがへらざるものあらんやとの給ひければ子路といへる御弟子進み出てしからば又そのみてるをたもちてうしなはざる道あらんやと問ひまいらせければ孔子のたまはく世にある人聰明睿智とていかほどにさとくあきらかに智慧ふかくともみづからは愚なりと思ひてこれを守れ又たとへ功名は天下にをよびたるともみづからは人にゆづる心をもつてこれ守るべしあるはたけくいさめる事世にふるひきこゆる力ありともみづからはつたなく臆病なる心もちにてこれを守れ又富は四海のうちをたもつともみづからは人にへりくだり謙退するの心を以てこれを守るべしこれみづからまされるをへらしへらせる上にも又へらして物ごとうちばにひかへめにせよとの道なりとぞさすれば何ほどの願ひ事滿るともいさゝかもかくる事あるまじきことわりなるべし

○萬葉遺漏

詠夢長歌一首并短歌　　作者未詳

鳥居たて。神の在ます。宮柱。太き心從。刺竹の。世人令歎。人みなの。憎みもしらに。白縫の。筑紫の綿の。

暖けく。美味ものをば。我獨。せしめの漆。門中に。かき廻しつゝ。己が田へ。水引結ぶ。幣をしも。こゝらしめこの。兎なす。耳振立て。人の性。きゝさがしつゝ。善ことも。悪かるさまに。ふきこ□。おらしに羽ふく。鷲自物。つかみつらはる。底悪も。儒者の子なれば。しかすがに。唐のふみをも。生讀の。甲斐こそなけれ。秋田なる。狭田もりはむ。箆鷺の。不減口きゝ。生ん世は。死なばしぬべく。おもへども。夫は痛からん。劔太刀。こまれる時は。ゆく水野。ながれの隨意に。よく掘の。心のきはこ。かにかくに。逆まくもへご。纒はるゝ。久須美の葛。かへすべき。言の葉をなみ。息の根も、出し得ず成ぬ。天窓すら。あぐてふ糸の。長き目に。見つゝを居らむ。汝がなれる果。

反歌

村肝のこゝろゆがまば守るてふ神の鳥居も甲斐あらなくに

増訂一話一言卷四十五終

○東武百景詩

東武百景詩巻序

天下名勝之區。每伏於邃林疊嶺。迴谿絕澗。人跡希至之地。而大都通邑。則寥々焉。世有好奇耽勝之人。濡足褰裳。梢々不已。經蛇之藪。度鹿豕之窟。然後始得至焉。蓋亦勞且恐矣。東武萬方之會。人家櫛比。大道如砥。出郭則沃野千里。絕無邃林絕澗之阻。人或病其乏於名勝。然武之爲州。臨東海以立國。若袖浦之月。洲崎之潮。莽々可駭可愕。猶泛海之不觀於廣陵。而非區々一邱一壑之奇也。矧引以其爲萬方之會也。旦々而游。夜々而覽。搜羅剔抉。無復餘蘊。於是乎。以名勝稱者。其多獨甲乎海內。即其游焉者。又惟所向。無林澗之阻。蛇豕之廣。則其游之樂。又非他州可比也。今夫靈區勝域。僻在窮鄉者。畢蒐聞。而其在斯土者。炳載墨客韵士之文。如靈者益靈。而勝者愈勝。其幸不幸。固已天淵懸殊矣。予與同社諸友。錄都下百景以爲題。雖集之次。有餘力輙賦焉。積久盈百。輯以爲一卷。題曰東武百景詩卷。予詩之鄙俚。固不能爲百景之幸。抑或能不至汚穢百景。以致其不幸耶。辛未春仲。侗庵支離子書。

東武百景詩　　侗庵支離子稿

江都朝夕之朝

風傳曉滿城聞。紛壁朱門望漸分。萬戶炊煙飛鳥外。散成五色海東雲。

夕

雲裏金鴉映夕曛。萬家燈火巳紛々。月升春陌平於水。樓上笙歌天上聞。

江都四時

春光駘蕩草生烟。長笛清歌滿遠天。東望東山花似錦。遊人遙簇晩霞邊。
雨歇墨河三伏天。晩涼爭蕩木蘭船。淸流一帶通銀漢。雙袖凌風身欲僊。
滿城絲管駐春留。車馬如雲日出遊。哀雁南飛黃葉下。無人終解道悲秋。
家々鼎食事豪華。誰爲流年一嘆嗟。知是武陵春獨早。橋邊十月賣梅花。

大手

城皷鼕々曙色殘。九州牧伯肅衣冠。長橋極目飛塵絕。畫戟如林白日寒。

西城

橋高疑是駕銀河。下見行人如蟻過。墨水波光拖白練。總州山色疊青螺。

大名街

連雲甲第鳥過難。碧瓦朱欄障日寒。大道坦迤如髮直。寸人豆馬畫中看。

大成殿

盛德千秋日月齊。聖林佳氣散茶溪。無人敢仰帷中像。滿殿淸風頭自低。

墨江

一水綠涵堤上花。畫船陸續向三叉。丹青應是難圖寫。夕照蒸成十里霞。

愛宕山

白雲山在白雲隈。絕頂一臨秋氣來。遠海風高波不動。布帆千片鏡中開。

櫻埒

千樹櫻花夾路開。霜蹄蹴地不生埃。橫鞭一顧人如玉。凜烈天風正北來。

駿臺

一自江都會卜年。貔貅八萬亦東遷。昇平幾歲高臺上。日夜唯聞奏管絃。

日暮里

花石鮮新畫不知。恍疑身到列僊居。何勞遠訪青山去。數里離城間有餘。

吉祥閣

吉祥高閣枕山阿。揚手星辰似可摩。軟繡街頭十萬戶。朱帘獨入眼中多。〔朱帘。䀮指舖招牌也。〕

飛鳥山

櫻樹千條又萬條。迎風背日不勝嬌。行人多少迷歸路。花似雪花埋石橋。

比翼塚

驪山一路沒荒萊。野鳥自啼花自開。留得當年無限恨。露華成淚滴碑苔。

矢口渡

蒼涼古渡日西頹。碧血空留水底哀。兩岸松風波怒吼。夜來猶作一天雷。

千樹

二月東風吹綠莎。遙々驛路遶關河。橋頭多少離人淚。添作江心激灩波。

袖浦

紅樓歌管夕陽遲。過客誰知羈旅悲。袖浦眞成形似袖。巧遮房總遠山眉。

鈴森

原頭一路幾人啼。殘血淋漓魂尙迷。咫尺武陵春不至。春風無復草萋々。

茗溪

茗水清流可釣漁。敝廬咫尺似鄰居。共傳玆地螢尤大。幸向芸窻照讀書。

王手狐王廟

碧嶺參雲日易沉。狐王威德儼如臨。釘頭磷々庭前樹。恨不移釘妬婦心。

堀　內

巋雲構俯青原。不惜千金奉梵園。縱使神靈直造福。爭酬山岳世人恩。〔時社人募人出金。改造祠堂。人爭應之。故云。詳見予庚午九月小遊記。〕

柳　原

長道如絲俯柳津。家々翠幔望中新。鷫鸘裘在知誰典。猶帶花街昨夜塵。

日本橋

十丈紅塵車馬馳。長途如髮接天涯。眼中唯有三峰雪。日本橋頭獨立時。

龍眼寺松

蒼松鬱々蔭庭堤。宛似大蛇當路時。可惜秀條遭剪伐。凌雲高節有誰知。

高　輪

巨海茫々呑百川。潮平風急夕陽前。連山半沒滄波底。千片布帆遇碧天。

海安寺

楓葉孟冬初飽霜。千林一色曝斜陽。來遊士女紛如織。錦繡抵供詩客腸。

梅莊「雪後訪梅莊」

吟屐衝泥步轉遲。千林晴雪望中奇。花神應是怕迷客。墻角巧橫梅一枝。

洲　崎

極目扶筇臨綠灯。曈朧初日上東溟。眞將嶽雪千秋色。寫入煙波萬里青。

昌平橋

地接東都禮樂區。回頭文廟聳雲衢。橋邊賣菜人成市。揖讓寧能似泗洙。

橘媛祠

遺廟斜臨野水灣。春花秋月舊容顏。猶留楠樹枝連理。葉上依然淚點斑。

蒼龍口

蒼龍口對五城樓。不見蒼龍見水流。日照金鷄波底動。奔騰正怕化龍游。

楊子岸

黔首千春樂聖時。金城萬雉映湯池。東風楊子江頭暮。無復羈人泣路岐。

神武門

鵙屋岧嶢雲外新。城東極目漲紅塵。河清海晏長如許。無復掛冠逃世人。

蒲田（蒲田梨花殊可觀。人或未之知。且地頗僻遠。故往焉者極少。

梨花千樹占園寬。冷艶全欺素雪寒。憐殺芳枝春帶雨。抵供村野老農看。

不忍池

紅々白々滿地蓮。却恨青蛾日比肩。無復人知君子操。波心只有影相憐。

梅見祠

雨歇渡頭柳楊新。長堤滿目踏青人。寺門南望花如錦。三尺孤墳獨不春。

永代橋

千尺虹橋俯碧川。長風四至怕身仙。潮來海水平於掌。遠浦帆檣落照前。

兩國橋

萬里清江分二州。橋頭士女蹈雲游。憑欄下視三千尺。多少樓船似芥舟。

螺　堂

一步一廻疑失途。忽然開敞俯平蕪。人間何物堪相比。楚蟻曾穿九曲珠。

溜　池

清池七月似春歸。灼々紅蕖媚夕暉。爲是遠公精舍近。滿天散作雨花飛。

淺草寺

金龍山枕墨江濱。朝暮無人不賽神。昔日門前靑草路。如今十里軟紅塵。

麴坊鹿店

過客擲錢如棄灰。爭求下物酌新醅。一時聊取飢腸飽。不念孤麑求母哀。

九級坂

九級崎嶇似互盤。捫臍一步一長歎。請看險絕眞如許。特比世途孰是難。

飯顆山〔飯顆山爲予別業復原樓來往之所徑。〕

西莊一路掛城闉。飯顆山頭經過頻。病瘦扶筇行步緩。人言老杜是前身。

三圍山

靑田渺々水悠々。鶴樹成行古刹幽。只有歌仙能致雨。遺芳不盡墨河流。

秋葉祠

深林一□小蹊通。但有孤猿守梵宮。落葉滿庭人不掃。寒蟬啼送夕陽紅。

三十三間堂

琳宮十仞屹岧嶢。白羽如霜雲外飄。二百年來休貫革。無人解道射天驕。

龜井戶

松杉森立氣青葱。心字池清映碧空。丞相威靈儼如在。飛梅香散絳帷風。

深川八幡

門前羅綺四時春。妙舞清歌日々新。獨有阿園櫻樹在。仙姿未肯染紅塵。

鏡池

徹底冷然鏡作池。波心影尙想梅兒。如今死者同生者。母子團欒樂可知。

湯島菅公祠

飛梅香褪老松垂。即是菅家丞相祠。千古盛名懸日月。誰言天道本無知。

巣鴨里菊

金風三徑冒霜開。曾入東籬陶令盃。時泰難爲花隱逸。候園早已被移栽。

板橋

折盡路傍楊柳修。春流送客恨迢々。無朝無暮看人別。好是銷魂名此橋。

新日暮

入門別自有乾坤。終歲不知塵市喧。一醉花前隨意臥。殷勤牧笛報黃昏。

瀧川天女祠

雨崖欹似鬼門關。流水潺々鳴佩環。未必山靈解留客。幾人來此樂忘還。

道灌山

千尋石壁古金城。青史猶傳烈士名。松柏吟風鳥啼雨。滿山都作不平聲。

三縁山

鶴樹參雲佳氣屯。煌々香閣照乾坤。東方欲白鯨鐘動。百萬人家齊啓門。

佃島

古藤千尺走龍蛇。斜綴纍々紫玉花。未得扁舟乘興去。盈々一水似天涯。〔佃島予足未嘗經。故云。〕

蝦蟆原

雨奇晴好雪尤宜。百尺樓頭可俯窺。縱負青々春草色。藥欄猶耐入新詩。〔予別業復原樓在西。辛未之春。公命以原爲種藥園。故有結。〕

目白不動

境幽淸梵隔林聽。遠目憑高一氣青。老樹堂前生意盡。袈裟掛後幾年經。

高田馬埒

平原草盡夕陽空。遠近林巒苍畫中。猶想源公駐營日。旌旗如雪捲長風。

水狐王廟假山

三峯削就小芙蓉。石勢巃嵸雲霧封。應是秦人來採藥。蓬蒿深處有行蹤。

護國寺

神武門東生綠莎。都人士女此經過。路逢田父無勞問。千樹山榴入望多。

鬼子母神

盛禮孟冬風俗傳。青帘晴掛寺門前。多情霜葉紅猶在。宮女如花相映鮮。〔宮女最信鬼子母神。十月之祭。來拜者如市。〕

澁谷金王丸廟

鐘樓日落絕人行。萬木蕭森野鳥啼。無復白櫻花可愛。村翁猶說忘憂名。

護持院原

法宮殘趾草芊々。松作龍鱗多歲年。夜雨螢飛三兩點。猶思當日佛燈懸。

目黑不動

招提輪煥鏤黃金。六月寒生祇樹林。龍吐飛流天半落。水聲長和誦經音。

東海寺

中庭花石類天成。長擅東都第一名。此地來游緣詎事。□碑只拜服先生。

泉岳寺

志士蓋棺事始休。成仁取義更何求。竭來最是沾巾處。胷井猶傳洗髑髏。

御殿山櫻

花知墨水競雄雌。前對滄溟更一奇。翻恨年々零落早。只緣常被颶風吹。

根津廟

忍岡西北祭三神。最是素皇尊絕倫。靈意未知能樂否。門前花柳漲天塵。

三叉江

墨水沄々向海東。扁舟間與白鷗同。輕風澹日波如(以下闕)

清水門

水色如藍映碧松。鬱葱佳氣護城墉。終知勝地難湮沒。萬里名傳箕子封。

江戶見坂

羊腸一路揷虛空。千里河山在掌中。二百年來蓄廬久。高門夾路畫濠々。

回向院

爲祈冥福築邱墦。枯骨應知聖主恩。永代禍堪明暦比。何人水底一招魂。

神明祠

絃管嘈々日夕同。胡姫霜客醉春風。無人不貰薑牙去。未知神明誰得通。

東叡山

東都第一梵王宮。法炬慧燈萬國崇。高歩焚香初拜罷。雨花臺上颯天風。

六鄕渡

三老未曾休少時。渡頭猶喚棹舟遲。縱令河水如衣帶。方國不愆朝貢期。

十二莊

丹崖劃似斧斤開。千尺飛流萬壑雷。太白已亡無太白。題詩石壁愧仙才。

蜒蛑橋　〔蜒蛑橋近復原。別業。往來必由。〕

蜒蛑橋頭日々行。曾無佳景入詩情。由來境僻因人顯。肯許昇仙對作名。

楊柳橋

楊柳橋西一水長。輕舟載妓下金塘。只看春日垂條綠。不識秋來葉盡黃。

霞　關

東市平臨幾萬家。眼前無有一毫遮。行人不畏誰何吏。盡日關頭只鎻霞。

京　橋

百尺飛虹歩々登。行人如織軟塵騰。寰中繁盛誰堪比。唐廿四橋漢五陵。

牡丹莊

林亭一靜枕郊原。魏紫姚黃在一園。綠葉成陰片時裏。莫教吟賞後春暄。

志村〔採櫻草〕

櫻樹未曾西土知。化爲佳卉可憐姿。江皐采々春將晩。欲託東風寄相思。

花川戸

白馬津頭潮始滿。金龍山畔月將斜。幾家臨水渾如畫。東岸花爲庭上花。

三絃濠

家々絲管日留連。共沐和風二百年。歎息鄭聲諧俗耳。也將此水號三絃。

山王

山棚六月度城陰。玉帶錦衣誰復禁。如使漢文皇帝在。何唯當日露臺金。

鎧渡

春波蕩漾白鷗浮。黄鎧渡頭西日收。正是時淸無甲士。靑蛾皓齒在蘭舟。

靑山

城南風物接郊關。邸第凌雲十里還。車馬轍蹄行處遍。何曾眼底見靑山。

池上本門寺

天風遙送雨花香。花表林端有鶴翔。金碧煇煌霄漢際。翛然猶想魯靈光。

新田祠

殘碑歲古綠苔多。石有泐消名下磨。野徑遙々三十里。驀邊誓矢幾人過。

八景坂

東海秋濤掌上平。雲帆出沒夕陽明。誰能描後傳西土。莫使瀟湘專美名。

大師河原。〔大師河原。道傍多桃。二三月之際。頗可愛而祠中絕無可觀。故云。〕

欲訪仁祠渡碧津。挑花夾路巧留人。只教興盡須歸去。何用行々遠賽神。

玉　川

清流如練絶纖塵。水底游魚可數鱗。時有拾薪村婦過。不逢石上浣紗人。

鴻　臺

風悲平野日西斜。壁壘跡荒開菜花。吊古停筇松樹下。山僧和淚話豪華。

眞間楓

老樹參雲三百尋。盤根突兀走禪林。風霜不改青々色。終歲幾傷過客心。

小金井

十里金塘花萬層。香風披拂翠烟凝。冷然一望春天雪。飛入河流似斷冰。

腰谷〔腰谷多桃。春時彌望爛熳。〕

遙看十里紫霞屯。行盡平原花滿園。雞犬怡然風俗古。武陵此處是桃源。

金　川

千仞崖頭倚瘦筇。海風吹度冷襟胸。琉璃萬頃晴波外。畫出春山綠幾重。

紅葉山　　以下篁園〔菅温君玉甫著〕

報祀千年魯閟宮。龍盤虎踞鬱巃嵸。霜楓萬樹秋如染。幾朶紅雲護綺櫳。

錢瓶橋

畫橋高架水瀠洄。繡轂彫鞍逐殷雷。却怪青錢收不盡。雨過春岸綴莓苔。

櫻　峯

古刹憑高鎖彩霞。天園叡麓萬人家。管絃聲斷芹池涸。獨有山櫻舊日花。

在五祠

一字荒祠枕碧汀。閑鷗泛處水冷々。行人不識王孫恨。踏盡長堤草色青。

棠棣渠

清渠百尺蔦芳陰。露蕋煙條曉色深。數頃非關涵月影。波光纔透浴黃金。

萩　寺

荻花深鎖古禪宮。路隔紅雲曲々通。暮景惱人歸不得。銀蟾影宿彩波中。

龍隱庵

一路沿川訪古蹤。佛龕遙認暮鐘天。碧池驚看蒼龍蟄。數頃秋波倒岸松。

繫舟松

長松翠擁梵王樓。憶昔將軍繫畫舟。滿砌清風吹不盡。濤聲猶似海天秋。

蚊　淵

浣紗非是苧蘿春。皓齒明眸葬綠蘋。水咽石根流不得。似將殘恨訴行人。

星　井

石甃苔深傍梵筵。一泓澄碧浸秋天。濬源莫是通銀漢。萬點星芒盡燦然。

五石松

一庭寒翠傲嚴冬。幸是孤根託鷲峯。試問熙朝髻鶴俸。何如昔日受秦封。

金剛寺

碧溪斜架放鳥橋。古寺春雲蝕綺寮。似讀紫薇新句去。一林紅白雨瀟々。

雜司谷

西郊木落欹斜陽。剪綵偸春古佛場。一路賽神知幾客。一擔橙柿鬪朱黃。

藤　寺

護溪春靜水潺湲。浣沐尋幽叩梵關。一架古藤花可賞。紫霞蒸出夕陽山。

江戸川

碧水悠溶引玉川。金鱗幾隊戯清漣。殘霞倒浸紅千頃。巧似龍門點額年。

白馬津

市塵中斷渺川光。柳岸春風送釣航。玉斗熨成波十里。疑看匹練挂吳閶。

眞乳山

鷗川萬頃醮龍山。石磴高懸紫翠間。澗愧林慙曾不歇。幾群羅綺賽神還。

墨水津

碧津經雨漲痕添。幾岸晴烟擁酒帘。恰似北臺風雪夕。花間馬耳露雙尖。

夕日山〔在茂林寺後〕

茂林秋色接驪山。路轉霜楓萬樹間。夕日荒庭人不掃。墜紅三寸擁禪關。

三田臺

級浦房山畵幨中。金城故址倚寵嵸。赤烽飛斷秋如水。萬井炊煙散海風。

善福寺

麻丘卜得法王宮。古井深籠柳影中。一自越師留妙句。白樓依舊笑春風。

於玉池

玉貌曾聞葬綠波。芳魂下返草鬖髿。一泓猶浸春山色。恰似當年照翠娥。

鮫洲

落日鮫洲蕩槳過。海天秋色興如何。補陀山裡西風急。萬片紅楓染夕波。

鶴澤

鶴雛曾青九皐天。一去悠々五百年。預識遼東留語日。應歎古塚徒累然。

神仙谷

鍊藥仙人去不還。苔深谷口水潺々。幽尋欲問長生訣。落葉秋寒滿鉢山。

淺茅原

江村行盡渺平原。草色如煙接寺門。四尺古墳無吊客。任教春雨長苔痕。

椿山（邦俗謂山茶爲椿）

野橋留馬賽江神。草軟幽村雨浥塵。滿樹殷紅人不賞。山禽管領古祠春。

赤城山

長橋一望雨痕消。樹杪樓臺展畫描。赤壁側成三百尺。□天疑是建霞標。

月波樓

朱門占斷海天秋。自是城南第一樓。月點波心金不定。莫將佳景比黃州。

羽田天女祠

波紋瀲灔射琳宮。路挂松林紫翠中。一夜潮聲撞客枕。恍疑湘瑟弄秋風。

湯島天女祠（祠前有小池。相傳齋藤實盛舊園。）

老將園亭事已非。□□香火奉天妃。清池倒浸春花色。想見當年晝錦衣。

黃金長者舊跡

畫樓銷盡滑苔痕。冷雨淒風惱客魂。漫說黃金高拄斗。曾無一片布祇園。

駒郊花姫廟

花姫古廟倚崚稜。削出芙蓉碧幾層。自是洞天無暑色。銀盤六月薦寒氷。

觀潮坂

林梢峻坂試躋攀。月湧歸帆出沒間。不使廣陵誇壯觀。長風萬里捲銀山。

駿河街

十字街邊雨色乾。香風綷縩簇羅紈。馬塵收盡闤闠夕。白玉三峰畫裡看。

平塚社

碧林園廟夕陽曛。一叩華鯨吼野雲。鐵甲瘞埋經幾歲。春苔和雨繡幽墳。

濟松寺

一棄香篆靄禪扉。雨後松陰翠染衣。寢殿春深花歷亂。五雲疑向鳳池飛。

古塚原

一路蕭條遶野坰。斷鐘聲裡遠燈青。骨埋枯草秋風冷。血灑荒苔夜雨腥。

雉子宮

偶尋遺廟陟林岡。野雉聲邊草吐芳。好是秦公游獵後。百年崇祀占陳倉。

螢　澤

夕陽紅歛冷淸江。試逐流螢過石矼。畫扇撲來珠万顆。無人解識拝書窻。

傳通院

聖善曾營梵帝宮。兩行樹珠護紗櫳。夕蛙無語春池靜。碩德教人想肇公。

戸田津

郊煙盡處激清波。落日呼舟立白沙。迴洄欲[]山陰夢。雪冷秋蘆兩岸花。

猪首池

玉女壇西白日斜。一池秋色拭芰花。濬源會是無枯涸。濟得江都十萬家。

珠 井

一泓靈液幾年枯。玉甃銅瓶沒綠蕪。月滿梧桐零落後。猶疑漢女弄明珠。

照姿橋（相傳在公東游會過此橋）

一帶垂虹揷暮雲。昔人空去水沄々。玉顏千載猶堪想。月照波心恐是君。

高尾塚

古寺無人步野雲。蘚花秋鎖杜娘墳。紅顏千載空黃土。尙有霜楓媚夕曛。

牛 渚

日沈牛渚水連天。畵刹十里鐘裡懸。諷咏何人乘月過。槳聲咿軋度輕烟。

久米川

一枝柔艪破夕陽。欲吊英雄涉翠岡。恰是當年懸劍處。秋深隴樹凛淸霜。

金輪寺（一名瓔珞寺）

黃雲十里掩殘暉。雪撲輕蓑酒力微。不使吟朋述野徑。滿林瓔珞認禪扉。

瀕海殿

日出金鼇抃海濤。樓臺十二鬱岧嶢。閬壺花草春堪賞。駕鶴飄然降紫霄。

右東武百景詩一卷。借得岡田氏之藏本以寫矣。于時文政辛巳孟冬十六夜。風雨蕭々中卒業。

蜀　陽　畯　識

㊂松岡清介答人之問書

來年御轉任御任槐の御沙汰御座候よし何こ談候哉委敷承知仕度御座候

御テンニンこ申候は

公方樣右大臣正二位にて在らせられ候を來年左大臣に任ぜられ候事に御座候從一位に任ぜらるべく候物て中將少將等にても右より左になり又左より右になり候類轉任こ申候大臣にては左より右になる事無御座候

御ニンクワイこ申候は

右大將內大臣にならせられ候事に御座候大納言より內大臣になり候を任槐こ稱して槐は三公の稱に候得者初てなるを任槐こ稱候其後內大臣より右大臣右大臣より左大臣皆轉任こ稱し候大臣を槐こ申候子細は異朝周の世にて三槐に面して三公位し群吏を謀るのよしにて又槐は懷こ通し遠人を懷る義こ申〔槐は晝葉ひらき夜は葉しぼみ候よし〕內大臣に任ぜられ候得ば必正二位に叙せらるべく候

右者御例御座候事候哉

御例こ申事には如何候半哉寛永三年十八日〔本ノマヽ〕大猷院樣從一位に被叙左大臣に任ぜられ候事に御座候

御父子樣大臣の御例御座候哉京都にて攝家淸家などの御家に御座候事に候や

御父子樣大臣御ならび被遊候事は

東照宮樣右大臣　台德院樣內大臣　慶長十年

台德院樣右大臣　大猷院樣內大臣　元和九年

台德院樣太政大臣　大猷院樣左大臣　寛永三年

右のごとくに御座有べく候攝家淸家の御家などには古今折々御座候

　將軍職にならせられざる前內大臣の事古今御座候事に候哉

御受職前內大臣に被任候事は御代々御座候東照宮樣慶長元年內大臣に被任同八年に征夷大將軍に補せられ大臣に任じ給ふ事に候

　左大臣に被任候へば必御上洛有之と申事如何

此事一向無御座候大猷院樣御入洛の時左大臣に被任候故左樣の事申候半と存候

　從一位の上正一位にならせられ候事も候哉

從一位を極官と申候て殊に重き位にて正一位は神又贈位にて現在の人任じ候事今は無之候

　右大將樣內大臣に任ぜられ候へば左大將に被任候事に御座候哉

左大將は右大將より重く御座候へば內大臣に被任候上は左大將に被轉候事も御座有べく候へ共御當家にて左大將の御事御座候東照宮樣天正十三年右大將に任ぜられ同十五年左大將に轉ぜられ十六年左大將を辭したまふいづれも御任槐前の事にて御例とも申がたし其後御代々御受職の後右大臣御轉任の後も右大將にてあらせられ候へば此度も右大將にて左大將にはならせられまじく候しかしながら攝家は大納言の時右大將を兼任槐の後多は左大將に被轉候へば押極候て右大將にてあらせらるべくとも難申候

　御臺樣御位階御沙汰も御座候二位にならせられ候や一位にならせられ候や何と申候哉

從二位に可被爲成候へ共桂昌院樣〔元祿三年〕天英院樣〔正德三年〕從三位より直に一位に被叙候此御例を以考候へば此度も一位に被叙候御事に御座有べく候御加階又御加級とも可申候御簾中樣にも御位の事御座候由從三位に叙せらるべく候御叙位と申候

女位に正位無之三位はきらひ候由如何

當時は正位無之哉に奉存候古へは正位有之候二位をきらひ候事は平家二位尼よりの事と申一向妄說と存候攝關の政所は從二位に叙せられ候事も有之候哉に承り候

御任槐の後何と申上候事に候哉

內府樣と稱し奉るべく候

御簾中樣を何と稱し奉るべく哉

若御臺樣又は西の御臺樣と可奉稱候

三公と申候得ば京都の大臣前になられ候哉

武家の官位は公家當官之外のよし慶長十七ヶ條にみへ候左候へば公家方大臣衆列になられ候事無之候

太政大臣左大臣右大臣內大臣にては四公になり候三公と申は如何之事に候哉

太政大臣は則闕の官と申て有德の人なき時は常に有事無之候て左大臣右大臣內大臣にて三公と申候太政大臣有時內大臣を置候事其謂れなしなどゝ申され候へ共天皇御元服の時御加冠は太政大臣の事に候へば御元服の前には必太政大臣を任ぜられ其時內大臣も有之候へばしばらく四公にて候

〇三味線來由并澤の苗字附事

抑三味線の來由と謂は元來琉球國の弄び物なる故に琉球絃と號す琴琵琶和琴に音を摸したるものなり日本に是を傳來せし始めは人皇百七代の帝正親町の院御宇永祿五年壬戌の春琉球より泉州堺の津に渡來る其頃の武將織田信長公下知有之是を朝廷に獻じ奏覽に入奉る時に帝久我右大臣通興卿を以其頃の音曲に名譽を顯せし琵琶法師瀧野撿校に勅有之內裏に召出彈せて叡聞ましませしに其曲甚妙音なりしを叡感御座しぬ其砌京都に名を得し琴琵琶の細工人龜屋市郎左衛門石村といひし者此三味線をうつし

作出せり琉球には三味線の胴を蛇の皮を以て張るといへども我朝にかゝる大きなる蛇なし依て猫革にかへて是を張たり此三絃の形大體琵琶に同し惣長ヶ三尺は天地人の三極を比し棹長二尺餘は陰陽の二氣海老尾の五寸は天の五星胴幅六寸は地の六合胴長六寸餘は地の六程震動厚サ三寸は高下平の三形を象り轉手絃手又天柱とも云なり是天の象ちを表し□（ワカ）百に半月の形チあり海老の糸巻は三台の星を象どる一の糸を虛精と云二の糸を陸淳と云三の糸を曲順と號十二調子の内□越斷金午調勝絶の四ッを一の糸の中に兼備へ下無雙調鳧鐘黄鐘の四ッを二の糸に兼備へ鸞鐘盤涉神仙上薬の四調子を三の糸に兼備ふ首嚴經曰たとへば琴琵琶の妙音ありといへども若妙手なくんば終に發する事能はず又堪能の達人此三絃を彈く時は自然と六根を清淨ならしめ神明佛陀の加護に預るべし懦弱好色を以て彈く時は聞く人婬亂の念を發す愼ずんば有べけんや然るに傾城遊女藝子野郎等の翫物になせる事なげかはしき事なり永祿年中琉球より渡る泉州堺の津の盲人中小路といふ法師にとらせたり其後虎澤といふ盲人本手臨手の術引始む慶長の頃角澤と云法師琵琶の名人なりしが三絃を手練して小歌等乘せ侍る其頃又淨瑠理ぶし出來たり此淨瑠理にのせて彈くは角澤の始なり其後大坂に城秀と加賀市と兩法師此術を得後に江戸を立加賀市は柳川檢校となり城秀は八橋檢校となる當時の柳川八橋流此兩人は祖なり是を三絃と號三の糸の故なり然れば淨瑠理三絃は角澤の檢校を元祖とせり角澤の澤の字を緣にして後世淨瑠理三絃を產業とするは竹澤野澤鶴澤富澤等と言なるべし大坂中古の達人と呼れしは竹澤權右衞門同彌七野澤喜八郎富澤歌仙竹澤長四郎鶴澤友次郎同三次なりとぞ

石川源左衞門殿所藏寫之

○御材木石奉行支配穴太頭二人由緒書

高百石　江州志賀郡高畑村之内　本國近江　生國武藏　戸波惣兵衛　卯五十九歲

浚明院樣御代安永五申年十二月私儀淸治郎跡式被下置直に可相勤旨松平伊賀守殿被仰渡候段御材木石奉行豐田藤太郎被申渡候

一先祖　戸波駿河

權現樣御代慶長年中被召出江州志賀郡高畑村之内百石知行拜領仕候御折紙者元和年中燒失仕候慶長十六亥年六月十三日より同十七子年十月八日迄二ヶ年之間尾州名護屋御城御石垣御普請相勤申候慶長十八丑年正月十日駿府より江府へ御用相勤申候慶長十九年御用にて御當地に相結罷在候處大阪御陣にて宇多國宗之御刀拜領仕只今において所持仕候尤御陣中御仕寄場被仰付候常には江州知行所罷在江戸大坂京其外何國にても御石垣御普請之節は道中往來も御朱印傳馬被下置御用向相勤來申候段々被下置候傳馬之御朱印今以所持仕罷在候

一玄祖父　戸波駿河

大猷院樣御代寛永二丑年京都御所司代板倉周防守殿より相伺御添狀被下御當地へ罷下父戸波駿河跡式被下置候段御老中御直に被仰付候寛永五辰年二月大阪二ノ御丸南側御石垣同十三子年正月同十四丑年同十八巳年七月御當地御城御石垣御普請御用相勤申候寛永年中度々御當地へ罷下り相勤申候正保二酉年五月慶安三寅年二月右兩度日光御宮御石垣御普請相勤申候明暦三酉年御當地御天守其外御櫓等御普請之節穴太之者共召連罷下　悴彌兵衛父子共　御當地に相詰相勤申候　万治元戌年御當地　御天守臺御石垣御用に付父子共罷下り相勤申候御普請御用被爲仰付候節者御老中より京都御所司代へ被仰越私共へ被仰下候何方に御普請御座候ても右之通御座候每度左樣之節御所司代より被仰越候御奉書之御寫幷私共

へ被仰下候御所司代之御狀共所持仕候御當地に御普請中相詰候は於御城御老中御直に御用被爲仰付候又於御宅被爲仰付候義も御座候相勤申候中は夫々十人扶持被下置候忰も召連相勤申候得ば同前に被下置候御普請出來仕候て御暇被下候節御紋附之御時服貳黃金貳枚頂戴仕候忰は御紋附之御時服貳黃金壹枚頂戴仕候每度右之通御座候

一高祖父　　　　戸　波　駿　河

嚴有院樣御代万治三子年京都御所司代牧野佐渡守殿相伺御添狀被下御當地へ被下父戸波駿河跡式被下置候段御老中御直に被仰付候寛文二寅年二條之御城御石垣破損御普請相勤申候此節迄御所司代御支配請申候處天和二戌年より京都町奉行衆前田安藝守殿井上志摩守殿御支配に罷成候

一曾祖父　　　　戸　波　彌次兵衛

常憲院樣御代元祿五申年十一月父戸波駿河跡式被下置候段京都御所司代小笠原佐渡守殿被仰渡候元祿十七申年正月御石垣御用に付罷下候節御朱印傳馬壹人に三疋宛被下候砌京都御所司代松平紀伊守殿にて御朱印頂戴仕候其節京都町奉行安藤駿河守殿在江戸に付御朱印駿河守殿へ上申候同年三月御材木石奉行衆支配に被仰付江戸住居仕候樣に秋元但馬守殿御作事奉行小幡上總介殿へ被仰渡候寶永三戌年十月御玄關并中之御門臺御石垣御普請相勤申同四亥年五月二ノ御丸銅御門臺上梅林下梅林北詰橋御門臺御石垣同年十月濱御殿御石垣同七寅年四月芝口御門御石垣御普請場見廻り相勤申候右相勤申中七人扶持宛每度頂戴仕候正德元卯年五月病氣に付奉願隱居仕同年九月十一日病死仕候

一祖父　　　　戸　波　伊右衛門

文昭院樣御代正德元卯年五月父戸波彌次兵衛願通家督被下置候段柳澤備後守殿被仰渡之旨御材木石奉行奈佐四郎兵衛被申渡候享保二酉年八月神田橋鍛冶橋御門御石垣御普請之節見廻り被仰付相勤申元文

元辰年十月八日病死仕候天和三亥年九月同役堀金二郎兵衛と申者京都御所司代稻葉丹後守殿へ不調法之義御座候て御改易罷成候節同役共暫く刀遠慮仕候樣に丹後守殿被仰渡於只今刀遠慮仕罷在候

一父

有德院樣御代元文元辰年十二月廿九日父戶波伊右門跡式被下置如父時可相勤旨本多伊豫守殿被仰渡候段御材木石奉行馬場藤左衛門被申渡相勤罷在候處安永五申年十二月老年罷成其上隱居奉願候處同廿七日願之通松平伊賀守殿被仰渡候段御材木石奉行豐田藤太郎被申渡隱居仕罷在候處天明四辰年十月十九日病死仕候

文化四乙卯年七月　穴太頭

戶波惣兵衛

由緒言

高百石江州志賀郡赤塚村之內　本國近江　生國武藏

戶波市次郎　當卯廿九歲

私義祖父戶波佐市郎實子惣領市之丞儀病死仕候處外男子無御座候に付右市之丞實子惣領義嫡孫仕度奉願候處寬政四子年正月願之通被仰付候旨井伊兵部少輔殿御附札を以被仰渡候段御材木石奉行留安九八郎被申渡候處享和二戌年九月如父時可相勤旨井伊兵部少藏殿御書付を以被仰渡候段御材木石奉行中村與兵衛被申渡候

一先祖　戶波丹後　一二代　同　丹後　一三代　同　丹後

一四代　同　丹後　一五代　同　吉左衛門　一六代　同　佐左衛門

一七代　同　市助　一八代　同　喜才次　一九代　同　佐市郎

○道富丈吉由緒書

〔本國阿蘭陀國あむすてるだむ生國肥前長崎〕　　道　富　丈　吉

一父　　　へんでれきごうふ

右ごうふ儀は阿蘭陀國之都あむすてるだむ住居先へんでれきごうふ忰にて父存生の間はゆにおくるこ稱し父死後の名を繼罷在候處寛政十午年於本國おんてるかうふまんこ申官を受同十一未年の夏咬𠺕吧表へ出役仕夫より無程御當地通商の船に乘組み筆者頭勘定役相勤六月十二日始て御當地へ着仕諸用向相仕舞同年秋歸帆仕翌申年夏再渡仕五月廿五日御當地着仕某等引續在留候處翌酉年夏へんこる役申付候旨入津の船より申越へんこる役三ヶ月相勤候處享和亥年夏加比丹職申付候旨申越當年迄十三ヶ年加比丹職相勤罷在候右ごうふ儀加比丹役相勤候内江府拜禮並御用向相勤候桁々左之通に御座候

一文化元子年魯西亞船御當地へ渡來仕候節御用向首尾好相勤申候

一文化三寅年江府拜禮首尾相勤申候

一文化五卯年魯西亞船松前表へ乘渡ふらんす語にて認候書物殘置候を江府より御當地へ御差越被爲成和解差上候樣被仰付候に付阿蘭陀にて和解仕差上候然る處翌辰年春右爲御褒美御銀三十枚被下置候

一文化四卯年秋御注文通荷繰等出情仕候爲御褒美銀六十貫目被下置候

一文化五辰年ゑげれす船御當地へ渡來仕候節御用向相勤申候

一文化七午年江府拜禮首尾好相勤申候右之節於御殿中ごうふ儀兼々實體相勤昨年從江府御尋事之御用骨折相勤候に付御褒詞被爲成下候旨大御目付中川飛騨守樣御立合長崎御奉行曲淵甲斐守樣御書面被爲成御讀渡候

一文化十一戌年江府拜禮首尾能相勤申候

一某　道富丈吉

私儀右ごうふ忰にて文化五辰年於御當地出生仕御免之上新橋町人別に相加り當時新大工町人別にて罷在候處父ごうふ儀依願文化十二亥年九月三日遠山左衞門尉樣御在勤之節被召出新規御抱入被仰付右に付受用金之儀は父ごうふより別段差出候白砂糖代銀御貸付之利銀を以一ヶ年銀四貫目宛被下置役向之義は追て相應之人柄年輩にも相成候節可爲及御沙汰旨被仰亦追て父願之通御役義被仰付候節に至右御貸付之利銀而已之受用にては不本意之筋も可有之候に付格別之御義其節は別段相應え御役料をも御加へ可被下置父右之趣は於江府表御沙汰之次第も可有之被仰渡候條難有可奉存右は牧野備前守樣御伺之上被仰渡旨父ごうふへ被仰渡尙又父ごうふ儀再渡以來引續在留仕江府拜禮三度相勤其外魯西亞ゑげれす船等乘渡候時に御用骨折相勤候處無程父代歸國之上は再渡之程も無覺束候得ば私身分片付方見屆安氣仕歸國可仕旨を以扶持爲御返別段持渡候白砂糖三百籠拂代銀相貸し置右を以年々銀四貫目宛私儀へ被下置藥種目利或は端物目利又は阿蘭陀人へも交少通辭共へも引離し候筋新規に御抱入被爲成下候樣奉願候趣被聞召上乍然右體之儀先例も無之容易に難被及御沙汰筋に候得共父ごうふ儀是迄御用筋時々骨折相勤加比丹ごは譯違候に付格別之御儀を以伺之上前文之通被仰渡候然る上は向後私儀諸事他役人一同之御取扱に御座候尤追而御役儀被仰付候迄は新大工町に罷在祖母方にて身寄之者申談養育仕候樣父ごうふ並祖母其外地役人一統へ被仰渡古今無比類奉蒙御仁惠候

親類書

父方

一祖父　阿蘭陀國あむすてるだむ住居　へんでれきぶうふ〔死〕

一祖母　右同斷〔あれきさんてるねすゑんき死娘〕　まるれつたねすゑんき

一父　寛政十一未年始而渡來翌申年再渡以來在留仕加比丹蠟用勤罷在候〕へんでれきぶうふ

一母　長崎新橋町住居　　　　　　　　　　　土井德兵衞死娘　よう

　　　　　　　　　　　　　　父ごうふ姉　ゐるれむやこふへつて妻

一伯母　阿蘭陀國あむすてるだむ住居　　　　ゐるへるみいなごうふ

一同　右同斷〔此兩人同名如何〕　父ごうふ姉　いるへるみいなごうふ

一同　同　〔母一所ニ罷在候〕　父ごうふ妹　まるかれつたごうふ

　　　母　方

一祖父　新橋町ケ所持町人　　　　　　土井德兵衞〔死〕

一祖母　　　　　　　　　　　野母村峯仁平治娘　すゑ

一伯父　新橋町ケ所持町人　　　　　　土　井　瀧　藏

一伯母　新大工町住居　　　　母よう妹作治郞妻　こ　こ

一從弟　　　　　　　　　　　土井瀧藏子　國　太　郞

一同　　　　　　　　　　　　作治郞子　久　治　郞

右之通に御座候以上

文化丁巳春如月下浣松平鳩翁君より拜借謄寫

〇空也僧鉢敲考〔蔽鞋雜志之二〕　　　源　美　成　編

空也上人繪詞傳卷の上云上人それより僧正谷に御歸りありしに道に一人の武士あり聖御覽じて汝いかなる者ぞと宣へば我は平定盛といふ者なりと答ふ上人の云手に持たるもの共不審なりと宣ふ是は僧正谷に集る鹿猿を射殺し角皮を取りたりと答ふ上人御淚をながし念佛を唱へ回向し給ひて年月我に宮仕

したる獸也其皮を我にあたへよと仰ありければ定盛感涙肝に銘じ弓矢を捨今より後後世菩提に入奉らんと深く歎き妻子をすて上人の御供申修行に出べきと涙を流しいひければ上人宣ふやう妻子をすつれば慈悲の殺生なり妻子有ながら有髮にして衣を着し教へにまかせ身を捨て念佛修行せよと宣ひて御衣をたび十念を授られしかば御弟子となる其時上人しめして云念佛を修せん其樂み此中にすぎずと宣ひて一瓢をあたへ給ふ夫より教をたがへず有髮して衣を着し一瓢にて寒中の行おこたらず和讃稱名をとなへ念佛修行して衆生を勸るものなり

右空也上人繪詞傳全部三卷親王方及び殿上人等かゝせられ圖は海北友雪なる由引用する所一條は宮內卿筆なり是今の空也僧鹿杖を携へ瓢を持てるゆへ由の淵深也

空也上人繪詞傳卷の中云上人村上天皇の御宇に天曆五年平城こと〴〵く溫病をうけ屍山のごとしなげきかなしむ泪海を傾くるが如し上人是を憐み給て祇園牛頭天王へ御參籠まし〳〵て御告をうけ淸水寺にして御長一丈の十一面觀音を自作りて車に乘て自引廻し御念佛をとなへ茶を煎じて茶筌にてふりたて觀音に供じ給ひそれを溫病の人々にあたへ給へば悉く病ひなをり侍りぬ上人念佛をすゝめ唱へさせ給へば忽ちに病苦やみぬ貴賤萬民悅ぶ事限なし帝聞召て神農本草經に衆生の病を治せん爲に草木の味をなめわけ給ふ日々に七十の毒草にあたり茶を飮て蘇生せしかば今溫病を茶にて治する其いはれある也まして觀音の冥助あるをや自今以後元三に屠蘇より先に茶を立觀音に供じ加護をうけ是を服せんと有しかば上をまなふ下万民是を用て王服と號し元三に茶湯祝悅び奉る也それより宗派茶筌を業とす

此條庭田中將重增朝臣筆也是今茶筌をひさぐ由の起原也六誹閬立路が隨筆に銀瓦といふものに茶せんはせんじ茶に用ふる茶せんにして腰のからげいと赤き絹絲也といへり江戶にては末茶にのみ茶筌は用れど在鄕にては今に煎じ茶を茶筌にて立服す由きけり手造の茶にてその氣の烈なればなるべし

雍州府志巻之四。寺院門云。極樂院。號紫雲山。在四條坊門。爲淨土專念宗。古在櫛笥通四條。故稱櫛笥道場。空也上人之開基。而則安置所自刻之肖像。此院内一老稱上人。不食魚肉。不携妻子。剃髪著衣。其餘十八家者。不剃髪。携妻子。常製茶筌賣市朝。相傳。空也夜々修行。唱念佛巡洛邊。暫住貴布禰。于時毎夜鹿來鳴。上人甚愛其聲。爲閑居之友。一夜不來鳴。心恠之。翌日平定盛來告曰。昨夜於此處殺鹿也。上人大驚且悲。乞其皮角。皮爲裘著之。角挿杖頭。爲遺愛之物也。定盛亦悔之愧之。終剃髪爲僧。今十八家其裔。而所著衣。定盛嘗平生所着狩衣之袍直爲衣。至今存其遺風也。各々衣毎夜巡洛外墓所葬場。各以竹杖叩瓢。高聲唱無常之頌文。是爲修行。依稱鉢敲。疑古叩所携之鉢。近世以瓢代之者乎。依之此門前謂敲町。

右府志は黑川道祐所著也此一條後日次記事巻四十一月十三日空也上人光勝忌の條にみゆると異なる事なし記事も亦道祐が作なればなるべし其いふ所詳なるに似たりといへども平定盛の一件縉詞傳の說によるを是なりとす又近世以瓢鉢にかへるならんといへるもひが事也鉢叩は空也僧のみにあらず今兒の瓢を叩き錢をこへる事いとふるしその中ここにふるきは融通念佛緣起に出たるを見るべしこの緣起は應永年間のものなればもとより瓢なる事疑ふべからず

諸國奇遊談云鞍馬山西二町ばかりに御所檀と云地あり往昔こゝに空也上人住玉ひしといふさるから今に至て四條坊門油小路の西なる極樂院空也堂世人鉢敲といふ此寺の人々つねに茶筌を製して業とす法會又は常にも市中を瓢を打扣き佛名をとなへ躍る事也其瓢をたゝく壹尺計もあらん細き竹は必此御所檀に生る小篠を取て作ると古實也といふ

風俗文選巻之一去來鉢叩云師走も二十四日冬もかぎりなれば鉢たゝき聞んと例の翁のわたりましけるこよひは風はげしく雨そほふりてとみにも來らずいかに待わび給ひなんといぶかり思ひ 箒こせ眞似ても見せん鉢叩 と灰吹の竹うちならしける其こへたへ也火宅を出よとほのめかしぬれど猶あはれな

るふし〳〵の似るべくもあらすかれが修行は瓢簞をならし鉦打たゝき二人り三人りつれてもうたひかけ合ても謳ふ其唱歌は空也の作なりかくて寒の中と春秋の彼岸は晝夜をわかず都の外七所の三昧をめぐりぬ無緣の手向のたふとければかの瀏春もわが家はづかしといへり常は枝の先に茶筌をさし大路小路に出て商ふ業かはりぬれどさま同じければたゝかぬ時も鉢叩とぞは申されける或はさかやきをそり或は四方にからげ法師ならぬすがたの衣引かけたれどこれも墨染にはあらず多くは萌黄に鷹羽うちかけたる紋をつけて着たれば月雪に名は甚之丞と越人も興じ侍るされば其角法師が去年の冬こと〳〵しく寢覺はやらじと吟じけるもひとり聞にやたとへざりけん打とけて寢たがらんはかへり聞んも口をしかるべし明して社との給ひける横雲のかげよりかしひたる聲して出來れりげに老ぼれ足はきものは友どちにもあゆみおくれてひとり今にやなりぬらんと翁の　長嘯の墓もめぐるか鉢叩　と聞へ給ひけるはこのあかつきの事にてぞ侍る

この文にて思ふに府志に各々衣上有紋是俗體家々の紋也といへるはあやまり也鷹の羽の打ちがへたる紋と覺ゆるそのよしは次にのする伴蒿蹊がいへるを見るべし

閑田耕筆巻之二云鉢たゝきといふもの四條坊門油小路極樂寺より出づ住僧は法衣を着袈裟をかけて淨家の和尙の樣なり是は一臈とて其下はつねの半剃たる頭にて法衣の上み計とみゆるものを着るいとあやしき姿也然るに貞享の頃の板本にていろ〳〵の人品を繪きたるものには素袍の上に鷹羽の紋つきたるを着たるさま也其後よく知る人の話をきゝしに衣の上みのごときものに改めしは元祿以後也彼鷹羽の紋も定まれる事萬歲の橘の紋のごとしとなん是は俗形相應にして改たるは異ざま也

耕筆にはたゞなにとなく鷹羽の紋とのみいへり去來が辭に打ちがへ付る由見ゆ鄰松といへるものゝ畫がける群蝶畫英といへる草畫の本二巻ありその上巻にのする所空也僧の圖あり是には茶筅をかた

け衣に鷹の羽を三ッ竪に並へ付たる紋也いづれか是なりや知らず

茶筌賣る鉢叩の古圖くさ〲あれどさしてかはりたる事なければのせずその外京童花洛細見圖にも

鉢扣歌

よき光ぞと影たのむ〱たのむのちやのキヨモほとけのキヨヒヨンあひつのさとキヨにむつのくにけりキヨヒヨンひやうたんふくべにをゝ付て折々風のふく時はヒヨヽラヨンヒヨンしほせの風のさむささんやにてはごら打ならし三界を家と走りあてり鉢扣がせい〱こゝにかけて後生を願はゞなどか佛にならざらんキヨヒヨンノウ五郎三郎夫ハツしよろわしたワイなんとゝこうこんづるやうしやうこらくら春テンフンツテンとたゝからつるには瓢ならではおほせられしよしやたんた寢てもさめても忘るなよ唯一念はねぶつなりけり急て淨土を願ふべしなむまみはろうだハウパイトウ茶せん〱

この歌空也上人の自作なりやいなやはつまびらかならねどもこの歌のみはいとふるくつたへきにけるものと見ゆ

さいつ頃より空也堂再建のよしにて町々を空也僧茶筌うちかたげ徘徊せるありあるひといへるは今の鉢扣の歌ふ所の歌大抵八百首もあるべしといへりされど皆小歌和讃などの體にて三四十字に過るはなしといへり

鉢敲

半陶藁巻之三。鉢叩讃云。爲眞乎蓬鬖飄蕭。爲俗乎。床衲勃窣。非眞非俗。抑鹿角仙人之流亞也耶。是空也上人度一類之機設謳和者也。吁顏瓢屢空。空也已沒。空不在斯乎哉。

華實年浪草卷之十一空也忌の條に一休鉢扣賛云。晝不着笠夜不菴。東西南北自由身。一瓢扣畢有何益。花發十方淨土春。

案ずるに此の一休禪師の賛詞狂雲集續狂雲集一休ばなし續一休ばなし一休諸國物語等にかつて見へずけだし逸文にやあらん

群蝶壽英所載茶筌賣空也僧

融通念佛緣起所載

文政辛巳八月廿一日借抄于南畝翁

○鶴岡山炎上事記〔附勸請以後興廢考〕

文政四年辛巳正月十七日夜相州鎌倉鶴岡八幡宮本社炎上あり、同二月十九日鎌倉松葉谷長勝寺住持日統來りて年賀を告る時に燒亡の有樣物語せる趣左に筆記す。

正月十七日晝後より南風吹出夜に入風倍〳〵強く、夜五ツ時前の頃雪の下村置石町東側あめや藤兵衛宅より出火あり、南風にして無程同町西側に火移り、兩側南より北の方へ宮居を差て火勢吹かけ申候所五ツ半時前御社石階の上の地樓門へ飛火し、消防の間もなく火勢盛んにして御本社廻廊並座不冷小御供所武內社等悉燒失四ツ時過に宮柱倒れて燒おちたり、神輿は廻廊裏の方より出輿ありて英勝寺へ遷座無恙社檀に納有之寶物什器類過半燒失。

內陣に安置の秘封の御影は取出す、但此御影に添有之書物入長持一棹あり燒失畢、且樓門安置の隨身の像取出す、凡石階より上の地末社賴朝社六角堂愛染堂竈殿等燒失裏御門夫より供僧十二院淨國院我覺院正覺院海光院増福院慧光院香家院莊嚴院相承院以上九ケ院小別當共類燒。

供僧小別當とも什物古文書等不殘僧侶の法衣迄も燒失と云り、但し相承院にて書物入長持一ツ取出し井の內に納めて助けたりと云、其餘院々の什物類みな後の山林に取出したるに、枯草に火移りて不殘燒亡したるものありと云、供僧の院々燒亡して餘炎後の山林に燒入六本杉夫より山の茶屋燒亡して南風猶不止山中深くやけ入建長寺の後山觀音堂類燒明月の後山に移り十七日終夜十八日南風强く山火不

消今泉村不動の近所末は武州久良岐郡釜利谷村の近邊まで山林凡三里程燒亡。

彼長勝寺の檀方八幡より貳里北の方本郷村と云所にありて十九日類燒の由聞て見舞たりしに人家は無恙此時迄も近隣の山火猶殘りて見へたりと云。

凡石階より下の地に在所の若宮神殿を始二王門輪藏鐘樓藥師堂〔神宮寺といふ〕其外攝社數多災を免る。

供僧の內安樂院等覺院最勝院並神主大伴氏の宅火災を免る。

雪の下置石町火元より風上にて人家東頬四軒西頬八軒災を免る其餘南方不殘燒亡。

凡鶴岡山の火消は鎌倉中十三ヶ村に役して村每に割附の持場あり、本社は雪の下始五ヶ町の持場なるに其所より出火して銘々自宅を防き居本社消防の人數無かりしといふ。

彼長勝寺の居村名越大町村は下の地若宮並仁王門等の持場也火勢强く吹付甚危かりしが立木ありて夫が爲に火炎空へ上りたれば上の地本社に移りて下の地は殘りしと云。

炎上の趣即刻江戶茅場町供僧旅宿所へ相達し夫よりかの地御代官大貫次右衞門役所へ屆出る其後同人役所より檢使有之灰除にかゝる燒亡の餘材悉く灰となり、十八日十九日兩日の大風にて灰を吹散して本社のあと庭掃のごとくになりて跡に止りしは金銅及銕具類耳皆々かますに納之其數百に餘りしと云。

供僧九人は當分神主大伴宅並燒殘りし三院に同居す火元あわや藤兵衞も八幡の社人也と云

鎌倉八幡宮勸請以後興廢沿革

鎌倉志引東鑑云本社は伊豫守源賴義勅を奉じし安倍貞任征伐の時丹祈の旨有て康平六年秋八月潜に石淸水を勸請し瑞籬を當國由比鄕に建云々。

鎌倉志云今此を下の宮の舊地と云也と云々按今由井濱の三の鳥居の東南の方に下宮跡と云所圖に見へたり浪打際にやゝ近し〔此に下の宮と云は今の本社上の地にうつさるゝ前に其下の地今若宮の所に遷れるによりて下の宮に遷さる跡と云意也〕

同云永保元年二月陸奥守源義家修覆を加ふと云々。

同云治承四年十月七日賴朝先遙に鶴岡の八幡宮を拜み奉し云々。

同云同年十月十二日源賴朝祖宗を崇めんが爲に小林鄕の地の山を點して宮廟を構へ鶴岡〔由比〕の宮を此所に遷し奉る云々。

先茅茨の營をなす云々。

按此時始て由比鄕より今の若宮の地〔下の地也〕遷せるなり、これを鶴岡と云〇然るに此東鑑の文に鶴岡の宮を遷すとあるによりて、鎌倉志に由比の宮をも鶴岡と云ふ、小林鄕に遷りて後も舊號によりて鶴岡八幡と稱したると記したり、されども此說疑らくは非ならん、今由比濱の舊地を考るに岡と稱すべき地形にあらず、鶴岡と云ふは今の上下の宮地小林鄕に移りて後の名なるべし、以上東

鑑治承四年の二章に鶴岡とあるはあやまりなり。
此書は日次に記して當時書する所なれ共右大將家總追補使に補せられしは全く文治二年にあり、記錄所なども其時よりこそ始りたらめ、夫より以前治承養和壽永元暦の間の事實は後より推て記したる事疑なし、されば記事のあやまりなしとも云べからず。

同云治承五年五月十三日鶴岡若宮營作云々當宮は去年假りに建立の號ありといへ共楚忽の間先松柱萱軒を用らる因て花構の義をなし專ら神威を貴らる云々。
按此其斯は今若宮の地にして則應神帝を祭れる本社なり、こゝに若宮と云は猶新宮の謂也、然共建久二年に今の上の地に本社を遷して後此下の地の若宮をも營作し仁德帝の御靈を祭りて尙若宮と稱す、されど此時若宮と稱するは新造の宮の意に非ず、八幡の御子仁德帝を祭れる故の稱也、然るに右治承五年の文を鎌倉志に今の若宮の條に耳引る事誤り也、本社の所に引べし。

同云同八月十五日鶴岡若宮遷宮云々。

同云建久二年三月四日小町の邊より失火して幕府並御家人の屋若宮の神殿回廊塔婆等悉く灰燼となる云々。
按此も本社八幡宮にて今の攝社の若宮を云に非ず。

同云同年四月廿六日鶴岡〔小林〕若宮の上の地に始て八幡宮を勸請し奉ん爲に寶殿を營作せらる今日上棟也。

鎌倉志云、東鑑云三月四日失火若宮の神殿灰燼となるとあり、此建立は其故也云々と記せり、按三月四日災にかゝり同四月廿六日上棟其間日數纔に五十五日餘古代質朴の營作也共あまりに其功速なるに似たり、さればこれは炎上以前に造營の企ありしに、既に燒亡ありければ幸に其功を促された

るならん、又按、此時に治承五年造立して若宮〔本社〕燒亡して後今の上の地の本社に遷され、猶亦其舊社の地〔下の地也〕にも社頭を建られ仁徳帝を祭られ此を若宮と稱せる事上に云がごとし、されば治承以後建久二迄の若宮と號せるは本社にて應神帝也、建久二年以後今に至て若宮と號せるは攝社にて仁徳帝也。

同云同十二月廿一日鶴岡八幡宮並若宮及末社等遷宮云々。

按、舊地の若宮をも造られしは此文にて明か也、且前々は本社なれば鶴岡若宮と記し、此には攝社なれば鶴岡八幡宮並若宮と記したる能文義をなせり。

弘元□年鎌倉北條高時以下新田義貞の爲に亡ぶ神社佛閣火に亡ぶ所不少。

按此時八幡の宮社存亡如何ありけん。

鶴岡社務次第云々應永十三年七月十八日小野邊出火大風餘煙鐘樓に吹附ると云々。

按此時本社存亡如何ありけん。

相承院快元僧都記云〔天文中〕當社應永以後造營之事無之云々又應永遷宮の時云々。

按此記する所年號耳にて支干をもらす、鎌倉の足利氏滿滿兼の時に當れり、前の應永十三年七月小町の失火に亡びし故に造營ありしか。

鎌倉大草紙云、享徳年云々然れ共京都に御沙汰有て海道五ケ國の今川上總介を大將とし御旗を被下鹿王院を相添られ、同年六月十六日鎌倉へ亂入、御所を始谷七郷の神社佛閣を追捕して悉く燒拂賴朝卿以後北條九代の繁昌は元弘の亂に滅亡し尊氏卿より成氏の御代に至て六代の相續の財寶此時に皆燒亡して永代鎌倉亡所と成畠山とあれ果て誠に淺間しき次第也云々。

按此時の兵火にも八幡宮存亡如何ありけん。

鶴岡承仕快元僧都享祿五年〔壬辰七月廿九日改元天文〕五月十八日也小別當を大弓へ可越由自氏綱有之子細云々當社造營事被申所に自大弓樣可領掌由申云々。
同云天文七年十一月十五日上宮拜殿柱立御殿上葺云々。
同云天文九年七月廿六日云々來九月遷宮延引云々。
同云同十月十一日小別當良能死去御遷宮不可止之由云々。
同云同十一月二日帝王崩御之間御遷宮可爲如何之由尋有之不苦旨申之云々。
按天文元年より事始九年に至て遷宮無之遲滯也。
此記天文十年正月にて絶るされば二月より末に遷宮なるべし。
寛文八年戊申御再建あり〔前年寛文七年未事始〕
按自天文十年氏綱再建至此及百廿八年。
棟札云
上棟相州鎌倉鶴岡八幡宮
征夷大將軍右大臣正二位源朝臣修造
寛文八年戊申八月十五日
奉行從五位下備前守源姓松平氏隆綱
大　工　鈴木修理藤原長常
木原内匠藤原義永
下の宮棟札に　上棟相州鎌倉鶴岡八幡若宮　以下同文
同時大門三所の石鳥居御建立あり。
天明元丑年御修覆有之御作事方掛御手傳凡壹萬兩と云々。

按自寛文九年至此及百十三年。

文政四年巳正月十七日炎上　　但若宮は災を免る。

按自天明二年至今及四十年。

以上　　石井内藏允成時筆記

右炎上事記及興廢考辛巳三月二日以輪池先醒元本書寫。

且標書聊補其闕云　　山崎美成〔長崎屋也〕

○小松彌助由緒書

先祖書

〔内大臣平朝臣重盛嫡男　　三位中將維盛二十代

一先祖　　小松彌助舊盛

遠祖維盛元暦元年辰三月廿八日紀州熊野那智之沖にて入水之旨披露仕同國有田郡保田之山林に潜居元久元年子六月卒去妾服之男子を兼盛と申候兼盛より度盛理盛許盛致盛仲盛長盛美盛綱盛邦盛弘盛國盛影盛滿盛猶盛保盛盈盛宗長迄十九代相續上湯川村鄕士にて罷在候

一舊盛儀宗長惣領にて御座候先國主方へ代々鹿皮獻上目見仕諸役免許にて有之候元和五未年南龍院樣御入國之砌初而御目仕候處御年貢定米に被仰付同八戌年より御切米被下置諸役御免被成下御在國之節者年頭御目見に罷出寛永十一年戌五月病死仕候

舊盛惣領　　小松彌助敏盛

諸事父之通被成下延寶元年丑十二月病死仕候

敏盛惣領　　小松彌助行盛

一高祖父

右同断元禄十五年午五月病死仕候

一曾祖父　行盛惣領　小松彌助安盛

右同断元文四年未八月病死仕候

一祖父　安盛惣領　小松彌助祐盛

右同断明和四年亥六月病死仕候

一父　祐盛惣領　小松彌助時盛

右同断安永八年亥九月病死仕候

右之通御座候

有田郡上湯川村地士

文化五年辰五月　小松彌助長（ヲサ）盛

○鎧巧明珍家譜并巧拙之評

近衛帝有　勅旨命明珍因爲累代之家號稱中興元祖

○元祖　明珍出雲守紀宗介（ムネスケ）

甲類上作　住雲州後移九條又住鎌倉　康治久安文治建久正治之頃　同　刑部大輔宗清

○二代

甲類上手　住相州鎌倉　建久正治元久之頃

右　仲宗長　左　内宗秀　賴母宗泰

正　内吉清　平太郎吉次

○三代　　同　兵部大輔宗行
甲上手　住一條堀河　元久貞應寛喜之頃
大隅宗直
○四代　　同　兵衛尉宗益
甲頰上手　住紀州和歌山　承久天福之頃　右平太宗築　左平太宗隅
○五代　　同　左京大夫宗重
甲頰上手　住相州小田原　寶治文永之項　　兵庫宗遠
○六代　　同　新大夫宗忠
甲上手　住濃州佐野　弘安之頃
求馬重家　嘉太郎吉重
○七代　　同右近大夫宗縄
頰上手　住九條　德治之頃
對馬宗義
○八代　　同　兵部大輔宗光
甲頰中臈當上
丹宮宗則
後醍醐帝　勅命賜御紋製朝日威御鎧
○九代　　同　左近大夫宗政
甲臈當上　住一條堀河　建武之頃

將軍源義公賜青銅拾萬疋及攝州河邊郡服部鄉七拾貫之地

○十代　同　兵衛佐　宗安
甲頬籠手上　住一條堀河　嘉慶之頃　民部大輔　宗時
○右稱宗十代但不彫刻姓名〔尚有口授〕
○十一代　同　左京大夫義弘
甲上　住一條堀河　明德之頃
○十二代　同　左兵衛尉義紀
甲上　住一條堀河　應永之頃
○十三代　同　五郎大夫義則
甲上　住一條堀河　正長之頃
○十四代　同　六郎大夫義長
甲上上頬中　住一條堀河　寶德之頃
弟　式部大夫高義
甲頬上上籠手上作　○信家　高義　義通　稱義類之三作也
○十五代　同　新次郎義有
甲上頬中　住相州鎌倉　文明之頃　久八義久　千次郎義國
○十六代　同　三郎大夫義保
甲上頬中　住相州鎌倉　文明之頃

左近大夫義通　又四郎勝義

武田信玄令作諏訪星盛冑此時賜信字

○十七代　同　左近將監信家

甲上上類上中　住上州白井或甲州府中　永正享祿弘治大永天文頃

○始曰安家後改信家又曰大隅後又號覺意入道

新五郎信房　孫四郎勝家

○十八代　同　又八郎貞家

甲中　住相州小田原或伊州　天文弘治之頃　○亦曰平六

判四郎房家　判大夫房宗

將軍神君賜御書頂戴御紋

○十九代　同　久大夫宗家

一大圓平頂山尊靈甲宗家宗信父子以兩作製之曰齒朶御冑也

住江州安土　天正元和之頃

○二十代　同　大隅守宗信

甲上譽上尤得鍛練　住大坂或武州　元和寛永之頃

增右衛門宗清　但馬宗長　備後宗秀

○廿一代　同　大和守宗利

甲類譽共上又得爲彫刻後改長門守邦道　住武州神田　寛永寛文之頃

木工介春信

○廿二代　同　式部紀宗介
後改大隅守
○明珍家庶流

○義保弟　左近大夫義通
甲頰上且廻諸國求勝於已者冑形殆似高義〔尙有口授〕住一條堀河後住常州府中或上州
大永享祿之頃

○義通子　數馬後名高義
甲頰中甲形似父

○義通弟　又四郎勝義
甲頰上手　後號新大輔甲形似義通但冑於通例小高　住常州府中　大永享祿之頃

○勝義子　五郎兵衞勝正
甲頰中元信家之弟子也故甲影粗似信家　住上州白井或小幡　天文之頃

○　太郎勝政
製作同于勝正但勝正之弟子也　住上州小幡　天文之頃

○信家弟　孫四郎勝家
勝義弟子後號重大夫甲形似信家叉粗似勝家也　住上州小幡　天文之頃

○信家子　貞家弟　七郎大夫氏家
甲上手似父信家　住甲州府中　大永之頃

○勝家兄　新五郎信房

製作右同　住甲州府中　天文之頃

○信房子　判四郎房家

甲上　住上州白井　天文之頃

○房家弟子　判六郎房吉

製作中　住上州　天文永祿享祿之頃

○房家弟　判大夫房宗

後號又八郎信家弟子冑形粗似信家　住相州小田原　永祿享祿之頃

○房宗子　文五郎家房

信宗弟子甲形似房家　住相州小田原或上州　天文享祿之頃

○吉久子　九八郎信吉

製作中信家弟子甲形似房家　住相州小田原　天文之頃

○信吉子　文七郎信廣

住相州鎌倉　永祿之頃

○信家子　文平房則

家房弟子　住相州小田原　天文之頃

義有庶流

○成重子　文八郎康重

信廣弟子　住相州雪下　永祿之頃

○　平四郎景家

住相州鎌倉　弘治之頃

○房宗弟　左內宗房

甲形頰容似兄房宗之作　住相州雪下　永祿天正之頃

○義久子　次郎大夫成國

成重祖父甲中星胄多　住相州　延德之頃

○先成國子　平大夫成國

甲中　住相州酒匂川　天文之頃

○成國子　成重父　八郎成道

甲上　住上州白井　元龜天文之頃

義有庶流

○康重父　蓬萊太郎成重

甲上胄形似義弘星胄多筋胄希也胄之星精小也　住上州八幡　天文永祿之頃

○成道弟子　又八郎憲國

新八後號雲海入道甲上似信家作

○　又六郎憲重

住上州高崎　永祿之頃

○　又四郎重國

住上州高崎　永祿之頃

○憲重子　九郎國重

住上州白井　永祿之頃

○重則子　喜六宗則
甲上勝義弟子後改七郎大夫甲形似勝義作

○宗則子　喜内宗義
甲上製作似父亦似成重作、　住上州白井　永祿之頃

○憲重子　又市郎重則
住上州白井　永祿之頃

○義通弟　兵部宗久
甲中宗則弟子　住一條堀河或野州　天文之頃

○宗則子　三郎宗時
甲上製作似宗則専得製頗信家作　○自宗介十六代後住一條堀河或上州白井

○宗久子　又八郎吉久
甲形似宗久　○自宗介十八代後　住野州太田原或相州鎌倉　天文之頃

平角久吉
右同　住野州太田原或相州鎌倉、天文之頃

○貞家之弟子也　左大夫家久
甲上製作似父専得製嗣　住相州雪下　天文慶長之頃

○國久子　傳七郎久家
甲上　家久養子　住相州雪下　天正慶長之頃

○久家子　左太郎政家

甲上　住相州雪下　慶長之頃

○　吉平吉道

甲形似吉久元來吉久之弟子也　住奥州岩城　永祿之頃

○吉道子　左近次義家

甲形似前勝義　住奥州岩城　永祿之頃

○　平介吉貞

甲形似吉久元來吉久之弟子也　住野州　天文之頃

○吉道之弟子也　織衛後勝義

甲形似前勝義少劣信家弟子　住奥州岩城　文祿之頃

○　源次次清

專得製胴政家之弟子少劣政家　住相州雪下　元和之頃

○景家子　萬次郎貞行

籠手上作　住相州大鳥　元和之頃

○天文之頃　家房文五郎

○天文之頃　信行彌介

住上州白井

○永正之頃　信忠清七郎

住甲州府中

○享保之頃　住上州　信政　九七

○弘治之頃　住甲州　信光

○大永之頃　住甲州　信綱　丹下

○天文之頃　信安　吉十郎

○義道弟子

義跡　義平　義道　又太郎

上作　義正　和泉守

上作　義家　左近次

勝義

前勝義弟子

○成重弟子

○永祿之頃　住上州　成吉　源兵衛

住上州　成忠　門平

○享祿之頃　住上州　成次　左源次

住上州　重忠　傳八

○平藏子　國近

上作

住加州或上州　國久蓬萊次郎

住加州金澤　永久平内

國近蓬萊三郎

○上作

面頬上作憲國弟子

○明珍家製作之次第

○宗介　冑形丸シテ鉢ヒキク星大小共ニ有之至テシホラシク筋冑モ有之鉢形上ニ同シ頬烈勢至テスサマジ尙有口授

○宗清　冑形上ニ同、頬父ノ作ニ似タリ尙有口授

○宗行　冑形丸ク鉢形頭上尖リテ見エルナリ　頬皺ナシ尙有口授

○宗益　冑形丸ク鉢形少シ後高也　頬烈勢也尙有口授

○宗重　冑形丸鉢後高也　頬ハ老人ノ如クアゴ出テ長ク見ユル也

○宗忠　冑ノ形宗清ニ似タリ

○宗繩　冑ノ形丸ク急ニ高ク見ユルナリ

○宗光　冑形丸後少高シ

○宗政　冑形宗清ニ似タリ筋高シ

○宗安　冑形後ニテ張鉢ヒキクカラクリホソシ　頬ヲ製スルコト上手也

○義弘　冑形上ヘ高シ上ニテカト立目庇ヒロシ

○義紀　冑形上ヘ高シ祖父ノ作ニ似タリ手際宜シ　頬モヨロシ

○義則　冑形上ヘ高シ義紀ガ作ヨリ丈夫ニ見ユル也　頗上手也
○義長　冑形上ヘ高シ勝義ニ似タリ手ギハ宜シ
○義有　冑形右同斷
○義保　冑形右ニ同
○信家　冑形ムツクリト後ニテ平ク見ユル也筋ヲ上ニテ摺ナガシタルナリ
○貞家　冑形右ニ同ジ信家之作ニ少シ劣レリ
○宗家　冑形宗安ニ語タリ後ニモ前ニモ張也
○宗信　冑形右ニ同ジ
○邦道　冑形大ニ丸シ宗介ニ似タリ
　鎧巧明珍家譜並其庶流系脈且冑製鑑定之書一帖臨摸卒業尋校正一過畢
　時寶暦十三年癸未二月十八日　作宿禰俊

○華夷一覽圖說

大日本
蝦夷ハ此諸地ヲ歷タル人ノ說ニ其地形開キタル扇子ニ似タリ松前ヲ以テ扇ノ要トシ東西ノ蝦夷ヲ開キタル所トナス且蝦夷ノ西方〔ソオヤ〕ト云フ所ヨリ海ヲ渡ルコト一十里〔日本里程〕ニシテ地アリ名テ「カラフト」又「カラオト」ト云其地形大ナリ此地或ハ韃靼ノ海邊ノ一島ナリトモ云然レトモ今ハ多ク滿州ノ地續キノ岬ナリトモ云。

「ムシノス」ニ靑紺黃紫等ノ諸色アリ靑色ナル者ヲ最多シトス。

蟒緞　俗云「エゾギレ」

コレ等ハ滿州ヨリ「サンタン」ト云所ニ輸シソレヨリ「カラフト」ニ送リソレヨリシテ又蝦夷ニ交易スル者ナリ。

蝦夷ノ東北ニ「クナジリ」島アリ其東ニ又「エトロフ」島アリ此二島ハ日本ニ從フコレヨリシテ東北ニ諸島アリ皆魯西亞國ニ屬ス日本ノ東方ニ當テ數島アリ詳ナラズ西洋ニテ刊刻ノ地圖ニ多クコレヲ載ス然ルトキハ其在ルコト疑ヒナシ且其風土何ント云フコトヲ知ラズ。

相傳フ常州東海邊ノ漁人此島ニ漂流シ後歸テ九穴ノ蚫殼徑一尺四五寸ナル物ヲ持テ其一村ノ人ニ示シテ曰彼島ニ產スル所ノ者ナリト又云彼島土地極メテ肥テ穀ヲ種ルニ宜ク其他日用ノ物闕クコトナシ彼地ニ移テ居住セバ人々豐樂ニシテ賦稅ノ苦ヲ免レン若シ彼所ニ至ルコトヲ欲セバ我其海路ヲ導クベシト一村ノ人皆此議ヲ同フシ里正ヲ始メトシテ皆其妻子眷族家財ヲ携ヘ舟ニ駕シテ悉ク夜ニ乘ジテ逃去セリ一村空虛トナリヌ隣村ノ人其石決明ノ殼ヲ見且其漁人ノ歸タルコトヲ知ル者アリ一村空虛トナルニ及テ始テ其彼島ニ逃レ去タルコトヲ知ルト云。

鬼界ヨリ南ニ三十六島アリ皆琉球ノ部ナリ其內ニ沖繩島ト云ヘルハ最モ大ナリコレハ中山山南山北ノ三國ニ割據セル所ナリ今ハ中山一統シテ三十六島ヲ治ム其言語ハ日本ニ同ジ只久米ト云ヘル島ノミ唐音ナリコレ昔明ノ大祖ヨリ賜タル閩人二十六姓ノ子孫居住ノ地ナリ。

無人島一名小笠原島ト云其諸島ノ內最大ナル者長四十餘里ニ及ブト云其地皆極テ肥沃ニシテ種々ノ佳木多ク又金沙ヲ出ス或ハ云其地ニ奇異ナル鳥獸アリト云其日本ヨリ海路今知ル人頗鮮シト云。

大淸今ハ蒙古滿州西藏西域ヲ合セテ皆其郡縣トナシ且朝鮮安南ノ王共ニ臣服シテ淸朝封域中ノ諸侯ノ

如シ其內ニ安南ハ私ニ國中ニ於テノミハ帝ト稱シテ年號アレトモ朝鮮ハ朝貢奉職ノ禮最謹ナリ。

長城ノ外開平ハ古ヘ元ノ代ノ上都ナリ長白山ハ淸朝ノ始祖發[illegible]ノ所ナリ興京ハ本名黑圖阿喇城ト云淸ノ大祖奴兒哈赤都ヲ建シ所ナリ後瀋陽ヲ奪テ又コレニ都セリ太宗ノ世ニ瀋陽ヲ以テ盛京トシ黑圖阿喇城ヲ興京トセリ哈密ハ漢ノ伊吾廬唐ノ伊州ノ地ナリ明ノ時ニハ王アリテ明朝ヨリ忠順王ニ封ゼラレシガ後ニ王魯番ニ彼ラレ今ハ淸ノ郡縣トナル其邊ニ疏勒河アリコレ古ヘ漢ノ時疏勒國ノ地ナリト。

王魯番漢ノ車師國唐ノ高昌國ノ地ナリ明ノ時ニハ屢邊患ヲナセシガ後衰ヘテ今ハ淸ノ郡縣トナレリ。

西藏ハ一名唐古忒(タンクト)ト云コレ唐ノ西吐番ノ地ニシテ今ニ至テ唐ノ時ノ和盟ノ碑アリコレ佛敎最盛ナル地ニシテ僧多ク其內ニ喇嘛ト云ル者最尊クシテ其數主トセリ今ハ皆淸朝ニ屬シテ封爵ヲ受ケ淸朝ヨリ守兵ヲ置ク初メハ國王アリシガ後淸ニ叛キタルヲ以テコレヲ誅シテ今ハ王爵ナシト云。

準噶爾(シュンガル)ハ元ノ世ノ遺種ナリト云コレハ西洋ノ說ニシテ其史錄アリ其都ヲ伊犂ト云コレ古ヘノ烏孫國ノ地ナリ淸ノ康熙ヨリシテ其勢甚盛ニシテ其汗〔汗ハ王ト云ガ如シ古ヘ隋唐ノ時ニ可汗ト云ハコレナリ〕策旺阿拉布坦ナル者淸朝ト哈密ノ地ヲ爭ヒ又西藏ノ地ヲ破リ其主及法師等ヲ殺シテ屢淸朝ト戰ヒヲ爲セリ。

西洋書ニハ策旺阿拉布坦ヲ「スワンタラプタン」ニ作ル其音相近シ曰西洋ノ一千七百二十年ニ「スワンタラプタン」淸朝ト大ニ戰フニ因テ魯西亞ト素隣好ヲ厚クスルヲ以テ使ヲ魯西亞ヘ都ニ遣シテ兵數萬人並ニ大砲ヲ助ケンコトヲ乞フ然レトモ魯西亞ハ其西方ノ戰止マザルニ因テ事多クシテコレヲ救フコトヲ得ズト云一千七百二十年ハ淸ノ康熙五十九年ナリ。

其後策旺阿拉布坦死シテ三世ヲ歷テ其國亂レ其酋長阿睦爾撒納ナル者其汗達瓦齊ニ叛ヒテ淸ニ附シ

清朝ヨリ大軍ヲ導ヒテ乾隆十九年ニ準噶爾ヲ滅シ其汗ヲ擒ニシテ清ノ郡縣トナセリ故ニ今ハ準噶爾ト云名ヲバ稱セズ其西ナル哈薩克ハ古ノ大宛國ノ地ナリトセリ亦清朝ノ屬國ナリ其南ナル車庫ハ龜玆國ノ地和蘭ハ古ノ于闐國ノ地葉爾羌（一名ヱルキヤン）ハ古ノ月支國ナリ皆清朝ノ郡縣ナリ又西藏ノ南ニ當ル老撾ハ漢ノ哀牢國ノ地ナリ明ノ永樂三年ニ内屬シテ雲南ノ部ニ入リ其酋長ニ宣慰司ト云ル武官ヲ授ケ其地ヲ治メシム廣東ノ南ニ數多ノ小島アリ其内阿馬港島ハ西洋波爾杜瓦爾國ノ人居住シテ明朝ノ許シヲ受テ城ヲ築キ毎年二度廣東ノ府ニ距テ互市ヲナセリ（此所ヨリ昔ハ日本ニモ船ヲ通ジタリシガ其後渡海ヲ官ヨリ禁ゼラル）

安南ハ古ヘ漢ノ時ノ交趾ノ日南九眞二郡ノ地ナリ五代ニ丁璉ナル者其地ニ據テ始テ別國トナリ後ニ黎李陳三姓ヲ易ユ明ノ始メ其臣黎季□ナル者陳氏ヲ殺シテ自立セリ明ノ成祖其罪ヲ討ジコレヲ平ゲテ明ノ郡縣トナル後宣德年中ニ黎利ナル者亦興テコレニ據テ明朝ヨリ封爵ヲ受ル然レトモ其國中ニ於テハ帝ト稱シテ東西ニ京ヲ置キ年號ヲ建ツ其東京ハ交趾ノ地ニシテ國王世々恒ニ爰ニ都スルガ故ニ世ニ此國ヲ名テ東京ト云フナリ。

廣南ハ西洋ノ人呼デ「ラシンシナ」ト云コレ元安南ノ内ナリシガ今ハ別國ノ如シ其初メ明ノ嘉靖ノ初メニ安南ノ國亂レ其大傅莫登庸ナル者其主黎譓ヲ追出シテ其國ヲ簒フ黎譓ハ其臣鄭氏ニ助ケラレテ僅ニ清化ノ一府ヲ保チ老撾ノ助ケニ因テコレニ居ルコト數世鄭氏ハ世々コレガ相タリ後萬暦二十年ニ再ビ勢ヲ得テ莫氏ノ主ヲ討殺シ其餘黨ヲ逐テ國祚ヲ恢復セリ其後鄭氏ノ母舅阮氏（一ニハ鄭氏ノ甥穆氏ト云）ナル者廣南ヲ鎭守シテ鄭氏ト睦シカラズ遂ニ兵ヲ構ヘテ別國ノ如シ黎氏ノ主ヨリハ封爵ヲ受クト雖モ鄭氏トハ不和ニシテ時々爭戰スルコト今ニ於テ止マズト云（黎氏ハ只國主ノ虚名ノミニシテ安南ノ大小庶事ハ皆鄭氏コレヲ擅スルヲ以テナリ）

占城ハ古ヘ林邑國ニシテ唐ノ時ニ改メテ環ト云又改メテ占城ト云明ノ中葉ヨリ安南ニ破ラレテ今ハ廣南ノ屬ナリ。

東埔塞ハ古ヘノ眞臘國ノ地ナリ國王アリト雖明ノ萬暦中ニ暹羅ニ攻ラレコレニ降テ其屬國トナリ其後日本ノ享保二年ニ廣南ニ攻ラレテ又コレニモ臣服セリ。

暹羅ハ其土人ハ稱シテ「モアンタイ」ト云コレ大盛國ト云義ナリ此國主ハ古ヘノ西洋「アレキサンデル」大王ノ苗裔ニシテ國ヲ建テヨリ今ニ至テ凡一千三百餘年ニ及ブト云。

昔「アレキサンデル」大王印度ヲ平ゲテ其次子ヲ封ジテ印度ノ主トセリ此子孫夥ク印度諸國ニ蔓レリ「アレキサンデル」大王ハ日本孝安天皇ノ御宇ニ當リ漢ニハ歷山ト譯セリ利瑪竇ガ曰古昔西土有總王。名歷山。奄有百國、幅員數萬里。ト即コレナリ。

其國最强大ニシテ其南ノ六昆太泥「一名ハタナ」彭亨若耳「一名「チヨホル」ト云若耳ハ明ノ時ニ所謂柔佛國ナリ」等ノ諸王國皆コレガ屬州タリ。

太泥ニ彭亨ハ初メハ各王アリテ明ノ時ニハ朝貢セシコトアリ。

其南ノ「シンガタラ」ハ蓋シ古ヘ佛書ニ所謂獅子國ノ地ナリ其西滿剌加國ハ漢ノ時ノ哥羅富沙國ノ地ニシテ古ヘハ王アリテ屢明朝ニ入貢セシガ日本永正七年ニ當テ西洋波爾杜瓦爾國ノ人コレヲ襲ヒ破テ王ヲ逐ヒ國ヲ奪テコレヲ領スルコト一百三十年ニシテ寬永十七年ニ至テ和蘭ノ人又波爾杜瓦爾人ヲ破リコレヲ奪テ今ハ和蘭ノ領地ナリ。

「アバ」亞剌敢琵牛「チプラ」ノ四國ハ古ヘハ各自立ノ王アリ殊ニ琵牛國最强大ニシテ戰ノ時ニハ兵數一十萬人象一千隻ヲ出ス則明史及東西洋考ニ所謂東蠻牛國ナリ日本ノ永祿七年ニ大軍ヲ以テ暹羅ヲ侵シ破テ其國都ニ亂入シテ其國王ヲ走ラシメ王子ヲ擒ニシ其寶貨及白象「此邊諸國都テ白象ヲ貴

ム」ヲ奪テ國ニ還レリ其後暹羅國ノ王ノ次子位ヲ嗣テ其怨ヲ報ゼンコトヲ圖リテ日々ニ國中ノ軍兵ヲ調練シ數年ノ後遂ニ國中ノ精兵一萬人ヲ興シテ大ニ琵牛ヲ撃破リ〔明史ニ暹羅ト東蠻牛ノコトヲ記セル此ニ所言ト大抵相同ジ〕コレヨリ年々ノ戰ヒニ琵牛終ニ破レテ大半其地ヲ奪ヒ取ラレ日本寛文延寶ノ比ニ至テ勢ヒ窮リ力竭キテ救ヲ其屬國ナル「アバ」ニ求ム「アバ」ノ王即コレヲ救フニ因テ暹羅ノ兵稍退ク然レトモ其「アバ」ノ王琵牛ノ衰微セルヲ見テ異志ヲ挾ミ其後急ニ襲テ琵牛ノ王ヲ殺シテ其國ヲ簒ヒ又軍ヲ移シテ西ノ方亞剌敢『チプラ」ヲ撃ツ二國皆降テコレニ臣服セリコレニ因テ今ハ「アバ」ノ盛ナルコト頗ル暹羅ニ亞グト云〔「アバ」ハ必ズ漢名アルベシ追テ可考〕

「アシム」亦自立ノ王國ナリ然レトモ日本寛文三年ニ大莫臥兒ヨリ大ニコレヲ攻破リテ國勢頗衰ヘリ。

琵牛ノ南洋ニ五六島アリコレヲ「アングマオン」ト云此島人長大黑色ナリ好テ人ヲ食フ故ニ海船敢テ此ニ距ル者ナシト云蓋シ乘人ノ小説ニ云晏陀蠻國ナルベシ。

莫臥兒（モゴル）又大莫臥兒ト云コレ古ヘノ天竺五印度ノ地ナリ莫臥兒トハ其原ハ蒙古ノ轉ナリ其太祖「テモルヘナ」〔「テモル」ハ元ノ時ノ人名ナリ所在ノ帖木兒ト云ハコレナリ又一名「タメラアン」ナル者ハ元ノ太祖西洋ノ人ハコレヲ「エンギスカン」又「ラモチン」ト云ハ則チ元ノ太祖ノ名漢ニ鐵木眞ナリ〕ノ第二子封ヲ西域ノ地ニ受ル者ノ苗裔ニシテ初メハ撒馬兒罕（サマルカン）ノ地ニ都シ英雄絕倫ナルコト其祖風アリ西ノ方巴爾齊亞ヲ破リ又都兒格ヲ破テ其主ヲ擒ニシ其後明ノ建文ノ初メニ遂ニ印度ヲ滅シテ其地ニ帝トナリ子孫相繼テ榜葛剌〔古東天竺〕坎巴牙（カンバヤ）ヲ併セ「コルコンダ」「ヒシプウル」〔共ニ南天竺〕ヲ滅シ「ヒスナアガル」ヲ降シテ今ニ至ルマデ强盛富饒ナリ。

莫臥兒ニ兩都アリ冬ハ「アガテ」ニ居リ夏ニ暑ヲ避テ勞爾（ラル）ニ遷ル兩大河アリ一ハ印度河一名身毒（センド）河ナリコレ印度ト云ル國名ニ由テ起ル所ナリ一ハ安日（ガンゲス）河ナリコレ佛書ニ所謂恒河ナリ〔其說長ケレバ

略ス」

「テルリ」ハ古ヘノ印度ノ都ナリ「ヒンフウル」ノ南臥亞ハ西洋波爾杜瓦爾國人ノ所領ニシテ六ノ城アリ都督及教官ノ長ヲ置ク其南ノ總名ヲ麻辣襪爾ト云中ニ古里〔著名アリキユトト云〕柯枝俱藍及其他數多ノ王國アリ〔古里柯枝俱藍共ニ明ノ時ニ入貢セリ〕コレ皆古ヘノ印度ノ種尚殘レル者ニシテ其內ニ族姓ノ最貴キ者ヲ婆羅門ト云コレニ次デ貴キ者ヲ乃勒ト云コレハ武士ナリ其他コレニ次テ商工農漁皆其業ヲ世々ニスル〔漁者ハ最賤シ〕

「ヒスナアガル」ノ東南則チ意蘭島ハ〔明史等ニハ錫蘭山國ニ作ル〕半ハ自立ノ王アリテコレヲ治メ半ハ和蘭ニ屬シテ守ヲ置ク其和蘭ヨリ置ク所ノ府ヲ崑崙勃ト云此島中ニ大高山アリ名テ「アダムス」ト云即チ太古ノ世「アダム」〔西洋ノ說ニ天地開闢シテ後ニ人ノ始祖男女二人生ズ其男ヲ「アダム」トイフ〕ノ遺蹟ニシテ〔明史ニ錫蘭山國ノ山上ニ盤古之遺址アリト云者コレニシテ此盤古ハ即「アダム」ヲサシテ云フナルベシ〕釋迦說法ノ靈鷲山ナリト云〔釋迦出生ノ國今詳ナラズ或ハ云ク此島即釋迦ノ出生ノ地ニシテ古所謂麻羯陀國ナリト或ハ云ク今ノ暹羅ト琵牛トノ地古ヘハ合シテ一國ニシテ「マカツタイ」ト號シタル所ナリト或ハ曰ク釋迦ハ上古ノ世「デルリ」國ノ王子ナリト又或云ク釋迦ハ「アフリカ」州ノ阨入多國ノ生レニシテ其時巴爾齊亞國ヨリ阨入多國ヲ滅ボシテ阨入多國ノ「アピス」ト云ヘル教ヲ破却シタルニ因テ釋迦ハ其亂ヲサケテ印度ニ至テ弘法セシトモ云四說是非ヲシラズ〕

坎巴牙ノ西ニ去ト云ヘル島アリ波爾杜瓦爾國人コレニ據ル。

巴爾齊亞國又百兒西亞ト云ハ云クコレ古ノ所謂波斯國ナリト此國上古ヨリ有名ノ上國ニシテ開基甚久シ周ノ世ニ當テ其國最盛也後數々沿革アリ今ノ國土ノ太祖「イスマヱル」ハ亞國ノ聖人「アリイ」ノ

苗裔ニシテ日本明應八年ニ其國ニ生レ子孫相續シテ其兵威ノ盛ナルコト莫臥兒ニ劣ラズ恒ニ都兒格國ト戰ヒヲナス。

其南ナル忽魯謨斯島古ヘハ自立ノ國王アリテ巴爾齊亞ノ内ノ「モゴスタン」等及亞刺比亞ノ内ノ「マスカタ」「ヲルハサン」等ノ地ヲ併セ有チ其勢盛ンナリ明ノ時ニハ屢入貢セリ凡傳統二十八世ニシテ日本元和八年ニ巴爾齊亞ニ滅ボサル。

亞刺比亞ハ大國ニシテ君長一ナラズ或ハ巴爾齊亞ニ屬スルモアリ或ハ都兒格ニ屬スルモアリ或ハ自立スルモアリ荒地石地アリ又大沙ノ地アリ名テ沙海ト云行旅艱難甚シ其□天方國ハ一名天堂ト云又名默加ト云元明ヨリ清ニ及ブ迄皆入貢セリコレ日本ノ欽明天皇ノ三十一年ニ當テ回々教門ノ祖師謨罕驀德〔一ニ馬哈默又馬哈嘛ニモ作ル〕誕生ノ國ナリ〔此教莫臥兒巴爾齊亞都兒格ノ人コレヲ奉ズルナリ〕默德那此所ニ謨罕驀德ノ墓アリ。

都兒格此國ノ始祖「オツトマン」ハ日本正安二年ニ當テ「アラマニア」ノ地ヨリ興テ大業ヲ成シ其後子孫コレニ嗣デ諸國ヲ併セテ歐羅巴洲ノ厄勒祭亞國及其邊ノ數州并ニ亞弗利加洲ノ阨入多國等ヲ併セコレニ帝トナリ地廣ク兵盛ンナリ然ドモ兵ヲ用ユルコト恒ニ絶ヘザルニ因テ國中ニ富盛繁華ナル都會少ナク殺伐ヲ專ラトスルニ因テ其國王簒弑ノ事時々コレアリ今ハ北ニ魯西亞アリ西ニ入爾馬泥亞〔和蘭ノ本地ニシテ歐羅巴正統ノ帝アリ〕アリ東ニ巴爾齊亞アリテ皆剛國ナレバ戰ヲナスト雖一百年來他國ヲ奪フコト稀ナリ其内亞馬西亞ハ古ヘ亞瑪作搦ト號シテ女人國ナリ其女人猛勇ナルコト上古ノ世ニハ甚名譽アリ其後國亡ビテ今ハ只其名ノ存スルノミ。

如徳亞ハ古ヘノ大秦國ナリト云此國上古周ノ世ノ初メニ當テハ甚盛隆富饒ノ地ナリ其傍ノ死海其水鹹ニシテ脂膏ヲ湧出シ湖中絶テ魚等ノ生類ナシ故ニ死海ト名ク其西ナル地中海ノ中ノ際波里島此地上

品ノ火浣布ヲ出ス。

自立韃靼此地ハ皆漢ニ云西域諸國ナリ今此中ニ數多ノ國アリテ皆自立ノ主アリ故ニ自立韃靼ト云ナリ其內撒馬兒罕ハ漢ノ罽賓國ノ地ナリト云元ノ太祖ハ悉ク此自立韃靼ノ諸國ヲ平ゲ又其南今ノ莫臥兒國ノ內ナル北方諸國ヲ併セ西ノ方印度河ヲ渡リテ巴爾齊亞北方ノ地ヲ平ゲテ又西ノ方「キラン」ノ地ヲ越ヘ鐵門關ニ至テ還レリ其後太宗ノ時ニ至テ南西ノ諸國ヲ征シテ北高海ノ北岸ヨリシテ今ノ魯西亞所領ノ亞私太臘甘ヲ越ヘテ小韃靼ノ地迄ヲ從屬セシメテ元ノ盛ナル時ニハ此等ノ諸國皆元ノ屬國ナリシガ其後元亡ブニ及デ再ビ今ノ如ク諸國ニ分裂シタルナリ〔漢土ノ諸史皆曰ク元ノ太祖ハ兵ヲ用ユルコト神ノ如ク國ヲ滅スコト四十餘遂ニ西夏ヲ平ゲ西域ヲ定ム然シテ其功業ハ史錄傳ヲ失テ悉ク記サヾルコト惜ムベシトノミアリテ其經略シタル諸國ノ地皆詳ナラズコノゴロ西洋ノ書ヲ閱スルニ元ノ太祖出生ヨリ以來世々ノ事實ヲ蒙古西域等ノ國迄記シタル史書アリテ其太祖一生ノ功業及ヒ滅シタル諸國ノ地理等皆歷々トシテ證スベク且太祖ノ諸子孫封ヲ西域ノ諸國ニ受タル者ノ後代史錄ニ至ルマデ甚詳密ナリコレニ因テ太祖ノ所歷ノ諸國ノ地理ヲ詳ニスルコトヲ得タリ○上ニ記セル其史書ノ如キハ追テ全譯シテ元ノ遺事ヲ補ベシ。

魯西亞國自稱シテ「ロツシイスコイ」〔尋常ノ土人ハ「オロシヤ」ト云即「ロシア」ヲイフナリ〕和蘭ノ人ハ「リユスノランド」ト云其太祖「ロリキ」ナル者日本天平勝寶五年ニ當テ此國ヲ開キ子孫相續テ其後「モスコウ」ト云地ヲ以テ都トセリ故ニ其國ノ別名ヲ又莫斯哥未亞トモ號セリ文明年中ヨリ其國日々ニ盛ンニシテ永正十一年ニ入爾馬泥亞ノ帝ト永ク兄弟ノ國タランコトヲ約シテ東帝ノ號ヲ受ク近傍ノ加山「ボルガル」亞私太臘甘白爾未雅及止白里ノ本國ヲ併セ近世其國益々強大ニシテ西方ノ雪際亞ヲ破リ其地ヲ奪テ之ニ新都ヲ建ツ南方都兒格巴爾齊亞ヲ破リ東方止白里ノ地テ開テ蝦夷

ノ東北ノ諸島及其東ノ「アレウストスキヤ」ノ諸島ニ至ル迄ハ其屬タリ故ニ今ハ天下第一ノ大國ナリ「カレリア」「テキスホルム」禮勿泥亞（リホニヤ）昔ハ雪際亞ノ地ナリシヲ奪ヒ取タルナリ「アソフ」ノ邊ハ總テ都爾格ノ地ヲ奪ヒタルナリ鐡門關ハ著名「テルベント」又「デミルカピ」ト云鐡門關ノ義ナリ其道ハ昔シ大石山ヲ析開キテ長キ狹路ヲナシテ兩邊絶壁ニシテ屹立シ城ハ山上ニ在テ昔「アレキサンデル」大王ノ世ニ築キタル所ノ者コレ巴爾齊亞ヨリ北方ノ諸國ニ通ズル往來ノ咽喉ノ要路ニシテ其要害堅固ナルコト世ニ絶シタルニ因テ鐡門ノ名アリ即元ノ太祖西域ヲ平ゲテ後ニ此ニ至テ還リシ所ナリ初メハ巴爾齊亞ノ王コレヲ有チシガ享保中巴爾齊亞ニ內亂アルニ乘ジテ魯西亞ヨリコレヲ奪ヒ取タルナリ。

止白里ノ本國此地四方皆日本ノ里法ニテ四百餘里アリ昔ハ白立ノ國王アリテ脫傳斯奇ノ地ニ都セシガ天正十四年ニ當テ魯西亞ニ滅ボサレ其都ニ守ヲ置テコレヲ治ムコレヨリシテ東方ハ皆干戈ヲ用ヒズ惟德ヲ以テ其土人ヲ懷ケ從ヘテ次第ニ城ヲ築キ守ヲ置テ遠ク其地ヲ開キ東方ノ大海ニ至リシナリ尼爾若斯（ネルコヘンスキ）城此城ハ既ニ清朝ト和睦シテ後康熙二十八年ニコレヲ築キ兩國ノ界ヲ固クシ此所ヨリ睦隣ノ使節ヲ北京ニ通ゼリ。

「アレウトスキン」諸島コレ近世魯西亞人見出シタル島ニシテ皆魯西亞ニ從屬ス（其中ノ一島「カミシイツカ」ナル者ハ先年伊勢ノ舟人光太夫等漂到セシ島ナリ）コレヨリ東方ノ北亞墨利加ノ岬ニ距ル迄皆魯西亞ノ屬ナリ。

小韃靼此地元ノ世ニハ國王アリテ元ノ屬國ナリシガ元亡ビテ後ハ自立シテ汗トナリテ其國ヲ治メ後又都兒格ノ屬國トナリシガ近世屢魯西亞ニ破ラレテ又コレニ屬セリト（今魯西亞ニテ刊セル地圖ニハ此地ヲ以テ魯西亞ノ部ニ入ル然レバ今ハ魯西亞ノ郡縣ナルカ）

「ワラシヤ」此地分テ「ワラシヤ」莫爾大未亞ノ二國トナリ各國主アリテ都兒格ニ屬シ毎年銀錢ヲ貢セリ近世魯西亞ト都兒格地ニテ屢大戰ヲナセリ。

厄勒祭亞一名「ギリイキス」ト云上古ヨリシテ有名ノ國ニシテ即昔「アレキサンデル」大王誕生ノ地ナリ今ハ都兒格ニ屬ス都兒格ノ帝此ニ都セリ。

波羅泥亞ハ大國ニシテ世及セザル自立ノ王アリ今ハ其地大半魯西亞ニ屬ス。

「セエヘンベルケ」此國今ハ入爾馬泥亞ノ帝ノ郡縣ナリ。

雪際亞亦大國ニシテ自立ノ國王アリテ其勢盛ンナリシガ近世屢魯西亞ニ破ラレテ國勢甚衰タリ〔此國寶永享保ノ頃ニ頻ニ魯西亞ニ破ラレテ多ク其地ヲ失ヒテ和睦ヲナセシガ其後享保中ニ又盟ヲ敗テ魯西亞境ヲ侵スニ因テ魯西亞ヨリコレヲ征シテ其肥良的亞ノ地ヲ陷ル雪際亞コレヲ拒グコト不能シテ即和ヲ乞ヒ永久魯西亞ニ叛クベカラズ且其國事ヲ魯西亞ノ意ニ任センコトヲ誓フ魯西亞コレヲ許シテ和睦ヲ爲シ雪際亞ノ王ニ子ナキヲ以テ魯西亞ノ帝ノ甥ヲ以テ其嗣トシコレヲ以テ魯西亞ノ法教ヲ受ケシメ而後ニ肥良的亞ノ地ヲ還スコレニ因テ今ハ魯西亞ノ屬國ノ如シ。

諾爾勿入亞此國中古ヨリ弟那瑪爾加ノ王ノ郡縣ナリ〔凡魯西亞ノ本國波羅泥亞小韃靼「ワラシア」「ルヱベルケン」厄勒祭亞雪際亞諾爾勿入亞等ノ諸國皆歐羅巴ノ部内ニ所在セリ〕

亞弗利加洲此洲ノ地ハ極テ廣クシテ數多ノ國王酋長ノ類アリコレヲ分治シテ其種族モ極テ夥シ其内東北境ノ泥入多國ハ都兒格ニ屬ス其他四方ノ海邊ニ歐羅巴諸國ノ人往來シテ交易ヲ爲ス又多ク其地ニ占據シテコレヲ治ムルアリ中央ナル內地ハ人至ルコト稀ニシテ其地理及人物詳ニナラザル者多シ。

亞細亞洲〔凡日本漢土韃靼莫臥兒巴爾齊亞都兒格等コレヲ總稱シテ亞細亞洲ト云〕

南方諸海島ノ著キ者

蘇門答剌大島ニシテ君長一ナラズ北ニ在ル者ハ多ク啞齊ニ屬セリ明人ノ說ニハ蘇門答剌ハコレ大島北邊ノ一國ニシテ萬曆年中ニ其國簒殺ノコトアリテ後ニ國號ヲ改テ啞齊ト云西洋人ハ蘇門答剌ヲ以テ大島ノ總名トセリ。

瓜哇ハ古ヘ六朝及唐宋時所謂闍婆國ナリ元ノ世祖ノ時ニハ兵ヲ遣シテ大ニ此國ヲ攻破レリ後六七ノ國ニ分レテ各王アリシシ今ハ「コタラン」板淡ノ二國トナル又咬噌巴ハ一名「ジヤガタラ」ト云コレ亦各國王アリテ且西洋波爾杜瓦爾ノ人モ其地內ニ占據セシヲ日本元和五年ニ和蘭ノ人大軍ヲ以テ波爾杜爾人ヲ襲ヒ破リテコレヲ追出シ次デ「ジヤガタラ」ノ王ヲ滅シテ悉ク其地ヲ奪ヒ取テ新ニ堅固ナル都城ヲ築キ「バタビヤ」ト名ケ其外所々ニ數多ノ屬城ヲ築キテ皆兵ヲ分テ鎭守セシメ其內「バタビヤ」ニハ大都督〔和蘭語ゼネラル〕ヲ置テ其外數多ノ官吏兵卒ヲ備ヘ和蘭所領ノ南海諸地ノ巢穴トナシ其後板淡ノ內亂ヲ治メテ國ヲ安ンジ又「マタラン」ノ王ヲモ一タビ擊破テ後ニ和睦ヲ爲シテヨリハ此島ニ於テ今ハ和蘭ノ勢最隆ナリトセリ〔今日本ニ每年來ル商船モ此地ヨリ出ス也漢土ハ大國ナルニ年々十三艘ヲ此地ヨリ出スト云〕

渤泥此島亦君長甚多クシテ一統セズ其君長皆長皆其兵萬ニ滿ル者稀ナリ中央大山ノ邊ハ外國ノ人不到故ニコレヲ詳ニセズ其南方文郎馬神ノ地ハ漢土及和蘭ノ人モ往來シテ貨物ヲ交易スルナリ。

食力百私此島二ノ王アリ一ハ北方ノ食力百私ノ地ニ都シ一ハ南方ノ麻喝沙爾ノ地ニ都セリ然レトモ寬文九年ニ和蘭ノ人麻喝沙爾ノ王ヲ破テ其都ヲ奪ヒ其城郭ヲ堅固ニ修造シテ守兵ヲ置キ「バタビア」ノ都督ノ令ヲ受ク

「バリイ」名小瓜哇ト云自立ノ酋長アリ。

「バンタ」「ブキノス」「ホウトン」「ヅクマ」安閟「キロ、」「テルナアテ」「チトル」「マシアン」「モ

チル」一池閟〔漢ニ吉里地閟亦遲閟トモ云漢土ノ商船外國ニ距ル者此島ヲ以テ最遠ノ所トセリ〕等ノ諸島或ハ主アルモノアリ或ハ主ナキモノアリ皆和蘭人ノ令ニ從テ和蘭ヨリ島毎ニ悉ク守兵ヲ置ク故ニ和蘭ノ船此諸島ノ間ヲ横行シテ忌憚ル所ナシ凡和蘭ノ守兵ヲ置クヤ瓜哇「バタビア」ノ城ヲ東方諸地ノ根本トシテ精兵一萬六千人大船五百艘ヲ備フ其外ノ諸所ニ置ク所ノ兵ハ多キ者ハ一千人ニ過ギズ少キ者ハ七八十人或ハ一百人ヲ用ユ皆巨舟大砲ヲ恃ミテ以テ其諸島ノ人ヲ威服スルニ足ルト云

新爲匿亞(ノオバゴイネア)此地甚大ナリ然レトモ其界ノ盡ル處ヲ詳ニセズ海邊ニハ和蘭ノ人來テ交易ヲナセリ。

「ノオバブリタンニア」此島亦近世見出シタル者ニシテ未ダ詳ナルコトヲ知ラズ。

呂宋(ロソン)ヨリ泯太臘(ミンタノヲ)ニ距ルノ諸島ヲ總稱シテ非利皮那ノ諸島ト云其內呂宋ハ昔ハ國王アリテ明ノ永樂年中ニ曾テ朝貢セリ其後明ノ隆慶六年ニ西洋伊斯把爾亞國ノ人コレヲ滅テ其地ヲ有チ都督及僧官ノ長ヲ置キ且ツ悉ク其邊ノ諸島ヲ領ス惟泯太臘ノミ自立シテ王アリト云。

新「ヒリピナ」諸島是レ近世伊斯把爾亞ノ人呂宋ヨリ船ヲ發シテコレヲ見出セリ故ニ「ノオバヒリピナ」ト名ケシナリ。

〔此島ノ所起名ハ亞細亞諸島志ニ見ユ〕

凡赤道ヨリノ南北各緯二十三度半ニ距ルノ間ヲ熱帶トス其氣候暑熱土地豐饒ニシテ物產多シ其人ハ多ク懶惰ナリ緯二十三度半ヨリ緯六十六度半ニ距ルノ間ヲ中帶トイ其氣候寒暖宜キニ適ヒテ其聰明ナル者多シ緯六十六度半ヨリ本極〔南極北極〕緯九十度ニ距ル迄ノ間ヲ寒帶トス其氣候極テ寒ナリ故ニ氷海山〔海上ノ氷猛風ニ因テ堆積シテ山ノ如クニナル〕アリ赤道ノ下ニ當ル所ハ終年晝夜ノ時刻等分ニシテ長短ナクシテ春秋二分ニハ日輪其天頂ニ在テ此時炎熱殊ニ甚シ夏至ノ時ニ日北極出地二十三度半〔即夏至線〕ノ所ニ至ル時ハ日ヲ北方ニ見ル冬至ノ時ニ日南出地二十三度半〔即冬至線〕ノ所ニ至ル

時ハ日ヲ南方ニ見ルナリ故ニ二分二至トモニ我日本ト異リ二分ニ暑ヲ增シ二至ニ寒ヲ增ス一年八季ノ國ト云ハコレナリ以上圖中ニ所載ノ各國ノ大要ナリ凡歐羅巴ノ諸國幷ニ莫臥兒巴爾齊亞亞刺比亞自立韃靼暹羅及南方諸海島其風土政教習俗物產古今歷代ノ事實等ハ西洋所刊ノ萬國地理志及列國ノ史錄ニ所載極テ詳悉ナリ他其要ヲ譯シテ考證ニ具フベシ。

文化丙寅秋九月　　山村昌永識

○吉川家由緒書

吉川家者大職冠鎌足より十八代三郎經義儀賴朝卿御時代駿河國吉河之村に住居仕從是家名を吉河と申候其後吉川之字用來候事

一三郎經義子吉川小次郎友兼正治二年梶原叛逆之時梶原三郎兵衛景茂を討捕申候然共友兼深手負相果申候因之其子左衛門尉經兼へ父友兼爲忠賞梶原舊領播磨國福井庄を被下候事

一吉川左衛門尉經光儀承久之亂竭粉骨爲忠賞安藝大朝本庄之被補地頭職候此時駿州播州之領地を一族庶流共え被配分經光子吉川次郎經高代に藝州罷下數代屬將軍家抽軍忠御感狀御教書等數通今以所持仕候事

一次郎經高より十代吉川治部少輔興經實子無御座付毛利陸奥守元就次男駿河守元春を養子に仕毛利家と彌賑鋪罷成候元就妻は興經祖父吉川伊豆守國經女にて興經元春は從弟にて御座候事

一毛利元就嫡子備中守隆元次男吉川駿河守元春三男小早川左衛門佐隆景を三家と唱へ候事

一駿河守元春同嫡子治部少輔元長於諸所勵軍功御感狀數通今以所持仕候事

但元長九州於御陣病死仕實子無御座付弟藏人頭廣家え家督無相違被仰付候事

一藏人頭廣家儀父元春兄元長に相隨秀吉公之依御下知於四國九州竭軍忠御朱印御感狀數々被下候度々之依軍功羽柴氏豐臣姓桐之御紋被差免被任侍從宇喜田中納言殿姉を秀吉公御養女に被成藏人へ緣組被仰付候事

一天正十九年藏人儀抽軍忠候段被成御感伯耆半國雲州にて三郡隠岐一國安藝之内にて壹萬石被宛行雲州富田に在城仕候事

一秀吉公朝鮮國御征伐付而藏人儀上意兩度渡海仕文祿年より慶長二年迄數年在陣勵軍功候付而御朱印御感狀數々御座候事

一慶長五年權現樣會津御進發之刻吉川藏人頭廣家儀も供奉可仕旨付而國許發足仕候得共遠國故御發向以後大阪罷登候所石田三成企逆心藏人關東下向之儀相防候付諸事不任心底候依之關東供奉之内黑田甲斐守殿迄藏人より兩使服部治兵衛藤岡市藏と申者を以於藏人者曾而逆意之面々同志心不仕一筋に關東へ可遂御馳走候毛利中納言輝元儀も此度之逆意不存寄儀を石田三成安國寺兩人之調儀にて御座候通申上候處甲斐守殿御先へ被登於駿州丸子使之者參會夫より甲斐守殿よりも家來小河喜助と申者を藏人使者に被差副江戸へ罷越候權現樣被聞召上藏人御斷之段別而被遊御祝着旨にて兩使被召出御目見共上御羽織黄金拜領被仰付則被成下御書候事

御書之寫

從吉川殿之書狀具に披見候御斷之段一々可得其意候輝元め兄弟中合候間不審に存候所無御存知儀共承致滿足候此節に候間能樣被仰遣尤候恐々謹言

八月八日　　家康公御判

黑田甲斐守殿

右之節黑田甲斐守殿より添狀之寫

拙者爲御見廻御使札忝存候とても遠方是迄被掛御意候間御同意之通

一内府公へ申上候へば拙者所へ被成　御書候間則御使へ掛御目候本書此方にとゞめ申候隨而今度之

一儀輝元儀者御存知被成間敷候安國寺一人之才覺と
内府公も被思召候然上は輝元へ御内儀能々被仰入
内府公御入魂に成候樣御才覺專用に存候貴樣次第此方之儀者拙者相調可申候御弓矢此方勝手に罷
成候而は左樣之儀も調かね可申候條まへかど無御油斷御分別尤存候是は不存如在儀に候條申入候
猶此段使者口上に申渡候間能々可被聞召候恐惶謹言
八月十七日　長政判
羽藏樣　參貴報
但甲斐守殿ゟ書狀之文言に本書此方にとゞめ申候と御座候得共書狀被相調後使之者へ御本書取
歸候樣にと被申付被差越于今所持仕候事
右之趣に付甲斐守殿ゟ追而藏人かたへ書狀被差越候書狀寫
猶以内府公も早駿河府中迄出馬之由夜前申來候以上
先書に申入候相屆候哉兎角輝元御家相續候樣に御分別尤に候返事委可被仰越候恐惶謹言
八月廿五日　長政判
羽　藏人樣　參人々御中
一權現樣濃州赤坂御着陣之刻事急に有之候得共毛利中納言輝元より今以御斷と申儀無之候間藏人一分
之御斷計にて者追而輝元身上之御斷相立申間敷と致思慮候付而輝元より先手へ毛利宰相秀元其外家
來歷々差出置候者共へ藏人心底之所理を盡申聞候得共承引之者無之氣之毒に存候處福原式部一人同
意仕候付而藏人家來三浦傳右衛門と申者を御陣所へ差出候趣者先達而御斷申上候通御馳走心底今以
違變不仕候輝元儀も早く御斷可申上儀に御座候處大坂罷居遠方故及延引候條輝元家老福原式部儀和

談之御斷申上候通申含差出候得者則達上聞重疊念入御祝着被思召之旨上意を以井伊兵部少輔殿本多中務大輔殿兩人衆へ誓紙被仰付其筆元三浦傳右衛門拜見仕候而取歸和平相調申候且亦藏人爲無別心人質差上可然旨黑田甲斐守殿福島左衛門大夫殿兩人より被申越候付而藏人家來栗屋十郎兵衛と申者差上置福原式部よりも弟福弟原左近を差上申候御合戰之□刻カ藏人儀者南宮山之諸勢を相押罷居候得者長束長會我部安國寺其外人數を出し可及合戰體に付藏人手より鯨波之聲を揚候得者直樣伊勢路之方へ致敗北候藏人儀者則御跡備へ相加り候栗屋十郎兵衛儀者追而被御暇權現樣より對之身長之御鎗拜領被仰付候事

三浦傳右衛門取歸候誓紙之寫

起請文前書之事

一對輝元卿以内府御如在有間敷候事

一御兩人別而被對内府御忠節之上者以來内府御如在被存間敷候事

一御忠節相究候者内府直之墨付輝元へ取候而可進候事

付御分國之事不及申如只今相違有間敷候事

右三ケ條兩人請合申候事若僞於申者忝も

梵天帝釋四大天王總而日本國中大小之神祇別而八幡大菩薩熊野三所權現加茂春日北野天滿大自在天神愛宕大權現可蒙御罰者也仍起請文如件

慶長五年九月十四日

本多中務大輔
忠勝血判
井伊兵部少輔

直政血判

吉川侍從殿

福原式部少輔殿

右之誓紙至大坂輝元へ入披見彌以御斷之覺語無油斷樣に重疊申達候此方に寫致置本書者輝元へ遣候本家に可有御座候事

一關ヶ原御合戰御勝利に相成兩御所樣大坂御出之上此度逆意之衆中御詮議被仰付候所輝元儀奉行方一味に而諸方へ內通之廻狀數々第一藝州ゟ四國へ人數差渡會津御供之衆中留守を取詰候段無紛付藏人廣家より前方於兩度御斷申上候處右之趣付而相達に罷成候段黑田甲斐守殿福島左衛門大夫殿內意被申越候依之藏人身上之迷惑此時に相極是迄と覺悟に而被罷居候處甲斐守殿左衛衛門大夫殿兵部少輔殿三人之衆相談に而藏人儀者始終御馳走之心底不相變候段被致言上候付而於藏人儀者內府樣御心入無御相違旨甲斐守殿より誓紙を以被申越候寫

一起請文書之事

一御身上之儀向後　內府樣不可有御相違候事

一萬一きよせつ之やから被及聞召候はゞ實否可被相糺候理不盡之御沙汰有間敷候事

一於御進退之儀井兵少申談我等請かゝり申候上は一切不可心□候事

右於僞者

梵天帝釋四大天王日本國中大小之神祇嚴島大明神春日大明神八幡大菩薩愛宕大權現大社大明神熊野三社權現天滿大自在天神蒙御罰者也仍神文如件

慶長五年九月廿九日　黑田甲斐守

長政血判

羽柴藏人殿　人々

一輝元身上之儀井伊兵部少輔殿取次に而黑田甲斐守殿福島左衛門太夫殿遲分氣遣候得共不被聞召分之由にて黑田甲斐守殿より被差越候書狀之寫

先刻兩度御使者被差越候得共相違候而不能御返答候

一輝元御身上之儀羽左太申談遲分候つれ共奉行共御一味候而西丸御移諸方內通之廻狀數々中納言殿御判慥に候上猶又四國へ人數被差渡候至來旁以不及是非儀共に候

一貴樣御律儀之事者井兵少御前之御取成共無殘所候中國之內に而爲押一二國之間御方樣へ可被下之旨御議定之由候此上者內府樣御直之御墨付取候而可進之由井兵少堅請かゝり被申候

一井兵少より被呼候はゝ早速可有御出候御供者御馬廻計三四人之間被召連可然存候やり共者御無用候此節之儀候拙者儀對貴所樣全御身をはめさせ申儀御座有間舖候爲御分別令申候恐惶謹言

右於僞者

日本國中大小之神祇御罰立可被蒙者也

十月二日　長政判

廣家樣

一井伊兵部少輔殿より參候樣にとの儀付而藏人廣家參上仕候處輝元身上之儀者御斷不相立藏人始終御馳走仕御滿足被思召候付而防長兩國藏人へ可被下置之由兵部少輔殿へ申渡候付而不存寄上意難有奉存候得共乘而御斷申上候所詮藏人身上之爲を存候計に而申上たるに而者無御座候輝元所存より不出

事石田三成安國寺才覺故と存入候間本家連續被仰付候樣御取持被下候樣にと段々御斷兵部少輔殿へ
申入候得者共段黒田甲斐守殿福島左衛門大夫殿被申談甲斐守殿より差越候書狀之寫

尙々此度者兎も角も井兵少羽左太我等三人に御任置可然存計候更此外無御座候以上

扨も〳〵中國御安否今明日に相きはまり候御方樣御分別迄に候井兵少へ被仰切候御覺悟共者不及是非儀共に候急度掛御目福左太拙者心底之儀者無殘所可申入候中國之內せめて貴所樣計成共御殘候間者元就へ御屆是に過間鋪候中納言殿へ御屆之事一ゑ二ゑ迄者御尤に候貴所樣御身を御破候者元就へ御屆に成ましく候猶無御分別者無由候恐惶謹言

十月三日　〔黒甲〕長政判

吉藏樣　參

一右之紙面輝元御斷不相調候付而藏人心底相極候所起請文を以申上候寫

起請文前書之事

一案外之逆亂先十方候付而先達而御理申上候處御兩所樣依御氣遣私身上之儀者被　聞召分忝御惠之御內意共御座候段者今生不及申上後世迄も忘却仕間敷事

一此度之儀輝元心底より出不申儀安國寺調儀を以故奉行衆任申分西丸罷上對　秀頼樣御忠義之樣に相心得候段者輝元心底ねれたる分別無御座候故各如御存知候無是非次第御座候雖然向後對　內府樣無野心御忠節可仕段者全別異御座有間鋪候毛利と申名字計成共御立置被下候所御氣遣賴存候迄に御座候御輝元御理聞召分無御座私儀於蒙御恩候者先達而關東迄御理申上候所も私一分之身上氣遣仕候而本家を見捨候樣に御座候此段非本意候輝元心底者不及申他人之見聞迄も無面目次第御座候兎も角も輝元同罪被仰付候之樣幾度も御理可申上覺悟他事無御座候事

一此度御惠を以毛利一家を御立置於被下候者向後逆意之殘黨御座候共於輝元至此度之御惠忘却仕間鋪心底に御座候千萬一毛頭も不屆之心底於御座候者共節者私一分之才覺を以本家の儀に御座候を打つぶし候而しるしを差上一途に御忠義可仕候事

右於僞申上者

梵天帝釋四大天王惣而日本國中大小之神祇別而氏神八幡大神愛宕摩利支天往吉大明神天滿大自在天神嚴島兩社大明神之御罰立可蒙之者也仍眞文如件

慶長五年十月三日　　吉川藏人頭

廣家血判

福島左衛門大夫殿

黑田甲斐守殿

右誓紙を以御斷申上達上聞候處藏人心底如此上者輝元御宥免之御吟味可有御座候得共向後對內府樣表裏別心有間鋪之通輝元よりも誓紙差上候樣にとの儀付而藏人家來福富與右衛門と申者を輝元方へ差遣御斷之誓紙相調させ差上候得者則被聞召分權現樣より輝元秀就父子御誓紙被成候寫

敬白起請文前書事

一今度周防長門兩國進置事

一御父子しんたい異儀有間鋪事

一きよ說申掛者候はゝ可有糺明事

右於僞申ぼんでん帝釋四だい天王惣而日本國中六十餘州大小之神祇八幡大菩薩富士箱根並三島大明神天滿大自在天神可被蒙御罰者也

慶長五年十月十日　家康公

此本書本家に可有御座候左候而藏人儀被召出御目見被仰付御脇差〔千壽院〕拜領仕難有仕合御座候且亦井伊兵部少輔殿にて被仰渡候趣者藏人御斷之心底律義之至被思召候向後被遊御忘却間鋪候輝元此度奉行方一味不屆之廉々不及是非候然共於于今輝元誓紙を以御斷申上儀候條被加御宥免防長兩國を輝元父子え安堵被仰付候向後藏人心持肝要に思召候中國爲押福島左衞門大夫藝州廣島に可被差置候條藏人儀上方へ防州岩國被居左衞門大夫申談中國靜謐之手遣可仕旨被仰出唯今之在所岩國に罷在候事

一毛利家御立置被成候段藏人堅神文を以御斷申上故右之通に御座候得者藏人儀彌向後輝元同嫡子秀就心底無心元存付て藏人より節々長州萩罷越油斷不仕罷在候事

一慶長九年御上洛之時廣家病身罷成候付而大御所樣より熱海之湯五桶拜被仰付東條式部卿法印より相達藏人病氣に當分相應仕候

一同十一年江戶御城御普請付而藏人頭廣家參府仕相勤候三月一日參着翌二日大御所樣御目見三日公方樣御目見被仰付段々難有被成上意候同五日大御所樣より上使東條式部卿法印を以御鷹之鴈二拜領被仰付藏人儀病身に付而每度熱海之湯拜領被仰付相應之由達上聞候御普請氣を盡し不申候共熱海罷越致湯治緩々養生尤に思召之通被仰出難有奉存御普請中氣色を押相勤候廣家不嫌晝夜精入奉る之所出來候付而大御所樣伏見より御內書被成候

御內書之寫

遠路普請不嫌晝夜依入精早々出來之由感悅候仍而雉子丼羽折袷遣之候也

五月六日　家康公

御黑印

吉川藏人頭とのへ

一六月十四日御普請相調候付而同十八日藏人廣家儀御城被召出御饗應被下其上貞宗之御脇差御鞍置馬〔各かなわ〕御帷子三十同御單物十拜領被仰付忝被成上意御暇を被下候付而前度大御所樣上意も御座候に付而直樣熱海へ罷越入湯養生仕候得共其後以病氣不宜候付而江戸へ節々參勤仕候段御斷申上候得者被聞召分向後折々參府可仕之旨被仰出候藏人病身其上輝元身上之儀付而先年段々御斷申上置たる筋御座候付在所罷居防長兩國靜謐之手遣仕度存旁御斷申上候上にも其段御斟辨被成願之通節々之參勤被成御免由に御座候事

一慶長十九年大坂御陣之前方秀賴公より御味方仕候樣にとの御事之由に而藏人廣家方えも御使之僧藝州嚴島迄罷越彼僧一條坊と申出家相賴候而御密書箱持參仕候藏人事披封も不仕先年石田治部少輔謀叛之時奉對內府公無野心一筋に可御忠節段重疊誓紙を以申上候得者只今違變不相成之通申切候而使之僧差返し申候且亦中國爲御目附花房助兵衞殿備前備中表へ被差出置候付而藏人より使者朝枝半兵衞と申者差出秀賴公より御味方可仕由御座候得共彌以關東へ御忠節可仕所存全相違無御座段御屆申上置候事

一同年冬之御陣之時長門守秀就甲斐守秀元藏人廣家一同罷登候藏人儀兩御所樣御目見被仰付候且亦數年之病身彌增不宜候に付本多佐渡守殿を相賴隱居之御斷申上候得は願之通被仰付候事

一翌年元和元年夏之御陣藏人廣家儀者長州萩被下大坂へ嫡子美濃守廣正差登遣申候此儀段々子細御座候尤證文等御座候得共對本家當り合申候付而差略仕候事

一兩御所樣大坂へ被成御登候付而藏人廣家事も大津邊迄御迎に罷出可然之由御目付花房助兵衞殿より

内意申來然共藏人病身隱居仕候付而旁嫡子美濃守廣正〔此時左□〕差登せ申候事

一美濃守廣正儀於京都御兩所樣御目見仕家督之御禮申上被下御暇御帷子單物二十御馬一疋〔鹿毛〕領仕候事

一天下御靜謐に相成候得共毛利家之儀者八ケ國に而罷在候處漸兩國に相成候得者宗瑞秀就を始其外家來迄も心底不安存候哉何ぞの節者顏色不常事有之候藏人奉對兩御所樣御忠節仕宗瑞秀就父子身上に付而者御斷申上置たる筋有之候得者美濃守對公儀外御奉公無之事に候間此旨を相守候樣にと重疊申聞候右に付而美濃守廣正儀も病身と申旁在所に罷在防長兩國靜謐之事み氣遣參勤交代も不仕候而打過申候美濃守嫡子監物廣嘉代に相成候而者彌日本靜謐之事に御座候得共美濃守折々之參府仕參勤交代等不仕候故おのづから唯今之通に御座候事

一年中三度御時服獻上仕御內書頂戴仕候暑寒爲窺御機嫌御肴差上候事

一公儀御吉凶共に相勤申候事

一元祿十六年江戶大地震以後御城廻御修復に付左京父勝之助儀も御手傳被仰付候事

一上使其外御用付而御役人方御通路之節御用達共外左京領內之儀者民大輔より搆無御座左京より役人等差出申候事

一家中仕置等本家民部大輔儀者毛利家之定御座候得共左京家中之儀者吉川家代々之法立申候且亦民部大輔家中へ時々申付之儀御座候而も左京方之儀者一切搆無御座候事

〇村菴小藁

燕子未來春有情。落花泥濕柳烟輕。不知海外烏衣國。飛到天南幾月程。燕子未來

妾家一片古菱花。見面常驚老色加。抛作姮娥宮裡月。爲郎分影照天涯。佳人覽鏡圖

丹山瑞鳥向西飛。海變醴泉朝不饑。日出扶桑樹枝上。歸來毛羽有光輝。送鳳侍者遊大明

依韵爲義山華國兄弟寄題聽雨亭

兄隔湘江弟洛城。偶然相値共懽情。孤燈倦聽十年雨。未有對床今夜聲。

藍英近喪皇考同社明州詩以吊之余亦次其韵云

哀詞千字墨痕斑。老幼俱嗟閭巷間。有子最賢吾舊識。人言眉目似翁顏。

平生謾貯五車書。廢學無兒掃蠹魚。只爲窓前多種竹。凉風到處卷還舒。晒書

伯雨詩名未覺低。貞居集裡幾新題。長吟行路馬蹄倦。日落南京六里西。送伯雨上人之南京

海國曾遊幾歲華。想君秋日去程賒。沙頭鷗鷺如相問。双鬢白於蘆荻花。送春谷上人之伊陽

處々樓臺簇暖霞。春寒獨樹老夫家。東風二十四番信。吹到君家第幾花。送南叟朔上人遊明國

建仁南叟藏主。從法叔九淵禪師。遊大明國。旣及假裝。族弟宗侍者。惜其兄遠去。而求余有贈詩。雖媿不工。且慰其友于眷戀之念而已。九淵名賝。才辨博識聲聞喧于此邦。南叟名朔。正宗名統。兄弟敏而有文才。時輩敬焉。此數公皆知足龍山師諸孫也。蓋寅龍九傳。至千光祖。逮乎千光祖之傳道而東歸也。吾土始知有禪。千光又五傳至龍山。龍山南遊。其留最久。殆五十年矣。前元大曆中。住隆。兕興府。卒之名寺。世稱爲悅公再生者云。

海天三萬里程遙。兄去弟留俱寂寥。有待對床他夜雨。一檠灯火話中朝。

祇樹秋風日暮寒。聞君告別促征鞍。詩成欲寫太倉卒。不暇烏絲細作欄。走筆送玉府旭仲上人赴防州

南遊眞擬古高僧。老矣相從我不能。行過重溟三万里。回頭故國日東昇。送蘭隱馨上人遊大明

爲問黃岡小竹樓。雨聲眞似瀑聲不。半間試葺瑯玕瓦。檐溜送凉今夜秋。竹樓急雨

君屋有花春早融。暖風遲日鳥聲中。山郵猶覺餘寒重。白未白時紅未紅。次韵惟磬試筆

終聞尸解蛻塵氛。世上唯稱是隱君。鳳詔九重徵不起。平生睡足華山雲。贊陳圖南

中英上人還周州其友翔之求詩贈別爲賦之

春江絲似撥醅時。爭得東風吹入巵。滿意自誇裝橐富。數篇珠玉送行詩。

社稷雖非力所支。孤臣義重死輕時。北風卷海崖山碎。許國丹心終不移。讀文山集

夜寒弓臥曲身斜。借得楮衾春滿家。歲暮多情氷雪底。合分一半與梅花。寒夜借衾

覇國江山尋舊蹤。只憑詩畫細形容。不知行橐量多少。收得天邊富士峰。客東游携富士山圖而歸

村竹西邊有月不。送斜陽後又回頭。風梢着力掃雲破。碧落間抛白玉鉤。扇面竹月

新篁万葉露爲團。一々風前珠落盤。疑是鮫人盈掬淚。朝來洒向碧琅玕。竹梢墜露

予猷只愛竹爲君。不可無梅我亦云。移屋新分半籬雪。暗香疎影上梁文。傍梅移屋

才也者。未成器之名也。才良則器亦美。而才不良則器亦不美焉。今觀彥希世詩集一編。其才固足以驚世。而器之成與不成。則顧其學與不學何如耳。唐王勃。年甫十三歲。爲滕王閣。伯嶼瞿然撫掌嘆曰。奇哉夫才也。余乃於希世亦云。應永戊蜡月十一日天龍岐陽叟方集序

聽松閣下以希世壬寅藁一百首見示。需之評點。今茲才半歲餘耳。此外必有不登藁者。何其多哉。名章俊語。篇々皆然。連珠疊璧。拙目輙可定其價乎。然嚴命弗得而拒。頗加批改。豈謂至當。近世劉會孟呆少陵東坡昌谷簡齊全集。或批或點。會孟豈出于杜蘇之上耶。但述管見而已。觀者毋誚焉。閏久十月三日歇即道人岩□謹志

盛作一通。諷玩終日。手之不釋。來命難拒。少加批點。亦何倒至也。即茲奉還。蓋至寶非寡人氏可留者。續者編集。不吝見示。則老卿慰籍。莫過於此。祝々。蕉雪老衲白

〇僞年號考〔常陸誌料之內〕

中山信名平四著

應永中上杉禪秀の亂ありてより關東穩ならず、既にして京鎌倉の二將相合はざるに及で、幕府の令する所鎌倉これを奉ぜず、年號は天下の大義然れども或はこれを拒て用る事無に至る。

凡年號は朝廷の命ずる者にして、武將の預る處にあらず、然れ共當時國柄武家に在を以て朝廷これを武家に議して、後天下に行はる、故に實は朝家の定むる所といへども、天下に行ふものは武家の令に出るを以て鎌倉これを奉ぜざるに至る也。

正長二年改めて永享とす、鎌倉これを用ひず、正長の號を行ふ事三年にして後に永享に從ふ「神明鏡に出たり」幾ばく無して永享の亂あり、持氏害に逢ふ鎌倉主なし、寶德中成氏位に復すといへども上杉憲忠を誅してより又京師と合はず、關東大に亂る。二將兵を交ゆる事連年不絕、享德四年更めて康正とす、三年改めて長祿とす、四年又更めて寬正とす、關東これを用ひず享德を用ゆる事すべて十餘年を經たり。

常國府中說所之書に享德十四年を用ひし文書二通あり共に成氏の有司より出す所の狀也。

其甚しきに及で僞間に僞年號と稱する者出るに至る所謂延德中に福德の號なり。

按に、常陸國赤濱村妙法寺過去帳に延德二年庚戌の傍に書して云く、福德元又同三年辛亥の傍に福德二と注せり、陸奥國河沼郡塔寺村八幡宮長帳に文明十九年丁未の次延德四年壬子の前に福德二年辛亥とかゝげて、其下の注に貞和二年丙戌年より福德二年辛亥年に至て一百四十七年也とあり、依て延德三年辛亥より逆算するに貞和二年丙戌に至て實に百四十六年也、然れば長帳の算數一年をあやまるといへども二年辛亥とするもの妙法寺過去帳に合する時は別に論なし、下總國平賀村本土寺過去帳に妙本入道福德二辛亥八月十七日とあり新編鎌倉志に光明寺に祈禱の二字を題せる額あり、其裡に福德二年辛亥九月吉日とある由を記せり、これ等の跡書を合せ考れば延德二年庚戌に始めて

福德の號を設けし事ありしは明也、一說に辛亥を福德元とするものあり、蜷川氏所藏年代記に延德二庚戌の次明應壬子の前に福德辛亥とかゝけたり、又本土寺過去帳にも妙生尼福德元辛亥二月朔日匝嵯道高禪門福德元辛亥九月十七日同鏡林福德元辛亥八月十八日禪師阿日應福德元辛亥十一月廿四日とあり、この二書辛亥を元年としたれ共この年代記は年を追て記せしものにて、改元の年迄は前の年號に從ひ翌年の所に改元の號をかゝげし例あればこゝも其類にてありけんも知られず、又過去帳も月相齟齬して前に載たる所は庚戌元年としこゝに引たる所は辛亥元年に作りたれば二說の內何れか誤なる事は論なし、さらば諸書にかなへる庚戌元年を以て是とすべし、又一說に壬子を元年とするものあり、本土寺過去帳に善姓入道福德四乙卯年七月十二日とあり、乙卯は明應四年也、この乙卯より逆算するに元年壬子にあたれり、然れどもこの過去帳齟齬多く且他書に於て元年壬子に作るものなければ其誤たる事明なり、又思ふに明應四年に至りてたま〳〵福德の號を用ゆべき事有けんに、其年迄連續して用ひざる號なれは明應の四年をとりて福德四乙卯と記せるものにてもあるべし。

凡て年（本ノマヽ）を經たり

妙法寺過去帳に福德二あり、又關東の僞諺に僥倖を得たるを福德の三年めと云ひ、本土寺過去帳に妙泉福德三十二月四日妙正福四正月六日とありて五年以後の號をうけたるもの見へず、これを以て考れば福德の號四年行はれたる事明也、さらば延德二年庚戌に始まり明應二癸丑に止まりしと見へたり

永正中に彌勒の號あり凡て二年を經たり

常陸國六段田村六地藏寺惠範が諸草心車鈔卷二の篇是に於田野不動院玉幡之供卷と題せる願文の末

に、彌勒二年二月六日とあり、永正三年十一月の願文同五年三月の諷誦文同四年八月の願文等を載たり因て永正中にこの號ありしをしれり、さて永正の何年にこの號ありしと考るに本土寺過去帳に日富彌勒元丙寅十一月とあり、丙寅は永正三年也、さらば是年始めてこの號ありて四年丁卯まで彌勒の號ありしと見へたり、一說に丁卯元年に作るものあり本土寺過去帳に妙春彌勒丁卯十一月とあり、自相齟齬せり恐らくは是にあらず、こゝの元丁卯は二丁卯の誤と見へたり、鹿島の社家禰宜が家にも彌勒の號を用ひたる神符ありし由なれど、近年燒失せしと言へり、又今の萬歲丸が美祿十年辰の歲と言へる事をうたへるは陰陽者流の說に出たる物にて、こゝの彌勒と音同じけれども其義は同しからず。

享祿中に更に彌勒の號あり。

會津舊事雜考に耶麻郡新宮の神符の銘二ツを載す、其一に會津新宮大勸進僧淨尊誂一地頭代左兵衛少尉荻原知成小寺宮預所代右兵衛少尉平國村彌勒元辛卯二月二十二日とあり、其二に大勸進僧淨尊横三郎壬生廣末會津新宮彌勒元辛卯二月廿二日とありて辛卯は享祿四年也、永正中彌勒の號ありしをこゝに至りて更にその號を用ひしものと見ゆれど、この度は廣く行はれざりしにや、他書に於て見る所なし。

天文中に命祿の號あり、凡て三年を經たり。

蜷川氏所藏年代記に、天文九庚子の頭書に庚子命祿元年に成又壬寅皈天文十一年とあり、これによれば天文九年始めて命祿の號ありて十年を命祿二年として十一年には其號を止めしと見へたり、本土寺過去帳に妙了命祿二正月廿一日とあり、以上の三號皆關東偏闔の用ひし所にてもと佛家より出たり、故に其號多くは佛寺の記錄器財に存せり、鹿島の神符彌勒の號ありしと云へるもこの神宮中

古より兩部となりて神宮寺以下社僧多くあれば也、塔寺村八幡長帳も社僧の記せしものなれば福德の號を載たり、蜷川年代記もゝと前に引證するもの皆僧家のもの也。

蓋當時兵革相つぎ蒼生安住する事能はず、爰を以て歳運を變ぜんが爲に僧家漫に福德彌勒命祿等の號を設けしを頑民年號の重事なるをしらざる故に猥に流傳せしもの也、武家の記錄に是號を用ひし事なきは士大夫以上に及ばざりし事亦以て見るべし、是號亘相等に限る、この故に今に至てこれを關東の僞年號と稱すと云。

ことしは歳星庚辰にやどりて庚辰の月に庚辰の日あり〔三月庚辰廿四日庚辰〕應永七年この支干ありしよりことしに至りて實に四百廿壹年〔應永七年庚辰三月庚申十五日庚辰〕それにつきていかなる者かいひ出しけむ晴明內傳といへる文にありとて庚辰の三ツ重れる年は世に云〔美祿みろく〕十年辰のとしとみへたるものにてその日辰の刻に星まつるわざすればよろづ心にかなひありとある災をはらふよし語り傳へし程に、大城の近きわたりはいふもさら也遠き村ざと迄もいひつぎかたりつぎて、高き賤しき大かたこのわざせぬ人はなかりき、さるをおのれは物ぐさき本性にてなにくれ調じものせんがいとほしければしらずがほしてすぎつ、後にきけばこの事いひ出せしものはその頭だつ人より星まつりの故よしあしとはれたりしに、わきまへ申すことなかりしかば、あらぬことと申したりとていかり勘當せられしとか、いにしへの賢右府〔實資〕に思ひはかりの深かりしより□佛にもふせ玉はず、今おのれは物ぐさきより星まつりのわざせず、かしこきと物ぐさきとははるかに道遠けれどゆかんさきは同じかるべき也

　災も三とせの後は用ゆべしさのみないひそ人の物ぐさ

いつもの述懷のこゝろなるべし。

をのれさきに僞年號のからかへせしは常陸志の料にそなへんため也、かの彌勒の號ことしの童謠に同

じき故に人にも傳へまほしくことにものするなりけり、文政三庚辰といふとしの四月やなぎ島わたりにあさりする中山信名しるす

○浦井傳藏へ申渡の事

三月廿九日　〔組頭〔〕〕　浦井傳藏

右此間當年之干支に合候月日時刻之事等申唱へ候趣在之候由世上にて猥に取用候者も不少哉に相聞候鬼神時日卜筮を假りて衆を疑はしむるものは　王制の赦さゞる所に候御場所内より右體之雜說唱出し世上へ相響き候而者以之外なる事に候自今屹と相愼雜說等申唱間鋪候

右之通可被申渡候

同日不調法書

私儀此間當年之干支に合候月日時刻等之儀申唱へ世上にて猥に取用候者も御座候由右體之雜說御場所内より唱へ出世上へ相響候ては不宜候段蒙御作度自今屹度相愼雜說等唱へ申間鋪旨以御書付被仰渡不調法至極恐入奉畏候此書付を以申上候以上

辰三月　浦井傳藏

○淺野家臣遺族の事

覺

淺野内匠殿家來　大石内藏之助悴吉千代　未十三

吉千代儀松平家伊賀守領分但馬國美含郡須吉村國通寺抱井山投老庵大休和尙弟子に去午六月京極甲斐守殿御家來石束源五兵衞方ゟもらい同十月致剃髮名を祖錬と改只今投老庵に罷在候

右之通致吟味候處相違無御座候付不爲致他出候樣に急度申付置候以上

未二月廿三日　　　　　　　　松平伊賀守内　仙石段右衛門

覺

一吉千代儀去午之六月母方之祖父京極甲斐守樣御家來石束源五兵衛方ゟ弟子にもらい同十月爲致剃髮名をも祖錬と相改申候

一美含郡竹野谷之內蟲井山と申所圓通寺之抱投老庵と申庵御座候南禪寺派大休和尙七年以前ゟ隱居住庵に付大休庵と申ならはし候

一祖錬儀此方ゟ一左右仕候迄は他へ出し不申候樣急度申付置候以上

二月廿三日

覺

淺野內匠家來　大石內藏之助三男大三郞　未貳歲

右大三郞儀丹後國私領分宮津熊野郡須田村住居林文左衛門と申浪人大三郞を養子に仕置候由先日御尋被成候宮津へ申遣委細遂僉議候

一林文左衛門と申者須田村に致住居大三郞を養子に仕父子共に罷在候文左衛門出生者同國峰山領安村之日醫師林養宅と申者之悴にて御座候處須田村百姓助左衛門と申者方へ四年以前卯六月智名跡に參日醫者仕罷在候浪人にては無御座候百姓にて御座候文左衛門實子無之付大石內藏之助子但馬豐岡出生之由にて石束源五兵衛と申者之家來雲傳茂兵衛子分に仕當正月大三郞を文左衛門致養子引取申候由共節峰山領安村之傳右衛門と申文左衛門從弟取持にて養子に仕候共時分金子十兩取申候由

一右大三郞儀內藏之助本妻之子にて御座候哉妾腹にて御座候哉共段者不存候內藏之助儀文左衛門親類緣者親付にても無御座候由

一右文左衛門大三郎儀御差圖之通須田村に預け指置申候尤後村庄屋手形取置申候右之通從在所申來候間申達候以上

二月廿三日　奥平熊太郎

覺

淺野內匠家來

中村勘助妻　四拾四歲

勘助惣領　中村忠三郞　拾五歲

同人二男　同　勘次　五歲

娘　壹人　拾壹歲

右勘助妻子私家來三田村十郎太夫手前罷在候

一十郞太夫儀勘助實方之甥に而御座候以上

淺野內匠家來　中村勘助惣領　中村忠三郞　拾五歲

同人二男　同　勘次　五歲

松平大和守

右兩人私家來三田村十郎太夫手前罷在候

一十郞太夫儀勘助實方之甥に而御座候以上

松平大和守

一淺野內匠家來今度一列仕候內に矢田五郎右衛門と申者御座候此五郎右衛門義者拙者甥伊丹字右衛門聟に而男子壹人出生仕候處に不緣に而五年以前離別仕候五郎右衛門世悴作十郎當年九歲罷成候私養子伊丹賴母爲に甥に而御座候付賴母方に引取置申候尤其砌ゟ父五郎右衛門と父子之義絕爲仕假名相

改今程吉川市之丞と申候
一伊丹賴母儀實父者伊丹宇右衛門に而
一伊丹宇右衛門儀者大久保豐前守組御小姓組御番相勤申候以上
午十二月　　岡部駿河守
御手紙拜見候然者淺野內匠元家來間瀨久太夫次男貞八吉田忠左衛門次男傳內播州本德寺領龜山罷有候付別紙御書付之趣致承知候築地本願寺輪番呼寄せ申付候何も面上可得御意候以上
二月九日　　本多彈正少弼
□田越前守殿
先刻家來之者被召呼淺野內匠家來大石內藏介子大三郞儀丹後國熊野郡寸田村に罷在候浪人林文左衛門養子に致候由右之村私領分に儀はゝ大三郞儀文左衛門方差置候哉遂吟味可申達旨以御書付被仰渡委細承知之仕候在所へ申遣遂僉議追而可申上候此段爲可申述以使者申達候以上　奧平熊太郞使者
二月七日
今朝家來之者へ御尋被成候淺野內匠家來大石內藏助へ私家來緣續之覺
一內藏助妻者家來石束源五兵衛と申者之娘にて御座候然所去午十月初旬離別仕候に付只今源五兵衛方に罷在候內藏助二男吉之進今年十三歲罷成候母離別以前より致出家祖錬と申候松平伊賀守領內但馬國美含郡之內竹野谷井山と申所に南禪寺派大休と申庵主方へ弟子に遣置候由申越候此者儀最初吉千代と申共以後吉之進と改申候末子大三郞儀今年二歲相成候丹後國熊野郡半田村住居之浪人林文左衛門と申目醫者杯仕候方へ去年十一月下旬養子指遣候由申越候右之外男子無御座候且又十四歲之女子一人母に相添源五兵衛方に罷在候右之赴御老中方へも申上候以上

京極甲斐守

二月五日

○蕉翁書簡

頃日は御世話にて御座候隱居ゟ發句忝候間是にて埒明申卷頭に

春賀

うしの年どこから春を牽出すぞ　見龍

いの字に花のひらく國の名

此通に賴入候宮川賦の幷彼是取ませ候て可然御ならべ可被下候併渡舟田樂と申宮川の卷頭にても可有事と存候卷軸は猿思山神可然候半かそれとも御見合候てどちらへも可被成候題者高下にはあるまじく候忝舟句は

長閑さに馬子に問ふたりや元日さ

此句望のよしに候

大晦日

一由樣　見龍

五三日中伊賀舊里に引越候二月下旬又々此邊京都出申候身の行衞吹風にまかせ候へば慥に難申進し候越路の雪漸々消かたに成候はゝ先づ上京願申事に御座候是非今一度再會之上は風雅御究可被成候御捨なく候段則西行能因が精神世外之樂此外有間鋪候

正月三日

○蝦夷の風俗

耆山師いはく、廻國のもの蝦夷にいたるには津輕外が濱よりわたるを順路とす、外が濱より松前へ七

里海路なり、勢瀨甚だ急灘にしてわたり船時々覆沒すゆへに風を待つこと久し、東風土石を簸揚するの烈風にあらざれば急灘をこゆる事なりがたく、雨晴をゑらばず風勢に乘じ一瞬にわたるといふ、江戸より津輕外が濱へ三百四拾五里松前大山に靠り北海におもてし、甚だ富饒にして東西三四十里民家多くは破風づくりにして壯麗なり、町屋の城下十里程なり、金銀交通自在なり、一國すべて五穀を生ぜず又野菜なし、ゆへに耕作をなす事なし、獨活蕨路をとる皆漁りをわざとす、たゞに自國の人のみにあらず、加賀越前近江の人おほく住居して漁網をなすゆへに風俗も邊陲の人にはあらざる躰もあり、三面に向たる國なれば湊數ケ所漁船大凡數千艘ありて魚課を城主へ出す一艘の稅賦金二兩なりといふ、これを以て松前の封入とはするなり、米穀はすべて津輕南部より海運して經用とするなり、津輕南部の邊鄙も松前の交易にあらざればまた金錢を得る事なし、松前より蝦夷へ陸路にて山嶮の蒼莽道なり、彼地に大田山ありのぼり一里ばかりなり、松前より蝦夷の地はじめの村を熊石村といふ、春彼岸前四五日より四月八日までをかぎりとすニシンをとりて干鰯とす、魚の子は則ち數の子となるまた秋八月より九月まで昆布をとりて萬國に出す、此運上を以て封稅とするなり

廻國のもの蝦夷へわたる行程

津輕外が濱より海上七里北へわたる松前より西へ〔三十里大田山上り一里熊石五里臼嶽上り一里半山上に座像の釋迦佛あり二丈二尺五寸の銅佛なり草木土石ともに日のひかりに映ずる時は五色に見ゆるといふ。

東北松前より五里　カヤベ〔エゾの地七里〕　シリキシナイ　黑石　ヲシヤマンベシ〔エゾ村へ十里〕渡り〔刳木爲船〕　臼村　惠贇嶽〔松前より十八里南部の向なり〕　松前より〔東方へ上サシノエゾ地〕鳴動

蝦夷の方言

日本人を　シヤモ　蝦夷人の男を　アヒノ　女を　メノコシ　父を　アシヤンフ　母を　ハホ　姉を　シヤハ　兄を　イウホ　子供を　ヘカケ　火を　アベ　水を　ワツカ　妹を　ツレン　鍋を　シフ　碗を　イタキ　茶碗を　シマイタミ　米を　アマヒ　酒を　アママイ　煙草を　タバ　煙管を　セレンボ　錢を　シヤモタカラ　藤織の衣を　アツシ

アツシはエゾ細工なり水を彈くゆへ漁父多くこれを著す國中のもの皆これを著すシナの根といふに似たり。

夷俗奸通等の罪を犯すときは木椎を以てこれをうつこれをツチウチといふ。

木椎の圖ありわびさおろしのことなり。

シリは鳥なり　ナイは澤なり　マタンは人家ある所なり　ベチは川なり　此類地名にくはし。

〇比丘尼惣頭

今の比丘尼の惣頭といふは本江州水口甲賀郡大峰の大先達飯導寺〔御朱印一百石〕の寺にて天台宗梅元院岩本院なりゆへに文臺といへるものに元は牛王をいれたりといふ此事人の知れる事まれなり。

〇清少納言の塚〔附猿の歌〕

近江の國に清塚といへるありける、所のものどもよそに掘移してんとしける、其夜里の賤しき者の夢にうへの女房とおぼしきが紅のきぬしどけなく著なして短冊を前に置ぬ、下郎のこゝろにもとかくして覺へたりけん、さめて後かゐつけて見れば

現なき跡のしるしをたれにかも問れしもがな忘られもせす

とありければ人〳〵に見せけるにあやしく侍ればよすがもとめて公卿に申侍るに、是は少納言の塚のよし衆議ありて其儘におき給ひてあとなどよく吊ひけるとなり、これはやつがれくすしのせんだち加

藤氏のしれる人塚のほとりの里におなじく住て見聞し事の由かたり給ひぬと中神氏の雜記に見へたり
これもおなじくくすしの語られしよし、さいつころ年住玉へるあたりおほやけにつかへ侍れど、いたくいやしき人の侍りき、公事にて日光山にまうのぼりし歸るさに、さゝやかなる猿一ツ取てもてあそび後〳〵はよくなれむつみしまゝ家内に放ち飼けり、ある夜あるじの夢にかの猿歌よみて出しぬ
　世の人にひかるゝ綱のけふきれて法の御山に歸る嬉しさ
とありければつとめてあやしかりけるに、猿例のごとくあるじの膝にあがりなつかしげにまつはりしねむるやうにうせぬ、あるじいたくかなしみてからを寺におくり、ゆへよく侍れば人並に吊ひさて法名つけてあるじにおくりけるに
　　綰離猿休
と附ぬ、猿の歌はゆめ〳〵もらさゞりしにふしぎに同じ心につけ侍りぬと、あるじいよ〳〵こゝろとけて侍りぬるよし、みづからかたりぬとなん。
　〇壬生忠見幼童の時の歌
壬生忠見幼童の時内裏より竹馬にのりて參れとおほせありければ
　たけ馬はふしかけにしていとよわしけふ夕かけに乘てまゐらん
　〇下わらび抄
冷泉爲村卿故殿の御筆をうつす。
元文五年の事なりし、江戸の方に住ける人の妻門弟に願ひて許容のをり死去せしに、妻書をける詠草とて夫のかたより見せける、是をだにとて點こふなりける、其うちに
　しる人のなき深山木の下わらびもゆとも誰か折はやすべき

といふ歌かたわらに書そへてかへし遣はす
　今は世になき深山木の下わらびもへし煙りの行衛しらずも
かくて其夫〔小川有香〕寛保元年八月十日御門下にまゐる。
寶暦二年忠篤が見せし詠草のうちに、女房が十回忌の追善として夏懷舊を
　夏深き木の下わらびうちすてゝかたみの露に袖ぬらすかし
とみへ侍る事書もあり。
點じさだむるとてさても十年あまり三とせにさへなりぬ、これも有香といふ者の妻の、故殿へ入門の事願ひて御許容ありし詠草をいまだ御覽に入ざるにはかなくなり侍る、夫のかたよりかのなき人のよしみ歌
　しる人もなき深山木の下わらびもゆとも誰か折はやすべき
これをだにとて點を申うけ侍る、その折に哀におぼへさせ給ひて御詠を書添給ふに
　今は世になみき山木の下わらびもへし煙りの行衛しらずも
今更かたみの露の袖のしづくにむかしをかけて覺へて
　いまさらに哀なげきの下わらびもへし煙りの跡もふりぬる
後のたよりにきけば、かの有香もなきみ山木のおなじ煙となりて娘のみ殘りたりときく、ひとひの一筆をかの殘りたるにみせしかばのぞみわぶるよし、いかにせんと忠篤がたつねこし侍れば、さらに書てつかはし侍る、何事も消しけふりのいやはかなさをおもふあまりなり
　木のもとにこかせことばの下わらび烟の果をきくが哀れさ
かく書て忠篤がもとへ遣はしければ、のこりたる娘につたへしとなん、あわれなる人〳〵のはてあぢ

きなき事になん、是もはや十とせあまり三とせさきの事になり過ぬ、有香が娘見典妻も寳暦七年正月十二日故證道がみちびきて門下に入侍る、しかるに來年の秋の御忌のすゝめの題をつかはしゝかば、磯野政武のもとより便りのついでにかのちか典が妻も六とせ先にみまかりしよし、其うめる子とては娘ひとり常光寺といへるに嫁したるとなん、證道の後室證山の母がとりあつかひて政武にくはしく啀けるとて、かの娘がうた

故鄕の御遠忌御ついぜんあつめたまふとて御出題たまはらせ給ふに母六とせさきに身まかりぬ、しかはあれどあまりのありがたさをあふぐにつけていにしとしさわらびの御かへしの御歌の事など思ひつゞけてかく申侍りし

今は世になき跡までも惠みあるこの深山木の影のさわらび

はかなくも殘るみ山の下わらび淚ぞおつる露のことの葉

政武のこたへに

もへ出てこの早蕨の跡したへこのみ山木の惠みおもはゞ

かくこたへしよしなどくはしく書てかの二首をも見せられ、かの題その娘につかはす事門弟ならねば一たびたづぬる由申越れしよくぞくはしく告られし哀なる人のはてく〵といひしも、年ふりてことし又きくに驚く下わらびはかなのけふりの下わづかもへわづかにのこせしひとりの娘共こゝろざしをつぎてこのみ山木のかげなみだぞ落る露のことのは淺からぬ契りとぞ見ゆる二首ともよく思ひのべたる感淚をそゝぐと書そへてかへし侍る、かの祖母の年のめぐりもはや五十年のなかばになる母のなきあともはや七年にちかし。

今は世に又なきかげの下わらび泪の露をかけてこそみれ

とつたへまほしく候なきかげははかなけれど道の木かげの下わらびもとのめぐみの露の光り淺からぬ契りを思ひてもへいでゝこそさわらびの跡をしたひ幾春をつまん事をおもふ。

御忌の歌詠この事尤候よろしく申ふくめられ候へ。

明和元のとし十二月末の一日　　これか丈ことふ〔書判〕

磯野丹波守どの

右一帖磯野政武朝臣より恩借して寫丙戌仲春四日　　成　烈〔三橋藤右衛門〕

明和三年丙戌七月七日成烈子の情に此書をかりひそかに寫し侍るものなりゆめ〳〵他見を禁ずるのみ

守　雄〔三枝左京〕

下わらび附錄

元文のころかとよ、伊那何某の〔半左衛門後に備中守〕家臣小川有香といふ者和歌に心ざしありてやさしく心もものゝふのあら〳〵敷にもあらざりけるに、ちりてけん人のものえんじにやなに事にやありけん、こは君が手をわかるべきおりなど樣のことやありけんながき契りをかぎりてわかれぬ妻はなく〳〵親の家になんうつろひけるがまきばしらならぬど一首をなん殘しおきぬ。

かりそめのことの葉草の風立て露のこの身のおき所なき

此歌を故冷泉院殿いかゞしてかはきこしめしけんあはれなる事なり、かく心深きどうしをなさけなくもなど仰られ侍りしと有香傳へ承りて誠やかくてもわかるべきともおもはざりけるにや、おさなきものもありてなんどなま〔本ノママ〕つめくわなれどとかくつくろひものしてもとの契りたがはざりけり、この女房

のいひけるやうかくて侍るもかりそめのことの葉を殿の哀れとの給ひしばかりに何か夫のこゝろもとけそめてこそ侍れ、御門下に成りて猗草の露をも玉ともみがき侍りたきなどうち〳〵になげきければ、有香も心ざしのうれしくて、御門下の人〳〵に願ひ侍りてかくなんと申あげ侍りしに、故殿聞し召て哀なる事なり。されど今かの女房を門弟にせん事はやすけれど、かれが歌をあはれといひしももとより便ありて有香がこゝろを和らげんために褒美したるにまがへなんとてしばらくさしおかれしに、この女房無常の風に露の命もうち散りぬ、有香なぐさむかたなく今はかたみとかの詠草どもをとりあつめて是にだにとて奉られければ、故殿聞きいと哀れにおぼしめして御歌をそへられ、有香も御門下となりかのおさなきも見典といふ者の妻となりて爲村卿の御門下に成りしに、今は有香もかの見典妻も去りて見典が妻の生りける、ひとりの娘常光寺といへる寺に嫁してなんありける、かれが歌の事につきて政武朝臣の許へ御ふみのうつしなりと聞およびければ、しきりに乞ひ侍れど他見をいましめ給ふによりてひそかに寫しおきぬ。

守　雄

安永乙未のとし神無月の初めの七日松本熊長がもとよりかり得て寫し畢ぬ。

南　畝

○白氣立

寛文八申正月未申の方に白氣立、同二月朔日酒井修理大夫牛込の下屋しきより出火す、火元は家來阿部傳太夫といふものなり、同日また元吉祥寺の北御中間町大岡金三郎組の又兵衛といふもの火元にて出火のところに、また〳〵麴町御門の外よろづや源右衛門といふ町人火元にて火事出來、三ところの類火に武士やしき幷町屋寺社こと〴〵く燒失すといふ。

○横田甚五郎八木兵助喧嘩

同年横田甚五郎八木兵助喧嘩たがひに打果ぬ、これ甚五郎宅にての事なり、兵助息拾三歲なりけるが

父の喧嘩を聞、はや馬にて甚五郎宅へはしりつき、かの家來を呼出し父の死骸を見たきよし申出され候、則ち見せ候處深手淺手ともに三ケ所なり、また甚五郎の手疵は二ケ所なり、そのとき申されけるは兵助は初太刀にて甚五郎殿を仕とめたりと相見へ候、數ケ所の深手は右宅の事なれば助太刀ゆへの事尤餘義なく候、親ながらいさぎよき仕樣なりと申され候、其のち父の死骸追付ひきとり申べく候、其うちは賴入候、さて又かの家來へ奥方への口上申いれ候は御ちからおとし同前にそんじ候、よくよく相心得べきよし神妙に申ふくめ歸らる、諸人これをかんず、右の次第一々上聞に達しげれば喧嘩の跡式を御立遊ばされ候にてはこれなく、兵助悴いまだ若年にて神妙のこゝろ入の段御感思し召され候に付、父の遺領相違なく下しおかれ候旨御老中仰わたさる。

〇兩頭龜

延寶五年肥前國唐津領のうち相の木村の山の井にて水くみける下女、柄杓にのりて上りけるを見れば兩頭の龜なり、其長一寸八分幅一寸首左右へ相ならびてつく、唐津よりは右の村へ道のり五里これあり、其龜を城主大久保加賀守より差上らる、卽ち上覽これありて其翌日龜死す、誠に上覽の日まで存命のほどふしぎなり。

〇盜賊の歌

同年八月はじめごろ仙洞の御土藏へ盜人いりて銀子三十貫盜とる、跡に一首の歌をおきけるとかや、そのうたに

淺ましきうきに我身は捨ずして耻にすつるは命なりけり

〇奥州赤鼠

延寶七年四月比奥州津輕領浦人磯山の頂上に登りて海原を見わたせば、おびたゞしく鰯のより候樣に

見へければ、獵船をもよふし網を下げ引上げ見れば、下腹の白く頭と脊通りは赤き鼠億々無量網にかゝりあがるや、濱地へひきあげ人々立寄りうちころしたり、其鼠の殘りどもことく〳〵く陸へあがり、南部佐竹領まで迯ちりて、あるひは苗代をあらし竹の根を喰ひ、あるひは草木の根を堀起し在家へ入りて一夜のうちに五こくをそこばく費す事際限なかりし、山中へ入たる鼠ども毒草こそありつらめ、一所に五百三百づゝいやがうへにかさなりて死てありしとかや。

近頃下總のシンカイといふ處にても獵師の網に鼠かゝり網を損ぜしといふ、船子のいふに島わたりの鼠ともいふ、寛政三辛亥年濃國大垣に鼠つきて五穀を損せしといふ、戸田釆女正殿領分なり。

○奥州の海紅になる事

同年三月五日の朝奥州宇多郡のうち加佐古といふ浦これ相馬ざかひなり、其浦の海巾はやう〳〵一町餘ながさ南へかぎりしらず、北へは津々志濱といふ五郡をさかひてこと〴〵く海水くれなひになり、其匂ひあしかりしとかや、其くれなひになり候所は波もうたず平浪なり、これ常々はあら海なりとぞ。

○神道者吉川惟足が事

神道者吉川惟足は寛文のころまで尼ケ崎五郎左衛門とて江戸日本橋一丁目肴屋にて京間五間口の屋敷を持こゝろやすく暮しける所に、松平但馬守殿へ肴をいれ其賣掛千百兩程これあり、問屋より强く催促あるによりてその掛に難儀し、終に居屋敷を賣わたし品川町市川小右衛門といふ名主の裏店に住居せしが夫婦渡世さゝへがたく妻を親類へあづけ置、われは京都へのぼりまづ萩原殿へ奉公し、後に吉田殿の若黨になりつかへ、數年星霜をしのぎし所に、今の吉田殿いまだ幼少にて父におくれ給へば彼五郎左衛門舊臣等に談じ執り行ふ、然るに五郎左衛門少々神道を心掛けるが、後におもしろくなり、段々情を出しその道肝要第一とす、元來手跡をこのみ歌道にもこゝろをよせけるが、其のちいかにや

吉田家代々神道の秘書一卷盜出し、いとまをとり則ち京のかたわらに住居し、神道もつはらに廣め、其名を吉川惟足と稱し、京近邊はいふに及ばず隣國の人々聞つたへ群參すゆへ、公家衆よりふしんをなし吉田殿より奏聞これあり、公儀へ訴へ事六ヶ數なり、詮議まちゝゝにして後やう〳〵江戸へくだり、年かさなりて人々これを知る、其道に立よりて聞ものありあるひは弟子になるもあり、これによつていよ〳〵渡世こゝろ安くなりげる所に、延寶の末にいたり稻葉美濃守正則堀田筑前守正俊など取持にて將軍宣下の時分召出され百俵これを下され、神道いよ〳〵さかんなり、今京橋邊北紺屋町角やしきに住居す。

吉川惟足上京せし時ついでをもつて吉田宰相卿へ歌一首つゝしんで上げゝる。

神の道しるべばかりにくれは烏あやしと人の何おもふらん

木村高敦所著武家閑談有惟足傳與此傳大異其傳序并謹行篤實稱希世人傑矣南畝按閑談又過襃此傳又過貶心得中行而與之則吾徵之閑談曰元祿七年十一月十六日惟足卒七十九　謙視吾堂黨社

〇小倉山莊の色紙

寬永十三年江戸御城下惣石垣見附升形並總堀御普請諸大名衆へ仰付られ麴町の見附は松平長門守秀就の丁場なり、あるとき將軍普請高覽のため秀就の丁場へならせられ、秀就申付られし普請總奉行益田修理竹杖を横に伏せ平伏す、上意に益田所持の小ぐら山莊の色紙をば此たび持參仕るやいなやと御諚の時、修理つゝしんで持參仕り候よしを御側衆まで御請におよぶ、然るにおゐてはその掛物御披見のため御茶召上らるべきよし仰出さる、主人長門守秀就則ち御禮申上られ、其丁場におゐてかりに御茶屋を造らしめ、かさねてならせられしといふ、修理色紙所持の歌は則ち能因法師が歌なり。

さびしさに宿を立出て詠むればいづこもおなじ秋の夕暮

右の歌なり、然るに修理事は公儀御普請の惣奉行をうけたまはりて參府のところに思ひの外なる色紙持參して御たづねに預り冥加にかなひたる仕合せ、實に武士たる者は諸事にこゝろを配り相たしなむべき事、この益田が色紙にて萬端こゝろへらるべき事なりと沙汰し侍りぬ〔玉露叢抄〕

○江戸中辻番町々木戸

寛永年中江戸中の大小名の小路〳〵に辻番其外町中にて巷門を仰付らる。

○東照宮の奉號

慶安四年四月勅これあり東照權現をあらためて東照宮と號すこのとき天海大僧正を慈眼大師と謚し給ふ。

○町人刀を帶する事御制禁

寛文八年三月十五日に仰出さる、町人の面〳〵御扶持人なりとも刀を帶する事いよ〳〵堅く無用たるべきなり。

但御許のともがらは制外といふ。

○馬場先御門新橋を懸

同年四月春の火事に付馬場先御門あき橋掛るもとはあかずの御門といふ同じく虎の御門と幸橋の間に新規に橋かゝる新橋といふ。

○一季居奉公人三月五日定

同年十二月廿六日將軍家より仰出され候は一季の若黨仲間の出替り二月二日たりといへども來春よりは三月五日たるべきなり。

○弘文院御加增

寛文十年六月十九日弘文院御加増二百石を賜ふ都合千二百石なり外に九十五人扶持とりきたり候
同年十二月廿五日弘文院本朝通鑑調べ候うち九十五人扶持を賜ふ今御書物御用仕まふといへども右の
扶持其儘御あづけのよしなり。

○天子御稱號讀方

歌書に天子の御稱號に付たる後の字はごと音にてよみ、臣下の稱號に付たる後の字はのちと訓にてよ
むべきなり、たゞし天子の內のちと訓にて稱するあり後深草院なり、これは御不孝と響音のかよふを
いみてのちとよむなり、臣下の內ごと音にてよむは後大德寺後京極のみなりと、塙勾當水毋子のはな
しなり、

○四書の國人の字讀方

道春點の四書に國人をクニヒトとよまずしてクニタミとよめり、いづれの帝の御諱にもありてかくは
訓ぜしやと、水母子にたつね侍りしに、後嵯峨院の御諱邦仁と申たてまつりし由なり。

○龜山敵討の事

元祿十四年辛巳五月九日勢州龜山城中板倉周防守殿敵討の次第五月九日の朝卯の刻過本丸二の丸の間
石坂と申所にて敵打ある。

討手　七拾石　鈴木岡右衛門草履取　森　平　二十五
同　二百石　下村源左衛門若黨　在澤伴右衛門　二十三
敵　赤堀水之助

右水之助八日夜城に泊番をかんがへ候て水之助詰所より出入り仕り候處をこゝろ掛まち候へども水之
助出入りつかまつらず候ゆへ翌九日のあさゝがり番のころをかんがへ城へまゐり居申候水之助草履取

一人召つれ城よりさがり申候へば伴右衛門も跡に付まかりいで兄森平儀も草履一足もち追付き跡よりまかりいで水之助より先へかけぬけ板倉杢右衛門屋敷のおもてまでまゐり立かへり申候此せつ二三の門の間石仮と申處を水之助通り申候伴右衛門後ろより水之助が右のかゐなをきりやう／＼皮少しかゝり申ばかり水之助左りの手にて刀をぬきかけ申處森平かけ付左の手首刀の柄まで切付前後より兄弟にてはさみ立七ケ所きり申候留めをさし兄弟のもの書置水之助帯へはさみ置青木門より京口大手へ逃ぬけ候水之助草履取に右のせつ兄弟のもの申候は其方主人我／＼親のかたきにてかくのごとく討申候すこしも腕立仕り候はゞ其方ともに討取申すべきよし申候に付うろたへ右の草履取壁の陰にかくれ兄弟のものども二十町も逃さり申すべき頃水之助屋敷へにげ込右の子細申すに付即刻方／＼追手を廻し候へども手にいり申さず候右草履取敵討兄弟にたのまれ右の様子これありけや左もなくば下／＼仕置のため成敗申付べきとの儀にて手錠堅くこれある由。

兄弟の者書置寫

覺

一赤堀水之助儀我／＼親並兄重藏の敵たるによつて討捨本意をとげ候なり則ち江戸表におゐて御公儀様へうつたへたてまつりいづかたにてなりとも本望をとげ候様にと御免をかふむりかくのごとく御座候

一右の望み御座候ゆへ當分主人へ深くつゝみ數年わたり並のいやしき奉公人と身をやつし今日の奉公隨分大切につとめ候ゆへか念頃に召つかひ申され候段かたじけなき次第にぞんし候毛頭主人方にぞんぜられ候儀にてこれなく候間後日に主人たるものへ越度に思し召候事も御免をかふむり度ぞんじたてまつり候

一我〳〵父石井宇右衛門と申し因幡守方に知行二百石取りまかりあり候因幡守大坂御城代相勤められ候時分私とも親も大坂に相つめおり申候處此水之助共時分赤堀源五右衛門と申候源五衛門親を遊閑と申候大津に浪人にて居り申候この遊閑と私ども親宇右衛門と由緒これ有候ゆへ源五右衛門をたのみ越申候に付則ちかくまゐ置いろ〳〵武藤はげませ此もの身體の事苦勞いたし居申候處其時分源五右衛門方〳〵鎗の師をいたし廻り申候に付父宇右衛門申候は其方鎗の師を致し候事心もとなく候間今少し稽古いたし候はゞもつとものよし申聞せ候へば源五右衛門かへつて立腹し左やうこゝろ元なく思し召候はゞしあゐ仕り見申度と申候段是非なく仕合ひ仕り源五右衛門は素鎗の竹刀父宇右衛門は木刀にて何の手もなく源五右衛門鎗に付入り少しも相はたらかせず仕伏せ申候が異見申其儘にて事すぎ申候其後源五右門弟子ども一兩人程も是をうけたまはり候に付面目なく存候か宇右衛門をうらみ夜中他所よりまかりかへり候處をくらがりより素鎗にて言葉もかけずつき申候宇右衛門鎗たぐり申候へば日比のはたらきにおくれ候哉つき捨にいたし立退申候其時分私共の兄兵左衛門因幡守近習相つとめ泊番にて居あはせ申さず我〳〵年五歳と三歳の時分に候ゆへ落延申候そのせつ源五右衛門書置には宇右衛門妻病死いたし妻これなくに付縁組取くみ仕り京よりよび寄せ申候はづに致し候處父宇右衛門分別かはり變がへ仕り候ゆへ申分けこれなくかくの如くいたし置候など書置申候定めて御家にても左樣の申なしにてこれあるべく候それより兄兵左衛門因幡守方を暇を取りねらひ廻り申候へども深くかくれ行方知れ申さず候に付右遊閑を討申候はゞ是非なく合申べくと私ども兄遊閑を江州大津にて討捨申候それよりたがひにねらひになり申候八ケ年過候て美濃に兄よしみのものこれありしばらく滞留仕り候ところを源五右衛門うけたまはり彼地へしのび入り後ろよりだまし切やう〳〵兄ぬき合せ源五右衛門股をつき申候へど深手ゆへはたらきなく終にうたれ申候それより

此樣子を以て御家中へ召かゝへられ御城内に召置れ町〳〵領分在方まで彼もの方人申樣と仰付られ候事千万是非なき儀に御座候其後我〳〵ども年月すぎて兄弟年立仕寄せねらひ候へども堅密のかこひきびしくあるひは商人非人の體に身をやつしこゝかしこと徘徊いたし候へども終に打ゑず甲斐なくしてやう〳〵四五年以前より一人は御家中の面〳〵へ渡り並の草履取奉公人となりふかくつゝみ心掛候へども今一人兄源藏一所になりがたくやう〳〵今年まで相まち一所に罷成兄弟ともに只今年來の本望をとげ會稽の耻をすゝぎ申候ものなり畢筆荒增かくのごとく御座候以上

元祿十四巳五月九日

石井源藏吉時

石井半藏時定

板倉周防守樣

御老中御披見

在澤伴右衞門儀龜山へまゐり候事八年以前水之助從弟半井才右衞門と申もの在池戸に相つとめ申候此時節草履取に相すみ才右衞門召つれ罷登り申候水之助一家の義ゆへ水之助方より家來同樣にこゝろやすく出入り仕候よし申候旨才右衞門死去後同家中方に草履取奉公相つとめ申候去年より下村源左衞門方に相つとめこの處にて侍に取立在澤伴右衞門と申候家中に伴右衞門相勤め候ゑんにて兄森平も龜山奉公人にまゐり候。

右加藤重昌雜記中に見へたり、加藤氏元祿の生れにて明和八年とし八十二にて下世す、然らば實錄なるべし、曾て新著聞集を見るにこれとおなじ少々異同あり。

○有馬侯緣談書付

有馬中務大輔と申男へ豐與宮緣談の儀雖非本意候取組候此段可相達候以上

京極宮
關東　公方え
關東代官依願非本意候得共有馬中務大輔と申男へ豐興宮緣談之儀爲取組候趣可被心得候以上
京極宮
有馬玄蕃頭へ
御口上
中務大輔申上候姫宮樣へ結納御祝儀致進上候幾久敷目出度奉存候此段宜被仰上被下候
有馬中務大輔より

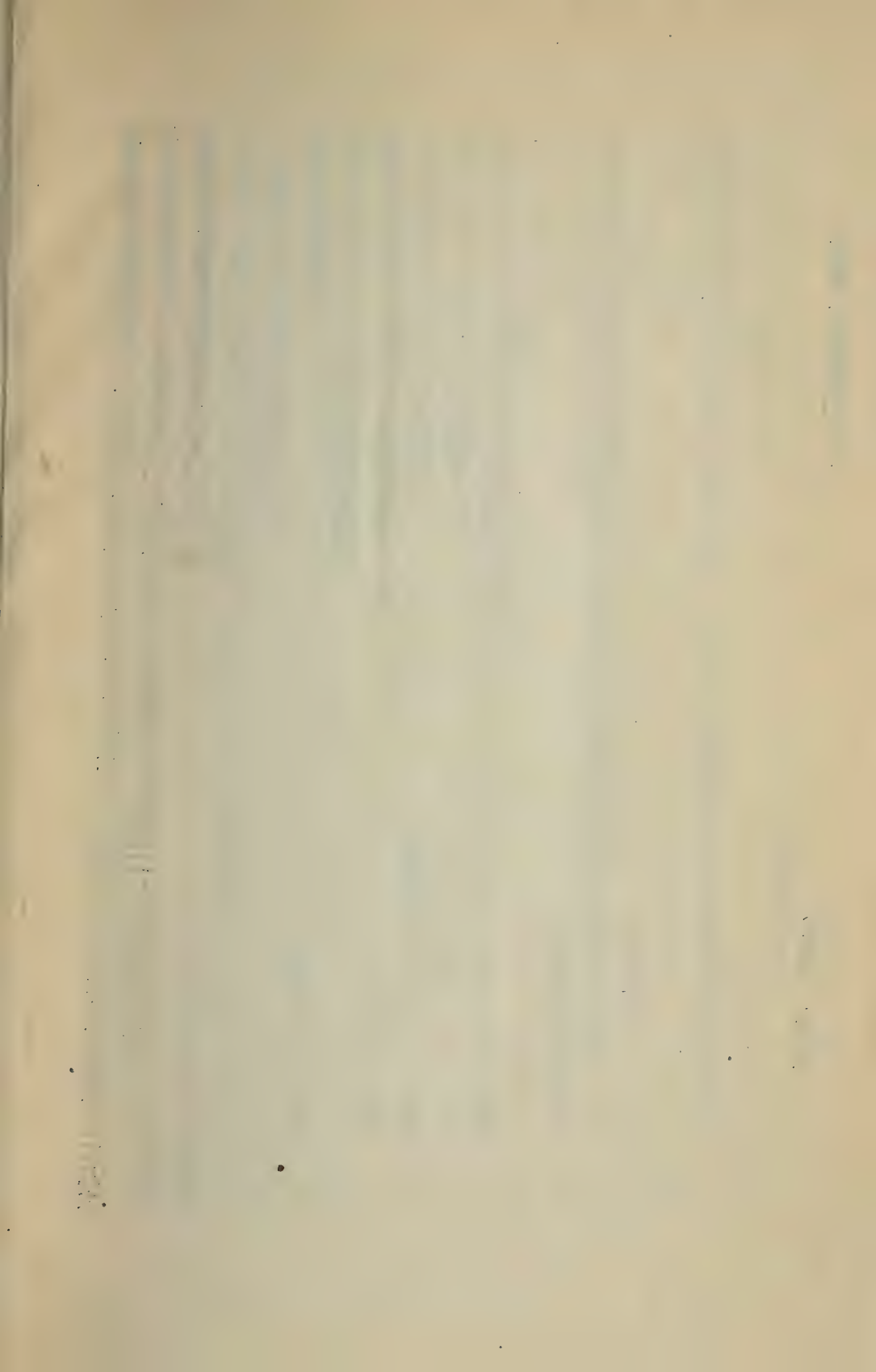
○半井卜養事蹟

寛文六丙午年十二月廿五日御番醫師被仰付候　半井卜養
同七丁未十二月廿三日二百俵被下之　同人
同九己酉年六月十四日初て御目見　〔卜養惣領〕半井卜仙
延寶元癸丑年十二月廿八日法眼被仰付　半井卜養
同六戊午年十二月六日願之通隱居被仰付
家督無相違被下之　半井卜仙

右之通り寛文延寶年中御日記に有之

右は半井卜養の事跡を瀨名貞雄〔稱源五郎〕に問侍りしときの答書なり。
或秘書に元祿四年七月廿六日奥醫師半井卜養不屆の儀これあるによつて三宅島に流罪悴卜仙小出大隅守へ御預け同年八月六日卜養并下人市場吉兵衛今日出船三宅島へさしつかはさる同年五月九日嚴有院樣十三回忌御法事に付て卜仙御預け御免十年四月廿日召出され拾人扶持下さるとあり。

湯淺氏記元祿四年未八月七日半井卜養事去月廿六日より昨六日まて揚り屋に差置れ今日乘船にて八丈島へつかはさるゝとも新島ともいふ金二拾兩米二拾俵味噌一樽葛籠二ツ此分御免といふ。

按ずるにこれ二代目なるべし。

昭和參年四月一日印刷
昭和參年四月十日發行

日本隨筆大成別卷

編纂者　日本隨筆大成編輯部
代表者　早川純三郎

東京市京橋區鈴木町十二番地
發行兼印刷者　吉川半七

發行所
東京市京橋區鈴木町十二番地
吉川弘文館
振替貯金東京二四四番
電話京橋一四一番

發賣所
東京市日本橋區數寄屋町　六合館
名古屋市西區下長者町四丁目　合資會社川瀨書店
大阪市東區北久太郎町四丁目　合資會社柳原書店
東京市京橋區鈴木町　日用書房
東京市牛込區早稻田鶴卷町　國際美術社

—•〔吉川弘文館印刷工場印刷〕•—